



早稲田大学

大学院人間科学研究科 要項

2013年度



GRADUATE SCHOOL OF HUMAN SCIENCES, WASEDA UNIVERSITY



早稲田大学教旨

早稲田大学ハ学問ノ独立ヲ全ウシ、学問ノ活用ヲ效シ、模範国民ヲ造就スルヲ以テ建学ノ本旨ト爲ス。

早稲田大学ハ学問ノ独立ヲ本旨ト爲スヲ以テ、之カ自由討究ヲ主トシ、常に独創ノ研鑽ニカメ以テ世界ノ学問ニ裨補セン事ヲ期ス。

早稲田大学ハ学問ノ活用ヲ本旨ト爲スヲ以テ、学理ヲ学理トシテ研究スルト共ニ、之ヲ實際ニ応用スルノ道ヲ講シ以テ時世ノ進運ニ資セン事ヲ期ス。

早稲田大学ハ模範国民ノ造就ヲ本旨ト爲スヲ以テ、個性ヲ尊重シ、身家ヲ發達シ、国家社会ヲ利濟シ、併セテ広ク世界ニ活動ス可キ人格ヲ養成セン事ヲ期ス。

2013年度大学院人間科学研究科暦

行 事			日 程	
大学院入学式（全学）			2 0 1 3 年 4 月 2 日（火）	
春 学 期	春学期開始日		4 月 1 日（月）	
	春学期授業開始日		4 月 6 日（土）	
	春学期(前半)授業終了		6 月 7 日（金）	
	春学期(後半)授業開始		6 月 8 日（土）	
	授 業 終 了		7 月 2 6 日（金）	
	補 講 期 間		7 月 2 7 日（土）～8 月 2 日（金）	
	夏 季 休 業	自	8 月 3 日（土）	
至		9 月 2 0 日（金）		
9 月学位授与式			9 月 1 5 日（日）	
秋 学 期	秋学期開始日		9 月 2 1 日（土）	
	秋学期授業開始日		9 月 2 6 日（木）	
	秋学期(前半)授業終了		1 1 月 2 3 日（土）	
	秋学期(後半)授業開始		1 1 月 2 5 日（月）	
	冬 季 休 業	自	1 2 月 2 2 日（日）	
		至	2 0 1 4 年 1 月 5 日（日）	
	授 業 終 了		1 月 2 9 日（水）	
	補 講 期 間		1 月 3 0 日（木）～2 月 5 日（水）	
	春 季 休 業	自	2 月 6 日（木）	
至		3 月 3 1 日（月）		
学 位 授 与 式			3 月 2 6 日（水）	

[行事等]

体育祭 : 11月 1日（金）
 早稲田祭 : 11月 2日（土）・11月 3日（日）
 夏季一斉休業期間 : 8月12日（月）～ 8月16日（金）
 創立記念日 : 10月21日（月）
 年末年始一斉休業期間 : 12月29日（日）～2014年1月 5日（日）

[成績発表]

修士課程2年制2年生以上、修士課程1年制コース：
 春学期 9月 6日（金） 秋学期 2014年2月28日（金）
 修士課程2年制1年生、博士後期課程：
 春学期 9月 6日（金） 秋学期 2014年3月 7日（金）

早稲田大学学則第9条および早稲田大学大学院学則第26条第3項にもとづき、授業日数を確保するため、休業日に授業を行う。2013年度は以下の休業日に授業を実施することとする。

5月 6日（月）：子どもの日振替休日
 7月15日（月）：海の日
 10月14日（月）：体育の日
 10月21日（月）：創立記念日
 11月 4日（月）：文化の日振替休日
 11月23日（土）：勤労感謝の日

※十分な授業回数を確保するために休業日に授業を実施することから、臨時の休業日を設ける。2013年度は、4月30日（火）、5月1日（水）、5月2日（木）、10月31日（木）、12月18日（水）、2014年1月14日（火）を休業日とする。

授業時間

授業時間は下記のとおりである。所沢キャンパス以外のキャンパスで行う授業については、移動に伴う時間を考慮し、科目の登録を行う必要がある。

1時限目	9 : 0 0 ~ 1 0 : 3 0
2時限目	1 0 : 4 0 ~ 1 2 : 1 0
3時限目	1 3 : 0 0 ~ 1 4 : 3 0
4時限目	1 4 : 4 5 ~ 1 6 : 1 5
5時限目	1 6 : 3 0 ~ 1 8 : 0 0
6時限目	1 8 : 1 5 ~ 1 9 : 4 5
7時限目	1 9 : 5 5 ~ 2 1 : 2 5

目 次

大学院人間科学研究科暦、授業時間	
I 大学院人間科学研究科沿革	1
II 大学院人間科学研究科の理念	2
III 大学院人間科学研究科の研究領域	4
IV 早稲田大学大学院学則(抜粋)	6
V 早稲田大学学位規則(抜粋)	13
VI 修士論文・課題研究論文作成に関して	15
VII 博士論文作成に関して(課程による者)	18
VIII 研究生制度について	20
IX 人を対象とする研究および生物実験に関する規程	20
X 人間科学研究科学科目配当	21
XI 修了要件・学科目の履修方法	22
XII 教育職員免許状取得について	32
XIII 学費	40
XIV 学生生活等	43
1. 学籍番号	43
2. 学生証(身分証明書)	43
3. 各種証明書および学割証の発行	44
4. 諸願および諸届	45
5. 奨学金制度	45
6. 各種補助	46
7. 所沢総合事務センター	47
8. 掲示等	47
9. 休講・授業欠席等の取り扱いについて	48
10. 自動車・オートバイ・自転車の駐車場・駐輪場の利用について	52
11. 早稲田大学保健センター所沢分室	54
12. 早稲田大学学生健康増進互助会(学生早健会)	54
13. 早稲田大学学生補償制度(傷害補償)	55
XV 所沢図書館および中央図書館の利用について	56
(大学院人間科学研究科学科目配当表)	59
XVI 研究指導・演習・講義科目の概要	81
XVII 全学共通設置科目の概要	347
(索引)	396

I 大学院人間科学研究科沿革

早稲田大学では創立100周年記念事業の一環として、1987年4月に森と湖に囲まれた狭山丘陵に所沢キャンパスを開設した。この所沢キャンパスには、旧来の学問体系を基盤とする既存の学部とは異なる、人間を中心においた総合科学を形成する新しい人間科学部が創設された。ここには同時に大学内の共同利用研究施設として、人間総合研究センターが開設されて、人文科学・社会科学・自然科学にわたる学際的な人間総合科学の研究プロジェクトが展開されることとなった。

早稲田大学大学院人間科学研究科の設置は、人間科学部の設置準備段階で提案されていたものであるが、学部発足後まもなく、その完成年度に大学院人間科学研究科を開設することが教授会で承認され、設立準備検討委員会が具体的な活動を始めた。1990年の学内理事会において、人間科学研究科という名称のもとに、人文科学・社会科学・自然科学の多様な分野を含む、生命科学専攻と健康科学専攻を擁する大学院を設置する計画が承認され、その後文部省に申請して認可された。

1991年4月に人間科学研究科の修士課程として24の研究指導が開設され、2年後の1993年3月には49人の修士(人間科学)を送り出した。これに続いて、1993年4月には博士後期課程として19の研究指導が設置され3年後の1996年3月には、課程内学位論文審査により4人の博士(人間科学)が誕生した。翌1997年からは課程外学位論文の審査も開始された。

2011年度までに、1,510人が修士号を取得し、課程内・課程外あわせて、313人が博士学位を取得している。これら修了生や学位取得者は、人間科学の種々の分野での研究の成果を活かして、教育・研究機関、官公庁、企業・マスコミなど、社会の各分野で活躍している。

2000年度以降には、社会人入試の開始、研究指導の再編成と人間科学専攻への一本化、入学定員の増加などを通して、新しい人間科学研究科の創造と展開に取り組んでいる。

2004年9月に人間科学部・人間科学研究科からなる人間科学学術院が組織されたのを機に、2006年度より、5つに分けられていた研究領域を8つに分けることで、研究・教育の内容の特徴を明確に打ち出した。

また、社会的ニーズに敏速かつ柔軟に応え、2007年度より社会人入試の一環として修士課程(1年制)(教育臨床コース)を開設し、実践的高度職業人の育成にも努めている。

Ⅱ 大学院人間科学研究科の理念

－ 3つの方針 －

1. ディプロマ・ポリシー(卒業認定・学位授与に関する方針)

早稲田大学の総合性・独創性を生かし、体系的な教育課程と、全学的な教育環境と学生生活環境のもとに、多様な学問・文化・言語・価値観の交流を育み、地球社会に主体的に貢献できる人材を育成する。人間科学研究科では、科学技術の飛躍的な進歩のなかで失われた人間性を回復するために、人間と環境の調和や心身の健康の維持増進などを通して生活の質の向上に貢献するような、人間を中心においた総合科学を形成することを目的としている。

人間の総合的な理解のために、人間科学研究科ではきわめて多岐にわたる研究が行われているが、それらを相互に連携させるために、各研究指導を「地域・地球環境科学」、「人間行動・環境科学」、「文化・社会環境科学」、「健康・生命医科学」、「健康福祉科学」、「臨床心理学」、「感性認知情報システム」、および「教育コミュニケーション情報科学」の8つの研究領域に分けた。さらに、社会的ニーズに迅速かつ柔軟に応え、高度で実践的な職業人の育成を目指した「教育臨床コース」を加え、人間科学専攻を構成している。

各研究領域およびコースにおいては、国際社会で活躍できる高い専門性を備えた研究者・実践家の育成を目的とするとは言うまでもない。それと同時に、人文・社会科学と自然科学が相互浸透する総合科学としての人間科学を追究するわが国で最初期の大学院のひとつであることから、高い専門性とそれを取り巻く広い学際性を背景に、人間をめぐる多様な諸問題に柔軟に対応できる、新しいタイプの研究者・実践家の育成を目指している。

2. カリキュラム・ポリシー(教育課程の編成・実施の方針)

各研究領域に所属する学生は、所属する研究領域の演習に専念するだけでなく、同じ研究領域内の関連する多様な演習や講義科目をはじめ、他の研究領域の講義科目などを広く履修して、学際的な人間総合科学の全体像を把握した上で研究を行う。各課程の標準修業年限までに学位を取得することを目標に、多くの演習と講義科目、および多様な研究指導を設置した。ただし、特に優れた研究業績を上げた学生については、標準修業年限以下で修了できる制度も設けた。

人間科学研究科の研究分野では、国際的なフィールドを調査・研究の対象とするケースが多いことも特徴のひとつである。そこで、海外を含む学外でのフィールド調査・実験・研究を促進し、国際的な場で活躍できる研究者・実践家を育成するため、特に海外での授業・調査・実習などの活動を含む科目を8つの研究領域に数多く設置している。さらに、インターネットを介したオンデマンド科目を積極的に導入して、これら学外での研究・調査活動と勉学の両立を容易に実現できるようにした。また、「教育臨床コース」においては、おもに夕方以降に開講する科目、およびオンデマンド科目を設置し、演習と研究指導を含む科目を、社会人が仕事を続けながら履修して、実践修士の学位を取得できるように配慮した。

これらの使命を具体化するために、2013年度からは人間科学部と人間科学研究科共通のディプロマ・ポリシーを定め、高いレベルで達成を目指す中核的な能力を、「A リテラシー」「B 方法論・専門性」「C 学際性・多様性」「D デザイン力」「E 協働性」「F 反省性・倫理観」「G 自己教育」の7領域17項目で示している。

A リテラシー

- (1) 日本語の運用力、外国語の実践力の総合としての「言語力」を身につけている。
- (2) 情報・データ等の収集・分析・表現能力の総合としての「データ・リテラシー」を身につけている。

B 方法論・専門性

- (3) 科学的・論理的な思考力と専門的知識や方法論を身につけている。
- (4) 主観的経験や倫理的問題に対して、解釈学的方法を用いて考察できる。
- (5) 具体的な「専門性」のもと、帰納的で検証可能な分析を行うことができる。

C 学際性・多様性

- (6) 社会への開かれた関心と態度を身につけ、その多様性を理解し共感することができる。
- (7) 人間的事象を複眼的な視点からとらえ、そこに解決すべき課題を発見することができる。
- (8) 多様な専門性を横断する「インターディシプリナリー」な視点から、現実をとらえることができる。

D デザイン力

- (9) 課題探究(フィールドや実験)プロジェクトをマネージメントすることができる。
- (10) 課題解決のためのアクション・プランをデザインすることができる。
- (11) 研究成果や自らの考えを具体物として表現することができる。

E 協働性

- (12) 自分とは異なる意見、価値観、感性、文化、言語を持つ他者と協働することができる。
- (13) 様々な専門性をつないで「インタープロフェッション」を推進する知識や技能を身につけている。

F 反省性・倫理観

- (14) 社会的公正を尊重した倫理観を持ち、社会に貢献しようとする態度を身につけている。
- (15) 科学の可能性と限界を理解し、現実への批判や反省を行うことができる。

G 自己教育

- (16) 自律性・積極性・協調性を備え、自己教育を行うことができる。
- (17) 自らのキャリア・プランをデザインすることができる。

また、2013 年度からは、これらの方針を確実に達成するために、より優れた基盤能力を養成する科目群として人間科学科目を定め、インターディシプリナリーな研究への関心や実践性を高めるプログラムとして「プロジェクト科目」や、高度な英語力や統計等の共通リテラシーを学ぶ「リテラシー科目」を設置した。

3. アドミッション・ポリシー(入学者受入方針)

早稲田大学では、『学問の独立』の教育理念のもとで、一定の高い基礎学力を持ち、かつ知的好奇心が旺盛で、本学の理念である進取の精神に富む、勉学意欲の高い学生を、わが国をはじめ世界から多数迎え入れている。とくに人間科学研究科では、総合科学としてだけでなく、研究指導ごとに新しい研究も行っている。つまり、人間の総合理解に貢献する人間科学という研究は 8 つの研究領域、あるいはそれを越えた新しい枠組みで展開されている。そのため、本学人間科学部からの内部進学者はもちろんのこと、他大学の多様な学部等の出身者などを積極的に広く受け入れている。修士課程では、他領域で学士号をもつ者には一般入試において、本学人間科学部の学生には一般入試・推薦入試において選抜を行っている。また、博士後期課程にも多数の研究指導が設置され、すでに多くの博士号取得者を輩出し、高度に専門的な研究や総合科学的研究をリードする人材を育成している。人間科学研究科は、本学人間科学部から進学して総合科学を目指すだけでなく、ある領域の専門性をすでにもっているみなさんにも広く門戸を開いている。

Ⅲ 大学院人間科学研究科の研究領域

人間科学研究科にある地域・地球環境科学、人間行動・環境科学、文化・社会環境科学、健康・生命医科学、健康福祉科学、臨床心理学、感性認知情報システム、教育コミュニケーション情報科学の8研究領域のそれぞれの内容は次のとおりである。

【博士後期課程・修士課程(2年制)】

(1) 地域・地球環境科学研究領域

本研究領域では、持続可能な社会の構築に向けて、地域・地球環境を自然科学および社会科学の分野から解析することを目的とする。自然科学分野では生態学、環境科学など、社会科学分野では環境社会学、人口学、人類学などの研究を行う。また、自然と地域社会との統合的な視野を大切にし、国際的水準の研究・教育能力を有する研究者や実務家などの優秀な人材を育成する。

(2) 人間行動・環境科学研究領域

本研究領域では、環境と人間の複雑多様な関係のあり方について、物理的、社会的、文化的環境を人間が創り出し、自ら創出した環境によって人間が形づくられる、という双方向性に等しく注目し、その関係のあるべき姿について心理学および建築学を中核とした学際的な研究を行う。また、環境創造と人間の心理行動発達の双方向の視野に立ち、国際的水準の研究・教育能力を有する研究者や実務家などの優秀な人材を育成する。

(3) 文化・社会環境科学研究領域

本研究領域では、日本をはじめ、アジア、アフリカ、中東、欧州、北南米などを対象として、実践的なフィールドワークと文献研究を駆使した文化と社会の解読を目的とする。さらに、社会科学、人文科学の多様な領域を横断する学際的な研究を通じて、現代社会の諸問題の解明および多文化・多民族共生の持続可能な社会の構築に向けて、人間総合科学としての体系的な研究・教育能力を有する研究者や専門的能力に秀でた実務家などの人材を育成する。

(4) 健康・生命医科学研究領域

本研究領域では、健康科学と生命科学の研究領域とを融合させることにより、生命現象の本質を解剖学、生化学、生理学、栄養学、内分泌学、免疫学、神経科学、バイオメカニクス等の立場から解明すると共に、健康の増進や生活の質の向上、疾患の一次予防を視野にいれた健康科学の確立を目指す。併せて、これらの領域における国際的水準の研究・教育能力を有する人材を育成すると共に、研究成果を踏まえて、健康に関わる行政、教育に対しても有意義な提言を行える人材を育成する。

(5) 健康福祉科学研究領域

本研究領域では、現代社会に求められている人間の健康医療福祉の充実を目指し、医学および人間工学・支援工学、福祉ロボット開発・産業化、ならびに社会保障政策、老年社会福祉、障害児福祉、幼少児福祉教育の研究、さらにスポーツ健康マネジメントや緩和医療学など、多方面から健康福祉を調査研究する。その成果を健康福祉政策・行政や実践に反映させるとともに、行政や実践の場で活躍できる国際的水準の人材を育成する。

(6) 臨床心理科学研究領域

本研究領域では、現代社会に求められている心身の健康の維持増進にかかわる心身医学、認知行動カウンセリング学、学校カウンセリング、心理臨床学、行動臨床心理学を中心に研究を展開する。さらに、臨床心理学の基盤的な研究から実践的な研究を通じて、臨床心理科学研究と心理臨床実践の双方の能力を兼ね備えた心身の健康の維持増進に携わる国際的水準の人材を育成する。

(7) 感性認知情報システム研究領域

本研究領域では、人間の「感性」を感覚－知覚－認知という一連の情報処理プロセスの中に位置づけ、生体情報をベースに、感性、情動、言語、イメージなどの心の構造と機能ならびにその測定法を研究する。さらに、認知科学、情報科学、人間工学、システム工学などの基盤的研究から実践的研究を通じて、さまざまな人間の営みにおける安全性、快適性、生活の質の向上に貢献する国際的水準の人材を育成する。

(8) 教育コミュニケーション情報科学研究領域

本研究領域では、学際的な視点に立ち、教育やコミュニケーションと情報科学とを融合して、高度情報化社会における人間の営みと情報行動について探究する。多様性を尊重しながら、快適さを追求する人間中心のシステムと社会の在り方を、国際的な視野から多面的に研究するとともに、従来の研究分野にとらわれず、文理融合・理工連携を図り、人間社会にとって有用なシステム開発研究を行い、体系的な国際的水準の研究・教育能力を有する人材を育成する。

【修士課程(1年制)】

(1) 教育臨床コース

本コースでは、総合的・科学的な視野をもった実践的方法論の習得を目指す。また現役職業人の勉学・職業の両立を可能とする勉学機会の拡大を考慮しながら社会人の育成を目指す。児童・生徒の立場に立脚し、集団生活の基盤である学級での教育法を習得し、個々の多様性や個性を重視した指導方法等にかかる知識・方法論を修得する。

Ⅳ 早稲田大学大学院学則（抜粋）

第1章 総 則

（設置の目的）

第1条 本大学院は、高度にして専門的な学術の理論および応用を研究、教授し、その深奥を究めて、文化の創造、発展と人類の福祉に寄与することを目的とする。

（博士課程）

第2条 本大学院に博士課程をおく。

2 博士課程の標準修業年限は、5年とする。

3 博士課程は、これを前期2年、後期3年の課程に区分し、前期2年の課程を、修士課程として取り扱うものとする。

4 前項の前期2年の課程は、「修士課程」といい、後期3年の課程は、「博士後期課程」という。

5 修士課程の標準修業年限は、2年とする。ただし、教育研究上の必要があると認められる場合には、研究科、専攻または学生の履修上の区分に応じ、その標準修業年限は、2年を超えるものとすることができる。

6 前項の規定にかかわらず、修士課程においては、主として実務の経験を有する者に対して教育を行う場合であって、教育研究上の必要があり、かつ、昼間と併せて夜間その他特定の時間または時期において授業または研究指導を行う等の適切な方法により教育上支障を生じないときは、研究科、専攻または学生の履修上の区分に応じ、標準修業年限を1年以上2年未満の期間とすることができる。

（課程の趣旨）

第3条 博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、またはその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を養うものとする。

2 修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力または高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養うものとする。

（研究科の構成）

第4条 本大学院に次の研究科をおき、各研究科にそれぞれの専攻をおく。

研 究 科	課 程	
	修 士 課 程	博 士 後 期 課 程
人間科学研究科	人間科学専攻	人間科学専攻

第2章 教育方法等

（教育方法）

第6条 本大学院の教育は、授業科目および学位論文の作成等に対する指導（以下「研究指導」という。）によって行うものとする。

（教育方法の特例）

第6条の2 人間科学研究科においては、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間または時期において授業または研究指導を行う等の適当な方法によって教育を行うことができる。

（履修方法等）

第7条 各研究科における授業科目の内容・単位数および研究指導の内容ならびにこれらの履修方法は各研究科において別に定める。

2 学生の研究指導を担当する教員を指導教員という。

3 本大学院の講義、演習、実習などの授業科目の単位数の計算については、本大学学則第12条および第1

3条の規定を準用する。

(他研究科または学部の授業科目の履修)

第8条 当該学術院教授会または研究科運営委員会(以下「研究科運営委員会等」という。)において、教育研究上有益と認めるときは、他の研究科の授業科目または学部の授業科目を履修させ、これを第13条、第13条の2または第13条の3に規定する単位に充当することができる。

(入学前の既修得単位の認定)

第8条の2 当該研究科運営委員会等において教育研究上有益と認めるときは、本大学院に入学する前に本大学院または他大学の大学院(外国の大学の大学院および国際連合大学本部に関する国際連合と日本国との間の協定の実施に伴う特別措置法第1条第2項に規定する国際連合大学(以下「国際連合大学」という。)を含む。)において修得した単位(科目等履修生として修得した単位を含み、早稲田大学学則第52条に規定する単位として算入したものを除く。)を、第13条に規定する単位(次項において「修了要件単位」という。)に充当することができる。

(授業科目の委託)

第9条 当該研究科運営委員会等において教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院(外国の大学の大学院を含む。)と予め協議の上、その大学院の授業科目を履修させることができる。

2 前項の規定により履修させた単位は10単位を超えない範囲で、これを第13条に規定する単位に充当することができる。

(研究指導の委託)

第10条 当該研究科運営委員会等において、教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院または研究所(外国の大学の大学院または研究所および国際連合大学を含む。)とあらかじめ協議の上、本大学院の学生にその大学院等において研究指導を受けさせることができる。ただし、修士課程の学生について認める場合には、当該研究指導を受ける期間は、1年を超えないものとする。

(単位の認定)

第11条 授業科目を履修した者に対しては、試験その他の方法によって、その合格者に所定の単位を与える。

(試験および成績評価)

第12条 授業科目に関する試験は、当該研究科運営委員会等の定める方法によって、毎学年末、またはその研究科運営委員会等が適当と認める時期に行う。

2 授業科目の成績は、 $A^+ \cdot A \cdot B \cdot C \cdot F$ の五級に分ち、 $A^+ \cdot A \cdot B \cdot C$ を合格とし、 F を不合格とする。ただし、研究指導等の成績については、 P および Q の二級に分ち、 P を合格とし、 Q を不合格とすることができる。

第3章 課程の修了および学位の授与

(修士課程の修了要件)

第13条 修士課程の修了の要件は、大学院修士課程に2年以上在学し、各研究科の定めるところにより、所要の授業科目について所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院修士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。

2 前項の場合において、当該修士課程の目的に応じ適当と認められるときは、特定の課題についての研究成果の審査をもって修士論文の審査に代えることができる。

3 2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分にあつては第1項の前段に規定する在学年数については、当該標準修業年限以上在学するものとする。

(博士課程の修了要件)

第14条 博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に5年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学し、各研究科の定めた所定の単位を修得し、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期

間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に3年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。

- 2 第2条第6項の規定により標準修業年限を1年以上2年未満とした修士課程を修了した者および第13条第1項ただし書の規定による在学期間をもって修士課程を修了した者の博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に修士課程における在学期間に3年を加えた期間以上在学し、各研究科の定めた所定の単位を修得し、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に3年(修士課程における在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。
- 3 前2項の規定にかかわらず、第29条第2号、第3号および第4号の規定により、博士後期課程への入学資格に関し修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者が、博士後期課程に入学した場合の博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に3年以上在学し、各研究科の定めた所定の博士論文提出資格要件を満たし、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。
- 4 専門職学位課程を修了した者の博士課程の修了要件は、大学院博士課程に5年から当該専門職学位課程の標準修業年限を差し引いた期間以上在学し、かつ、必要な研究指導を受けた上、当該研究科運営委員会等の行う博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、標準修業年限を1年以上2年未満または2年とした専門職学位課程を修了した場合は、大学院博士課程に3年から当該専門職学位課程の標準修業年限を差し引いた期間以上在学すれば足りるものとする。
- 5 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ、必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り、当該研究科運営委員会等の許可を得て、博士論文を提出し、試験を受けることができる。

(博士学位の授与)

第15条 本大学院の博士課程を修了した者には、博士の学位を授与する。

(修士学位の授与)

第16条 本大学院の修士課程を修了した者には、修士の学位を授与する。

(課程によらない者の博士学位の授与)

第17条 博士学位は、第15条の規定にかかわらず、博士論文を提出して、その審査および試験に合格し、かつ、専攻学術に関し博士課程を修了した者と同様に広い学識を有することを確認された者に対しても授与することができる。

第5章 学年、学期および休業日

(学年および学期)

第25条 本大学院の学年は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

2 学年は次の2期に分ける。

春学期 4月1日から9月20日まで

秋学期 9月21日から翌年3月31日まで

3 前項に定める各学期を前半および後半に分けることができるものとする。

(休業日)

第26条 定期休業日は、次のとおりとする。

一 日曜日

二 国民の祝日に関する法律に規定する休日

- 三 本大学創立記念日(10月21日)
 - 四 夏季休業 8月上旬から9月20日まで
 - 五 冬季休業 12月下旬から翌年1月5日まで
 - 六 春季休業 2月中旬から3月31日まで
- 2 夏季、冬季、春季休業期間の変更または臨時の休業日については、その都度公示する。
- 3 休業日でも、特別の必要があるときは授業を行うことがある。

第6章 入学、休学、退学、転学、専攻の変更および懲戒

(入学の時期)

第27条 入学時期は、毎学期の始めとする。

(修士課程の入学資格)

第28条 本大学院の修士課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について、入学を許可する。

- 一 大学を卒業した者
- 二 学校教育法第104条第4項の規定により学士の学位を授与された者
- 三 外国において通常の課程による16年の学校教育を修了した者
- 四 文部科学大臣の指定した者
- 五 大学に3年以上在学し、または外国において学校教育における15年の課程を修了し、本大学院において、所定の単位を優れた成績をもって修得したものと認めた者
- 六 各研究科において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、22歳に達した者

(博士後期課程の入学資格)

第29条 本大学院の博士後期課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について入学を許可する。

- 一 修士または修士(専門職)もしくは法務博士(専門職)の学位を得た者
- 二 外国において修士もしくは修士(専門職)の学位またはこれに相当する学位を得た者
- 三 国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を得た者
- 四 文部科学大臣の指定した者
- 五 各研究科において、個別の入学資格審査により、修士または修士(専門職)もしくは法務博士(専門職)の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、24歳に達した者

(入学検定の手続)

第30条 本大学院に入学を志願する者は、大学が定める期日までに、大学に別表1に定める入学検定料を納付し、必要書類を提出しなければならない。[別表省略]

(入学手続)

第31条 入学または転入学を許可された者は、大学が指定する入学手続期間内に、大学に入学金ならびに最初の学期に係る授業料、施設費、教育環境整備費、演習料および実験演習料を納め、所定の書類を提出しなければならない。

(保証人)

第32条 保証人は、父兄または独立の生計を営む者で、確実に保証人としての責務を果し得る者でなければならない。

- 2 保証人として不適当と認めたときは、その変更を命ずることができる。
- 3 保証人は、保証する学生の在学中、その一身に関する事項について一切の責任を負わなければならない。
- 4 保証人が死亡し、またはその他の理由でその責務を果たし得ない場合には、新たに保証人を選定して届け出なければならない。

(在学年数の制限)

第33条 本大学院における在学年数は、修士課程および専門職学位課程にあっては4年、博士後期課程にあっては6年を超えることはできない。

2 前項の規定にかかわらず2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分における修士課程および専門職学位課程の在学年数にあっては当該標準修業年限の2倍を超えることはできないものとする。

(休学)

第34条 病気その他の理由で引き続き2カ月以上出席することができない者は、休学願書にその理由を付し、保証人連署で所属する研究科の研究科長に願い出なければならない。

2 休学は当該学年限りとする。ただし、特別の事情がある場合には、引続き休学を許可することがある。この場合、休学の期間は通算し修士課程および専門職学位課程においては2年、博士後期課程においては3年を超えることはできない。

3 前項の規定にかかわらず2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分における修士課程および専門職学位課程の通算年数にあっては当該標準修業年限を超えることはできない。

4 休学者は、学期の始めてなければ復学することができない。

5 休学期間は、在学年数に算入しない。

(専攻および研究科の変更等)

第35条 専攻および研究科の変更または転入学に関する願い出があった場合には、当該研究科運営委員会等の議を経てこれを許可することができる。

(任意退学)

第36条 任意に退学しようとする者は、理由を付し、保証人と連署で願い出なければならない。

退学者の再入学許可期限および再入学までに経過すべき期間に関する規程

第1条 早稲田大学学則第47条の2第1項および早稲田大学大学院学則第39条の2第1項の別に定める期間は、次の各号に定める学部、大学院等につき、退学した年度の翌年度から起算して、それぞれ当該各号に定める期間とする。

- 一 学部 7年
- 二 大学院修士課程 4年
- 三 大学院専門職学位課程(法科大学院を除く。) 4年
- 四 大学院博士後期課程および法科大学院 5年

第2条 前条の規定は、学費未納による抹籍の取扱いに関する規程第2条第1項および第2項ならびに第2条の2第3項の規定によって措置退学とみなされた者の再入学の許可に準用する。

第3条 早稲田大学学則第47条の2第2項ただし書および早稲田大学大学院学則第39条の2第2項ただし書の別に定める期間は、懲戒による退学処分に付された日から起算して2年とする。

(措置退学)

第37条の2 次の各号の一に該当する者については、退学の措置をとるものとする。

- 一 第33条に定める在学年数を満了した者
- 二 指導教員から博士後期課程において研究指導を終了する旨の報告が教授会に対してされた者
- 三 各研究科が定める一の学年から次の学年に進むための要件を満たすべき期間を満了した者
- 四 正当な理由がなく、各研究科が定める出席基準を満たさない者
- 五 学業を怠り、各研究科が定める必要単位数を一定期間に満たさない者

(懲戒)

第38条 学生が、本大学の規約に違反し、または学生の本分に反する行為があったときは懲戒処分に付することができる。

2 懲戒は、訓告、停学、退学の3種とする。

3 学生の懲戒手続に関する事項は、学生の懲戒手続に関する規程をもって別に定める。

停学処分に伴う措置

- ①学生証の所属箇所での保管
- ②登校の禁止
- ③課外活動および体育各部の活動の禁止
- ④早稲田大学の諸施設(図書館、学生会館等)の利用禁止
- ⑤科目登録の禁止
- ⑥当該年度学内奨学金の全額返還、および停学期間中の日本学生支援機構奨学金の支給停止(民間財団等の奨学金は当該財団等の判断による)

(懲戒退学)

第39条 本大学の秩序を乱し、その他学生としての本分に著しく反した者は、懲戒による退学処分に付する。

(再入学)

第39条の2 第36条または第37条の2第4号および第5号までの規定により退学した者が再入学を志望したときは、別に定める期間内に限り、選考の上これを許可することがある。ただし、退学した日の属する学期の翌学期の始めにおいてこれを許可することはできない。

2 第39条の規定により退学した者が再入学を志望したときは、これを許可しない。ただし、退学後別に定める期間を経過し、改悛の情が顕著でありかつ成業の見込みがある場合には、選考の上これを許可することがある。

3 再入学を許可された者が退学または学費未納により抹籍となった場合、以後の再入学は認めない。ただし、特別の事情がある場合はこの限りではない。

4 第1項から前項までの規定により再入学を許可した場合においては、既修の科目の全部または一部を再び履修させることがある。

(教授会の議)

第39条の3 入学、退学、休学もしくは研究科の変更の許可または懲戒は、各教授会の議を経てこれを行う。

懲戒による退学とすべき事由がある者については、他の事由による退学を認めないものとする。

(授業料等の納入期日)

第41条の2 学生は、第31条の場合を除き、次の各号に掲げる学期に係る授業料、施設費、教育環境整備費、演習料および実験演習料(以下「授業料等」という。)を当該各号に掲げる日までに大学に納めなければならない。

一 春学期 4月15日

二 秋学期 10月1日

2 前項の規定にかかわらず、修業年限を超えて在学する者の授業料等の額および納入期日は、細則で定める。

(授業料等の額)

第42条 入学金および授業料等の額は、別表2のとおりとする。[別表省略]

第42条の2 前2条の規定にかかわらず、修業年限を超えて在学する者の授業料等の額および納入期日は、細則で定める。

(納入学費の取扱)

第43条 既に納入した授業料およびその他の学費は、事情のいかんにかかわらず返還しない。

(中途退学者の学費)

第44条 学年の途中で退学した者でも、その期の学費を納入しなければならない。

(抹 籍)

第45条 学費の納入を怠った者は、抹籍することがある。

第9章 科目等履修生

(科目等履修生)

第51条 第27条から第29条までの規定によらないで、本大学院において授業科目を履修しようとする者または特定課題についての研究指導を受けようとする者があるときは、科目等履修生として入学させることができる。

(科目等履修生の種類)

第52条 官公庁、外国政府、学校、研究機関、民間団体等の委託に基づく者を委託履修生という。

2 前項に定める履修生以外の者を一般履修生という。

(科目等履修生の選考)

第53条 科目等履修生として入学を志願する者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入学を許可する。

(科目等履修生の履修証明書)

第54条 科目等履修生が履修した科目について試験を受け、合格したときは、単位を授与し、本人の請求によって証明書を交付する。

第10章 研究生

(研究生)

第57条 本大学院博士後期課程に6年間在学し、博士論文を提出しないで退学した者のうち、引き続き大学院において博士論文作成のため研究指導を受けようとする者があるときは、研究生として入学させることができる。

(研究生の選考)

第58条 研究生として研究指導を受けようとする者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入学を許可する。

(研究生の入学手続、学費および在学期間等)

第59条 研究生の入学手続、学費および在学期間等については別に規程をもって定める。

(正規学生の規定準用)

第60条 研究生については、本章の規定および別に定める規程によるほか、正規の学生に関する規定を準用する。

Ⅴ 早稲田大学学位規則（抜粋）

（目的）

第1条 この規則は、早稲田大学学則（1949 年4月1日示達。以下「大学学則」という。）および早稲田大学大学院学則（1976 年教務達第1号。以下「大学院学則」という。）に定めるもののほか、早稲田大学が授与する学位について必要な事項を定めることを目的とする。

（学位）

第2条 本大学において授与する学位は、学士、博士、修士および専門職学位とする。

3 博士の学位は次のとおりとする。

研 究 科	専 攻	学位（専攻分野）
人間科学研究科	人間科学専攻	博士（人間科学）

3 大学は、前項に定める学位のほか博士（学術）の学位を授与することができる。

4 修士の学位は次のとおりとする。

研 究 科	専 攻	学位（専攻分野）
人間科学研究科	人間科学専攻	修士（人間科学） または 修士（実践人間科学）

（博士学位授与の要件）

第4条 博士の学位は、大学院学則第14条により博士課程を修了した者に授与する。

2 前項の規定にかかわらず、博士の学位は本大学院の博士課程を経ない者であっても、大学院学則第17条により授与することができる。

（修士学位授与の要件）

第6条 修士の学位は、大学院学則第13条により修士課程を修了した者に授与する。

（課程による者の学位論文の受理）

第7条 本大学院の課程による者の学位論文は、修士課程および専門職学位課程については2部を、博士後期課程については3部を作成し、それぞれに論文概要書を添えて研究科長に提出するものとする。ただし、研究科長は、審査に必要な部数の追加を求めることができる。

2 研究科長は、前項の学位論文を受理したときは、学位を授与できる者か否かについて研究科運営委員会の審査に付さなければならない。

（学位論文）

第10条 博士、修士および専門職学位の学位論文は1篇に限る。ただし、参考として、他の論文を添付することができる。

2 前項より、一旦受理した学位論文等は返還しない。

3 審査のため必要があるときには、学位論文の副本、訳文、模型または標本等の資料を提出させることがある。

（審査員）

第12条 研究科運営委員会は、第7条第2項の規定により、学位論文が審査に付されたとき、または第8条お

よび第9条の規定により、学位の審査を付託されたときは、当該研究科の教員のうちから、3人以上の審査員を選任し、学位論文の審査および試験または学識の確認を委託しなければならない。

- 2 研究科運営委員会が必要と認めたときは、前項の規定にかかわらず本大学の教員または教員であった者を、学位論文の審査および試験または学識の確認の審査員に委嘱することができる。
- 3 研究科運営委員会が必要と認めたときは、第1項の規定にかかわらず他の大学院または研究所等の教員等に学位論文の審査員を委嘱することができる。
- 4 研究科運営委員会は、第1項の審査員のうち1人を主任審査員として指名しなければならない。ただし、研究科委員会が必要と認めたときは、第2項の審査員のうち、本大学の教員である者を主任審査員として指名することができる。

(論文審査要旨の公表)

第20条 博士の学位を授与したときは、その論文の審査要旨は、大学が適当と認める方法によってこれを公表する。

(学位論文の公表)

第21条 博士の学位を授与された者は、授与された日から1年以内に、当該博士論文を、印刷公表しなければならない。ただし、学位を授与される前に、印刷公表されているときは、この限りではない。

- 2 前項の規定にかかわらず博士の学位を授与された者は、やむを得ない理由がある場合には、研究科運営委員会の承認を受けて、当該論文の全文に代えて、その内容を要約したものを印刷公表することができる。この場合、大学はその論文の全文を求めに応じて閲覧に供するものとする。
- 3 第1項の規定により、公表する場合は、当該論文に「早稲田大学審査学位論文(博士)」と、また前項の規定により公表する場合は、当該論文の要旨に、「早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨」と明記しなければならない。

(学位の名称)

第22条 本大学の授与する学位には、早稲田大学と付記するものとする。

(学位授与の取消)

第23条 本大学において博士、修士または専門職学位を授与された者につき、不正の方法により学位の授与を受けた事実が判明したときは、総長は、当該研究科運営委員会および研究科長会の議を経て、既に授与した学位を取り消し、学位記を返還させ、かつ、その旨を公表するものとする。

VI 修士論文・課題研究論文作成に関して

当年度の詳細は、5月以降に所沢連絡Webページ

(<http://www.waseda.jp/tokorozawa/kg/>) で必ず確認してください。

【 修士論文〔修士課程（2年制）】 】

1. 学位

本研究科修士課程に通常2年以上4年以内在学し、別に示すところによる所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、修士論文の審査および最終試験に合格した者に対して「修士(人間科学)」の学位が授与される。

2. 提出資格

修士論文の提出資格は、次の要件が満たされていないといけない。

(1) 所定単位の取得あるいは取得見込みの者であること。

(2) 修士論文計画書が提出済みであること。

3. 修士論文計画書

(1) 修士論文を提出する者は、その年度の6月下旬に、所定の様式で修士論文計画書を提出しなければならない。

(2) 修士論文計画書の提出にあたっては、記載内容について、指導教員の指導を受けたのち、承認を受けていなければならない。

(3) 修士論文計画書の提出については、5月に知らせる。

4. 修士論文提出期日および受付期間(詳細は5月に所沢連絡Webページに掲載する。)

(1) 提出日 1月上旬(予定)

(2) 提出受付時間 午前10時～午後4時(時間厳守のこと)(ただし、12:30～1:30を除く)

(3) 提出受付場所 大学院人間科学研究科(所沢総合事務センター)(予定)

(4) その他 受付時間を過ぎた場合は理由の如何を問わず受理しない。

所定の事前提出届(指導教員および教務主任の承認が必要)を定められた期日までに所沢総合事務センターに提出した場合は、本来の提出日の直前2日間のいずれかの日で、自分の指定した日に提出を認める。事前提出届を提出した場合は、自分の提出した提出日を厳守しなければならない。事前提出届による指定日の提出時間は、所沢総合事務センター開室時間とする。

5. 修士論文要旨の作成(詳細は5月に所沢連絡Webページに掲載する。)

修士論文要旨はA4判2枚で作成する。

6. 修士論文の作成(詳細は5月に所沢連絡Webページに掲載する。)

(1) 提出部数は審査員の人数分とする。

7. 公開審査会の開催

2月上旬に行う。修士論文公開審査会は学生発表部分を公開とし、修士論文要旨は要旨集として予め配付し、所沢図書館に配架する。

8. 修士論文審査員

(1) 修士論文の審査員は、人間科学研究科の修士課程研究指導担当教員3名以上をもって構成し、その内1名を主査とする。必要な場合には、本学および他の大学の大学院・学部あるいは研究所等の教員等

をさらに審査員として加えることができる。

(2) 各審査員は、運営委員会の議を経て決定する。

9. 所沢図書館保管用修士論文の提出(詳細は5月に所沢連絡Webページに掲載する。)

公開審査会などでの指示を受けて修正したもの1部を、審査のあとで提出する。図書館では、学内外から要望があった場合は、閲覧に供する。

10. 学術誌『人間科学研究』掲載用修士論文要旨の提出

修士論文要旨は、別に定める作成要件に従って作成のうえ、審査のあとで提出する。

【 課題研究論文〔修士課程 1 年制〕 】

1. 学位について

本研究科修士課程1年制に通常1年以上2年以内在学し、別に示すところによる所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、課題研究論文の審査および最終試験に合格した者に対して、「修士(実践人間科学)」の学位が授与される。

2. 提出資格

課題研究論文の提出資格は、次の要件が満たされていなければならない。

(1) 所定単位の取得あるいは取得見込みの者であること。

(2) 「課題研究論文計画書」が提出済みであること。

3. 課題研究論文計画書

(1) 課題研究論文を提出する者は、その年度の所定の期日(10月頃)までに、所定の様式で「課題研究論文計画書」を提出しなければならない。

(2) 課題研究論文計画書の提出にあたっては、記載内容について、指導教員の指導を受けたのち、承認を受けていなければならない。

(3) 課題研究論文計画書の提出についての詳細は、5月に所沢連絡 Web ページで知らせる。

4. 課題研究論文提出期日および受付期間(詳細は5月に所沢連絡 Web ページに掲載する。)

(1) 提出日 1月上旬(予定)

(2) 提出受付時間 18:00～21:25(予定)

(3) 提出受付場所 並木校舎(予定)

(4) その他 ①受付時間を過ぎた場合は理由の如何を問わず受理しない。

なお、郵送を認めるが、その場合は、所定の事前提出届(指導教員の承認が必要)を定められた期日までに所沢総合事務センターに提出しなければならない。(事前提出届は郵送可とするが、期日までに必着のこと)。

5. 課題研究論文要旨の作成(詳細は5月に所沢連絡 Web ページに掲載する。)

課題研究論文要旨はA4判2枚で作成する。

6. 課題研究論文の作成(詳細は5月に所沢連絡 Web ページに掲載する。)

(1) 提出部数は審査員の人数分とする。

7. 公開審査会の開催

1月下旬に行う。課題研究論文公開審査会は学生発表部分を公開とし、課題研究論文要旨は要旨集として予め配付し、所沢図書館に配架する。

8. 課題研究論文審査員

(1) 課題研究論文の審査員は、人間科学学術院の専任教員2名以上をもって構成し、その内の修士課程研究指導担当教員1名を主査とする。必要な場合には、本学および他の大学の大学院・学部あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

9. 所沢図書館保管用課題研究論文の提出(詳細は5月に所沢連絡 Web ページに掲載する。)

公開審査会などでの指示を受けて修正したもの1部を、審査のあとで提出する。図書館では、学内外から希望があった場合は、閲覧に供する。

10. 『人間科学研究』掲載用課題研究論文要旨の提出(詳細は5月に所沢連絡 Web ページに掲載する。)

課題研究論文要旨は、別に定める作成要件に従って作成のうえ、審査のあとで提出する。

VII 博士論文作成に関して（課程による者）

当年度の詳細は、所沢連絡Webページ

(<http://www.waseda.jp/tokorozawa/kg/>) で確認してください。

1. 学位について

本研究科博士後期課程に通常3年以上6年以内在学し、所要の研究指導を受けた上、博士学位論文の審査および試験に合格した者に対して「博士（人間科学）」の学位が授与される。

2. 提出資格について

博士学位論文の提出資格は、次の要件が満たされていなければならない。

- (1) 早稲田大学大学院学則第14条に定めるもののほか、次の(2)または(3)の要件を満たしていなければならない。
- (2) 博士後期課程在学が3年以上の場合は、原則として研究業績が、博士学位論文に関連して、申請者が第一著者である公表学術論文または著書が、印刷中のものを含めて2編(冊)以上あること。
- (3) 博士後期課程在学が3年に満たずに提出しようとする場合は、(2)の条件を満たした上で、申請者を第一著者とする公表学術論文または著書が、申請者の所属する研究グループ以外の研究者により、積極的な評価を受けて、公表学術論文または著書に3回以上引用されていること。

なお、公表学術論文とは、日本学術会議に登録された学会が発行する審査規定が明記された学会誌に掲載された論文、およびそれに準ずる論文、または、海外において第三者審査委員が明記されている学会誌・学術雑誌に掲載された論文を指す。

3. 博士学位申請に関する提出書類について

(1) 学位申請書(大学所定)	1部
(2) 学位論文	3部
(3) 論文概要書	1部
(4) 履歴書(人間科学研究科所定)	1部
(5) 研究業績書(人間科学研究科所定)	1部
(6) 研究業績書に記載した学術論文等の抜刷	各1部
(7) 大学院における成績証明書(修士課程)	1部
(8) 博士後期課程の退学証明書(退学者のみ)	1部

4. 博士学位論文等の提出期日について

例年、5月と10月の2回受け付ける。詳細な期日等はその都度所沢連絡Webページ等で伝達する。

5. 博士学位論文等の作成要領について

(1) 博士学位論文

使用言語は原則として日本語とする。ただし、英語での提出を妨げないが英語の場合は和訳を提出させることがある。

書式は横書きとし(用紙は縦)、A4判タイプ用紙等にワープロ等で片面打ちとし、活字またはその他印字によるものとする。英文の場合はダブルスペースとする。

(2) 論文概要書

使用言語は原則として日本語とする。ただし、英語での提出を妨げないが英語の場合は和訳を提出させることがある。

書式は横書きとし(用紙は縦)、A4判タイプ用紙等にワープロ等で片面打ちとし、活字またはその他印

字によるものとする。

字数は、A4サイズ2枚程度とする。

6. 博士学位論文審査員について

論文審査員は、人間科学研究科の博士後期課程研究指導担当の教員または教員であった者3名以上をもって構成し、その内研究科運営委員の教員1名を主任審査員とする。必要な場合には、修士課程研究指導担当教員および他の大学院あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

7. 審査について

(1) 予備審査

提出された学位論文および書類等をもとに学位論文の受理を検討する予備審査を行う。

(2) 公開審査会

論文審査にあたり、公開審査会を開催する。

※ 博士後期課程に3年以上在学し、かつ所要の研究指導を受けて退学した場合（通称、満期退学または単位取得退学）は、退学した日から起算して3年以内に限り『課程による者』として博士学位論文を提出することができる。なお、退学後3年以内とは、博士学位論文の「受理」を決定する運営委員会の開催日が、3年以内にあることであり、例年、受理を決定する運営委員会は6月と11月に開催される。

※ 審査に合格した学位論文は、本学中央図書館・所沢図書館・国会図書館に配架し閲覧に供する。

Ⅷ 研究生制度について

本研究科は、大学院学則第57条の定めるところにより本研究科博士後期課程に6年間在学し、博士論文を提出しないで退学した者のうち、引き続き大学院において博士論文作成のため研究指導を受けようとする者があるときは、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上、研究生として入学を許可することがある。

以下「大学院研究生に関する規程」の抜粋

(出願手続)

第2条 研究生として入学を志願する者は、所定の願書により、当該研究科長に願い出なければならない。

(入学手続、学費)

第3条 研究生として入学を許可された者は、入学後の最初の学期に係る研究指導料、演習料および実験実習料を納入し、学生証の交付を受けなければならない。

- 一 研究指導料 博士後期課程の3年生が支払うべき授業料の半額
- 二 演習料・実験演習料 博士後期課程の3年生が支払うべき演習料および実験実習料の額

(在学期間)

第4条 研究生の在学期間は研究指導が必要な期間とする。ただし、研究指導を継続して受けようとする時は、原則として2回に限り延長することができる。

2 在学期間の延長を希望する者は、在学期間が終了するまでに、理由を付して、当該研究科長に願い出なければならない。

3 在学期間の延長の許可は、当該研究科運営委員会の議を経て、研究科長が行う。

(学友会費、学会費等)

第5条 研究生に対し、学友会費、学会費等を正規の学生に準じて徴収することができる。

Ⅸ 人を対象とする研究および生物実験に関する規程

「人を対象とする研究に関する倫理規程」および「生物実験安全管理規程」は、大学で定められている。人間科学研究科に所属する学生は、上記規程を充分遵守のうえ研究活動に精進されることを期待する。

なお、規定に従い研究計画を申請する際は、指導教員と充分相談のうえ申請すること。

Ⅹ 人間科学研究科学科目配当

1. 学科目配当の構成

課 程	研究領域・コース	科目区分
修士課程 (2年制)	地域・地球環境科学研究領域 人間行動・環境科学研究領域 文化・社会環境科学研究領域 健康・生命医科学研究領域 健康福祉科学研究領域 臨床心理学研究領域 感性認知情報システム研究領域 教育コミュニケーション情報科学研究領域	研究指導 修士論文 専門ゼミ(1) 専門ゼミ(2) 専門科目A群 専門科目B群 プロジェクト科目 リテラシー科目(英語・基礎)
修士課程 (1年制)	教育臨床コース	研究指導 課題研究論文 専門ゼミ(1) 専門科目A群 専門科目B群 選択科目
博士後期課程	地域・地球環境科学研究領域 人間行動・環境科学研究領域 文化・社会環境科学研究領域 健康・生命医科学研究領域 健康福祉科学研究領域 臨床心理学研究領域 感性認知情報システム研究領域 教育コミュニケーション情報科学研究領域	研究指導 博士論文

2. 科目の説明

課 程	科目区分	配 当	期 間※	単 位	備 考
修士課程 (2年制)	研究指導	1・2年	半期	無	曜日時限設定なし
	修士論文	2年	—	無	
	専門ゼミ(1)	1・2年	半期	4単位	
	専門ゼミ(2)	1・2年	半期	4単位	
	専門科目A群	1・2年	HS、半期	1 or 2単位	
	専門科目B群	1・2年	HS、半期	1 or 2単位	
	プロジェクト科目	1・2年	HS、半期	1 or 2単位	
	リテラシー科目(英語)	1年次	HS、半期	1 or 2単位	
	リテラシー科目(基礎)	1年次	HS、半期	1 or 2単位	
修士課程 (1年制)	研究指導	1年	半期	無	曜日時限設定なし
	課題研究論文	1年	—	無	
	専門ゼミ	1年	半期	4単位	
	専門科目A群	1年	HS、半期	1 or 2単位	
	専門科目B群	1年	HS、半期	1 or 2単位	
博士後期 課程	選択科目	1年	HS、半期	1 or 2単位	
	研究指導	1・2・3年	半期	無	曜日時限の設定なし
	博士論文	3年	—	無	

※HS:ハーフセメスター 授業回数8回、1単位 半期:春学期または秋学期 授業回数15回、2単位

注意:集中講義として行う場合は期間相当分を実施

3. 大学院人間科学研究科学科目配当表

科目の概要の前に掲載。

X I 修了要件・学科目の履修方法

— 修士課程 —

【 修了要件 】

1. 修士課程（2年制）

修士課程(2年制)の修了要件は、通常2年以上4年以内在学し、所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けたうえ(研究指導の評価が2年以上にわたり合格「P」であること)、修士論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には、「修士(人間科学)」の学位が授与される。

ただし、優れた業績を上げた者について学術院運営委員会・教授会が認めた場合に限り、修士課程に1年以上在学すれば修了できる。

2. 修士課程（1年制）

修士課程(1年制)の修了要件は、通常1年以上2年以内在学し、所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けたうえ(研究指導の評価が合格「P」であること)、課題研究論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には、「修士(実践人間科学)」の学位が授与される。

【 授業科目の履修方法 】

1. 修士課程（2年制）

(1) 研究指導および修士論文

研究指導を2年以上にわたり合格し、修士論文に合格しなければならない。

(2) 必修科目

各自が所属する研究指導の専門ゼミ(旧名称:演習科目)(1)A・B、(2)A・Bの計8単位を履修しなければならない。

一部、研究指導教員が担当する研究指導名と専門ゼミ(旧名称:演習科目)名が異なる科目があるが、この場合、研究指導教員が担当する専門ゼミ(旧名称:演習科目)(1)A・B、(2)A・Bを履修するものとする。

(3) 選択科目

【2013年度入学者】

①専門科目A群、B群、それぞれから2単位以上を履修しなければならない。

②プロジェクト科目から1～4単位を履修しなければならない。

③リテラシー科目(英語)から1～3単位を履修しなければならない。なお、履修にあたっては以下の条件がある。

対象科目:「Reading for Academic Purposes」中級・上級

「Writing for Academic Purposes」中級・上級

「Oral Presentation for Academic Purposes」中級・上級 (各1単位)

(1)TOEFL(TOEFL-ITP含む)、またはTOEIC(TOEIC-IP含む)、またはWeTECのスコア(2年以内)を提出する。

(2)提出されたスコアにより、履修できるクラス(中級/上級)が異なる。基準点は別途に定める。

(3)履修する英語科目の第1回目の授業開始時に、担当教員にスコアのコピーを提出すること。

スコア未提出の場合、リテラシー科目(英語)の履修はできない。

④リテラシー科目(基礎)から0～6単位を履修しなければならない。

対象科目:「多変量解析特論」(2単位)

「研究論理概論」(オープン教育センター設置 2単位)

「学術的文章の作成とその指導」(オープン教育センター設置 2単位)

- ⑤指導教員の指示と許可に基づき、指導教員担当の専門ゼミの重複履修や、指導教員以外の専門ゼミの並行履修(当該教員の許可が必要)を下表に示す上限単位まで履修が可能である。

※なお、「専門ゼミ」「専門科目」「プロジェクト科目」「リテラシー科目(英語、基礎)」を合わせて、20単位以上履修しなければならない。

【2012年度以前入学者】

- ①演習科目、講義科目の中から研究領域にとらわれずに22単位(以上)を履修しなければならない。
- ②各自が所属する研究指導以外の専門ゼミ(旧名称:演習科目)は、8単位以内に限り、修了に必要な単位として算入することができる。各自が所属する研究指導以外の専門ゼミ(旧名称:演習科目)を登録する場合は、事前に当該専門ゼミ(旧名称:演習科目)の担当教員に了解を得なければならない。
- (4)各学年において登録できる授業科目の登録制限単位は34単位とする。
- (5)上記の履修方法を表にすると下記ようになる。

【2013年度入学者】

必修/選択	科目区分	科目の説明 (単位数)	修了要件
必修	研究指導		2年分合格(単位なし)
	修士論文		合格(単位なし)
	専門ゼミ	所属する研究指導の専門ゼミ(1)A・B、(2)A・B	8単位
選択	専門ゼミ(1)	所属する研究指導の専門ゼミ(1)A・B(重複履修) 所属する研究指導以外の専門ゼミ(1)A・B	0～4単位
	専門ゼミ(2)	所属する研究指導の専門ゼミ(2)A・B(重複履修) 所属する研究指導以外の専門ゼミ(2)A・B	0～4単位
	専門科目 A 群		2単位以上
	専門科目 B 群		2単位以上
	プロジェクト科目		1～4単位
	リテラシー科目(英語)	TOEFL (TOEFL-ITP 含む)、または TOEIC (TOEIC-IP 含む) または WeTEC のスコア (2 年以内) が必要。スコアにより履修クラスが異なる。	1～3単位
	リテラシー科目(基礎)		0～6単位
修了単位			30単位(以上)

※専門ゼミ、専門科目A群、B群、プロジェクト科目、リテラシー科目(英語、基礎)を合わせて、20単位以上履修しなければならない。

【2012年度以前入学者】

必修/選択	科目区分	科目の説明 (単位数)	修了要件
必修	研究指導		2年分合格(単位なし)
	修士論文		合格(単位なし)
	専門ゼミ (旧名称:演習科目)	所属する研究指導の専門ゼミ(旧名称:演習科目)(1)A・B、 (2)A・B	8単位
選択	専門ゼミ (旧名称:演習科目)	所属する研究指導以外の専門ゼミ(旧名称:演習科目)(1)A・ B(2)A・B	22単位(以上)
	講義科目	領域にとらわれず自由に選択	
修了単位			30単位(以上)

2. 修士課程（1年制）

(1) 研究指導および課題研究論文

研究指導および課題研究論文に合格しなければならない。

(2) 専門ゼミ(必修)

各自が所属する研究指導の専門ゼミ科目（1）A・Bの4単位を履修しなければならない。

(3) 専門科目

①専門科目A群(選択必修)

専門科目A群から2単位(以上)を履修しなければならない。

②専門科目B群(必修・選択必修)

心理教育臨床実習A・B、心理臨床事例実習A・Bの各1単位、4単位分を必ず履修しなければならない。

そのほかに、専門科目B群から2単位(以上)を履修しなければならない。

(4) 選択科目

修士課程(2年制)に設置されている専門ゼミ、専門科目群、人間科学科目群の中から研究領域・コースにとらわれずに、30単位を満たすように履修する。各自が所属する研究指導以外の専門ゼミは、専門ゼミ(1)A・Bに限り2科目4単位を修了に必要な単位として算入することができる。各自が所属する研究指導以外の専門ゼミを登録する場合は、事前に当該専門ゼミの担当教員に了解を得なければならない。

(5) 1年間に登録できる授業科目の登録制限単位は46単位とする。

(6) 上記の履修方法を表にすると下記のとおりとなる。

科目区分	科目の説明	修了要件
研究指導	所属する研究指導	合格（単位なし）
課題研究論文		合格（単位なし）
専門ゼミ	所属する研究指導の専門ゼミ(1)A・B	4単位
専門科目 A 群		2単位(以上)
専門科目 B 群	心理教育臨床実習 A・B 心理臨床事例実習 A・B	4単位 (1単位×4科目)
	その他	2単位(以上)
選択科目	修士課程(2年制)設置科目	30 単位より上記で取得した 単位を除いた単位数を取得
修了単位数		30単位(以上)

3. 通年科目履修の弾力化

半期休学・半期留学をした際の研究指導、演習の履修について、研究指導担当教員の許可がある場合に限り、継続して履修することができる。ただし、継続履修できるのは、同じ担当教員の科目を登録した場合に限る。

4. 他箇所設置科目および入学前修得科目（修士課程（2年制）・修士課程（1年制）共通）

【2013年度入学者】

(1) 本大学の他箇所に設置されている大学院生対象科目を指導教員の許可を得て履修することができる。

修得した授業科目の単位のうち、10単位以内に限り、他箇所聴講科目として修了に必要な単位に算入

することができる。この場合の登録単位数は、当該年度の登録制限単位数の中に含まれる。定められた単位数を超えた科目は、自由科目（修了に必要な単位とはならない科目）となる。

上記の他に、自由科目として他箇所設置されている科目を履修することができる。

- (2) 本研究科在学中に外国の大学院へ留学し、留学先で修得した講義科目の単位のうち、本研究科に設置されている講義科目（研究領域は問わない）のいずれかに該当すると認められるものに限り、10単位を限度として、当該講義科目に振り替えて認定することがある。また、振り替えの認定がされなかった科目については、他箇所聴講科目扱いで認定することがある。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含まれない。
- (3) 本研究科入学前に、本大学の他研究科または他大学大学院（外国の大学院を含む）において修得した講義科目の単位（科目等履修生として修得した単位を含む）のうち、10単位以内に限り、他箇所聴講科目として認定することがある。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含まれない。
- (4) 本研究科入学前に本研究科の科目等履修生として在学し、取得した本研究科設置科目の講義科目、演習科目の単位は、10単位以内に限り、当該科目に振り替えて認定することがある。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含まれない。
- (5) 他箇所聴講科目は、認定分も合わせて、10単位を限度とする。
- (6) 本研究科入学前に人間科学部の学生として、本研究科の科目を先取履修で修得した単位は、6単位を限度として自動的に本研究科の修了単位に計上する。この場合の計上された単位数は、登録制限単位数の中に含まれない。

【2012年度以前入学者】

- (1) 本大学の他箇所に設置されている大学院生対象科目を指導教員の許可を得て履修することができる。
修得した授業科目の単位のうち、10単位以内に限り講義科目の代替科目として修了に必要な単位に算入することができる。この場合の登録単位数は、当該年度の登録制限単位数の中に含まれる。
上記の他に、自由科目（修了に必要な単位とはならない科目）として他箇所設置されている科目を履修することができる。
- (2) 本研究科在学中に外国の大学院へ留学し、留学先で修得した講義科目の単位のうち、本研究科に設置されている講義科目（研究領域は問わない）のいずれかに該当すると認められるものに限り、10単位を限度として、当該講義科目に振り替えて認定することがある。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含まれない。
- (3) 本研究科入学前に、本大学の研究科または他大学大学院（外国の大学院を含む）において修得した講義科目の単位（科目等履修生として修得した単位を含む）のうち、本研究科に設置されている講義科目（研究領域は問わない）のいずれかに該当すると認められるものに限り、10単位を限度として、当該講義科目に振り替えて、認定することがある。なお、本研究科の科目等履修生として在学し、本研究科に設置されている演習科目を履修している場合も同様の取り扱いとする。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含まれない。
- (4) 上記に規定する単位は、併せて10単位を限度とする。
- (5) 本研究科入学前に人間科学部の学生として、本研究科の科目を先取履修で修得した単位は、14単位を限度として自動的に本研究科の修了単位に計上する。この場合の計上された単位数は、登録制限単位数の中に含まれない。

5. 後取履修科目（2013年度入学者向け）

指導教員が承認する人間科学部設置科目（専門ゼミ、専門科目、専門科目I群等）を、当該科目担当教員の承認を得れば、必要に応じて定員外として自由科目として登録できる。

【 9月修了について 】

修士課程の学位授与の要件中、3月までに

- ① 修士論文または課題研究論文に関する要件を満たさなかった場合
- ② 所定の単位を充足することができなかった場合
- ③ 上記 ① ② いずれの要件も満たさなかった場合

のために、修了に関する要件を具備することができず、そのために引き続き在学する者については、以下の基準によりその年の9月に修士の学位を授与(9月15日付)されることができる。

1. 修士論文について

- ① 修了できなかった年度に修士論文計画書または課題研究論文計画書を提出していること
- ② 9月修了を希望する年度に指導教員の「研究指導」を登録していること
- ③ 9月修了を希望する年度の9月までに修士論文または課題研究論文に関する要件を具備すること

2. 授業科目について

- ① 修士課程(2年制): 修了所要単位に4単位以内の不足であること
修士課程(1年制): 修了所要単位に8単位以内の不足であること
- ② 不足単位を修得する場合は、前期終了科目であること
演習科目または講義科目の通年科目を履修する場合は、9月修了の対象とはならない。

3. 手続について

9月修了を希望する場合は、その年度の4月の所定の期日までに研究科所定の書類で、その旨研究科長へ届け出なければならない。その場合、指導教員の承認印が必要となる。

— 博士後期課程 —

【 修了要件 】

1. 博士後期課程の修了要件は、通常3年以上6年以内在学し、論文作成のために必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には「博士(人間科学)」の学位が授与される。
2. 授業科目について必要単位はないが、指導教員の指示により、修士課程の授業科目を履修しなければならない場合がある。
3. 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り博士論文を提出し受理されれば、「課程による者」として審査および試験を受けることができる。「3年以内」とは、提出された博士論文の受理を決定する学術院運営委員会の日付であり、年2回(6月と11月)開催される。

— 修士課程・博士後期課程 —

【 成 績 】

成績は、次のとおり表示する。なお、入学年度により表記の方法が異なる。

1. 2006年度以降入学者

(1) 研究指導

合否区分	合 格	不合格
成績通知書	P	Q
成績証明書	P	記載なし

(2) 授業科目、修士論文、課題研究論文

合否区分	合 格				不合格
点 数	100～90	89～80	79～70	69～60	59以下
成績通知書	A+	A	B	C	F
成績証明書	A+	A	B	C	記載なし

2. 2005年度以前入学者

(1) 研究指導、修士論文

合否区分	合 格	不合格
成績通知書	P	Q
成績証明書	合 格	記載なし

(2) 授業科目

合否区分	合 格				不合格
点 数	100～90	89～80	79～70	69～60	59以下
成績通知書	A+	A	B	C	F
成績証明書	優		良	可	記載なし

【 G P A (Grade Point Average)】

本研究科では、成績を数値に換算し、科目登録した単位あたりの平均値をもとめている。海外に留学する際に、主に用いられ、算出方法は次のとおり。

成績	換算値	算 出 方 法
A+	4	修了算入科目について、左記の換算値により 1 単位あたりの平均値を算出する。 $G P A = \frac{\text{科目の単位数} \times \text{その科目に対応する換算値}}{\text{総登録単位数 (不合格科目を含む)}}$ ※G P Aは、小数第2位まで表示する
A	3	
B	2	
C	1	
F	0	

※G P Aは成績通知書により通知する。また、研究科として証明する。

※研究指導、博士学位論文の評価区分(合格:P、不合格:Q)はGPA 計算の対象外。

— 科目名称変更 —

【 修 士 課 程 】

1. 研究指導

下記の研究指導は名称が変更となっている。変更後と変更前とは同一科目として取り扱うものとする。

変更後研究指導名	変更前研究指導名	変更年度
健康管理医学研究指導	健康医学研究指導	2013
社会医学研究指導	健康福祉管理論研究指導	2013
生活支援工学研究指導	健康福祉支援工学研究指導	2013
子どもの健康福祉学研究指導	幼少児福祉教育論研究指導	2013
医療心理学・職場メンタルヘルス学研究指導	産業カウンセリング学研究指導	2013
行動医学研究指導	臨床心理アセスメント学研究指導	2013
生体情報工学研究指導	感覚情報処理学研究指導	2013
緩和医療学・臨床死生学研究指導	緩和医療学研究指導	2010
児童家庭福祉論研究指導	障害児福祉論研究指導	2008
生物圏生態学研究指導	生物圏情報科学研究指導	2005
学習動機づけ論研究指導	学習動機づけ研究指導	2005
建築環境学研究指導	環境・行動学研究指導	2005
移住論研究指導	応用言語学研究指導	2005
物質文化論研究指導	考古学研究指導	2005
生体発達科学研究指導	細胞生物学研究指導	2005
生体構造学研究指導	神経形態学研究指導	2005
生体機能学研究指導	健康生体機能学研究指導	2005
神経内分泌学研究指導	神経行動学研究指導	2005
運動制御・バイオメカニクス研究指導	身体運動科学研究指導	2005
応用健康科学研究指導	身体行動科学研究指導	2005
予防医学研究指導	環境保健学研究指導	2005
学校カウンセリング学研究指導	学校カウンセリング研究指導	2005
感性認知科学研究指導	色彩認知科学研究指導	2005
安全人間工学研究指導	安全行動学研究指導	2005
知識情報科学研究指導	データサイエンス研究指導	2005
ネットワーク情報システム学研究指導	ネットワーク情報システム研究指導	2005
スポーツ倫理学・教育学研究指導	スポーツ倫理学研究指導	2005
健康スポーツ論研究指導	体力科学研究指導	2005
スポーツビジネスマネジメント論研究指導	スポーツビジネス・マーケティング研究指導	2005
スポーツ神経精神医科学研究指導	精神医学研究指導	2005
スポーツ健康管理学研究指導	スポーツ内科学研究指導	2005
スポーツ神経科学研究指導	生体機能学研究指導	2005

2. 演習科目

下記の科目は、科目名称が変更となっている。変更以前の科目を履修した場合、変更以降の科目は履修することができない。

変更後科目名	変更前科目名	変更年度
環境管理計画学ゼミ(1)、(2)	環境管理計画学演習(1)、(2)	2013
環境生態学ゼミ(1)、(2)	環境生態学演習(1)、(2)	2013
水域環境学ゼミ(1)、(2)	水域環境学演習(1)、(2)	2013
生物圏生態学ゼミ(1)、(2)	生物圏生態学演習(1)、(2)	2013
大気環境科学ゼミ(1)、(2)	大気環境科学演習(1)、(2)	2013
動物行動生態学ゼミ(1)、(2)	動物行動生態学演習(1)、(2)	2013
アジア社会論ゼミ(1)、(2)	アジア社会論演習(1)、(2)	2013
家族社会学ゼミ(1)、(2)	家族社会学演習(1)、(2)	2013
環境社会学ゼミ(1)、(2)	環境社会学演習(1)、(2)	2013
地域資源論ゼミ(1)、(2)	地域資源論演習(1)、(2)	2013
都市社会学ゼミ(1)、(2)	都市社会学演習(1)、(2)	2013
移住論ゼミ(1)、(2)	移住論演習(1)、(2)	2013
科学史・科学論ゼミ(1)、(2)	科学史科学哲学演習(1)、(2)	2013
技術史・技術文化論ゼミ(1)、(2)	技術史・技術文化論演習(1)、(2)	2013
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ(1)、(2)	スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1)、(2)	2013
ドイツ政治社会文化論ゼミ(1)、(2)	ドイツ政治社会文化論演習(1)、(2)	2013
日本物質文化論ゼミ(1)、(2)	日本物質文化論演習(1)、(2)	2013
表象文化論ゼミ(1)、(2)	フランス表象文化論演習(1)、(2)	2013
文化生態学ゼミ(1)、(2)	文化生態学演習(1)、(2)	2013
環境心理・環境デザインゼミ(1)、(2)	環境心理・環境デザイン演習(1)、(2)	2013
建築環境学ゼミ(1)、(2)	建築環境学演習(1)、(2)	2013
建築計画学ゼミ(1)、(2)	建築計画学演習(1)、(2)	2013
発達行動学ゼミ(1)、(2)	発達行動学演習(1)、(2)	2013
運動制御・バイオメカニクスゼミ(1)、(2)	運動制御・バイオメカニクス演習(1)、(2)	2013
応用健康科学ゼミ(1)、(2)	応用健康科学演習(1)、(2)	2013
基礎老化学ゼミ(1)、(2)	基礎老化学演習(1)、(2)	2013
神経内分泌学ゼミ(1)、(2)	神経内分泌学演習(1)、(2)	2013
生体機能学ゼミ(1)、(2)	生体機能学演習(1)、(2)	2013
統合生理学ゼミ(1)、(2)	統合生理学演習(1)、(2)	2013
分子神経科学ゼミ(1)、(2)	分子神経科学演習(1)、(2)	2013
医療人類学ゼミ(1)、(2)	医療人類学演習(1)、(2)	2013
緩和医療学・臨床死生学ゼミ(1)、(2)	緩和医療学・臨床死生学演習(1)、(2)	2013
健康管理医学ゼミ(1)、(2)	健康医学演習(1)、(2)	2013
社会医学ゼミ(1)、(2)	健康福祉管理論演習(1)、(2)	2013
バイオエシックスゼミ(1)、(2)	バイオエシックス演習(1)、(2)	2013
予防医学ゼミ(1)、(2)	予防医学演習(1)、(2)	2013
生活支援工学ゼミ(1)、(2)	健康福祉支援工学演習(1)、(2)	2013
福祉産業学ゼミ(1)、(2)	福祉産業学演習(1)、(2)	2013
リハビリテーション科学ゼミ(1)、(2)	リハビリテーション科学演習(1)、(2)	2013
社会保障政策論ゼミ(1)、(2)	社会保障政策論演習(1)、(2)	2013
スポーツ健康マネジメント論ゼミ(1)、(2)	スポーツ健康マネジメント論演習(1)、(2)	2013
精神保健福祉論ゼミ(1)、(2)	精神保健福祉論演習(1)、(2)	2013
ソーシャルワーク論ゼミ(1)、(2)	ソーシャルワーク論演習(1)、(2)	2013
子どもの健康福祉学ゼミ(1)、(2)	福祉教育論演習(1)、(2)	2013
老年社会福祉学ゼミ(1)、(2)	老年社会福祉学演習(1)、(2)	2013
学校カウンセリング学ゼミ(1)、(2)	学校カウンセリング学演習(1)、(2)	2013

行動臨床心理学ゼミ(1)、(2)	行動臨床心理学演習(1)、(2)	2013
医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ(1)、(2)	産業カウンセリング学演習(1)、(2)	2013
心身医学ゼミ(1)、(2)	心身医学演習(1)、(2)	2013
認知行動カウンセリング学ゼミ(1)、(2)	認知行動カウンセリング学演習(1)、(2)	2013
行動医学ゼミ(1)、(2)	臨床心理アセスメント学演習(1)、(2)	2013
安全人間工学ゼミ(1)、(2)	安全人間工学演習(1)、(2)	2013
感性認知科学ゼミ(1)、(2)	感性認知科学演習(1)、(2)	2013
言語情報科学ゼミ(1)、(2)	言語情報科学演習(1)、(2)	2013
社会的実践認知科学ゼミ(1)、(2)	社会的実践認知科学演習(1)、(2)	2013
情報処理心理学ゼミ(1)、(2)	情報処理心理学演習(1)、(2)	2013
心理行動学ゼミ(1)、(2)	心理行動学演習(1)、(2)	2013
生態心理学ゼミ(1)、(2)	生態心理学演習(1)、(2)	2013
知識情報科学ゼミ(1)、(2)	知識情報科学演習(1)、(2)	2013
人間生体機能動態学ゼミ(1)、(2)	人間生体機能動態学演習(1)、(2)	2013
福祉工学ゼミ(1)、(2)	福祉工学演習(1)、(2)	2013
インターネット科学ゼミ(1)、(2)	インターネット科学演習(1)、(2)	2013
学習環境デザイン論ゼミ(1)、(2)	学習環境デザイン論演習(1)、(2)	2013
教育開発論ゼミ(1)、(2)	教育開発論演習(1)、(2)	2013
教育コミュニケーション学ゼミ(1)、(2)	教育コミュニケーション学演習(1)、(2)	2013
教育実践学ゼミ(1)、(2)	教育実践学演習(1)、(2)	2013
情報コミュニケーション科学ゼミ(1)、(2)	情報コミュニケーション科学演習(1)、(2)	2013
情報コミュニケーション技術論ゼミ(1)、(2)	情報コミュニケーション技術論演習(1)、(2)	2013
情報メディア教育論ゼミ(1)、(2)	情報メディア教育論演習(1)、(2)	2013
ネットワーク情報システム学ゼミ(1)、(2)	ネットワーク情報システム学演習(1)、(2)	2013
臨床認知発達学ゼミ	臨床認知発達学演習	2013
学校臨床心理学ゼミ	学校臨床心理学演習	2013

3. 講義科目

下記の科目は、科目名称が変更となっている。変更以前の科目を履修した場合、変更以降の科目は履修することができない。

変更後科目名	変更前科目名	変更年度
生活支援工学特論	健康福祉支援工学特論	2013
臨床心理学研究法特論	心理学研究法特論	2013
生体情報工学特論	感覚情報処理学特論	2013
動物生態学特論	野生動物学特論	2013
科学史・科学論特論	科学史科学哲学特論	2013
政治思想史特論	ドイツ近代国民国家特論	2013
表象文化論特論	フランス表象文化史研究特論	2013
健康行動科学特論	応用健康科学特論	2013
環境生理学特論	神経機能学特論	2013
リハビリテーション工学特論	生体計測学特論	2013
子どもの健康福祉学特論	福祉教育特論	2013
人間生体機能動態学特論	人間生体機能動態学	2013
福祉工学特論	生活支援工学特論	2013
視覚デザイン特論	視覚デザイン	2012
科学英語論文作成法特論	科学英語論文作成法	2012
科学英語論文口演特論	科学英語論文口演法	2012
メディアリテラシー特論	科学英語論文口演特論	2012
教育システム工学特論	教育システム工学	2012
教育集団心理学特論	教育集団心理学	2012

野生動物学特論	動物行動学特論	2010
ワークショップデザイン特論	学習科学特論	2010
環境生態学特論	自然環境論	2006
学習動機づけ特論	ヒューマン・モチベーション特論	2006
学習環境心理学特論	環境認知学特論	2006
自然人類学特論	人類学特論	2006
生体発達科学特論	発生生物学特論	2006
運動制御・バイオメカニクス特論	身体運動科学特論	2006
健康医学特論	健康管理医学特論	2006
応用健康科学特論	健康行動科学特論	2006
老年社会福祉学特論	老年福祉学特論	2006
安全人間工学特論	応用実験心理学	2006
教授学習過程特論	認知科学特論	2006
スポーツ表象特論	スポーツ表象論	2006
健康スポーツマネジメント特論	健康スポーツ特論	2006
スポーツビジネスマネジメント特論	スポーツビジネス特論	2006
メディカルコンディショニング特論	メディカルコンディショニング論	2006
スポーツ統計学特論	スポーツ統計学	2006
運動器解剖実習	運動器解剖学実習	2006

【博士後期課程】

下記の研究指導は、名称が変更となっている。変更後と変更前とは同一科目として取り扱うものとする。

変更後研究指導名	変更前研究指導名	変更年度
社会医学研究指導	健康福祉管理論研究指導	2013
子どもの健康福祉学研究指導	幼少児福祉教育論研究指導	2013
医療心理学・職場メンタルヘルス学研究指導	産業カウンセリング学研究指導	2013
行動医学研究指導	臨床心理アセスメント学研究指導	2013
生体情報工学研究指導	感覚情報処理学研究指導	2013
建築環境学研究指導	環境・行動学研究指導	2006
生体発達科学研究指導	細胞生物学研究指導	2006
生体構造学研究指導	神経形態学	2006
生体機能学研究指導	健康生体機能学研究指導	2006
神経内分泌学研究指導	神経行動学研究指導	2006
運動制御・バイオメカニクス研究指導	身体運動科学研究指導	2006
応用健康科学研究指導	身体行動科学研究指導	2006
予防医学研究指導	環境保健学研究指導	2006
感性認知科学研究指導	色彩認知科学研究指導	2006
安全人間工学研究指導	安全行動学研究指導	2006
ネットワーク情報システム学研究指導	ネットワーク情報システム研究指導	2006
健康スポーツ論研究指導	体力科学研究指導	2006
スポーツ神経科学研究指導	生体機能学研究指導	2006
スポーツ心理学研究指導	精神生理学研究指導	2006
色彩認知科学研究指導	環境色彩認知科学研究指導	2003
教育開発論研究指導	教育工学研究指導	2003
スポーツ生理学研究指導	運動生理学研究指導	2003
身体形態学研究指導	トレーニング科学研究指導	2003

ⅩⅡ 教育職員免許状取得について

1. 人間科学研究科で取得できる免許の種類及び教科。

○印が取得できる免許状

免許状の種類 / 教科	社会	地理歴史	公民	福祉	情報
中学校教諭専修免許状	○				
高等学校教諭専修免許状		○	○	○	○

2. 免許状取得の条件

本研究科入学以前に、当該教科の中学校教諭一種免許状又は高等学校教諭一種免許状を取得した者、又は教育職員免許法の5条第一項別表第1の所要資格を充たしている者。〔5条第一項別表第1の所要資格〕とは、一種免許状取得に必要な「教職および教科に関する科目」の法令で定める単位数を言う

3. 免許状取得に必要な科目

次項以降に記載されている、別表の人間科学研究科設置科目のなかから該当する免許状に関する科目を24単位以上履修し、修士の学位を得ることにより、専修免許状が取得できる。(24単位の履修方法は科目区分・分野に関係なく任意に履修して可) ただし、科目設置以前の年度に修得した科目については、専修免許科目として申請することはできない。また、ゼミの重複履修分は換算できない。

なお、過年度の対象科目については過年度の研究科要項を参考のこと。

4. その他

免許状の申請は、本人が、自分の住所地又は教員採用学校所在地の授与権者(都道府県教育委員会)に対して行う。ただし、日本の大学(学部)を卒業しており、かつ3月の修了予定者に限り、大学がとりまとめて申請を代行(一括申請)し、学位授与当日に免許状を手渡せるようとりはかっている。

また、免許状授与証明書の請求は、授与権者に行うこと。

教職に関する科目 ※単位数等は巻末を参照のこと

[illegible]

2012年度設置科目
インストラクショナルデザイン特論
インストラクショナルデザイン論演習(1) A
インストラクショナルデザイン論演習(1) B
インストラクショナルデザイン論演習(2) A
インストラクショナルデザイン論演習(2) B
学習環境デザイン特論
(「情報」でのみ教職に関する科目の科目)
学習動機づけ特論
学習動機づけ論演習(1) A
学習動機づけ論演習(1) B
学習動機づけ論演習(2) A
学習動機づけ論演習(2) B
学校カウンセリング学演習(1) A
学校カウンセリング学演習(1) B
学校カウンセリング学演習(2) A
学校カウンセリング学演習(2) B
学校臨床心理学演習 A
学校臨床心理学演習 B
学校臨床心理学特論
学校臨床生徒指導学特論
教育開発特論
教育開発論演習(1) A
教育開発論演習(1) B
教育開発論演習(2) A
教育開発論演習(2) B
教育システム工学特論
教育実践学演習(1) A
教育実践学演習(1) B
教育実践学演習(2) A
教育実践学演習(2) B
教育集団心理学特論
教育情報工学演習(1) A
教育情報工学演習(1) B
教育情報工学演習(2) A
教育情報工学演習(2) B
教育情報工学特論
教育臨床査定特論
教師学特論
教授学習過程特論
情報メディア教育論演習(1) A
(「情報」でのみ「教職に関する科目」の科目)
情報メディア教育論演習(1) B
(「情報」でのみ「教職に関する科目」の科目)
情報メディア教育論演習(2) A
(「情報」でのみ「教職に関する科目」の科目)
情報メディア教育論演習(2) B
(「情報」でのみ「教職に関する科目」の科目)
情報メディア教育特論
特別支援教育特論
臨床認知発達学演習 A
臨床認知発達学演習 B
ワークショップデザイン特論
臨床心理学地域援助特論
教育心理学特論
行動療法特論
心理療法特論Ⅰ
臨床心理アセスメント学演習(1) A
臨床心理アセスメント学演習(1) B
臨床心理アセスメント学演習(2) A
臨床心理アセスメント学演習(2) B
臨床心理学特論Ⅲ
臨床認知発達学特論

社会専修免許 教科に関する科目

※単位数等は巻末を参照のこと

2013年度設置科目
アジア社会論ゼミ(1) A
アジア社会論ゼミ(1) B
アジア社会論ゼミ(2) A
アジア社会論ゼミ(2) B
アジア地域研究特論
移住論ゼミ(1) A
移住論ゼミ(1) B
移住論ゼミ(2) A
移住論ゼミ(2) B
移民研究特論
技術史・技術文化論ゼミ(1) A
技術史・技術文化論ゼミ(1) B
技術史・技術文化論ゼミ(2) A
技術史・技術文化論ゼミ(2) B
歴史考古学特論
水域環境学ゼミ(1) A
水域環境学ゼミ(1) B
水域環境学ゼミ(2) A
水域環境学ゼミ(2) B
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ(1) A
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ(1) B
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ(2) A
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ(2) B
政治思想史特論
ドイツ政治社会文化論ゼミ(1) A
ドイツ政治社会文化論ゼミ(1) B
ドイツ政治社会文化論ゼミ(2) A
ドイツ政治社会文化論ゼミ(2) B
日本物質文化論ゼミ(1) A
日本物質文化論ゼミ(1) B
日本物質文化論ゼミ(2) A
日本物質文化論ゼミ(2) B
人間環境変遷特論
表象文化論特論
表象文化論ゼミ(1) A
表象文化論ゼミ(1) B
表象文化論ゼミ(2) A
表象文化論ゼミ(2) B
文化生態学ゼミ(1) A
文化生態学ゼミ(1) B
文化生態学ゼミ(2) A
文化生態学ゼミ(2) B
歴史人類学特論
文化人類学の理論と方法
歴史学の理論と方法
考古学の理論と方法
開発援助実践学特論I
開発援助実践学特論II
科学史・科学論ゼミ(1) A
科学史・科学論ゼミ(1) B
科学史・科学論ゼミ(2) A
科学史・科学論ゼミ(2) B
科学史・科学論特論
家族社会学ゼミ(1) A

2012年度設置科目
アジア社会論演習(1) A
アジア社会論演習(1) B
アジア社会論演習(2) A
アジア社会論演習(2) B
アジア地域研究特論
移住論演習(1) A
移住論演習(1) B
移住論演習(2) A
移住論演習(2) B
移民研究特論
技術史・技術文化論演習(1) A
技術史・技術文化論演習(1) B
技術史・技術文化論演習(2) A
技術史・技術文化論演習(2) B
考古学特論
社会人類学演習(1) A
社会人類学演習(1) B
社会人類学演習(2) A
社会人類学演習(2) B
水域環境学演習(1) A
水域環境学演習(1) B
水域環境学演習(2) A
水域環境学演習(2) B
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1) A
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1) B
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(2) A
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(2) B
スペイン社会文化特論
生活文化史研究特論
ドイツ近代国民国家特論
ドイツ政治社会文化論演習(1) A
ドイツ政治社会文化論演習(1) B
ドイツ政治社会文化論演習(2) A
ドイツ政治社会文化論演習(2) B
日本物質文化論演習(1) A
日本物質文化論演習(1) B
日本物質文化論演習(2) A
日本物質文化論演習(2) B
人間環境変遷特論
フランス表象文化史研究特論
フランス表象文化論演習(1) A
フランス表象文化論演習(1) B
フランス表象文化論演習(2) A
フランス表象文化論演習(2) B
文化生態学演習(1) A
文化生態学演習(1) B
文化生態学演習(2) A
文化生態学演習(2) B
民族誌学特論
歴史人類学特論
開発援助実践学特論
科学史科学哲学演習(1) A
科学史科学哲学演習(1) B
科学史科学哲学演習(2) A
科学史科学哲学演習(2) B
科学史科学哲学特論
家族社会学演習(1) A

教科に関する科目

※単位数等は巻末を参照のこと

2013年度設置科目	
家族社会学ゼミ(1)	B
家族社会学ゼミ(2)	A
家族社会学ゼミ(2)	B
家族社会学特論	
環境社会学ゼミ(1)	A
環境社会学ゼミ(1)	B
環境社会学ゼミ(2)	A
環境社会学ゼミ(2)	B
環境社会学特論	
環境デザイン学特論	
建築環境学ゼミ(1)	A
建築環境学ゼミ(1)	B
建築環境学ゼミ(2)	A
建築環境学ゼミ(2)	B
建築環境学特論	
階級・階層論ゼミ(1)	A
階級・階層論ゼミ(1)	B
階級・階層論ゼミ(2)	A
階級・階層論ゼミ(2)	B
階級・階層論特論	
生態心理学ゼミ(1)	A
生態心理学ゼミ(1)	B
生態心理学ゼミ(2)	A
生態心理学ゼミ(2)	B
生態心理学特論	
地域資源特論	
地域資源論ゼミ(1)	A
地域資源論ゼミ(1)	B
地域資源論ゼミ(2)	A
地域資源論ゼミ(2)	B
都市社会学ゼミ(1)	A
都市社会学ゼミ(1)	B
都市社会学ゼミ(2)	A
都市社会学ゼミ(2)	B
都市社会学特論	
発達行動学ゼミ(1)	A
発達行動学ゼミ(1)	B
発達行動学ゼミ(2)	A
発達行動学ゼミ(2)	B
発達行動学特論	
社会学説特論	
社会的実践認知科学ゼミ(1)	A
社会的実践認知科学ゼミ(1)	B
社会的実践認知科学ゼミ(2)	A
社会的実践認知科学ゼミ(2)	B
社会文化心理学特論	

[illegible]

地歴専修免許 教科に関する科目

※単位数等は巻末を参照のこと

2013年度設置科目
アジア社会論ゼミ(1) A
アジア社会論ゼミ(1) B
アジア社会論ゼミ(2) A
アジア社会論ゼミ(2) B
アジア地域研究特論
移住論ゼミ(1) A
移住論ゼミ(1) B
移住論ゼミ(2) A
移住論ゼミ(2) B
移民研究特論
技術史・技術文化論ゼミ(1) A
技術史・技術文化論ゼミ(1) B
技術史・技術文化論ゼミ(2) A
技術史・技術文化論ゼミ(2) B
歴史考古学特論
水域環境学ゼミ(1) A
水域環境学ゼミ(1) B
水域環境学ゼミ(2) A
水域環境学ゼミ(2) B
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ(1) A
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ(1) B
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ(2) A
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ(2) B
政治思想史特論
ドイツ政治社会文化論ゼミ(1) A
ドイツ政治社会文化論ゼミ(1) B
ドイツ政治社会文化論ゼミ(2) A
ドイツ政治社会文化論ゼミ(2) B
日本物質文化論ゼミ(1) A
日本物質文化論ゼミ(1) B
日本物質文化論ゼミ(2) A
日本物質文化論ゼミ(2) B
人間環境変遷特論
表象文化論特論
表象文化論ゼミ(1) A
表象文化論ゼミ(1) B
表象文化論ゼミ(2) A
表象文化論ゼミ(2) B
文化生態学ゼミ(1) A
文化生態学ゼミ(1) B
文化生態学ゼミ(2) A
文化生態学ゼミ(2) B
歴史人類学特論
文化人類学の理論と方法
歴史学の理論と方法
考古学の理論と方法

2012年度設置科目
アジア社会論演習(1) A
アジア社会論演習(1) B
アジア社会論演習(2) A
アジア社会論演習(2) B
アジア地域研究特論
移住論演習(1) A
移住論演習(1) B
移住論演習(2) A
移住論演習(2) B
移民研究特論
技術史・技術文化論演習(1) A
技術史・技術文化論演習(1) B
技術史・技術文化論演習(2) A
技術史・技術文化論演習(2) B
考古学特論
社会人類学演習(1) A
社会人類学演習(1) B
社会人類学演習(2) A
社会人類学演習(2) B
水域環境学演習(1) A
水域環境学演習(1) B
水域環境学演習(2) A
水域環境学演習(2) B
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1) A
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1) B
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(2) A
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(2) B
スペイン社会文化特論
生活文化史研究特論
ドイツ近代国民国家特論
ドイツ政治社会文化論演習(1) A
ドイツ政治社会文化論演習(1) B
ドイツ政治社会文化論演習(2) A
ドイツ政治社会文化論演習(2) B
日本物質文化論演習(1) A
日本物質文化論演習(1) B
日本物質文化論演習(2) A
日本物質文化論演習(2) B
人間環境変遷特論
フランス表象文化史研究特論
フランス表象文化論演習(1) A
フランス表象文化論演習(1) B
フランス表象文化論演習(2) A
フランス表象文化論演習(2) B
文化生態学演習(1) A
文化生態学演習(1) B
文化生態学演習(2) A
文化生態学演習(2) B
民族誌学特論
歴史人類学特論

※単位数等は巻末を参照のこと

2013年度設置科目	2012年度設置科目
開発援助実践学特論Ⅰ	開発援助実践学特論
開発援助実践学特論Ⅱ	
科学史・科学論ゼミ(1) A	科学史科学哲学演習(1) A
科学史・科学論ゼミ(1) B	科学史科学哲学演習(1) B
科学史・科学論ゼミ(2) A	科学史科学哲学演習(2) A
科学史・科学論ゼミ(2) B	科学史科学哲学演習(2) B
科学史・科学論特論	科学史科学哲学特論
家族社会学ゼミ(1) A	家族社会学演習(1) A
家族社会学ゼミ(1) B	家族社会学演習(1) B
家族社会学ゼミ(2) A	家族社会学演習(2) A
家族社会学ゼミ(2) B	家族社会学演習(2) B
家族社会学特論	家族社会学特論
環境社会学ゼミ(1) A	環境社会学演習(1) A
環境社会学ゼミ(1) B	環境社会学演習(1) B
環境社会学ゼミ(2) A	環境社会学演習(2) A
環境社会学ゼミ(2) B	環境社会学演習(2) B
環境社会学特論	環境社会学特論
環境デザイン学特論	
環境心理・環境デザインゼミ(1) A	環境心理・環境デザイン演習(1) A
環境心理・環境デザインゼミ(1) B	環境心理・環境デザイン演習(1) B
環境心理・環境デザインゼミ(2) A	環境心理・環境デザイン演習(2) A
環境心理・環境デザインゼミ(2) B	環境心理・環境デザイン演習(2) B
感情心理学特論	感情心理学特論
感性心理学特論	感性心理学特論
感性認知科学ゼミ(1) A	感性認知科学演習(1) A
感性認知科学ゼミ(1) B	感性認知科学演習(1) B
感性認知科学ゼミ(2) A	感性認知科学演習(2) A
感性認知科学ゼミ(2) B	感性認知科学演習(2) B
建築環境学ゼミ(1) A	建築環境学演習(1) A
建築環境学ゼミ(1) B	建築環境学演習(1) B
建築環境学ゼミ(2) A	建築環境学演習(2) A
建築環境学ゼミ(2) B	建築環境学演習(2) B
建築環境学特論	建築環境学特論
階級・階層論ゼミ(1) A	産業職業社会学演習(1) A
階級・階層論ゼミ(1) B	産業職業社会学演習(1) B
階級・階層論ゼミ(2) A	産業職業社会学演習(2) A
階級・階層論ゼミ(2) B	産業職業社会学演習(2) B
階級・階層論特論	産業職業社会学特論
心理行動学ゼミ(1) A	心理行動学演習(1) A
心理行動学ゼミ(1) B	心理行動学演習(1) B
心理行動学ゼミ(2) A	心理行動学演習(2) A
心理行動学ゼミ(2) B	心理行動学演習(2) B
生態心理学ゼミ(1) A	生態心理学演習(1) A
生態心理学ゼミ(1) B	生態心理学演習(2) B
生態心理学ゼミ(2) A	生態心理学演習(2) A
生態心理学ゼミ(2) B	生態心理学演習(2) B
生態心理学特論	生態心理学特論
地域資源特論	地域資源特論
地域資源論ゼミ(1) A	地域資源論演習(1) A
地域資源論ゼミ(1) B	地域資源論演習(1) B
地域資源論ゼミ(2) A	地域資源論演習(2) A
地域資源論ゼミ(2) B	地域資源論演習(2) B
都市社会学ゼミ(1) A	都市社会学演習(1) A
都市社会学ゼミ(1) B	都市社会学演習(1) B
都市社会学ゼミ(2) A	都市社会学演習(2) A
都市社会学ゼミ(2) B	都市社会学演習(2) B
都市社会学特論	都市社会学特論
発達行動学ゼミ(1) A	発達行動学演習(1) A
発達行動学ゼミ(1) B	発達行動学演習(1) B
発達行動学ゼミ(2) A	発達行動学演習(2) A
発達行動学ゼミ(2) B	発達行動学演習(2) B
発達行動学特論	発達行動学特論
社会学説特論	
社会的実践認知科学ゼミ(1) A	
社会的実践認知科学ゼミ(1) B	
社会的実践認知科学ゼミ(2) A	
社会的実践認知科学ゼミ(2) B	
社会文化心理学特論	

福祉専修免許 教科に関する科目

2013年度設置科目
生活支援工学ゼミ(1) A
生活支援工学ゼミ(1) B
生活支援工学ゼミ(2) A
生活支援工学ゼミ(2) B
生活支援工学特論
児童家庭福祉特論
児童家庭福祉論ゼミ(1) A
児童家庭福祉論ゼミ(1) B
児童家庭福祉論ゼミ(2) A
児童家庭福祉論ゼミ(2) B
精神保健福祉特論
精神保健福祉論ゼミ(1) A
精神保健福祉論ゼミ(1) B
精神保健福祉論ゼミ(2) A
精神保健福祉論ゼミ(2) B
ソーシャルワーク特論
ソーシャルワーク論ゼミ(1) A
ソーシャルワーク論ゼミ(1) B
ソーシャルワーク論ゼミ(2) A
ソーシャルワーク論ゼミ(2) B
子どもの健康福祉学特論
子どもの健康福祉学ゼミ(1) A
子どもの健康福祉学ゼミ(1) B
子どもの健康福祉学ゼミ(2) A
子どもの健康福祉学ゼミ(2) B
老年社会福祉学ゼミ(1) A
老年社会福祉学ゼミ(1) B
老年社会福祉学ゼミ(2) A
老年社会福祉学ゼミ(2) B
老年社会福祉学特論
保健医療福祉文献検索評価法
福祉サービス支援評価法

※単位数等は巻末を参照のこと

2012年度設置科目
健康福祉管理特論
健康福祉管理論演習(1) A
健康福祉管理論演習(1) B
健康福祉管理論演習(2) A
健康福祉管理論演習(2) B
健康福祉支援工学演習(1) A
健康福祉支援工学演習(1) B
健康福祉支援工学演習(2) A
健康福祉支援工学演習(2) B
健康福祉支援工学特論
児童家庭福祉特論
児童家庭福祉論演習(1) A
児童家庭福祉論演習(1) B
児童家庭福祉論演習(2) A
児童家庭福祉論演習(2) B
社会保障政策特論
社会保障政策論演習(1) A
社会保障政策論演習(1) B
社会保障政策論演習(2) A
社会保障政策論演習(2) B
精神保健福祉特論
精神保健福祉論演習(1) A
精神保健福祉論演習(1) B
精神保健福祉論演習(2) A
精神保健福祉論演習(2) B
ソーシャルワーク特論
ソーシャルワーク論演習(1) A
ソーシャルワーク論演習(1) B
ソーシャルワーク論演習(2) A
ソーシャルワーク論演習(2) B
福祉教育特論
福祉教育論演習(1) A
福祉教育論演習(1) B
福祉教育論演習(2) A
福祉教育論演習(2) B
臨床死生学特論
老年社会福祉学演習(1) A
老年社会福祉学演習(1) B
老年社会福祉学演習(2) A
老年社会福祉学演習(2) B

情報専修免許 教科に関する科目

※単位数等は巻末を参照のこと

2013年度設置科目
インターネット科学ゼミ(1) A
インターネット科学ゼミ(1) B
インターネット科学ゼミ(2) A
インターネット科学ゼミ(2) B
インターネット科学特論
言語情報科学ゼミ(1) A
言語情報科学ゼミ(1) B
言語情報科学ゼミ(2) A
言語情報科学ゼミ(2) B
言語情報科学特論
情報コミュニケーション科学ゼミ(1) A
情報コミュニケーション科学ゼミ(1) B
情報コミュニケーション科学ゼミ(2) A
情報コミュニケーション科学ゼミ(2) B
情報処理心理学ゼミ(1) A
情報処理心理学ゼミ(1) B
情報処理心理学ゼミ(2) A
情報処理心理学ゼミ(2) B
情報処理心理学特論
知識情報科学ゼミ(1) A
知識情報科学ゼミ(1) B
知識情報科学ゼミ(2) A
知識情報科学ゼミ(2) B
知識情報科学特論
ネットワーク情報システム学ゼミ(1) A
ネットワーク情報システム学ゼミ(1) B
ネットワーク情報システム学ゼミ(2) A
ネットワーク情報システム学ゼミ(2) B
マルチメディア特論
メディアリテラシー特論
ヒューマンコンピュータインタラクション特論

2012年度設置科目
インターネット科学演習(1) A
インターネット科学演習(1) B
インターネット科学演習(2) A
インターネット科学演習(2) B
インターネット科学特論
感覚情報処理学演習(1) A
感覚情報処理学演習(1) B
感覚情報処理学演習(2) A
感覚情報処理学演習(2) B
感覚情報処理学特論
言語情報科学演習(1) A
言語情報科学演習(1) B
言語情報科学演習(2) A
言語情報科学演習(2) B
言語情報科学特論
情報コミュニケーション科学演習(1) A
情報コミュニケーション科学演習(1) B
情報コミュニケーション科学演習(2) A
情報コミュニケーション科学演習(2) B
情報コミュニケーション技術特論
情報処理心理学演習(1) A
情報処理心理学演習(1) B
情報処理心理学演習(2) A
情報処理心理学演習(2) B
情報処理心理学特論
ソフトウェア工学特論
知識情報科学演習(1) A
知識情報科学演習(1) B
知識情報科学演習(2) A
知識情報科学演習(2) B
知識情報科学特論
ネットワーク情報システム学演習(1) A
ネットワーク情報システム学演習(1) B
ネットワーク情報システム学演習(2) A
ネットワーク情報システム学演習(2) B
マルチメディア特論
学習環境デザイン論ゼミ(1) A
学習環境デザイン論ゼミ(1) B
学習環境デザイン論ゼミ(2) A
学習環境デザイン論ゼミ(2) B

ⅩⅢ 学費

1. 修士課程(2年制)

2013 年度入学者（臨床心理学領域）

（単位：円）

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境 整備費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
初年度	入学時	200,000	365,000	90,000	45,000	1,500	701,500
	秋学期	—	365,000	90,000	45,000	1,500	501,500
	計	200,000	730,000	180,000	90,000	3,000	1,203,000
二年度	春学期	—	368,000	90,000	45,000	1,500	504,500
	秋学期	—	368,000	90,000	45,000	1,500	504,500
	計	—	736,000	180,000	90,000	3,000	1,009,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

* 実験演習料・学生健康増進互助会費は改定されることがある。

2013 年度入学者（臨床心理学領域以外）

（単位：円）

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境 整備費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
初年度	入学時	200,000	365,000	90,000	35,000	1,500	691,500
	秋学期	—	365,000	90,000	35,000	1,500	491,500
	計	200,000	730,000	180,000	70,000	3,000	1,183,000
二年度	春学期	—	368,000	90,000	35,000	1,500	494,500
	秋学期	—	368,000	90,000	35,000	1,500	494,500
	計	—	736,000	180,000	70,000	3,000	989,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

* 実験演習料・学生健康増進互助会費は改定されることがある。

2012 年度入学者

（単位：円）

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境 整備費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
二年度	春学期	—	365,000	90,000	35,000	1,500	491,500
	秋学期	—	365,000	90,000	35,000	1,500	491,500
	計	—	730,000	180,000	70,000	3,000	983,000

2. 修士課程(1年制)

2013 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境 整備費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
初年度	入学時	200,000	456,500	90,000	35,000	1,500	783,000
	秋学期	—	456,500	90,000	35,000	1,500	583,000
	計	200,000	913,000	180,000	70,000	3,000	1,366,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

3. 博士後期課程

2013 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境 整備費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
初年度	入学時	200,000	302,000	55,000	35,000	1,500	593,500
	秋学期	—	302,000	55,000	35,000	1,500	393,500
	計	200,000	604,000	110,000	70,000	3,000	987,000
二年度	春学期	—	304,000	55,000	35,000	1,500	395,500
	秋学期	—	304,000	55,000	35,000	1,500	395,500
	計	—	608,000	110,000	70,000	3,000	791,000
三年度	春学期	—	306,000	55,000	35,000	1,500	397,500
	秋学期	—	306,000	55,000	35,000	1,500	397,500
	計	—	612,000	110,000	70,000	3,000	795,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

* 実験演習料・学生健康増進互助会費は改定されることがある。

2012 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境 整備費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
二年度	春学期	—	302,000	55,000	35,000	1,500	393,500
	秋学期	—	302,000	55,000	35,000	1,500	393,500
	計	—	604,000	110,000	70,000	3,000	787,000
三年度	春学期	—	304,000	55,000	35,000	1,500	395,500
	秋学期	—	304,000	55,000	35,000	1,500	395,500
	計	—	608,000	110,000	70,000	3,000	791,000

* 実験演習料・学生健康増進互助会費は改定されることがある。

2011 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	教育環境 整備費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
三年度	春学期	—	302,000	45,000	35,000	1,500	383,500
	秋学期	—	302,000	45,000	35,000	1,500	383,500
	計	—	604,000	90,000	70,000	3,000	767,000

4. 所定年限以上在学する学生(延長生)

所定年限以上在学する学生(延長生)の学費は、学期ごとに以下のように徴収する。

判定	授業料	教育環境整備費 (施設費)	実験演習料
研究指導のみ残っている	算出基準 の 50%	算出基準 の 50%	算出基準 と同額
修了に必要な単位数に対する不足単位数 はあるが研究指導は修了している			
修了に必要な単位数に対する不足単位数 が 14 単位以下で研究指導と授業科目を 履修する場合	算出基準 の 70%		
修了に必要な単位数に対する不足単位数 が 15 単位以上で研究指導と授業科目を 履修する場合	算出基準 の 100%		

※この場合の不足単位数とは、修了所要単位数と前学期終了時点での修了算入既得単位数との差を指す。

※研究指導が終わっているか否かは修士論文または博士論文が合格しているか否かで判断する。

※算出基準とは、当該学期の修士課程は2年生、博士後期課程は3年生の徴収額。

他に、学生健康増進互助会費も併せて徴収する。

※留学や休学の経験がある学生や、早稲田大学に学費を支払う種類の留学（在学）期間中の学費については、算出額が異なるので個別に問い合わせること。

※教育環境整備費・施設費は入学年度や過去の休留学の状況によって異なる。

※延長生になると、学費等口座振替日が春学期7月1日、秋学期12月1日となる。

振込用紙による学費等納入の場合、振込期限が春学期6月30日、秋学期11月30日となる。

5. 学費等未納による抹籍

学費等未納の場合は、以下の日程で自動的に抹籍（本学学生の身分を失う）となり、学費等が納入された学期末に遡って退学とみなす。この場合、学費等未納学期の在学年数および成績が無効となるので注意すること。また、抹籍日以降、抹籍の取消しは一切認められない。

なお、特別の事情により学費納入が遅れる場合は「学費延納願」を提出すること。提出のない場合は、各学期の終了日を以って抹籍となる。抹籍日以前に離籍を希望する場合は、「退学願」を提出のこと。

「学費等延納願」を提出した場合（2013年度学費例）

学費等未納学期	学費等口座振替日	自動的に抹籍となる日	遡って退学とみなす日
春学期	2013年 5月1日	2014年 1月10日	2013年3月31日
秋学期	2013年10月1日	2014年 7月 1日	2013年9月20日

「学費等延納願」を提出しない場合（2013年度学費例）

学費等未納学期	学費等口座振替日	自動的に抹籍となる日	遡って退学とみなす日
春学期	2013年 5月1日	2013年 9月20日	2013年3月31日
秋学期	2013年10月1日	2014年 3月31日	2013年9月20日

※口座振替日が金融機関休業日の場合、学費等口座振替日は翌営業日となる。

※振込用紙による学費等納入の場合の振込期限は、春学期4月15日、秋学期10月1日であり、振込期限が金融機関休業日の場合、翌営業日が振込期限となる。

※「学費等延納願」を提出しても、修了の要件を満たしながら学費未納のため修了を保留されている場合、自動的に抹籍となる日は異なるので個別に問い合わせること。また、学費の納入が確認出来ない状況では、修了証明書の発行・学位記の授与は出来ない。

XIV 学生生活等

1. 学籍番号

学生は各自学籍番号をもつ。

学籍番号は各自の氏名にも代わるほど重要なもので、間違わないように記憶しておく必要がある。

2013年4月に人間科学研究科の1年次に入学した者の学籍番号は次のとおりである。

3 8 1 3 C □ □ □ - □

a b c d e

a : 箇所コード (人間科学研究科)

b : 入学年度 (西暦下2桁)

c : 専攻コード : C-人間科学専攻

d : 個人番号

百の位は次の課程を示す

0~2: 修士課程 (2年制)、3: 修士課程 (1年制)、5: 博士後期課程、9: 科目等履修生

e : チェックデジット (CD)

(注) チェックデジットはコンピュータへ学籍番号を入力する際にのみ使用する数字で、正しく入力されたかどうかをプログラムでチェックするためのものである。科目登録や諸届に必要であるから一緒に記憶しておくこと。

2. 学生証 (身分証明書)

本大学の学生には入学と同時に学生証(身分証明書)を交付する。本学ではカード式の学生証を使用する。この学生証(カード)は、その身分を証明するために必要であるばかりでなく、学習上・事務手続き上のいろいろな場合に必要となるので常に携帯し、破損・紛失のないように注意しなければならない。

1) 学生証は、学生証 (カード) と有効年度を明示した「裏面シール」とからなり、学生証 (カード) の裏面に「裏面シール」を貼り合わせてから、効力が生じる。「裏面シール」は、毎年度末に所沢総合事務センターで交付するので、自分で貼り替えること。

なお、学生証は修了・退学など学生の身分がなくなる時点で所沢総合事務センターに返還しなければならない。

2) 学生証の交付を受けたら、速やかに学生証の裏面に「裏面シール」を貼り、学生証の氏名欄に、楷書で氏名を記入すること。

なお、漢字を持たない留学生は、裏面シールの氏名欄に印刷されているアルファベットと同じように、活字体で記入すること。

以下の場合、すみやかに所沢総合事務センターに届け出て（委任・郵送手続不可）、必要に応じて再発行の手続きをとること。再発行の際はカラー写真（縦4センチ×横3センチ）1枚が必要となる。

種別	再発行有無	料金
住所変更	裏面シールのみ加筆訂正 または再発行	
紛失・破損	再発行	2,000 円 ※
改姓(名)	再発行	無料
カード読込不能	再発行	無料
写真変更	再発行	無料(在学中1回に限る)

※同一年度内に1度を超えて再交付する場合は、別に定める手続きが必要

3. 各種証明書および学割証の発行

1) 証明書および学割証は、学生証および Waseda-net ID のパスワードにより自動証明書発行機（学内設置のどの機械からも発行可）で取得することができる。

なお、学割証は年間10枚まで発行する。有効期間は発行日より3カ月間である。特別の理由（ボランティア活動・部活の遠征試合等）により10枚以上の学割証が必要になった場合は、所沢総合事務センターに申し出ること。

2) 通学証明書を必要とする者は所沢総合事務センターにおいて所定の手続きを取り、その交付を受けること。

3) 各種証明書の料金は次のとおりである。

証明書種別一覧表

種 別	種 別
在 学 証 明 書	そ の 他 証 明 書
成 績 証 明 書	英文
卒 業（修了）見 込 証 明 書	在 学 証 明 書
卒 業（修了）証 明 書	成 績 証 明 書
成 績・卒 業 見 込 証 明 書	卒 業（修了）見 込 証 明 書
成 績・卒 業 証 明 書	卒 業（修了）証 明 書
退 学 証 明 書	そ の 他 証 明 書
在 学 期 間 証 明 書	〔証明書料金〕
学 位 取 得 証 明 書	在籍者 1通 200 円
教員免許状取得見込証明書	卒業者・退学者等 1通 300 円
教員免許状単位取得証明書	(ただし、卒業者がその卒業日の属する月末まで に申請する証明書料金は、1通 200 円とする。)
進 学 調 査 書	※健康診断証明書の料金は、1通 300 円で、 当該年度に大学の健康診断を受診した者に 限り発行する。
健 康 診 断 証 明 書 ※	

4. 諸願および諸届

学生諸君が勉学上の事故や身分その他に異動があった場合には、必ずその事項についての願または届を提出しなければならない。以下その手続き要領を説明する。

1) 所沢総合事務センターへの提出書類

種別	用紙名	添付書類
留学	留学願	留学先機関が発行する入学許可証 または受入書
休学	半期休学願	病気で休学する場合は診断書
復学	復学願	病気で休学した場合は診断書 (就学可能を証明するもの)
退学(任意退学)	退学願	学生証
* 指導教員の署名・捺印を受けた各願提出後、教授会の承認を得ることとなる。 * 修士課程在籍者は、教授会前に学生担当教務主任との面談を行う。 * 日本学生支援機構奨学金受給者は、異動願も合わせて提出すること。 * 学籍異動に伴い、奨学生の採用を取消し、奨学金の返還(一部または全額)を求めることがある。		
住所変更(本人)	Waseda-netポータルまたは学生 情報変更届	—
住所変更(保証人)	学生情報変更届 改姓(名)届 保証人等変更届	—
改姓(名)		戸籍抄本
学費支払者変更		—
保証人等変更		—

2) 諸願・諸届提出についての注意

(1) 留学願

留学しようとする者は、『留学の手引き』(留学センター発行)を参照のこと。
 なお、単位認定、在学年数等研究科における運用についての詳細は所沢総合事務センターに問い合わせること。

(2) 半期休学願

病気その他の正当な理由により、学期中引き続いて2カ月以上授業(試験を含む)に出席することができない者は、研究科手続きを経て休学することができる。休学中でも学費等は指定された期日までに納入しなければならない。

なお、休学中の学費等および期間等詳細については、所沢総合事務センターに問い合わせること。

(3) 復学願

留学・休学は復学が前提であるので、必ず研究科手続きを経て、復学許可を得なければならない。

なお、復学時期・復学後の学費等についての詳細は所沢総合事務センターに問い合わせること。

(4) 退学願(任意退学)

学年の途中で退学する場合でも、その学期の学費等を納めなければならない。納入していない場合は、退学扱いとはせず抹籍扱いとする。

5. 奨学金制度

本学の奨学金制度は、本学独自の大隈記念奨学金・小野梓記念奨学金・若手研究者養成奨学金などの学内奨学金をはじめ、日本学生支援機構・民間団体・地方公共団体の奨学金がある。

いずれの奨学金も、人物・学業成績が優秀でありながら、経済的理由により修学が困難な学生に給付または貸与することによって教育の機会均等を図るとともに、社会に貢献する人材の育成を目的としている。

これらの奨学金を受けるには、所沢総合事務センターで配付している「Challenge(奨学金情報大学院学生用)」を受け取り、これにしたがって必要な手続きを行うことになる。

なお、奨学金の登録時期は、新入生は3月から4月初旬頃、在学学生は2月から3月中旬頃であるので、それ以前に「Challenge(奨学金情報)大学院学生用」を受け取る必要がある。

6. 各種補助

(1) 複写代補助費

博士後期課程在学学生(助手・特別研究員DC採用者・休学者は除く)に対して、年間5,000円の補助を行っている。補助の対象は複写代(コピーカード配付)、学会参加費、学会年会費、論文投稿料で、受付時期については、その都度掲示で通知する。

(2) 国際会議論文発表補助費

博士後期課程の学生に対して、国際会議・シンポジウム等に参加し、研究論文等の発表を行う際に必要な経費(①登録料、②海外旅費)の一部を補助する。

(補助対象者)

博士後期課程に在学する学生(助手、特別研究員DC奨学金の交付を受けている者、休学者は除く)。ただし、海外留学による休学者は対象。

(補助の対象となる国際会議等)

二ヶ国間以上の参加者を対象とする、専門学会等が主催する国際会議・シンポジウム等。

(補助額および補助回数)

①国際会議論文発表登録料：55,000円を上限として登録料(学会参加費)の一部を補助する。学生1人に対する補助回数は年間1回(1学会)とする。(当該年度4月～3月・懇親会等は対象外)

②海外論文発表出張補助費：海外で行われる国際会議・シンポジウム等において研究論文の発表を行う場合、110,000円を上限として海外旅費の一部を補助する。原則として、学会開催の前日に開催地に到着し、学会終了当日に開催地を出発して、帰着に要するまでの期間を対象とし、それを越えた場合は補助されない場合がある。学生1人に対する補助回数は年間1回(1学会)とする。(当該年度4月～3月)

(申請手続)

「国際会議論文発表補助費交付申請書」に、申請者が研究論文等の発表を行うことが明記されている、国際会議・シンポジウム等のプログラム等および登録料が記載されているものと登録料の領収書等を添付し、所沢総合事務センターへ提出すること。

海外論文発表出張補助費も申請する場合は事前に「出張願」と会議名・開催日・会場名が記載されているプログラムの表紙等、航空賃見積書等を所沢総合事務センターへ提出し、後日、航空賃の領収書、航空券半券を提出すること。

海外論文発表出張補助費も申請する場合は事前に「出張願」と会議名・開催日・会場名が記載されているプログラムの表紙等、航空賃見積書等を所沢総合事務センターへ提出し、後日、航空賃の領収書、航空券半券を提出すること。

7. 所沢総合事務センター

人間科学研究科の研究科事務は、100号館4階にある所沢総合事務センターで扱っている。修学上の不明点、疑問点がある場合は、速やかに所沢総合事務センターで確認すること。

事務取扱時間は次の通り。

	授業実施期間	夏季・冬季休業期間	春季休業期間
月曜日～金曜日	9:00～17:00	9:00～12:30 13:30～17:00	9:00～12:30 13:30～17:00
土曜日	9:00～17:00	閉室	9:00～12:30
日曜・祝日 一斉休業期間 創立記念日	閉室 ※祝日等に授業を実施する場合は開室する		

※ 土曜日は限定した業務となる。

※ 大学が休日と定めている日は、終日閉室となる。

※ 休業期間は12:30から13:30は閉室となる。

※ 電話による問い合わせには、誤解が生じたり、伝達事項の確認が出来ない場合があるので、原則応じない。また、電子メール等での問い合わせについても、対応は原則事務取扱時間内とする。

8. 掲示等

1) 掲示

大学および研究科からの学生に対する伝達事項は、すべて掲示によることになっているから、登校の際必ず掲示板を確認すること。

掲示を見落とすと、思いがけない重大な結果を招くことがあるから十分注意すること。

掲示板は、教務に関する一切のこと、奨学金関係、大学および研究科からの伝達、その他事務所からの連絡などに使用する。

なお、本研究科の掲示板は、Dゾーン(所沢総合事務センター・図書館開放閲覧室横)に設置されている。

また、個別の連絡に際して、Waseda-netポータルのお知らせおよびメールを利用することがあるため、こまめに確認すること。

加えて、週に一度はメールの整理をし、容量オーバーで重要な伝達を受け取れないことがないようにすること。

同様に、所沢総合事務センター連絡Webページもこまめに確認すること。

所沢総合事務センター連絡Webページ <http://www.waseda.jp/tokorozawa/kg/index.html>

2) 緊急連絡の通知方法

早稲田大学では、台風や大地震による交通機関の不通やインフルエンザを含む法定伝染病の流行などに際して、全学休講などに関する緊急連絡をすることがある。早稲田大学のトップページのほか、トップページにアクセスが集中して閲覧しにくくなった場合に備え、以下のサイトでも同じ内容を知通知する。緊急時に大学からの連絡が確認できるよう、普段から以下のサイトにアクセスできることを確認するとともに、これらのサイトを各自のPC や携帯電話などの「お気に入り」に登録すること。

- ・早稲田大学トップページ

URL : <http://www.waseda.jp/>

- ・早稲田大学携帯向けお知らせページ（携帯からのアクセス可能）

URL : <http://m.waseda.jp/>

- ・早稲田大学緊急お知らせサイト（Yahoo!ブログ）（携帯からのアクセス可能）

URL : http://blogs.yahoo.co.jp/waseda_public/

- ・Waseda-net ポータルログイン前画面

URL : <https://www.wnp.waseda.jp/>

※上記4サイトは、スマートフォン向け早稲田大学公式アプリケーション『WASEDA Mobile』の「緊急お知らせ」機能からも閲覧が可能。

※『WASEDA Mobile』のインストール方法

- ・iOS版 : AppStore で「WASEDA Mobile」を検索し、ダウンロードする。

URL: <http://itunes.apple.com/jp/app/waseda-mobile/id548395130?mt=8>

- ・Android版 : Google Play で「WASEDA Mobile」を検索し、ダウンロードする。

URL: https://play.google.com/store/apps/details?id=com.blackboard.android.central.waseda_jp

その他

- ・所沢総合事務センター連絡Web ページ

URL : <http://www.waseda.jp/tokorozawa/kg/index.html>

- ・早稲田大学公式 Twitter アカウント

アカウント名 : @waseda_univ

9. 休講・授業欠席等の取り扱いについて

1) 休講の確認方法

①掲示板

②Waseda-net ポータル

waseda-net portal にログイン

→ メニュー左側の「授業」をクリック

→ 「授業」の項目を下にスクロールして「授業の休講」をクリック

2) 授業休講措置について

次の場合、授業の休講措置を取ることがある。

担当教員へ欠席の配慮を求めることが出来る場合があるが、最終的な判断は担当科目の教員が行う。

(1) 気象状況悪化

気象庁による気象警報のみに基づく授業の休講・試験の延期措置は行わない。

ただし、大雨、洪水、暴風、暴風雪、大雪等の気象状況および気象庁による気象警報をもとに、危険であると判断した場合は、次のとおり、授業の休講・試験の延期措置をとる。休講・延期となるのは、対象キャンパスにて実施されるすべての授業および試験となる。

1. 台風や大雪等、気象状況が時間の経過とともに悪化することが十分予測される場合は、前日に授業の休講・試験の延期措置の決定を行うことがある。その場合は、前日の午後7時まで決定の判断を行い、学生への周知は本学ホームページ等に前日の午後9時までに掲載して行う。
2. 授業の休講・試験の延期措置を決定する場合は、原則として、各時限の授業・試験開始 60分前までに決定し、本学ホームページ等で周知・広報する。ただし、できる限り授業・試験開始の2時間前までには周知できるよう努力する。
 - ※芸術学校・川口芸術学校は早稲田キャンパスに含める。
 - ※両高等学院およびエクステンションセンターは除く。

例外的な対応について

- ・オンデマンド授業について
休講の対象外とする。
- ・複数のキャンパスで同時に実施する授業について
複数のキャンパス（例：早稲田または西早稲田⇔本庄）で、遠隔会議システムを利用して実施する授業は、いずれかのキャンパスが休講となった場合は、原則休講とする。
ただし、各キャンパスでの受講者数に著しい差がある等の特殊な事情がある場合は、受講できない学生への十分な配慮を行うことを条件に、休講の対象外とすることができる。

例：早稲田で100名受講、本庄で10名受講している授業で、本庄が休講の場合。
→本庄での受講者への十分な配慮を行うことを条件に、早稲田のみで実施可。

学生は大学の決定した授業の休講・試験の延期措置に原則として従うこととするが、授業が実施されるキャンパスまでの交通経路内に気象庁による気象警報が発令され、気象状況等に鑑みて通学することが危険又は困難であると自身で判断し、通学を見合わせた場合は、所属研究科（所沢総合事務センターにて対応）による承認済みの欠席届をもって、該当科目の担当教員へ申し出ることにより、欠席の配慮を求めることができる。

(2) 大地震発生

大地震発生により、授業実施が困難であると判断した場合は、次のとおり、授業の休講・試験の延期措置をとる。休講・延期となるのは、対象キャンパスにて実施されるすべての授業および試験となる。

1. 授業の休講・試験の延期措置を決定した場合は、直ちに本学ホームページ等で周知・広報する。
2. 授業時間中の場合は、校内放送で迅速に周知する。

例外的な対応について

(1) 気象状況悪化と同様

学生は大学の決定した授業の休講・試験の延期措置に原則として従うこととするが、授業が実

施されるキャンパスまでの経路において、交通機関の乱れや通学することが危険又は困難であると自身で判断し、通学を見合わせた場合は、所属研究科（所沢総合事務センターにて対応）による承認済みの欠席届をもって、該当科目の担当教員へ申し出ることにより、欠席の配慮を求めることができる。

（３）大規模停電発生

電力需要量が供給量を大幅に上回り、予測不能な大規模停電が発生した際には、以下の通り授業を休講とし、復旧の翌日の１時限から授業を再開することとする。

- １．授業時間中（１～７時限）に大規模停電が発生した場合
状況が落ち着くまで教室に待機する。その後の授業は全て休講とする。
- ２．授業時間外に大規模停電が発生した場合
当日の授業は全て休講とする。

（４）首都圏交通機関のストライキ

所沢キャンパスは、１、２、３、５を適用し、早稲田・戸山・西早稲田（旧大久保）キャンパスの場合は、１、２、３、４を適用する。

- １．ＪＲ等交通機関のストライキが実施された場合（ゼネスト）
首都圏におけるＪＲのストライキが
Ａ 午前０時まで中止された場合、平常通り授業を行う。
Ｂ 午前８時まで中止された場合、授業は３時限目（午後１時）から行う。
Ｃ 午前８時まで中止の決定がない場合は、授業は終日休講とする。
上記は、ＪＲの順法闘争および私鉄のストには適用しない。
- ２．首都圏ＪＲの部分（拠点）ストライキが実施された場合
平常通り授業を行う。
- ３．首都圏ＪＲの全面時限ストライキが実施された場合
Ａ 午前８時までストライキが実施された場合、授業は３時限目（午後１時）から行う。
Ｂ 正午までストライキが実施された場合、６時限目（午後６時１５分）から授業を行う。
Ｃ 正午を越えてストライキが実施された場合、授業を終日休講とする。
- ４．私鉄、都市交通のみストライキが実施された場合
平常通り授業を行う。
- ５．① 西武鉄道新宿線または西武鉄道池袋線のどちらか一方でもストライキが実施された場合
② ①の西武鉄道両線のストライキが実施されない場合でも、西武バスのストライキが実施された場合次の通りとする。
Ａ 午前８時までストライキが実施された場合、授業は３時限目（午後１時）から行う。
Ｂ 午前８時を越えてストライキが実施された場合、授業を終日休講とする。

3) 授業欠席の取り扱いについて

人間科学研究科では授業を欠席した者に対する措置は定めていないが、以下の場合、該当科目の担当教員へ欠席の配慮を依頼することが出来る。ただし、最終的な判断は担当教員が行うので、その点理解の上、手続を行うこと。病気その他正当な理由による試験欠席の取扱いについては、所沢総合事務センターに問い合わせること。

(1) 忌引き

忌引きによる「授業欠席（オンデマンド授業における未受講を含む）」、「レポート未提出」、「試験未受験」について、成績評価において不利にならないよう「忌引きによる授業欠席等に関する取扱いのお願い」を所沢総合事務センターで発行し、科目の担当教員に配慮を依頼する。

忌引きの対象および日数

対象：1 親等（親、子）、2 親等（兄弟姉妹、祖父母、孫）および配偶者

日数：授業実施日連続7 日まで

※ただし、対象者が海外在住者の場合は、その日数については柔軟に対応する。

手続方法

- ① 欠席期間終了後10 日以内に、所沢総合事務センターに申し出て、「忌引きによる欠席届」を受け取る。（所沢総合事務センター連絡Web ページよりダウンロード可能）。
- ② 「忌引きによる欠席届」（記入済）および会葬礼状等を、すみやかに所沢総合事務センターに提出する。
※保証人が死去した場合は、保証人変更の手続きを行い、新しい保証人が署名・捺印をした上で提出すること。
- ③ 所沢総合事務センター発行の「忌引きによる授業欠席等に関する取扱いのお願い」を受け取る。
- ④ 「忌引きによる授業欠席等に関する取扱いのお願い」を持参し、科目担当の先生に欠席等に関する取扱いを申し出る。なおオンデマンド授業の場合は、科目設置箇所申し出ること。

(2) 学校において予防すべき感染症

「学校において予防すべき感染症」に分類される感染症（インフルエンザ等）に罹患した場合は、他者への感染防止のため、学校保健安全法により出席を停止する。出席停止期間は、所定の手続きを行うことで、科目の担当教員に配慮依頼をすることができる。

「学校において予防すべき感染症」および「出席停止期間の基準」については、早稲田大学保健センターホームページにて確認すること。

早稲田大学保健センター URL <http://www.waseda.jp/kenkou/center/HSC/index.html>

手続方法

- ① 「学校において予防すべき感染症」に罹患後、所沢総合事務センターに「診断日」「学籍番号」「氏名」「連絡先」「最終登校日」をまず連絡する。
- ② 治癒後に、診断を受けた医師に「学校における感染症治癒証明書」の記入を依頼する。
- ③ 記入済みの「学校における感染症治癒証明書」および「学校における感染症に関わる欠席届」（所沢総合事務センター連絡Web ページよりダウンロード可能）を所沢総合事務センターに

提出する。

- ④ 受付印の押された「学校における感染症に関わる欠席届」のコピーを一部受け取る。
- ⑤ 「学校における感染症に関わる欠席届」を必要枚数分コピーして、該当科目の担当教員にお渡しして、欠席等に関する取扱いを申し出る。なお、オンデマンド授業の場合は、科目設置個所に申し出ること。

(3) 裁判員制度

2009年5月より、裁判員制度が開始された。裁判員候補者に指名された場合、辞退が認められない限りは裁判員選任手続期日、審理・公判当日に、裁判所へ出頭する必要がある。

裁判所へ出頭するために、授業に出席できない、あるいは試験を受験できない場合は、その間の取り扱いについて、「選任手続期日のお知らせ（呼出状）」を持参して所沢総合事務センターで手続きを行うことで、科目の担当教員に配慮を依頼することが出来る。

手続方法

- ① 「裁判員制度に関わる欠席届」（所沢総合事務センター連絡WEB ページよりダウンロード可能）および「選任手続き期日のお知らせ（呼出状）」を所沢総合事務センターに提出する。
- ② 受付印の押された「裁判員制度に関わる欠席届」のコピーを一部受け取る。
- ③ 「裁判員制度に関わる欠席届」を必要枚数分コピーして、該当科目の担当教員にお渡しして、欠席等に関する取扱いを申し出る。なお、オンデマンド授業の場合は、科目設置箇所に申し出ること。

参考

対象となる者は、法律により学生であることを理由に、裁判員の辞退を申し出ることができる。

裁判員の参加する刑事裁判に関する法律（第十六条抜粋）

（辞退事由）

第十六条 次の各号のいずれかに該当する者は、裁判員となることについて辞退の申し立てをすることができる。

- 一 年齢七十年以上の者
- 二 地方公共団体の議会の議員（会期中の者に限る。）
- 三 学校教育法第一条、第二百二十四条又は第百三十四条の学校の学生又は生徒（常時通学を要する課程に在学する者に限る。）

10. 自動車・オートバイ・自転車の駐車場・駐輪場の利用について

所沢キャンパス内は、安全を確保するために、やむを得ない事情のない限り自動車・オートバイ（原付二輪車）・自転車の乗り入れはできない。

ただし、事情により自動車で通学する場合には、所沢総合事務センターにて春学期および秋学期の受付期間内に手続き書類等を提出し、駐車場の利用許可（駐車許可証の交付）を得なければならない。なお、学部1年生は、自動車での通学を許可しない。また、事情によりオートバイ（原付二輪車）・自転車で通学する場合については手続き不要とするが、南門駐輪指定場所の利用を希望する場合のみ利用許可（登録ステッカーの交付）を得なければならない。

自動車・オートバイ（原付二輪車）・自転車で通学にあたっては、交通の安全、災害・騒音の防止

等をはかり、教育環境の保持に努めなければならない。

1) 事情により自動車で通学する場合

(1) 駐車許可証の交付を受けるには、次の書類等を所沢総合事務センターに提出しなければならない。

- ① 駐車許可申請書（所沢総合事務センターに備付）
- ② 学生証
- ③ 前年度分駐車許可証（前年度からの継続利用者のみ必要）
- ④ 駐車場利用料金（年額5,000円）

※ 駐車場利用料金については、年度途中からの申請でも同一額とする。

(2) 駐車許可証の有効期間は、交付を受けた年度（1年間）限りとする。次年度も利用する場合には、新規の申請時と同様の手続が必要である。

(3) 駐車許可申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、駐車許可申請書により変更事項をすみやかに所沢総合事務センターに届け出ること。

(4) 駐車許可証を他人に貸与し、または他人から借用してはならない。

2) 事情によりオートバイ（原付二輪車）で通学する場合

(1) 各個人で盗難や路上放置のないよう施錠管理しなければならない。

なお、卒業等の理由でオートバイ（原付二輪車）での通学が不要になった場合は、必ず自宅に持ち帰って所属する自治体のルールに則って処分すること。

(2) フロンティア・リサーチセンターに所属する博士後期課程の学生で南門駐輪指定場所の利用を希望する場合、南門専用登録ステッカーの交付を受けるには、次の書類を所沢総合事務センターに提出しなければならない。ただし、状況により許可が下りない場合がある。

- ① 学生証
- ② 南門駐輪許可申請書（所沢総合事務センターに備付）

(3) 南門専用登録ステッカーの有効期限は、交付を受けた年度（1年間）限りとする。

ただし、登録申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センターに届け出なければならない。

3) 事情により自転車で通学する場合

各個人で盗難や路上放置のないよう施錠管理しなければならない。

なお、卒業等の理由で自転車で通学が不要になった場合は、必ず自宅に持ち帰って所属する自治体のルールに則って処分すること。

4) 駐車・駐輪

(1) 自動車・オートバイ（原付二輪車）・自転車は、それぞれ指定された場所に駐車・駐輪しなければならない。指定された場所以外の駐車・駐輪は厳禁とする。

- ① 自動車 北門駐車場
- ② オートバイ（原付二輪車） . . . 北門駐車場のオートバイ駐輪指定場所
- ③ 自転車 正門または北門駐車場の自転車駐輪指定場所

ただし、フロンティア・リサーチセンターに所属する学生は、B地区の駐車場・駐輪場を利用することができる。また、フロンティア・リサーチセンターに所属する博士後期課程の学生で許可を得た場合は、南門駐輪指定場所を利用することができる。

- (2) 自動車には駐車許可証をフロントガラスに表を向けて置くこと。オートバイ（原付二輪車）・自転車については、南門駐輪指定場所の利用許可が下りた場合のみ南門専用登録ステッカーをナンバープレート付近に貼っておくこと。
- (3) 正門駐輪場の利用時間は、8:00から22:00（日・祝は21:30）までとする。（この時間帯以外は閉門となる。）

5) 注意事項

- (1) 登録した自動車・オートバイ（原付二輪車）以外の駐車・駐輪は厳禁する。
- (2) 大学・大学院等の行事、施設・設備の工事等により、駐車場・駐輪指定場所の使用制限をすることがある。
- (3) 駐車場・駐輪場内では徐行し、所定の区分に従って、整然と駐車・駐輪すること。
- (4) 駐車場・駐輪場以外の駐車・駐輪は、通行の妨げや災害時等の避難の妨げになるので厳禁する。
- (5) 駐車場・駐輪場内に長期間放置されている場合、駐車場・駐輪場以外に駐車・駐輪している場合については、貼り紙で注意喚起の後で処分する場合がある。
- (6) キャンパス内、駐車場・駐輪指定場所での人為的事故、損傷等は、当事者間で解決すること。また、駐車・駐輪中の事故、災害、盗難等には、大学は一切責任を負わないので、各自十分に注意すること。（警察が指導する「防犯登録」は必ずしておくこと。）
- (7) 上記の事項に違反した場合、または大学の警告に従わない場合は、駐車場・駐輪指定場所の利用許可を取り消すことがある。

1 1. 早稲田大学保健センター所沢分室

学生食堂近くの100号館308号室にあり、次の業務を行っている。

内線 3308、緊急内線 3000、DI:04-2947-6706、Fax:04-2947-6804

業務内容

- (1) 学生・教職員の定期健康診断、特殊健康診断
- (2) 各種健康診断書の発行（ただし、定期健康診断を受診した者に限る。）
- (3) 健康相談
- (4) スポーツ障害相談、リハビリ相談
- (5) 内科相談
- (6) 精神保健相談、心理相談相談
- ※心療内科医および心理専門相談員による相談は、予約制
- (7) 保健統計、健康管理に関する調査研究
- (8) 健康教育

1 2. 早稲田大学学生健康増進互助会(学生早健会)

学生早健会（1964年設立）は、会員（学生）から納入された会費によって、会員の健康の維持・増進を図るための活動や医療費給付・健康診断補助費給付などの事業を行う早稲田大学独自の互助会組織である。国民健康保険、健康保険組合などの国が定める公的な保険組合ではない。

会員資格や医療給付（会員が日本国内の病院で支払った総医療費の3割（保険診療に基づく自己負担額）の一部を請求に基づき給付。年間限度額は6万円）の詳細については、「早稲田大学学生健康増進互助会案内」（所沢総合事務センター横配付物スペースで配布）を参照のこと。〈学生生活課ホームページ〉

ージ内) 早稲田大学学生健康増進互助会

<http://www.waseda.jp/student/hoken/gojyokai/>

13. 早稲田大学学生補償制度(傷害補償)

学生が教育研究活動中に不慮の事故により負傷、後遺障害、あるいは死亡といった災害を被った場合に、治療費等の経済的負担を軽減することを目的とした、補償制度であり、保険ではない。

学校施設外での正課・学校行事中および課外活動中の補償については、「学校施設外活動届」(教職員用)・「合宿・遠征(課外活動)届」(学生サークル届出 団体用)を休業日を除く活動開始日の7日前(土・日・祝日・一斉休業を除く)(厳守)までに提出する必要があるので注意すること。

なお、補償の内容、手続の流れ等の詳細については、ホームページを確認すること。

〈学生生活課ホームページ内) 早稲田大学学生補償制度(傷害補償)

<http://www.waseda.jp/student/hoken/gakushouho/>

X V 所沢図書館および中央図書館の利用について

はじめに

所沢図書館は、人間科学、スポーツ科学に関連する専門書や学習書、学術雑誌を中心に、一般教養に資する図書、雑誌等も収蔵している。なお早稲田大学図書館では、近年、外国雑誌を中心に電子資料やデータベースの充実を図っており、全学的に学内ネットワークからアクセスできるようになっているが、所沢キャンパスの研究分野に関連するものとしては、PsycINFO、PsycARTICLES、SPORTDiscus、医中誌Web、メディカルオンラインなどがある。

所沢図書館は、100号館の4階、キャンパスのほぼ中央に位置し、中庭に面して「コ」の字形に配されている。館内は、開架図書エリア、雑誌バックナンバー書庫、新刊雑誌コーナー等の資料収蔵施設と、閲覧席、教職員・大学院学生を対象とした閲覧個室、グループ学習ができるグループ閲覧室といった閲覧用の施設からなっている。

詳細は所沢図書館ホームページ (<http://www.wul.waseda.ac.jp/TOKOROZAWA/index.html>)を参照のこと。

利用について

1. 開館時間(通常期間)
平 日 9:00～21:00
土曜日 9:00～18:00
夏・冬季休業中の開館については、別途広報する。
2. 休館日
日曜日、祝日(授業実施日を除く)、休業日、夏・冬季休業期間の一定期間
そのほか、業務上休館の必要がある場合
3. 利用者カード
(1) 図書館の入館および図書の貸出には、学生証を利用者カードとして使用する。
(2) 学生証は、本人以外は使用できない。
4. 入退館
(1) 入館するときは、学生証を入館装置にスキャンさせて入館する。
(2) 退館ゲートには、BDS(図書不正持出防止装置)が設置されている。
図書を館外に帯出する時は、必ずカウンターで貸出手続きをすること。
5. 資料の探し方
(1) 図書は、日本十進分類法(NDC)によって分類され、配架されている。(ただし、織田文庫を除く)
(2) 早稲田大学図書館の所蔵資料はすべて蔵書検索「WINE」 (<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>)で検索することができる。
6. 貸出・返却(早稲田大学図書館ホームページ「共通貸出規則」参照)
(1) 貸出・返却時は、カウンターで手続きをすること。なお、開館時間外の返却には、専用のブックポストが利用できる。また、中央図書館、キャンパス図書館(高田・戸山・理工学)、早稲田キャンパス内学生読書室でも返却することができる。
(2) 貸出は30冊まで、貸出期間は30日とする。

- (3) 参考図書および雑誌等は、館外貸し出しはできない。
- (4) 返却期限日を過ぎても返却しない場合には、反則規定が適用される。
- (5) 借用図書は大切に扱うこと。図書を紛失したり、汚損・破損したときには、ただちに届け出ること。原則として現物または相当金額を弁償することになる。
- (6) 館内で閲覧した貸出手続をしていない図書は、書棚の元の位置に戻すか、返却台に置くこと。

7. 利用上の注意

- (1) 館内では他人に迷惑をかけないよう、雑談などは慎むこと。(開放閲覧室・グループ閲覧室を除く)
- (2) 館内では貴重品などは常に携帯し、紛失や盗難に気をつけること。
- (3) ペットボトル・水筒など密閉できる飲料の持ち込みは一部閲覧席に限り認める。ただしそれ以外の飲食物の持ち込みは厳禁。
- (4) 入館の際は携帯電話のスイッチを切るか、マナーモードに設定すること。館内は通話不可。

8. 施設の利用

- (1) 開放閲覧室(32席)
エントランスホールから入るとすぐに開放閲覧室があり、ここは図書館の開館時間外も利用できる。
無線LANと情報コンセントの利用ができる。
- (2) 新聞閲覧コーナー
継続購入をしている新聞は18紙で、原則として前月分までを保管している。
- (3) AV室
図書館所蔵のビデオ・DVD等を、AV室の機器で利用できる。複製や館外貸出は不可。
- (4) 情報検索室
WINE検索用端末機3台、認証端末機6台およびCD-ROM専用端末機、マイクローダー・プリンター等が利用できる。
- (5) カウンター
入・退館ゲート脇に貸出返却カウンターと、資料に関する問い合わせを受け付けるレファレンスカウンターがある。書庫へのアプローチには新着図書コーナー、新刊一般雑誌コーナーおよび新書・文庫コーナーを置いている。
- (6) グループ閲覧室(12席／2室)
グループでの学習および研究等を行うときに利用できる。
- (7) コピーコーナー
プリペイドカード式複写機が、コピーコーナー、新刊学術雑誌コーナー、情報検索室に設置されている。図書館所蔵資料のコピーに限り利用できる。コピーカードは学内図書館共通。
- (8) 参考図書コーナー
辞書、事典、便覧、ハンドブック、地図等の参考図書が配架されている。
- (9) 閲覧席(202席)
和書が配架されている開架書架をはさんで、南側と北側に閲覧席がある。電源のある閲覧席では持ち込みPCも利用できる。無線LANも利用できる。
- (10) 新刊学術雑誌コーナー
新刊学術雑誌コーナー、コピーコーナー、検索コーナー、閲覧個室等で構成されている。
- (11) バックナンバー書庫
合冊製本された雑誌が、和雑誌は誌名の五十音順、外国雑誌は誌名のアルファベット順に電動書

架に配架されている。

(12) 洋書コーナー

洋書は、バックナンバー書庫手前の電動書架に配架されている。

中央図書館およびキャンパス図書館等の利用について

早稲田大学創立100周年記念事業の一環として計画され建設された中央図書館は、蔵書数・座席数ともに大学図書館としては日本有数の設備規模である。また、学内の各キャンパスには、高田早苗記念研究図書館、戸山図書館、理工学図書館があり、それぞれ特色ある資料を収集し、利用に供している。

所沢図書館は、キャンパス図書館の一つとして位置づけられ、上記の各図書館と連携してサービスの拡充に努めている。WINEで各館の蔵書検索が可能であり、図書や文献複写の取り寄せもできる。また、中央図書館、各キャンパス図書館へ直接出向いて利用することもできる。各学部の学生読書室の利用もこれに準じる。

詳細は早稲田大学図書館ホームページ (<http://www.wul.waseda.ac.jp/index-j.html>) を参照のこと。

【研究指導（修士）】

地域・地球環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
81	環境管理計画学研究指導 A	天野 正博	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
81	環境管理計画学研究指導 B	天野 正博	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
81	水域環境学研究指導 A	井内 美郎	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
81	水域環境学研究指導 B	井内 美郎	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
81	生物圏生態学研究指導 A	太田 俊二	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
81	生物圏生態学研究指導 B	太田 俊二	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
81	大気環境科学研究指導 A	松本 淳	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
81	大気環境科学研究指導 B	松本 淳	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
82	動物行動生態学研究指導 A	三浦 慎悟	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
82	動物行動生態学研究指導 B	三浦 慎悟	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

文化・社会環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
82	アジア社会論研究指導 A	店田 廣文	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
82	アジア社会論研究指導 B	店田 廣文	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
82	家族社会学研究指導 A	池岡 義孝	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
82	家族社会学研究指導 B	池岡 義孝	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
82	環境社会学研究指導 A	鳥越 皓之	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
82	環境社会学研究指導 B	鳥越 皓之	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
83	地域資源論研究指導 A	柏 雅之	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
83	地域資源論研究指導 B	柏 雅之	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
83	都市社会学研究指導 A	臼井 恒夫	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
83	都市社会学研究指導 B	臼井 恒夫	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
	人口社会学研究指導 A	(今年度休講)						
	人口社会学研究指導 B	(今年度休講)						
	階級・階層論研究指導 A	(今年度休講)						
	階級・階層論研究指導 B	(今年度休講)						
83	移住論研究指導 A	森本 豊富	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
83	移住論研究指導 B	森本 豊富	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
83	科学史・科学論研究指導 A	加藤 茂生	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
83	科学史・科学論研究指導 B	加藤 茂生	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
83	技術文化論研究指導 A	余語 琢磨	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
83	技術文化論研究指導 B	余語 琢磨	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
84	社会人類学研究指導 A	矢野 敬生	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
84	社会人類学研究指導 B	矢野 敬生	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
84	政治社会文化論研究指導 A	村上 公子	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
84	政治社会文化論研究指導 B	村上 公子	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
84	地域文化論研究指導 A	竹中 宏子	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
84	地域文化論研究指導 B	竹中 宏子	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
84	物質文化論研究指導 A	谷川 章雄	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
84	物質文化論研究指導 B	谷川 章雄	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
85	表象文化論研究指導 A	中村 要	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
85	表象文化論研究指導 B	中村 要	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
85	文化生態学研究指導 A	蔵持 不三也	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
85	文化生態学研究指導 B	蔵持 不三也	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

人間行動・環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
85	環境心理・環境デザイン研究指導 A	佐藤 将之	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
85	環境心理・環境デザイン研究指導 B	佐藤 将之	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
85	建築環境学研究指導 A	小島 隆矢	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
85	建築環境学研究指導 B	小島 隆矢	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
85	建築計画学研究指導 A	佐野 友紀	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
85	建築計画学研究指導 B	佐野 友紀	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
86	発達行動学研究指導 A	根ヶ山 光一	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
86	発達行動学研究指導 B	根ヶ山 光一	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
	発達動機づけ論研究指導 A	(今年度休講)						
	発達動機づけ論研究指導 B	(今年度休講)						

健康・生命医科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
86	運動制御・バイオメカニクス研究指導 A	鈴木 秀次	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
86	運動制御・バイオメカニクス研究指導 B	鈴木 秀次	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
86	応用健康科学研究指導 A	竹中 晃二	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
86	応用健康科学研究指導 B	竹中 晃二	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
86	基礎老化学研究指導 A	千葉 卓哉	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
86	基礎老化学研究指導 B	千葉 卓哉	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
86	神経内分泌学研究指導 A	山内 兄人	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
86	神経内分泌学研究指導 B	山内 兄人	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
87	生体機能学研究指導 A	今泉 和彦	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
87	生体機能学研究指導 B	今泉 和彦	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
87	統合生理学研究指導 A	永島 計	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
87	統合生理学研究指導 B	永島 計	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
87	分子神経科学研究指導 A	榊原 伸一	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
87	分子神経科学研究指導 B	榊原 伸一	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

健康福祉科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
87	医療人類学研究指導 A	辻内 琢也	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
87	医療人類学研究指導 B	辻内 琢也	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
87	緩和医療学・臨床死生学研究指導 A	小野 充一	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
87	緩和医療学・臨床死生学研究指導 B	小野 充一	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
88	健康管理医学研究指導 A	河手 典彦	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
88	健康管理医学研究指導 B	河手 典彦	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
88	社会医学研究指導 A	扇原 淳	春学期	火	1時限	所沢	1年以上	－
88	社会医学研究指導 B	扇原 淳	秋学期	火	1時限	所沢	1年以上	－
88	バイオエシックス研究指導 A	土田 友章	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
88	バイオエシックス研究指導 B	土田 友章	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
88	予防医学研究指導 A	町田 和彦	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
88	予防医学研究指導 B	町田 和彦	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
89	生活支援工学研究指導 A	畠山 卓朗	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
89	生活支援工学研究指導 B	畠山 卓朗	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
89	福祉産業学研究指導 A	可部 明克	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
89	福祉産業学研究指導 B	可部 明克	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
89	リハビリテーション科学研究指導 A	村岡 慶裕	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
89	リハビリテーション科学研究指導 B	村岡 慶裕	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
89	児童家庭福祉論研究指導 A	川名 はつ子	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
89	児童家庭福祉論研究指導 B	川名 はつ子	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
90	社会保障政策論研究指導 A	植村 尚史	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
90	社会保障政策論研究指導 B	植村 尚史	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
90	スポーツ健康マネジメント論研究指導 A	吉村 正	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
90	スポーツ健康マネジメント論研究指導 B	吉村 正	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
90	精神保健福祉論研究指導 A	田中 英樹	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
90	精神保健福祉論研究指導 B	田中 英樹	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
90	ソーシャルワーク論研究指導 A	岩崎 香	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
90	ソーシャルワーク論研究指導 B	岩崎 香	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
91	子どもの健康福祉学研究指導 A	前橋 明	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
91	子どもの健康福祉学研究指導 B	前橋 明	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
91	老年社会福祉学研究指導 A	加瀬 裕子	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
91	老年社会福祉学研究指導 B	加瀬 裕子	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—

臨床心理学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
91	学校カウンセリング学研究指導 A	菅野 純	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
91	学校カウンセリング学研究指導 B	菅野 純	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
91	行動臨床心理学研究指導 A	嶋田 洋徳	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
91	行動臨床心理学研究指導 B	嶋田 洋徳	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
92	医療心理学・職場メンタルヘルス学研究指導 A	鈴木 伸一	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
92	医療心理学・職場メンタルヘルス学研究指導 B	鈴木 伸一	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
92	心身医学研究指導 A	野村 忍	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
92	心身医学研究指導 B	野村 忍	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
92	認知行動カウンセリング学研究指導 A	根建 金男	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
92	認知行動カウンセリング学研究指導 B	根建 金男	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
92	行動医学研究指導 A	熊野 宏昭	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
92	行動医学研究指導 B	熊野 宏昭	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—

感性認知情報システム研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
92	安全人間工学研究指導 A	石田 敏郎	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
92	安全人間工学研究指導 B	石田 敏郎	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
93	生体情報工学研究指導 A	百瀬 桂子	春学期	無	フルオンデマンド	所沢	1年以上	—
93	生体情報工学研究指導 B	百瀬 桂子	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
93	感性認知科学研究指導 A	齋藤 美穂	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
93	感性認知科学研究指導 B	齋藤 美穂	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
93	言語情報科学研究指導 A	菊池 英明	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
93	言語情報科学研究指導 B	菊池 英明	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
94	社会的実践認知科学研究指導 A	宮崎 清孝	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
94	社会的実践認知科学研究指導 B	宮崎 清孝	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
94	情報処理心理学研究指導 A	中島 義明	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
94	情報処理心理学研究指導 B	中島 義明	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
94	心理行動学研究指導 A	鈴木 晶夫	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
94	心理行動学研究指導 B	鈴木 晶夫	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
95	生態心理学研究指導 A	三嶋 博之	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
95	生態心理学研究指導 B	三嶋 博之	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
	生活人間工学研究指導 A	(今年度休講)						
	生活人間工学研究指導 B	(今年度休講)						
95	知識情報科学研究指導 A	松居 辰則	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
95	知識情報科学研究指導 B	松居 辰則	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
95	人間生体機能動態学研究指導 A	宮崎 正己	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
95	人間生体機能動態学研究指導 B	宮崎 正己	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
95	福祉工学研究指導 A	藤本 浩志	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
95	福祉工学研究指導 B	藤本 浩志	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—

教育コミュニケーション情報科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
95	インストラクショナルデザイン論研究指導 A	向後 千春	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
95	インストラクショナルデザイン論研究指導 B	向後 千春	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
96	インターネット科学研究指導 A	西村 昭治	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
96	インターネット科学研究指導 B	西村 昭治	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
96	学習環境デザイン論研究指導 A	尾澤 重知	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
96	学習環境デザイン論研究指導 B	尾澤 重知	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
96	教育開発論研究指導 A	野嶋 栄一郎	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
96	教育開発論研究指導 B	野嶋 栄一郎	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
96	教育コミュニケーション学研究指導 A	保崎 則雄	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
96	教育コミュニケーション学研究指導 B	保崎 則雄	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
96	教育実践学研究指導 A	浅田 匡	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
96	教育実践学研究指導 B	浅田 匡	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
97	教育情報工学研究指導 A	永岡 慶三	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
97	教育情報工学研究指導 B	永岡 慶三	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
97	情報コミュニケーション科学研究指導 A	金子 孝夫	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
97	情報コミュニケーション科学研究指導 B	金子 孝夫	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
97	情報コミュニケーション技術論研究指導 A	スコット ダグラス	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
97	情報コミュニケーション技術論研究指導 B	スコット ダグラス	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
97	情報メディア教育論研究指導 A	森田 裕介	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
97	情報メディア教育論研究指導 B	森田 裕介	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—
98	ネットワーク情報システム学研究指導 A	金 群	春学期	無	その他	所沢	1年以上	—
98	ネットワーク情報システム学研究指導 B	金 群	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	—

【専門ゼミ】

地域・地球環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
99	環境管理計画学ゼミ（１）Ａ	天野 正博	春学期	土	2時限	所沢	1年以上	2
99	環境管理計画学ゼミ（１）Ｂ	天野 正博	秋学期	土	2時限	所沢	1年以上	2
100	環境管理計画学ゼミ（２）Ａ	天野 正博	春学期	土	3時限	所沢	1年以上	2
100	環境管理計画学ゼミ（２）Ｂ	天野 正博	秋学期	土	3時限	所沢	1年以上	2
101	水域環境学ゼミ（１）Ａ	井内 美郎	春学期	火	1時限	所沢	1年以上	2
101	水域環境学ゼミ（１）Ｂ	井内 美郎	秋学期	火	1時限	所沢	1年以上	2
102	水域環境学ゼミ（２）Ａ	井内 美郎	春学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
102	水域環境学ゼミ（２）Ｂ	井内 美郎	秋学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
103	生物圏生態学ゼミ（１）Ａ	太田 俊二	春学期	火	1時限	所沢	1年以上	2
103	生物圏生態学ゼミ（１）Ｂ	太田 俊二	秋学期	火	1時限	所沢	1年以上	2
104	生物圏生態学ゼミ（２）Ａ	太田 俊二	春学期	火	3時限	所沢	1年以上	2
104	生物圏生態学ゼミ（２）Ｂ	太田 俊二	秋学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
105	大気環境科学ゼミ（１）Ａ	松本 淳	春学期	金	1時限	所沢	1年以上	2
105	大気環境科学ゼミ（１）Ｂ	松本 淳	秋学期	金	1時限	所沢	1年以上	2
106	大気環境科学ゼミ（２）Ａ	松本 淳	春学期	金	2時限	所沢	1年以上	2
106	大気環境科学ゼミ（２）Ｂ	松本 淳	秋学期	金	2時限	所沢	1年以上	2
107	動物行動生態学ゼミ（１）Ａ	三浦 慎悟	春学期	金	1時限	所沢	1年以上	2
107	動物行動生態学ゼミ（１）Ｂ	三浦 慎悟	秋学期	金	1時限	所沢	1年以上	2
108	動物行動生態学ゼミ（２）Ａ	三浦 慎悟	春学期	金	2時限	所沢	1年以上	2
108	動物行動生態学ゼミ（２）Ｂ	三浦 慎悟	秋学期	金	2時限	所沢	1年以上	2

文化・社会環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
109	アジア社会論ゼミ（１）Ａ	店田 廣文	春学期	金	3時限	所沢	1年以上	2
109	アジア社会論ゼミ（１）Ｂ	店田 廣文	秋学期	金	3時限	所沢	1年以上	2
110	アジア社会論ゼミ（２）Ａ	店田 廣文	春学期	金	4時限	所沢	1年以上	2
110	アジア社会論ゼミ（２）Ｂ	店田 廣文	秋学期	金	4時限	所沢	1年以上	2
111	家族社会学ゼミ（１）Ａ	池岡 義孝	春学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
111	家族社会学ゼミ（１）Ｂ	池岡 義孝	秋学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
112	家族社会学ゼミ（２）Ａ	池岡 義孝	春学期	火	6時限	所沢	1年以上	2
112	家族社会学ゼミ（２）Ｂ	池岡 義孝	秋学期	火	6時限	所沢	1年以上	2
113	環境社会学ゼミ（１）Ａ	鳥越 皓之	春学期	金	3時限	所沢	1年以上	2
113	環境社会学ゼミ（１）Ｂ	鳥越 皓之	秋学期	金	3時限	所沢	1年以上	2
114	環境社会学ゼミ（２）Ａ	鳥越 皓之	春学期	金	4時限	所沢	1年以上	2
114	環境社会学ゼミ（２）Ｂ	鳥越 皓之	秋学期	金	4時限	所沢	1年以上	2
115	地域資源論ゼミ（１）Ａ	柏 雅之	春学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
115	地域資源論ゼミ（１）Ｂ	柏 雅之	秋学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
116	地域資源論ゼミ（２）Ａ	柏 雅之	春学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
116	地域資源論ゼミ（２）Ｂ	柏 雅之	秋学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
117	都市社会学ゼミ（１）Ａ	臼井 恒夫	春学期	金	5時限	所沢	1年以上	2
117	都市社会学ゼミ（１）Ｂ	臼井 恒夫	秋学期	金	5時限	所沢	1年以上	2
118	都市社会学ゼミ（２）Ａ	臼井 恒夫	春学期	金	6時限	所沢	1年以上	2
118	都市社会学ゼミ（２）Ｂ	臼井 恒夫	秋学期	金	6時限	所沢	1年以上	2
119	人口社会学ゼミ（１）Ａ	武田 尚子	春学期	木	3時限	所沢	1年以上	2
119	人口社会学ゼミ（１）Ｂ	武田 尚子	秋学期	木	3時限	所沢	1年以上	2

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
120	人口社会学ゼミ（２）Ａ	武田 尚子	春学期	木	4時限	所沢	1年以上	2
120	人口社会学ゼミ（２）Ｂ	武田 尚子	秋学期	木	4時限	所沢	1年以上	2
121	階級・階層論ゼミ（１）Ａ	橋本 健二	春学期	火	4時限	所沢	1年以上	2
121	階級・階層論ゼミ（１）Ｂ	橋本 健二	秋学期	火	4時限	所沢	1年以上	2
122	階級・階層論ゼミ（２）Ａ	橋本 健二	春学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
122	階級・階層論ゼミ（２）Ｂ	橋本 健二	秋学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
123	移住論ゼミ（１）Ａ	森本 豊富	春学期	木	5時限	所沢	1年以上	2
123	移住論ゼミ（１）Ｂ	森本 豊富	秋学期	木	5時限	所沢	1年以上	2
124	移住論ゼミ（２）Ａ	森本 豊富	春学期	木	6時限	所沢	1年以上	2
124	移住論ゼミ（２）Ｂ	森本 豊富	秋学期	木	6時限	所沢	1年以上	2
125	科学史・科学論ゼミ（１）Ａ	加藤 茂生	春学期	木	1時限	所沢	1年以上	2
125	科学史・科学論ゼミ（１）Ｂ	加藤 茂生	秋学期	木	1時限	所沢	1年以上	2
126	科学史・科学論ゼミ（２）Ａ	加藤 茂生	春学期	木	2時限	所沢	1年以上	2
126	科学史・科学論ゼミ（２）Ｂ	加藤 茂生	秋学期	木	2時限	所沢	1年以上	2
127	技術史・技術文化論ゼミ（１）Ａ	余語 琢磨	春学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
127	技術史・技術文化論ゼミ（１）Ｂ	余語 琢磨	秋学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
128	技術史・技術文化論ゼミ（２）Ａ	余語 琢磨	春学期	火	6時限	所沢	1年以上	2
128	技術史・技術文化論ゼミ（２）Ｂ	余語 琢磨	秋学期	火	6時限	所沢	1年以上	2
129	社会人類学ゼミ（２）Ａ	矢野 敬生	春学期	木	2時限	所沢	1年以上	2
129	社会人類学ゼミ（２）Ｂ	矢野 敬生	秋学期	木	2時限	所沢	1年以上	2
130	スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ（１）Ａ	竹中 宏子	春学期	金	3時限	所沢	1年以上	2
130	スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ（１）Ｂ	竹中 宏子	秋学期	金	3時限	所沢	1年以上	2
131	スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ（２）Ａ	竹中 宏子	春学期	金	4時限	所沢	1年以上	2
131	スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ（２）Ｂ	竹中 宏子	秋学期	金	4時限	所沢	1年以上	2
132	ドイツ政治社会文化論ゼミ（１）Ａ	村上 公子	春学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
132	ドイツ政治社会文化論ゼミ（１）Ｂ	村上 公子	秋学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
133	ドイツ政治社会文化論ゼミ（２）Ａ	村上 公子	春学期	金	2時限	所沢	1年以上	2
133	ドイツ政治社会文化論ゼミ（２）Ｂ	村上 公子	秋学期	金	2時限	所沢	1年以上	2
134	日本物質文化論ゼミ（１）Ａ	谷川 章雄	春学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
134	日本物質文化論ゼミ（１）Ｂ	谷川 章雄	秋学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
135	日本物質文化論ゼミ（２）Ａ	谷川 章雄	春学期	火	3時限	所沢	1年以上	2
135	日本物質文化論ゼミ（２）Ｂ	谷川 章雄	秋学期	火	3時限	所沢	1年以上	2
136	表象文化論ゼミ（１）Ａ	中村 要	春学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
136	表象文化論ゼミ（１）Ｂ	中村 要	秋学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
137	表象文化論ゼミ（２）Ａ	中村 要	春学期	金	2時限	所沢	1年以上	2
137	表象文化論ゼミ（２）Ｂ	中村 要	秋学期	金	2時限	所沢	1年以上	2
138	文化生態学ゼミ（１）Ａ	蔵持 不三也	春学期	月	2時限	所沢	1年以上	2
138	文化生態学ゼミ（１）Ｂ	蔵持 不三也	秋学期	月	2時限	所沢	1年以上	2
139	文化生態学ゼミ（２）Ａ	蔵持 不三也	春学期	月	3時限	所沢	1年以上	2
139	文化生態学ゼミ（２）Ｂ	蔵持 不三也	秋学期	月	3時限	所沢	1年以上	2

人間行動・環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
140	環境心理・環境デザインゼミ（１）Ａ	佐藤 将之	春学期	月	2時限	所沢	1年以上	2
140	環境心理・環境デザインゼミ（１）Ｂ	佐藤 将之	秋学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
141	環境心理・環境デザインゼミ（２）Ａ	佐藤 将之	春学期	月	3時限	所沢	1年以上	2
141	環境心理・環境デザインゼミ（２）Ｂ	佐藤 将之	秋学期	月	6時限	所沢	1年以上	2

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
142	建築環境学ゼミ（１） A	小島 隆矢	春学期	火	1時限	所沢	1年以上	2
142	建築環境学ゼミ（１） B	小島 隆矢	秋学期	木	4時限	所沢	1年以上	2
143	建築環境学ゼミ（２） A	小島 隆矢	春学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
143	建築環境学ゼミ（２） B	小島 隆矢	秋学期	木	5時限	所沢	1年以上	2
144	建築計画学ゼミ（１） A	佐野 友紀	春学期	木	3時限	所沢	1年以上	2
144	建築計画学ゼミ（１） B	佐野 友紀	秋学期	木	3時限	所沢	1年以上	2
145	建築計画学ゼミ（２） A	佐野 友紀	春学期	木	4時限	所沢	1年以上	2
145	建築計画学ゼミ（２） B	佐野 友紀	秋学期	木	4時限	所沢	1年以上	2
146	発達行動学ゼミ（１） A	根ヶ山 光一	春学期	月	1時限	所沢	1年以上	2
146	発達行動学ゼミ（１） B	根ヶ山 光一	秋学期	月	1時限	所沢	1年以上	2
147	発達行動学ゼミ（２） A	根ヶ山 光一	春学期	月	2時限	所沢	1年以上	2
147	発達行動学ゼミ（２） B	根ヶ山 光一	秋学期	月	2時限	所沢	1年以上	2
148	発達動機づけ論ゼミ（１） A	外山 紀子	春学期	月	3時限	所沢	1年以上	2
148	発達動機づけ論ゼミ（１） B	外山 紀子	秋学期	月	3時限	所沢	1年以上	2
149	発達動機づけ論ゼミ（２） A	外山 紀子	春学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
149	発達動機づけ論ゼミ（２） B	外山 紀子	秋学期	月	4時限	所沢	1年以上	2

健康・生命医科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
150	運動制御・バイオメカニクスゼミ（１） A	鈴木 秀次	春学期	金	3時限	所沢	1年以上	2
150	運動制御・バイオメカニクスゼミ（１） B	鈴木 秀次	秋学期	金	3時限	所沢	1年以上	2
151	運動制御・バイオメカニクスゼミ（２） A	鈴木 秀次	春学期	金	4時限	所沢	1年以上	2
151	運動制御・バイオメカニクスゼミ（２） B	鈴木 秀次	秋学期	金	4時限	所沢	1年以上	2
152	応用健康科学ゼミ（１） A	竹中 晃二	春学期	木	5時限	所沢	1年以上	2
152	応用健康科学ゼミ（１） B	竹中 晃二	秋学期	木	5時限	所沢	1年以上	2
153	応用健康科学ゼミ（２） A	竹中 晃二	春学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
153	応用健康科学ゼミ（２） B	竹中 晃二	秋学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
154	基礎老化学ゼミ（１） A	千葉 卓哉	春学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
154	基礎老化学ゼミ（１） B	千葉 卓哉	秋学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
155	基礎老化学ゼミ（２） A	千葉 卓哉	春学期	火	6時限	所沢	1年以上	2
155	基礎老化学ゼミ（２） B	千葉 卓哉	秋学期	火	6時限	所沢	1年以上	2
156	神経内分泌学ゼミ（１） A	山内 兄人	春学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
156	神経内分泌学ゼミ（１） B	山内 兄人	秋学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
157	神経内分泌学ゼミ（２） A	山内 兄人	春学期	火	3時限	所沢	1年以上	2
157	神経内分泌学ゼミ（２） B	山内 兄人	秋学期	火	3時限	所沢	1年以上	2
158	生体機能学ゼミ（１） A	今泉 和彦	春学期	土	1時限	所沢	1年以上	2
158	生体機能学ゼミ（１） B	今泉 和彦	秋学期	土	1時限	所沢	1年以上	2
159	生体機能学ゼミ（２） A	今泉 和彦	春学期	土	2時限	所沢	1年以上	2
159	生体機能学ゼミ（２） B	今泉 和彦	秋学期	土	2時限	所沢	1年以上	2
160	統合生理学ゼミ（１） A	永島 計	春学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
160	統合生理学ゼミ（１） B	永島 計	秋学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
161	統合生理学ゼミ（２） A	永島 計	春学期	月	6時限	所沢	1年以上	2
161	統合生理学ゼミ（２） B	永島 計	秋学期	月	6時限	所沢	1年以上	2
162	分子神経科学ゼミ（１） A	榊原 伸一	春学期	金	2時限	所沢	1年以上	2
162	分子神経科学ゼミ（１） B	榊原 伸一	秋学期	金	2時限	所沢	1年以上	2
163	分子神経科学ゼミ（２） A	榊原 伸一	春学期	金	5時限	所沢	1年以上	2
163	分子神経科学ゼミ（２） B	榊原 伸一	秋学期	金	5時限	所沢	1年以上	2

健康福祉科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
164	医療人類学ゼミ（１）Ａ	辻内 琢也	春学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
164	医療人類学ゼミ（１）Ｂ	辻内 琢也	秋学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
165	医療人類学ゼミ（２）Ａ	辻内 琢也	春学期	金	４時限	所沢	１年以上	２
165	医療人類学ゼミ（２）Ｂ	辻内 琢也	秋学期	金	４時限	所沢	１年以上	２
166	緩和医療学・臨床死生学ゼミ（１）Ａ	小野 充一	春学期	木	４時限	所沢	１年以上	２
166	緩和医療学・臨床死生学ゼミ（１）Ｂ	小野 充一	秋学期	木	４時限	所沢	１年以上	２
167	緩和医療学・臨床死生学ゼミ（２）Ａ	小野 充一	春学期	木	５時限	所沢	１年以上	２
167	緩和医療学・臨床死生学ゼミ（２）Ｂ	小野 充一	秋学期	木	５時限	所沢	１年以上	２
168	健康管理医学ゼミ（１）Ａ	河手 典彦	春学期	金	１時限	所沢	１年以上	２
168	健康管理医学ゼミ（１）Ｂ	河手 典彦	秋学期	金	１時限	所沢	１年以上	２
169	健康管理医学ゼミ（２）Ａ	河手 典彦	春学期	金	２時限	所沢	１年以上	２
169	健康管理医学ゼミ（２）Ｂ	河手 典彦	秋学期	金	２時限	所沢	１年以上	２
170	社会医学ゼミ（１）Ａ	扇原 淳	春学期	月	１時限	所沢	１年以上	２
170	社会医学ゼミ（１）Ｂ	扇原 淳	秋学期	月	１時限	所沢	１年以上	２
171	社会医学ゼミ（２）Ａ	扇原 淳	春学期	月	２時限	所沢	１年以上	２
171	社会医学ゼミ（２）Ｂ	扇原 淳	秋学期	月	２時限	所沢	１年以上	２
172	バイオエシックスゼミ（１）Ａ	土田 友章	春学期	月	３時限	所沢	１年以上	２
172	バイオエシックスゼミ（１）Ｂ	土田 友章	秋学期	月	３時限	所沢	１年以上	２
173	バイオエシックスゼミ（２）Ａ	土田 友章	春学期	月	５時限	所沢	１年以上	２
173	バイオエシックスゼミ（２）Ｂ	土田 友章	秋学期	月	５時限	所沢	１年以上	２
174	予防医学ゼミ（１）Ａ	町田 和彦	春学期	木	３時限	所沢	１年以上	２
174	予防医学ゼミ（１）Ｂ	町田 和彦	秋学期	木	３時限	所沢	１年以上	２
175	予防医学ゼミ（２）Ａ	町田 和彦	春学期	木	４時限	所沢	１年以上	２
175	予防医学ゼミ（２）Ｂ	町田 和彦	秋学期	木	４時限	所沢	１年以上	２
176	生活支援工学ゼミ（１）Ａ	畠山 卓朗	春学期	金	４時限	所沢	１年以上	２
176	生活支援工学ゼミ（１）Ｂ	畠山 卓朗	秋学期	金	４時限	所沢	１年以上	２
177	生活支援工学ゼミ（２）Ａ	畠山 卓朗	春学期	金	５時限	所沢	１年以上	２
177	生活支援工学ゼミ（２）Ｂ	畠山 卓朗	秋学期	金	５時限	所沢	１年以上	２
178	福祉産業学ゼミ（１）Ａ	可部 明克	春学期	金	２時限	所沢	１年以上	２
178	福祉産業学ゼミ（１）Ｂ	可部 明克	秋学期	金	２時限	所沢	１年以上	２
179	福祉産業学ゼミ（２）Ａ	可部 明克	春学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
179	福祉産業学ゼミ（２）Ｂ	可部 明克	秋学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
180	リハビリテーション科学ゼミ（１）Ａ	村岡 慶裕	春学期	火	５時限	所沢	１年以上	２
180	リハビリテーション科学ゼミ（１）Ｂ	村岡 慶裕	秋学期	火	５時限	所沢	１年以上	２
181	リハビリテーション科学ゼミ（２）Ａ	村岡 慶裕	春学期	火	６時限	所沢	１年以上	２
181	リハビリテーション科学ゼミ（２）Ｂ	村岡 慶裕	秋学期	火	６時限	所沢	１年以上	２
182	児童家庭福祉論ゼミ（１）Ａ	白井 千晶	春学期	水	５時限	所沢	１年以上	２
182	児童家庭福祉論ゼミ（１）Ｂ	白井 千晶	秋学期	水	５時限	所沢	１年以上	２
183	児童家庭福祉論ゼミ（２）Ａ	白井 千晶	春学期	水	６時限	所沢	１年以上	２
183	児童家庭福祉論ゼミ（２）Ｂ	白井 千晶	秋学期	水	６時限	所沢	１年以上	２
184	社会保障政策論ゼミ（１）Ａ	植村 尚史	春学期	火	４時限	所沢	１年以上	２
184	社会保障政策論ゼミ（１）Ｂ	植村 尚史	秋学期	火	４時限	所沢	１年以上	２
185	社会保障政策論ゼミ（２）Ａ	植村 尚史	春学期	火	５時限	所沢	１年以上	２
185	社会保障政策論ゼミ（２）Ｂ	植村 尚史	秋学期	火	５時限	所沢	１年以上	２
186	スポーツ健康マネジメント論ゼミ（１）Ａ	吉村 正	春学期	土	１時限	所沢	１年以上	２
186	スポーツ健康マネジメント論ゼミ（１）Ｂ	吉村 正	秋学期	土	１時限	所沢	１年以上	２

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
187	スポーツ健康マネジメント論ゼミ（２）Ａ	吉村 正	春学期	土	2時限	所沢	1年以上	2
187	スポーツ健康マネジメント論ゼミ（２）Ｂ	吉村 正	秋学期	土	2時限	所沢	1年以上	2
188	精神保健福祉論ゼミ（１）Ａ	田中 英樹	春学期	金	4時限	所沢	1年以上	2
188	精神保健福祉論ゼミ（１）Ｂ	田中 英樹	秋学期	金	4時限	所沢	1年以上	2
189	精神保健福祉論ゼミ（２）Ａ	田中 英樹	春学期	金	5時限	所沢	1年以上	2
189	精神保健福祉論ゼミ（２）Ｂ	田中 英樹	秋学期	金	5時限	所沢	1年以上	2
190	ソーシャルワーク論ゼミ（１）Ａ	岩崎 香	春学期	火	1時限	所沢	1年以上	2
190	ソーシャルワーク論ゼミ（１）Ｂ	岩崎 香	秋学期	火	1時限	所沢	1年以上	2
191	ソーシャルワーク論ゼミ（２）Ａ	岩崎 香	春学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
191	ソーシャルワーク論ゼミ（２）Ｂ	岩崎 香	秋学期	火	2時限	所沢	1年以上	2
192	子どもの健康福祉学ゼミ（１）Ａ	前橋 明	春学期	火	4時限	所沢	1年以上	2
192	子どもの健康福祉学ゼミ（１）Ｂ	前橋 明	秋学期	火	4時限	所沢	1年以上	2
193	子どもの健康福祉学ゼミ（２）Ａ	前橋 明	春学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
193	子どもの健康福祉学ゼミ（２）Ｂ	前橋 明	秋学期	火	5時限	所沢	1年以上	2
194	老年社会福祉学ゼミ（１）Ａ	加瀬 裕子	春学期	月	2時限	所沢	1年以上	2
194	老年社会福祉学ゼミ（１）Ｂ	加瀬 裕子	秋学期	月	2時限	所沢	1年以上	2
195	老年社会福祉学ゼミ（２）Ａ	加瀬 裕子	春学期	月	3時限	所沢	1年以上	2
195	老年社会福祉学ゼミ（２）Ｂ	加瀬 裕子	秋学期	月	3時限	所沢	1年以上	2

臨床心理学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
196	学校カウンセリング学ゼミ（１）Ａ	菅野 純	春学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
196	学校カウンセリング学ゼミ（１）Ｂ	菅野 純	秋学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
197	学校カウンセリング学ゼミ（２）Ａ	菅野 純	春学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
197	学校カウンセリング学ゼミ（２）Ｂ	菅野 純	秋学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
198	行動臨床心理学ゼミ（１）Ａ	嶋田 洋徳	春学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
198	行動臨床心理学ゼミ（１）Ｂ	嶋田 洋徳	秋学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
199	行動臨床心理学ゼミ（２）Ａ	嶋田 洋徳	春学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
199	行動臨床心理学ゼミ（２）Ｂ	嶋田 洋徳	秋学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
200	医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ（１）Ａ	鈴木 伸一	春学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
200	医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ（１）Ｂ	鈴木 伸一	秋学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
201	医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ（２）Ａ	鈴木 伸一	春学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
201	医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ（２）Ｂ	鈴木 伸一	秋学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
202	心身医学ゼミ（１）Ａ	野村 忍	春学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
202	心身医学ゼミ（１）Ｂ	野村 忍	秋学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
203	心身医学ゼミ（２）Ａ	野村 忍	春学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
203	心身医学ゼミ（２）Ｂ	野村 忍	秋学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
204	認知行動カウンセリング学ゼミ（１）Ａ	根建 金男	春学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
204	認知行動カウンセリング学ゼミ（１）Ｂ	根建 金男	秋学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
205	認知行動カウンセリング学ゼミ（２）Ａ	根建 金男	春学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
205	認知行動カウンセリング学ゼミ（２）Ｂ	根建 金男	秋学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
206	行動医学ゼミ（１）Ａ	熊野 宏昭	春学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
206	行動医学ゼミ（１）Ｂ	熊野 宏昭	秋学期	月	4時限	所沢	1年以上	2
207	行動医学ゼミ（２）Ａ	熊野 宏昭	春学期	月	5時限	所沢	1年以上	2
207	行動医学ゼミ（２）Ｂ	熊野 宏昭	秋学期	月	5時限	所沢	1年以上	2

感性認知情報システム研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
208	安全人間工学ゼミ（１）Ａ	石田 敏郎	春学期	火	４時限	所沢	１年以上	２
208	安全人間工学ゼミ（１）Ｂ	石田 敏郎	秋学期	火	４時限	所沢	１年以上	２
209	安全人間工学ゼミ（２）Ａ	石田 敏郎	春学期	火	５時限	所沢	１年以上	２
209	安全人間工学ゼミ（２）Ｂ	石田 敏郎	秋学期	火	５時限	所沢	１年以上	２
	生体情報工学ゼミ（１）Ａ	(今年度休講)						
210	生体情報工学ゼミ（１）Ｂ	百瀬 桂子	秋学期	火	１時限	所沢	１年以上	２
	生体情報工学ゼミ（２）Ａ	(今年度休講)						
210	生体情報工学ゼミ（２）Ｂ	百瀬 桂子	秋学期	火	２時限	所沢	１年以上	２
211	感性認知科学ゼミ（１）Ａ	齋藤 美穂	春学期	火	２時限	所沢	１年以上	２
211	感性認知科学ゼミ（１）Ｂ	齋藤 美穂	秋学期	火	２時限	所沢	１年以上	２
212	感性認知科学ゼミ（２）Ａ	齋藤 美穂	春学期	火	３時限	所沢	１年以上	２
212	感性認知科学ゼミ（２）Ｂ	齋藤 美穂	秋学期	火	３時限	所沢	１年以上	２
213	言語情報科学ゼミ（１）Ａ	菊池 英明	春学期	木	４時限	所沢	１年以上	２
213	言語情報科学ゼミ（１）Ｂ	菊池 英明	秋学期	木	４時限	所沢	１年以上	２
214	言語情報科学ゼミ（２）Ａ	菊池 英明	春学期	木	５時限	所沢	１年以上	２
214	言語情報科学ゼミ（２）Ｂ	菊池 英明	秋学期	木	５時限	所沢	１年以上	２
215	社会的実践認知科学ゼミ（１）Ａ	宮崎 清孝	春学期	金	２時限	所沢	１年以上	２
215	社会的実践認知科学ゼミ（１）Ｂ	宮崎 清孝	秋学期	金	２時限	所沢	１年以上	２
216	社会的実践認知科学ゼミ（２）Ａ	宮崎 清孝	春学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
216	社会的実践認知科学ゼミ（２）Ｂ	宮崎 清孝	秋学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
217	情報処理心理学ゼミ（１）Ａ	中島 義明	春学期	火	２時限	所沢	１年以上	２
217	情報処理心理学ゼミ（１）Ｂ	中島 義明	秋学期	火	２時限	所沢	１年以上	２
218	情報処理心理学ゼミ（２）Ａ	中島 義明	春学期	火	３時限	所沢	１年以上	２
218	情報処理心理学ゼミ（２）Ｂ	中島 義明	秋学期	火	３時限	所沢	１年以上	２
219	心理行動学ゼミ（１）Ａ	鈴木 晶夫	春学期	月	４時限	所沢	１年以上	２
219	心理行動学ゼミ（１）Ｂ	鈴木 晶夫	秋学期	月	４時限	所沢	１年以上	２
220	心理行動学ゼミ（２）Ａ	鈴木 晶夫	春学期	月	５時限	所沢	１年以上	２
220	心理行動学ゼミ（２）Ｂ	鈴木 晶夫	秋学期	月	５時限	所沢	１年以上	２
221	生態心理学ゼミ（１）Ａ	三嶋 博之	春学期	火	１時限	所沢	１年以上	２
221	生態心理学ゼミ（１）Ｂ	三嶋 博之	秋学期	火	１時限	所沢	１年以上	２
222	生態心理学ゼミ（２）Ａ	三嶋 博之	春学期	火	２時限	所沢	１年以上	２
222	生態心理学ゼミ（２）Ｂ	三嶋 博之	秋学期	火	２時限	所沢	１年以上	２
223	生活人間工学ゼミ（１）Ａ	加藤 麻樹	春学期	火	５時限	所沢	１年以上	２
223	生活人間工学ゼミ（１）Ｂ	加藤 麻樹	秋学期	火	５時限	所沢	１年以上	２
224	生活人間工学ゼミ（２）Ａ	加藤 麻樹	春学期	火	６時限	所沢	１年以上	２
224	生活人間工学ゼミ（２）Ｂ	加藤 麻樹	秋学期	火	６時限	所沢	１年以上	２
225	知識情報科学ゼミ（１）Ａ	松居 辰則	春学期	金	２時限	所沢	１年以上	２
225	知識情報科学ゼミ（１）Ｂ	松居 辰則	秋学期	金	２時限	所沢	１年以上	２
226	知識情報科学ゼミ（２）Ａ	松居 辰則	春学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
226	知識情報科学ゼミ（２）Ｂ	松居 辰則	秋学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
227	人間生体機能動態学ゼミ（１）Ａ	宮崎 正己	春学期	金	４時限	所沢	１年以上	２
227	人間生体機能動態学ゼミ（１）Ｂ	宮崎 正己	秋学期	金	４時限	所沢	１年以上	２
228	人間生体機能動態学ゼミ（２）Ａ	宮崎 正己	春学期	金	５時限	所沢	１年以上	２
228	人間生体機能動態学ゼミ（２）Ｂ	宮崎 正己	秋学期	金	５時限	所沢	１年以上	２
229	福祉工学ゼミ（１）Ａ	藤本 浩志	春学期	月	３時限	所沢	１年以上	２
229	福祉工学ゼミ（１）Ｂ	藤本 浩志	秋学期	月	３時限	所沢	１年以上	２

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
230	福祉工学ゼミ（２）Ａ	藤本 浩志	春学期	月	５時限	所沢	１年以上	２
230	福祉工学ゼミ（２）Ｂ	藤本 浩志	秋学期	月	５時限	所沢	１年以上	２

教育コミュニケーション情報科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
231	インタラクショナルデザイン論ゼミ（１）Ａ	中井 文子	春学期	土	４時限	所沢	１年以上	２
231	インタラクショナルデザイン論ゼミ（１）Ｂ	中井 文子	秋学期	土	４時限	所沢	１年以上	２
232	インタラクショナルデザイン論ゼミ（２）Ａ	中井 文子	春学期	土	５時限	所沢	１年以上	２
232	インタラクショナルデザイン論ゼミ（２）Ｂ	中井 文子	秋学期	土	５時限	所沢	１年以上	２
233	インターネット科学ゼミ（１）Ａ	西村 昭治	春学期	無	フルオンデマンド	所沢	１年以上	２
233	インターネット科学ゼミ（１）Ｂ	西村 昭治	秋学期	無	フルオンデマンド	所沢	１年以上	２
234	インターネット科学ゼミ（２）Ａ	西村 昭治	春学期	無	フルオンデマンド	所沢	１年以上	２
234	インターネット科学ゼミ（２）Ｂ	西村 昭治	秋学期	無	フルオンデマンド	所沢	１年以上	２
235	学習環境デザイン論ゼミ（１）Ａ	尾澤 重知	春学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
235	学習環境デザイン論ゼミ（１）Ｂ	尾澤 重知	秋学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
236	学習環境デザイン論ゼミ（２）Ａ	尾澤 重知	春学期	金	４時限	所沢	１年以上	２
236	学習環境デザイン論ゼミ（２）Ｂ	尾澤 重知	秋学期	金	４時限	所沢	１年以上	２
237	教育開発論ゼミ（１）Ａ	野嶋 栄一郎	春学期	木	２時限	所沢	１年以上	２
237	教育開発論ゼミ（１）Ｂ	野嶋 栄一郎	秋学期	木	２時限	所沢	１年以上	２
238	教育開発論ゼミ（２）Ａ	野嶋 栄一郎	春学期	木	３時限	所沢	１年以上	２
238	教育開発論ゼミ（２）Ｂ	野嶋 栄一郎	秋学期	木	３時限	所沢	１年以上	２
239	教育コミュニケーション学ゼミ（１）Ａ	保崎 則雄	春学期	火	１時限	所沢	１年以上	２
239	教育コミュニケーション学ゼミ（１）Ｂ	保崎 則雄	秋学期	火	１時限	所沢	１年以上	２
240	教育コミュニケーション学ゼミ（２）Ａ	保崎 則雄	春学期	火	２時限	所沢	１年以上	２
240	教育コミュニケーション学ゼミ（２）Ｂ	保崎 則雄	秋学期	火	２時限	所沢	１年以上	２
241	教育実践学ゼミ（１）Ａ	浅田 匡	春学期	火	４時限	所沢	１年以上	２
241	教育実践学ゼミ（１）Ｂ	浅田 匡	秋学期	火	４時限	所沢	１年以上	２
242	教育実践学ゼミ（２）Ａ	浅田 匡	春学期	火	５時限	所沢	１年以上	２
242	教育実践学ゼミ（２）Ｂ	浅田 匡	秋学期	火	５時限	所沢	１年以上	２
243	教育情報工学ゼミ（１）Ａ	永岡 慶三	春学期	火	３時限	所沢	１年以上	２
243	教育情報工学ゼミ（１）Ｂ	永岡 慶三	秋学期	火	３時限	所沢	１年以上	２
244	教育情報工学ゼミ（２）Ａ	永岡 慶三	春学期	火	４時限	所沢	１年以上	２
244	教育情報工学ゼミ（２）Ｂ	永岡 慶三	秋学期	火	４時限	所沢	１年以上	２
245	情報コミュニケーション科学ゼミ（１）Ａ	金子 孝夫	春学期	月	２時限	所沢	１年以上	２
245	情報コミュニケーション科学ゼミ（１）Ｂ	金子 孝夫	秋学期	木	２時限	所沢	１年以上	２
246	情報コミュニケーション科学ゼミ（２）Ａ	金子 孝夫	春学期	月	３時限	所沢	１年以上	２
246	情報コミュニケーション科学ゼミ（２）Ｂ	金子 孝夫	秋学期	木	３時限	所沢	１年以上	２
247	情報コミュニケーション技術論ゼミ（１）Ａ	スコット ダグラス	春学期	金	２時限	所沢	１年以上	２
247	情報コミュニケーション技術論ゼミ（１）Ｂ	スコット ダグラス	秋学期	金	２時限	所沢	１年以上	２
248	情報コミュニケーション技術論ゼミ（２）Ａ	スコット ダグラス	春学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
248	情報コミュニケーション技術論ゼミ（２）Ｂ	スコット ダグラス	秋学期	金	３時限	所沢	１年以上	２
249	情報メディア教育論ゼミ（１）Ａ	森田 裕介	春学期	木	１時限	所沢	１年以上	２
249	情報メディア教育論ゼミ（１）Ｂ	森田 裕介	秋学期	木	１時限	所沢	１年以上	２
250	情報メディア教育論ゼミ（２）Ａ	森田 裕介	春学期	木	２時限	所沢	１年以上	２
250	情報メディア教育論ゼミ（２）Ｂ	森田 裕介	秋学期	木	２時限	所沢	１年以上	２
251	ネットワーク情報システム学ゼミ（１）Ａ	金 群	春学期	木	４時限	所沢	１年以上	２
251	ネットワーク情報システム学ゼミ（１）Ｂ	金 群	秋学期	木	４時限	所沢	１年以上	２

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
252	ネットワーク情報システム学ゼミ(2) A	金 群	春学期	木	5時限	所沢	1年以上	2
252	ネットワーク情報システム学ゼミ(2) B	金 群	秋学期	金	5時限	所沢	1年以上	2

【専門科目A群】

地域・地球環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
253	局地環境観測実習	太田 俊二／井内 美郎／ 松本 淳	春学期	木	3時限	所沢	1年以上	2

文化・社会環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
	調査企画・設計特論	(今年度休講)						
253	質的調査法特論	池岡 義孝	春学期	火	4時限	所沢	1年以上	2
254	社会学説特論	木村 正人	春学期(後半)	金	2時限	所沢	1年以上	1
254	文化人類学の理論と方法	蔵持 不三也／矢野 敬生	春学期(前半)	金	2時限	所沢	1年以上	1
255	歴史学の理論と方法	加藤 茂生／村上 公子	春学期(前半)	火	4時限	所沢	1年以上	1
255	考古学の理論と方法	菊地 有希子	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	1

人間行動・環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
256	環境デザイン学特論	佐藤 将之	秋学期(後半)	火	2時限	所沢	1年以上	1
256	発達行動学特論	根ヶ山 光一	秋学期(前半)	月	6時限	所沢	1年以上	1

健康・生命医科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
257	健康・生命医科学基礎	永島 計 他	秋学期(前半)	無	フルオンデマンド	その他	1年以上	1

健康福祉科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
	ナラティブ研究法特論	(今年度休講)						
	ナラティブ臨床技法特論	(今年度休講)						
257	保健医療福祉文献検索評価法	扇原 淳	春学期(前半)	月	3時限	所沢	1年以上	1
258	生活支援工学特論	畠山 卓朗	秋学期(前半)	金	3時限	所沢	1年以上	1
258	福祉サービス・支援評価法	岩崎 香／田中 英樹	秋学期(前半)	火	3時限	所沢	1年以上	1

臨床心理学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
259	心身医学特論	野村 忍／山蔦 圭輔	秋学期	月	1時限	所沢	1年以上	2
259	学習心理学特論	国里 愛彦	春学期	水	4時限	所沢	1年以上	2
260	精神薬理学特論	蜂須 貢	秋学期	水	1時限	所沢	1年以上	2
260	臨床心理学研究法特論	綿井 雅康	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	2
261	臨床心理査定特論 I	熊野 宏昭／山蔦 圭輔	春学期	月	1時限	所沢	1年以上	2
261	臨床心理査定特論 II	大月 友／佐々木 和義	秋学期	月	2時限	所沢	1年以上	2

感性認知情報システム研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
262	安全人間工学特論	石田 敏郎	秋学期(前半)	火	3時限	所沢	1年以上	1

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
	生体情報工学特論	(今年度休講)						
262	感性心理学特論	斎藤 美穂	秋学期(前半)	無	フルオンデマンド	所沢	1年以上	1
263	感情心理学特論	鈴木 晶夫	春学期(前半)	金	2時限	所沢	1年以上	1
263	知識情報科学特論	松居 辰則	秋学期	無	フルオンデマンド	その他	1年以上	2
264	生活人間工学特論	加藤 麻樹	秋学期(前半)	火	3時限	所沢	1年以上	1
264	視覚デザイン特論	市原 茂	秋学期	月	2時限	所沢	1年以上	2
265	MRIによるヒト脳機能画像研究特論	渡邊 丈夫	春学期	水	5時限	所沢	1年以上	2

教育コミュニケーション情報科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
265	インストラクショナルデザイン特論	向後 千春	春学期(前半)	土	3時限	所沢	1年以上	1
266	インターネット科学特論	西村 昭治	秋学期	無	フルオンデマンド	所沢	1年以上	2
266	学習環境デザイン特論	尾澤 重知	秋学期	金	5時限	所沢	1年以上	2
267	教育開発特論	野嶋 栄一郎	春学期	火	4時限	所沢	1年以上	2
267	教育システム工学特論	野口 裕之	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	2
268	教育情報工学特論	永岡 慶三	春学期(後半)	火	5時限	所沢	1年以上	1
268	マルチメディア特論	金子 孝夫	秋学期	月	2時限	所沢	1年以上	2
269	メディアリテラシー特論	保崎 則雄	春学期(後半)	火	4時限	所沢	1年以上	1
269	ワークショップデザイン特論	山内 祐平	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	2

【専門科目B群】

地域・地球環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
270	人間環境変遷特論	井内 美郎	秋学期（前半）	月	2時限	所沢	1年以上	1
270	地球生態学特論	太田 俊二	春学期（後半）	木	4時限	所沢	1年以上	1
271	大気環境科学特論	松本 淳	秋学期（前半）	木	3時限	所沢	1年以上	1
271	動物生態学特論	三浦 慎悟	秋学期（前半）	月	3時限	所沢	1年以上	1
272	環境生態学特論	三浦 慎悟／森川 靖	秋学期（後半）	月	2時限	所沢	1年以上	1
272	開発援助実践学特論 I	天野 正博	春学期（前半）	月	1時限	所沢	1年以上	1
273	開発援助実践学特論 II	天野 正博	春学期（後半）	月	1時限	所沢	1年以上	1
273	植物生態学特論	森川 靖	秋学期（前半）	月	1時限	所沢	1年以上	1

文化・社会環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
274	アジア地域研究特論	店田 廣文	春学期（前半）	金	2時限	所沢	1年以上	1
274	家族社会学特論	池岡 義孝	秋学期（後半）	火	4時限	所沢	1年以上	1
275	環境社会学特論	鳥越 皓之	秋学期（前半）	金	2時限	所沢	1年以上	1
275	地域資源特論	柏 雅之	春学期（後半）	月	3時限	所沢	1年以上	1
276	都市社会学特論	臼井 恒夫	春学期（後半）	火	4時限	所沢	1年以上	1
276	人口社会学特論	武田 尚子	秋学期（前半）	木	2時限	所沢	1年以上	1
277	階級・階層論特論	橋本 健二	秋学期（前半）	火	2時限	所沢	1年以上	1
277	移民研究特論	森本 豊富	春学期（前半）	木	3時限	所沢	1年以上	1
278	科学史・科学論特論	加藤 茂生	春学期（前半）	火	2時限	所沢	1年以上	1
	技術史・技術文化研究特論	（今年度休講）						
278	生態人類学特論	矢野 敬生	秋学期（前半）	木	3時限	所沢	1年以上	1
279	儀礼・祝祭研究特論	竹中 宏子	秋学期（前半）	金	2時限	所沢	1年以上	1
279	政治思想史特論	村上 公子	春学期（前半）	金	3時限	所沢	1年以上	1
280	歴史考古学特論	谷川 章雄	秋学期（前半）	無	フルオンデマンド	所沢	1年以上	1
280	表象文化論特論	中村 要	春学期（後半）	火	5時限	所沢	1年以上	1
281	歴史人類学特論	蔵持 不三也	秋学期（前半）	月	4時限	所沢	1年以上	1
281	自然人類学特論	藤田 尚	春学期	金	5時限	所沢	1年以上	2

人間行動・環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
282	建築環境学特論	小島 隆矢	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	1
282	建築計画学特論	佐野 友紀	秋学期（後半）	木	2時限	所沢	1年以上	1
283	発達動機づけ特論	外山 紀子	秋学期（前半）	月	2時限	所沢	1年以上	1
283	社会文化心理学特論	尾関 美喜	春学期（前半）	金	3時限	所沢	1年以上	1
284	生活環境特論	佐野 友紀 他	秋学期（前半）	火	2時限	所沢	1年以上	1

健康・生命医科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
284	運動制御・バイオメカニクス特論	鈴木 秀次	秋学期	無	フルオンデマンド	その他	1年以上	2
285	健康行動科学特論	竹中 晃二	秋学期（前半）	無	フルオンデマンド	その他	1年以上	1
285	老化機構・加齢制御学特論	千葉 卓哉	秋学期（前半）	火	3時限	所沢	1年以上	1
286	神経内分泌学特論	山内 兄人	春学期（前半）	火	1時限	所沢	1年以上	1
286	生体機能学特論	今泉 和彦	春学期	無	フルオンデマンド	その他	1年以上	2
287	環境生理学特論	永島 計	秋学期（後半）	水	1時限	所沢	1年以上	1

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
287	分子神経科学特論	樺原 伸一	秋学期(後半)	金	1時限	所沢	1年以上	1

健康福祉科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
288	緩和医療学特論	小野 充一	秋学期(前半)	木	3時限	所沢	1年以上	1
288	健康管理医学特論	河手 典彦	春学期	木	3時限	所沢	1年以上	2
289	生命医療倫理学特論	土田 友章	春学期(後半)	月	4時限	所沢	1年以上	1
289	予防医学特論	町田 和彦	春学期	無	フルオンデマンド	所沢	1年以上	2
290	医療情報学特論	前田 幸宏	秋学期(前半)	木	3時限	所沢	1年以上	1
290	医療人材管理特論	岩満 裕子	春学期(前半)	木	5時限	所沢	1年以上	1
291	医療福祉質評価特論	田上 豊	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	1
291	医療安全学特論	田上 豊	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	1
292	福祉ロボット工学特論	可部 明克	春学期(前半)	火	4時限	所沢	1年以上	1
292	リハビリテーション工学特論	村岡 慶裕	秋学期(後半)	木	4時限	所沢	1年以上	1
	児童家庭福祉特論	(今年度休講)						
	社会保障政策特論	(今年度休講)						
293	スポーツ健康マネジメント特論	吉村 正	春学期	火	6時限	所沢	1年以上	2
293	精神保健福祉特論	田中 英樹	秋学期(前半)	月	3時限	所沢	1年以上	1
294	ソーシャルワーク特論	岩崎 香	秋学期(前半)	木	2時限	所沢	1年以上	1
294	子どもの健康福祉学特論	前橋 明	春学期	木	2時限	所沢	1年以上	2
295	老年社会福祉学特論	加瀬 裕子	春学期(前半)	木	2時限	所沢	1年以上	1

臨床心理学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
295	臨床心理学特論 I	山蔦 圭輔	春学期	水	3時限	所沢	1年以上	2
296	臨床心理学特論 II	加藤 陽子	秋学期	水	2時限	所沢	1年以上	2
296	臨床心理面接法特論 I	嶋田 洋徳／菅野 純	春学期	月	2時限	所沢	1年以上	2
297	臨床心理面接法特論 II	鈴木 伸一／根建 金男	春学期	月	3時限	所沢	1年以上	2
297	臨床心理実習 I A	嶋田 洋徳／熊野 宏昭／鈴木 伸一	春学期	水	6時限	所沢	1年以上	1
298	臨床心理実習 I B	嶋田 洋徳／熊野 宏昭／鈴木 伸一	秋学期	水	6時限	所沢	1年以上	1
298	臨床心理実習 II A	嶋田 洋徳／熊野 宏昭／鈴木 伸一	春学期	水	7時限	所沢	1年以上	1
299	臨床心理実習 II B	嶋田 洋徳／熊野 宏昭／鈴木 伸一	秋学期	水	7時限	所沢	1年以上	1
299	臨床心理基礎実習 I A	菅野 純／根建 金男／藤井 靖	春学期	水	6時限	所沢	1年以上	1
300	臨床心理基礎実習 I B	根建 金男／菅野 純	秋学期	水	6時限	所沢	1年以上	1
300	臨床心理基礎実習 II A	菅野 純／根建 金男／藤井 靖	春学期	水	7時限	所沢	1年以上	1
301	臨床心理基礎実習 II B	根建 金男／菅野 純	秋学期	水	7時限	所沢	1年以上	1
301	心理臨床現場実習 I A	菅野 純	春学期	月	7時限	所沢	1年以上	1
302	心理臨床現場実習 I B	菅野 純	秋学期	木	7時限	所沢	1年以上	1
302	心理臨床現場実習 II A	野村 忍	春学期	月	7時限	所沢	1年以上	1
303	心理臨床現場実習 II B	野村 忍	秋学期	木	7時限	所沢	1年以上	1
303	心理臨床現場実習 III A	根建 金男	春学期	月	7時限	所沢	1年以上	1

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
304	心理臨床現場実習ⅢB	根建 金男	秋学期	木	7時限	所沢	1年以上	1
304	心理臨床現場実習ⅣA	佐々木 和義	春学期	月	7時限	所沢	1年以上	1
305	心理臨床現場実習ⅣB	佐々木 和義	秋学期	木	7時限	所沢	1年以上	1
305	心理臨床現場実習ⅤA	嶋田 洋徳	春学期	月	7時限	所沢	1年以上	1
306	心理臨床現場実習ⅤB	嶋田 洋徳	秋学期	木	7時限	所沢	1年以上	1
306	心理臨床現場実習ⅥA	鈴木 伸一	春学期	月	7時限	所沢	1年以上	1
307	心理臨床現場実習ⅥB	鈴木 伸一	秋学期	木	7時限	所沢	1年以上	1
307	心理臨床現場実習ⅦA	熊野 宏昭	春学期	月	7時限	所沢	1年以上	1
308	心理臨床現場実習ⅦB	熊野 宏昭	秋学期	木	7時限	所沢	1年以上	1
308	心理臨床現場実習ⅧA	大月 友	春学期	木	7時限	所沢	1年以上	1
309	心理臨床現場実習ⅧB	大月 友	秋学期	木	7時限	所沢	1年以上	1
309	心理療法特論	三浦 正江	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	2

感性認知情報システム研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
310	言語情報科学特論	菊池 英明	秋学期	無	フルオンデマンド	その他	1年以上	2
310	教授学習過程特論	宮崎 清孝	秋学期(前半)	月	2時限	所沢	1年以上	1
311	情報処理心理学特論	中島 義明	春学期(前半)	金	4時限	所沢	1年以上	1
311	生態心理学特論	古山 宣洋	春学期(前半)	月	3時限	所沢	1年以上	1
312	人間生体機能動態学特論	宮崎 正己	秋学期(前半)	金	2時限	所沢	1年以上	1
	福祉工学特論	(今年度休講)						

教育コミュニケーション情報科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
312	学校学習システム特論	浅田 匡	春学期	火	3時限	所沢	1年以上	2
313	情報メディア教育特論	森田 裕介	春学期(前半)	無	フルオンデマンド	所沢	1年以上	1
313	ヒューマンコンピュータインタラクション特論	金 群	秋学期	木	2時限	所沢	1年以上	2

【プロジェクト科目】

地域・地球環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
314	環境教育	太田 俊二／吉富 友恭	春学期(後半)	木	5時限	所沢	1年以上	1

文化・社会環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
314	在外日系移民資料の活用	森本 豊富／鳥越 皓之／ 西村 昭治	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	1

人間行動・環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
315	災害の人間科学	辻内 琢也／竹中 晃二／ 根ヶ山 光一／小島 隆矢	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	1

健康・生命医科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
315	現代医療とケアにおける基礎と臨床	小野 充一 他	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	1

健康福祉科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
316	福祉の視点から見た環境づくり	加瀬 裕子／川名 はつ子 ／佐藤 将之／佐野 友紀	夏季集中	無	その他	所沢	1年以上	2
316	大学・地域連携による先進的健康福祉ネットワークの解析	加瀬 裕子／扇原 淳／ 増田 和高	春学期(前半)	土	2時限	所沢	1年以上	1

感性認知情報システム研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
317	身体化された認知論	宮崎 清孝／三嶋 博之	春学期	水	1時限	所沢	1年以上	2
	嗜好性への認知神経科学的アプローチ	(今年度休講)						
317	学際的研究の進め方ワークショップ 01	島崎 敢／松田 真由美／ 小柳 知代／尾関 美喜	秋学期(前半)	土	3時限	所沢	1年以上	1
317	学際的研究の進め方ワークショップ 02	松田 真由美／島崎 敢／ 小柳 知代／尾関 美喜	秋学期(後半)	土	3時限	所沢	1年以上	1

教育コミュニケーション情報科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
318	生涯学習社会におけるeラーニングとメンタリング	向後 千春／森田 裕介	秋学期(前半)	無	フルオンデマンド	所沢	1年以上	1
318	進化する学習情報環境のデザイン	西村 昭治／金 群／ 菊池 英明	秋学期(前半)	土	3時限～4時限	所沢	1年以上	1
319	学習科学とイノベーション	尾澤 重知／富永 敦子／ 山本 裕子／玉城 絵美	秋学期(前半)	土	3時限	所沢	1年以上	1

【リテラシー科目（英語）】

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
319	Reading for Academic Purposes 中級 01	並木 有希	春学期（前半）	金	2 時限	所沢	1 年以上	1
319	Reading for Academic Purposes 中級 02	並木 有希	春学期（後半）	金	2 時限	所沢	1 年以上	1
319	Reading for Academic Purposes 中級 03	並木 有希	秋学期（前半）	金	2 時限	所沢	1 年以上	1
319	Reading for Academic Purposes 中級 04	並木 有希	秋学期（後半）	金	2 時限	所沢	1 年以上	1
319	Reading for Academic Purposes 中級 05	中垣 恒太郎	秋学期（前半）	火	2 時限	所沢	1 年以上	1
319	Reading for Academic Purposes 中級 06	中垣 恒太郎	秋学期（後半）	火	2 時限	所沢	1 年以上	1
320	Reading for Academic Purposes 上級 01	森本 豊富／保崎 則雄	秋学期（前半）	金	2 時限	所沢	1 年以上	1
320	Writing for Academic Purposes 中級 01	並木 有希	春学期（前半）	金	3 時限	所沢	1 年以上	1
320	Writing for Academic Purposes 中級 02	並木 有希	春学期（後半）	金	3 時限	所沢	1 年以上	1
320	Writing for Academic Purposes 中級 03	並木 有希	秋学期（前半）	金	3 時限	所沢	1 年以上	1
320	Writing for Academic Purposes 中級 04	並木 有希	秋学期（後半）	金	3 時限	所沢	1 年以上	1
320	Writing for Academic Purposes 中級 05	ベック ダニエル	秋学期（前半）	月	1 時限	所沢	1 年以上	1
320	Writing for Academic Purposes 中級 06	ベック ダニエル	秋学期（後半）	月	1 時限	所沢	1 年以上	1
321	Writing for Academic Purposes 上級 01	グレイ ロバート	秋学期（前半）	木	1 時限	所沢	1 年以上	1
321	Writing for Academic Purposes 上級 02	グレイ ロバート	秋学期（後半）	木	1 時限	所沢	1 年以上	1
321	Oral Presentation for Academic Purposes 中級 01	ベック ダニエル	春学期（前半）	月	1 時限	所沢	1 年以上	1
321	Oral Presentation for Academic Purposes 中級 02	ベック ダニエル	春学期（後半）	月	1 時限	所沢	1 年以上	1
322	Oral Presentation for Academic Purposes 上級 01	スコット ダグラス	秋学期（前半）	木	2 時限	所沢	1 年以上	1
322	Oral Presentation for Academic Purposes 上級 02	スコット ダグラス	秋学期（後半）	木	2 時限	所沢	1 年以上	1

【リテラシー科目（基礎）】

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
322	多変量解析特論	芳賀 麻誉美	夏季集中	無	その他	所沢	1 年以上	2

【教育臨床コース（修士課程 1 年制コース）】

研究指導（修士）

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
323	学校臨床心理学研究指導 A	大月 友	春学期	無	その他	並木	1 年以上	－
323	学校臨床心理学研究指導 B	大月 友	秋学期	無	その他	並木	1 年以上	－
323	臨床認知発達学研究指導 A	佐々木 和義	春学期	無	その他	並木	1 年以上	－
323	臨床認知発達学研究指導 B	佐々木 和義	秋学期	無	その他	並木	1 年以上	－

専門ゼミ

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
324	学校臨床心理学ゼミ A	大月 友	春学期	月	6 時限	並木	1 年以上	2
324	学校臨床心理学ゼミ B	大月 友	秋学期	月	6 時限	並木	1 年以上	2
325	臨床認知発達学ゼミ A	佐々木 和義	春学期	月	6 時限	並木	1 年以上	2
325	臨床認知発達学ゼミ B	佐々木 和義	秋学期	月	6 時限	並木	1 年以上	2

専門科目 A 群

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
326	学校臨床生徒指導学特論	嶋田 洋徳／山蔦 圭輔	春学期	無	フルオンデマンド	並木	1 年以上	2
326	臨床心理学学校地域援助特論	大月 友	秋学期	火	6 時限	並木	1 年以上	2
327	教育集団心理学特論	岡安 孝弘	集中講義（春学期）	土	その他	所沢	1 年以上	2
327	家族臨床心理学特論	菅野 純／山蔦 圭輔	春学期	無	フルオンデマンド	並木	1 年以上	2
328	力動的心理療法特論	鈴木 敬生	秋学期	火	7 時限	並木	1 年以上	2

専門科目 B 群

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
328	教育臨床査定特論	山蔦 圭輔	春学期	火	7 時限	並木	1 年以上	2
329	教育心理学特論 I	山蔦 圭輔	秋学期（前半）	無	フルオンデマンド	並木	1 年以上	1
329	教育心理学特論 II	山蔦 圭輔	秋学期（後半）	無	フルオンデマンド	並木	1 年以上	1
330	学校臨床心理学特論	小林 正幸	春学期	火	6 時限	並木	1 年以上	2
330	特別支援教育特論	佐々木 和義	秋学期	月	7 時限	並木	1 年以上	2
331	教育臨床心理学特論 I	山蔦 圭輔	春学期（前半）	木	6 時限	並木	1 年以上	1
331	教育臨床心理学特論 II	山蔦 圭輔	秋学期（前半）	無	フルオンデマンド	並木	1 年以上	1
332	乳幼児発達心理学特論	井原 成男	秋学期	土	2 時限	並木	1 年以上	2
332	発達心理学特論	山蔦 圭輔	春学期	木	7 時限	並木	1 年以上	2
333	教育臨床研究データ解析実習	大月 友／藤井 靖／ 山蔦 圭輔	春学期	月	7 時限	並木	1 年以上	2
333	心理教育臨床実習 A	佐々木 和義／野村 忍／ 大月 友	春学期	水	7 時限	所沢	1 年以上	1
334	心理教育臨床実習 B	佐々木 和義／野村 忍／ 大月 友	秋学期	水	7 時限	所沢	1 年以上	1
334	心理臨床事例実習 A	佐々木 和義／野村 忍／ 大月 友	春学期	水	6 時限	所沢	1 年以上	1
335	心理臨床事例実習 B	佐々木 和義／野村 忍／ 大月 友	秋学期	水	6 時限	所沢	1 年以上	1

【研究指導（博士）】

地域・地球環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
336	環境管理計画学研究指導（D）A	天野 正博	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
336	環境管理計画学研究指導（D）B	天野 正博	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
336	水域環境学研究指導（D）A	井内 美郎	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
336	水域環境学研究指導（D）B	井内 美郎	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
336	生物圏生態学研究指導（D）A	太田 俊二	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
336	生物圏生態学研究指導（D）B	太田 俊二	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
336	大気環境科学研究指導（D）A	松本 淳	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
336	大気環境科学研究指導（D）B	松本 淳	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
336	動物行動生態学研究指導（D）A	三浦 慎悟	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
336	動物行動生態学研究指導（D）B	三浦 慎悟	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

文化・社会環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
337	アジア社会論研究指導（D）A	店田 廣文	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
337	アジア社会論研究指導（D）B	店田 廣文	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
337	環境社会学研究指導（D）A	鳥越 皓之	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
337	環境社会学研究指導（D）B	鳥越 皓之	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
337	地域資源論研究指導（D）A	柏 雅之	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
337	地域資源論研究指導（D）B	柏 雅之	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
337	人口社会学研究指導（D）A	武田 尚子	※2014年度開講予定					
337	人口社会学研究指導（D）B	武田 尚子	※2014年度開講予定					
337	階級・階層論研究指導（D）A	橋本 健二	※2014年度開講予定					
337	階級・階層論研究指導（D）B	橋本 健二	※2014年度開講予定					
337	移住論研究指導（D）A	森本 豊富	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
337	移住論研究指導（D）B	森本 豊富	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
337	物質文化論研究指導（D）A	谷川 章雄	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
337	物質文化論研究指導（D）B	谷川 章雄	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
338	文化生態学研究指導（D）A	蔵持 不三也	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
338	文化生態学研究指導（D）B	蔵持 不三也	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

人間行動・環境科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
338	環境心理・環境デザイン研究指導（D）A	佐藤 将之	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
338	環境心理・環境デザイン研究指導（D）B	佐藤 将之	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
338	建築環境学研究指導（D）A	小島 隆矢	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
338	建築環境学研究指導（D）B	小島 隆矢	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
338	建築計画学研究指導（D）A	佐野 友紀	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
338	建築計画学研究指導（D）B	佐野 友紀	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
338	発達行動学研究指導（D）A	根ヶ山 光一	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
338	発達行動学研究指導（D）B	根ヶ山 光一	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

健康・生命医科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
339	運動制御・バイオメカニクス研究指導（D）A	鈴木 秀次	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
339	運動制御・バイオメカニクス研究指導（D）B	鈴木 秀次	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
339	応用健康科学研究指導（D）A	竹中 晃二	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
339	応用健康科学研究指導（D）B	竹中 晃二	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
339	神経内分泌学研究指導（D）A	山内 兄人	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
339	神経内分泌学研究指導（D）B	山内 兄人	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
339	生体機能学研究指導（D）A	今泉 和彦	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
339	生体機能学研究指導（D）B	今泉 和彦	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
340	統合生理学研究指導（D）A	永島 計	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
340	統合生理学研究指導（D）B	永島 計	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
340	分子神経科学研究指導（D）A	榑原 伸一	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
340	分子神経科学研究指導（D）B	榑原 伸一	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

健康福祉科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
340	医療人類学研究指導（D）A	辻内 琢也	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
340	医療人類学研究指導（D）B	辻内 琢也	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
340	緩和医療学・臨床死生学研究指導（D）A	小野 充一	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
340	緩和医療学・臨床死生学研究指導（D）B	小野 充一	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
340	社会医学研究指導（D）A	扇原 淳	春学期	火	6時限	所沢	1年以上	－
340	社会医学研究指導（D）B	扇原 淳	秋学期	火	6時限	所沢	1年以上	－
340	予防医学研究指導（D）A	町田 和彦	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
340	予防医学研究指導（D）B	町田 和彦	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
341	子どもの健康福祉学研究指導（D）A	前橋 明	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
341	子どもの健康福祉学研究指導（D）B	前橋 明	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

臨床心理学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
341	行動臨床心理学研究指導（D）A	嶋田 洋徳	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
341	行動臨床心理学研究指導（D）B	嶋田 洋徳	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
341	医療心理学・職場メンタルヘルス学研究指導（D）A	鈴木 伸一	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
341	医療心理学・職場メンタルヘルス学研究指導（D）B	鈴木 伸一	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
342	心身医学研究指導（D）A	野村 忍	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
342	心身医学研究指導（D）B	野村 忍	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
342	認知行動力カウンセリング学研究指導（D）A	根建 金男	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
342	認知行動力カウンセリング学研究指導（D）B	根建 金男	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
342	行動医学研究指導（D）A	熊野 宏昭	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
342	行動医学研究指導（D）B	熊野 宏昭	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

感性認知情報システム研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
342	安全人間工学研究指導（D）A	石田 敏郎	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
342	安全人間工学研究指導（D）B	石田 敏郎	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
342	生体情報工学研究指導（D）A	百瀬 桂子	春学期	無	フルオンデマンド	所沢	1年以上	－
342	生体情報工学研究指導（D）B	百瀬 桂子	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
343	感性認知科学研究指導（D）A	齋藤 美穂	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
343	感性認知科学研究指導（D）B	齋藤 美穂	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
343	言語情報科学研究指導（D）A	菊池 英明	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
343	言語情報科学研究指導（D）B	菊池 英明	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
343	情報処理心理学研究指導（D）A	中島 義明	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
343	情報処理心理学研究指導（D）B	中島 義明	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
344	心理行動学研究指導（D）A	鈴木 晶夫	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
344	心理行動学研究指導（D）B	鈴木 晶夫	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
344	知識情報科学研究指導（D）A	松居 辰則	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
344	知識情報科学研究指導（D）B	松居 辰則	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
344	福祉工学研究指導（D）A	藤本 浩志	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
344	福祉工学研究指導（D）B	藤本 浩志	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

教育コミュニケーション情報科学研究領域

頁	科目名	担当教員	学期	曜日	時限	キャンパス	配当年次	単位数
344	インストラクショナルデザイン論研究指導（D）A	向後 千春	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
344	インストラクショナルデザイン論研究指導（D）B	向後 千春	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
345	学習環境デザイン論研究指導（D）A	尾澤 重知	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
345	学習環境デザイン論研究指導（D）B	尾澤 重知	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
345	教育開発論研究指導（D）A	野嶋 栄一郎	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
345	教育開発論研究指導（D）B	野嶋 栄一郎	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
345	教育情報工学研究指導（D）A	永岡 慶三	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
345	教育情報工学研究指導（D）B	永岡 慶三	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
345	情報コミュニケーション科学研究指導（D）A	金子 孝夫	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
345	情報コミュニケーション科学研究指導（D）B	金子 孝夫	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
345	情報メディア教育論研究指導（D）A	森田 裕介	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
345	情報メディア教育論研究指導（D）B	森田 裕介	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－
346	ネットワーク情報システム学研究指導（D）A	金 群	春学期	無	その他	所沢	1年以上	－
346	ネットワーク情報システム学研究指導（D）B	金 群	秋学期	無	その他	所沢	1年以上	－

XVI 研究指導・演習・講義科目の概要

環境管理計画学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

天野 正博

授業概要

A（春学期）

環境問題を解決するための様々な国際的、国内的制度のあり方、国際間や住民の利害関係などを配慮しながら、環境問題の解決方法を検討する。具体的には関連する文献の読み方、得られたデータの統計解析手法、現象を表現するための数学モデル・計量地理学・GISなどの手法を習得して、特定の地域を対象にランドスケープレベルでの問題解決プロセスを策定する。こうした研究手法をベースにし、地球環境問題に関連したテーマを各自が設定し、共同研究の形で研究指導を行う。

B（秋学期）

地球規模での環境問題のうち、地球温暖化と森林との関係、熱帯林の減少問題あるいは我が国の山村の自然環境の劣化に焦点を当てながら、環境問題の状況を現地調査、統計データなどから分析するとともに、問題が生じる社会構造を明らかにするために現象をモデル化する手法を習得し、これを用いてどのような対策を立てるべきかを考える。こうした知見を基に地球環境問題に関連したテーマを各自が設定し、共同研究の形で研究指導を行う。

授業の到達目標

・具体的な研究対象地を設定し、そこで環境問題を分析するとともに、問題を解決するための具体的な提案ができるようになる。

水域環境学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

井内 美郎

授業概要

A（春学期）

湖沼域等の陸水環境変遷史解明に関する調査・分析方法の学習及び実施、分析結果の考察を行う。

B（秋学期）

湖沼域等の陸水環境変遷史解明に関する文献学習、研究成果の発表及び討論を行う。

授業の到達目標

A（春学期）

・湖沼域等の陸水環境変遷史に関する現地調査、分析結果の考察、研究結果のとりまとめが可能になる。

B（秋学期）

・湖沼域等の陸水環境変遷史に関する文献調査、学会等での研究成果発表が可能になる。

生物圏生態学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

太田 俊二

授業概要

従来の学問領域で言えば、生態学と気象学の融合的な高度な研究を遂行するために必要事項を個別に指導する。設定された研究テーマにもとづいた指導を行うが、従来の生態学のみ、気象学のみの研究に終始することなく、融合的かつ人間活動の評価を含ませるようにしたい。このように人間科学を強く意識するものの、従来からの領域である個々の生態学や気象学のなかでも十分な研究成果が得られることも大切である。また、将来の人間社会、地球社会の予測研究といった社会的要請の強い領域に寄与できるような研究に発展できるように指導を進める。なお、修士課程での取り組みを修士論文の提出で集大成とするのではなく、可能な限り国際誌への投稿、受理までを目標としたい。そのための前段階として本科目においては、国内の学会発表の準備や投稿論文の書き方を中心に研究指導を行っていく。

授業の到達目標

・国内の学会発表（全国大会レベル）を行う
・可能な限り国際誌への投稿、受理されることを目指す

大気環境科学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

松本 淳

授業概要

大気環境科学分野について高度な研究を遂行するために必要事項を個別に指導する。特に、対流圏大気化学に関する視点から、設定されたテーマに基づいて指導を行う。具体的には、光化学オキシダントやその関連成分の大気動態について、室内実験・大気観測・モデル計算などに基づく研究を、テーマの中心に据える。ただし、本研究分野が学際的である性質上、化学のみに特化せずに、関連する諸分野との連携も考慮する。複合的・多様な視点から環境問題に対処できる人材の育成を最終的な目標とする。

授業の到達目標

文献・資料の調査、情報の収集、実験等の準備・実施・解析、成果の報告・発表、の作業を通して、大気環境科学の研究を遂行する能力を養う。学会等における成果発表を行なう。学術雑誌等への投稿の経験も積むことが望ましい。

動物行動生態学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

三浦 慎悟

授業概要

A（春学期）

野生動物の行動生態学、個体群生態学、野生動物管理のうち、特定分野について深く学ぶために、専門学術誌の最新の論文、学会報告を中心に個別的に検討を行い、方法や知見、その意義について議論すると同時に、研究課題の設定、方法の検討、データの蓄積、進捗状況を点検し、論文作成へと導く。

B（秋学期）

野生動物の行動生態学、個体群生態学、野生動物管理から特定の研究テーマ設定を踏まえ、研究テーマの意義を最新の研究状況の中で位置づけるとともに、論文作成のための方法（資料収集法および分析法）を議論し、その進捗状況を点検ながら、論文作成、学会発表へと導く。

授業の到達目標

A（春学期）

・研究課題の設定、方法の習得、データの収集と分析、論文の作成法、学会でのプレゼンテーションをマスターできる（C5-1、D56-1）。

B（秋学期）

・研究課題の設定、方法を習得できる。論文の作成法、学会でのプレゼンテーションをマスターできる（B56-1、B56-3、B56-4、C6-2、D56-1）。

アジア社会論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

店田 廣文

授業概要

中東・北アフリカ、アジアおよび日本社会を対象として、各自の研究課題に即した実証的研究を実施するよう指導する。これまで取り上げてきた研究課題は、都市と都市化、人口変動、少子高齢化、人口移動や移民、多民族・多文化社会、イスラームなどであるが、これら以外の課題についての研究も指導する。

授業の到達目標

・実証的研究の企画・実施を行うとともに、分析能力を修得する。（Aa6-1、Ac6-1、Ac6-2）
・論文作成および研究発表能力を修得する。（B56-1、D56-1）

家族社会学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

池岡 義孝

授業概要

A（春学期）

家族をめぐるさまざまな社会現象や家族問題を研究テーマとして研究指導を行う。研究のアプローチとしては、インタビューや会話データ、活字記録、画像・映像などの言説データやドキュメントデータにもとづく質的な研究法を重視する。そのため、質的な家族研究法および欧米と日本の家族研究史ないしは家族学説史の学習を、文献研究と実際の社会調査を併用したかたちで行うことにしたい。各人の研究については、これら基礎的な学習を前提にしたうえで取り組むよう指導する。

B（秋学期）

家族社会学研究指導Aで学習したさまざまな質的研究法のうち、受講生が取り組む方法を決めて、それについてより専門的に指導する。関連した調査法の歴史、研究史も文献によって詳しく検討し、同種の方法を用いたモデルとなるような先行研究についても学習する。その上で、テーマを定めて、具体的なデータ収集とデータ分析を試みるよう指導する。

授業の到達目標

A（春学期）

・家族をめぐる社会現象や家族問題について、家族社会学の観点から理解することができる。
・質的な家族研究法の技法と研究史を理解することができる。
・各人の研究テーマを検討し、確定する。

B（秋学期）

・研究で採用する方法を決定し、その方法についての理解をより深める。
・具体的な研究テーマを設定し、それにもとづくデータ収集とデータ分析を試行的に実施する。

環境社会学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

鳥越 皓之

授業概要

A（春学期）

環境社会学の理論および方法論を学説史をつうじて理解するようにする。また、個別の研究内容を検討して、それを相互討議しながら、環境社会的な考え方をマスターするようにする。

B（秋学期）

各人の研究の成果を報告してもらいながら、コメントをつうじて、環境社会学の分析力をたかめるような論点を適宜出しつつ、相互に討議をする。

授業の到達目標

A（春学期）

・環境社会学を専門家として理解できること。専門的な環境社会学の論文が書けるようになること。

B（秋学期）

・レフリー制のあるこの分野の学会誌に採用されるような論文を書けるような能力を身につけること。

地域資源論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

柏 雅之

授業概要

A（春学期）

食料・農業・農村に関わる諸問題を考えていく。日本農業再生、フードシステム、中山間地域再生、農業環境政策、農商工連携・6次産業化、EU（欧州連合）の衰退地域再生の取組みからわが国が学べるものなどをキーワードとする。

B（秋学期）

食料・農業・農村そして農業と環境問題等に関する専門的素養を前提として、おもに研究論文の購読と解説などを中心に研究のノウハウを習得してもらう。また、精密な実態調査に関する手法の習得も可能となるようにトレーニングする。その他、統計解析による地域分析のあり方も内容に入る。

授業の到達目標

A（春学期）

・専門書と論文の購読を通して、経済学・経営学の方法論で食料・農業・農村・環境に関する専門的素養を涵養する。

B（秋学期）

・食料・農業・農素問題に関する主要な諸学会での研究発表や論文作成が可能となるようも目標を掲げ、トレーニングを行う。

都市社会学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

白井 恒夫

授業概要

A（春学期）

都市は人間が造った最大の創造物であるといわれる。しかし、人間のためにつくったはずの都市は、しばしば人間の手を離れて一人歩きをしていく。現代の都市や都市社会を理解するためには、どのような視点が必要とされているのか。

本研究指導では、都市社会学の重要な研究を参照しながら、受講生の問題関心や研究テーマに沿った研究を進めていくための指導を行う。

B（秋学期）

本研究指導では、都市社会学研究指導Aに引き続き、都市社会学の重要な研究を参照しながら、受講生の問題関心や研究テーマに沿った研究を進めていくための指導を行う。

授業の到達目標

- (1) 問題関心を明確化しながら、研究テーマへと具体化することができるようになる。
- (2) 自らの関心やテーマを、都市社会学的研究のなかに明確に位置づけることができる。
- (3) 研究の進め方やまとめ方についての具体的な知識を得ることができる。
- (4) 調査研究の多様な手法について理解を深めることができる。

移住論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

森本 豊富

授業概要

国内外の移民研究の最新動向を和文・英文の論文や学会参加を通して知る。また、自分の研究テーマの位置づけを把握し、適切で具体的な研究方法を設定し、論文を書き口頭発表する力を身につける。

授業の到達目標

- ・移民研究関連の論文（和文・英文）を批判的に評価できるようになる。
 - ・移民研究の最新動向を知る。
 - ・移民研究に関する論文を書き、学会で発表する。
- 【中目標No.】B56-1、2、3、4、C6-1、D56-1、E56-2、F56-1、G36-1～9

科学史・科学論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

加藤 茂生

授業概要

科学史・科学哲学・科学社会学などの分野の研究論文が書けるよう指導を行う。

授業の到達目標

- ・科学史・科学哲学・科学社会学の最新の研究動向を把握する。
 - ・科学史・科学哲学・科学社会学などの分野の修士論文が書ける能力を身につける。
- 【中目標No.】B56-1、B56-2、B56-3、B56-4

技術文化論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

余語 琢磨

授業概要

技術文化論とは、技術／テクノロジーの特性とそれを利用する人々の世界観を中心に、モノ・ヒト・コトの民俗的・歴史的な相互作用を読み解く研究である。この研究指導では、文献資料やフィールドワークで得た資料をもとに、1. 自然環境から資源を利用する技術、および関連する人間の営みを探求する生業史・生業システム研究、2. 技術や道具・生産物と、関連する社会組織・流通・消費・儀礼・表象・意味などの関係を探求する生活文化研究、3. 身体を加工・治療・介護する技術や情報および心身の相互作用を探求する医療人類学的研究を中心テーマとし、調査フィールドに日本と東南アジアを選ぶ大学院生に対して、研究論文作成をゴールとする実践的な指導を行う。

授業の到達目標

- ・モノ・ヒト・コトをめぐる技術と文化の民俗的・歴史的相互作用を、複眼的な視座から研究できる（C6-1）。

・実証的な資料と適切な方法論に基づき、先行研究の批判を踏まえた論文を作成することができる（B56－1）。

社会人類学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

矢野 敬生

授業概要

A（春学期）

社会人類学研究指導の目標は修士論文を書き上げることにある。テーマは「人類学のフィールドワーク」を実践すること。手法としては「質的調査」を行うことである。そこで院生の調査状況と執筆の諸段階を報告してもらい、討議を介して修論を仕上げていく。

B（秋学期）

受講生の修士論文の発表とそれに対する検討・討議を行う。（1）テーマ・調査対象・調査方法について、（2）参考文献・先行研究の検討、（3）修論の構成について検討、（4）修論本体の検討と細部の検討、（5）結論の検討などを行う。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・人類学的調査の諸段階を経験することができる。
- ・修士論文を書き上げるための手法を学ぶことができる。

B（秋学期）

- ・修士論文を仕上げるることができる。
- ・調査の手法を習得することができる。

政治社会文化論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

村上 公子

授業概要

主にナチ支配下のドイツの政治社会のあり方を観察し、その現象が現れるに至った経緯と原因を考察する。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・ナチ期に関わるドイツ語の研究論文を読み、批判的に論じることができる。
- ・自ら研究テーマを見だし、そのテーマに関する一次資料、二次資料を検索、講読、整理できる。

B（秋学期）

- ・自ら設定したテーマ研究に必要な資料、文献を収集し、批判的に理解、整理することができる。
- ・自らの研究成果を論理的な論文としてまとめることができる。

地域文化論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

竹中 宏子

授業概要

A（春学期）

できる限りローカルな地点、そしてより具体的な問題から研究を進めることにより（＝地域研究）、現代社会の本質が見えてくる。本研究指導では、主にヨーロッパを対象として、地域研究について当分野と大いに関連する文化・社会人類学、社会学、歴史学などを基礎にした文献から、地域文化および地域社会の研究方法を探求していく。指導教員はこれまでスペインの小都市における祝祭と地域アイデンティティの関係、世界遺産の地域的な解釈・取り込みに関して調査・研究を行い、地域文化の形成過程における住民と地方行政や国家との関係を考察してきた。学生は指導教員の地域とテーマに限定されることなく、ヨーロッパにおけるものであれば広く研究テーマを選択することが可能であるが、対象地域の言語を習得していることが要求される。

B（秋学期）

同研究指導Aに続き、同様の指導を続ける。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・修士論文が円滑に進められる（B56－2、B56－3、C6－1）

B（秋学期）

- ・修士論文が円滑に進められる（B56－1、B56－4、C6－1、C6－2）

物質文化論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

谷川 章雄

授業概要

考古学は、主として発掘調査の成果をもとに、モノと人間との関係を読み解く学問である。また、考古学は調査・研究のさまざまなレベルにおいて、歴史学・民俗学をはじめとする他の領域との接点をもっており、総合的、学際的方向性を本質的に内包している分野である。こうした視点にもとづいて、各自が論文を作成していく上での資料の特質と限界と観察・記載の方法、分析の方法、解釈の方向性などについて指導する。

授業の到達目標

- ・修士論文の完成を到達目標とする。（B56－1）

表象文化論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

中村 要

授業概要

人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題：表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

授業の到達目標

・表象文化研究について理解を深め、各自の研究成果に到達すること。

文化生態学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

蔵持 不三也

授業概要

学会誌や紀要などへの投稿論文の作成指導と、学会・研究会発表のためのトレーニングを行う。

授業の到達目標

・博士学位論文や投稿論文の作成と学会・研究会発表のためのスキルを獲得してもらう。

環境心理・環境デザイン研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

佐藤 将之

授業概要

建築や都市の環境から各自が関心、興味をもつ次元を選択し、フィールドサーベイを通じて人間と環境との相互関係を明らかにする。特に、着目した次元における人間と環境との相互作用・相互浸透、環境決定に関する分析・考察を行う。それらを踏まえて応用的な学問としての環境心理学を議論する。環境デザインの議論については、デザイナー向けだけではなく、一般ユーザー向けの意識啓蒙、環境の使い方、環境とのつきあい方の提案を行うものとする。

授業の到達目標

・フィールドサーベイを通じた環境の質的な記述とそれに伴う分析を行うことによって「人間環境のコーディネータ的な役割を担える人材」「心理・行動からみた環境デザインを議論できる人材」となることを目標としている。

建築環境学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

小島 隆矢

授業概要

A（春学期）

住居・建築・都市などの環境と、それら環境に関する広い意味での顧客（利用者、居住者、所有者、管理者等）の意識・行動・ニーズ・CS（顧客満足）に関わる諸問題をテーマとした研究指導を行う。各自、自主的に選んだテーマについて、1）社会的背景、既往研究などの調査、2）研究目的の設定、3）研究方法の検討・設定、4）調査・分析の実施、5）考察・結論の導出、というプロセスを遂行する。

B（秋学期）

住居・建築・都市などの環境と、それら環境に関する広い意味での顧客（利用者、居住者、所有者、管理者等）の意識・行動・ニーズ・CS（顧客満足）に関わる諸問題をテーマとした研究指導を行う。各自、自主的に選んだテーマについて、1）社会的背景、既往研究などの調査、2）研究目的の設定、3）研究方法の検討・設定、4）調査・分析の実施、5）考察・結論の導出、というプロセスを遂行する。要所要所で進捗状況の発表・検討会を開催し、内容のブラッシュアップをはかる。成果は論文としてまとめ、発表する。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・研究する意義がある「研究目的」を設定できる。
- ・「研究の背景」等からそれを無理なく納得できるよう説得力のある研究ストーリーを組み立てることができる。
- ・目的に対して合理的な「研究方法」を選択できる。
- ・適切な「分析・考察」を行うことができる。

B（秋学期）

- ・研究する意義がある「研究目的」を設定できる。
- ・「研究の背景」等からそれを無理なく納得できるよう説得力のある研究ストーリーを組み立てることができる。
- ・目的に対して合理的な「研究方法」を選択できる。
- ・適切な「分析・考察」を行うことができる。
- ・独創性、新規性、汎用性、精緻性、実用性など、何らかの点で魅力のある研究を遂行することができる。

建築計画学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

佐野 友紀

授業概要

A（春学期）

受講者各自が設定した建築・都市計画に関わるテーマについて、実習的な調査分析を行う。加えて、数理的、統計的分析を含んだ手法によって現象を分析し、結論を導き出す方法を学ぶ。

授業では受講者の発表・ディスカッションを通して、問題解決の方法を探る。また、研究指導等を通して、成果を論文形式にまとめ、発表する。

B（秋学期）

受講者各自が設定した建築・都市計画に関わるテーマについて、実習的な調査分析を行う。加えて、数理的、統計的分析を含んだ手法によって現象を分析し、結論を導き出す方法を学ぶ。

授業では受講者の発表・ディスカッションを通して、問題解決の方法を探る。

授業の到達目標

・建築、都市計画に関わる問題を発見し、分析を行うことで、問題解決方法を提案する手法を学ぶことを目標とする。

発達行動学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

根ヶ山 光一

授業概要

各自の研究テーマについて、研究計画（いかなる課題に焦点化し、そこに他の先行研究と差違化していかにoriginalityを盛り込むか、どう仮説を立てそれをどういう手法によって明らかにするか）・実施（フィールドや実験場面をどう確保し、具体的な手続をどうするか）・分析（どのような分析手法を用いて、どのように結果をまとめるか）・考察（データと仮説・先行研究をつきあわせ、整合性のある議論をどう行うか）・発表（研究成果をどうまとめ、口頭もしくは論文で発表するか）の指導を行う。

授業の到達目標

・発達行動学に関する研究を自ら計画・実施できる（D56－2）
・研究成果を論文にまとめることができる（B56－1）

運動制御・バイオメカニクス研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

鈴木 秀次

授業概要

身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。本研究指導の特徴は、姿勢維持やロコモーションにおける身体運動を運動制御とバイオメカニクスの領域から総合的に研究し、動きの仕組みを解明するところにある。よって指導内容は、その動きが神経的にどのように制御されているかを研究する神経生理の領域と、動きについて研究するキネマティクス、そしてその動きの起こりとなる力について研究するキネティクスの領域が中心となる。そのため、上記の研究課題に関連の深い文献を読み、十分な討論を行うと共に、特定の研究課題に対する問題点の所在を明らかにし、修士論文を纏める上での科学的なものの見方や考え方を養うことを目的とする。

授業の到達目標

・修士論文を纏める。

応用健康科学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

竹中 晃二

授業概要

修士論文作成に向けて、材料となる研究論文を作成する準備とする。特に、先行研究のレビューを多数行う。

授業の到達目標

A（春学期）
・応用健康科学にかかわる研究内容や研究デザインおよび統計手法を身につける。
B（秋学期）
・応用健康科学にかかわる研究内容や研究デザインおよび統計手法を身につけ、レビューペーパーを作成するとともに、修士論文の研究を行う。

基礎老化学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

千葉 卓哉

授業概要

老化のメカニズム及び老化防止法に関して、培養細胞及び動物個体（マウス、ラット）を用いて分子細胞生物学的、実験病理学的に研究を行っている。特に食餌カロリー制限による寿命延長機構の解明、その応用による抗加齢疾患薬の開発を目指している。また、生活習慣病やガン、神経変性疾患などのモデル動物を扱うため、それらを研究対象とした実験の実施に必要な知識を学びながら実際に実験を行う。

授業の到達目標

・基礎老化学研究に必要な基本的学説および研究法を習得する。
・基礎老化学研究領域における未解明の問題を抽出し、科学的な解決法の提示ができる。

神経内分泌学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

山内 兄人

授業概要

生殖細胞の成熟、排卵、性行動、妊娠、授乳、母性行動にいたる子どもをつくる雌の生殖機能は、脳と生殖器官、それに、内分泌器官の相互作用により正常に保たれている。雄においても精子形成や性行動は神経とホルモンにより制御されている。雌雄の生殖機能には大きな違いがあるが、脳の性分化の結果によるものである。当研究指導では、ラットの脳における生理現象および行動の制御機構を、神経内分泌学、神経組織化学、神経解剖学、および、神経行動学的手法により研究する。これらの中から各自のテーマをみつけ研究実験を行う。

授業の到達目標

・修士論文の内容が英文専門誌に掲載される程度の実験を終わらせる。

生体機能学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

今泉 和彦

授業概要

A（春学期）

健康を支える運動と栄養が生体機能とどのように関わっているかを理解するため、本授業では、運動と栄養素摂取による生体防御機能の変化とその機構について述べる。その内容としては、1）骨格筋の可塑性とその調節機構、2）栄養素（亜鉛・葉酸）欠乏による生体防御機能の応答とその機構、3）香辛料（ワサビ・ニンニク・トウガラシ）の辛み成分摂取による生体防御機能の応答とその機構、を中心として述べる。これらの内容を具体的な研究レベルに展開するための考え方・関連論文・方法論などについて指導する。

B（秋学期）

本授業の春学期では、1）骨格筋の可塑性とその調節機構、2）栄養素（亜鉛・葉酸）欠乏による生体防御機能の応答とその機構、3）香辛料（ワサビ・ニンニク・トウガラシ）の辛み成分摂取による生体防御機能の応答とその機構、に関わる基本的な知識を広汎に且つ深く学ぶ。秋学期では春学期の内容を踏まえて、それぞれの研究を実施・展開する際に不可欠となる試料の採取法、各種生体物質の測定・解析の方法、関連文献などについて具体的に指導する。

授業の到達目標

A（春学期）

・上記の1）～3）の内容とそれらの背景となる基礎的な知識を習得すると共に、専門的な問題点を整理して十分に理解することを授業の到達目標とする。

B（秋学期）

・上記の1）～3）の内容を研究レベルで展開するための考え方・関連論文・各種方法論等について理解する。

統合生理学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

永島 計

授業概要

体温、体液に関する研究方法を習得し、かつ最新の知見を学ぶ。基本的な生理学の実験手技を学び、個々に与えられた研究テーマを遂行し、学会発表、論文を作成する能力を身につけるカリキュラムを提供する。

授業の到達目標

・体温、体液生理学の研究者としての基本的知識、実験手技の習得

分子神経科学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

榊原 伸一

授業概要

最近発表された先端的な論文についてプレゼンテーションおよび質疑応答を行い、神経科学分野の深い理解を目指す。また各自の研究テーマに関する最新のトピックスについてプレゼンテーションを行うことにより、研究テーマの背景を理解する。

授業の到達目標

- ・神経発生研究に関する最新の知見を得る。
- ・神経系の構造と各部の働きを遺伝子発現、分子動態から理解する。
- ・神経回路の分子の基盤を理解する。

医療人類学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

辻内 琢也

授業概要

A（春学期）

健康や病い（health and illness）そして医療や臨床の現実、身体的・心理的・社会的・文化的（bio-psycho-socio-cultural）な複合産物として構築されている。医療人類学（medical anthropology）では、その複合産物に影響を与える生物生態学および社会文化的要因について、人類の歴史を背景に比較文化的に探求する。

B（秋学期）

災害や紛争による避難民の苦悩（suffering）に対する医療・心理・福祉・教育・法律連携による多角的ケア、多種補完代替医療を含めた世界各地域における健康増進（health-promotion）運動、近代の生物医学システムの抱える諸課題を問う批判的医療人類学（critical anthropology）、電磁波・化学物質・ストレスなどによる生活環境病や難病をめぐる病いの語り（illness narratives / Narrative Based Medicine）、などを研究対象とする。

授業の到達目標

- ・文化人類学や社会人類学を専攻した学生が、医療を研究対象にできる。
- ・医師・看護師・補完代替医療従事者・臨床心理士・社会福祉士・医療ソーシャルワーカーが、人類学を基礎とした質的研究の基礎を身につけ、多文化間臨床を実践するための素養を身につけられる。

緩和医療学・臨床死生学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

小野 充一

授業概要

個人の“死”を、“生命の終わり”と捉える視点から、新しい世代への“生命の伝承”という視点に変換していくことで獲得する様々な“受容の概念”について、伝承されるものを受け止める側と伝える側の両極から検証し、支える技術、支えられる方法、関係性調整の方法などを具体的に研究する作業を指導する。

授業の到達目標

- ・緩和医療学あるいは臨床死生学における質的研究手法を習得して、概要を述べることができる。

- ・ 死生の臨床現場におけるフィールド調査を実施し、研究結果をまとめて学会発表を行うことができる。
- ・ 研究結果をまとめて、学会誌に投稿論文として発表する能力を身につける。

健康管理医学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

河手 典彦

授業概要

A（春学期）

この健康管理医学研究指導の根幹は、“Medical Aspects of Health Maintenance”にある。即ち、臨床医学的要素に関連性の高い研究領域が特色である。臨床医療に関連した各種の講義は基より、健康管理医学演習（Ⅰ）、（Ⅱ）を履修することによって健康管理の多岐にわたる取り組みの現状を可能な限り正確に理解し、それらの領域の中から教員と協議の上で各自が選択した課題について、調査、研究を開始する。適時、応談による指針提示、修正指導などを交えながら研究を進捗させ、論文を進捗させる。

B（秋学期）

健康管理医学研究指導Aと同様に、研究指導Bの根幹も臨床医学的見地に基づいた“Medical Aspects of Health Maintenance”にある。研究指導Aに於いて選択した研究課題について、更に必要な調査などを多角的に追加・継続しながら卒業研究論文の完成させる。論文作成過程においては、常に、教員と綿密な検討を交えながら研究を進捗させることが肝要である。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・ 健康管理医学の根幹を成す“Medical Aspects of Health Maintenance”に基づき、関連する基本的医学的知識を正確に説明することができる。（B56－3、C5－1、G36－4、G36－5）
- ・ 現代のわが国における臨床医療全般に関する知識を習得し解説することができる。（B56－3、C5－1、G36－4）
- ・ 関係する臨床医療の実践とそれらの課題及び対策について論述することができる。（D56－2、F56－2、G36－4、G36－5）

B（秋学期）

- ・ 健康管理医学の根幹を成す“Medical Aspects of Health Maintenance”に基づき、関連する基本的医学的知識を正確に説明することができる。（B56－3、C5－1、G36－4、G36－5）
- ・ 現代のわが国における臨床医療全般に関する知識を習得し解説することができる。（B56－3、C5－1、G36－4）
- ・ 関係する臨床医療の実践とそれらの課題及び対策について論述することができる。（D56－2、F56－2、G36－4、G36－5）

社会医学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

扇原 淳

授業概要

健康と社会・環境との関連を扱う社会医学諸科学の基本的な研究方法・技術の習得・習熟に向けた指導を行う。具体的には、各自の研究を推進すると共に、日々の研究、論文検索、論文の批判的吟味、研究法の習得、研究発表・論文執筆の方法について、指導・助言する。

授業の到達目標

- 1) 社会医学諸科学の研究手法論とその限界を説明できる。B56－2、B56－3、B56－4
- 2) 適切な方法でデータを収集し、分析、評価できる。Ad56－1、Ad56－2、Ad56－3、Ad56－4
- 3) 国際・国内学会で自身の研究を発表できる。Aa 6－1、Aa 6－2、Aa 6－3、Ac 6－1、Ac 6－2、Ac 6－3、B56－1

バイオエシックス研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

土田 友章

授業概要

文献講読のほかに、参加者各人の研究とその発表に向けて指導する。

授業の到達目標

- ・ 研究の手順、方法の検討、概念の吟味、論文の構成、発表、相互批判に習熟する。

予防医学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

町田 和彦

授業概要

21世紀の日本は人類がかつて経験しなかった程の急速な高齢社会を迎えようとしている。戦後順調に発展を遂げてきた日本経済はバブル経済の破綻以降立ち直りをみせず、異常な累積債務を抱え、政治の混乱もあり、先の見えない社会となり、人々の気持ちも荒んだものになるつつある。一方世界的な視野から見ても、未成熟な民主主義、環境破壊の容認、格差社会の容認のもと経済発展のみを優先する巨大人口を要する発展諸国の台頭は民主主義社会の根幹を揺るがせ、政治的混乱、深刻な環境問題、テロの横行、食糧や資源の分配、経済発展から取り残された発展途上国の問題などから来る多くの問題を生み、今まで世界政治に無関心で、危機管理意識の薄い日本人に深刻な影響を与えるものと思われる。

このような厳しい内外の状況下のもとでは予防医学も根本的な改革が必要とされる。今迄の予防医学は個々の疾病を対策を中心とした医学部教育の一環として行われてきたが、これからは生命延長の時代ではなく、単に疾病対策にとどまらず、疾病の起こる原因を人間をとりまく自然科学的、社会科学的、人文科学的要因から解明し、胎内からの健康教育の充実、各時代における心身に与える影響の除去を柱とした政策を志向し、各自が健康の維持・増進を理解するだけでなくそれに向けて実行し、生きがいのある一生を送れるような社会を作ることが必要である。そのための教育を院生と考えていきたいと思う。

授業の到達目標

- ・ 修士課程の学生は授業概要にある様な新しい概念の予防医学を学んでもらいたいので、当研究室の学部教育を受けていない院

生に対してはより基礎的なことも学んでもらいつつ、授業概要で示されたような予防医学をより多くの人に理解してもらうにはどのようなことを行っていったらよいのかを学んでもらいたいと思う。

生活支援工学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

畠山 卓郎

授業概要

A（春学期）

高齢者や障がいがある人が安全・安心・快適に、可能な限り自立した生活を過ごすために有用な工学技術について、工学的な側面のみならず、人の心理面にも着目しながら実践的な研究を行う。

B（秋学期）

障がいがある人や高齢者が安全・安心・快適に、可能な限り自立した生活を過ごすために有用な工学技術について、工学的な側面のみならず、人の心理面にも着目しながら実践的な研究を行う。

授業の到達目標

A（春学期）

・関心事を具体的なテーマにまとめあげ、研究計画の立案、実施、評価、論文作成、発表へつなげられるようになる。（B56-3）（C6-2）

B（秋学期）

・関心事を具体的なテーマにまとめあげ、研究計画の立案、実施、評価、論文作成、発表へつなげられる。（D56-1）（D56-2）

福祉産業学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

可部 明克

授業概要

演習（1）・演習（2）をベースに、健康・医療・福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業、各研究機関・医療機関等との協力を中心として、実践的な開発プロジェクトを実施する。また、MOT（Management of Technology）の基本となる技術・経営の知識と実践的なプロジェクト経験により、企業の研究所および各研究機関等での研究開発力を養成する。

具体的には、医療福祉ロボットの研究開発を進め、国際ロボット展および学会などの対外的な発表なども含めて行う。

授業の到達目標

・ロボットの要素技術を含むシステム開発を行い、試作品を完成させ対外的な発表および評価・改善を行うことができる。

リハビリテーション科学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

村岡 慶裕

授業概要

心身に不自由を抱えている方が、より豊かな生活を送ることができるように、失われた機能の回復を促し、残された能力を最大限に引き出す方法を探る。

ヒトは、感覚受容器・脳・神経系・筋肉を備えた一連のシステムであり、出力に相当する運動（行動）は、感覚受容器からの入力と経験的学習による自己組織化により変容する。最適な出力を促すためには、適切な能力評価による到達目標の設定と、外部から適切な入力を促す環境設定、支援機器などによる運動の制限や補助・代替・補完、そして教示者の促す自発的な反復運動による学習が必要である。

本研究指導では、ヒトの健康と社会福祉の向上に貢献すべく、ヒトをシステムとして捉え、望ましい出力や状態を引き出すために、生体計測を通して、生体システムの解明と、その最適化手法や評価手法の提案、さらに、付加すべき機器の開発を行うための能力を教授する。

授業の到達目標

・授業概要で示した内容を具体的に実践できるように、電子回路設計法やプログラミング、実験の測定法と解析法を習得するとともに、学会や学術論文で成果を発表できるようになることを目標とする。

児童家庭福祉論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

川名 はつ子

授業概要

被虐待児や障害児・非行少年等の社会的養護と自立をテーマに、子どもとその家族の支援について家庭福祉・地域福祉の観点から理論的・実践的に考究し、子ども主体の援助のあり方を探る。

修士論文は、原則として養育家庭、ファミリーホーム、児童福祉施設（保育園、乳児院や児童養護施設、障害児の入所・通所施設）等でフィールドワークを行ってエスノグラフィーを作成する。

そのために学内外の研究会や里親大会、学会等に積極的に参加し、当事者との接触・フィールドの開拓・情報の収集・知識や援助技術の習得に努めることを推奨する。

授業の到達目標

A（春学期）

（1）児童福祉の現場で、参与観察や面接調査により収集したデータを、当事者のニーズに沿った援助に役立てる視点に立って解析できる能力を習得する。（B56-1、G36-4）

（2）解析結果を社会に還元するため、研究会や学会で発表できる能力を涵養する。（Ac6-1、Ac6-2、B56-3、D56-1）

B（秋学期）

（1）個別の支援を発展させ、地域全体の子ども家庭福祉に包摂する支援の在り方を考究・提案できる能力を習得する。（C6

ー 1、D56ー 2）

(2) 地域の中の社会資源を駆使し、家庭養育と施設養護を適切に組み合わせて、子どもたちのよりよい社会的養護を構築できる実践的能力を習得する。(D56ー 2、E56ー 1、E56ー 2)

社会保障政策論研究指導
A（春学期）・B（秋学期）
植村 尚史

授業概要

社会保障政策（年金、医療、介護、社会福祉等）の何らかの分野で、政策評価に関する研究、海外の制度との比較研究、政策決定過程に関する研究、政策の経済的、社会的効果に関する研究などのうち、いずれかの研究を行い、成果をまとめることを目標に、個別に研究方法、成果のまとめ方等の指導を行う。

授業の到達目標

・研究の成果を論文にまとめる。

スポーツ健康マネジメント論研究指導
A（春学期）・B（秋学期）
吉村 正

授業概要

スポーツ健康マネジメントを専門的に学習する場合、その現場を知ることが極めて重要である。本研究指導では、スポーツや健康に関連する組織や企業に出向き、あるいはチームやグループに合流し、そこでマネジメントの方法を学習する。日々の研究・教育活動では、指導者の在り方やコーチング技術に関する学習、関連文献の講読、レジュメや論文作成の指導等を行う。

授業の到達目標

・授業概要で記した内容について、正確に理解し、そのことが自分の言語等でしっかりと説明出来るようになることを目標とする。

精神保健福祉論研究指導
A（春学期）・B（秋学期）
田中 英樹

授業概要

A（春学期）

精神保健福祉学は精神保健と社会福祉が交差した領域を扱う学際的な科学である。その課題は現代の精神保健と福祉に挑戦が求められている様々な社会病理を中心としている。すなわち、世代を超えた虐待、自殺、うつ病、社会的引きこもり、依存症、認知症などである。講義では、それらの課題解決にむけてどのようなアプローチが可能かを考察し、討論する。

B（秋学期）

研究指導Aに引き続き講義する。

精神保健福祉学は精神保健と社会福祉が交差した領域を扱う学際的な科学である。その課題は現代の精神保健と福祉に挑戦が求められている様々な社会病理を中心としている。すなわち、世代を超えた虐待、自殺、うつ病、社会的引きこもり、依存症、認知症などである。講義では、それらの課題解決にむけてどのようなアプローチが可能かを考察し、討論する。とりわけ、研究指導Bでは、自らのテーマを設定し、レポート発表を行うことも含めて展開していきたい。

授業の到達目標

・現代の社会病理問題に対する精神保健福祉の視座から、その解決方法を自分なりに提案できる能力を涵養する。

ソーシャルワーク論研究指導
A（春学期）・B（秋学期）
岩崎 香

授業概要

A（春学期）

社会福祉基礎構造改革における福祉サービス供給システムの転換により、福祉も契約の時代を迎えた。諸サービスを受ける際のクライアントの契約能力が問われ、判断能力が不十分な高齢者、障害者等の人権がクローズアップされている。契約における対等性の担保、つまり、パートナーシップの形成は共生社会を志向する現在の国際的な潮流の中でも強調されており、障害者の権利条約の採択といった動きに呼応するものでもある。そうしたシステムがクライアントのニーズ実現に向けて機能するために必要とされるソーシャルワーカーの実践力とは何だろうか。その根底を支えるソーシャルワークの価値や倫理に関しても十分に認識した上で、論文作成に取り組む。

B（秋学期）

クライアントのニーズ実現に向けて機能するために必要とされるソーシャルワーカーの実践力とは何だろうか。その根底を支えるソーシャルワークの価値や倫理に関しても十分に認識した上で、絞り込んだテーマと調査対象、調査方法の整合性を確認しながら、論文作成に取り組む。

授業の到達目標

A（春学期）

・ソーシャルワーク実践の価値や倫理を理解し、実践に還元できる研究とは何か、考えを深める。

B（秋学期）

・ソーシャルワーク実践の価値や倫理を理解し、実践に還元できる可能性のある論文を作成する。

子どもの健康福祉学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

前橋 明

授業概要

A（春学期）

子どもたちが心身ともに健康で生き生きとした暮らしが送れるように、これまで数多くの健康福祉に関する研究がなされ、あわせて多様な施策が講じられてきた。しかし、近年になって、子どもたちの抱える心身や生活上の問題は、非常に複雑、多岐にわたり、新たな展開が迫られている。

こうした社会や生活の背景を踏まえながら、近年のこの分野における研究動向について指導し、さらに各自の研究テーマに基づいて、研究計画の実施と論文の作成、成果の発表ができるよう、研究指導を展開する。

B（秋学期）

子どもたちが心身ともに健康で生き生きとした暮らしが送れるように、これまで数多くの健康福祉研究がなされてきた。しかし、近年になって、子どもたちの抱える・抱えさせられている心身や生活上の問題は、非常に複雑、多岐にわたり、新たな改善策が求められている。

こうした社会や生活の背景を踏まえながら、近年のこの分野における研究動向について指導し、さらに各自の研究テーマに基づいて、研究計画の立案・実行と論文の作成、成果の発表ができるよう、研究指導を展開する。

授業の到達目標

A（春学期）

・子どもの健康福祉分野における研究動向を学ぶとともに、各自の研究計画の実施と論文の作成、成果の発表ができるようになる。

（１）健康福祉関連の学会や研究会に参加し、研究内容や研究方法、研究動向について知る。

（２）各自の研究テーマに基づいて、研究計画を立案し、実施する。その結果をレポートにまとめ、報告する。

B（秋学期）

・子どもの健康福祉分野における研究動向を学ぶとともに、各自の研究計画の実施と論文の作成、成果の発表が専門学会においてできるようになる。

（１）健康福祉関連の学会やセミナーに出席し、研究動向を知る。

（２）各自の研究成果を論文にまとめ、学会にて報告する。

老年社会福祉学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

加瀬 裕子

授業概要

A（春学期）

高齢化や少子化によって生じる個人的社会的問題について、老年学における先行研究をレビューし、問題意識から仮説モデルの策定、研究方法の設定へと研究計画を展開する方法を指導する。

B（秋学期）

高齢化や少子化によって生じる個人的社会的問題について、老年社会福祉学における研究をレビューし、問題意識から仮説モデルの策定、研究方法の設定へと研究計画を展開する方法を指導する。

授業の到達目標

A（春学期）

（１）専門的見地から、先行研究の評価ができる。（B56－4）

（２）少子・高齢化問題をデータに基いて説明し、自分の意見を述べる事が出来るようになる。（B56－3）

B（秋学期）

（１）専門性に基づき、先行研究の的確な評価ができる。（Ac 6－3）

（２）実証的データを収集して分析を行い、論理的な文章を作成することができる。（B56－1）

学校カウンセリング学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

菅野 純

授業概要

学校カウンセリングは、単に学校内でのカウンセリング活動というレベルにとどまらず、乳幼児期の発達心理学、発達障害心理学、そして児童期から青年期に至る臨床心理学、カウンセリング心理学、教育臨床心理学、教育社会心理学、教育心理学、家族心理学などを含む総合的領域である。ここでは学校カウンセリング学ゼミ（１）（２）と教育心理臨床体験を踏まえ、各自が定めたテーマに沿って研究をすすめていく。

授業の到達目標

・修士論文の完成を到達目標とする。

行動臨床心理学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

嶋田 洋徳

授業概要

臨床心理学におけるさまざまな問題に対して、（認知）行動論的アプローチを用いて研究と実践を行う。特に、不安、抑うつ、心理的ストレス、学校不適応、職場不適応、心身症などについて、行動療法、認知行動療法の観点から理解される症状や問題行動の理論モデルの検討、治療モデルの検討、症状の形成と維持、治療効果に及ぼす個人差変数の検討などが主なテーマとなる。

授業の到達目標

・修士論文の作成にあたり、必要な理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

医療心理学・職場メンタルヘルス学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

鈴木 伸一

授業概要

うつ病、不安障害、心身症などのさまざまなストレス関連疾患の発症・維持・悪化に関する諸要因の影響性を検討するとともに、ストレス関連疾患の予防・治療・リハビリテーションに向けた認知行動的介入の方法論について研究する。また、研究の焦点としては、身体疾患患者のメンタルケアおよび職場のメンタルヘルスを実践フィールドと位置付け、単に精神衛生上の問題のみを取り上げるのではなく、成人が抱えやすい生活上の問題や罹患しやすい心身の問題の予防およびケアに焦点を当てたトータル・ヘルス・プロモーションを目指した最先端の研究および臨床実践を行う。これらを実現するために、「うつ・不安のメカニズムに関する基礎研究グループ」、「チーム医療を基盤としたメンタルケアシステムに関する研究グループ」、および「職場のメンタルヘルスをはじめとするストレスマネジメントに関する研究グループ」を構成し、各プロジェクトとリンクした個別の研究テーマを選定し、取り組んでいく。

授業の到達目標

- ・医療および職場のメンタルヘルスの現状を理解し、対策を考えることができる（C5-1）
- ・認知行動療法をはじめとする臨床実践の基礎的な知識と技術を得ることができる（C6-2）
- ・医療心理学および職場メンタルヘルス学に関する最新の研究動向を把握できる（B56-4）
- ・医療心理学および職場メンタルヘルス学に関する研究の実施計画を立案し、遂行できる（B56-1、D56-1、C6-1）

心身医学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

野村 忍

授業概要

心身医学は、患者を身体面のみならず心理社会面も含めて全人的なアプローチを行う医学である。心身症、神経症やうつ病の診断・治療に関わる研究のみならず、健康者における心身相関の研究やヘルスプロモーションに関わる研究も行っている。この科目では、修士論文作成の指導（グループ指導ならびに個人指導）を行う。各自の研究計画に基づき、研究指導スケジュールを立て、研究計画の実践、論文作成まで指導する。

授業の到達目標

- ・心身症、神経症、うつ病など種々の病態についての臨床研究を理解できる。
- ・研究計画の立案、実践ができる。
- ・研究のプレゼンテーションができる。

認知行動カウンセリング学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

根建 金男

授業概要

近年、従来の認知行動カウンセリングの限界を克服するべく登場した構成主義的カウンセリングが盛んになってきた。合理的で、エビデンスを重視する認知行動カウンセリングと、人の一生涯の発達を視野に入れた上で、人が世界をどう構成（認識）しているかをその人の側から理解し、アプローチしようとする、構成主義的カウンセリングは、相互補完的な関係にある。この研究指導では、認知行動カウンセリングと構成主義的カウンセリングの領域における研究を実施し、修士論文をまとめることができるように指導する。

授業の到達目標

- ・認知行動カウンセリングと構成主義的カウンセリングの関係を含めて、両者の概要を理解する（C5-1、C6-1、C6-2）。
- ・認知行動カウンセリングまたは構成主義的カウンセリングの領域における研究を実施し、修士論文を作成する、あるいはそのための準備をする（B56-1、B56-3、B56-4）。

行動医学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

熊野 宏昭

授業概要

身体医療と精神医療の双方に臨床心理学を適用する専門領域としての行動医学領域の探求を深め、その成果を使いこなせるようにすることに焦点を当てていく。そのためには、心理的变化の基礎メカニズムとその応用可能性を追及し、アセスメントの方法論を洗練化し、臨床現場でのケースフォーミュレーションと介入プロセスの最適化を進めることが必要になる。そして、主に、臨床行動分析（アクセプタンス&コミットメント・セラピー）、メタ認知理論（注意訓練とメタ認知療法）、応用脳科学に関わる分野での研究指導を行う。

授業の到達目標

- ・臨床行動分析、メタ認知理論、応用脳科学の基礎と応用について理解し、自らの研究の方法論として使いこなせるようになることを目標とする。

安全人間工学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

石田 敏郎

授業概要

A（春学期）
安全人間工学は、人間を取りまく機械や環境および他の人間との関わりを如何にしたら安全を保てるかを考える科学である。現在システムの巨大化や複雑化に伴い、人間が意図しない事故や不具合が発生している。人間の行動的側面を検討することで、事故を未然に防止するための方策を中心に研究している。そのため、ヒューマンエラーの認知心理学的検討、事故分析の方法論、人間工学的対策の策定手法等の研究指導を行う。

B（秋学期）

安全人間工学に関連した研究テーマとして、人間の情報処理・応答特性、視知覚特性の計測と評価、ストレス下での作業特

性、ヒューマンエラーの分析と評価等を取り上げ、理解を深めると同時に、修士論文作成技法を習得する。

授業の到達目標

A（春学期）

- （1）安全人間工学の分野における方法論を理解できる。B56-3
- （2）他の周辺領域との関連を理解し、安全人間工学的対策を理解できる。B56-2
- （3）ヒューマンエラーの概要を理解できる。B56-4

B（秋学期）

- （1）安全人間工学関連データの理解。D56-1
- （2）修士論文作成のための技法の習得。Ac 6-2

生体情報工学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

百瀬 桂子

授業概要

A（春学期）

さまざまな情報メディア・情報機器と人間の関わり合いを、主に生理的側面からとらえて解析し、得られた知見をヒューマンインタフェースの高度化や医療に活用するための研究を行う。主に、ヒトの視覚機能およびその情報処理機構に着目し、それらを客観的にとらえるための技術として脳活動計測を利用する。研究テーマとしては、視覚情報処理機構を脳活動によりとらえるための生体信号処理方式の検討、生理指標によりヒューマンインタフェースを評価する方式の検討、感覚機能診断のための計測方法の開発などが挙げられる。このような研究について、研究計画の立案と実践を指導する。

B（秋学期）

さまざまな情報メディア・情報機器と人間の関わり合いを、主に生理的側面からとらえて解析し、得られた知見をヒューマンインタフェースの高度化や医療に活用するための研究を行う。主に、ヒトの視覚機能およびその情報処理機構に着目し、それらを客観的にとらえるための技術として脳活動計測を利用する。研究テーマとしては、視覚情報処理機構を脳活動によりとらえるための生体信号処理方式の検討、生理指標によりヒューマンインタフェースを評価する方式の検討、感覚機能診断のための計測方法の開発などが挙げられる。このような研究についての論文作成を指導する。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・個別に設定した研究テーマについて、研究計画を適切に立案して実践できるようになる。
- ・研究を進めるうえで必要な知識や技術を、担当教員および関連分野の研究者の指導の下で理解・習得する。
- ・自身のテーマについての研究発表と質疑応答ができるようになる。

Ac 6-2、Ac 6-3、B56-3、B56-4

B（秋学期）

- ・個別に設定した研究テーマについて、研究を進めるうえで必要な知識や技術を、担当教員および関連分野の研究者の指導の下で理解・習得する。
- ・自身のテーマについての研究発表と質疑応答ができるようになる。
- ・自身の研究テーマについての論文を作成する。

Ac 6-1、Ac 6-2、B56-1、B56-2

感性認知科学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

齋藤 美穂

授業概要

情報化社会におけるバーチャルな空間は各国間の隔たりをますます小さくしている。このような環境において他の文化における感性の違いを知ることはグローバルなマーケティング戦略を展開する為に必要不可欠と考えられる。

日本語の「感性」は今や国際語“Kansei”として認知されつつあるが、感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究手法也多岐にわたる。そこでこの研究指導では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当て、具体的研究として色彩やデザインの認知およびその利用方法、さらにそれらの嗜好に対する文化的差異を切り口とした研究を主たるテーマとして感性を検討し指導する。ノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知や感性的な側面を十分に検討する事は重要なテーマとなる。また特に文化的差異を視野に入れる事は、情報化社会においてこれからはますます必要になると考えられる。これらの研究テーマ（具体的には「感性認知科学ゼミ（1）」および「感性認知科学ゼミ（2）」に記載）に沿って吟味された各人の研究について、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね、さらに学会発表や投稿論文に対する助言と指導、修士論文に対する直接的な指導を行っていく。

授業の到達目標

具体的研究テーマは、1）色彩やデザインに関する嗜好と認知、2）色彩やデザインが及ぼす心理的效果や生理的效果、3）香りと色、音と色などの感覚協調や多感覚研究、4）表情や化粧などの対人認知、5）これらに関連した文化的差異などの研究テーマを主としている。これらに沿って吟味された各人の具体的研究テーマについて、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね修士論文に対する直接的な指導を行っていく。修士論文の提出が目標となるが、その他にも、学会発表（日本色彩学会、日本心理学会、日本感性工学会、国際色彩学会など）や投稿論文などに関する指導を通して、感性認知科学への理解を深めて行く。

言語情報科学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

菊池 英明

授業概要

情報化社会の進展に伴い音声言語メディアの役割は今後一層重要になる。言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据え

て、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。具体的には、言語学、心理学、認知科学、脳科学といった人間科学の基礎学問を前提としながら、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築していく。主な研究課題は、会話メカニズムの解明、人と機械の対話インタフェース、音声による感情・態度の理解・表出モデル、知的検索エンジンなど。

授業の到達目標

・各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかる。成果としては学術論文誌への論文掲載を目標とする。

社会的実践認知科学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

宮崎 清孝

授業概要

認知に対する「文化歴史的アプローチ」に基づく具体的な研究の遂行を指導する。具体的な研究計画の実行に加え、英語論文の講読もおこなう。

授業の到達目標

- (1) 認知に対する「文化歴史的アプローチ」から、適切に研究課題を設定できる B56-2、B56-4
- (2) 認知に対する「文化歴史的アプローチ」の研究方法論を用いて研究論文を書くことができる B56-1、B56-3

情報処理心理学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

中島 義明

授業概要

A（春学期）

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究（前段階）する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、ブライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題について、修士学位論文の作成に向けた切り出しを行う。これらの研究を進める際には、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけでなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。

B（秋学期）

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究（後段階）する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、ブライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題について、修士学位論文の作成に向けた切り出しを行う。これらの研究を進める際には、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけでなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・先行研究を十分に吟味し、修士論文で取り上げる研究課題の切り出しを行う。（Aa 6-3）
- ・この研究課題を研究していく上での具体的実験計画案の策定を行う。（B56-4）

B（秋学期）

- ・先の実験計画案を実践し、データ収集を適切に行う。（Ad56-1）
- ・得られたデータを分析し、その結果に基づき論理的に問題のない論文を作成する。（Ad56-2、B56-1）

心理行動学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

鈴木 晶夫

授業概要

A（春学期）

人間を研究する際に、大きく認知的、行動的、生理的側面に分類できよう。それぞれを単独に研究することもできるが、その相互作用も重要である。そこで、行動的側面と心理的側面との関係、身体と精神の相互作用、健康と感情の関係、言語的・非言語的情報伝達手段の構造と機能、非言語行動と感情、などを手がかりとした研究を中心的なテーマとする。

B（秋学期）

人間を研究する際に、大きく認知的、行動的、生理的側面に分類できよう。それぞれを単独に研究することもできるが、その相互作用も重要である。そこで、行動的側面と心理的側面との関係、非言語行動と感情、食行動と人間関係、生活習慣と健康、positive psychologyなどを手がかりとした研究を中心的なテーマとする。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・専門的知識の説明ができる。
- ・研究方法の理解と適用ができる。
- ・批判的・創造的な論理思考を形成する。
- ・心理行動学の実際応用と理解ができる。

B（秋学期）

- ・研究方法の理解と適用ができる。
- ・批判的・創造的な論理思考を形成する。
- ・心理行動学の実際応用と理解ができる。
- ・心理行動学に関わる価値観を形成する。
- ・学会誌への投稿、修士論文を完成する。

生態心理学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

三嶋 博之

授業概要

人間が環境から獲得する有意義な情報単位を特定すること、その情報単位の特性とそれを知覚し利用する人間の振るまいとの間にある法則性を解明すること、行為の学習や発達という変化を支える環境資源について特にそこで利用されている情報の観点から明らかにすること、等について扱う。技術的には実験心理学的な手法を、理論的にはJ. J. Gibsonの生態学的アプローチを、それぞれ研究遂行のための支えとする。関連分野の文献の検討、先行研究の追試、新しい解析手法の試用等を行って基礎固めをしながら、実証的でオリジナルな研究の確立を目指す。

授業の到達目標

- A（春学期）
- ・生態心理学分野の専門的な文献について自律的に読み解く能力を形成する（B56－3、B56－4）。
 - ・生態心理学分野における専門的な研究手法を身につける（Ad56－1、Ad56－2）。
- B（秋学期）
- ・生態心理学分野の専門的な文献について自律的に読み解く能力を形成する（B56－3、B56－4）。
 - ・生態心理学分野における専門的な研究手法を身につける（Ad56－3、Ad56－4）。

知覚情報科学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

松居 辰則

授業概要

A（春学期）

本研究室では、我々人間がもつ「感性」や、実生活空間の中での「暗黙知」について様々な観点から研究をしています。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探求し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ（研究方法論）が必要です。まずは研究のテーマを明確にして、それを実現するための適切な対象領域と研究方法論を決めることになります。その後は、ユニークな研究を期待しています。

B（秋学期）

知覚情報科学研究指導Aに引き続き研究指導を行います。研究指導の概要やポリシー、到達目標は以下の通り（知覚情報科学研究指導Aと同じ）です。

人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ（研究方法論）が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発見する方法。実環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法、など様々です。まずは研究のテーマを明確にして、それを実現するための適切な対象領域と研究方法論を決めることになります。

授業の到達目標

- （1）各自の研究を推進し、修士学位の取得を目指すこと。
 - （2）関連学会の研究会や全国大会での口頭発表を目指すこと。さらに、国際会議での発表も推奨します。研究成果は国内外のジャーナルに掲載されるように指導します。
 - （3）大学院修士課程の学生として後輩学生の研究指導補助、若手の研究者として様々な社会活動（学会活動補助、企業との連携事業の推進、実験器材の管理等）も積極的に行えること。
 - （4）研究力のみならず教育力、組織のマネジメント力をバランスよく身に付けた学生として成長するよう意識すること。
- 【中目標No.】 B56、C5－1、C6、D56、E56、G36

人間生体機能動態学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

宮崎 正己

授業概要

本授業では、修士論文作成のための、基本的な論文に関連した事柄についての研究指導をおこなう。

授業の到達目標

- ・修士論文としての内容が十分なものを作成するための基本について習得を到達目標とする。

福祉工学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

藤本 浩志

授業概要

福祉工学ゼミ（1）福祉工学ゼミ（2）と併せて、具体的に修士論文研究の目標設定方法、ならびに問題解決のために研究を推進する上で必要となる方法論を指導する。研究は、問題設定、アプローチの取捨選択、結果のまとめの3段階から構成されるが、個々に具体例に基づいて合理的な論理展開が身につくようにトレーニングする。

授業の到達目標

- ・実際に個々人が推進する修士課程の研究の過程において、上記の目標が達成できるように成長すること。（B56－1、B56－2、B56－3、B56－4）

インストラクショナルデザイン論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

向後 千春

授業概要

インストラクショナルデザインにおける各自の研究テーマを設定し、研究計画の立案、研究の実施、研究論文の執筆、学会での発表、学会誌への投稿に至るスキルを習得する。これらを積み上げて、最終的には修士論文の作成をする。

授業の到達目標

1. 全国規模の学会の論文誌に投稿できるレベルの研究を立案、実施するスキルを身につける
2. 研究論文原稿の執筆と学会での発表をするスキルを身につける
3. 学会誌への投稿論文を執筆するスキルを身につける

インターネット科学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

西村 昭治

授業概要

A（春学期）

2012年現在、およそ10億台のコンピュータが接続され約30億人のユーザがいるというインターネットの世界は様々な意味で新しい研究対象となっている。私の意図する「インターネット科学」は100億ページにも及ぶWorld Wide Web、P2Pネットワーク、ソーシャルネットワーキング（SNS）などを対象にその技術的な成り立ちを解析し、社会的な影響を数理的に評価するものである。本研究指導ではインターネット科学演習（1）（2）での学習をふまえ、インターネットという研究対象を数理的に分析するとともに、創造性のあるソフトウェアの開発を目指す。

B（秋学期）

2012年現在、およそ9億台のコンピュータが接続され約30億人のユーザがいるというインターネットの世界は様々な意味で新しい研究対象となっている。私の意図する「インターネット科学」は100億ページにも及ぶWorld Wide Web、P2Pネットワーク、ソーシャルネットワーキング（SNS）などを対象にその技術的な成り立ちを解析し、社会的な影響を数理的に評価するものである。本研究指導ではインターネット科学演習（1）（2）での学習をふまえ、インターネットという研究対象を数理的に分析するとともに、創造性のあるソフトウェアの開発を目指す。

授業の到達目標

- ・インターネットという研究対象を数理的に分析する能力の獲得。創造性のあるソフトウェアの開発能力の獲得。

学習環境デザイン論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

尾澤 重知

授業概要

「学習環境デザイン」は、人材育成や教育研修などの実践的活動において、創造的な「学びの場」をデザインし、学習の支援や活動の評価を目指す試みである。本研究指導では、国内外の大学教育、企業内人材育成、企業内大学の先進事例を踏まえつつ、知識科学や学習科学、教育工学の知見に基づき学習支援のあり方や、学習支援の方法、ツールについて先導的な研究開発を行う。

授業の到達目標

- （1）様々な専門性をつないで「インタープロフェッション」を推進する知識や技能を身につけている。（E）
- （2）人間の事象を複眼的な視点から捉え、そこに解決すべき課題を発見することができる。（C）
- （3）課題探究（フィールドや実験）プロジェクトをマネジメントすることができる。（D）

教育開発論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

野嶋 栄一郎

授業概要

教育環境と学習の様々なレベルでの交互作用を明らかにする。これらの研究を行っていくうえで、最も重要視する方法論は、開発研究及び実践研究であるが、このような研究には必ず、実験研究や調査研究に基づく裏づけが必要となり、両面からの方法論が展開される。各人固有の問題意識を尊重し、理論的、方法論的検討に院生全員の討議を重ね、常にバイオニアの研究に焦点を当てる。インターネットを利用したインターカルチャルコミュニケーションカリキュラムの開発、CSCWに関するヒューマンファクターの研究、教育実践研究に対応した教育測定法の開発等、具体的研究事例をベースに研究領域の拡大を図る。

授業の到達目標

- ・学位論文（修士課程）の完成。

教育コミュニケーション学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

保崎 則雄

授業概要

本授業では、教育におけるメディア、言語、身体が有機的なつながりを持つコミュニケーション過程の分析の研究指導を行いつつ、研究会、学会などでの発表を義務づけることとします。

授業の到達目標

- ・受講生は、
- 1) 教育コミュニケーション分野に関連する研究課題を検索、同定することができる
- 2) 研究論文の書き方、学会投稿原稿の書き方を修得する
- 3) APAスタイルなどの論文作成についての基礎的な理解をする

教育実践学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

浅田 匡

授業概要

学校教育を中心として、授業をはじめ教育実践の改善に資する実践研究を行う。教育実践における教師の役割は大きく、教師研究を中心とし、教師の実践に関する知識の獲得過程や教師間の相互作用による知識創造過程などを、具体的な授業実践に基づきながら研究を行う。そこでは、専門家としての教師の力量形成にとどまらず、人間的成長を視野に入れている。方法として

は、インタビュー法、観察、ビデオによる授業分析など、いわゆる質的研究法と調査法を組み合わせる用いるが、加えて教育実践の改善に資するプログラム開発やシステム開発も行う。さらに、教育センターや学校との共同研究を行う。

教育実践学のバックグラウンドとして、自己心理学、人間性心理学、教育方法学、教育工学、システム論、組織マネジメントなどの文献講読をあわせて行う。キーワードは、リフレクション、メンタリング、アクション・リサーチ、実践知、である。

授業の到達目標

A（春学期）

- (1) 実践研究に隣接する人間性心理学、システム論、教育工学、組織マネジメントなど、教育実践研究の背景となる基本的な知識を獲得する。
 - (2) 教育実践研究を行い、実践研究のパラダイムの理解する。
 - (3) 研究方法としてのインタビュー法、観察法、ビデオによる授業分析法、さらにそれらのデータ分析法を習得する。
- 研究指導Aでは、(1)を中核目標とする。B56-1、B56-2、B56-3、C6-1、C6-2

B（秋学期）

- (1) 教育実践研究を行い、実践研究のパラダイムの理解する。
 - (2) 研究方法としてのインタビュー法、観察法、ビデオによる授業分析法、さらにそれらのデータ分析法を習得する。
 - (3) 実践研究に隣接する人間性心理学、システム論、教育工学、組織マネジメントなど、教育実践研究の背景となる基本的な知識を獲得する。
- 研究指導Bでは、(1)(2)を中核目標とする。D56-1、D56-2、B56-4、E56-2

教育情報工学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

永岡 慶三

授業概要

A（春学期）

教育情報工学、すなわち教育工学のなかでも特に情報を扱う分野あるいは情報の観点から見た領域についての研究指導を行います。文献の探し方、読み方、引用のし方、解釈のし方、またデータの収集、整理、分析、吟味、論理展開の各方法を基本として学習する。

B（秋学期）

教育情報工学、すなわち教育工学のなかでも特に情報を扱う分野において、課題の設定、発見、分析、仮説設定とその実証方法としての実験または観察についての計画、実施、整理にもとづき、論文形式で研究成果をまとめるまでをOJT形式で指導します。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・教育情報工学の関連領域において、文献の探し方、読み方、引用のし方、解釈のし方ができる。
- ・データの収集、整理、分析、吟味、論理展開の各方法をできる。

B（秋学期）

- ・教育情報工学の関連領域において、課題の設定、発見、分析、仮説設定とその実証方法としての実験または観察についての計画、実施、整理ができる。
- ・論文形式で研究成果をまとめることができる。

情報コミュニケーション科学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

金子 孝夫

授業概要

音声、画像、データなどのマルチメディアによる情報コミュニケーション科学研究の基礎手法について、実験と研究動向の調査などの研究指導を行う。具体的には、デジタル情報処理、デジタルデータ伝送、コンピュータによるデータ入出力、ヒューマンインタフェースなどの情報コミュニケーション科学研究のための入門技術を調査研究の対象とする。

授業の到達目標

- ・本研究指導の調査研究によって、修士論文を執筆できるようになる。

情報コミュニケーション技術論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

スコット ダグラス

授業概要

Individualized research related to information and communication technologies. Contact the professor in advance to discuss your proposed project. All work is done in English. TOEIC scores of 700 above are necessary.

授業の到達目標

- ・Goals include completing a research paper on a topic related to information and communication technologies.

情報メディア教育論研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

森田 裕介

授業概要

情報メディアを活用した教育に関する研究について、方法、開発、評価の観点から理解を深めるよう支援を行うとともに研究方法を指導する。受講者は、各自で論文を検索し、精読する。そして、情報メディアを活用した教育について、教育現場の視点から「問題は何か」を問い、具体的かつ実践的な問題解決を行うための計画を立案する。立案について十分な議論を重ねたのち、実際の研究（開発、実験、調査など）を実施し、データを収集する。データについては、統計的な手法を用いた解析までのプロセスを習得する。

授業の到達目標

本講義の到達目標は、（１）情報メディアを活用した教育に関する研究論文を読み、問題点を示すことができる、（２）プレゼンテーションを作成することができる、（３）研究上の有用性や問題点、限界等について自分の考えを論理的に文章としてまとめ、学会等において成果を公表することができる、の３点である。

ネットワーク情報システム学研究指導 A（春学期）・B（秋学期）

金 群

授業概要

A（春学期）

ユビキタス技術の発展に伴い、情報システムは益々多様化、大規模化の様相を呈し、様々なレベルでの情報融合、サイバー空間と実社会の統合が進んでいる。そこで、情報・情報システムに関する科学を学際的観点からとらえ、システム利用者である人間のふるまいを考慮した広い視野と、人間中心という絞った視点に立って、情報技術の高度化で生じる諸課題と社会への影響や人間中心のネットワーク情報システムの未来像について探究し、何時でも何処でも誰もが容易かつ持続的に利用可能な情報環境の構築を実現する研究指導を行う。

B（秋学期）

ユビキタス技術の発展に伴い、情報システムは益々多様化、大規模化の様相を呈し、様々なレベルでの情報融合、サイバー空間と実社会の統合が進んでいる。そこで、何時でも何処でも誰もが容易かつ持続的に利用可能な情報環境の構築を実現するため、従来のソフトウェア工学的アプローチに加え、システム利用者である人間のふるまいを考慮した学際的視野に立って、総合的かつ体系的な設計・構築・評価方法論を研究開発するとともに、ネットワーク情報システムの高度化をめざした理論と応用の両面にわたる研究指導を行う。

授業の到達目標

研究分野を横断する学際的視点に立って、ネットワーク情報システム学および関連専門分野への理解とそれらを柔軟に応用でき、さらに、新しい技術の動向にすばやく対応できるような、見識の豊かな研究者・技術者を育成する。

環境管理計画学ゼミ（１） A（春学期）

天野 正博

授業概要 地球環境問題の大部分は人為活動によって引き起こされている。また、顕著に環境問題が生じている地域では往々にして貧困、過疎、人口の急増など、社会的な歪みが存在していることが多い。演習では都市と農村、先進国と途上国の間にある格差が環境問題を与えている影響について、アマルティア・センの「不平等の再検討」をテキストにし公平性という視点から考える。

授業の到達目標

・地球環境問題について問題の構造、解決すべき視点について十分な理解ができる。

授業計画

- 第1回：公平と平等
- 第2回：人間の多様性と基礎的平等
- 第3回：自由、機会および選択
- 第4回：機能と潜在能力
- 第5回：価値対象と評価空間
- 第6回：効用と潜在能力
- 第7回：福祉とエージェンシー
- 第8回：自由と福祉の関係
- 第9回：ロールズの正義と政治的構想
- 第10回：福祉の向上における多様な目的と個人特性
- 第11回：厚生経済学における不平等の評価
- 第12回：社会的貧困と経済的貧困
- 第13回：不平等と貧困
- 第14回：ジェンダーと不平等
- 第15回：潜在能力、自由そして動機

参考文献 アマルティア・セン、「不平等の再検討ー潜在能力と自由」（岩波書店、1999年）

成績評価方法

レポート	40%
平常点評価	40% 議論への参加度合い
その他	20% 出席回数

環境管理計画学ゼミ（１） B（秋学期）

天野 正博

授業概要 IPCC 第4次評価報告書、及び第5次評価報告書の統合化レポートにより、気候変動が生じる物理的なメカニズム、気候変動が与えるインパクト、地球温暖化対策、気温が上昇した際の適応化施策について学ぶ。また、気候変動枠組み条約および京都議定書の前文と主要な条文を読み解き、地球環境問題に対する国際的な取り組みについて、理解を深める。

授業の到達目標

・地球環境問題の解決方策について、グローバルな観点から考えることが出来る。

授業計画

- 第1回：気候変動のメカニズム 1
- 第2回：気候変動のメカニズム 2
- 第3回：気候変動による影響
- 第4回：地球温暖化と生態系システム 1
- 第5回：地球温暖化と生態系システム 2
- 第6回：温室効果ガスの排出
- 第7回：温室効果ガスを排出するドライバー
- 第8回：地球温暖化の感度とフィードバックシステム
- 第9回：地球温暖化の人為要因と自然要因
- 第10回：地球温暖化の予測シナリオ
- 第11回：気候変動予測
- 第12回：気候変動の影響予測
- 第13回：気候変動のリスクと適応性
- 第14回：気候変動枠組み条約
- 第15回：京都議定書

成績評価方法

レポート	40%
平常点評価	40% 議論への参加度合い
その他	20% 出席回数

環境管理計画学ゼミ（２） A（春学期）

天野 正博

授業概要 地球環境問題に関連する国際的な取り決めについて、その背景、内容を理解する。次に環境問題が生じている山村、途上国のフィールドにおいて実際に調査を行いながら、ゼミ（１）で学んだ公平性の概念に基づいて、生じている環境問題が社会にどのような影響を与えているかを調査し、自然科学だけでなく社会科学적인見地からも情報の収集を行う。得られたデータから問題の構造を分析しモデル化をするとともに、解決策を提案する。

授業の到達目標

環境問題が生じる背景を理解し、問題を引き起こす要因を具体的に指摘できる。また、問題を解決するための具体案を提示できるようになる。

授業計画

- 第1回：輪読（１）
- 第2回：輪読（２）
- 第3回：輪読（３）
- 第4回：輪読（４）
- 第5回：輪読（５）
- 第6回：現地調査手法（１）
- 第7回：現地調査手法（２）
- 第8回：現地調査手法（３）
- 第9回：現地調査手法（４）
- 第10回：現地調査手法（５）
- 第11回：データ分析（１）
- 第12回：データ分析（２）
- 第13回：データ分析（３）
- 第14回：データ分析（４）
- 第15回：データ分析（５）

成績評価方法

レポート	40%
平常点評価	40% 議論への参加度合い
その他	20% 出席回数

環境管理計画学ゼミ（２） B（秋学期）

天野 正博

授業概要 環境管理計画学ゼミ（２）Aで実施した我が国の山村および途上国での調査をさらに進め、環境問題を引き起こしているドライビング・ファクターを特定する調査手法を学ぶ。また、解決策として重要な住民の潜在能力を、住民のワークショップや彼らへの面談を通して把握する手法を習得する。

授業の到達目標

環境問題を引き起こす社会経済環境を解明することが出来るようになる。また、社会開発を進めることにより環境問題を解決するプロセスを習得できる。

授業計画

- 第1回：修士論文作成（１）
- 第2回：修士論文作成（２）
- 第3回：修士論文作成（３）
- 第4回：修士論文作成（４）
- 第5回：データ分析指導（１）
- 第6回：データ分析指導（２）
- 第7回：データ分析指導（３）
- 第8回：データ分析指導（４）
- 第9回：データ分析指導（５）
- 第10回：データ分析指導（６）
- 第11回：修士論文作成（１）
- 第12回：修士論文作成（２）
- 第13回：修士論文作成（３）
- 第14回：修士論文作成（４）
- 第15回：修士論文作成（５）

成績評価方法

レポート	40%
平常点評価	40% 議論への参加度合い
その他	20% 出席回数

水域環境学ゼミ（１）A（春学期）

井内 美郎

授業概要 地球規模環境問題の自然科学的側面の例として水収支を取り上げる。記録の指標として湖水面高度を取り上げ、その変動について研究の現状、日本での研究例について、現在進行中の研究も例にとりあげながら展開する。

授業の到達目標

・地球規模気候変動に関する様々な要因を考慮して、日本列島の水収支についての議論が可能となる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：地球環境変動と水収支
- 第3回：湖水面高度を決めるもの－水収支－
- 第4回：水収支に関する論文検索－論文検索とは
- 第5回：水収支に関する論文検索－論文検索法
- 第6回：水収支に関する論文検索－検索の実際
- 第7回：水収支に関する論文検索－検索論文の整理
- 第8回：水収支に関する論文検索－まとめ－
- 第9回：水収支に関する論文のとりまとめ－最近の研究動向
- 第10回：水収支に関する論文のとりまとめ－研究史
- 第11回：水収支に関する論文のとりまとめ－研究の進展
- 第12回：水収支に関する論文のとりまとめ－今後の方向
- 第13回：湖水面高度推定法－堆積物を用いる方法
- 第14回：湖水面高度推定法－音波探査記録を用いる方法
- 第15回：まとめ

教科書 特に指定しない

参考文献 適宜紹介する

成績評価方法

レポート 100% 適宜レポートを課す

備考・関連URL 開講回数の1／3以上欠席の場合、成績評価は行わない。
本講義は学生の主体的取り組みを前提としている。

水域環境学ゼミ（１）B（秋学期）

井内 美郎

授業概要 地球規模環境問題の自然科学的側面の例として水収支を取り上げる。記録の指標として湖水面高度を取り上げ、その変動について研究の現状、日本での研究例について、現在進行中の研究も例にとりあげながら展開する。

授業の到達目標

・地球規模気候変動に関する様々な要因を考慮して、日本列島の水収支についての議論が可能となる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：湖水面高度推定法－序－
- 第3回：音波探査記録の束層序学的検討－束層序学とは
- 第4回：音波探査記録の束層序学的検討－海水準変動
- 第5回：音波探査記録の束層序学的検討－低海水準期堆積体
- 第6回：音波探査記録の束層序学的検討－海進期堆積体
- 第7回：音波探査記録の束層序学的検討－高海水準期堆積体
- 第8回：音波探査記録の束層序学的検討－「海退期」堆積体
- 第9回：琵琶湖音波探査記録の束層序学的検討－琵琶湖の音波探査記録
- 第10回：琵琶湖音波探査記録の束層序学的検討－反射面とその年代
- 第11回：琵琶湖音波探査記録の束層序学的検討－湖水面変動とその要因
- 第12回：野尻湖音波探査記録の束層序学的検討－野尻湖の音波探査記録
- 第13回：野尻湖音波探査記録の束層序学的検討－反射面とその年代
- 第14回：野尻湖音波探査記録の束層序学的検討－湖水面変動とその要因
- 第15回：まとめ

教科書 特に指定しない

参考文献 適宜紹介する

成績評価方法

レポート 100% 適宜レポートを課す

備考・関連URL 開講回数の1／3以上欠席の場合、成績評価は行わない。
本講義は学生の主体的取り組みを前提としている。

水域環境学ゼミ（２）A（春学期）

井内 美郎

授業概要 地球規模環境問題の自然科学的側面の例として気候変動を取り上げる。記録の指標として生物源シリカを取り上げ、その変動について研究の現状、日本での研究例について、現在進行中の研究も例にとりあげながら展開する。

授業の到達目標

・地球規模気候変動に関する様々な要因を考慮して、日本列島の気候変動についての議論が可能となる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：地球環境変動と気候変動
- 第3回：琵琶湖における研究の現状
- 第4回：気候変動の要因とその応答に関する論文検索－海洋酸素同位体比
- 第5回：気候変動の要因とその応答に関する論文検索－日射量変動
- 第6回：気候変動の要因とその応答に関する論文検索－氷床コア
- 第7回：気候変動の要因とその応答に関する論文検索－海洋堆積物
- 第8回：気候変動の要因とその応答に関する論文検索－モンスーン
- 第9回：気候変動の要因とその応答に関する論文のとりまとめ－海洋酸素同位体比
- 第10回：気候変動の要因とその応答に関する論文のとりまとめ－日射量変動
- 第11回：気候変動の要因とその応答に関する論文のとりまとめ－氷床コア
- 第12回：気候変動の要因とその応答に関する論文のとりまとめ－海洋堆積物
- 第13回：気候変動の要因とその応答に関する論文のとりまとめ－モンスーン
- 第14回：気候変動の要因とその応答に関する議論
- 第15回：まとめ

教科書 特に指定しない

参考文献 適宜紹介する

成績評価方法

レポート 100% 適宜レポートを課す

備考・関連URL 開講回数の1/3以上欠席の場合、成績評価は行わない。
本講義は学生の主体的取り組みを前提としている。

水域環境学ゼミ（２）B（秋学期）

井内 美郎

授業概要 地球規模環境問題の自然科学的側面の例として気候変動を取り上げる。記録の指標として生物源シリカを取り上げ、その変動について研究の現状、日本での研究例について、現在進行中の研究も例にとりあげながら展開する。

授業の到達目標

・地球規模気候変動に関する様々な要因を考慮して、日本列島の気候変動についての議論が可能となる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：グローバルな気候変動と各地での「遅延」について－序－
- 第3回：気候変動の要因と各地での「遅延」－日本周辺域
- 第4回：気候変動の要因と各地での「遅延」－太平洋域
- 第5回：気候変動の要因と各地での「遅延」－インド洋域
- 第6回：気候変動の要因と各地での「遅延」－まとめ
- 第7回：琵琶湖の応答－生物源シリカ
- 第8回：琵琶湖の応答－湖水面変動
- 第9回：琵琶湖の応答－まとめ
- 第10回：野尻湖の応答－生物指標
- 第11回：野尻湖の応答－湖水面変動
- 第12回：野尻湖の応答－まとめ
- 第13回：気候変動と応答の「遅延」について
- 第14回：「遅延」はなぜ生じるのか
- 第15回：まとめ

教科書 特に指定しない

参考文献 適宜紹介する

成績評価方法

レポート 100% 適宜レポートを課す

備考・関連URL 開講回数の1/3以上欠席の場合、成績評価は行わない。
本講義は学生の主体的取り組みを前提としている。

生物圏生態学ゼミ（１） A（春学期）

太田 俊二

授業概要 地球環境システムの重要な構成要素である生物圏（人間圏を含む）に関わるさまざまな研究をとりあげ、気候学、生態学などの領域の最新の研究動向について理解していく。また、気候データ、地理情報、エネルギー利用などに関する膨大なデータの収集と整備を各自の修士研究にあわせて進めていく。

授業の到達目標

- ・ 大量のデータを管理することができるようになる。
- Ad56-3、4、B56-3、4

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：生態学の考え方、基本用語の整理（1）
- 第3回：生態学の考え方、基本用語の整理（2）
- 第4回：生態学の考え方、基本用語の整理（3）
- 第5回：生態学の考え方、基本用語の整理（4）
- 第6回：生態学に関する新着論文の輪読（1）
- 第7回：生態学に関する新着論文の輪読（2）
- 第8回：生態学に関する新着論文の輪読（3）
- 第9回：過去のデータベースの確認（1）新着論文との関連
- 第10回：過去のデータベースの確認（2）新着論文との関連
- 第11回：過去のデータベースの確認（3）新着論文との関連
- 第12回：新しい気候データベースの作成方針（作成するデータベースは毎年異なる）
- 第13回：新しい気候データベースの作成（1）
- 第14回：新しい気候データベースの作成（2）
- 第15回：新しい気候データベースの作成（3）

成績評価方法

平常点評価 100% 取り組みを直接評価する。

備考・関連URL 各回の内容に関して、受講者各自が事前に準備を行い、授業時間中に作業過程や結果などについて報告する。

生物圏生態学ゼミ（１） B（秋学期）

太田 俊二

授業概要 地球環境システムの重要な構成要素である生物圏（人間圏を含む）に関わるさまざまな研究をとりあげ、気候学、生態学などの領域の最新の研究動向について理解していく。また、気候データ、地理情報、エネルギー利用などに関する膨大なデータの収集と整備を各自の修士研究にあわせて進めていく。

授業の到達目標

- ・ 大量のデータを管理することができるようになる。
- Ad56-3、4、B56-3、4

授業計画

- 第1回：新しい気候データベースの作成（1）
- 第2回：新しい気候データベースの作成（2）
- 第3回：新しい気候データベースの作成（3）
- 第4回：新しい気候データベースの作成（4）
- 第5回：エネルギー利用のデータベースの作成（1）
- 第6回：エネルギー利用のデータベースの作成（2）
- 第7回：エネルギー利用のデータベースの作成（3）
- 第8回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認（1）
- 第9回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認（2）
- 第10回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認（3）
- 第11回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認（4）
- 第12回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（1）
- 第13回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（2）
- 第14回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（3）
- 第15回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（4）

成績評価方法

平常点評価 100% 取り組みを直接評価する。

備考・関連URL 各回の内容に関して、受講者各自が事前に準備を行い、授業時間中に作業過程や結果などについて報告する。

生物圏生態学ゼミ（２） A（春学期）

太田 俊二

授業概要 修士研究課題と関連する過去から現在までの原著論文、総説を多数収集して、各自の修士研究の位置づけを整理、再考する。同時に、収集した原著論文のデジタルなデータベース化をはかる。

授業の到達目標
・ 各自の修士研究のテーマに促して必要な論文を管理することができるようになる。
Ad56-3、4、B56-3、4

授業計画
第1回：ガイダンス、過去のデータベースの確認、主要学術雑誌の検索
第2回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査（1）
第3回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査（2）
第4回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査（3）
第5回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査（4）
第6回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査（5）
第7回：abstract、著者等の整理（1）
第8回：abstract、著者等の整理（2）
第9回：abstract、著者等の整理（3）
第10回：興味あるテーマ、手法等の整理（1）
第11回：興味あるテーマ、手法等の整理（2）
第12回：興味あるテーマ、手法等の整理（3）
第13回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（1）
第14回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（2）
第15回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（3）

成績評価方法
平常点評価 100% 取り組みを直接評価する。

備考・関連URL 各回の内容に関して、受講者各自が事前に準備を行い、授業時間中に作業過程や結果などについて報告する。

生物圏生態学ゼミ（２） B（秋学期）

太田 俊二

授業概要 修士研究課題と関連する過去から現在までの原著論文、総説を多数収集して、各自の修士研究の位置づけを整理、再考する。同時に、収集した原著論文のデジタルなデータベース化をはかる。

授業の到達目標
・ 各自の修士研究のテーマに促して必要な論文を管理することができるようになる。
Ad56-3、4、B56-3、4

授業計画
第1回：PDFの管理、データベースの作成（1）
第2回：PDFの管理、データベースの作成（2）
第3回：PDFの管理、データベースの作成（3）
第4回：PDFの管理、データベースの作成（4）
第5回：PDFの管理、データベースの作成（5）
第6回：PDFの管理、データベースの作成（6）
第7回：PDFの管理、データベースの作成（7）
第8回：PDFの管理、データベースの作成（8）
第9回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（1）
第10回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（2）
第11回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出（3）
第12回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（1）
第13回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（2）
第14回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（3）
第15回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表（4）

成績評価方法
平常点評価 100% 取り組みを直接評価する。

備考・関連URL 各回の内容に関して、受講者各自が事前に準備を行い、授業時間中に作業過程や結果などについて報告する。

大気環境科学ゼミ（１） A（春学期）

松本 淳

授業概要 大気環境科学分野に関する各自の修士課程での研究を遂行するために、輪読や論文調査を通して、基礎事項から最新の研究動向までを理解し、研究の背景・目的を明確にする。特に、対流圏大気化学について、光化学オキシダントやその関連成分の大気動態を中心として、室内実験・大気観測・モデル計算などの研究動向を調査・把握する。

授業の到達目標

文献や書籍の調査・精読・紹介資料の作成・発表といった一連の作業を通して、他者にわかりやすく説明する経験を積むとともに、大気環境科学に関する各自の研究の背景・目的を明確にする。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本講義の目的と概要について説明します。
 第2回：大気環境科学の基礎的事項（１）
 第3回：大気環境科学の基礎的事項（２）
 第4回：輪読（１）大気組成の単位と大気圧
 第5回：輪読（２）化学反応の動力学
 第6回：輪読（３）対流圏の酸化力
 第7回：輪読（４）オゾンによる大気汚染
 第8回：輪読（５）エアロソル
 第9回：輪読（６）酸性雨
 第10回：輪読（７）化学物質の循環
 第11回：輪読（８）簡略化モデル
 第12回：輪読（９）大気の輸送
 第13回：輪読（10）成層圏オゾン
 第14回：輪読（11）温室効果
 第15回：輪読のまとめ

教科書 ジェイコブ「大気化学入門」（東京大学出版）

参考文献 秋元肇「対流圏大気の化学と地球環境」ほか、授業中に随時紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 演習への取り組み姿勢を総合的に評価する。

大気環境科学ゼミ（１） B（秋学期）

松本 淳

授業概要 大気環境科学分野に関する各自の修士課程での研究を遂行するために、輪読や論文調査を通して、基礎事項から最新の研究動向までを理解し、研究の背景・目的を明確にする。特に、対流圏大気化学について、光化学オキシダントやその関連成分の大気動態を中心として、室内実験・大気観測・モデル計算などの研究動向を調査・把握する。

授業の到達目標

文献や書籍の調査・精読・紹介資料の作成・発表といった一連の作業を通して、他者にわかりやすく説明する経験を積むとともに、大気環境科学に関する各自の研究の背景・目的を明確にする。

授業計画

- 第1回：学術論文の調査・紹介に関するガイダンス
 第2回：最近の学術論文の調査・リストアップ（１）
 第3回：最近の学術論文の調査・リストアップ（２）
 第4回：最近の学術論文の紹介・発表（１）
 第5回：最近の学術論文の紹介・発表（２）
 第6回：最近の学術論文の紹介・発表（３）
 第7回：最近の学術論文の紹介・発表（４）
 第8回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の調査（１）
 第9回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の調査（２）
 第10回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の紹介・発表（１）
 第11回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の紹介・発表（２）
 第12回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の紹介・発表（３）
 第13回：各自の研究テーマと関連の深い過去の論文の紹介・発表（４）
 第14回：過去の論文から得た知識等を各自の研究に活用する（１）
 第15回：過去の論文から得た知識等を各自の研究に活用する（２）

教科書 ジェイコブ「大気化学入門」（東京大学出版）

参考文献 秋元肇「対流圏大気の化学と地球環境」ほか、授業中に随時紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 演習への取り組み姿勢を総合的に評価する。

大気環境科学ゼミ（２） A（春学期）

松本 淳

授業概要 大気環境科学分野に関する修士課程での研究を遂行するために、各自の進捗状況の報告（プログレス・レポート）および学会等での研究成果発表のための準備を通して、現状の把握、研究遂行のための考察・改善、成果のまとめと報告・発表を行ない、課せられたテーマを着実に遂行する能力を磨く。各自のテーマに合わせて、対流圏大気化学（光化学オキシダントやその関連成分の大気動態）にて重要な「室内実験」「大気観測」「モデル計算」それぞれについて、適切な研究遂行手順について学ぶ。

授業の到達目標

研究動向の把握・実験等の準備と実施・データの取得と解析・結果の検証と要約・成果の発表といった一連の作業を通して、各自が設定したテーマ・目標に向かって必要な課題を見出し解決する能力を身につける。特に、各自の研究の背景・目的・手順・結果・考察内容を的確にまとめ、他者にわかりやすく説明する能力を磨く。

授業計画

第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本講義の目的と概要について説明します。

第2回：大気環境科学全般の研究動向調査（１）

第3回：大気環境科学全般の研究動向調査（２）

第4回：進捗状況の報告（１）研究の背景・目的の設定（問題点の発見）１

第5回：進捗状況の報告（１）研究の背景・目的の設定（問題点の発見）２

第6回：進捗状況の報告（２）研究の具体的な手順の考察（解決法の提案）１

第7回：進捗状況の報告（２）研究の具体的な手順の考察（解決法の提案）２

第8回：進捗状況の報告（３）研究の具体的な手順の準備と工夫１

第9回：進捗状況の報告（３）研究の具体的な手順の準備と工夫２

第10回：進捗状況の報告（４）初期データの紹介と初歩的な考察１

第11回：進捗状況の報告（４）初期データの紹介と初歩的な考察２

第12回：進捗状況の報告（５）改善すべき点の検討（新たな問題点の発見と対策の提案）１

第13回：進捗状況の報告（５）改善すべき点の検討（新たな問題点の発見と対策の提案）２

第14回：進捗状況の報告（６）改善点の準備

第15回：これまでの進捗状況のまとめ・報告

教科書 指定しない。

参考文献 必要に応じて講義中に随時紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 演習への取り組み姿勢を総合的に評価する。

大気環境科学ゼミ（２） B（秋学期）

松本 淳

授業概要 大気環境科学分野に関する修士課程での研究を遂行するために、各自の進捗状況の報告（プログレス・レポート）および学会等での研究成果発表のための準備を通して、現状の把握、研究遂行のための考察・改善、成果のまとめと報告・発表を行ない、課せられたテーマを着実に遂行する能力を磨く。各自のテーマに合わせて、対流圏大気化学（光化学オキシダントやその関連成分の大気動態）にて重要な「室内実験」「大気観測」「モデル計算」それぞれについて、適切な研究遂行手順について学ぶ。

授業の到達目標

研究動向の把握・実験等の準備と実施・データの取得と解析・結果の検証と要約・成果の発表といった一連の作業を通して、各自が設定したテーマ・目標に向かって必要な課題を見出し解決する能力を身につける。特に、各自の研究の背景・目的・手順・結果・考察内容を的確にまとめ、他者にわかりやすく説明する能力を磨く。

授業計画

第1回：室内実験に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（１）

第2回：室内実験に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（２）

第3回：大気観測に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（１）

第4回：大気観測に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（２）

第5回：モデル計算に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（１）

第6回：モデル計算に基づく大気環境科学研究の研究動向調査（２）

第7回：進捗状況の報告（７）改善結果の紹介と考察１

第8回：進捗状況の報告（７）改善結果の紹介と考察２

第9回：成果発表の準備（１）発表する内容やデータの整理・確認

第10回：成果発表の準備（２）発表する学会・学術雑誌の調査・選定

第11回：成果発表の準備（３）発表の「たたき台」の作成

第12回：成果発表の準備（４）発表の練習 または 原稿の推敲

第13回：成果発表の準備（５）発表内容の確定～発表

第14回：成果発表の反省・まとめ

第15回：大気環境科学の研究遂行と成果発表に関するまとめ

教科書 指定しない。

参考文献 必要に応じて講義中に随時紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 演習への取り組み姿勢を総合的に評価する。

動物行動生態学ゼミ（１） A（春学期）

三浦 慎悟

授業概要 野生動物の行動生態及び個体群生態学についての基本的な理論や知識を紹介し、野生動物の社会構造、繁殖システム、性選択、適応戦略、また個体群動態などに関する知見を各種論文の輪読によって集積する。同時に野生動物のフィールドに滞在し、行動生態に関するデータ収集法と分析法を習得する。与えられた課題の達成度と出席、及び課題の発表状況によって評価する。

授業の到達目標
・研究課題の抽出とその分析視点と方法について学び、関連領域の文献を理解し、位置付けることができる（B56－１、B56－３、B56－４、C 6－２、D56－１）。

授業計画

- 第１回：イントロダクションと演習の進め方
- 第２回：演習に関する文献の紹介
- 第３回：研究論文の紹介と輪読
- 第４回：研究論文の紹介と輪読
- 第５回：研究論文の輪読
- 第６回：研究論文の輪読
- 第７回：研究論文の輪読
- 第８回：研究論文の輪読
- 第９回：研究論文の輪読
- 第10回：フィールド調査法とデータ収集
- 第11回：フィールド調査法とデータ収集
- 第12回：データの分析法
- 第13回：論文テーマの絞り込み
- 第14回：論文テーマの絞り込み
- 第15回：論文作成法

教科書 随時PDFファイルを配布する

参考文献 随時PDFファイルを配布する

成績評価方法

平常点評価 100% 文献輪読への取り組み、フィールド調査、分析

動物行動生態学ゼミ（１） B（秋学期）

三浦 慎悟

授業概要 野生動物の行動生態学及び個体群生態学についての基本的な理論や知識を踏まえ、研究テーマを絞り込み、データの収集法と分析法について議論し、決定し、実践する。同時に既往成果や文献などの調査し、得られた知見の位置づけを行う。

授業の到達目標
・研究課題を設定し、方法を習得し、論文を作成し、学会発表を行うことができる（B56－１、B56－３、B56－４、C 6－２、D56－１）。

授業計画

- 第１回：演習の進め方と研究テーマの絞り込み
- 第２回：研究テーマの設定
- 第３回：研究関連データ収集法
- 第４回：研究関連データ収集法
- 第５回：研究関連データ収集法
- 第６回：研究関連データ収集法
- 第７回：研究関連データ収集法
- 第８回：研究に関する文献輪読
- 第９回：研究に関する文献輪読
- 第10回：研究に関する文献輪読
- 第11回：研究に関する文献輪読
- 第12回：研究論文の作成
- 第13回：研究論文の作成
- 第14回：研究論文の作成
- 第15回：研究論文の作成

教科書 必要に応じて資料を配布

参考文献 必要に応じて資料を配布

成績評価方法

平常点評価 100% 課題の達成状況と論文のレベルを中心にを行う

動物行動生態学ゼミ（２） A（春学期）

三浦 慎悟

授業概要 野生動物の行動生態学及び個体群生態学についての基本的な理論や知識を踏まえ、研究テーマを絞り込み、データの収集法と分析法について議論し、決定し、実践する。同時に既往成果や文献などの調査し、得られた知見の位置づけとともに論文作成を行う。

授業の到達目標

文献を理解し位置づけることができる。データを収集し、分析することができる。論文を作成し、学会でプレゼンテーションすることができる（B56－１、B56－３、B56－４、C 6－２、D56－１）。

授業計画

第１回：ゼミの進め方
第２回：データの収集
第３回：データの収集
第４回：データの収集
第５回：データの収集
第６回：データの収集
第７回：データの収集
第８回：データの分析
第９回：データの分析
第１０回：データの分析
第１１回：データの分析
第１２回：文献の整理
第１３回：文献の整理
第１４回：文献の整理
第１５回：論文作成

教科書 必要に応じて配布

参考文献 必要に応じて配布

成績評価方法

平常点評価 100% 取り組み状況による

動物行動生態学ゼミ（２） B（秋学期）

三浦 慎悟

授業概要 野生動物の行動生態学及び個体群生態学の分野での研究テーマの設定を踏まえ、データの収集と分析について議論し、決定し、実践する。同時に既往成果や文献などの調査し、得られた知見の位置づけとともに論文作成を行う。

授業の到達目標

既往文献を理解し、整理することができる。データを分析し、論文を作成し、学会でプレゼンテーションを行うことができる（B56－１、B56－３、B56－４、C 6－２、D56－１）。

授業計画

第１回：ゼミの進め方
第２回：データの収集と分析
第３回：データの収集と分析
第４回：データの収集と分析
第５回：データの収集と分析
第６回：データの収集と分析
第７回：データの収集と分析
第８回：データの収集と分析
第９回：論文作成
第１０回：論文作成
第１１回：論文作成
第１２回：論文作成
第１３回：論文作成
第１４回：論文作成
第１５回：論文作成

教科書 必要に応じて配布

参考文献 必要に応じて配布

成績評価方法

平常点評価 100% 取り組み状況による

アジア社会論ゼミ（１）A（春学期）

店田 廣文

授業概要 受講者の研究関心に即して、中東・北アフリカやアジア・日本社会に関する社会学文献の講読と発表をおこなう。また各自の研究課題の検討をしながら、研究テーマの絞り込みをおこなう。学部演習と共同して実施する実態調査に参加させ、調査研究能力を養成する。

授業の到達目標

- ・基礎的な研究能力を修得する。（Aa5-1、Ac5-1）
- ・調査研究の企画・実施能力を習得する。（C5-1）

授業計画

- 第1回：イントロダクション（１）中東・北アフリカ研究
- 第2回：イントロダクション（２）アジア・日本研究
- 第3回：社会学基本文献講読・発表（１）社会
- 第4回：社会学基本文献講読・発表（２）社会構造
- 第5回：社会学基本文献講読・発表（３）都市
- 第6回：社会学基本文献講読・発表（４）都市化
- 第7回：社会学基本文献講読・発表（５）人口
- 第8回：社会学基本文献講読・発表（６）人口変動
- 第9回：社会学基本文献講読・発表（７）人口移動
- 第10回：社会学基本文献講読・発表（８）少子化
- 第11回：社会学基本文献講読・発表（９）高齢化
- 第12回：社会学基本文献講読・発表（１０）移民
- 第13回：社会学基本文献講読・発表（１１）多文化社会
- 第14回：社会学基本文献講読・発表（１２）イスラーム
- 第15回：レポート提出と解説

教科書 特になし。

参考文献 特になし。

成績評価方法

レポート	55%	構成、内容、文章作成などによる評価
平常点評価	45%	出欠、発表への参加などによる評価

アジア社会論ゼミ（１）B（秋学期）

店田 廣文

授業概要 受講者の研究関心に即して、中東・北アフリカやアジア・日本社会に関する社会学文献の講読と発表をおこなう。また各自の研究課題の検討をしながら、研究テーマの絞り込みをおこなう。学部演習と共同して実施する実態調査に参加させ、調査研究能力を養成する。

授業の到達目標

- ・基礎的な研究能力を修得する。（Aa5-1、Ac5-1）
- ・調査研究の企画・実施能力を習得する。（C5-1）

授業計画

- 第1回：イントロダクション（１）中東・北アフリカ研究
- 第2回：イントロダクション（２）アジア・日本研究
- 第3回：社会学文献講読・発表（１）社会
- 第4回：社会学文献講読・発表（２）社会構造
- 第5回：社会学文献講読・発表（３）都市
- 第6回：社会学文献講読・発表（４）都市化
- 第7回：社会学文献講読・発表（５）人口
- 第8回：社会学文献講読・発表（６）人口変動
- 第9回：社会学文献講読・発表（７）人口移動
- 第10回：社会学文献講読・発表（８）少子化
- 第11回：社会学文献講読・発表（９）高齢化
- 第12回：社会学文献講読・発表（１０）移民
- 第13回：社会学文献講読・発表（１１）多文化社会
- 第14回：社会学文献講読・発表（１２）イスラーム
- 第15回：レポート提出と解説

教科書 特になし。

参考文献 特になし。

成績評価方法

レポート	55%	構成、内容、文章作成などによる評価
平常点評価	45%	出欠、発表への参加などによる評価

アジア社会論ゼミ（２）A（春学期）

店田 廣文

授業概要 アジア社会論ゼミ（１）をふまえて、各自の研究テーマに即した文献講読と発表をおこなう。また修士論文作成を前提として、学術論文作成と調査報告書作成に関する能力を養成する。

授業の到達目標

- ・研究者としての基礎能力である、論文作成能力を習得する。（Aa 6-1、Ac 6-1、B56-1）
- ・研究者としての基礎能力である、研究発表能力を習得する。（Ac 6-2、D56-1）

授業計画

- 第1回：調査イントロダクション（１）中東・北アフリカ
- 第2回：調査イントロダクション（２）アジア・日本
- 第3回：調査報告講読と発表（１）社会
- 第4回：調査報告講読と発表（２）社会構造
- 第5回：調査報告講読と発表（３）都市
- 第6回：調査報告講読と発表（４）都市化
- 第7回：調査報告講読と発表（５）人口
- 第8回：調査報告講読と発表（６）人口変動
- 第9回：調査報告講読と発表（７）人口移動
- 第10回：調査報告講読と発表（８）少子化
- 第11回：調査報告講読と発表（９）高齢化
- 第12回：調査報告講読と発表（10）移民
- 第13回：調査報告講読と発表（11）多文化社会
- 第14回：調査報告講読と発表（12）移民
- 第15回：レポートと講評

教科書 特になし。

参考文献 特になし。

成績評価方法

レポート	55%	構成、内容、文章作成などによる評価
平常点評価	45%	出欠、発表への参加などによる評価

アジア社会論ゼミ（２）B（秋学期）

店田 廣文

授業概要 アジア社会論ゼミ（１）をふまえて、各自の研究テーマに即した文献講読と発表をおこなう。また修士論文作成を前提として、学術論文作成と調査報告書作成に関する能力を養成する。

授業の到達目標

- ・研究者としての基礎能力である、論文作成能力を習得する。（Aa 6-1、Ac 6-1、B56-1）
- ・研究者としての基礎能力である、研究発表能力を習得する。（Ac 6-2、D56-1）

授業計画

- 第1回：調査イントロダクション（１）中東・北アフリカ
- 第2回：調査イントロダクション（２）アジア・日本
- 第3回：調査報告・論文講読と発表（１）社会
- 第4回：調査報告・論文講読と発表（２）社会構造
- 第5回：調査報告・論文講読と発表（３）都市
- 第6回：調査報告・論文講読と発表（４）都市化
- 第7回：調査報告・論文講読と発表（５）人口
- 第8回：調査報告・論文講読と発表（６）人口変動
- 第9回：調査報告・論文講読と発表（７）人口移動
- 第10回：調査報告・論文講読と発表（８）少子化
- 第11回：調査報告・論文講読と発表（９）高齢化
- 第12回：調査報告・論文講読と発表（10）移民
- 第13回：調査報告・論文講読と発表（11）多文化社会
- 第14回：調査報告・論文講読と発表（12）移民
- 第15回：レポートと講評

教科書 特になし。

参考文献 特になし。

成績評価方法

レポート	55%	構成、内容、文章作成などによる評価
平常点評価	45%	出欠、発表への参加などによる評価

家族社会学ゼミ（１） A（春学期）

池岡 義孝

授業概要 本演習では、家族社会学研究と質的調査研究の歴史と現状について解説をしたあと、質的家族研究が依拠している質的調査研究の方法と研究成果を主として文献講読によって検討する。そのことで秋学期の演習（１）Bの基礎力をつけるのが本演習の目的である。講読は邦文文献を主とするが、必要に応じて欧文文献も取り上げることがある。

授業の到達目標

- ・ 質的調査研究の方法と研究成果を学習し、理解を深める。
- ・ 質的調査研究の論文や著書を、批判することができるような評価能力を身につける。

授業計画

- 第1回：ガイダンス（本演習の目的と概要）
- 第2回：家族社会学研究の研究史と現状（欧米の場合）
- 第3回：家族社会学研究の研究史と現状（日本の場合）
- 第4回：質的調査研究の歴史と現状（欧米の場合）
- 第5回：質的調査研究の歴史と現状（日本の場合）
- 第6回：講読文献の選択と解説
- 第7回：欧米の質的調査研究の歴史についての文献講読
- 第8回：欧米の質的調査研究の現状についての文献講読
- 第9回：日本の質的調査研究の歴史についての文献講読
- 第10回：日本の質的調査研究の現状についての文献講読
- 第11回：インタビュー調査についての文献講読
- 第12回：生活史調査についての文献講読
- 第13回：言説分析についての文献講読
- 第14回：社会構築主義についての文献講読
- 第15回：総括（演習の成果と課題の確認）

参考文献 受講生と相談のうえで決定する。

成績評価方法

- レポート 30% 最終レポートによって学習成果を評価する。
平常点評価 70% 毎回の報告やディスカッションで理解度および授業への積極性を評価する。

家族社会学ゼミ（１） B（秋学期）

池岡 義孝

授業概要 質的調査研究一般について幅広く学習した家族社会学演習（１）Aをふまえて、質的家族研究の方法とその研究成果について、主として文献講読によって検討する。したがって、本演習で取り上げる文献は、質的な家族研究に限定する。邦文文献を主とするが、必要に応じて欧文文献も取り上げることがある。

授業の到達目標

- ・ 質的調査研究の方法と研究成果を学習し、理解を深める。
- ・ 質的調査研究の論文や著書を、批判することができるような評価能力を身につける。

授業計画

- 第1回：ガイダンス（本演習の目的と概要）
- 第2回：質的家族研究の歴史と現状（欧米の場合）
- 第3回：質的家族研究の歴史と現状（日本の場合）
- 第4回：講読文献の選択と解説
- 第5回：欧米の質的家族研究の歴史についての文献講読
- 第6回：日本の質的家族研究の歴史についての文献講読
- 第7回：欧米の質的家族研究の現状についての文献講読
- 第8回：日本の質的家族研究の現状についての文献講読
- 第9回：インタビューによる家族研究の文献講読
- 第10回：家族の言説分析の文献講読
- 第11回：生活史法を用いた家族研究の文献講読
- 第12回：エスノメソドロジーを用いた家族研究の文献講読
- 第13回：歴史社会学的方法を用いた家族研究の文献講読
- 第14回：社会構築主義を用いた家族研究の文献講読
- 第15回：総括（演習の成果と課題の確認）

参考文献 受講生と相談のうえで決定する。

成績評価方法

- レポート 30% 最終レポートによって学習成果を評価する。
平常点評価 70% 毎回の報告やディスカッションで理解度および授業への積極性を評価する。

家族社会学ゼミ（２） A（春学期）

池岡 義孝

授業概要 家族社会学演習（１）における社会調査の質的調査研究一般や質的家族研究の文献講読による学習を基礎にして、それと関連させながら各人の研究テーマを検討することが本演習の目的である。具体的には各人の研究テーマの報告とその検討を中心に進めることになる。また、必要に応じて、各人の研究テーマに関連した研究論文の報告と検討も行う。

授業の到達目標

- ・研究テーマに関連した文献を収集し、そのうち重要なものについての検討を実施する。
- ・各人の研究テーマを確定する。

授業計画

- 第1回：ガイダンス（本演習の目的と概要）
- 第2回：卒業研究の報告と検討
- 第3回：研究テーマ（希望するテーマ）の報告
- 第4回：研究テーマ（希望するテーマ）の検討
- 第5回：関連文献（基本的文献）の報告と検討
- 第6回：関連文献（応用的文献）の報告と検討
- 第7回：関連文献（専門的文献）の報告と検討
- 第8回：研究テーマ（再考したテーマ）の報告
- 第9回：研究テーマ（再考したテーマ）の検討
- 第10回：再考したテーマの関連文献（基本的文献）の報告と検討
- 第11回：再考したテーマの関連文献（応用的文献）の報告と検討
- 第12回：再考したテーマの関連文献（専門的文献）の報告と検討
- 第13回：研究テーマ（確定）の報告と検討
- 第14回：研究テーマの確定
- 第15回：総括（演習の成果と課題の確認）

参考文献 受講生と相談のうえで決定する。

成績評価方法

- レポート 50% 最終レポートによって学習成果を評価する。
平常点評価 50% 毎回の報告やディスカッションで理解度および授業への積極性を評価する。

家族社会学ゼミ（２） B（秋学期）

池岡 義孝

授業概要 家族社会学演習（２）Aで確定した研究テーマについて、その分析枠組、データ収集とデータ分析の方法などから、さらに詳しく検討するのが本演習の目的である。具体的には各人の研究テーマの報告とその検討を中心に進めることになるが、必要に応じて、各人の研究テーマに関連した研究論文の報告と検討も行う。

授業の到達目標

- ・先行研究の検討によって、研究の枠組みや方法を確定する。
- ・確定した研究枠組や方法にもとづいて、具体的に研究に着手する。

授業計画

- 第1回：ガイダンス（本演習の目的と概要）
- 第2回：研究テーマの報告と検討
- 第3回：研究テーマに関連する先行研究（基本的文献）の検討
- 第4回：研究テーマに関連する先行研究（専門的文献）の検討
- 第5回：研究枠組についての報告と検討
- 第6回：研究枠組の関連文献（基本的文献）の報告と検討
- 第7回：研究枠組の関連文献（専門的文献）の報告と検討
- 第8回：データ収集の方法についての報告と検討
- 第9回：データ収集の方法についての関連論文（基本的文献）の報告と検討
- 第10回：データ収集の方法についての関連論文（専門的文献）の報告と検討
- 第11回：データ分析の方法についての報告と検討
- 第12回：データ分析の方法についての関連論文（基本的文献）の報告と検討
- 第13回：データ分析の方法についての関連論文（専門的文献）の報告と検討
- 第14回：研究テーマと研究枠組み、データ収集と分析の方法についての最終的な報告と検討
- 第15回：総括（演習の成果と課題の確認）

参考文献 受講生と相談のうえで決定する。

成績評価方法

- レポート 50% 最終レポートによって学習成果を評価する。
平常点評価 50% 毎回の報告やディスカッションで理解度および授業への積極性を評価する。

環境社会学ゼミ（１） A（春学期）

鳥越 皓之

授業概要 環境社会学も多様な考え方や分析方法があるので、その長短を論じつつ、受講者が自分にとって有効な分析方法とはどのような方法であるかを見つけ出せるようなことを示唆するような授業をする。

授業の到達目標

・専門的なレベルの環境社会学的理解。とりわけ分析方法のマスターと調査法のマスター。

授業計画

- 第1回：環境問題とエコシステム
- 第2回：環境問題とエコシステムについての討議
- 第3回：コモンズ論
- 第4回：コモンズ論についての討議
- 第5回：農業のあり方と自然
- 第6回：農業のあり方と自然についての討議
- 第7回：環境社会学のいくつかのモデル
- 第8回：科学におけるモデルについての討議
- 第9回：生活環境主義モデル
- 第10回：生活環境主義モデルについての討議
- 第11回：住民の主体性
- 第12回：住民の主体性についての討議
- 第13回：ゴミとリサイクル
- 第14回：ゴミとリサイクルについての討議
- 第15回：総括討論

成績評価方法

平常点評価 100% 討議内容と報告内容

環境社会学ゼミ（１） B（秋学期）

鳥越 皓之

授業概要 環境社会学のいくつかのモデルの理解をつうじて、理論構成のしかたを述べる。また環境社会学的な調査法についても検討をする。

授業の到達目標

・環境社会学的分析方法をモデルをつうじて理解をする。

授業計画

- 第1回：社会的ジレンマ論
- 第2回：社会的ジレンマモデルについての討議
- 第3回：被害者・加害者モデル
- 第4回：被害者・加害者モデルについての討議
- 第5回：生活環境主義モデルの成立経緯
- 第6回：成立経緯からなにを考えられるかを討議
- 第7回：地域開発と環境
- 第8回：地域開発と環境についての討議
- 第9回：公共事業と地元の利害
- 第10回：公共事業と地元の利害についての討議
- 第11回：歴史的環境保全運動
- 第12回：歴史的環境保全運動についての討議
- 第13回：景観論
- 第14回：景観のありかたについての討議
- 第15回：ボランティアとNPO

成績評価方法

平常点評価 100% 討議内容と報告内容

環境社会学ゼミ（２） A（春学期）

鳥越 皓之

授業概要 著書の輪読と、出席者の発表をふまえて、環境社会学的な方法を教授する。

授業の到達目標

・環境社会学的分析方法のマスター。

授業計画

- 第1回：報告者の関心テーマの確認。
- 第2回：開発の型
- 第3回：開発の型についての討議
- 第4回：地域社会のローカル・ルール
- 第5回：ローカル・ルールについての討議
- 第6回：労働と環境史
- 第7回：労働と環境史についての討議
- 第8回：漁場と漁撈技術
- 第9回：漁場と漁撈技術についての討議
- 第10回：水辺コミュニティ
- 第11回：水辺コミュニティについての討議
- 第12回：水神の信仰
- 第13回：民間信仰と環境保全についての討議
- 第14回：コミュニティのあり方と環境
- 第15回：コミュニティのあり方と環境についての討議

教科書 鳥越皓之『霞ヶ浦の環境と水辺の暮らし』早稲田大学出版部。

成績評価方法

平常点評価 100% 討議の内容と報告内容

環境社会学ゼミ（２） B（秋学期）

鳥越 皓之

授業概要 著書の輪読と、出席者の発表をふまえて、環境社会学的な方法を教授する。各自のテーマとの関連性を考えながら討議をする。

授業の到達目標

・環境社会学的分析方法のマスター。自分の研究の問題点を知ること。

授業計画

- 第1回：出席者各自の研究内容の報告
- 第2回：コミュニティの環境保全への影響
- 第3回：コミュニティの環境保全への影響についての討議
- 第4回：環境NPO
- 第5回：環境NPOの課題についての討議
- 第6回：心安らぐ景観とはなにか
- 第7回：心安らぐ景観とはなにかについての討議
- 第8回：内発的發展論
- 第9回：内発的發展論についての討議
- 第10回：水質浄化とボランティア
- 第11回：水質浄化とボランティアについての討議
- 第12回：住民の環境意識
- 第13回：住民の環境意識についての調査法
- 第14回：パートナーシップ的發展論
- 第15回：パートナーシップ的發展論について総括的討議

教科書 鳥越皓之『霞ヶ浦の環境と水辺の暮らし』早稲田大学出版部。

成績評価方法

平常点評価 100% 討議内容と発表内容

地域資源論ゼミ（１） A（春学期）

柏 雅之

授業概要 食料・農業・農村および地域環境に関する専門的素養を涵養するために、専門書と研究論文の読み込みを行う。
ここでは、フードシステム、地域内発型アグリビジネス、日本農業再生、中山間地域再生、農業環境政策などがキーワードとなる。

授業の到達目標
・農業農村再生に関する専門的素養の涵養と実態調査や統計解析にもとづく高度の分析能力の涵養を目標とする。

授業計画
第1回：ガイダンス
第2回：食料の安全・安心問題
第3回：日本の食料自給力
第4回：フードシステムの理論
第5回：フードシステムの研究方法
第6回：地域内発型アグリビジネスの理論
第7回：地域内発型アグリビジネスの研究方法
第8回：日本農業の構造
第9回：地代論と農産物価格論
第10回：農民層分解の理論
第11回：日本農業の担い手問題（個別経営体）
第12回：日本農業の担い手問題（地域営農経営体）
第13回：日本農業の担い手問題（第3セクター、NPO、社会的企業）
第14回：農業と環境問題
第15回：環境農業政策

教科書 適宜指定する

参考文献
柏 雅之「現代中山間地域農業論」御茶の水書房、1994年。
柏 雅之「条件不利地域再生の論理と政策」農林統計協会、2002年。

成績評価方法
平常点評価 50% 報告・討論の姿勢
そ の 他 50% テキスト・論文購読の報告

備考・関連URL 他の研究室の大学院生も、受講を希望する者は面接を経て受け入れます。

地域資源論ゼミ（１） B（秋学期）

柏 雅之

授業概要
(1) 農業・農村政策の構造と改革の論理について学ぶ。日本、EU（欧州連合）、東アジアとの比較検討が一つの焦点となる。EUの農政改革の経験からわが国は何を学べるのか。日本の農政改革の方向について学界先端の議論を通して検討していく。
(2) 衰退する農山村（中山間地域）の再生の論理と方法について検討していく。EUの地域構造政策や共通農政（CAP）の農村振興政策の経験から学べるもの、公民パートナーシップ論、社会的企業論などを通して地域再生の方法を考えていく。

授業の到達目標
農政改革の比較研究が可能となる基礎力の涵養。地域再生戦略に関する研究が可能となる基礎力の涵養。これらをととして研究推進のノウハウを習得してもらう。

授業計画
第1回：ガイダンス
第2回：農業政策の論理と方法（農産物価格政策）
第3回：農業政策の論理と方法（農業構造政策）
第4回：農業政策の論理と方法（直接支払政策）
第5回：農政改革の論理
第6回：世界食料危機のインパクト
第7回：EUの共通農業政策（CAP）の構造
第8回：CAP改革の流れと展望
第9回：CAP改革からわが国が学べるもの
第10回：中山間地域問題
第11回：内発的地域開発の意義と限界
第12回：EUの地域構造政策
第13回：CAP農村振興政策
第14回：公民パートナーシップ・システムの意義と限界
第15回：社会的企業による地域再生の意義と展望

教科書 適宜指定する。

参考文献
柏 雅之「現代中山間地域農業論」御茶の水書房、1994年。
柏 雅之「条件不利地域再生の論理と政策」農林統計協会、2002年。

成績評価方法
平常点評価 50% 報告・討論の姿勢
そ の 他 50% テキスト・論文購読の報告

備考・関連URL 他の研究室の大学院生も、受講を希望する者は面接を経て受け入れます。

地域資源論ゼミ（２） A（春学期）

柏 雅之

授業概要 日本農業再生の論理と方法を学ぶ。地域農業再生戦略の構築に関する諸課題の検討である。今後の担い手として、個別経営体、地域営農経営体、第3セクター、NPO、社会的企業など多様な可能性が考えられるが、各々の意義と限界を通して、今後の地域農業再生戦力のあり方についての理論と方法を学ぶ。さらに政策システムの設計問題についても考えていく。

授業の到達目標

・日本農業再生の戦略と政策システム設計に関する高度の知見を涵養しうることを目標とする。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：農業再生の論理と方法（序論）
- 第3回：日本農業の構造問題（水田農業を中心に）
- 第4回：規模論と集約度論（適正水準とは何か）
- 第5回：個別経営体の意義と限界
- 第6回：中山間地域における個別大規模地経営の構造
- 第7回：集落営農と地域営農経営体
- 第8回：地域営農経営体の意義と限界
- 第9回：第3セクターと地域農業
- 第10回：NPOと地域農業
- 第11回：社会的企業とは何か
- 第12回：農業・農村問題と社会的企業
- 第13回：農業の担い手問題と政策システム
- 第14回：直接支払制度の制度設計の困難さ
- 第15回：地域農業再生戦略

教科書 適宜指定する。

参考文献

- 柏 雅之「現代中山間地域農業論」御茶の水書房、1994年。
柏 雅之「条件不利地域再生の論理と政策」農林統計協会、2002年。

成績評価方法

- 平常点評価 50% 報告・討論の姿勢
その他 50% テキスト・論文購読の報告

備考・関連URL 他の研究室の大学院生も、受講を希望する者は面接を経て受け入れます。

地域資源論ゼミ（２） B（秋学期）

柏 雅之

授業概要 （１）農村再生戦略と政策システムの論理と方法について学ぶ。わが国の内発的な農村活性化の歴史は長い、必ずしも定着してこなかった理由とベースに、地域ガバナンス構築の必要性を学ぶ。その場合、EU（欧州連合）の地域内発的開発政策の経験から日本が学べるものに着目していく。また、東アジアでは韓国の農村政策の経験から日本が学べるもの、逆に日本の経験から韓国が学べるものについて考えていく。

授業の到達目標

・農村再生戦略と政策システムに関する高度の専門能力涵養と研究遂行能力の獲得。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：外來型地域発展と内発型地域発展
- 第3回：日本農村の内発的発展の意義と限界
- 第4回：中山間地域再生の困難さ
- 第5回：中山間地域等直接支払制度の意義と限界
- 第6回：EU（欧州連合）の衰退地域再生政策
- 第7回：EUの地域構造改革の改革
- 第8回：LEADERプログラムの意義と限界
- 第9回：LEADERプログラムとソーシャルキャピタル
- 第10回：イギリスにおけるLEADERの優良事例から学べるもの
- 第11回：イングランドのLSP（地域戦略パートナーシップ）とLAA（地域協定）
- 第12回：イギリスの公民連携による地域再生政策の意義と展望
- 第13回：農業・農村問題と社会的企業（イギリスの歩みを中心に）
- 第14回：韓国の内発的農村再生政策
- 第15回：農村再生の戦略と政策とは

教科書 適宜指定する。

参考文献

- 柏 雅之「現代中山間地域農業論」御茶の水書房、1994年。
柏 雅之「条件不利地域再生の論理と政策」農林統計協会、2002年。

成績評価方法

- 平常点評価 50% 報告・討論の姿勢
その他 50% テキスト・論文購読の報告

備考・関連URL 他の研究室の大学院生も、受講を希望する者は面接を経て受け入れます。

都市社会学ゼミ（１） A（春学期）

臼井 恒夫

授業概要 2011年に日本都市社会学会が企画し刊行した『都市社会学セクション』（3巻、日本評論社）から、都市社会学で定評のある重要文献をとりあげて講読を進めていく。都市社会学を中心とした都市研究を進めていくためにはどれも必読文献であり、これらの文献を読み込むことによって、しっかりとした基礎を固めることが期待できる。いうまでもなく、受講生は毎回の文献の内容紹介と議論に関して、積極的な参加が求められる。

授業の到達目標

- (1) 都市社会学の多様な関心や論点について理解を深めることができる。
- (2) 都市社会学の歴史や系譜について知識を整理することができる。
- (3) 欧米の都市研究が日本の都市社会学に与えた影響について知識を得ることができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション／本講義の目的と概要について解説します。
第2回：G. ジンメル 「大都市と精神生活」
第3回：E. W. バージェス 「都市の成長」
第4回：R. E. パーク 「都市---都市環境における人間行動研究のための提案」
第5回：L. フース 「生活様式としてのアーバンイズム」
第6回：近江 哲男 「都市化の理論図式の再検討」
第7回：倉沢 進 「都市化の概念と理論的枠組」
第8回：鈴木 広 「アーバンゼーションの理論的問題」
第9回：G. ショバーク 「前産業型都市」
第10回：C. D. ハリス&E. L. ウルマン 「都市の性質」
第11回：W. ファイアレイ 「生態学の変数としての感情とシンボリズム」
第12回：H. ガンズ 「生活様式としてのアーバンイズムとサバーバンイズム」
第13回：B. ウェルマン&B. レイトン 「ネットワーク、近隣、コミュニティ」
第14回：C. S. フィッシャー 「アーバンイズムの下位文化理論に向かって」
第15回：レポート課題と解説

教科書 テキストはあらかじめ教場で配布する。

参考文献 参考文献は授業の中で指示する。

成績評価方法

- レポート 40% 授業期間の終了後にレポートを提出してもらう。
平常点評価 60% 通常の授業の中での報告と授業態度によって評価する。

都市社会学ゼミ（１） B（秋学期）

臼井 恒夫

授業概要 都市社会学ゼミ（１）Aに引き続き、『都市社会学セクション』（3巻、日本評論社）から、都市社会学で定評のある重要文献をとりあげて講読を進めていく。都市社会学を中心とした都市研究を進めていくためにはどれも必読文献であり、これらの文献を読み込むことによって、しっかりとした基礎を固めることが期待できる。いうまでもなく、受講生は毎回の文献の内容紹介と議論に関して、積極的な参加が求められる。

授業の到達目標

- (1) 都市社会学の多様な関心や論点について理解を深めることができる。
- (2) 都市社会学の歴史や系譜について知識を整理することができる。
- (3) 欧米の都市研究が日本の都市社会学に与えた影響について知識を得ることができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション／本講義の目的と概要について解説します。
第2回：鈴木 広 「都市研究における中範囲理論の試み」
第3回：倉沢 進・似田貝 香門 「都市社会構造論---概念枠組をめぐる若干の検討」
第4回：中村 八朗 「都市町会論の再検討」
第5回：H. モロッツ 「成長マシーンとしての都市」
第6回：J. フリードマン 「世界都市仮説」
第7回：S. サッセン 「新しい都市経済」
第8回：M. カステル 「ヨーロッパ都市、情報社会、グローバル経済」
第9回：D. ハーヴェイ 「社会的公正、ポストモダニズム、都市」
第10回：E. ソジャ 「ポスト・メトロポリスにかんする六つの言説」
第11回：秋元 律郎 「地域社会の権力構造とリーダーの構成」
第12回：奥田 道大 「住民の自己組織力」
第13回：藤田 弘夫 「都市と社会学研究」
第14回：A. H. ホーリー 「都市社会の人間生態学」
第15回：レポート課題と解説

教科書 テキストはあらかじめ教場で配布する。

参考文献 参考文献は授業の中で指示する。

成績評価方法

- レポート 40% 授業期間の終了後にレポートを提出してもらう。
平常点評価 60% 通常の授業の中での報告と授業態度によって評価する。

都市社会学ゼミ（２） A（春学期）

臼井 恒夫

授業概要 現代都市の変容について理解を深めていくために、多様な視点から検討を進めていく。そのためのテキストとして、今年度はD. Byrne, Understanding the Urban Palgrave, 2001. を使用する。受講生に毎回、本書の報告を分担してもらいながら、テキストの内容に沿って議論と考察を進めて行く。したがって、受講生は報告と議論への積極的な参加が求められることになる。

授業の到達目標

- (1) 現代都市の成立と変容を促す要因について理解を深めることができる。
- (2) 現代都市のもつ諸相や都市問題について理解することができる。
- (3) 欧米の都市と日本の都市の比較の視点を学ぶことができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション／本講義の目的と概要について解説します。
 第2回：The suburbs (1)
 第3回：The suburbs (2)
 第4回：Living, shopping and working ex-urban : edge city (1)
 第5回：Living, shopping and working ex-urban : edge city (2)
 第6回：What makes cities unequal ? (1)
 第7回：What makes cities unequal ? (2)
 第8回：The meaning of culture (1)
 第9回：The meaning of culture (2)
 第10回：The political economy of culture : city and suburb in the urban world (1)
 第11回：The political economy of culture : city and suburb in the urban world (2)
 第12回：The cultural turn : city as text (1)
 第13回：The cultural turn : city as text (2)
 第14回：Ways of being : the construction and reconstruction of collective identities (1)
 第15回：Ways of being : the construction and reconstruction of collective identities (2)

教科書 テキストはあらかじめ教場で配布する。

参考文献 参考文献は授業の中で指示する。

成績評価方法

- レポート 40% 授業期間の終了後にレポートを提出してもらう。
 平常点評価 60% 通常の授業の中での報告と授業態度によって評価する。

都市社会学ゼミ（２） B（秋学期）

臼井 恒夫

授業概要 都市社会学ゼミ（２）Aに引き続き、テキストとしてD. Byrne, Understanding the Urban Palgrave, 2001. を使用する。受講生に毎回、本書の報告を分担してもらいながら、テキストの内容に沿って議論と考察を進めて行く。したがって、受講生は報告と議論への積極的な参加が求められることになる。

授業の到達目標

- (1) 現代都市の成立と変容を促す要因について理解を深めることができる。
- (2) 現代都市のもつ諸相や都市問題について理解することができる。
- (3) 欧米の都市と日本の都市の比較の視点を学ぶことができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション／本講義の目的と概要について解説します。
 第2回：Land matters : building in space (1)
 第3回：Land matters : building in space (2)
 第4回：Shopping and trading : the postmodern urban core (1)
 第5回：Shopping and trading : the postmodern urban core (2)
 第6回：Shopping and trading : the postmodern urban core (3)
 第7回：Edge city : the creation of placeless place (1)
 第8回：Edge city : the creation of placeless place (2)
 第9回：Necessity for the local state (1)
 第10回：Necessity for the local state (2)
 第11回：Collective consumption (1)
 第12回：Collective consumption (2)
 第13回：Entrepreneurial regimes (1)
 第14回：Entrepreneurial regimes (2)
 第15回：Civil society, social movement and urban politics

教科書 テキストはあらかじめ教場で配布する。

参考文献 参考文献は授業の中で適宜、指示する。

成績評価方法

- レポート 40% 学期末の期末レポートにより評価する。
 平常点評価 60% 通常の授業における報告内容や授業態度によって評価する。

人口社会学ゼミ（１） A（春学期）

武田 尚子

授業概要 人口問題または人口移動論をテーマにした文献を講読し、人口データの分析手法・記述方法を学ぶ。
人口データを用いた論文執筆の研究計画を立案する。

授業の到達目標

- ・ 講読した文献の内容について、社会学的意義が十分に理解できている。
- ・ 講読した文献をもとに、研究方法を工夫する。

授業計画

- 第1回：授業内容について、ガイダンス
- 第2回：人口問題・人口移動論の文献講読 1
- 第3回：人口問題・人口移動論の文献講読 2
- 第4回：人口問題・人口移動論の文献講読 3
- 第5回：人口問題・人口移動論の文献講読 4
- 第6回：研究テーマの設定と検討 1
- 第7回：研究テーマの設定と検討 2
- 第8回：研究テーマの設定と検討 3
- 第9回：研究テーマの設定と検討 4
- 第10回：研究計画を立案・発表 1
- 第11回：研究計画を立案・発表 2
- 第12回：研究計画を立案・発表 3
- 第13回：研究計画を立案・発表 4
- 第14回：総括 1
- 第15回：総括 2

参考文献 授業中に適宜指示する。

成績評価方法

レポート	30%	授業内容の理解度と応用力
平常点評価	70%	授業内容の理解度と積極性

人口社会学ゼミ（１） B（秋学期）

武田 尚子

授業概要 人口問題または人口移動に関連する資料・データを収集し、分析・検討を行う。
または質的調査アーカイブを活用し、質的データ2次分析を実行し、検討する。

授業の到達目標

- ・ 活用したデータの内容について、社会学的意義が十分に理解できている。
- ・ 講読した文献をもとに、研究方法を工夫する。

授業計画

- 第1回：授業内容について、ガイダンス
- 第2回：資料・データの収集と分析 1
- 第3回：資料・データの収集と分析 2
- 第4回：資料・データの収集と分析 3
- 第5回：資料・データの収集と分析 4
- 第6回：中間報告 1
- 第7回：中間報告 2
- 第8回：資料・データの収集と分析 5
- 第9回：資料・データの収集と分析 6
- 第10回：資料・データの収集と分析 7
- 第11回：資料・データの収集と分析 8
- 第12回：最終報告 1
- 第13回：最終報告 2
- 第14回：総括 1
- 第15回：総括 2

参考文献 授業中に適宜指示する。

成績評価方法

レポート	30%	授業内容の理解度と応用力
平常点評価	70%	授業内容の理解度と積極性

人口社会学ゼミ（２） A（春学期）

武田 尚子

授業概要 地域社会学または質的調査方法をテーマにした文献を講読し、先行研究を検討し、地域社会の分析視角、調査方法を学ぶ。地域社会に焦点をあてた論文執筆の研究計画を立案する。

授業の到達目標

- ・ 講読した文献の内容について、社会学的意義が十分に理解できている。
- ・ 講読した文献をもとに、研究方法を工夫する。

授業計画

- 第1回：授業内容について、ガイダンス
- 第2回：地域社会学の文献講読 1
- 第3回：地域社会学の文献講読 2
- 第4回：地域社会学の文献講読 3
- 第5回：地域社会学の文献講読 4
- 第6回：研究テーマの設定と検討 1
- 第7回：研究テーマの設定と検討 2
- 第8回：研究テーマの設定と検討 3
- 第9回：研究テーマの設定と検討 4
- 第10回：研究計画を立案・発表 1
- 第11回：研究計画を立案・発表 2
- 第12回：研究計画を立案・発表 3
- 第13回：研究計画を立案・発表 4
- 第14回：総括 1
- 第15回：総括 2

参考文献 授業中に適宜指示する。

成績評価方法

レポート	30%	授業内容の理解度と応用力
平常点評価	70%	授業内容の理解度と積極性

人口社会学ゼミ（２） B（秋学期）

武田 尚子

授業概要 地域社会分析に関連する資料・データを収集し、分析・検討を行う。または質的調査アーカイブを活用し、質的データ2次分析を実行し、検討する。

授業の到達目標

- ・ 活用したデータの内容について、社会学的意義が十分に理解できている。
- ・ 講読した文献をもとに、研究方法を工夫する。

授業計画

- 第1回：授業内容について、ガイダンス
- 第2回：資料・データの収集と分析 1
- 第3回：資料・データの収集と分析 2
- 第4回：資料・データの収集と分析 3
- 第5回：資料・データの収集と分析 4
- 第6回：中間報告 1
- 第7回：中間報告 2
- 第8回：資料・データの収集と分析 5
- 第9回：資料・データの収集と分析 6
- 第10回：資料・データの収集と分析 7
- 第11回：資料・データの収集と分析 8
- 第12回：最終報告 1
- 第13回：最終報告 2
- 第14回：総括 1
- 第15回：総括 2

参考文献 授業中に適宜指示する。

成績評価方法

レポート	30%	授業内容の理解度と応用力
平常点評価	70%	授業内容の理解度と積極性

階級・階層論ゼミ（１） A（春学期）

橋本 健二

授業概要 階級・階層論の現状について解説したあと、学説史と研究史に関する概括的な文献と、最先端の研究書・研究論文を講読し、階級・階層論の研究史と到達点について理解する。文献は、邦文と欧文の２つのバージョンをもつ概説書と、各人の関心に沿った専門論文とする。

授業の到達目標

階級・階層論の研究史と到達点について理解し、これを批判的に検討することができるようになるとともに、これをみずからの研究テーマに活用できるだけの能力を身につけること。

授業計画

- 第1回：階級・階層論の研究動向 1
 第2回：階級・階層論の研究動向 2
 第3回：文献講読 『階級とは何か』 1
 第4回：文献講読 『階級とは何か』 2
 第5回：文献講読 『階級とは何か』 3
 第6回：文献講読 『階級とは何か』 4
 第7回：文献講読 『階級とは何か』 5
 第8回：文献講読 『階級とは何か』 6
 第9回：文献講読 階級・階層論の研究動向 1
 第10回：文献講読 階級・階層論の研究動向 2
 第11回：文献講読 階級・階層論の研究動向 3
 第12回：文献講読 階級・階層論の研究動向 4
 第13回：文献講読 階級・階層論の研究動向 5
 第14回：文献講読 階級・階層論の研究動向 6
 第15回：まとめと研究テーマの検討

教科書 スティーブン・エジェル（橋本健二訳）『階級とは何か』青木書店、2002年
 （原著：Stephen Edgell, 1993, Class, Routledge.）

*入手困難のため、入手できない場合は担当教員に相談すること。

参考文献 講義の際に指示する

成績評価方法

- レポート 40% 最終レポートの内容による
 平常点評価 60% 毎回の報告の内容による

階級・階層論ゼミ（１） B（秋学期）

橋本 健二

授業概要 階級・階層論ゼミ（１）Bに引き続き、学説史と研究史に関する概括的な文献と、最先端の研究書・研究論文を講読し、階級・階層論の研究史と到達点について理解する。文献は同じく、邦文と欧文の２つのバージョンをもつ概説書と、各人の関心に沿った専門論文とする。

授業の到達目標

階級・階層論の研究史と到達点について理解し、これを批判的に検討することができるようになるとともに、これを実際にみずからの研究テーマに活用する方向を見いだすこと。

授業計画

- 第1回：階級・階層論の研究動向 1
 第2回：階級・階層論の研究動向 2
 第3回：文献講読 『階級社会日本』 1
 第4回：文献講読 『階級社会日本』 2
 第5回：文献講読 『階級社会日本』 3
 第6回：文献講読 『階級社会日本』 4
 第7回：文献講読 『階級社会日本』 5
 第8回：文献講読 『階級社会日本』 6
 第9回：文献講読 階級・階層論の研究動向 1
 第10回：文献講読 階級・階層論の研究動向 2
 第11回：文献講読 階級・階層論の研究動向 3
 第12回：文献講読 階級・階層論の研究動向 4
 第13回：文献講読 階級・階層論の研究動向 5
 第14回：文献講読 階級・階層論の研究動向 6
 第15回：まとめと研究テーマの検討

教科書 橋本健二『階級社会日本』青木書店、2001年
 （英訳書：Hashimoto, Kenji, 2002, Class Structure in Contemporary Japan, Trans Pacific Press.）

*入手困難のため、入手できない場合は担当教員に相談すること

参考文献 講義の際に指示する

成績評価方法

- レポート 40% 最終レポートの内容による
 平常点評価 60% 毎回の報告の内容による

階級・階層論ゼミ（２） A（春学期）

橋本 健二

授業概要 階級・階層論ゼミ（１）で学んだ階級・階層論の理論と方法を前提に、各人の研究テーマと、研究上の課題について検討を進める。受講者はみずからの研究テーマについて着実に検討を進め、これについて継続的に報告することが求められる。

授業の到達目標

・階級・階層論の理論と方法を活用しながら、研究テーマについて検討を進め、最終的に研究テーマを確定すること。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：卒業研究の報告と検討
- 第3回：卒業研究に関連する文献の講読 1
- 第4回：卒業研究に関連する文献の講読 2
- 第5回：卒業研究に関連する文献の講読 3
- 第6回：研究テーマの検討 1
- 第7回：研究テーマの検討 2
- 第8回：研究テーマに関連する文献の講読 1
- 第9回：研究テーマに関連する文献の講読 2
- 第10回：研究テーマに関連する文献の講読 3
- 第11回：研究テーマに関連する文献の講読 4
- 第12回：研究テーマに関連する文献の講読 5
- 第13回：研究テーマに関連する文献の講読 6
- 第14回：研究テーマの検討 3
- 第15回：研究テーマの検討 4

教科書 講義の際に指示する

参考文献 講義の際に指示する

成績評価方法

平常点評価 100% 毎回の報告内容と研究テーマの検討の進行状況による

階級・階層論ゼミ（２） B（秋学期）

橋本 健二

授業概要 階級・階層論の理論と方法を前提に、各人の研究テーマに沿いながら、研究上の課題について検討を進める。受講者はみずからの研究テーマに沿って着実に研究を進め、これについて継続的に報告することが求められる。

授業の到達目標

・階級・階層論の理論と方法を活用しながら、研究テーマに沿って研究を進め、研究計画を立案すること。

授業計画

- 第1回：研究テーマと研究計画の検討 1
- 第2回：研究テーマと研究計画の検討 2
- 第3回：研究テーマに関連する文献の講読 1
- 第4回：研究テーマに関連する文献の講読 2
- 第5回：研究テーマに関連する文献の講読 3
- 第6回：研究テーマに関連する文献の講読 4
- 第7回：研究テーマに関連する資料とデータの検討 1
- 第8回：研究テーマに関連する資料とデータの検討 2
- 第9回：研究テーマに関連する資料とデータの検討 3
- 第10回：研究テーマに関連する資料とデータの検討 4
- 第11回：研究テーマに関連する文献の講読 5
- 第12回：研究テーマに関連する文献の講読 6
- 第13回：研究テーマと研究計画の検討 3
- 第14回：研究テーマと研究計画の検討 4
- 第15回：研究計画の確定

教科書 講義の際に指示する

参考文献 講義の際に指示する

成績評価方法

レポート 40% 学期最初に提出するレポートの内容による
平常点評価 60% 毎回の報告内容と研究テーマの検討の進行状況による

移住論ゼミ（１） A（春学期）

森本 豊富

授業概要 国内外の移民研究に関する和文・英文の論文を多読し「論文評価シート」を通じて批判的に考察し議論することで移民研究の広さと深さを知る。日本の公共図書館で唯一移民資料室をもつ和歌山市民図書館で文献調査をする。また、修士論文の調査・執筆に関する進捗状況を報告する。日本移民学会の年次大会の運営にも関わり研究者とのネットワーク作りも行う。

授業の到達目標

- ・移民研究の最新動向について知る。
- ・課題論文の議論に積極的に参加し、論理的に意見を述べる事が出来る。
- ・論文の書き方について学び、口頭発表を行う。

【中目標No.】 B56-1、2、3、4、C 6-1、D56-1、E56-2、F56-1、G36-1～9

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション
- 第3回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション
- 第4回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション
- 第5回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション
- 第6回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
- 第7回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
- 第8回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
- 第9回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
- 第10回：和歌山市民図書館移民資料室で文献調査
- 第11回：文献調査結果報告
- 第12回：修士論文テーマ及び研究計画発表
- 第13回：修士論文テーマ及び研究計画発表
- 第14回：修士論文テーマ及び研究計画発表
- 第15回：総括

教科書 適宜、論文を指定する。

参考文献 移民研究会（2008）『日本の移民研究 動向と文献目録Ⅰ／Ⅱ』明石書店

成績評価方法

- レポート 50% 論評シート他
平常点評価 50% 出席状況、ゼミでの発表など

移住論ゼミ（１） B（秋学期）

森本 豊富

授業概要 国内外の移民研究に関する和文・英文の論文を多読し「論文評価シート」を通じて批判的に考察し議論することで移民研究の広さと深さを知る。日本の公共図書館で唯一移民資料室をもつ和歌山市民図書館で文献調査をする。また、修士論文の調査・執筆に関する進捗状況を報告する。日本移民学会の年次大会の運営にも関わり研究者とのネットワーク作りも行う。

授業の到達目標

- ・移民研究の最新動向について知る。
- ・課題論文の議論に積極的に参加し、論理的に意見を述べる事が出来る。
- ・論文の書き方について学び、口頭発表を行う。

【中目標No.】 B56-1、2、3、4、C 6-1、D56-1、E56-2、F56-1、G36-1～9

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション
- 第3回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション
- 第4回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション
- 第5回：移民関連論文（総論）の輪読とディスカッション
- 第6回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
- 第7回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
- 第8回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
- 第9回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
- 第10回：和歌山市民図書館移民資料室で文献調査
- 第11回：文献調査結果報告
- 第12回：修士論文テーマ及び研究計画発表
- 第13回：修士論文テーマ及び研究計画発表
- 第14回：修士論文テーマ及び研究計画発表
- 第15回：総括

教科書 適宜、論文を指定する。

参考文献 移民研究会（2008）『日本の移民研究 動向と文献目録Ⅰ／Ⅱ』明石書店

成績評価方法

- レポート 50% 論評シート他
平常点評価 50% 出席状況、ゼミでの発表など

移住論ゼミ（２） A（春学期）

森本 豊富

授業概要 国内外の移民研究に関する和文・英文の論文を多読・精読する。「論文評価シート」を通じて批判的に考察し議論することで移民研究の最新動向を知る。また、修士論文の調査・執筆に関する進捗状況を報告する。

授業の到達目標

- ・移民研究の最新動向について知る。
- ・課題論文の議論に積極的に参加し、論理的に意見を述べる事が出来る。
- ・論文の書き方について学び、口頭発表を行う。

【中目標No.】 B56-1、2、3、4、C 6-1、D56-1、E56-2、F56-1、G36-1～9

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
 第2回：夏季休暇中の成果報告
 第3回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第4回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第5回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第6回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第7回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第8回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第9回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第10回：修士論文テーマ及び研究計画発表
 第11回：修士論文テーマ及び研究計画発表
 第12回：修士論文テーマ及び研究計画発表
 第13回：修士論文テーマ及び研究計画発表
 第14回：修士論文テーマ及び研究計画発表
 第15回：総括

教科書 適宜、論文を指定する。

参考文献 移民研究会（2008）『日本の移民研究 動向と文献目録 I / II』明石書店

成績評価方法

- レポート 50% 論評シート他
 平常点評価 50% 出席状況、修論進捗状況の発表など

移住論ゼミ（２） B（秋学期）

森本 豊富

授業概要 国内外の移民研究に関する和文・英文の論文を多読・精読する。「論文評価シート」を通じて批判的に考察し議論することで移民研究の最新動向を知る。また、修士論文の調査・執筆に関する進捗状況を報告する。

授業の到達目標

- ・移民研究の最新動向について知る。
- ・課題論文の議論に積極的に参加し、論理的に意見を述べる事が出来る。
- ・論文の書き方について学び、口頭発表を行う。

【中目標No.】 B56-1、2、3、4、C 6-1、D56-1、E56-2、F56-1、G36-1～9

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
 第2回：夏季休暇中の成果報告
 第3回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第4回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第5回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第6回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第7回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第8回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第9回：移民関連論文（各論）の輪読とディスカッション
 第10回：修士論文テーマ及び研究計画発表
 第11回：修士論文テーマ及び研究計画発表
 第12回：修士論文テーマ及び研究計画発表
 第13回：修士論文テーマ及び研究計画発表
 第14回：修士論文テーマ及び研究計画発表
 第15回：総括

教科書 適宜、論文を指定する。

参考文献 移民研究会（2008）『日本の移民研究 動向と文献目録 I / II』明石書店

成績評価方法

- レポート 50% 論評シート他
 平常点評価 50% 出席状況、修論進捗状況の発表など

科学史・科学論ゼミ（１） A（春学期）

加藤 茂生

授業概要 科学史・科学哲学に関する近年の論考を輪読する。テキストには『科学史研究』、『年報科学技術社会』、『現代思想』、『思想』などの掲載論文を用いる。テキストの選択には受講生の関心を勘案する。

授業の到達目標

- ・科学史・科学哲学の最新の論考を理解し、広く研究状況に通じている。
- ・科学史・科学哲学・科学社会学の最新の研究を自らの研究に生かすことができる。

中目標

B56－3

B56－4

C 6－1

F56－2

授業計画

第1回：ガイダンス

第2回：授業内容の説明

第3回：『科学史研究』から物理学史関係の論文を読む

第4回：『科学史研究』から化学史関係の論文を読む

第5回：『科学史研究』から地球科学史関係の論文を読む

第6回：『科学史研究』から生物学史関係の論文を読む

第7回：『年報科学技術社会』から科学社会学関係の論文を読む

第8回：『年報科学技術社会』からSTS関係の論文を読む

第9回：『現代思想』から科学哲学関係の論文を読む

第10回：『現代思想』から科学社会学関係の論文を読む

第11回：『思想』から科学哲学関係の論文を読む

第12回：『思想』から科学社会学関係の論文を読む

第13回：その他の雑誌から科学史の優れた論文を読む

第14回：その他の雑誌から科学哲学の優れた論文を読む

第15回：総括的討論

参考文献 授業時に指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% テキストの読解の正確さ、議論の的確さで評価する。

科学史・科学論ゼミ（１） B（秋学期）

加藤 茂生

授業概要 科学史・科学哲学に関する近年の論考を輪読する。テキストには『科学史研究』、『年報科学技術社会』、『現代思想』、『思想』などの掲載論文を用いる。テキストの選択には受講生の関心を勘案する。

授業の到達目標

- ・科学史・科学哲学の最新の論考を理解し、広く研究状況に通じている。
- ・科学史・科学哲学・科学社会学の最新の研究を自らの研究に生かすことができる。

中目標

B56－3

B56－4

C 6－1

F56－2

授業計画

第1回：ガイダンス

第2回：授業内容の説明

第3回：『科学史研究』から物理学史関係の論文を読む

第4回：『科学史研究』から化学史関係の論文を読む

第5回：『科学史研究』から地球科学史関係の論文を読む

第6回：『科学史研究』から生物学史関係の論文を読む

第7回：『年報科学技術社会』から科学社会学関係の論文を読む

第8回：『年報科学技術社会』からSTS関係の論文を読む

第9回：『現代思想』から科学哲学関係の論文を読む

第10回：『現代思想』から科学社会学関係の論文を読む

第11回：『思想』から科学哲学関係の論文を読む

第12回：『思想』から科学社会学関係の論文を読む

第13回：その他の雑誌から科学史の優れた論文を読む

第14回：その他の雑誌から科学哲学の優れた論文を読む

第15回：総括的討論

参考文献 授業時に指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% テキストの読解の正確さ、議論の的確さで評価する。

科学史・科学論ゼミ（２） A（春学期）

加藤 茂生

授業概要 科学史・科学哲学に関する近年の論考を輪読する。テキストには『科学史研究』、『年報科学技術社会』、『現代思想』、『思想』などの掲載論文を用いる。テキストの選択には受講生の関心を勘案する。

授業の到達目標

- ・科学史・科学哲学の最新の論考を理解し、広く研究状況に通じている。
- ・科学史・科学哲学・科学社会学の最新の研究を自らの研究に生かすことができる。

中目標

B56－3

B56－4

C 6－1

F56－2

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：授業内容の説明
- 第3回：『科学史研究』から物理学史関係の論文を読む
- 第4回：『科学史研究』から化学史関係の論文を読む
- 第5回：『科学史研究』から地球科学史関係の論文を読む
- 第6回：『科学史研究』から生物学史関係の論文を読む
- 第7回：『年報科学技術社会』から科学社会学関係の論文を読む
- 第8回：『年報科学技術社会』からSTS関係の論文を読む
- 第9回：『現代思想』から科学哲学関係の論文を読む
- 第10回：『現代思想』から科学社会学関係の論文を読む
- 第11回：『思想』から科学哲学関係の論文を読む
- 第12回：『思想』から科学社会学関係の論文を読む
- 第13回：その他の雑誌から科学史の優れた論文を読む
- 第14回：その他の雑誌から科学哲学の優れた論文を読む
- 第15回：総括的討論

参考文献 授業時に指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% テキストの読解の正確さ、議論の的確さで評価する。

科学史・科学論ゼミ（２） B（秋学期）

加藤 茂生

授業概要 科学史・科学哲学に関する近年の論考を輪読する。テキストには『科学史研究』、『年報科学技術社会』、『現代思想』、『思想』などの掲載論文を用いる。テキストの選択には受講生の関心を勘案する。

授業の到達目標

- ・科学史・科学哲学の最新の論考を理解し、広く研究状況に通じている。
- ・科学史・科学哲学・科学社会学の最新の研究を自らの研究に生かすことができる。

中目標

B56－3

B56－4

C 6－1

F56－2

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：授業内容の説明
- 第3回：『科学史研究』から物理学史関係の論文を読む
- 第4回：『科学史研究』から化学史関係の論文を読む
- 第5回：『科学史研究』から地球科学史関係の論文を読む
- 第6回：『科学史研究』から生物学史関係の論文を読む
- 第7回：『年報科学技術社会』から科学社会学関係の論文を読む
- 第8回：『年報科学技術社会』からSTS関係の論文を読む
- 第9回：『現代思想』から科学哲学関係の論文を読む
- 第10回：『現代思想』から科学社会学関係の論文を読む
- 第11回：『思想』から科学哲学関係の論文を読む
- 第12回：『思想』から科学社会学関係の論文を読む
- 第13回：その他の雑誌から科学史の優れた論文を読む
- 第14回：その他の雑誌から科学哲学の優れた論文を読む
- 第15回：総括的討論

参考文献 授業時に指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% テキストの読解の正確さ、議論の的確さで評価する。

技術史・技術文化論ゼミ（１） A（春学期）

余語 琢磨

授業概要 人間が物質的存在（道具・生産物、身体、環境資源など）に何かを働きかけるにあたり、そこに必ずある種のプラン（技術）やルール（文化）が介在しつつ、モノとヒトを関係づけていくことになる。そこで本演習では、ものづくり／わざ、生業、衣食住、民俗・現代医療などに潜在する技術と文化の問題をテーマに、関連する文化人類学・民俗学・歴史学・考古学の著作・研究論文を精緻かつ批判的に分担講読しながら（文献は受講生の関心に合わせて柔軟に変更）、技術／テクノロジーおよび生活文化研究の方法と意義について理解する。

授業の到達目標

・関連基本文献を批判的に検討し、自らの研究対象・テーマ・方法を具体的に構想することができる（B56－4）。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション：本演習の目的・概要と進行・分担の確認
- 第2回：研究資料の探索法：国内外の情報資源・関連文献の検索・収集方法について
- 第3回：文献講読（1）：ものづくりのエスノグラフィ
- 第4回：討論（1）：伝統的生産技術について
- 第5回：文献講読（2）：The Oxford Handbook of Material Culture Studies
- 第6回：討論（2）：文化人類学と考古学をむすぶ物質文化研究の視座について
- 第7回：文献講読（3）：Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine
- 第8回：討論（3）：民俗知と科学、伝統技術とテクノロジー、および民俗医療について
- 第9回：文献講読（4）：民族考古学のエスノグラフィから
- 第10回：討論（4）：フィールドワークと歴史学の接合について
- 第11回：文献講読（5）：テクノロジーのエスノグラフィから
- 第12回：討論（5）：近代における生産技術と情報について
- 第13回：文献講読（5）：技術哲学・科学技術批判論
- 第14回：討論（5）：技術研究の意義をフィールドから問い直す
- 第15回：議論の整理：基本文献の批判と整理から修士論文構想へ

教科書 Dan Hicks and Mary C. Beaudry (eds.) 2010 The Oxford Handbook of Material Culture Studies
Helaine Selin (Ed.) 2008 Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine in Non-Western Cultures (2nd edition)

参考文献 テーマごとに紹介するが、受講生自らも関連文献を検索しながら採り上げること。

成績評価方法

- レポート 50% 授業で発表する報告・プレゼンテーション等の内容により評価する。
- 平常点評価 50% ディスカッションや研究実践への積極性、および時期に応じた研究課題の達成度により評価する。

備考・関連URL 担当教員紹介 <http://www.waseda.jp/human/faculty/yogotakuma.html>

技術史・技術文化論ゼミ（１） B（秋学期）

余語 琢磨

授業概要 ゼミ（1）Aに引き続き、ものづくり／わざ、生業、衣食住、民俗・現代医療などのなかに潜在する技術と文化の問題について、研究視点を探究する。加えて、修士論文に関するテーマ探索・対象情報の収集を進め、関連研究の批判的検討や調査方法論に関する文献講読を通じて研究デザインを鍛えながら、2年次に移行する春からのフィールドエントリーが実現するように準備を進める。

授業の到達目標

- ・調査対象となるフィールド・資料に関する、客観的かつ多角的な予備情報を収集することができる（G36－4）。
- ・フィールドエントリーにあたり、複眼的で適切かつ柔軟な調査方法・項目をデザインできる（B56－4）。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション：本演習の目的・概要と進行・分担の確認
- 第2回：研究上の「問い」について
- 第3回：研究上の「対象」とフィールド・資料について
- 第4回：研究モデルの探索（1）：技術史・ものづくり／わざ研究
- 第5回：研究モデルの探索（2）：生業・生活文化史研究
- 第6回：研究モデルの探索（3）：伝統的民俗医療・医療人類学
- 第7回：修士論文計画発表会（1）
- 第8回：調査方法の設定（1）：対象とフィールドの情報と仮説
- 第9回：調査方法の設定（2）：空間観察・行動観察の技法
- 第10回：調査方法の設定（3）：インタビュー・テキスト分析の技法
- 第11回：修士論文計画発表会（2）
- 第12回：調査データの収集・分析（1）：映像・画像の活用方法
- 第13回：調査データの収集・分析（1）：フィールドノートの作成方法
- 第14回：調査データの収集・分析（1）：データの分析とフィールドにおける仮説修正
- 第15回：フィールドエントリーの準備について

教科書 Dan Hicks and Mary C. Beaudry (eds.) 2010 The Oxford Handbook of Material Culture Studies
Helaine Selin (Ed.) 2008 Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine in Non-Western Cultures (2nd edition)

参考文献 テーマごとに紹介するが、受講生自らも関連文献を検索しながら採り上げること。

成績評価方法

- レポート 50% 授業で発表する報告・プレゼンテーション等の内容により評価する。
- 平常点評価 50% ディスカッションや研究実践への積極性、および時期に応じた研究課題の達成度により評価する。

備考・関連URL 担当教員紹介 <http://www.waseda.jp/human/faculty/yogotakuma.html>

技術史・技術文化論ゼミ（２） A（春学期）

余語 琢磨

授業概要 同ゼミ（１）での理解をもとに、修士論文作成への実践的な展開を検討するので、２年次前半期の履修が望ましい。具体的には、受講生自身が調査研究中のフィールド・資料について報告し、資料の収集・整理方法、イーミックなレベルでの資料分析、関連先行研究との比較と「問い」の再検討、論文の構成や表現スタイルなどを、受講生および教員による相互討論のなかで修正・洗練しながら、２次・３次調査展開への準備を進める。

授業の到達目標

- ・自らが収集した資料について、適切にイーミックな分析が行える基礎力を身につけている（Ad56－２）。
- ・既成理論や研究モデルに自らの解釈を落とし込み、その乗り越えを図る姿勢と実践が継続できる（B56－２）。

授業計画

- 第１回：オリエンテーション：本演習の目的・概要と進行・分担の確認
- 第２回：春期調査データ報告（１）：イーミックなフィールド・データの提示
- 第３回：春期調査データ報告（１）：フィールド・データの１次分析
- 第４回：春期調査データ報告（１）：データおよび分析の信憑性と説得力の検討
- 第５回：先行研究の再検討（１）：イーミックなレベル
- 第６回：先行研究の再検討（２）：エディックなレベル
- 第７回：先行研究の再検討（３）：アナロジーから発想を広げる
- 第８回：論文の構成およびスタイル（１）：仮目次を立てる・構成を整える
- 第９回：論文の構成およびスタイル（２）：フィールド・データの整理と記述法
- 第１０回：論文の構成およびスタイル（３）：映像・画像の利用法、さまざまな図表の作成法
- 第１１回：先行研究レビューの執筆（１）：フィールドとデータに寄り添う文献の扱い方
- 第１２回：先行研究レビューの執筆（２）：テーマ・切り口を明確化する文献の扱い方
- 第１３回：先行研究レビューの執筆（３）：研究の課題・目的・意義の再設定
- 第１４回：夏期本調査の課題と方法（１）：調査デザインの問題点発見と修正課題
- 第１５回：夏期本調査の課題と方法（２）：調査デザイン修正案の確定

教科書 Dan Hicks and Mary C. Beaudry (eds.) 2010 The Oxford Handbook of Material Culture Studies
Helaine Selin (Ed.) 2008 Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine in Non-Western Cultures (2nd edition)

参考文献 テーマごとに紹介するが、受講生自らも関連文献を検索しながら採り上げること。

成績評価方法

- レポート 50% 授業で発表する報告・プレゼンテーション等の内容により評価する。
平常点評価 50% ディスカッションや研究実践への積極性、および時期に応じた研究課題の達成度により評価する。

備考・関連URL 担当教員紹介 <http://www.waseda.jp/human/faculty/yogotakuma.html>

技術史・技術文化論ゼミ（２） B（秋学期）

余語 琢磨

授業概要 同ゼミ（１）A・Bおよび（２）Aでの実践をもとに、このゼミは修士論文をまとめていくプロセスを鍛える場とするので、２年次後半期の履修が望ましい。具体的には、調査資料のイーミックな叙述と分析を信憑性と説得力のあるものに高め、関連先行研究のなかから適切かつ有効なエディックを見出し、理論を駆使した事象の分析もしくは新たな理論構築への展望が得られるような考察を繰り返しつつ、修士論文の完成を図る。結果として、フィールド・資料から帰納的に立ち上がる「発見」と、オリジナリティをもつ演繹の対象理解とをつなぐ方法を身につけた研究者として自立できる力の獲得をめざす。

授業の到達目標

- ・査読付学会誌に研究成果を投稿しうる水準の修士論文が作成できる（B56－１）。

授業計画

- 第１回：オリエンテーション：本演習の目的・概要と進行・分担の確認
- 第２回：夏期調査データ報告（１）：イーミックなフィールド・データの提示
- 第３回：夏期調査データ報告（２）：フィールド・データの１次分析
- 第４回：夏期調査データ報告（３）：データおよび分析の信憑性と説得力の再検討
- 第５回：論文構成と目次の再検討
- 第６回：修士論文中間発表会
- 第７回：先行研究の再検討（１）：イーミックなレベル
- 第８回：先行研究の再検討（２）：エディックなレベル
- 第９回：データ分析からエディックへ（１）：データに密着した解釈と分類・配列
- 第１０回：データ分析からエディックへ（２）：無理のないアナロジーと抽象化
- 第１１回：考察の検討（１）：議論の射程距離と「あてはめ論」回避の途を探る
- 第１２回：考察の検討（２）：考察内容を研究目的・先行研究レビューに反映する
- 第１３回：学科発表・学会誌投稿の準備：データと分析・考察テーマの取捨選択
- 第１４回：研究プレゼンテーションの方法：発表の構成と資料作成法・時間配分
- 第１５回：修士論文最終発表会

教科書 Dan Hicks and Mary C. Beaudry (eds.) 2010 The Oxford Handbook of Material Culture Studies
Helaine Selin (Ed.) 2008 Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine in Non-Western Cultures (2nd edition)

参考文献 テーマごとに紹介するが、受講生自らも関連文献を検索しながら採り上げること。

成績評価方法

- レポート 50% 授業で発表する報告・プレゼンテーション等の内容により評価する。
平常点評価 50% ディスカッションや研究実践への積極性、および時期に応じた研究課題の達成度により評価する。

備考・関連URL 担当教員紹介 <http://www.waseda.jp/human/faculty/yogotakuma.html>

社会人類学ゼミ（２） A（春学期）

矢野 敬生

授業概要 基本的には履修生の希望に沿って修論に必要な文献を選択し、それを読み解く。今年は2冊を予定している。私としては、前半に佐藤郁哉の『フィールドワークの技法』を取り上げて、質的研究法とフィールドワークの手法を学びたいと考えている。

授業の到達目標

- ・ 関心があるがなかなか読むことができなかった文献を、みんなで読むことで読み通すことができる。
- ・ 文献を読むことで問題点をしぼり、互いに批判・批評することが可能になる。

授業計画

- 第1回：講義概要
- 第2回：文献（Ⅰ）を選択……方法論と技法論
- 第3回：輪読（１）……体験としてのフィールドワーク
- 第4回：輪読（２）……人間関係としてのフィールドワーク
- 第5回：輪読（３）……問題構造化作業としてのフィールドワーク
- 第6回：輪読（４）……フィールドノートをつける
- 第7回：輪読（５）……聞きとりをする
- 第8回：輪読（６）……民族誌を書く
- 第9回：文献（Ⅱ）の解説
- 第10回：輪読（１）
- 第11回：輪読（２）
- 第12回：輪読（３）
- 第13回：輪読（４）
- 第14回：輪読（５）
- 第15回：まとめと議論

教科書 佐藤郁哉『フィールドワークの技法』新曜社

参考文献

- ・ 小田博志『エスノグラフィー入門』春秋社
- ・ 小林孝広・出口雅敏『人類学ワークブック』新泉社
- ・ 矢野敬生・林在圭『村落社会のフィールドワーク』早大人科

成績評価方法

平常点評価 100% 発表と講義への参加度

社会人類学ゼミ（２） B（秋学期）

矢野 敬生

授業概要 文献解説と修士論文の発表を中心にしながら、修論の精度を上げることを目標にする。
文献については第1回目にみんなで相談して決めたいと考えている。

授業の到達目標

- ・ 量的調査法と質的調査法の違いを理解できる。
- ・ 聞き取り調査の実施とそれに基づいて記述することができる。

授業計画

- 第1回：文献の選択
- 第2回：文献の輪読（１）
- 第3回：文献の輪読（２）
- 第4回：文献の輪読（３）
- 第5回：文献の輪読（４）
- 第6回：文献の輪読（５）
- 第7回：文献の輪読（６）
- 第8回：修論の発表（１）
- 第9回：修論の発表（２）
- 第10回：修論の発表（３）
- 第11回：修論の発表（４）
- 第12回：修論の発表（５）
- 第13回：修論の発表（６）
- 第14回：修論の発表（７）
- 第15回：まとめ

教科書 文献については、最初の講義時に相談して決めたい。

参考文献

- ・ 小林孝広・出口雅敏『人類学ワークブック』新泉社
- ・ 矢野敬生・林在圭『村落社会のフィールドワーク』早大人科
- ・ 柿崎京一・矢野敬生『東アジア村落社会の基礎構造』御茶の水書房

成績評価方法

平常点評価 100% 発表と講義への参加度で評価

スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ（１） A（春学期）

竹中 宏子

授業概要 スペインの歴史と現状の把握と、スペイン語圏を対象とした地域研究史（主に文化人類学を基にした）を概観することを目的としている。授業は基本的に輪読で進められる。扱う文献はスペイン語または英語で書かれたものを使用する。
スペイン語圏全般を扱う予定であるが、履修学生の研究に沿って、扱う地域に偏りが生じる場合もある。

授業の到達目標

- ・スペインを対象とした地域研究に関する研究史を理解することができる（B56－2、B56－3）
- ・スペイン語圏を対象とした研究史を通して、学生自らの研究の位置づけを検討できる（C 6－2）

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：国家「スペイン」と地域主義
- 第3回：自治州国家体制の歴史
- 第4回：多言語国家としてのスペイン
- 第5回：カタルーニャの地域主義
- 第6回：バスクの地域主義
- 第7回：ガリシアの地域主義
- 第8回：アンダルシアの地域主義
- 第9回：『シエラの人びと』再考（１）－共同体の問題－
- 第10回：『シエラの人びと』再考（２）－職業と身分－
- 第11回：『シエラの人びと』再考（３）－性について－
- 第12回：『シエラの人びと』再考（４）－政治について－
- 第13回：『シエラの人びと』再考（５）－法と道徳について－
- 第14回：ピット＝リバーズとそれ以後のスペイン研究
- 第15回：まとめ

教科書 初回の授業で指定する。

参考文献 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 50% 課題文献の内容のまとめと自分の研究との関連性について考察、その評価
- 平常点評価 50% 授業中の発言や発表の内容について評価する

スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ（１） B（秋学期）

竹中 宏子

授業概要 ラテン・アメリカの歴史と現状の把握と、スペイン語圏を対象とした地域研究史（主に文化人類学を基にした）を概観することを目的としている。授業は基本的に輪読で進められる。扱う文献はスペイン語または英語で書かれたものを使用する。
スペイン語圏全般を扱う予定であるが、履修学生の研究に沿って、扱う地域に偏りが生じる場合もある。

授業の到達目標

- ・ラテンアメリカを対象とした地域研究に関する研究史を理解することができる（B56－2、B56－3）
- ・スペイン語圏を対象とした研究史を通して、学生自らの研究の位置づけを検討できる（C 6－2）

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：ラテン・アメリカ地域の概略（１）－歴史と文化－
- 第3回：ラテン・アメリカ地域の概略（２）－社会と政治－
- 第4回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション（１）－ラテン・アメリカと新自由主義－
- 第5回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション（２）－労働者の視点から－
- 第6回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション（３）－ラテン・アメリカの「社会自由主義」－
- 第7回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション（４）－人間中心主義社会の思想－
- 第8回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション（５）－地域再生と共同体－
- 第9回：カリブ海に関する地域研究（１）－先住民・奴隷・農民－
- 第10回：カリブ海に関する地域研究（２）－カリブ海世界のゆくえ－
- 第11回：カリブ海におけるエスニシティ
- 第12回：カリブ海における「奴隷」形成の歴史
- 第13回：カリブ海地域における社会制度
- 第14回：カリブ、ラテン・アメリカに関する人類学的研究について
- 第15回：まとめ 一課題と展望

教科書 初回の授業で指定する。

参考文献 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 50% 課題文献の内容のまとめと自分の研究との関連性について考察、その評価
- 平常点評価 50% 授業中の発言や発表の内容について評価する

スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ（２） A（春学期）

竹中 宏子

授業概要 ゼミ（１）ABでのスペインおよびラテン・アメリカに関する基礎的な知識を基に、本授業ではスペインを対象に、主に、スペイン文化人類学的发展とスペイン社会との関係をテーマとして設定し、議論を展開する。扱う文献はスペイン語または英語で書かれたものも使用し、それらを読み進めながら地域文化研究に関する理論的な枠組みについても議論する。

授業の到達目標

- ・スペイン語圏に関する文化人類学的な視点を身につけられる（B56-2、B56-3）
- ・学生自身が行うフィールドワークおよび研究全体に役立てることができる（C 6-2）

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：スペインの文化人類学 ―その特徴―
- 第3回：スペインの文化人類学史（１）―民俗学の時代とそれ以前
- 第4回：スペインの文化人類学史（２）―民族誌学から民族学へ
- 第5回：スペインの文化人類学史（３）―文化人類学の導入
- 第6回：スペインの文化人類学史（４）―C. パロウハ
- 第7回：スペインの文化人類学史（５）―E. ファブレガット
- 第8回：スペインの文化人類学史（６）―C. リソン
- 第9回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（１）―イントロダクション
- 第10回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（２）―南部スペインの場合
- 第11回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（３）―中央スペインの場合
- 第12回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（４）―地中海側の場合
- 第13回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（５）―北部スペインの場合
- 第14回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性（６）―島嶼部の場合
- 第15回：まとめ ―課題と展望

教科書 初回の授業で指定する。

参考文献 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 50% 課題文献の内容のまとめと自分の研究との関連性について考察、その評価
- 平常点評価 50% 授業中の発言や発表の内容について評価する

スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ（２） B（秋学期）

竹中 宏子

授業概要 ゼミ（１）ABと（２）Aでのスペインおよびラテン・アメリカに関する基礎的な知識を基に、本授業では主にスペインを対象に、i) ヨーロッパ民俗学または人類学におけるスペイン研究の位置づけ、ii) 新・旧大陸を結ぶ移民を通して見た地域主義、をテーマとして設定している。扱う文献はスペイン語または英語で書かれたものも使用し、それらを読み進めながら地域文化研究に関する理論的な枠組みについても議論する。

授業の到達目標

- ・スペイン語圏に関する文化人類学的な視点を身につけられる（B56-2、B56-3）
- ・学生自身が行うフィールドワークおよび研究全体に役立てることができる（C 6-2）

授業計画

- 第1回：ヨーロッパにおける「復活する祭り」の現象
- 第2回：渓谷地域における祭りの復活
- 第3回：南スペインの聖人祭について
- 第4回：ロシオ巡礼の変遷
- 第5回：フォークロリズムについて
- 第6回：口承伝承とフォークロリズム―カタルーニャの場合―
- 第7回：フォークロリズムの使用、動機、そして意義
- 第8回：フォークロリズムの学術的実践と民俗的実践
- 第9回：地域文化の復活、または遺産化に関する議論
- 第10回：スペインとラテン・アメリカ文化（１）―南スペインとラテン・アメリカ―
- 第11回：スペインとラテン・アメリカ文化（２）―ガリシアとラテン・アメリカ―
- 第12回：ガリシア主義と移民の歴史
- 第13回：カステラオとガリシア主義―キューバ、アルゼンチン―
- 第14回：カステラオとガリシア主義―Cousas da vidaの分析―
- 第15回：まとめ

教科書 初回の授業で指定する。

参考文献 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 50% 課題文献の内容のまとめと自分の研究との関連性について考察、その評価
- 平常点評価 50% 授業中の発言や発表の内容について評価する

ドイツ政治社会文化論ゼミ（１） A（春学期）

村上 公子

授業概要 Peter Steinbach : Widerstand im Widerstreit 中の主要論考を読み、必要な場合はそのテーマを巡る他の論考を確認する。

授業の到達目標

・ドイツにおける“Widerstand”概念の大略を理解することができる。

授業計画

第1回：講読テキストの紹介、ガイダンス
 第2回：テキスト1 輪読
 第3回：テキスト1 輪読
 第4回：テキスト1 輪読
 第5回：テキスト1 輪読
 第6回：テキスト1のテーマに関する議論
 第7回：テキスト2 輪読
 第8回：テキスト2 輪読
 第9回：テキスト2 輪読
 第10回：テキスト2 輪読
 第11回：テキスト2のテーマに関する議論
 第12回：テキスト3 輪読
 第13回：テキスト3 輪読
 第14回：テキスト3 輪読
 第15回：テキスト3 輪読

教科書 Peter Steinbach : Widerstand im Widerstreit, Schoeningh Verlag, 1999

成績評価方法

試験	行わない
レポート	50% 論文の内容を理解し、批判的に考察する
平常点評価	50% 出席し、テキスト内容理解度を明確にする

ドイツ政治社会文化論ゼミ（１） B（秋学期）

村上 公子

授業概要 Peter Steinbach : Widerstand im Widerstreit 中の主要論考を読み、必要な場合はそのテーマを巡る他の論考を確認する。

授業の到達目標

・ドイツにおける“Widerstand”概念の大略を理解することができる。

授業計画

第1回：テキスト3のテーマに関する議論
 第2回：テキスト4 輪読
 第3回：テキスト4 輪読
 第4回：テキスト4 輪読
 第5回：テキスト4 輪読
 第6回：テキスト4のテーマに関する議論
 第7回：テキスト5 輪読
 第8回：テキスト5 輪読
 第9回：テキスト5 輪読
 第10回：テキスト5 輪読
 第11回：テキスト5のテーマに関する議論
 第12回：テキスト6 輪読
 第13回：テキスト6 輪読
 第14回：テキスト6 輪読
 第15回：テキスト6及び全体のテーマに関する議論

教科書 Peter Steinbach : Widerstand im Widerstreit, Schoeningh Verlag, 1999

成績評価方法

レポート	50% 論文の内容を理解し、批判的に考察する
平常点評価	50% 出席し、テキスト内容理解度を明確にする

ドイツ政治社会文化論ゼミ（２） A（春学期）

村上 公子

授業概要 Peter Steinbach/Johannes Tuchel: Widerstand gegen die nationalsozialistische Diktatur 1933–1945. から重要な論考を読む。それによりヒトラー政権に対する抵抗運動を行った人々の事蹟を学ぶ。

授業の到達目標

- ・ナチ時代の抵抗運動のありさまを理解できる。
- ・ナチ時代の抵抗運動がどのような意味を持つかを様々な観点から考えられる。

授業計画

- 第1回：テキスト紹介、ガイダンス
- 第2回：テキスト1 輪読
- 第3回：テキスト2 輪読
- 第4回：テキスト3 輪読
- 第5回：テキスト4 輪読
- 第6回：テキスト1～4 内容概括、確認
- 第7回：テキスト5 輪読
- 第8回：テキスト6 輪読
- 第9回：テキスト7 輪読
- 第10回：テキスト8 輪読
- 第11回：テキスト9 輪読
- 第12回：テキスト5～9 内容概括、確認
- 第13回：テキスト10 輪読
- 第14回：テキスト11 輪読
- 第15回：テキスト12 輪読

教科書 Steinbach, Peter/Johannes Tuchel: Widerstand gegen die nationalsozialistische Diktatur 1933–1945. Lukas Verlag 2004.

成績評価方法

- レポート 50% 選択したテキストで取り上げられた抵抗者について更に調べ、報告する。
平常点評価 50% 出席の上、テキストの内容を正確に理解し、そのテーマについて議論する。

ドイツ政治社会文化論ゼミ（２） B（秋学期）

村上 公子

授業概要 Peter Steinbach/Johannes Tuchel: Widerstand gegen die nationalsozialistische Diktatur 1933–1945. から重要な論考を読む。それによりヒトラー政権に対する抵抗運動を行った人々の事蹟を学ぶ。

授業の到達目標

- ・ナチ時代の抵抗運動のありさまを理解できる。
- ・ナチ時代の抵抗運動がどのような意味を持つかを様々な観点から考えられる。

授業計画

- 第1回：テキスト13 輪読
- 第2回：テキスト10～13 内容概括、確認
- 第3回：テキスト14 輪読
- 第4回：テキスト15 輪読
- 第5回：テキスト16 輪読
- 第6回：テキスト14～16 内容概括、確認
- 第7回：テキスト17 輪読
- 第8回：テキスト18 輪読
- 第9回：テキスト19 輪読
- 第10回：テキスト20 輪読
- 第11回：テキスト21 輪読
- 第12回：テキスト22 輪読
- 第13回：テキスト17～22 内容概括、確認
- 第14回：テキスト1～22 の内容に関する議論
- 第15回：テキスト1～22 の内容に関する議論総括

教科書 Steinbach, Peter/Johannes Tuchel: Widerstand gegen die nationalsozialistische Diktatur 1933–1945. Lukas Verlag 2004.

成績評価方法

- レポート 50% 選択したテキストで取り上げられた抵抗者について更に調べ、報告する。
平常点評価 50% 出席の上、テキストの内容を正確に理解し、そのテーマについて議論する。

日本物質文化論ゼミ（１） A（春学期）

谷川 章雄

授業概要 日本の近世考古学を中心にした物質文化論に関連する領域の文献講読を行う。具体的には、＜１＞都市遺跡・村落遺跡・生産遺跡などの近世考古学の研究、＜２＞考古学に関連する歴史学・民俗学・自然科学などの諸分野の研究、＜３＞外国の考古学研究に関する文献をとり上げる。すなわち、日本の近世考古学を中心にした日本物質文化論の現状と課題、研究の視点や方法を学ぶことが本演習の目的である。

授業の到達目標

- ・日本物質文化論の方法と視点を理解する。（B56－２、B56－３）
- ・自分の研究の方法や視点を確立する。（B56－４）

授業計画

- 第１回：演習の概要と進め方
- 第２回：輪読（１）（近世考古学）中世から近世へ【初級】
- 第３回：輪読（２）（近世考古学）江戸【初級】
- 第４回：輪読（３）（近世考古学）京都【初級】
- 第５回：輪読（４）（近世考古学）大坂【初級】
- 第６回：輪読（５）（近世考古学）村落【初級】
- 第７回：輪読（６）（近世考古学）生産【初級】
- 第８回：輪読（７）（近世考古学）近世から近代へ【初級】
- 第９回：輪読（８）（関連分野）社会史【初級】
- 第10回：輪読（９）（関連分野）民俗学【初級】
- 第11回：輪読（10）（関連分野）民具研究【初級】
- 第12回：輪読（11）（関連分野）環境史【初級】
- 第13回：輪読（12）（近世考古学）ヨーロッパ【初級】
- 第14回：輪読（13）（近世考古学）アメリカ【初級】
- 第15回：全体の討議と講評

参考文献 授業中に紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 発表と討議の内容を評価する。

日本物質文化論ゼミ（１） B（秋学期）

谷川 章雄

授業概要 日本の近世考古学を中心にした物質文化論に関連する領域の文献講読を行う。具体的には、＜１＞都市遺跡・村落遺跡・生産遺跡などの近世考古学の研究、＜２＞考古学に関連する歴史学・民俗学・自然科学などの諸分野の研究、＜３＞外国の考古学研究に関する文献をとり上げる。すなわち、日本の近世考古学を中心にした日本物質文化論の現状と課題、研究の視点や方法を学ぶことが本演習の目的である。

授業の到達目標

- ・日本物質文化論の方法と視点を理解する。（B56－２、B56－３）
- ・自分の研究の方法や視点を確立する。（B56－４）

授業計画

- 第１回：演習の概要と進め方
- 第２回：輪読（１）（近世考古学）中世から近世へ【中・上級】
- 第３回：輪読（２）（近世考古学）江戸【中・上級】
- 第４回：輪読（３）（近世考古学）京都【中・上級】
- 第５回：輪読（４）（近世考古学）大坂【中・上級】
- 第６回：輪読（５）（近世考古学）村落【中・上級】
- 第７回：輪読（６）（近世考古学）生産【中・上級】
- 第８回：輪読（７）（近世考古学）近世から近代へ【中・上級】
- 第９回：輪読（８）（関連分野）社会史【中・上級】
- 第10回：輪読（９）（関連分野）民俗学【中・上級】
- 第11回：輪読（10）（関連分野）民具研究【中・上級】
- 第12回：輪読（11）（関連分野）環境史【中・上級】
- 第13回：輪読（12）（近世考古学）ヨーロッパ【中・上級】
- 第14回：輪読（13）（近世考古学）アメリカ【中・上級】
- 第15回：全体の討議と講評

参考文献 授業中に紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 発表と討議の内容を評価する。

日本物質文化論ゼミ（２） A（春学期）

谷川 章雄

授業概要 日本物質文化論ゼミ（１）を基礎として、受講生各自の研究テーマに関する文献講読、研究計画・成果の発表およびディスカッションを行う。また、学術論文の作成を目標として、そのための資料の分析・解釈の方法について習得する。

授業の到達目標

- ・日本物質文化論の方法と視点を理解する。（B56－2、B56－3）
- ・自分の研究の方法や視点を確立する。（B56－4）

授業計画

- 第1回：演習の概要と進め方
 第2回：各自の研究テーマの発表（１）卒研の到達点
 第3回：各自の研究テーマの発表（２）修士課程での調査
 第4回：各自の研究テーマの発表（３）修士課程での研究
 第5回：各自の研究テーマの発表（４）修士論文へ向けて
 第6回：各自の研究テーマの発表（５）修士論文のテーマ
 第7回：各自の研究テーマの発表（６）修士論文の構成
 第8回：輪読（１）学術論文とは何か【初級】
 第9回：輪読（２）学術論文の構成【初級】
 第10回：輪読（３）資料論【初級】
 第11回：輪読（４）資料の観察・記載【初級】
 第12回：輪読（５）資料の分析【初級】
 第13回：輪読（６）資料の解釈【初級】
 第14回：輪読（７）今後の展望【初級】
 第15回：全体の討議と講評

参考文献 授業中に紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 発表と討議の内容を評価する。

日本物質文化論ゼミ（２） B（秋学期）

谷川 章雄

授業概要 日本物質文化論ゼミ（１）を基礎として、受講生各自の研究テーマに関する文献講読、研究計画・成果の発表およびディスカッションを行う。また、学術論文の作成を目標として、そのための資料の分析・解釈の方法について習得する。

授業の到達目標

- ・日本物質文化論の方法と視点を理解する。（B56－2、B56－3）
- ・自分の研究の方法や視点を確立する。（B56－4）

授業計画

- 第1回：演習の概要と進め方
 第2回：各自の研究テーマの発表（１）卒研の到達点
 第3回：各自の研究テーマの発表（２）修士課程での調査
 第4回：各自の研究テーマの発表（３）修士課程での研究
 第5回：各自の研究テーマの発表（４）修士論文へ向けて
 第6回：各自の研究テーマの発表（５）修士論文のテーマ
 第7回：各自の研究テーマの発表（６）修士論文の構成
 第8回：輪読（１）学術論文とは何か【中・上級】
 第9回：輪読（２）学術論文の構成【中・上級】
 第10回：輪読（３）資料論【中・上級】
 第11回：輪読（４）資料の観察・記載【中・上級】
 第12回：輪読（５）資料の分析【中・上級】
 第13回：輪読（６）資料の解釈【中・上級】
 第14回：輪読（７）今後の展望【中・上級】
 第15回：全体の討議と講評

参考文献 授業中に紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 発表と討議の内容を評価する。

表象文化論ゼミ（１） A（春学期）

中村 要

授業概要 人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。主な研究課題：表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

授業の到達目標

・表象文化研究への理解を深めるとともに、各自の研究を進展させること。

授業計画

第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本講義の目的と概要について説明します。

第2回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第3回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第4回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第5回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第6回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第7回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第8回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第9回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第10回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第11回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第12回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第13回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第14回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション。

第15回：春学期のまとめ。

参考文献 授業時に指示する。

成績評価方法

平常点評価 50% 平常の学習態度、授業への貢献度等を総合的に評価

その他 50% 口答発表、ゼミ論等を評価

表象文化論ゼミ（１） B（秋学期）

中村 要

授業概要 人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。主な研究課題：表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

授業の到達目標

・表象文化研究への理解を深めるとともに、各自の研究を進展させること。

授業計画

第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本講義の目的と概要について説明します。

第2回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第3回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第4回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第5回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第6回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第7回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第8回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第9回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第10回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第11回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第12回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第13回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第14回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション。

第15回：まとめ。

参考文献 授業時に指示する。

成績評価方法

平常点評価 50% 平常の学習態度、授業への貢献度等を総合的に評価

その他 50% 口答発表、ゼミ論等を評価

表象文化論ゼミ（２） A（春学期）

中村 要

授業概要 人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。主な研究課題：表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

授業の到達目標

・表象文化研究への理解を深めるとともに、各自の研究を進展させること。

授業計画

第1回：授業のオリエンテーション
第2回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第3回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第4回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第5回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第6回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第7回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第8回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第9回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第10回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第11回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第12回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第13回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第14回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション
第15回：まとめ

成績評価方法

平常点評価 50% 平常の学習態度、授業への貢献度等を総合的に評価
そ の 他 50% 口答発表、ゼミ論等を評価

表象文化論ゼミ（２） B（秋学期）

中村 要

授業概要 人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。主な研究課題：表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

授業の到達目標

・表象文化研究への理解を深めるとともに、各自の研究を進展させること。

授業計画

第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本講義の目的と概要について説明します。
第2回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第3回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第4回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第5回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第6回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第7回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第8回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第9回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第10回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第11回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第12回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第13回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第14回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第15回：まとめ

参考文献 授業時に指示する。

成績評価方法

平常点評価 50% 平常の学習態度、授業への貢献度等を総合的に評価
そ の 他 50% 口答発表、ゼミ論等を評価

文化生態学ゼミ（１）A（春学期）

蔵持 不三也

授業概要 文化人類学のさまざまなトピックスを、歴史学や社会学、思想・哲学、美術史、先史考古学などを含む広い領域から再検討する。

授業の到達目標

・文化人類学を専攻する者としての知見と方法論を習得してもらう。

授業計画

第1回：文化人類学の現在：諸理論
第2回：文化人類学の現在：諸理論
第3回：文化人類学の現在：諸理論
第4回：文化人類学の現在：諸理論
第5回：文化人類学の現在：諸理論
第6回：文化人類学の現在：諸理論
第7回：文化人類学の現在：諸理論
第8回：文化人類学の現在：諸理論
第9回：文化人類学の現在：諸理論
第10回：文献解題
第11回：文献解題
第12回：文献解題
第13回：文献解題
第14回：文献解題
第15回：文献解題

参考文献 授業で提示する

成績評価方法

レポート 90% 問題に対する習熟度
平常点評価 10% 出席状況

備考・関連URL Wikipediaの蔵持関連項目参照

文化生態学ゼミ（１）B（秋学期）

蔵持 不三也

授業概要 文化人類学のさまざまなトピックスを、歴史学や社会学、思想・哲学、美術史、先史考古学などを含む広い領域から再検討する。

授業の到達目標

・文化人類学を専攻する者としての知見と方法論を習得してもらう。

授業計画

第1回：文献解題
第2回：文献解題
第3回：文献解題
第4回：文献解題
第5回：文献解題
第6回：蔵持著作解題
第7回：蔵持著作解題
第8回：蔵持著作解題
第9回：蔵持著作解題
第10回：蔵持著作解題
第11回：蔵持著作解題
第12回：蔵持著作解題
第13回：蔵持著作解題
第14回：蔵持著作解題
第15回：蔵持著作解題

参考文献 授業で提示する

成績評価方法

レポート 90% 課題に対する習熟度
平常点評価 10% 出席状況

備考・関連URL Wikipediaの蔵持関連項目参照

文化生態学ゼミ（２）A（春学期）

蔵持 不三也

授業概要 文化生態学ゼミ（１）で習得したさまざまな知見と受講生自身の調査データに基づく考察を随時発表してもらい、学会誌や紀要の論文作成にむけての実践的なトレーニングを行う。

授業の到達目標

・文化人類学を専攻する者としての知見と方法論を習得してもらう。

授業計画

第1回：研究発表
第2回：研究発表
第3回：研究発表
第4回：研究発表
第5回：研究発表
第6回：研究発表
第7回：研究発表
第8回：研究発表
第9回：研究発表
第10回：研究発表
第11回：研究発表
第12回：研究発表
第13回：研究発表
第14回：研究発表
第15回：現地調査実習（海外）

参考文献 授業で提示する

成績評価方法

レポート 90% 課題に対する習熟度
平常点評価 10% 出席状況

備考・関連URL Wikipediaの蔵持関連項目参照

文化生態学ゼミ（２）B（秋学期）

蔵持 不三也

授業概要 文化生態学ゼミ（１）で習得したさまざまな知見と受講生自身の調査データに基づく考察を随時発表してもらい、学会誌や紀要の論文作成にむけての実践的なトレーニングを行う。

授業の到達目標

・文化人類学を専攻する者としての知見と方法論を習得してもらう。

授業計画

第1回：現地調査実習（海外）
第2回：現地調査実習（海外）
第3回：調査総括
第4回：現地調査実習（国内）
第5回：現地調査実習（国内）
第6回：調査総括
第7回：第1次論文構想検討会
第8回：第1次論文構想検討会
第9回：第2次論文構想検討会
第10回：第3次論文構想検討会
第11回：第4次論文構想検討会
第12回：論文発表会
第13回：論文発表会
第14回：論文発表会
第15回：論文発表会

参考文献 授業で提示する

成績評価方法

レポート 90% 課題に対する習熟度
平常点評価 10% 出席状況

備考・関連URL Wikipediaの蔵持関連項目参照

環境心理・環境デザインゼミ（１） A（春学期）

佐藤 将之

授業概要 建築や都市の環境から各自が関心、興味をもつ次元を選択し、フィールドサーベイを通じて人間と環境との相互関係を明らかにする。特に、着目した次元における人間と環境との相互作用・相互浸透、環境決定に関する分析・考察を行う。それらを踏まえて応用的な学問としての環境心理学を議論する。環境デザインの議論については、デザイナー向けだけではなく、一般ユーザー向けの意識啓蒙、環境の使い方、環境とのつきあい方の提案を行うものとする。

授業の到達目標

フィールドサーベイを通じた環境の質的な記述とそれに伴う分析を行うことによって「人間環境のコーディネータ的な役割を担える人材」「心理・行動からみた環境デザインを議論できる人材」となることを目標としている。

授業計画

- 第1回：ゼミの概要説明
- 第2回：ゼミの計画と進め方
- 第3回：寸法計測調査その1（1）初級
- 第4回：寸法計測調査その2（1）上級
- 第5回：行動観察調査その1（1）初級
- 第6回：行動観察調査その2（1）中級
- 第7回：行動観察調査その3（1）中級
- 第8回：行動観察調査その4（1）上級
- 第9回：建築の使われ方調査その1（1）初級
- 第10回：建築の使われ方調査その2（1）中級
- 第11回：建築の使われ方調査その3（1）中級
- 第12回：建築の使われ方調査その4（1）上級
- 第13回：データ処理の方法その1（1）初級
- 第14回：データ処理の方法その2（1）中級
- 第15回：データ処理の方法その3（1）上級

教科書 和田浩一・佐藤将之編著：フィールドワークの実践－建築デザインの変革をめざして－：朝倉書店

成績評価方法

レポート 60% 提出物
平常点評価 40% 発表や取り組み姿勢

環境心理・環境デザインゼミ（１） B（秋学期）

佐藤 将之

授業概要 建築や都市の環境から各自が関心、興味をもつ次元を選択し、フィールドサーベイを通じて人間と環境との相互関係を明らかにする。特に、着目した次元における人間と環境との相互作用・相互浸透、環境決定に関する分析・考察を行う。それらを踏まえて応用的な学問としての環境心理学を議論する。環境デザインの議論については、デザイナー向けだけではなく、一般ユーザー向けの意識啓蒙、環境の使い方、環境とのつきあい方の提案を行うものとする。

授業の到達目標

フィールドサーベイを通じた環境の質的な記述とそれに伴う分析を行うことによって「人間環境のコーディネータ的な役割を担える人材」「心理・行動からみた環境デザインを議論できる人材」となることを目標としている。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：環境デザイン発想法の実習その1（1）初級
- 第3回：環境デザイン発想法の実習その2（1）上級
- 第4回：環境行動の記述方法に関する実習その1（1）初級
- 第5回：環境行動の記述方法に関する実習その2（1）中級
- 第6回：環境行動の記述方法に関する実習その3（1）中級
- 第7回：環境行動の記述方法に関する実習その4（1）上級
- 第8回：表現技法の実習その1（1）初級
- 第9回：表現技法の実習その2（1）中級
- 第10回：表現技法の実習その3（1）上級
- 第11回：個々の課題（修士論文）の検討その1（1）目的の検討
- 第12回：個々の課題（修士論文）の検討その2（1）アウトラインの検討
- 第13回：個々の課題（修士論文）の検討その3（1）調査法の検討
- 第14回：個々の課題（修士論文）の検討その4（1）分析法の検討
- 第15回：総括

教科書 和田浩一・佐藤将之編著：フィールドワークの実践－建築デザインの変革をめざして－：朝倉書店

成績評価方法

レポート 60% 提出物
平常点評価 40% 発表や取り組み姿勢

環境心理・環境デザインゼミ（２） A（春学期）

佐藤 将之

授業概要 建築や都市の環境から各自が関心、興味をもつ次元を選択し、フィールドサーベイを通じて人間と環境との相互関係を明らかにする。特に、着目した次元における人間と環境との相互作用・相互浸透、環境決定に関する分析・考察を行う。それらを踏まえて応用的な学問としての環境心理学を議論する。環境デザインの議論については、デザイナー向けだけではなく、一般ユーザー向けの意識啓蒙、環境の使い方、環境とのつきあい方の提案を行うものとする。

授業の到達目標

フィールドサーベイを通じた環境の質的な記述とそれに伴う分析を行うことによって「人間環境のコーディネータ的な役割を担える人材」「心理・行動からみた環境デザインを議論できる人材」となることを目標としている。

授業計画

- 第1回：ゼミの概要説明
- 第2回：ゼミの計画と進め方
- 第3回：寸法計測調査その1（2）初級
- 第4回：寸法計測調査その2（2）上級
- 第5回：行動観察調査その1（2）初級
- 第6回：行動観察調査その2（2）中級
- 第7回：行動観察調査その3（2）中級
- 第8回：行動観察調査その4（2）上級
- 第9回：建築の使われ方調査その1（2）初級
- 第10回：建築の使われ方調査その2（2）中級
- 第11回：建築の使われ方調査その3（2）中級
- 第12回：建築の使われ方調査その4（2）上級
- 第13回：データ処理の方法その1（2）初級
- 第14回：データ処理の方法その2（2）中級
- 第15回：データ処理の方法その3（2）上級

教科書 和田浩一・佐藤将之編著：フィールドワークの実践－建築デザインの変革をめざして－：朝倉書店

成績評価方法

レポート 60% 提出物
平常点評価 40% 発表や取り組み姿勢

環境心理・環境デザインゼミ（２） B（秋学期）

佐藤 将之

授業概要 建築や都市の環境から各自が関心、興味をもつ次元を選択し、フィールドサーベイを通じて人間と環境との相互関係を明らかにする。特に、着目した次元における人間と環境との相互作用・相互浸透、環境決定に関する分析・考察を行う。それらを踏まえて応用的な学問としての環境心理学を議論する。環境デザインの議論については、デザイナー向けだけではなく、一般ユーザー向けの意識啓蒙、環境の使い方、環境とのつきあい方の提案を行うものとする。

授業の到達目標

フィールドサーベイを通じた環境の質的な記述とそれに伴う分析を行うことによって「人間環境のコーディネータ的な役割を担える人材」「心理・行動からみた環境デザインを議論できる人材」となることを目標としている。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：環境デザイン発想法の実習その1（2）初級
- 第3回：環境デザイン発想法の実習その2（2）上級
- 第4回：環境行動の記述方法に関する実習その1（2）初級
- 第5回：環境行動の記述方法に関する実習その2（2）中級
- 第6回：環境行動の記述方法に関する実習その3（2）中級
- 第7回：環境行動の記述方法に関する実習その4（2）上級
- 第8回：表現技法の実習その1（2）初級
- 第9回：表現技法の実習その2（2）中級
- 第10回：表現技法の実習その3（2）上級
- 第11回：個々の課題（修士論文）の検討その1（2）目的の検討
- 第12回：個々の課題（修士論文）の検討その2（2）アウトラインの検討
- 第13回：個々の課題（修士論文）の検討その3（2）調査法の検討
- 第14回：個々の課題（修士論文）の検討その4（2）分析法の検討
- 第15回：総括

教科書 和田浩一・佐藤将之編著：フィールドワークの実践－建築デザインの変革をめざして－：朝倉書店

成績評価方法

レポート 60% 提出物
平常点評価 40% 発表や取り組み姿勢

建築環境学ゼミ（１） A（春学期）

小島 隆矢

授業概要 住居・建築・都市などの環境と人間の意識や行動に関する諸問題を扱うための主要な調査分析手法を習得することを目標として演習を行う。具体的には、１）感覚・知覚、２）印象・イメージ、３）着眼点と評価構造、に関する測定と分析について、講義・実習を行う。

授業の到達目標

・環境心理・行動学分野における主要な調査分析手法を習得している。
・各自が取り組む研究テーマにどんな手法が活用できるか検討できる。

授業計画

第1回：建築環境工学および建築環境心理学の成立
第2回：建築環境心理分野における調査分析手法概観
第3回：感覚・知覚に関する環境心理評価研究の方法
第4回：感覚・知覚に関する環境心理評価研究事例
第5回：感覚・知覚に関する環境心理評価法演習（測定）
第6回：感覚・知覚に関する環境心理評価法演習（分析）
第7回：印象・イメージに関する環境心理評価研究の方法
第8回：印象・イメージに関する環境心理評価研究事例
第9回：印象・イメージに関する環境心理評価法演習（測定）
第10回：印象・イメージに関する環境心理評価法演習（分析）
第11回：評価項目抽出のための定性調査の方法
第12回：評価項目抽出のための定性調査の事例
第13回：評価項目抽出のための定性調査法演習（実査）
第14回：評価項目抽出のための定性調査法演習（結果の整理・分析）
第15回：各自の研究テーマにおける学習した手法の活用法検討

参考文献 適宜、指示する。

成績評価方法

レポート	30%	実習の結果に基づき、それぞれの手法の習得度を評価する。
平常点評価	40%	出席状況および熱心さを評価する。
その他	30%	各自の自主的な取り組みなどを総合的に評価する。

建築環境学ゼミ（１） B（秋学期）

小島 隆矢

授業概要 住居・建築・都市などの環境と人間の意識や行動に関する諸問題を扱うための主要な調査分析手法を習得することを目標として演習を行う。具体的には、１）満足度、２）環境に対する意識、３）価値、４）項目間の因果関係、に関する測定と分析について、講義・実習を行う。

授業の到達目標

・環境心理・行動学分野における主要な調査分析手法を習得している。
・各自が取り組む研究テーマにどんな手法が活用できるか検討できる。

授業計画

第1回：環境に関する満足度調査の方法
第2回：環境に関する満足度調査の事例
第3回：環境に関する満足度調査法演習（実査）
第4回：環境に関する満足度調査法演習（分析）
第5回：環境に関する意識調査の方法・事例
第6回：環境に関する意識調査法演習（実査・分析）
第7回：環境の価値に関する環境心理評価研究の方法
第8回：環境の価値に関する環境心理評価研究事例
第9回：環境の価値に関する環境心理評価法演習（実査）
第10回：環境の価値に関する環境心理評価法演習（分析）
第11回：環境心理評価項目間の因果関係の分析法
第12回：環境心理評価項目間の因果関係の分析事例
第13回：環境心理評価項目間の因果分析法演習（実査）
第14回：環境心理評価項目間の因果分析法演習（分析）
第15回：各自の研究テーマにおける学習した手法の活用法検討

参考文献 適宜、指示する。

成績評価方法

レポート	30%	実習の結果に基づき、それぞれの手法の習得度を評価する。
平常点評価	40%	出席状況および熱心さを評価する。
その他	30%	各自の自主的な取り組みなどを総合的に評価する。

建築環境学ゼミ（２） A（春学期）

小島 隆矢

授業概要 建築環境心理分野ほか、住居・建築・都市などの環境と人間の意識や行動に関する諸問題を扱う研究分野におけるこれまでの研究対象環境および研究テーマの動向について学習する。具体的には、１）住居・室内、２）オフィス、３）都市・地域に関する研究動向について学ぶ。さらに今後研究すべき課題について検討することにより、各自の見識を深めるとともに、修士論文の研究につなげる。

授業の到達目標

- ・ 建築環境心理分野および関連する周辺分野の研究動向を把握している。
- ・ 今後、どんな課題を研究すべきか、自分なりの見解を持っている。
- ・ 本講義で学んだことを各自の修士論文の研究等に役立てることができる。

授業計画

- 第1回：建築環境心理分野における研究対象環境・テーマ歴史
- 第2回：建築環境心理分野における昨今の研究対象環境・テーマ
- 第3回：住居・室内に関する研究事例
- 第4回：住居・室内に関する研究課題検討（ディスカッション）
- 第5回：住居・室内に関する研究計画立案（発表）
- 第6回：住居・室内に関する研究計画検討（ディスカッション）
- 第7回：オフィスに関する研究事例
- 第8回：オフィスに関する研究課題検討（ディスカッション）
- 第9回：オフィスに関する研究計画立案（発表）
- 第10回：オフィスに関する研究計画検討（ディスカッション）
- 第11回：都市・地域に関する研究事例
- 第12回：都市・地域に関する研究課題検討（ディスカッション）
- 第13回：都市・地域に関する研究計画立案（発表）
- 第14回：都市・地域に関する研究計画検討（ディスカッション）
- 第15回：各自の研究テーマとの関連性検討

参考文献 適宜、指示する。

成績評価方法

- 平常点評価 50% 出席状況、発表内容などを評価する。
 その他 50% 各自の自主的な取り組みなどを総合的に評価する。

建築環境学ゼミ（２） B（秋学期）

小島 隆矢

授業概要 建築環境心理分野ほか、住居・建築・都市などの環境と人間の意識や行動に関する諸問題を扱う研究分野におけるこれまでの研究対象環境および研究テーマの動向について学習する。具体的には、１）住居・室内、２）オフィス、３）都市・地域に関する研究動向について学ぶ。さらに今後研究すべき課題について検討することにより、各自の見識を深めるとともに、修士論文の研究につなげる。

授業の到達目標

- ・ 建築環境心理分野および関連する周辺分野の研究動向を把握している。
- ・ 今後、どんな課題を研究すべきか、自分なりの見解を持っている。
- ・ 本講義で学んだことを各自の修士論文の研究等に役立てることができる。

授業計画

- 第1回：公共施設に関する研究事例
- 第2回：公共施設に関する研究課題検討（ディスカッション）
- 第3回：公共施設に関する研究計画立案（発表）
- 第4回：公共施設に関する研究計画検討（ディスカッション）
- 第5回：集客施設に関する研究事例
- 第6回：集客施設に関する研究課題検討（ディスカッション）
- 第7回：集客施設に関する研究計画立案（発表）
- 第8回：集客施設に関する研究計画検討（ディスカッション）
- 第9回：街路・公共空間に関する研究事例
- 第10回：街路・公共空間に関する研究課題検討（ディスカッション）
- 第11回：街路・公共空間に関する研究計画立案（発表）
- 第12回：街路・公共空間に関する研究計画検討（ディスカッション）
- 第13回：医療・福祉施設に関する研究事例
- 第14回：医療・福祉施設に関する研究課題検討（ディスカッション）
- 第15回：医療・福祉施設に関する研究計画立案（発表・ディスカッション）

参考文献 適宜、指示する。

成績評価方法

- 平常点評価 50% 出席状況、発表内容などを評価する。
 その他 50% 各自の自主的な取り組みなどを総合的に評価する。

建築計画学ゼミ（１） A（春学期）

佐野 友紀

授業概要 建築、都市の計画を主眼として、諸問題を解決するための実践的な調査、実験、分析手法を学ぶ。これらには、人間工学的分析、心理学的分析、生理学的分析などを含む。また、自分の考えを図的表現によって、プレゼンテーションする能力の習得を目的とする。建築、都市のデザインは、単なる設計の技術にとどまらず、より良い計画を行うための調査、実験、分析が必要である。特に建築計画においては、安全性、機能的、持続性、価格妥当性、審美性など、さまざまなニーズを、あるときは複合的に、またあるときは取捨選択的に解決する方法を学ぶ。

授業の到達目標

- ・与えられた建築、都市計画に関わるテーマに対して、実習的に調査分析を行う。
- ・受講者の発表、ディスカッションを通して問題解決の方法を探ることを目標とする。

授業計画

- 第1回：ガイダンス（建築計画学演習とは？）その1（1）
 第2回：ガイダンス（建築計画学演習とは？）その2（1）
 第3回：人間工学分析 その1（1）
 第4回：人間工学分析 その2（1）
 第5回：人間工学分析 その3（1）
 第6回：人間工学分析 その4（1）
 第7回：行動観察分析 その1（1）
 第8回：行動観察分析 その2（1）
 第9回：行動観察分析 その3（1）
 第10回：行動観察分析 その4（1）
 第11回：行動観察分析 その5（1）
 第12回：行動観察分析 その6（1）
 第13回：質問紙調査分析 その1（1）
 第14回：質問紙調査分析 その2（1）
 第15回：質問紙調査分析 その3（1）

教科書 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

参考文献 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

成績評価方法

- レポート 50% 建築、都市における自主実地調査を行うレポート、文献調査を行うレポートを出題し、その内容を評価する。
 平常点評価 50% 平常時の発表の内容を評価する。

建築計画学ゼミ（１） B（秋学期）

佐野 友紀

授業概要 建築、都市の計画を主眼として、諸問題を解決するための実践的な調査、実験、分析手法を学ぶ。これらには、人間工学的分析、心理学的分析、生理学的分析などを含む。また、自分の考えを図的表現によって、プレゼンテーションする能力の習得を目的とする。建築、都市のデザインは、単なる設計の技術にとどまらず、より良い計画を行うための調査、実験、分析が必要である。特に建築計画においては、安全性、機能的、持続性、価格妥当性、審美性など、さまざまなニーズを、あるときは複合的に、またあるときは取捨選択的に解決する方法を学ぶ。

授業の到達目標

- ・与えられた建築、都市計画に関わるテーマに対して、実習的に調査分析を行う。
- ・受講者の発表、ディスカッションを通して問題解決の方法を探ることを目標とする。

授業計画

- 第1回：質問紙調査分析 その4（1）
 第2回：質問紙調査分析 その5（1）
 第3回：質問紙調査分析 その6（1）
 第4回：グループ調査分析 その1（1）
 第5回：グループ調査分析 その2（1）
 第6回：グループ調査分析 その3（1）
 第7回：グループ調査分析 その4（1）
 第8回：グループ調査分析 その5（1）
 第9回：グループ調査分析 その6（1）
 第10回：修士研究テーマに関わる調査分析 その1（1）
 第11回：修士研究テーマに関わる調査分析 その2（1）
 第12回：修士研究テーマに関わる調査分析 その3（1）
 第13回：修士研究テーマに関わる調査分析 その4（1）
 第14回：修士研究テーマに関わる調査分析 その5（1）
 第15回：修士研究テーマに関わる調査分析 その6（1）

教科書 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

参考文献 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

成績評価方法

- レポート 50% 建築、都市における自主実地調査を行うレポート、文献調査を行うレポートを出題し、その内容を評価する。
 平常点評価 50% 平常時の発表の内容を評価する。

建築計画学ゼミ（２） A（春学期）

佐野 友紀

授業概要 建築、都市の計画を主眼として、諸問題を解決するための実践的な調査、実験、分析手法を学ぶ。これらには、人間工学的分析、心理学的分析、生理学的分析などを含む。また、自分の考えを図的表現によって、プレゼンテーションする能力の習得を目的とする。建築、都市のデザインは、単なる設計の技術にとどまらず、より良い計画を行うための調査、実験、分析が必要である。特に建築計画においては、安全性、機能性、持続性、価格妥当性、審美性など、さまざまなニーズを、あるときは複合的に、またあるときは取捨選択的に解決する方法を学ぶ。

授業の到達目標

- ・与えられた建築、都市計画に関わるテーマに対して、実習的に調査分析を行う。
- ・受講者の発表、ディスカッションを通して問題解決の方法を探ることを目標とする。

授業計画

- 第1回：ガイダンス（建築計画学演習とは？）その1（1）
 第2回：ガイダンス（建築計画学演習とは？）その2（1）
 第3回：人間工学分析 その1（1）
 第4回：人間工学分析 その2（1）
 第5回：人間工学分析 その3（1）
 第6回：人間工学分析 その4（1）
 第7回：行動観察分析 その1（1）
 第8回：行動観察分析 その2（1）
 第9回：行動観察分析 その3（1）
 第10回：行動観察分析 その4（1）
 第11回：行動観察分析 その5（1）
 第12回：行動観察分析 その6（1）
 第13回：質問紙調査分析 その1（1）
 第14回：質問紙調査分析 その2（1）
 第15回：質問紙調査分析 その3（1）

教科書 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

参考文献 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

成績評価方法

- レポート 50% 建築、都市における自主実地調査を行うレポート、文献調査を行うレポートを出題し、その内容を評価する。
 平常点評価 50% 平常時の発表の内容を評価する。

建築計画学ゼミ（２） B（秋学期）

佐野 友紀

授業概要 建築、都市の計画を主眼として、諸問題を解決するための実践的な調査、実験、分析手法を学ぶ。これらには、人間工学的分析、心理学的分析、生理学的分析などを含む。また、自分の考えを図的表現によって、プレゼンテーションする能力の習得を目的とする。建築、都市のデザインは、単なる設計の技術にとどまらず、より良い計画を行うための調査、実験、分析が必要である。特に建築計画においては、安全性、機能性、持続性、価格妥当性、審美性など、さまざまなニーズを、あるときは複合的に、またあるときは取捨選択的に解決する方法を学ぶ。

授業の到達目標

- ・与えられた建築、都市計画に関わるテーマに対して、実習的に調査分析を行う。
- ・受講者の発表、ディスカッションを通して問題解決の方法を探ることを目標とする。

授業計画

- 第1回：質問紙調査分析 その4（1）
 第2回：質問紙調査分析 その5（1）
 第3回：質問紙調査分析 その6（1）
 第4回：グループ調査分析 その1（1）
 第5回：グループ調査分析 その2（1）
 第6回：グループ調査分析 その3（1）
 第7回：グループ調査分析 その4（1）
 第8回：グループ調査分析 その5（1）
 第9回：グループ調査分析 その6（1）
 第10回：修士研究テーマに関わる調査分析 その1（1）
 第11回：修士研究テーマに関わる調査分析 その2（1）
 第12回：修士研究テーマに関わる調査分析 その3（1）
 第13回：修士研究テーマに関わる調査分析 その4（1）
 第14回：修士研究テーマに関わる調査分析 その5（1）
 第15回：修士研究テーマに関わる調査分析 その6（1）

教科書 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

参考文献 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

成績評価方法

- レポート 50% 建築、都市における自主実地調査を行うレポート、文献調査を行うレポートを出題し、その内容を評価する。
 平常点評価 50% 平常時の発表の内容を評価する。

発達行動学ゼミ（１） A（春学期）

根ヶ山 光一

授業概要 行動発達に関する諸問題について、基本的文献を講読し、あわせて関連の問題を討論し、それによって人間存在への理解を深める。とくに身体と行動発達の関連性にかかわる諸問題、たとえば哺乳・離乳、身体接触、食、姿勢と位置移動、事故、モノの介在、性、排泄と世話、遊び、攻撃などについて、霊長類行動や進化などにも言及しながら議論を重ね、そのことを通じて行動発達研究の理論と方法論に関する理解を促進する。

授業の到達目標

- ・発達行動学に関する国内外の基本的文献を読解できる（B56－4）
- ・議論をもとに自己の考えを再構造化し、それを主張し公開できる（C 6－2）

授業計画

- 第1回：講義概要の説明
- 第2回：指定文献の講読1回目
- 第3回：指定文献の講読2回目
- 第4回：指定文献の講読3回目
- 第5回：指定文献の講読4回目
- 第6回：指定文献の講読5回目
- 第7回：指定文献の講読6回目
- 第8回：指定文献の講読7回目
- 第9回：指定文献の講読8回目
- 第10回：指定文献の講読9回目
- 第11回：指定文献の講読10回目
- 第12回：指定文献の講読11回目
- 第13回：指定文献の講読12回目
- 第14回：指定文献の講読13回目
- 第15回：これまでの総括とそれに対する討論

参考文献 適宜指示

成績評価方法

レポート	30%	発表の要旨完成度
平常点評価	50%	論文の理解度、論理の精緻性など
その他	20%	出席状況

発達行動学ゼミ（１） B（秋学期）

根ヶ山 光一

授業概要 行動発達に関する諸問題について、基本的文献を講読し、あわせて関連の問題を討論し、それによって人間存在への理解を深める。とくに身体と行動発達の関連性にかかわる諸問題、たとえば哺乳・離乳、身体接触、食、姿勢と位置移動、事故、モノの介在、性、排泄と世話、遊び、攻撃などについて、霊長類行動や進化などにも言及しながら議論を重ね、そのことを通じて行動発達研究の理論と方法論に関する理解を促進する。

授業の到達目標

- ・発達行動学に関する国内外の基本的文献を読解できる（B56－4）
- ・議論をもとに自己の考えを再構造化し、それを主張し公開できる（C 6－2）

授業計画

- 第1回：指定文献の講読14回目
- 第2回：指定文献の講読15回目
- 第3回：指定文献の講読16回目
- 第4回：指定文献の講読17回目
- 第5回：指定文献の講読18回目
- 第6回：指定文献の講読19回目
- 第7回：指定文献の講読20回目
- 第8回：指定文献の講読21回目
- 第9回：指定文献の講読22回目
- 第10回：指定文献の講読23回目
- 第11回：指定文献の講読24回目
- 第12回：指定文献の講読25回目
- 第13回：指定文献の講読26回目
- 第14回：指定文献の講読27回目
- 第15回：全体の総括とそれに対する総合討論

参考文献 適宜指示

成績評価方法

レポート	30%	発表の要旨完成度
平常点評価	50%	論文の理解度、論理の精緻性など
その他	20%	出席状況

発達行動学ゼミ（２） A（春学期）

根ヶ山 光一

授業概要 行動発達に関する諸問題について、各自関心のあるテーマを文献あるいはデータに基づいてまとめ、それを個人発表するとともに、その問題について全員で討論する。発表に際しては、テーマの選定、基本的文献の選択、データの分析・読み取り・考察、議論の展開の論理整合性、今後の展開、他の研究との関連性と独自性、などについてとくに考慮する。とくにフィールドでの調査を重視する。

授業の到達目標

・発達行動学に関する研究を自ら計画・実施し論文にまとめるための力をつける（D56－1）
・実際に論文作成に取り組むことが出来る（B56－1）

授業計画

第1回：授業の概要説明
第2回：学生個人の研究の発表1
第3回：学生個人の研究の発表2
第4回：学生個人の研究の発表3
第5回：学生個人の研究の発表4
第6回：学生個人の研究の発表5
第7回：学生個人の研究の発表6
第8回：学生個人の研究の発表7
第9回：学生個人の研究の発表8
第10回：学生個人の研究の発表9
第11回：学生個人の研究の発表10
第12回：学生個人の研究の発表11
第13回：学生個人の研究の発表12
第14回：学生個人の研究の発表13
第15回：総括と討論

参考文献 適宜指示

成績評価方法

レポート 30% 論理性、独自性、理解度
平常点評価 50% 質疑応答の積極性、論理性
その他 20% 出席状況

発達行動学ゼミ（２） B（秋学期）

根ヶ山 光一

授業概要 行動発達に関する諸問題について、各自関心のあるテーマを文献あるいはデータに基づいてまとめ、それを個人発表するとともに、その問題について全員で討論する。発表に際しては、テーマの選定、基本的文献の選択、データの分析・読み取り・考察、議論の展開の論理整合性、今後の展開、他の研究との関連性と独自性、などについてとくに考慮する。とくにフィールドでの調査を重視する。

授業の到達目標

・発達行動学に関する研究を自ら計画・実施し論文にまとめるための力をつける（D56－1）
・実際に論文作成に取り組むことが出来る（B56－1）

授業計画

第1回：学生個人の研究の発表14
第2回：学生個人の研究の発表15
第3回：学生個人の研究の発表16
第4回：学生個人の研究の発表17
第5回：学生個人の研究の発表18
第6回：学生個人の研究の発表19
第7回：学生個人の研究の発表20
第8回：学生個人の研究の発表21
第9回：学生個人の研究の発表22
第10回：学生個人の研究の発表23
第11回：学生個人の研究の発表24
第12回：学生個人の研究の発表25
第13回：学生個人の研究の発表26
第14回：学生個人の研究の発表27
第15回：全体の総括と総合討論

参考文献 適宜指示

成績評価方法

レポート 30% 論理性、独自性、理解度
平常点評価 50% 質疑応答の積極性、論理性
その他 20% 出席状況

発達動機づけ論ゼミ（１）A（春学期）

外山 紀子

授業概要 発達および動機づけについて、基本的な文献を購読し、人間の発達および学びの過程に関する理解を深める。

授業の到達目標

- ・発達および動機づけに関する基本的な知識を身につける。
- ・国内外の基本的な文献を批判的に読み解く力を身につける。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：文献購読と討論（１）
- 第3回：文献購読と討論（２）
- 第4回：文献購読と討論（３）
- 第5回：文献購読と討論（４）
- 第6回：文献購読と討論（５）
- 第7回：文献購読と討論（６）
- 第8回：文献購読と討論（７）
- 第9回：文献購読と討論（８）
- 第10回：文献購読と討論（９）
- 第11回：文献購読と討論（10）
- 第12回：文献購読と討論（11）
- 第13回：文献購読と討論（12）
- 第14回：文献購読と討論（13）
- 第15回：レポート課題と解説

教科書 特に指定しない。

参考文献 随時紹介する。

成績評価方法

レポート	50%	報告レポートと最終レポートを評価する。
平常点評価	50%	参加度、意欲、発表の準備状況と内容を評価する。

発達動機づけ論ゼミ（１）B（秋学期）

外山 紀子

授業概要 発達および動機づけについて、各自が関心のあるテーマを絞り、それを深めていく。各自の発表が主となるが、参加者全員で議論していく。

授業の到達目標

- ・発達・動機づけに関する先行研究を踏まえ、適切な研究テーマを設定する。
- ・テーマに沿った研究計画を立てる力を身につける。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：各自の研究発表（１）
- 第3回：各自の研究発表（２）
- 第4回：各自の研究発表（３）
- 第5回：各自の研究発表（４）
- 第6回：各自の研究発表（５）
- 第7回：各自の研究発表（６）
- 第8回：各自の研究発表（７）
- 第9回：各自の研究発表（８）
- 第10回：各自の研究発表（９）
- 第11回：各自の研究発表（10）
- 第12回：各自の研究発表（11）
- 第13回：各自の研究発表（12）
- 第14回：各自の研究発表（13）
- 第15回：レポート課題と解説

教科書 特に指定しない。

参考文献 随時紹介する。

成績評価方法

レポート	50%	報告レポートと最終レポートを評価する。
平常点評価	50%	参加度、意欲、発表の準備状況と内容を評価する。

発達動機づけ論ゼミ（２）A（春学期）

外山 紀子

授業概要 各自の研究テーマに沿って、国内外の学術論文の講読と討論を行う。

授業の到達目標

- ・ 自分の研究テーマに関連のある学術論文を批判的に読み解く力を身につける。
- ・ 自分の研究テーマに即した研究計画をたて、それを実施する力を身につける。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：文献購読と討論（１）
- 第3回：文献購読と討論（２）
- 第4回：文献購読と討論（３）
- 第5回：文献購読と討論（４）
- 第6回：文献購読と討論（５）
- 第7回：文献購読と討論（６）
- 第8回：文献購読と討論（７）
- 第9回：文献購読と討論（８）
- 第10回：文献購読と討論（９）
- 第11回：文献購読と討論（10）
- 第12回：文献購読と討論（11）
- 第13回：文献購読と討論（12）
- 第14回：文献購読と討論（13）
- 第15回：レポート課題と解説

教科書 特に指定しない。

参考文献 随時紹介する。

成績評価方法

- レポート 50% 報告レポートと最終レポートを評価する。
- 平常点評価 50% 参加度、意欲、発表の準備状況と内容を評価する。

発達動機づけ論ゼミ（２）B（秋学期）

外山 紀子

授業概要 各自の研究テーマに沿って得られたデータの検討および討論を行う。

授業の到達目標

- ・ 自分の研究テーマに即して、研究計画をたて、それを実施する力を身につける。
- ・ 論文を作成する力を身につける。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：各自の研究発表（１）
- 第3回：各自の研究発表（２）
- 第4回：各自の研究発表（３）
- 第5回：各自の研究発表（４）
- 第6回：各自の研究発表（５）
- 第7回：各自の研究発表（６）
- 第8回：各自の研究発表（７）
- 第9回：各自の研究発表（８）
- 第10回：各自の研究発表（９）
- 第11回：各自の研究発表（10）
- 第12回：各自の研究発表（11）
- 第13回：各自の研究発表（12）
- 第14回：各自の研究発表（13）
- 第15回：レポート課題と解説

教科書 特に指定しない。

参考文献 随時紹介する。

成績評価方法

- レポート 50% 報告レポートと最終レポートを評価する。
- 平常点評価 50% 参加度、意欲、発表の準備状況と内容を評価する。

運動制御・バイオメカニクスゼミ（１） A（春学期）

鈴木 秀次

授業概要 ヒトの身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。ここでは、その相互作用に影響を与える要素に焦点を絞り考察を進め身体運動の解明を目指す。具体的には、運動制御とバイオメカニクスに関する生命系と外部環境との相互作用で起こる運動系の適応性について、Roger M. Enoka 著「Neuromechanics of Human Movement (4th Ed.) Human Kinetics, 2008」を輪読しながら演習を進める。

授業の到達目標

・ヒトの身体運動における神経系の調節機構と物理的なメカニクスを上掲の教科書を輪読しながら総合的に理解できるようになること。

授業計画

- 第1回：演習の概要と進め方
第2回：The Motor System (Excitable Membranes 1)
第3回：The Motor System (Excitable Membranes 3)
第4回：The Motor System (Excitable Membranes 5)
第5回：The Motor System (Excitable Membranes 7)
第6回：The Motor System (Muscle and Motor Units 1)
第7回：The Motor System (Muscle and Motor Units 3)
第8回：The Motor System (Muscle and Motor Units 5)
第9回：The Motor System (Muscle and Motor Units 7)
第10回：The Motor System (Voluntary Movement 1)
第11回：The Motor System (Voluntary Movement 3)
第12回：The Motor System (Voluntary Movement 5)
第13回：The Motor System (Voluntary Movement 7)
第14回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 1)
第15回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 3)

教科書 Neuromechanics of Human Movement (4th Ed.) by Roger M. Enoka (4th Ed.) Human Kinetics, 2008

参考文献 その都度提示

成績評価方法

レポート 50% 課題のまとめの内容によって評価。
平常点評価 50% 授業ごとに輪読が課せられ、その出来栄によって評価。

備考・関連URL 演習（1Aと2A）は続けて（金3・4時限目）行うので、同年度に登録すること。
<http://www.f.waseda.jp/shujiwhs/index-j.htm>

運動制御・バイオメカニクスゼミ（１） B（秋学期）

鈴木 秀次

授業概要 ヒトの身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。ここでは、その相互作用に影響を与える要素に焦点を絞り考察を進め身体運動の解明を目指す。具体的には、運動制御とバイオメカニクスに関する生命系と外部環境との相互作用で起こる運動系の適応性について、Roger M. Enoka 著「Neuromechanics of Human Movement (4th Ed.) Human Kinetics, 2008」を輪読しながら演習を進める。

授業の到達目標

・ヒトの身体運動における神経系の調節機構と物理的なメカニクスを上掲の教科書を輪読しながら総合的に理解できるようになること。

授業計画

- 第1回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 5)
第2回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 7)
第3回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 1)
第4回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 3)
第5回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 5)
第6回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 7)
第7回：The Force-Motion Relation (Describing Motion 1)
第8回：The Force-Motion Relation (Describing Motion 3)
第9回：The Force-Motion Relation (Movement Forces 1)
第10回：The Force-Motion Relation (Movement Forces 3)
第11回：The Force-Motion Relation (Force Within the Body 1)
第12回：The Force-Motion Relation (Force Within the Body 3)
第13回：The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 1)
第14回：The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 3)
第15回：まとめ

教科書 Neuromechanics of Human Movement (4th Ed.) by Roger M. Enoka (4th Ed.) Human Kinetics, 2008

参考文献 その都度提示

成績評価方法

レポート 50% 課題のまとめの内容によって評価。
平常点評価 50% 授業ごとに輪読が課せられ、その出来栄によって評価。

備考・関連URL 演習：1Bと2Bは続けて（金3・4限目）行うので、同年度に登録すること。
<http://www.f.waseda.jp/shujiwhs/index-j.htm>

運動制御・バイオメカニクスゼミ（２） A（春学期）

鈴木 秀次

授業概要 ヒトの身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。ここでは、その相互作用に影響を与える要素に焦点を絞り考察を進め身体運動の解明を目指す。具体的には、運動制御とバイオメカニクスに関する生命系と外部環境との相互作用で起こる運動系の適応性について、Roger M. Enoka 著「*Nuromechanics of Human Movement* (4th Ed.) *Human Kinetics*, 2008」を輪読しながら演習を進める。

授業の到達目標

・ヒトの身体運動における神経系の調節機構と物理的なメカニクスを上掲の教科書を輪読しながら総合的に理解できるようになること。

授業計画

- 第1回：演習の概要と進め方
 第2回：The Motor System (Excitable Membranes 2)
 第3回：The Motor System (Excitable Membranes 4)
 第4回：The Motor System (Excitable Membranes 6)
 第5回：The Motor System (Excitable Membranes 8)
 第6回：The Motor System (Muscle and Motor Units 2)
 第7回：The Motor System (Muscle and Motor Units 4)
 第8回：The Motor System (Muscle and Motor Units 6)
 第9回：The Motor System (Muscle and Motor Units 8)
 第10回：The Motor System (Voluntary Movement 2)
 第11回：The Motor System (Voluntary Movement 4)
 第12回：The Motor System (Voluntary Movement 6)
 第13回：The Motor System (Voluntary Movement 8)
 第14回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 2)
 第15回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 4)

教科書 *Nuromechanics of Human Movement* (4th Ed.) by Roger M. Enoka

参考文献 その都度提示

成績評価方法

レポート 50% 課題のまとめの内容によって評価。
 平常点評価 50% 授業ごとに輪読が課せられ、その出来栄によって評価。

備考・関連URL 演習：1Aと2Aは続けて（金3・4限目）行うので、同年度に登録すること。
<http://www.f.waseda.jp/shujiwhs/index-j.htm>

運動制御・バイオメカニクスゼミ（２） B（秋学期）

鈴木 秀次

授業概要 ヒトの身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。ここでは、その相互作用に影響を与える要素に焦点を絞り考察を進め身体運動の解明を目指す。具体的には、運動制御とバイオメカニクスに関する生命系と外部環境との相互作用で起こる運動系の適応性について、Roger M. Enoka 著「*Nuromechanics of Human Movement* (4th Ed.) *Human Kinetics*, 2008」を輪読しながら演習を進める。

授業の到達目標

・ヒトの身体運動における神経系の調節機構と物理的なメカニクスを上掲の教科書を輪読しながら総合的に理解できるようになること。

授業計画

- 第1回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 6)
 第2回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 8)
 第3回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 2)
 第4回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 4)
 第5回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 6)
 第6回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 8)
 第7回：The Force-Motion Relation (Describing Motion 2)
 第8回：The Force-Motion Relation (Describing Motion 4)
 第9回：The Force-Motion Relation (Movement Forces 2)
 第10回：The Force-Motion Relation (Movement Forces 4)
 第11回：The Force-Motion Relation (Force Within the Body 2)
 第12回：The Force-Motion Relation (Force Within the Body 4)
 第13回：The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 2)
 第14回：The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 4)
 第15回：まとめ

教科書 *Nuromechanics of Human Movement* (4th Ed.) by Roger M. Enoka (4th Ed.) *Human Kinetics*, 2008

参考文献 その都度提示

成績評価方法

レポート 50% 課題のまとめの内容によって評価。
 平常点評価 50% 授業ごとに輪読が課せられ、その出来栄によって評価。

備考・関連URL 演習：1Bと2Bは続けて（金3・4限目）行うので、同年度に登録すること。
<http://www.f.waseda.jp/shujiwhs/index-j.htm>

応用健康科学ゼミ（１） A（春学期）

竹中 晃二

授業概要 応用健康科学に関連する英文資料および本を読む。

授業の到達目標

・ 応用健康科学における英文の関連資料および本を多数読み、それらの情報をまとめることができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション：到達目標の設定
- 第2回：英文購読1
- 第3回：英文購読2
- 第4回：英文購読3
- 第5回：英文購読4
- 第6回：英文購読5
- 第7回：英文購読6
- 第8回：英文購読7
- 第9回：英文購読8
- 第10回：英文購読9
- 第11回：英文購読10
- 第12回：英文購読11
- 第13回：英文購読12
- 第14回：まとめ
- 第15回：レビューペーパーの提出

教科書 随時提供する

参考文献 随時提供する

成績評価方法

平常点評価 100% 課題の実践とレジュメ作成の程度

備考・関連URL 研究室ホームページ：<http://takenaka-waseda.jp/>

応用健康科学ゼミ（１） B（秋学期）

竹中 晃二

授業概要 応用健康科学における関連論文のレビューを行う

授業の到達目標

・ 自分の興味に関連する英文関連論文についてデータベースを利用して探索し、それらを読んでまとめることができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション：到達目標の設定
- 第2回：英文論文購読および発表1
- 第3回：英文論文購読および発表2
- 第4回：英文論文購読および発表3
- 第5回：英文論文購読および発表4
- 第6回：英文論文購読および発表5
- 第7回：英文論文購読および発表6
- 第8回：英文論文購読および発表7
- 第9回：英文論文購読および発表8
- 第10回：英文論文購読および発表9
- 第11回：英文論文購読および発表10
- 第12回：英文論文購読および発表11
- 第13回：英文論文購読および発表12
- 第14回：英文論文購読および発表13
- 第15回：まとめ、レビューペーパーの提出

教科書 各自で用意

参考文献 随時提供する

成績評価方法

平常点評価 100% 課題の実践とレジュメ作成の程度

備考・関連URL 研究室ホームページ：<http://takenaka-waseda.jp/>

応用健康科学ゼミ（２） A（春学期）

竹中 晃二

授業概要 応用健康科学に関する研究デザインや統計手法を学ぶ。

授業の到達目標

・応用健康科学に関する研究デザインや統計手法の内容を理解し、自身の研究に適用することができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション：研究デザインおよび統計手法
- 第2回：研究デザイン・手続き1
- 第3回：研究デザイン・手続き2
- 第4回：研究デザイン・手続き3
- 第5回：横断的研究の統計1
- 第6回：横断的研究の統計2
- 第7回：縦断的研究の統計1
- 第8回：縦断的研究の統計2
- 第9回：ポピュレーション・アプローチに用いられている統計
- 第10回：個別事例研究法
- 第11回：研究法と実践
- 第12回：適用例1
- 第13回：適用例2
- 第14回：適用例3
- 第15回：まとめ

教科書 随時提供する

参考文献 随時提供する

成績評価方法

平常点評価 100% 出席および適用の理解の程度

備考・関連URL 研究室ホームページ：<http://takenaka-waseda.jp/>

応用健康科学ゼミ（２） B（秋学期）

竹中 晃二

授業概要 応用健康科学に関する研究デザインや統計手法の適用例を検討する。

授業の到達目標

・応用健康科学に関する研究デザインや統計手法の内容を理解し、適用例を説明することができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション：研究デザインおよび統計手法の適用
- 第2回：研究デザイン・手続きの適用1
- 第3回：研究デザイン・手続きの適用2
- 第4回：研究デザイン・手続きの適用3
- 第5回：横断的研究の統計の適用1
- 第6回：横断的研究の統計の適用2
- 第7回：縦断的研究の統計の適用1
- 第8回：縦断的研究の統計の適用2
- 第9回：ポピュレーション・アプローチに用いられている統計の適用
- 第10回：個別事例研究法の適用
- 第11回：研究法と実践
- 第12回：発展例1
- 第13回：発展例2
- 第14回：発展例3
- 第15回：まとめ

教科書 随時提供する

参考文献 随時提供する

成績評価方法

平常点評価 100% 出席点および発表内容の充実度

備考・関連URL 研究室ホームページ：<http://takenaka-waseda.jp/>

基礎老化学ゼミ（１） A（春学期）

千葉 卓哉

授業概要 老化のメカニズム及び老化防止法に関して、培養細胞及び動物個体（マウス、ラット）を用いて分子細胞生物学的、実験病理学的に研究を行っている。特に食餌カロリー制限による寿命延長機構の解明、その応用による抗加齢疾患薬の開発を目指している。また、生活習慣病やガン、神経変性疾患などのモデル動物を扱うため、それらを研究対象とした実験の実施に必要な基礎知識を学ぶ。演習は輪読、プレゼンテーション及び質疑応答により進める。

授業の到達目標

・基礎老化学研究領域の最新の論文内容を説明できる。

授業計画

- 第1回：研究内容の概説（１）
- 第2回：研究内容の概説（２）
- 第3回：演習（論文紹介）と討論（１）
- 第4回：演習（論文紹介）と討論（２）
- 第5回：演習（論文紹介）と討論（３）
- 第6回：演習（論文紹介）と討論（４）
- 第7回：演習（論文紹介）と討論（５）
- 第8回：演習（論文紹介）と討論（６）
- 第9回：演習（論文紹介）と討論（７）
- 第10回：演習（論文紹介）と討論（８）
- 第11回：演習（論文紹介）と討論（９）
- 第12回：演習（論文紹介）と討論（10）
- 第13回：演習（論文紹介）と討論（11）
- 第14回：演習（論文紹介）と討論（12）
- 第15回：まとめと総合討論

成績評価方法

レポート 20% 授業内容の理解度確認を行う。
平常点評価 80% 授業参加への積極性を評価する。

基礎老化学ゼミ（１） B（秋学期）

千葉 卓哉

授業概要 老化のメカニズム及び老化防止法に関して、培養細胞及び動物個体（マウス、ラット）を用いて分子細胞生物学的、実験病理学的に研究を行っている。特に食餌カロリー制限による寿命延長機構の解明、その応用による抗加齢疾患薬の開発を目指している。また、生活習慣病やガン、神経変性疾患などのモデル動物を扱うため、それらを研究対象とした実験の実施に必要な基礎知識を学ぶ。演習は輪読、プレゼンテーション及び質疑応答により進める。

授業の到達目標

・基礎老化学研究領域の最新の論文内容を説明できる。

授業計画

- 第1回：研究内容の概説（１）
- 第2回：研究内容の概説（２）
- 第3回：演習（論文紹介）と討論（１）
- 第4回：演習（論文紹介）と討論（２）
- 第5回：演習（論文紹介）と討論（３）
- 第6回：演習（論文紹介）と討論（４）
- 第7回：演習（論文紹介）と討論（５）
- 第8回：演習（論文紹介）と討論（６）
- 第9回：演習（論文紹介）と討論（７）
- 第10回：演習（論文紹介）と討論（８）
- 第11回：演習（論文紹介）と討論（９）
- 第12回：演習（論文紹介）と討論（10）
- 第13回：演習（論文紹介）と討論（11）
- 第14回：演習（論文紹介）と討論（12）
- 第15回：まとめと総合討論

成績評価方法

レポート 20% 授業内容の理解度確認を行う。
平常点評価 80% 授業参加への積極性を評価する。

基礎老化学ゼミ（２） A（春学期）

千葉 卓哉

授業概要 老化のメカニズム及び老化防止法に関して、培養細胞及び動物個体（マウス、ラット）を用いて分子細胞生物学的、実験病理学的に研究を行っている。特に食餌カロリー制限による寿命延長機構の解明、その応用による抗加齢疾患薬の開発を目指している。また、生活習慣病やガン、神経変性疾患などのモデル動物を扱うため、それらを研究対象とした実験の実施に必要な基礎知識を学ぶ。演習は輪読、プレゼンテーション及び質疑応答により進める。

授業の到達目標
・基礎老化学研究領域の最新の論文内容を説明できる。

授業計画
第1回：研究内容の概説（１）
第2回：研究内容の概説（２）
第3回：演習（論文紹介）と討論（１）
第4回：演習（論文紹介）と討論（２）
第5回：演習（論文紹介）と討論（３）
第6回：演習（論文紹介）と討論（４）
第7回：演習（論文紹介）と討論（５）
第8回：演習（論文紹介）と討論（６）
第9回：演習（論文紹介）と討論（７）
第10回：演習（論文紹介）と討論（８）
第11回：演習（論文紹介）と討論（９）
第12回：演習（論文紹介）と討論（10）
第13回：演習（論文紹介）と討論（11）
第14回：演習（論文紹介）と討論（12）
第15回：まとめと総合討論

成績評価方法
レポート 20% 授業内容の理解度確認を行う。
平常点評価 80% 授業参加への積極性を評価する。

基礎老化学ゼミ（２） B（秋学期）

千葉 卓哉

授業概要 老化のメカニズム及び老化防止法に関して、培養細胞及び動物個体（マウス、ラット）を用いて分子細胞生物学的、実験病理学的に研究を行っている。特に食餌カロリー制限による寿命延長機構の解明、その応用による抗加齢疾患薬の開発を目指している。また、生活習慣病やガン、神経変性疾患などのモデル動物を扱うため、それらを研究対象とした実験の実施に必要な基礎知識を学ぶ。演習は輪読、プレゼンテーション及び質疑応答により進める。

授業の到達目標
・基礎老化学研究領域の最新の論文内容を説明できる。

授業計画
第1回：研究内容の概説（１）
第2回：研究内容の概説（２）
第3回：演習（論文紹介）と討論（１）
第4回：演習（論文紹介）と討論（２）
第5回：演習（論文紹介）と討論（３）
第6回：演習（論文紹介）と討論（４）
第7回：演習（論文紹介）と討論（５）
第8回：演習（論文紹介）と討論（６）
第9回：演習（論文紹介）と討論（７）
第10回：演習（論文紹介）と討論（８）
第11回：演習（論文紹介）と討論（９）
第12回：演習（論文紹介）と討論（10）
第13回：演習（論文紹介）と討論（11）
第14回：演習（論文紹介）と討論（12）
第15回：まとめと総合討論

成績評価方法
レポート 20% 授業内容の理解度確認を行う。
平常点評価 80% 授業参加への積極性を評価する。

神経内分泌学ゼミ（１）A（春学期）

山内 兄人

授業概要 教科書の内容を理解した上で、各学生が研究を行なっている研究領域の、最新、かつ先端的な論文を各学生が読み、それを紹介し、内容をパワーポイントで解説する。それに対し、参加者が質疑応答すると同時に、教員が説明を加えることで、理解をすすめる。

授業の到達目標

・各自の研究実験の結果を論文にまとめるときに必要な知識を得る。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：排卵神経機構関係の論文輪読1
- 第3回：排卵神経機構関係の論文輪読2
- 第4回：排卵神経機構関係の論文輪読3
- 第5回：代償性卵巢肥大神経機構関係の論文輪読1
- 第6回：代償性卵巢肥大神経機構関係の論文輪読2
- 第7回：雌性行動神経機構関係の論文輪読1
- 第8回：雌性行動神経機構関係の論文輪読2
- 第9回：雌性行動神経機構関係の論文輪読3
- 第10回：雄性行動神経機構関係の論文輪読1
- 第11回：雄性行動神経機構関係の論文輪読2
- 第12回：雄性行動神経機構関係の論文輪読3
- 第13回：勃起機能神経機構関係の論文輪読1
- 第14回：勃起機能神経機構関係の論文輪読2
- 第15回：総合討論

教科書 脳が子どもを産む、山内著 コロナ社、1999

参考文献 The Rat Nervous System, edited by Paxinos, G. Elsevier, 2004

成績評価方法

平常点評価 100% 発表内容、討論内容

神経内分泌学ゼミ（１）B（秋学期）

山内 兄人

授業概要 教科書の内容を理解した上で、各学生が研究を行なっている研究領域の、最新、かつ先端的な論文を各学生が読み、それを紹介し、内容をパワーポイントで解説する。それに対し、参加者が質疑応答すると同時に、教員が説明を加えることで、理解をすすめる。

授業の到達目標

・各自の研究実験結果を論文にまとめるときに必要な知識を得る。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：妊娠神経機構関係の論文輪読1
- 第3回：妊娠神経機構関係の論文輪読2
- 第4回：妊娠神経機構関係の論文輪読3
- 第5回：分娩機構関係の論文輪読1
- 第6回：分娩機構関係の論文輪読2
- 第7回：母性行動神経機構関係の論文輪読1
- 第8回：母性行動神経機構関係の論文輪読2
- 第9回：母性行動神経機構関係の論文輪読3
- 第10回：プロラクチン分泌神経機構関係の論文輪読1
- 第11回：プロラクチン分泌神経機構関係の論文輪読2
- 第12回：乳汁分泌神経機構関係の論文輪読1
- 第13回：乳汁分泌神経機構関係の論文輪読2
- 第14回：乳汁分泌神経機構関係の論文輪読3
- 第15回：総合討論

教科書 脳が子どもを産む、山内著 コロナ社、1999

成績評価方法

平常点評価 100% 発表内容、討論内容

神経内分泌学ゼミ（２）A（春学期）

山内 兄人

授業概要 教科書の内容を理解した上で、各学生が研究を行なっている研究領域の、最新、かつ先端的な論文を各学生が読み、それを紹介し、内容をパワーポイントで解説する。それに対し、参加者が質疑応答すると同時に、教員が説明を加えることで、理解をすすめる。

授業の到達目標

・各自の研究実験結果を論文にまとめるときに必要な知識を得る。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：セロトニン関係の論文輪読1
- 第3回：セロトニン関係の論文輪読2
- 第4回：セロトニン神経関係の論文輪読1
- 第5回：セロトニン神経関係の論文輪読2
- 第6回：縫線核関係の論文輪読1
- 第7回：縫線核関係の論文輪読2
- 第8回：GABA神経関係の論文輪読1
- 第9回：GABA神経関係の論文輪読2
- 第10回：生殖器官性分化関係の論文輪読1
- 第11回：生殖器官性分化関係の論文輪読2
- 第12回：脳性分化機序関係の論文輪読1
- 第13回：脳性分化機序関係の論文輪読2
- 第14回：脳性分化機序関係の論文輪読3
- 第15回：総合討論

教科書 脳の性分化、山内、新井編著、裳華房、2006

成績評価方法

平常点評価 100% 発表内容、討論内容

神経内分泌学ゼミ（２）B（秋学期）

山内 兄人

授業概要 教科書の内容を理解した上で、各学生が研究を行なっている研究領域の、最新、かつ先端的な論文を各学生が読み、それを紹介し、内容をパワーポイントで解説する。それに対し、参加者が質疑応答すると同時に、教員が説明を加えることで、理解をすすめる。

授業の到達目標

・各自の研究実験結果を論文にまとめるときに必要な知識を得る。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：性周期神経機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読1
- 第3回：性周期神経機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読2
- 第4回：性周期神経機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読3
- 第5回：雌性行動神経機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読1
- 第6回：雌性行動神経機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読2
- 第7回：雌性行動神経機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読3
- 第8回：雄性行動神経機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読1
- 第9回：雄性行動神経機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読2
- 第10回：雄性行動神経機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読3
- 第11回：母性行動神経機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読1
- 第12回：母性行動神経機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読2
- 第13回：乳汁分泌機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読1
- 第14回：乳汁分泌機構の発達、性差と性分化に関する論文輪読2
- 第15回：総合討論

教科書 脳の性分化、山内、新井編著、裳華房、2006

成績評価方法

平常点評価 100% 発表内容、討論内容

生体機能学ゼミ（１） A（春学期）

今泉 和彦

授業概要 本授業では、生体機能学研究室において研究を展開している骨格筋の可塑性とその調節機構および栄養素（亜鉛・ビタミンB 9<葉酸>）欠乏による生体防御システムの応答とその機構について紹介すると共に、それらの研究分野に近い最新の関連論文を読みながらこれらの研究分野の現状について理解を深める。

授業の到達目標

骨格筋の可塑性とその調節機構および栄養素（亜鉛・ビタミンB 9<葉酸>）欠乏による生体防御システムの応答とその機構を系統的に理解することを到達目標に置く。

授業計画

- 第1回：文献講読と発表（骨格筋の可塑性とその調節機構1）
- 第2回：文献講読と発表（骨格筋の可塑性とその調節機構2）
- 第3回：文献講読と発表（骨格筋の可塑性とその調節機構3）
- 第4回：文献講読と発表（骨格筋の可塑性とその調節機構4）
- 第5回：文献講読と発表（骨格筋の可塑性とその調節機構5）
- 第6回：文献講読と発表（亜鉛欠乏による生体防御システムの応答とその機構1）
- 第7回：文献講読と発表（亜鉛欠乏による生体防御システムの応答とその機構2）
- 第8回：文献講読と発表（亜鉛欠乏による生体防御システムの応答とその機構3）
- 第9回：文献講読と発表（亜鉛欠乏による生体防御システムの応答とその機構4）
- 第10回：文献講読と発表（亜鉛欠乏による生体防御システムの応答とその機構5）
- 第11回：文献講読と発表（ビタミンB 9（葉酸）欠乏による生体防御システムの応答とその機構1）
- 第12回：文献講読と発表（ビタミンB 9（葉酸）欠乏による生体防御システムの応答とその機構2）
- 第13回：文献講読と発表（ビタミンB 9（葉酸）欠乏による生体防御システムの応答とその機構3）
- 第14回：文献講読と発表（ビタミンB 9（葉酸）欠乏による生体防御システムの応答とその機構4）
- 第15回：文献講読と発表（ビタミンB 9（葉酸）欠乏による生体防御システムの応答とその機構5）

教科書 特になし

参考文献 適宜紹介する。

◆本研究室の関連文献：①Sato S, et al, J Pharmacol Sci, 107, 393-400 (2008), ②Someya Y, et al, J Nutr Sci Vitaminol, 55,162-169 (2009), ③Kawano F, et al, J Physiol Sci, 59, 383-390 (2009), ④Ideno H, et al, Exp Cell Res, 315, 474-484 (2009), ⑤Sato S, et al, J Physiol Sci, 60, 119-127 (2010), ⑥Sakakibara Y, et al, J Nutr Sci Vitaminol, 57, 197-201 (2011), ⑦Kawashima Y, et al, J Toxicol Sci, 36, 101-108 (2011), ⑧Sakakibara Y, et al, J Toxicol Sci, 36, 681-685 (2011), ⑨Sato S, et al, Life Sci, 89, 962-967 (2011), ⑩Sato S, et al, J Toxicol Sci, 36, 479-486 (2011), ⑪Sato S, et al, J Biomed Biotechnol, 2011, ID 729598, 1-10 (2011), ⑫Sato S, et al, J Phys Fitness Sports Med, 1, 139-144 (2012)

成績評価方法

レポート 25% 文献講読と発表（5回分）のレポートを課す。
平常点評価 75% 文献講読と発表を各人5回担当する（5回×15点=75点満点）

備考・関連URL ◆本研究室URL: <http://www.waseda.jp/sem-imaizumi/index.html>

生体機能学ゼミ（１） B（秋学期）

今泉 和彦

授業概要 本授業では、香辛料（大蒜：ニンニク、山葵：ワサビ、唐辛子）の辛味成分を摂取した際の生体応答とその生理的意義を理解するため、私達の研究成果を中心として関連文献を読みながら当該分野における最新の知見を明らかにすることを目標に置いている。

授業の到達目標

香辛料の辛味成分を摂取した際の生理応答については経験的には多くのことが知られているが、学術レベルにはまだ解明されていない点が多い。この不明な点を栄養生理学の立場から系統的に理解することを目標の到達点としている。

授業計画

- 第1回：文献講読と発表（香辛料（大蒜）辛味成分摂取の生体応答とその機構1）
- 第2回：文献講読と発表（香辛料（大蒜）辛味成分摂取の生体応答とその機構2）
- 第3回：文献講読と発表（香辛料（大蒜）辛味成分摂取の生体応答とその機構3）
- 第4回：文献講読と発表（香辛料（大蒜）辛味成分摂取の生体応答とその機構4）
- 第5回：文献講読と発表（香辛料（大蒜）辛味成分摂取の生体応答とその機構5）
- 第6回：文献講読と発表（香辛料（山葵）辛味成分摂取の生体応答とその機構1）
- 第7回：文献講読と発表（香辛料（山葵）辛味成分摂取の生体応答とその機構2）
- 第8回：文献講読と発表（香辛料（山葵）辛味成分摂取の生体応答とその機構3）
- 第9回：文献講読と発表（香辛料（山葵）辛味成分摂取の生体応答とその機構4）
- 第10回：文献講読と発表（香辛料（山葵）辛味成分摂取の生体応答とその機構5）
- 第11回：文献講読と発表（香辛料（唐辛子）辛味成分摂取の生体応答とその機構1）
- 第12回：文献講読と発表（香辛料（唐辛子）辛味成分摂取の生体応答とその機構2）
- 第13回：文献講読と発表（香辛料（唐辛子）辛味成分摂取の生体応答とその機構3）
- 第14回：文献講読と発表（香辛料（唐辛子）辛味成分摂取の生体応答とその機構4）
- 第15回：文献講読と発表（香辛料（唐辛子）辛味成分摂取の生体応答とその機構5）

教科書 特になし

参考文献 適宜紹介する。

◆本研究室の関連文献：①Shirato K, et al, Eur J Appl Physiol, 98, 590-600 (2006), ②Shirato K, et al, J Pharmacol Sci, 104, 146-152 (2007), ③Nomura S, et al, J Nutr Biochem, 19, 840-847 (2008), ④Akimoto S, et al, J Nutr Sci Vitaminol, 55, 282-287 (2009), ⑤Imaizumi K, et al, J Toxicol Sci, 35, 583-589 (2010), ⑥Aritoshi S, et al, J Health Sci, 56, 99-103 (2010), ⑦Imaizumi K, et al, J Health Sci, 56, 347-354 (2010), ⑧Imaizumi K, et al, J Toxicol Sci, 36, 109-116 (2011), ⑨Ichinose T, et al, Scand J Med Sci Sports, 21, 598-605 (2011), ⑩Hashizume Y, et al, J Nutr Sci Vitaminol, 58, 292-296 (2012), ⑪Higashino-Matsui Y, et al, Environ Health Prev Med, 17, 157-163 (2012), ⑫Shirato K, et al, J Phys Fitness Sports Med, 1, 145-150 (2012), ⑬Abe I, et al, Environ Health Prev Med, 18, in press (2013)

成績評価方法

レポート 25% 文献講読と発表（5回分）のレポートを課す。
平常点評価 75% 文献講読と発表を各人5回担当する（5回×15点=75点満点）

備考・関連URL ◆本研究室URL: <http://www.waseda.jp/sem-imaizumi/index.html>

生体機能学ゼミ（２） A（春学期）

今泉 和彦

授業概要 受講者の修士論文の研究課題をまず明確にするため、研究の背景・目的・方法について毎回準備してきた内容を発表・討論する中で最終的に修士論文の概要を明確化する。つぎに研究課題を検討するための方法や解析法を具体化する。この内容をもとに予備実験・本実験・確認実験などを行い、実験データを分析してその内容を明確化する。最後に、実験データから得られる結論等をよく吟味し、最終的に修士論文の内容を確定する。

授業の到達目標

受講者の修士論文の内容を確定した上で、実験を行うと共に得られたデータを十分解析して仮説と比較する。その上で論文を作成する内容であるか否かを慎重に検討することを最終目標に置く。

授業計画

- 第1回：修士論文：背景・目的・方法の検討（１）
- 第2回：修士論文：背景・目的・方法の検討（２）
- 第3回：修士論文：背景・目的・方法の検討（３）
- 第4回：修士論文：背景・目的・方法の確定（１）
- 第5回：修士論文：背景・目的・方法の確定（２）
- 第6回：修士論文：実験法・解析法の確認（１）
- 第7回：修士論文：実験法・解析法の確認（２）
- 第8回：修士論文：実験法・解析法の確認（３）
- 第9回：修士論文：実験法・解析法の確認（４）
- 第10回：修士論文：実験法・解析法の確認（５）
- 第11回：修士論文：実験データの検討（１）
- 第12回：修士論文：実験データの検討（２）
- 第13回：修士論文：実験データの検討（３）
- 第14回：修士論文：実験データの検討（４）
- 第15回：修士論文：実験データの検討（５）

教科書 特になし

参考文献

◆本研究室の関連文献：①Shirato K, et al, Eur J Appl Physiol, 98, 590-600 (2006) , ②Shirato K, et al, J Pharmacol Sci, 104, 146-152 (2007) , ③Nomura S, et al, J Nutr Biochem, 19, 840-847 (2008) , ④Akimoto S, et al, J Nutr Sci Vita- minol, 55, 282-287 (2009) , ⑤Imaizumi K, et al, J Toxicol Sci, 35, 583-589 (2010) , ⑥Aritoshi S, et al, J Health Sci, 56, 99-103 (2010) , ⑦Imaizumi K, et al, J Health Sci, 56, 347-354 (2010) , ⑧Imaizumi K, et al, J Toxicol Sci, 36, 109-116 (2011) , ⑨Ichinose T, et al, Scand J Med Sci Sports, 21, 598- 605 (2011) , ⑩Hashizume Y, et al, J Nutr Sci Vitaminol, 58, 292-296 (2012) , ⑪Higashino-Matsui Y, et al, Environ Health Prev Med, 17, 157-163 (2012) , ⑫Shirato K, et al, J Phys Fitness Sports Med, 1, 145-150 (2012) , ⑬Abe I, et al, Environ Health Prev Med, 18, in press (2013) .

成績評価方法

レポート 50% 課題レポートを課す。
平常点評価 50% 課題報告を課す。

備考・関連URL ◆本研究室URL: <http://www.waseda.jp/sem-imaizumi/index.html>

生体機能学ゼミ（２） B（秋学期）

今泉 和彦

授業概要 修士論文を纏める為の知識・考え方・データの読み方・文献内容の比較検討などを具体的にしながら、実験データを修士論文として独力で纏めることができるようにする。併せて、研究成果を公表するための準備を十分にとってその内容を吟味して、発表内容を明確にできるようにする。

授業の到達目標

修士論文を独力で初めから最後まで仕上げることを目標とする。そして得られた成果を公表できるように十分に準備できるような人物となることを目標に置く。

授業計画

- 第1回：修士論文作成の構想発表
- 第2回：修士論文のデータ確認
- 第3回：修士論文のデータ確認
- 第4回：修士論文の関連文献の確認
- 第5回：修士論文の関連文献の確認
- 第6回：修士論文の作成・打ち合わせ（１）
- 第7回：修士論文の作成・打ち合わせ（２）
- 第8回：修士論文の作成・打ち合わせ（３）
- 第9回：修士論文の作成・打ち合わせ（４）
- 第10回：修士論文の作成最終打ち合わせ（１）
- 第11回：修士論文の作成最終打ち合わせ（２）
- 第12回：修士論文の発表準備・打ち合わせ（１）
- 第13回：修士論文の発表準備・打ち合わせ（２）
- 第14回：修士論文の発表準備と最終確認（１）
- 第15回：修士論文の発表準備と最終確認（２）

教科書 特になし

参考文献

◆本研究室の関連論文：①Sato S, et al, J Pharmacol Sci, 107, 393-400 (2008) , ②Someya Y, et al, J Nutr Sci Vitaminol, 55, 162-169 (2009) , ③Kawano F, et al, J Physiol Sci, 59, 383-390 (2009) , ④Ideno H, et al, Exp Cell Res, 315, 474-484 (2009) , ⑤Sato S, et al, J Physiol Sci, 60, 119-127 (2010) , ⑥Kawashima Y, et al, J Toxicol Sci, 36, 101-108 (2011) , ⑦Sakakibara Y, et al, J Nutr Sci Vitaminol, 57, 197-201 (2011) , ⑧Sakakibara Y, et al, J Toxicol Sci, 36, 681-685 (2011) , ⑨Sato S, et al, Life Sci, 89, 962-967 (2011) , ⑩Sato S, et al, J Toxicol Sci, 36, 479-486 (2011) , ⑪Sato S, et al, J Biomed Biotechnol, 2011, ID 729598, 1-10 (2011) , ⑫Sato S, et al, J Phys Fitness Sports Med, 1, 139-144 (2012)

成績評価方法

レポート 50% 課題レポートを課す。
平常点評価 50% 課題報告を課す。

備考・関連URL ◆本研究室URL: <http://www.waseda.jp/sem-imaizumi/index.html>

統合生理学ゼミ（１） A（春学期）

永島 計

授業概要 体温、体液に関する研究方法を習得し、かつ最新の知見を学ぶ。基本的な生理学の実験手技を学び、個々に与えられた研究テーマを遂行し、学会発表、論文を作成する能力を身につけるカリキュラムを提供する。

授業の到達目標

・体温、体液生理学の研究者としての基本的知識、実験手技の習得

授業計画

- 第1回：オリエンテーション1
- 第2回：実験動物の取り扱い方
- 第3回：実験動物の体温の測定法1
- 第4回：実験動物の体温の測定法2
- 第5回：実験動物の代謝の測定法1
- 第6回：実験動物の代謝の測定法2
- 第7回：実験動物の行動の測定法1
- 第8回：実験動物の行動の測定法2
- 第9回：免疫組織化学的研究法1
- 第10回：免疫組織化学的研究法2
- 第11回：血液を用いた測定法1
- 第12回：血液を用いた測定法2
- 第13回：文献検索法1
- 第14回：発表の仕方1
- 第15回：論文の作製法1

成績評価方法

レポート 50% 課題の提出を毎回行い評価する
平常点評価 50% 研究者としての遂行能力の取得を評価する

統合生理学ゼミ（１） B（秋学期）

永島 計

授業概要 体温、体液に関する研究方法を習得し、かつ最新の知見を学ぶ。基本的な生理学の実験手技を学び、個々に与えられた研究テーマを遂行し、学会発表、論文を作成する能力を身につけるカリキュラムを提供する。

授業の到達目標

・生命医科学の研究者としての基本的知識、実験手技の習得

授業計画

- 第1回：オリエンテーション2
- 第2回：実験動物の取り扱い方
- 第3回：実験動物の体温の測定法3
- 第4回：実験動物の体温の測定法4
- 第5回：実験動物の代謝の測定法3
- 第6回：実験動物の代謝の測定法4
- 第7回：実験動物の行動の測定法3
- 第8回：実験動物の行動の測定法4
- 第9回：免疫組織化学的研究法3
- 第10回：免疫組織化学的研究法4
- 第11回：血液を用いた測定法3
- 第12回：血液を用いた測定法4
- 第13回：文献検索法2
- 第14回：発表の仕方2
- 第15回：論文の作製法2

成績評価方法

レポート 50% 課題の提出を毎回行い評価する
平常点評価 50% 研究者としての遂行能力の取得を評価する

統合生理学ゼミ（２） A（春学期）

永島 計

授業概要 体温、体液に関する研究方法を習得し、かつ最新の知見を学ぶ。基本的な生理学の実験手技を学び、個々に与えられた研究テーマを遂行し、学会発表、論文を作成する能力を身につけるカリキュラムを提供する。

授業の到達目標

・生命医科学の研究者としての基本的知識、実験手技の習得

授業計画

- 第1回：オリエンテーション1
- 第2回：ヒトでの実験法
- 第3回：ヒトでの体温の測定法1
- 第4回：ヒトでの体温の測定法2
- 第5回：ヒトでの代謝の測定法1
- 第6回：ヒトでの代謝の測定法2
- 第7回：ヒトでの行動の測定法1
- 第8回：ヒトでの行動の測定法2
- 第9回：生理心理学的研究法1
- 第10回：生理心理学的研究法2
- 第11回：ヒトの血液を用いた測定法1
- 第12回：ヒトの血液を用いた測定法2
- 第13回：文献検索法1
- 第14回：発表の仕方1
- 第15回：論文の作製法1

成績評価方法

- レポート 50% 課題の提出を毎回行い評価する
- 平常点評価 50% 研究者としての遂行能力の取得を評価する

統合生理学ゼミ（２） B（秋学期）

永島 計

授業概要 体温、体液に関する研究方法を習得し、かつ最新の知見を学ぶ。基本的な生理学の実験手技を学び、個々に与えられた研究テーマを遂行し、学会発表、論文を作成する能力を身につけるカリキュラムを提供する。

授業の到達目標

・生命医科学の研究者としての基本的知識、実験手技の習得

授業計画

- 第1回：オリエンテーション2
- 第2回：ヒトでの実験法
- 第3回：ヒトでの体温の測定法3
- 第4回：ヒトでの体温の測定法4
- 第5回：ヒトでの代謝の測定法3
- 第6回：ヒトでの代謝の測定法4
- 第7回：ヒトでの行動の測定法3
- 第8回：ヒトでの行動の測定法4
- 第9回：生理心理学的研究法3
- 第10回：生理心理学的研究法4
- 第11回：ヒトの血液を用いた測定法3
- 第12回：ヒトの血液を用いた測定法4
- 第13回：文献検索法2
- 第14回：発表の仕方2
- 第15回：論文の作製法2

成績評価方法

- レポート 50% 課題の提出を毎回行い評価する
- 平常点評価 50% 研究者としての遂行能力の取得を評価する

分子神経科学ゼミ（１） A（春学期）

榊原 伸一

授業概要 神経科学に関する代表的ないくつかの原著論文を解説し、担当者がプレゼンテーションすることにより深い理解を目指す。また最近発表された先端的な論文を紹介し質疑応答を行う。

授業の到達目標

- ・ 神経発生研究に関する最新の知見を得る。
- ・ 神経系の構造と各部の働きを遺伝子発現、分子動態から理解する。
- ・ 神経回路の分子的基盤を理解する。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：神経系の概観 各部の形態と機能
- 第3回：脳の構造
- 第4回：脊髄の構造
- 第5回：神経組織の成立と構成細胞（ニューロンの構造と機能）
- 第6回：神経組織の成立と構成細胞（グリアの種類と機能）
- 第7回：神経系の発生メカニズム
- 第8回：神経発生にかかわる分子群
- 第9回：ニューロン機能の論文のプレゼンテーション
- 第10回：ニューロン機能についての論文の討論
- 第11回：グリアについての論文のプレゼンテーション
- 第12回：グリアについての論文の討論
- 第13回：神経発生についての論文のプレゼンテーション
- 第14回：神経発生についての論文の討論
- 第15回：まとめ

教科書 Principles of Neural Science, 5th ed. Kandel ER, Schwartz JH, Jessell TM 著 McGraw-Hill, New York

成績評価方法

平常点評価 100% 理解度、発言内容、積極性などを評価する

分子神経科学ゼミ（１） B（秋学期）

榊原 伸一

授業概要 神経科学に関する代表的ないくつかの原著論文を解説し、担当者がプレゼンテーションすることにより深い理解を目指す。また最近発表された先端的な論文を紹介し質疑応答を行う。

授業の到達目標

- ・ 神経発生研究に関する最新の知見を得る。
- ・ 神経系の構造と各部の働きを遺伝子発現、分子動態から理解する。
- ・ 神経回路の分子的基盤を理解する。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：神経系の概観 各部の形態と機能
- 第3回：シナプス機能の論文のプレゼンテーション
- 第4回：シナプス機能についての論文の討論
- 第5回：軸索流の論文のプレゼンテーション
- 第6回：軸索流についての論文の討論
- 第7回：細胞骨格の論文のプレゼンテーション
- 第8回：細胞骨格についての論文の討論
- 第9回：神経伝達物質についての論文のプレゼンテーション
- 第10回：神経伝達物質についての論文の討論
- 第11回：神経伝達遮断薬についての論文のプレゼンテーション
- 第12回：神経伝達遮断薬についての論文の討論
- 第13回：広範囲調節系についての論文のプレゼンテーション
- 第14回：広範囲調節系についての論文の討論
- 第15回：まとめ

教科書 Principles of Neural Science, 5th ed. Kandel ER, Schwartz JH, Jessell TM 著 McGraw-Hill, New York

成績評価方法

平常点評価 100% 理解度、発言内容、積極性などを評価する

分子神経科学ゼミ（２） A（春学期）

榊原 伸一

授業概要 神経科学に関する代表的ないくつかの原著論文を解説し、担当者がプレゼンテーションすることにより深い理解を目指す。また最近発表された先端的な論文を紹介し質疑応答を行う。

授業の到達目標

- ・ 神経発生研究に関する最新の知見を得る。
- ・ 神経系の構造と各部の働きを遺伝子発現、分子動態から理解する。
- ・ 神経回路の分子的基盤を理解する。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：神経系の概観 各部の形態と機能
- 第3回：感覚制御に関わる分子の論文のプレゼンテーション
- 第4回：感覚制御に関わる分子についての論文の討論
- 第5回：運動制御に関わる分子の論文のプレゼンテーション
- 第6回：運動制御に関わる分子についての論文の討論
- 第7回：軸索誘導分子の論文のプレゼンテーション
- 第8回：軸索誘導分子についての論文の討論
- 第9回：神経回路形成分子の論文のプレゼンテーション
- 第10回：神経回路形成分子についての論文の討論
- 第11回：海馬についての論文のプレゼンテーション
- 第12回：海馬についての論文の討論
- 第13回：小脳についての論文のプレゼンテーション
- 第14回：小脳についての論文の討論
- 第15回：まとめ

教科書 Principles of Neural Science, 5th ed. Kandel ER, Schwartz JH, Jessell TM 著 McGraw-Hill, New York

成績評価方法

平常点評価 100% 理解度、発言内容、積極性などを評価する

分子神経科学ゼミ（２） B（秋学期）

榊原 伸一

授業概要 神経科学に関する代表的ないくつかの原著論文を解説し、担当者がプレゼンテーションすることにより深い理解を目指す。また最近発表された先端的な論文を紹介し質疑応答を行う。

授業の到達目標

- ・ 神経発生研究に関する最新の知見を得る。
- ・ 神経系の構造と各部の働きを遺伝子発現、分子動態から理解する。
- ・ 神経回路の分子的基盤を理解する。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：神経系の概観 各部の形態と機能
- 第3回：無脊椎動物の神経発生についての論文のプレゼンテーション
- 第4回：無脊椎動物の神経発生についての論文の討論
- 第5回：無脊椎動物の神経発生制御分子についての論文のプレゼンテーション
- 第6回：無脊椎動物の神経発生制御分子についての論文の討論
- 第7回：脳進化についての論文のプレゼンテーション
- 第8回：脳進化についての論文の討論
- 第9回：短期記憶関連分子の論文のプレゼンテーション
- 第10回：短期記憶関連分子についての論文の討論
- 第11回：長期記憶関連分子についての論文のプレゼンテーション
- 第12回：長期記憶関連分子についての論文の討論
- 第13回：疾患関連分子についての論文のプレゼンテーション
- 第14回：疾患関連分子についての論文の討論
- 第15回：まとめ

教科書 Principles of Neural Science, 5th ed. Kandel ER, Schwartz JH, Jessell TM 著 McGraw-Hill, New York

成績評価方法

平常点評価 100% 理解度、発言内容、積極性などを評価する

医療人類学ゼミ（１） A（春学期）

辻内 琢也

授業概要 医療人類学とは、医療システムの通文化的研究を通して、健康と病気の発生に影響を与える生物生態学的（bio-ecological）および社会文化的（socio-cultural）要因について、現状と人間の全歴史を比較文化的に注目しようとするものだと言われる。
本ゼミ（１）は大学院修士課程１年次に履修するものとする。

授業の到達目標

・医療人類学の基礎となる、文化人類学・社会人類学・自然人類学の素養を身につけることができる。

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
- 第2回：輪読教材の選定、分担配分の決定
- 第3回：文化人類学とは何か（１）
- 第4回：文化人類学とは何か（２）
- 第5回：自民族中心主義と文化相対主義（１）
- 第6回：自民族中心主義と文化相対主義（２）
- 第7回：機能主義人類学から構造主義人類学へ（１）
- 第8回：機能主義人類学から構造主義人類学へ（２）
- 第9回：解釈人類学からポストモダン人類学へ（１）
- 第10回：解釈人類学からポストモダン人類学へ（２）
- 第11回：呪術・儀礼・宗教・科学（１）
- 第12回：呪術・儀礼・宗教・科学（２）
- 第13回：フィールドワーク入門（１）
- 第14回：フィールドワーク入門（２）
- 第15回：レポート課題と解説

教科書

- ・奥野克巳、花淵賢也（共編）『文化人類学のレッスン』学陽書房、2005
- ・太田好信、浜本満（編）『メイキング文化人類学』世界思想社、2005
- ・武田丈、亀井伸孝（編）『フィールドワーク入門：アクション別』世界思想社、2008

成績評価方法

その他 100% 授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

備考・関連URL 辻内研究室ホームページ：<http://www.waseda.jp/sem-tsujuchi/>

医療人類学ゼミ（１） B（秋学期）

辻内 琢也

授業概要 医療人類学とは、医療システムの通文化的研究を通して、健康と病気の発生に影響を与える生物生態学的（bio-ecological）および社会文化的（socio-cultural）要因について、現状と人間の全歴史を比較文化的に注目しようとするものだと言われる。
本ゼミ（１）は大学院修士課程１年次に履修するものとする。

授業の到達目標

・医療人類学の基礎となる、文化人類学・社会人類学・自然人類学の素養を身につけることができる。

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
- 第2回：輪読教材の選定、分担配分の決定
- 第3回：医療人類学とは何か（１）
- 第4回：医療人類学とは何か（２）
- 第5回：臨床人類学とは何か（１）
- 第6回：臨床人類学とは何か（２）
- 第7回：医療におけるナラティブ・アプローチ（１）
- 第8回：医療におけるナラティブ・アプローチ（２）
- 第9回：保健・医療・開発の人類学（１）
- 第10回：保健・医療・開発の人類学（２）
- 第11回：批判的医療人類学とは何か（１）
- 第12回：批判的医療人類学とは何か（２）
- 第13回：フィールドワーク入門（３）
- 第14回：フィールドワーク入門（４）
- 第15回：レポート課題と解説

教科書

- ・池田光穂、奥野克巳（共編）『医療人類学のレッスン』学陽書房、2007
- ・野口裕二（著）『物語としてのケア：ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院、2002
- ・A.ハルドン、S.ファン・デル・ヘースト他（著）『保健と医療の人類学：調査研究の手引き』世界思想社、2004
- ・菅原和孝（編）『フィールドワークへの挑戦：＜実践＞人類学入門』世界思想社、2006

成績評価方法

その他 100% 授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

備考・関連URL 辻内研究室ホームページ：<http://www.waseda.jp/sem-tsujuchi/>

医療人類学ゼミ（２） A（春学期）

辻内 琢也

授業概要 医療人類学とは、医療システムの通文化的研究を通して、健康と病気の発生に影響を与える生物生態学的（bio-ecological）および社会文化的（socio-cultural）要因について、現状と人間の全歴史を比較文化的に注目しようとするものだ定義される。

ゼミ（１）を基礎とし、より実践的・応用的な研究アプローチ法を用いて、生・老・病・死などを事例に、現代社会における具体的なさまざまな現象について考察してゆく。本演習は大学院修士課程２年次に履修するものとする。

授業の到達目標

- ・医療の歴史の変遷という時間軸を縦軸、世界各地の文化に応じた様々な医療という空間軸を横軸として捉えることができる。
- ・健康（health）や病い（illness）を bio-psycho-socio-ecological-spiritual なレベルで多面的・多層的に捉えることができる。

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
- 第2回：輪読教材の選定、分担配分の決定
- 第3回：病いの人類学（１）
- 第4回：病いの人類学（２）
- 第5回：障害の人類学（１）
- 第6回：障害の人類学（２）
- 第7回：老いの人類学（１）
- 第8回：老いの人類学（２）
- 第9回：死の人類学（１）
- 第10回：死の人類学（２）
- 第11回：健康の人類学（１）
- 第12回：健康の人類学（２）
- 第13回：フィールドワーク実践（１）
- 第14回：フィールドワーク実践（２）
- 第15回：レポート課題と解説

教科書

- ・近藤英俊、浮ヶ谷幸代（編）「現代医療の民族誌」明石書店、2004
- ・江口重幸、斎藤清二、野村直樹（編）「ナラティブと医療」金剛出版、2006
- ・アーサー・クラインマン（著）「病いの語り：慢性の病いをめぐる臨床人類学」誠信書房、1996
- ・小田博志（著）「エスノグラフィ入門：＜現場＞を質的研究する」春秋社、2010

参考文献 Cecil G Helman "Culture, Health and Illness, Fifth Edition", Hodder Arnold, London, 2007

成績評価方法

その他 100% 授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

備考・関連URL 辻内研究室ホームページ：http://www.waseda.jp/sem-tsuiuchi/

医療人類学ゼミ（２） B（秋学期）

辻内 琢也

授業概要 医療人類学とは、医療システムの通文化的研究を通して、健康と病気の発生に影響を与える生物生態学的（bio-ecological）および社会文化的（socio-cultural）要因について、現状と人間の全歴史を比較文化的に注目しようとするものだ定義される。

ゼミ（１）を基礎とし、より実践的・応用的な研究アプローチ法を用いて、災害や復興などを事例に、現代社会における具体的なさまざまな現象について考察してゆく。本演習は大学院修士課程２年次に履修するものとする。

授業の到達目標

- ・医療の歴史の変遷という時間軸を縦軸、世界各地の文化に応じた様々な医療という空間軸を横軸として捉えることができる。
- ・健康（health）や病い（illness）を bio-psycho-socio-ecological-spiritual なレベルで多面的・多層的に捉えることができる。

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
- 第2回：輪読教材の選定、分担配分の決定
- 第3回：支援と援助の人類学（１）
- 第4回：支援と援助の人類学（２）
- 第5回：災害の人類学（１）
- 第6回：災害の人類学（２）
- 第7回：復興の人類学（１）
- 第8回：復興の人類学（２）
- 第9回：トラウマの人類学（１）
- 第10回：トラウマの人類学（２）
- 第11回：サファリング（苦悩）の人類学（１）
- 第12回：サファリング（苦悩）の人類学（２）
- 第13回：フィールドワーク実践（３）
- 第14回：フィールドワーク実践（４）
- 第15回：レポート課題と解説

教科書

- ・小國和子、亀井伸孝、飯嶋秀治（編）「支援のフィールドワーク：開発と福祉の現場から」世界思想社、2011
- ・林勲男（編著）「自然災害と復興支援（みんなく実践人類学シリーズ9）」明石書店、2010
- ・宮地尚子（著）「トラウマの医療人類学」みすず書房、2005
- ・A.クラインマン他（著）「他者の苦しみへの責任：ソーシャル・サファリングを知る」みすず書房、2011

参考文献 Cecil G Helman "Culture, Health and Illness, Fifth Edition", Hodder Arnold, London, 2007

成績評価方法

その他 100% 授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

備考・関連URL 辻内研究室ホームページ：http://www.waseda.jp/sem-tsuiuchi/

緩和医療学・臨床死生学ゼミ（１） A（春学期）

小野 充一

授業概要 緩和医療学については、個人の“死”とその過程で生ずるつらさを具体的に和らげていくための知識や方法として、疼痛緩和、身体的症状緩和、精神的苦痛への対処、社会的苦痛の緩和、家族へのケアといった各領域の内容を学習することを目標とし、臨床死生学については様々な生と死の臨床現場で行動できる力や、その体験をどう伝えて共有していくかという課題に対する知識や概念について多角的に検討することを目標とする。さらにこれらの分野における研究手法として、質的および量的研究の概要を具体的に理解することを目的とする。

授業の到達目標

- ・緩和医療学における研究論文の批判的検証が出来る。
- ・臨床死生学における研究論文の批判的検証が出来る。
- ・自己の選択した研究テーマに関する研究計画を立案出来る。

授業計画

第1回：授業の概要と進め方
 第2回：輪読（１）、（２）（最新緩和医療学）
 第3回：輪読（３）、（４）（最新緩和医療学）
 第4回：輪読（５）、（６）（最新緩和医療学）
 第5回：輪読（７）、（８）（最新緩和医療学）
 第6回：輪読（９）、（１０）（最新緩和医療学）
 第7回：緩和医療現場フィールド調査（１）
 第8回：緩和医療現場フィールド調査（２）
 第9回：グループ共同研究（１）「治療停止を巡る問題」
 第10回：グループ共同研究（２）「治療停止を巡る問題」
 第11回：グループ共同研究（３）「治療停止を巡る問題」
 第12回：グループ共同研究（４）「治療停止を巡る問題」
 第13回：グループ共同研究発表「治療停止を巡る問題」
 第14回：卒業研究テーマ・研究計画発表会
 第15回：春学期まとめ・講評

教科書

- ・「最新緩和医療学」恒藤暁著、最新医学社
- ・「テキスト臨床死生学」日本臨床死生学会編、勁草書房

成績評価方法

レポート 20% フィールドワークレポート
 平常点評価 80% 出席状況、グループワーク、個人発表

緩和医療学・臨床死生学ゼミ（１） B（秋学期）

小野 充一

授業概要 緩和医療学については、個人の“死”とその過程で生ずるつらさを具体的に和らげていくための知識や方法として、疼痛緩和、身体的症状緩和、精神的苦痛への対処、社会的苦痛の緩和、家族へのケアといった各領域の内容を学習することを目標とし、臨床死生学については様々な生と死の臨床現場で行動できる力や、その体験をどう伝えて共有していくかという課題に対する知識や概念について多角的に検討することを目標とする。さらにこれらの分野における研究手法として、質的および量的研究の概要を具体的に理解することを目的とする。

授業の到達目標

- ・緩和医療学における研究論文の批判的検証が出来る。
- ・臨床死生学における研究論文の批判的検証が出来る。
- ・自己の選択した研究テーマに関する研究計画を立案出来る。

授業計画

第1回：授業の概要と進め方
 第2回：輪読（１）、（２）（テキスト臨床死生学）
 第3回：輪読（３）、（４）（テキスト臨床死生学）
 第4回：輪読（５）、（６）（テキスト臨床死生学）
 第5回：輪読（７）、（８）（テキスト臨床死生学）
 第6回：輪読（９）、（１０）（テキスト臨床死生学）
 第7回：テキスト臨床死生学フィールド調査（１）
 第8回：テキスト臨床死生学フィールド調査（２）
 第9回：グループ共同研究（１）「死刑制度を巡る問題」
 第10回：グループ共同研究（２）「死刑制度を巡る問題」
 第11回：グループ共同研究（３）「死刑制度を巡る問題」
 第12回：グループ共同研究（４）「死刑制度を巡る問題」
 第13回：グループ共同研究発表「死刑制度を巡る問題」
 第14回：卒業研究テーマ・研究計画発表会
 第15回：秋学期まとめ・講評

教科書

- ・「最新緩和医療学」恒藤暁著、最新医学社
- ・「テキスト臨床死生学」日本臨床死生学会編、勁草書房

成績評価方法

レポート 20% フィールドワークレポート
 平常点評価 80% 出席状況、グループワーク、個人発表

緩和医療学・臨床死生学ゼミ（２） A（春学期）

小野 充一

授業概要 緩和医療学については、個人の“死”とその過程で生ずるつらさを具体的に和らげていくための知識や方法として、疼痛緩和、身体的症状緩和、精神的苦痛への対処、社会的苦痛の緩和、家族へのケアといった各領域の内容を学習することを目標とし、臨床死生学については様々な生と死の臨床現場で行動できる力や、その体験をどう伝えて共有していくかという課題に対する知識や概念について多角的に検討することを目標とする。さらにこれらの分野における研究手法として、質的および量的研究の概要を具体的に理解することを目的とする。

授業の到達目標

- ・緩和医療学における研究論文の批判的検証が出来る。
- ・臨床死生学における研究論文の批判的検証が出来る。
- ・自己の選択した研究テーマに関する研究計画を立案出来る。

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
 第2回：輪読（１）、（２）（最新緩和医療学）
 第3回：輪読（３）、（４）（最新緩和医療学）
 第4回：輪読（５）、（６）（最新緩和医療学）
 第5回：輪読（７）、（８）（最新緩和医療学）
 第6回：輪読（９）、（１０）（最新緩和医療学）
 第7回：緩和医療現場フィールド調査（１）
 第8回：緩和医療現場フィールド調査（２）
 第9回：グループ共同研究（１）「治療停止を巡る問題」
 第10回：グループ共同研究（２）「治療停止を巡る問題」
 第11回：グループ共同研究（３）「治療停止を巡る問題」
 第12回：グループ共同研究（４）「治療停止を巡る問題」
 第13回：グループ共同研究発表「治療停止を巡る問題」
 第14回：卒業研究テーマ・研究計画発表会
 第15回：春学期まとめ・講評

教科書

- ・「最新緩和医療学」恒藤暁著、最新医学社
- ・「テキスト臨床死生学」日本臨床死生学会編、勁草書房

成績評価方法

- レポート 20% フィールドワークレポート
 平常点評価 80% 出席状況、グループワーク、個人発表

緩和医療学・臨床死生学ゼミ（２） B（秋学期）

小野 充一

授業概要 緩和医療学については、個人の“死”とその過程で生ずるつらさを具体的に和らげていくための知識や方法として、疼痛緩和、身体的症状緩和、精神的苦痛への対処、社会的苦痛の緩和、家族へのケアといった各領域の内容を学習することを目標とし、臨床死生学については様々な生と死の臨床現場で行動できる力や、その体験をどう伝えて共有していくかという課題に対する知識や概念について多角的に検討することを目標とする。さらにこれらの分野における研究手法として、質的および量的研究の概要を具体的に理解することを目的とする。

授業の到達目標

- ・緩和医療学における研究論文の批判的検証が出来る。
- ・臨床死生学における研究論文の批判的検証が出来る。
- ・自己の選択した研究テーマに関する研究計画を立案出来る。

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
 第2回：輪読（１）、（２）（テキスト臨床死生学）
 第3回：輪読（３）、（４）（テキスト臨床死生学）
 第4回：輪読（５）、（６）（テキスト臨床死生学）
 第5回：輪読（７）、（８）（テキスト臨床死生学）
 第6回：輪読（９）、（１０）（テキスト臨床死生学）
 第7回：テキスト臨床死生学フィールド調査（１）
 第8回：テキスト臨床死生学フィールド調査（２）
 第9回：グループ共同研究（１）「死刑制度を巡る問題」
 第10回：グループ共同研究（２）「死刑制度を巡る問題」
 第11回：グループ共同研究（３）「死刑制度を巡る問題」
 第12回：グループ共同研究（４）「死刑制度を巡る問題」
 第13回：グループ共同研究発表「死刑制度を巡る問題」
 第14回：卒業研究テーマ・研究計画発表会
 第15回：秋学期まとめ・講評

教科書

- ・「最新緩和医療学」恒藤暁著、最新医学社
- ・「テキスト臨床死生学」日本臨床死生学会編、勁草書房

成績評価方法

- レポート 20% フィールドワークレポート
 平常点評価 80% 出席状況、グループワーク、個人発表

健康管理医学ゼミ（１）A（春学期）

河手 典彦

授業概要 健康管理医学ゼミの根幹は、“Medical Aspects of Health Maintenance”にあり、高度な医療の専門性を基盤とした研究領域を有する。従って、臨床医療に関連する各種の講義履修によって培われた正確な医学的知識や医療に関する基本的認識を有していることが望まれる。ゼミ（１）Aでは非癌である生活習慣病を対象として、主要な重要疾患に関する文献調査、講読、さらに実践例の提示などを行いながら正確な臨床医学領域の知識習得に努める。（１）Aを先に履修し、引き続き（２）Aを履修すること。

授業の到達目標

- ・健康保持における健康管理医学の意義について述べることができる。（B56－3、C5－1）
- ・主な臨床検査法について、測定の方法と結果の評価について説明することができる。（B56－3）
- ・疾病の予防について、その方法も含めて詳述することができる。（B56－3）
- ・主な生活習慣病の病態に関して、基本的な医学的知識に基づいて説明することができる。（B56－3、C5－1）

授業計画

- 第1回：健康とは
- 第2回：健康寿命とQOL
- 第3回：疾病の一次予防：食事療法、運動療法など
- 第4回：疾病の二次予防、三次予防
- 第5回：臨床検査（１）
- 第6回：臨床検査（２）
- 第7回：生活習慣病総論（１）
- 第8回：生活習慣病総論（２）
- 第9回：健診・検診の意義とその実態
- 第10回：メタボリックシンドローム
- 第11回：生活習慣病各論（１）：肥満
- 第12回：生活習慣病各論（２）：高血圧症
- 第13回：生活習慣病各論（３）：心臓疾患－１
- 第14回：生活習慣病各論（４）：心臓疾患－２
- 第15回：試験とその解説

教科書 適宜、指定する。

参考文献 適宜、指示する。

成績評価方法

- 試験 50% 第15回に試験を実施し、知識の理解度について評価する。終了後にその解説を行う。
- 平常点評価 50% 学習に対する積極性、出席状況などを評価する。

備考・関連URL 健康管理医学ゼミ（２）Aよりも健康管理医学ゼミ（１）Aを先に履修すること。

健康管理医学ゼミ（１）B（秋学期）

河手 典彦

授業概要 健康管理医学ゼミの根幹は、“Medical Aspects of Health Maintenance”にあり、高度な医療の専門性を基盤とした研究領域を有する。従って、臨床医療に関連する各種の講義履修によって培われた正確な医学的知識や医療に関する基本的認識を有していることを希望する。ゼミ（１）Bではoncologyの基本から開始し、主要な癌疾患に関する文献調査、講読、さらに実践例の提示などを行いながら正確な臨床医学領域の知識習得に努める。（１）Bを先に履修し、引き続き（２）Bを履修すること。

授業の到達目標

- ・腫瘍としての癌について、基本的な医学的知識を正確に解説することができる。（B56－3、C5－1）
- ・癌の一次予防、二次予防、及び三次予防、及び治療に関する医療の現状を理解し説明することができる。（B56－3）
- ・癌罹患の観点から健康保持の意義を理解し、健康の評価や提言を行うことができる。（B56－4、D56－2、F56－2）

授業計画

- 第1回：癌の疫学
- 第2回：癌とは何か
- 第3回：癌と生活習慣
- 第4回：腫瘍学総論（１）
- 第5回：腫瘍学総論（２）
- 第6回：腫瘍学総論（３）
- 第7回：腫瘍学各論：脳
- 第8回：腫瘍学各論：頭頸部
- 第9回：腫瘍学各論：上部消化管（１）
- 第10回：腫瘍学各論：上部消化管（２）
- 第11回：腫瘍学各論：下部消化管（１）
- 第12回：腫瘍学各論：下部消化管（２）
- 第13回：腫瘍学各論：肝臓（１）
- 第14回：腫瘍学各論：肝臓（２）、胆道系
- 第15回：試験と解説

教科書 適宜、指定する。

参考文献 適宜、指示する。

成績評価方法

- 試験 50% 第15回に試験を実施し、知識の理解度について評価する。終了後にその解説を行う。
- 平常点評価 50% 学習に対する積極性、出席状況などを評価する。

備考・関連URL 健康管理医学ゼミ（１）Bを先に履修し、引き続き健康管理医学ゼミ（２）Bを履修すること。

健康管理医学ゼミ（２）A（春学期）

河手 典彦

授業概要 健康管理医学ゼミの根幹は、“Medical Aspects of Health Maintenance”にあり、高度な医療の専門性を基盤とした研究領域を有する。従って、臨床医療に関連する各種の講義履修によって培われた正確な医学的知識や医療に関する基本的認識を有していることが望まれる。ゼミ（２）Aではゼミ（１）Aに引き続き、非癌である生活習慣病を対象として、それらの主要な重要疾患に関する文献調査、講読、さらに実践例の提示などを行いながら正確な臨床医学領域の知識習得に努める。（１）Aを先に履修すること。基本的な医学知識を十分に備えていることを希望する。

授業の到達目標

- ・主な生活習慣病の病態に関して、基本的な医学的知識に基づいて説明することができる。（B56－3、C5－1）
- ・疾病の予防について、その具体的方法も含めて詳細に説明することができる。（B56－3、G36－4）
- ・生活習慣病医療の現状を評価し、課題の提示とその対策について論述することができる。（B56－4、D56－2、G36－4）

授業計画

- 第1回：生活習慣病各論（5）：糖尿病－1
- 第2回：生活習慣病各論（6）：糖尿病－2
- 第3回：生活習慣病各論（7）：脂質異常症
- 第4回：生活習慣病各論（8）：高尿酸血症
- 第5回：生活習慣病各論（9）：脳卒中－1
- 第6回：生活習慣病各論（10）：脳卒中－2
- 第7回：生活習慣病各論（11）：肝臓疾患－1
- 第8回：生活習慣病各論（12）：肝臓疾患－2
- 第9回：生活習慣病各論（13）：消化器疾患－1
- 第10回：生活習慣病各論（14）：消化器疾患－2
- 第11回：生活習慣病各論（15）：呼吸器疾患－1
- 第12回：生活習慣病各論（16）：呼吸器疾患－2
- 第13回：生活習慣病各論（17）：動脈硬化、骨粗鬆症
- 第14回：生活習慣病各論（18）：貧血、歯周病
- 第15回：試験とその解説

教科書 適宜、指定する。

参考文献 適宜、指示する。

成績評価方法

- 試験 50% 第15回に試験を実施し、知識の理解度について評価する。終了後にその解説を行う。
- 平常点評価 50% 学習に対する積極性、出席状況などを評価する。

備考・関連URL 健康管理医学ゼミ（１）Aを、健康管理医学ゼミ（２）Aよりも先に履修すること。

健康管理医学ゼミ（２）B（秋学期）

河手 典彦

授業概要 健康管理医学ゼミの根幹は、“Medical Aspects of Health Maintenance”にあり、高度な医療の専門性を基盤とした研究領域を有する。従って、臨床医療に関連する各種の講義履修によって培われた正確な医学的知識や医療に関する基本的認識を有していることが相応しい。ゼミ（２）Bではゼミ（１）Bに引き続き、主要な癌に関する文献調査、講読、さらに実践例の提示などを行い、正確な臨床医学領域の知識習得と理解に努める。ゼミ（２）Bよりゼミ（１）Bを先に履修すること。

授業の到達目標

- ・対象となる癌それぞれの疫学・診断・治療・予後について、正確に説明することができる。（B56－3、C5－1）
- ・癌の臨床医療全般について、最新の医療情報も含めて詳細に論述することができる。（B56－3、G36－4）
- ・癌医療の課題を提示し、それらを解決するための具体的方策を述べるることができる。（B56－4、D56－2、F56－2）

授業計画

- 第1回：腫瘍学各論：脾臓
- 第2回：腫瘍学各論：呼吸器（１）：肺・気管支
- 第3回：腫瘍学各論：呼吸器（２）：胸膜、中皮腫
- 第4回：腫瘍学各論：乳腺（１）
- 第5回：腫瘍学各論：乳腺（２）
- 第6回：腫瘍学各論：甲状腺
- 第7回：腫瘍学各論：子宮（１）
- 第8回：腫瘍学各論：子宮（２）
- 第9回：腫瘍学各論：卵巣
- 第10回：腫瘍学各論：前立腺
- 第11回：腫瘍学各論：腎、その他の泌尿器系
- 第12回：腫瘍学各論：骨・軟部
- 第13回：腫瘍学各論：皮膚
- 第14回：腫瘍学各論：血液
- 第15回：試験と解説

教科書 適宜、指定する。

参考文献 適宜、指示する。

成績評価方法

- 試験 50% 第15回に試験を実施し、知識の理解度について評価する。終了後にその解説を行う。
- 平常点評価 50% 学習に対する積極性、出席状況などを評価する。

備考・関連URL 健康管理医学ゼミ（２）Bよりも健康管理医学ゼミ（１）Bを先に履修すること。

社会医学ゼミ（１） A（春学期）

扇原 淳

授業概要 社会医学分野において、現場で実際に分析・研究能力を適用し、プロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力およびリサーチャーとしての学術研究遂行能力を身につける。

それぞれの研究テーマに関連した分野の文献収集・研究デザインの指導、研究の進捗状況・成果に対する質疑応答及び研究論文の作成指導を行う。研究遂行のための情報・データ集を兼ねたフィールドワークも行う。

授業の到達目標

- 1) 研究者としてプロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力を身につける。E56-1、E56-2
- 2) 科学的思考および論理的思考により問題の構造を客観的に捉えることができる。B56-1、B56-2、B56-3、B56-4
- 3) データベース等を用いた先行研究の系統的抽出および論文を批判的に吟味することができる。C 6-1、C 6-2

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方（以下は扱う内容を示す。必ずしも内容の順序を示すものではない）
第2回：データベースの種類とその利活用
第3回：サンプリングの方法
第4回：研究デザイン（１） 生態学的研究
第5回：研究デザイン（２） コホート、ケースコントロール
第6回：研究デザイン（３） RCT
第7回：研究デザイン（４） 質的調査
第8回：統計的推測（１） 標本抽出
第9回：統計的推測（２） 推定
第10回：統計的推測（３） 仮説の検定
第11回：研究デザインで生じるバイアス
第12回：信頼性と妥当性
第13回：相関と回帰
第14回：多変量解析（１） 重回帰
第15回：多変量解析（２） 共分散構造分析

教科書 John W.Creswell and Vicki L.Plano Clark, Designing and Conducting Mixed Methods Research, Sage Publications, 2011

参考文献 適宜紹介する。

成績評価方法

- 試験 実施しない。
レポート 40% 課題に対する、客観性、論理性、独自性、発展性、文章構成および表現の点から総合的に評価する。
平常点評価 60% プレゼンテーションおよびディスカッションも含めた授業に対する積極性を評価する。

社会医学ゼミ（１） B（秋学期）

扇原 淳

授業概要 社会医学分野において、現場で実際に分析・研究能力を適用し、プロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力およびリサーチャーとしての学術研究遂行能力を身につける。

それぞれの研究テーマに関連した分野の文献収集・研究デザインの指導、研究の進捗状況・成果に対する質疑応答及び研究論文の作成指導を行う。研究遂行のための情報・データ集を兼ねたフィールドワークも行う。

授業の到達目標

- 1) 研究者としてプロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力を身につける。E56-1、E56-2
- 2) 科学的思考および論理的思考により問題の構造を客観的に捉えることができる。B56-1、B56-2、B56-3、B56-4
- 3) データベース等を用いた先行研究の系統的抽出および論文を批判的に吟味することができる。C 6-1、C 6-2

授業計画

- 第1回：データマイニング（１） データマイニング法の概要
第2回：データマイニング（２） データウェアハウスとOLAP
第3回：フィールドワーク（１） 医療機関
第4回：フィールドワーク（２） 教育機関
第5回：フィールドワーク（３） 行政機関
第6回：フィールドワーク（４） 福祉機関
第7回：研究計画（１） アウトラインの作成
第8回：研究計画（２） ディスカッション
第9回：プレスタディ（１） 調査・研究の実施
第10回：プレスタディ（２） データの回収・入力
第11回：プレスタディ（３） データの分析
第12回：プレスタディ（４） 結果の解釈、考察
第13回：研究結果発表（１） プレゼンテーション技法
第14回：研究結果発表（２） 論文作成法
第15回：まとめ

教科書 John W.Creswell and Vicki L.Plano Clark, Designing and Conducting Mixed Methods Research, Sage Publications, 2011

参考文献 適宜紹介する。

成績評価方法

- 試験 実施しない。
レポート 40% 課題に対する、客観性、論理性、独自性、発展性、文章構成および表現の点から総合的に評価する。
平常点評価 60% プレゼンテーションおよびディスカッションも含めた授業に対する積極性を評価する。

社会医学ゼミ（２） A（春学期）

扇原 淳

授業概要 社会医学分野において、現場で実際に分析・研究能力を適用し、プロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力およびリサーチャーとしての学術研究遂行能力を身につける。

それぞれの研究テーマに関連した分野の文献収集・研究デザインの指導、研究の進捗状況・成果に対する質疑応答及び研究論文の作成指導を行う。研究遂行のための情報・データ集を兼ねたフィールドワークも行う。

授業の到達目標

- 1) 研究者としてプロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力を身につける。E56-1、E56-2
- 2) 科学的思考および論理的思考により問題の構造を客観的に捉えることができる。B56-1、B56-2、B56-3、B56-4
- 3) データベース等を用いた先行研究の系統的抽出および論文を批判的に吟味することができる。C 6-1、C 6-2
- 4) テーマに即して用いられる資源の最大限を活用して適切な研究計画を立案・遂行できる。F56-1、F56-2

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
 第2回：データベースの種類とその利活用
 第3回：先行研究の紹介・検討（1） Health Care Management Rev 等
 第4回：先行研究の紹介・検討（2） Am J Public Health 等
 第5回：先行研究の紹介・検討（3） Am J Epidemiology 等
 第6回：先行研究の紹介・検討（4） Environmental Health Perspectives 等
 第7回：研究計画の発表・検討（1） 研究計画の立案
 第8回：研究計画の発表・検討（2） 研究計画の吟味
 第9回：研究テーマに関する調査（1） 研究・調査の実施
 第10回：研究テーマに関する調査（2） データの回収
 第11回：研究テーマに関する調査（3） データの入力
 第12回：研究テーマに関する調査（4） データの分析
 第13回：研究テーマに関する調査（5） データの考察
 第14回：研究テーマに関する調査（6） 発表資料作成
 第15回：研究結果の発表

教科書 John W.Creswell and Vicki L.Plano Clark, Designing and Conducting Mixed Methods Research, Sage Publications, 2011

参考文献 適宜紹介する。

成績評価方法

試験 実施しない。

レポート 40% 課題に対する、客観性、論理性、独自性、発展性、文章構成および表現の点から総合的に評価する。

平常点評価 60% プレゼンテーションおよびディスカッションも含めた授業に対する積極性を評価する。

社会医学ゼミ（２） B（秋学期）

扇原 淳

授業概要 社会医学分野において、現場で実際に分析・研究能力を適用し、プロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力およびリサーチャーとしての学術研究遂行能力を身につける。

それぞれの研究テーマに関連した分野の文献収集・研究デザインの指導、研究の進捗状況・成果に対する質疑応答及び研究論文の作成指導を行う。研究遂行のための情報・データ集を兼ねたフィールドワークも行う。

授業の到達目標

- 1) 研究者としてプロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力を身につける。E56-1、E56-2
- 2) 科学的思考および論理的思考により問題の構造を客観的に捉えることができる。B56-1、B56-2、B56-3、B56-4
- 3) データベース等を用いた先行研究の系統的抽出および論文を批判的に吟味することができる。C 6-1、C 6-2
- 4) テーマに即して用いられる資源の最大限を活用して適切な研究計画を立案・遂行できる。F56-1、F56-2

授業計画

- 第1回：研究テーマに関する調査（7） 研究・調査の実施
 第2回：研究テーマに関する調査（8） データの回収
 第3回：研究テーマに関する調査（9） データベースの作成
 第4回：研究テーマに関する調査（10） データのクリーニング
 第5回：研究テーマに関する調査（11） 基本統計量
 第6回：研究テーマに関する調査（12） 重回帰
 第7回：研究テーマに関する調査（13） 因子分析
 第8回：研究テーマに関する調査（14） 主成分分析
 第9回：研究テーマに関する調査（15） 数量化Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類
 第10回：研究テーマに関する調査（16） 共分散構造分析
 第11回：研究テーマに関する調査（17） ロジスティックモデル
 第12回：研究テーマに関する調査（18） テキストマイニング
 第13回：研究結果発表（1） プレゼンテーション技法
 第14回：研究結果発表（2） 論文作成法
 第15回：まとめ

教科書 John W.Creswell and Vicki L.Plano Clark, Designing and Conducting Mixed Methods Research, Sage Publications, 2011

参考文献 適宜紹介する。

成績評価方法

試験 実施しない。

レポート 40% 課題に対する、客観性、論理性、独自性、発展性、文章構成および表現の点から総合的に評価する。

平常点評価 60% プレゼンテーションおよびディスカッションも含めた授業に対する積極性を評価する。

バイオエシックスゼミ（１）A

土田 友章

授業概要 Bioethicsを現代人間学の一分野として、医科学技術および社会保障制度と人間との関わりを批判的に考察する。話題は健康医療の多岐にわたるが、参加者の提起する問題をともに考えてゆきたい。他方、基本的文献の講読もおこなう。

授業の到達目標

・人間のいのち、人間性、尊厳に関わる諸問題を多面的に考えることに慣れ、それぞれに問題への視角を探りつつ、他の参加者と知的に共有できる。

授業計画

第1回：参加者の研究計画について、最近の話題について

第2回：参加者の研究計画について、最近の話題について

第3回：文献講読、資料検討

第4回：文献講読、資料検討

第5回：文献講読、資料検討

第6回：文献講読、資料検討

第7回：文献講読、資料検討

第8回：文献講読、資料検討

第9回：文献講読、資料検討

第10回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読

第11回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読

第12回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読

第13回：文献講読

第14回：文献講読

第15回：文献講読

教科書 参加者各人の研究課題に応じてその都度指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% 講読・発表への参加。

バイオエシックスゼミ（１）B

土田 友章

授業概要 春学期に引き続いて、bioethicsの諸問題を探し当て、人間学的な批判・検討を加えてゆく。参加者に具体的な問題を提起してもらい、その研究計画を立て、教員の指導の下に、遂行してもらう。各人の研究成果を発表してもらいともに検討する。学会発表になりうる研究としてもらう。他方、重要な文献を講読してゆく。

授業の到達目標

Bioethicsの研究にはさまざまな視点とアプローチがあり、それぞれの研究課題に応じて適的な方法を考え追求することができるようになる。英文文献の講読にも慣れる。

授業計画

第1回：参加者の研究計画について、最近の話題について

第2回：参加者の研究計画について、最近の話題について

第3回：文献講読、資料検討

第4回：文献講読、資料検討

第5回：文献講読、資料検討

第6回：文献講読、資料検討

第7回：文献講読、資料検討

第8回：文献講読、資料検討

第9回：文献講読、資料検討

第10回：文献講読、資料検討

第11回：文献講読、資料検討

第12回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読

第13回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読

第14回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読

第15回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読

教科書 その都度指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% 各人の研究とその発表、文献講読への参加

バイオエシックスゼミ（２）A

土田 友章

授業概要 ゼミ（１）を承けて、Bioethics（生命倫理）ならびに実践倫理の方法を各人が習得し、それに基づいて、調査研究と論文執筆・発表に備える。

授業の到達目標

・調査・研究そして発表の手法を確実に習得し、実際に学会発表ができるようになる。

授業計画

第1回：参加者の研究計画について、最近の話題について
第2回：参加者の研究計画について、最近の話題について
第3回：文献講読、資料検討
第4回：文献講読、資料検討
第5回：文献講読、資料検討
第6回：文献講読、資料検討
第7回：文献講読、資料検討
第8回：文献講読、資料検討
第9回：文献講読、資料検討
第10回：文献講読、資料検討
第11回：文献講読、資料検討
第12回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読
第13回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読
第14回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読
第15回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読

教科書 その都度指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% 各人の研究とその発表、文献講読への参加

バイオエシックスゼミ（２）B

土田 友章

授業概要 英文文献講読を続け、現代の重要な議論に触れるとともに、各人の研究とその発表を助ける。学会発表・論文執筆に備える。

授業の到達目標

・研究者としての基本を修得し、それぞれの問題関心を深め、また他者と共有してゆける。

授業計画

第1回：参加者の研究計画について、最近の話題について
第2回：参加者の研究計画について、最近の話題について
第3回：文献講読、資料検討
第4回：文献講読、資料検討
第5回：文献講読、資料検討
第6回：文献講読、資料検討
第7回：文献講読、資料検討
第8回：文献講読、資料検討
第9回：文献講読、資料検討
第10回：文献講読、資料検討
第11回：文献講読、資料検討
第12回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読
第13回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読
第14回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読
第15回：参加者の研究発表、ならびに、文献講読

教科書 その都度指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% 参加・発表

予防医学ゼミ（１） A（春学期）

町田 和彦

授業概要 人間をとりまく広範囲の環境がヒトの疾病の予防と健康の維持・増進に及ぼす影響を調査・実験・データ解析等多面的視点から研究していくための基本的理解と実際的方法の修得を目的とする。そのためには病原因子および環境側因子としての環境科学、生気象学、微生物学、人類生態学、医療・福祉問題等、又宿主側要因としてのヒトの構造と機能と疾病、生体の防御機構（免疫学）、加齢に伴う生体の変化、健康の保持・増進、栄養学・体力医学等の各要因に対して理解を深める。（注：修士１年生は予防医学ゼミ（２）をとることはできません）

授業の到達目標

1. 授業概要の趣旨を理解し、先輩の院生の発表を良く聞き、自分の研究に生かす努力を行う。
2. 英文抄読になれ、的確にその概要を発表できること。

授業計画

- 第1回：研究室の研究の方向性について
- 第2回：卒論紹介（修士１年－１）
- 第3回：卒論紹介（修士１年－２）
- 第4回：研究紹介（修士３年－１）
- 第5回：研究紹介（修士３年－２）
- 第6回：研究紹介（博士２年）
- 第7回：抄読会（修士３年－１）
- 第8回：抄読会（修士３年－２）
- 第9回：招へい講師
- 第10回：抄読会（修士１年－１）
- 第11回：抄読会（修士１年－２）
- 第12回：抄読会（博士２年）
- 第13回：韓国調査について
- 第14回：抄読会（修士１年－１）
- 第15回：抄読会（修士１年－２）

成績評価方法

試 験	出席と研究発表および毎回のディスカッション等の総合評価
平常点評価	50% 出席と毎回のディスカッション
そ の 他	50% 文献抄読会と研究発表会の内容

予防医学ゼミ（１） B（秋学期）

町田 和彦

授業概要 演習（１）を基礎として、病原因子および環境側因子としての人類生態学、医療・福祉問題等、又宿主側要因としてのヒトの機能と疾病、生体の防御機構（免疫学）、加齢に伴う生体の変化、健康の保持・増進、栄養学・体力医学等の各要因に対して学習していくことを目的とし、これら要因に関する研究論文の紹介とそれに対するディスカッションを中心に行なっていく。

（注）修士１年生は予防医学演習（２）を選択することはできません。

授業の到達目標

- ・ 授業概要の趣旨を理解し、先輩の院生の発表を良く聞き、自分の研究に生かす努力を行う。

授業計画

- 第1回：今年度韓国調査の結果説明
- 第2回：修論提出者の結果説明（修士３年－１）
- 第3回：修論提出者の結果説明（修士３年－２）
- 第4回：今までの研究結果説明（博士２年）
- 第5回：抄読会（修士１年－１）
- 第6回：抄読会（修士１年－２）
- 第7回：抄読会（修士３年－１）
- 第8回：抄読会（修士３年－２）
- 第9回：招へい講師講義
- 第10回：抄読会（博士２年）
- 第11回：博士論文に関する抄読博士６年）
- 第12回：博士論文に関する抄読（博士任期退学者の論文提出希望者１）
- 第13回：博士論文に関する抄読（博士任期退学者の論文提出希望者２）
- 第14回：博士論文に関する抄読（博士任期退学者の論文提出希望者３）
- 第15回：春学期の総括

成績評価方法

平常点評価	50% 出席とディスカッションの内容
そ の 他	50% 抄読会の内容と研究発表会の内容

予防医学ゼミ（２） A（春学期）

町田 和彦

授業概要 演習（１）を基礎として、病原因子および環境側因子としての人類生態学、医療・福祉問題等、又宿主側要因としてのヒトの機能と疾病、生体の防御機構（免疫学）、加齢に伴う生体の変化、健康の保持・増進、栄養学・体力医学等の各要因に対して学習していくことを目的とし、これら要因に関する研究論文の紹介とそれに対するディスカッションを中心に行なっていく。

（注）修士一年生は予防医学演習（２）を選択することはできません。

授業の到達目標

- ・ 各自の研究の内容の充実のために論文抄読が適切にできること
- ・ 研究発表のやりかたについて聞いている人にわかりやすくできること（パワーポイントのつくり方）

授業計画

- 第1回：過去に研究室で行われた修士論文の概要の説明
- 第2回：過去に研究室で行われた博士論文の概要の説明
- 第3回：抄読会（修士1年－1）
- 第4回：抄読会（修士1年－2）
- 第5回：抄読会（修士3年－1）
- 第6回：抄読会（修士3年－2）
- 第7回：抄読会（博士2年）
- 第8回：抄読会（博士6年）
- 第9回：招へい講師
- 第10回：博士論文発表会（博士5年）
- 第11回：博士論文発表会博士8年生
- 第12回：博士論文発表会（博士任期退学生－1）
- 第13回：投稿論文の抄読会（博士任期退学生－2）
- 第14回：投稿論文の抄読会（博士任期退学生－3）
- 第15回：今年度のゼミの総括

成績評価方法

平常点評価	50%	出席点と毎回のディスカッションの内容
その他	50%	論文抄読会と研究発表会の内容と発表法

予防医学ゼミ（２） B（秋学期）

町田 和彦

授業概要 演習（１）を基礎として、病原因子および環境側因子としての人類生態学、医療・福祉問題等、又宿主側要因としてのヒトの機能と疾病、生体の防御機構（免疫学）、加齢に伴う生体の変化、健康の保持・増進、栄養学・体力医学等の各要因に対して学習していくことを目的とし、これら要因に関する研究論文の紹介とそれに対するディスカッションを中心に行なっていく。

（注）修士一年生は予防医学ゼミ（２）を選択することはできません。

授業の到達目標

- ・ 授業概要の趣旨を理解し、先輩の院生の発表を良く聞き、自分の研究に生かす努力を行う。

授業計画

- 第1回：秋学期オリエンテーション
- 第2回：抄読会1（修士1年）
- 第3回：抄読会2（修士1年）
- 第4回：抄読会3（修士3年）
- 第5回：抄読会（修士3年）
- 第6回：抄読会（博士2年）
- 第7回：博士論文提出者の論文発表（博士6年）
- 第8回：博士論文提出者の論文発表と質疑応答（博士任期退学者－1）
- 第9回：招聘講師の講義
- 第10回：博士論文提出者の論文発表と質疑応答（博士任期退学者－2）
- 第11回：博士論文提出者の論文発表と質疑応答（博士任期退学者－3）
- 第12回：修士3年生（1）の修士論文についての発表と質疑応答
- 第13回：修士3年生（2）の修士論文についての発表と質疑応答
- 第14回：博士2年生の研究発表
- 第15回：1年間の総括

成績評価方法

平常点評価	50%	出席点とディスカッションの評価
その他	50%	消毒会と研究発表会の評価

生活支援工学ゼミ（１） A（春学期）

畠山 卓朗

授業概要 障がいがある人や高齢者が安全・安心・快適に、可能な限り自立した生活を過ごすために有用な工学技術について学びます。演習（１）では研究を進めるための基礎を身につけます。春学期には、各人の興味あるテーマを複数あげてもらい、ディスカッションを通してテーマを徐々に絞り込みます。次の先行研究の調査、研究計画の立案に取り組みます。秋学期には、研究計画に基づき研究を実施し、研究レポートを作成します。

授業の到達目標

・研究テーマの絞り込み、研究計画の立案、研究実施、発表ができるようになる（B56－４）（D56－１）

授業計画

- 第1回：ガイダンス（前半部分）
- 第2回：概念地図の描き方
- 第3回：支援工学の歴史
- 第4回：支援工学の現在と今後
- 第5回：支援機器の実例 肢体不自由
- 第6回：支援機器の実例 言語障害
- 第7回：支援機器の実例 視覚障害
- 第8回：支援機器の実例 聴覚障害
- 第9回：支援機器の実例 重複障害
- 第10回：支援機器の実例 住宅
- 第11回：支援機器の実例 レクリエーション
- 第12回：支援機器の実例 スポーツ
- 第13回：支援機器の実例 就労
- 第14回：支援機器の実例 生きがい
- 第15回：中間まとめ

参考文献 適宜、紹介する

成績評価方法

平常点評価 100% 参加度・貢献度、課題提出状況などを総合的に評価する

備考・関連URL <http://homepage2.nifty.com/htakuro>

生活支援工学ゼミ（１） B（秋学期）

畠山 卓朗

授業概要 障がいがある人や高齢者が安全・安心・快適に、可能な限り自立した生活を過ごすために有用な工学技術について学びます。演習（１）では研究を進めるための基礎を身につけます。春学期には、各人の興味あるテーマを複数あげてもらい、ディスカッションを通してテーマを徐々に絞り込みます。次の先行研究の調査、研究計画の立案に取り組みます。秋学期には、研究計画に基づき研究を実施し、研究レポートを作成します。

授業の到達目標

・研究テーマの絞り込み、研究計画の立案、研究実施、発表ができるようになる（B56－４）（D56－１）

授業計画

- 第1回：ガイダンス（後半部分）
- 第2回：フリーディスカッション
- 第3回：プレゼンテーション技法について
- 第4回：思考のためのツール 概念地図
- 第5回：演習（概念地図）
- 第6回：思考のためのツール KJ法、ブレインストーミング
- 第7回：演習（KJ法、ブレインストーミング）
- 第8回：プレゼンテーションとディスカッション
- 第9回：プレゼンテーションとディスカッション
- 第10回：プレゼンテーションとディスカッション
- 第11回：プレゼンテーションとディスカッション
- 第12回：プレゼンテーションとディスカッション
- 第13回：プレゼンテーションとディスカッション
- 第14回：フリーディスカッション
- 第15回：まとめ、レポート課題提示

参考文献 適宜、紹介する

成績評価方法

平常点評価 100% 参加度・貢献度、課題提出状況などを総合的に評価する

備考・関連URL <http://homepage2.nifty.com/htakuro>

生活支援工学ゼミ（２） A（春学期）

畠山 卓朗

授業概要 「健康福祉支援工学演習（１）」に引き続き、さらに研究を深めます。そして修士論文を書き上げます。演習は、学生によるプレゼンテーションと教員・学生によるディスカッションを中心に行います。

授業の到達目標

・ 修士論文の作成（D56－１）

授業計画

- 第１回：ガイダンス（前半部分）
第２回：先行研究に関する調査法について
第３回：研究計画立案方法について
第４回：研究テーマの掘り下げ方について
第５回：プレゼンテーションとディスカッション
第６回：プレゼンテーションとディスカッション
第７回：プレゼンテーションとディスカッション
第８回：プレゼンテーションとディスカッション
第９回：プレゼンテーションとディスカッション
第１０回：プレゼンテーションとディスカッション
第１１回：プレゼンテーションとディスカッション
第１２回：プレゼンテーションとディスカッション
第１３回：プレゼンテーションとディスカッション
第１４回：プレゼンテーションとディスカッション
第１５回：中間まとめ

参考文献 適宜、紹介する

成績評価方法

平常点評価 100% 参加度・貢献度、課題提出状況などを総合的に評価する

備考・関連URL <http://homepage2.nifty.com/htakuro>

生活支援工学ゼミ（２） B（秋学期）

畠山 卓朗

授業概要 「健康福祉支援工学演習（１）」に引き続き、さらに研究を深めます。そして修士論文を書き上げます。演習は、学生によるプレゼンテーションと教員・学生によるディスカッションを中心に行います。

授業の到達目標

・ 修士論文の作成（D56－１）

授業計画

- 第１回：ガイダンス（後半部分）
第２回：フリーディスカッション
第３回：レポートの書き方について
第４回：プレゼンテーションとディスカッション
第５回：プレゼンテーションとディスカッション
第６回：プレゼンテーションとディスカッション
第７回：プレゼンテーションとディスカッション
第８回：プレゼンテーションとディスカッション
第９回：プレゼンテーションとディスカッション
第１０回：プレゼンテーションとディスカッション
第１１回：プレゼンテーションとディスカッション
第１２回：プレゼンテーションとディスカッション
第１３回：プレゼンテーションとディスカッション
第１４回：フリーディスカッション
第１５回：まとめ、レポート課題提示

参考文献 適宜、紹介する

成績評価方法

平常点評価 100% 参加度・貢献度、課題提出状況などを総合的に評価する

備考・関連URL <http://homepage2.nifty.com/htakuro>

福祉産業学ゼミ（１） A（春学期）

可部 明克

授業概要 健康・医療・福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業を選定し、事業戦略および技術戦略を調査・分析する。

その上で、新たな製品を研究開発するための「ユーザーニーズ調査・技術開発」を行い、基本的な要素技術をベースに基本設計・構築を進める。このプロセスを通じて、企業での研究開発に必要な基礎技術力を養成する。

具体的には、医療福祉ロボットの研究開発を行い、主に修士課程１年目を対象とする。

授業の到達目標

ロボットの基礎的な要素技術などを習得し、論文などの詳細を把握できる。また、基礎的な仕様検討などを行うことができる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：先行企業の調査・企業の選定
- 第3回：事業戦略の調査
- 第4回：事業戦略の分析
- 第5回：技術戦略の調査
- 第6回：技術戦略の分析
- 第7回：ユーザーニーズ調査（ヒアリング1）
- 第8回：ユーザーニーズ調査（ヒアリング2）
- 第9回：ユーザーニーズ調査（まとめ）
- 第10回：要素技術の検討（1）
- 第11回：要素技術の詳細（1）
- 第12回：要素技術の検討（2）
- 第13回：要素技術の詳細（2）
- 第14回：要素技術の検討（3）
- 第15回：要素技術の詳細（3）

教科書 特になし

参考文献 その都度、資料などを配布する。

成績評価方法

平常点評価 100% 発言頻度・内容、プロジェクトの実施状況、課題提出など

福祉産業学ゼミ（１） B（秋学期）

可部 明克

授業概要 健康・医療・福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業を選定し、事業戦略および技術戦略を調査・分析する。

その上で、新たな製品を研究開発するための「ユーザーニーズ調査・技術開発」を行い、基本的な要素技術をベースに基本設計・構築を進める。このプロセスを通じて、企業での研究開発に必要な基礎技術力を養成する。

具体的には、医療福祉ロボットの研究開発を行い、主に修士課程１年目を対象とする。

授業の到達目標

ロボットの基礎的な要素技術などを習得し、論文などの詳細を把握できる。また、基礎的な仕様検討などを行うことができる。

授業計画

- 第1回：研究開発試作品のコンセプト検討（構造）
- 第2回：研究開発試作品のコンセプト検討（制御）
- 第3回：研究開発試作品のコンセプト検討詳細（構造）
- 第4回：研究開発試作品のコンセプト検討詳細（制御）
- 第5回：研究開発試作品のコンセプトレビュー（構造）
- 第6回：研究開発試作品のコンセプトレビュー（制御）
- 第7回：研究開発試作品のコンセプトレビュー（まとめ）
- 第8回：基本設計（構造コア部）
- 第9回：基本設計（制御部ハード）
- 第10回：基本設計（制御部ハード）
- 第11回：基本設計（制御部ソフト）
- 第12回：基本設計（センサー）
- 第13回：基本設計（センサー処理部）
- 第14回：ドキュメントまとめ（全体）
- 第15回：ドキュメントまとめ（詳細）

教科書 特になし

参考文献 その都度、資料などを配布する。

成績評価方法

平常点評価 100% 発言頻度・内容、プロジェクトの実施状況、課題提出など

福祉産業学ゼミ（２） A（春学期）

可部 明克

授業概要 演習（１）をベースに、健康・医療・福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業を選定し、新たな事業戦略および技術戦略を立案する。

それに対応した、新たな製品の立案・試作を進め、ユーザ評価も行う。このプロセスを通じて、企業での研究開発および事業化に必要な実践的な技術センスを養成する。具体的には、医療福祉ロボットの研究開発を行い、主に修士課程２年目を対象とする。

授業の到達目標

・ロボットの基礎的な要素技術などを習得し、技術開発・実装、对外発表などを行うことができる。

授業計画

- 第１回：ガイダンス
- 第２回：先行企業との比較検討
- 第３回：事業戦略の比較検討
- 第４回：技術戦略の比較検討
- 第５回：試作候補の比較検討
- 第６回：研究開発試作品の実装検討（基本機能の概要）
- 第７回：研究開発試作品の実装検討（基本機能の課題）
- 第８回：研究開発試作品の実装検討（個別機能の概要）
- 第９回：研究開発試作品の実装検討（個別機能の課題）
- 第10回：実装設計（構造コア部）
- 第11回：実装設計（構造周辺部）
- 第12回：実装設計（制御部ハード）
- 第13回：実装設計（制御ソフト、基本部）
- 第14回：実装設計（制御ソフト、個別機能部）
- 第15回：実装設計（センサー）

教科書 特になし

参考文献 その都度、資料などを配布する。

成績評価方法

平常点評価 100% 発言頻度・内容、プロジェクトの実施状況、課題提出など

福祉産業学ゼミ（２） B（秋学期）

可部 明克

授業概要 演習（１）をベースに、健康・医療・福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業を選定し、新たな事業戦略および技術戦略を立案する。

それに対応した、新たな製品の立案・試作を進め、ユーザ評価も行う。このプロセスを通じて、企業での研究開発および事業化に必要な実践的な技術センスを養成する。具体的には、医療福祉ロボットの研究開発を行い、主に修士課程２年目を対象とする。

授業の到達目標

・ロボットの基礎的な要素技術などを習得し、技術開発・実装、对外発表などを行うことができる。

授業計画

- 第１回：実装設計（センサー処理部）
- 第２回：テスト（基本部）
- 第３回：テスト（個別機能１）
- 第４回：テスト（個別機能２）
- 第５回：評価（基本部）
- 第６回：評価（個別機能１、２）
- 第７回：ドキュメントまとめ（全体）
- 第８回：ドキュメントまとめ（システム構成）
- 第９回：ドキュメントまとめ（構造）
- 第10回：ドキュメントまとめ（制御）
- 第11回：ドキュメントまとめ（ソフト）
- 第12回：ドキュメントまとめ（評価１）
- 第13回：ドキュメントまとめ（評価２）
- 第14回：ドキュメントまとめ（分析）
- 第15回：ドキュメントまとめ（レビュー）

教科書 特になし

参考文献 その都度、資料などを配布する。

成績評価方法

平常点評価 100% 発言頻度・内容、プロジェクトの実施状況、課題提出など

リハビリテーション科学ゼミ（１） A（春学期）

村岡 慶裕

授業概要 心身に不自由を抱えている方が、より豊かな生活を送ることができるように、失われた機能の回復を促し、残された能力を最大限に引き出す方法を探る。

ヒトは、感覚受容器・脳・神経系・筋肉を備えた一連のシステムであり、出力に相当する運動（行動）は、感覚受容器からの入力と経験的学習による自己組織化により変容する。最適な出力を促すためには、適切な能力評価による到達目標の設定と、外部から適切な入力を促す環境設定、支援機器などによる運動の制限や補助・代替・補完、そして教示者の促す自発的な反復運動による学習が必要である。

本研究指導では、ヒトの健康と社会福祉の向上に貢献すべく、ヒトをシステムとして捉え、望ましい出力や状態を引き出すために、生体計測を通して、生体システムの解明と、その最適化手法や評価手法の提案、さらに、付加すべき機器の開発を行うための能力を教授する。

授業の到達目標

授業概要で示した内容を具体的に実践できるように、電子回路設計法やプログラミング、実験の測定法と解析法を習得するとともに、学会や学術論文で成果を発表できるようになることを目標とする。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：論文輪読
- 第3回：オペアンプ等を用いた電子回路設計（１）
- 第4回：論文輪読
- 第5回：オペアンプ等を用いた電子回路設計（２）
- 第6回：論文輪読
- 第7回：オペアンプ等を用いた電子回路設計（３）
- 第8回：論文輪読
- 第9回：計測プログラミング（１）
- 第10回：論文輪読
- 第11回：計測プログラミング（２）
- 第12回：論文輪読
- 第13回：計測プログラミング（３）
- 第14回：論文輪読
- 第15回：計測プログラミング（４）

成績評価方法

平常点評価 100% 輪読は、論文読解力、説明能力により評価。
実習は、内容の理解度、取り組みの積極性により評価。

リハビリテーション科学ゼミ（１） B（秋学期）

村岡 慶裕

授業概要 心身に不自由を抱えている方が、より豊かな生活を送ることができるように、失われた機能の回復を促し、残された能力を最大限に引き出す方法を探る。

ヒトは、感覚受容器・脳・神経系・筋肉を備えた一連のシステムであり、出力に相当する運動（行動）は、感覚受容器からの入力と経験的学習による自己組織化により変容する。最適な出力を促すためには、適切な能力評価による到達目標の設定と、外部から適切な入力を促す環境設定、支援機器などによる運動の制限や補助・代替・補完、そして教示者の促す自発的な反復運動による学習が必要である。

本研究指導では、ヒトの健康と社会福祉の向上に貢献すべく、ヒトをシステムとして捉え、望ましい出力や状態を引き出すために、生体計測を通して、生体システムの解明と、その最適化手法や評価手法の提案、さらに、付加すべき機器の開発を行うための能力を教授する。

授業の到達目標

授業概要で示した内容を具体的に実践できるように、電子回路設計法やプログラミング、実験の測定法と解析法を習得するとともに、学会や学術論文で成果を発表できるようになることを目標とする。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：論文輪読
- 第3回：マイコンプログラミング（１）
- 第4回：論文輪読
- 第5回：マイコンプログラミング（２）
- 第6回：論文輪読
- 第7回：マイコンプログラミング（３）
- 第8回：論文輪読
- 第9回：信号処理（１）
- 第10回：論文輪読
- 第11回：信号処理（２）
- 第12回：論文輪読
- 第13回：信号処理（３）
- 第14回：論文輪読
- 第15回：信号処理（４）

成績評価方法

平常点評価 100% 輪読は、論文読解力、説明能力により評価。
実習は、内容の理解度、取り組みの積極性により評価。

リハビリテーション科学ゼミ（２） A（春学期）

村岡 慶裕

授業概要 心身に不自由を抱えている方が、より豊かな生活を送ることができるように、失われた機能の回復を促し、残された能力を最大限に引き出す方法を探る。

ヒトは、感覚受容器・脳・神経系・筋肉を備えた一連のシステムであり、出力に相当する運動（行動）は、感覚受容器からの入力と経験的学習による自己組織化により変容する。最適な出力を促すためには、適切な能力評価による到達目標の設定と、外部から適切な入力を促す環境設定、支援機器などによる運動の制限や補助・代替・補完、そして教示者の促す自発的な反復運動による学習が必要である。

本研究指導では、ヒトの健康と社会福祉の向上に貢献すべく、ヒトをシステムとして捉え、望ましい出力や状態を引き出すために、生体計測を通して、生体システムの解明と、その最適化手法や評価手法の提案、さらに、付加すべき機器の開発を行うための能力を教授する。

授業の到達目標

授業概要で示した内容を具体的に実践できるように、電子回路設計法やプログラミング、実験の測定法と解析法を習得するとともに、学会や学術論文で成果を発表できるようになることを目標とする。

授業計画

第1回：ガイダンス
第2回：修士論文研究経過報告
第3回：論文輪読
第4回：修士論文研究経過報告
第5回：論文輪読
第6回：修士論文研究経過報告
第7回：論文輪読
第8回：修士論文研究経過報告
第9回：論文輪読
第10回：修士論文研究経過報告
第11回：論文輪読
第12回：修士論文研究経過報告
第13回：論文輪読
第14回：修士論文研究経過報告
第15回：論文輪読

成績評価方法

平常点評価 40% 研究課題関連論文の読解力と説明能力
その他 60% 研究課題の取り組みの主体性

リハビリテーション科学ゼミ（２） B（秋学期）

村岡 慶裕

授業概要 心身に不自由を抱えている方が、より豊かな生活を送ることができるように、失われた機能の回復を促し、残された能力を最大限に引き出す方法を探る。

ヒトは、感覚受容器・脳・神経系・筋肉を備えた一連のシステムであり、出力に相当する運動（行動）は、感覚受容器からの入力と経験的学習による自己組織化により変容する。最適な出力を促すためには、適切な能力評価による到達目標の設定と、外部から適切な入力を促す環境設定、支援機器などによる運動の制限や補助・代替・補完、そして教示者の促す自発的な反復運動による学習が必要である。

本研究指導では、ヒトの健康と社会福祉の向上に貢献すべく、ヒトをシステムとして捉え、望ましい出力や状態を引き出すために、生体計測を通して、生体システムの解明と、その最適化手法や評価手法の提案、さらに、付加すべき機器の開発を行うための能力を教授する。

授業の到達目標

授業概要で示した内容を具体的に実践できるように、電子回路設計法やプログラミング、実験の測定法と解析法を習得するとともに、学会や学術論文で成果を発表できるようになることを目標とする。

授業計画

第1回：ガイダンス
第2回：修士論文研究経過報告
第3回：論文輪読
第4回：修士論文研究経過報告
第5回：論文輪読
第6回：修士論文研究経過報告
第7回：論文輪読
第8回：修士論文研究経過報告
第9回：論文輪読
第10回：修士論文研究経過報告
第11回：論文輪読
第12回：修士論文研究経過報告
第13回：論文輪読
第14回：修士論文研究経過報告
第15回：論文輪読

成績評価方法

平常点評価 40% 研究課題関連論文の読解力と説明能力
その他 60% 研究課題の取り組みの主体性

児童家庭福祉論ゼミ（１） A（春学期）

白井 千晶

授業概要 要保護児童を支援するための狭義の社会的養護の体系を学び、家庭的養護と施設養護とを比較考察する。
視聴覚教材を通じて「子どもの養護」や「自立支援」に関する現状と支援の必要性について学ぶと共に、必要に応じて児童福祉施設の見学実習を行う。
本講義内容は、DP科目基礎1-3、4-1、DP科目認知2-1、2-2、DP科目社会情動1-6、1-7およびDP科目育児保育1-1、1-2、2-1、2-2、6-2、6-6、7-3、7-4、7-5、7-7に該当する。

授業の到達目標

- (1) 要保護児童の存在やその発生要因について理解することができる。(C 5-1)
(2) 子どもと家族への支援の必要性と、現行の支援の状況を理解することができる。(G36-4)

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス（含：教科書選定のためのニーズ調査）
第2回：要保護児童とは（その1：児童虐待、養育の拒否・怠慢）
第3回：要保護児童とは（その2：障害児）
第4回：要保護児童とは（その3：非行少年）
第5回：社会的養護の現状（その1：日本の家庭的養護）
第6回：社会的養護の現状（その2：日本の施設養護）
第7回：海外の社会的養護の概要（その1：欧米）
第8回：海外の社会的養護の概要（その2：東アジア）
第9回：中間まとめ（討論と考察）
第10回：ビデオ「赤ちゃんポスト」の視聴
第11回：「こうのとりのゆりかご」検証報告
第12回：乳児院のビデオ視聴
第13回：児童養護施設のビデオ視聴
第14回：養育家庭・養子縁組家庭のビデオ視聴
第15回：まとめ

教科書 受講生のニーズを調査した後に決定する。

参考文献 随時、関連図書や論文を紹介する。

成績評価方法

- レポート 80% 授業内のレポートや見学レポートにより理解度や考察の独自性を評価する。
平常点評価 20% 見学への参加度、出席状況を評価する。
その他 全授業回数の3分の2以上の出席を履修の条件とする。

備考・関連URL 原則として演習（1-A、B）演習（2-A、B）の順に受講すること。
関連URL：NPO法人アン基金プロジェクト、日本ファミリーホーム協議会、全国里親会、養子と里親を考える会、日本スクールソーシャルワーク協会、日本グループホーム学会、日本ダウン症協会

児童家庭福祉論ゼミ（１） B（秋学期）

白井 千晶

授業概要 要保護児童を支援するための狭義の社会的養護の体系を学び、家庭的養護と施設養護とを比較考察する。
視聴覚教材を通じて「子どもの養護」や「自立支援」に関する現状と支援の必要性について学ぶと共に、必要に応じて児童福祉施設の見学実習を行う。
本講義内容は、DP科目基礎1-3、4-1、DP科目認知2-1、2-2、DP科目社会情動1-6、1-7およびDP科目育児保育1-1、1-2、2-1、2-2、6-2、6-6、7-3、7-4、7-5、7-7に該当する。

授業の到達目標

- (1) 困難を抱えた子ども・家庭に対する現行の支援の現場を見聞し、共感的に理解することができる。(B56-3、C 5-1)
(2) 子どもと家族への支援のために、近年重用されるようになった援助技術を習得する。(C 6-2)

授業計画

- 第1回：中間まとめ（討論と考察）
第2回：情緒障害児短期治療施設のビデオ視聴
第3回：児童自立支援施設のビデオ視聴
第4回：児童自立援助ホームのビデオ視聴
第5回：中間まとめ（討論と考察）
第6回：障害児早期療育教室の見学
第7回：障害児療育施設の見学
第8回：肢体不自由児施設・重度心身障害児施設の見学
第9回：中間まとめ（討論と考察）
第10回：ホームビジット（家庭訪問活動）の理論と実際
第11回：母子健康手帳の「ハンディのある子版」との統合
第12回：ライフ・ストーリー・ワークとは何か
第13回：スクール・ソーシャルワークとは何か
第14回：「地域で子育て」の課題
第15回：まとめ：「地域で子育て」の展望

教科書 受講生のニーズを調査した後に決定する。

参考文献 随時、関連図書や論文を紹介する。

成績評価方法

- レポート 80% 授業内のレポートや見学レポートにより理解度や考察の独自性を評価する。
平常点評価 20% 見学への参加度、出席状況を評価する。
その他 全授業回数の3分の2以上の出席を履修の条件とする。

備考・関連URL 原則として演習（1-A）を履修した後に受講すること。
関連URL：NPO法人アン基金プロジェクト、日本ファミリーホーム協議会、養子と里親を考える会、全国里親会、日本スクールソーシャルワーク協会、日本グループホーム学会、日本ダウン症協会

児童家庭福祉論ゼミ（２） A（春学期）

白井 千晶

授業概要 家庭の養護と施設養護について事例に即して比較検討し、実践的な知識・援助技術を身に付ける。

一方、演習（１）を経て各自が立案した研究計画に基づき、先行研究を収集し、必要な調査法・分析法を習得する。抄読会や発表・討論会を通じて具体的に助言・討論し合いながら論文（エスノグラフィー）の作成につなげていく。

本講義内容は、DP科目基礎１－３、４－１、DP科目認知２－１、２－２、DP科目社会情動１－６、１－７およびDP科目育児保育１－１、１－２、２－１、２－２、６－２、６－６、７－３、７－４、７－５、７－７に該当する。

授業の到達目標

（１）事例検討を通して、実践的な知識・援助技術を身に付ける。（C 6－２）

（２）各自が立案した研究計画に基づき、論文（エスノグラフィー）の作成に必要な調査法・分析法を習得する。（Ad56－２、）

授業計画

第１回：オリエンテーション（含：教科書選定のためのニーズ調査）

第２回：事例検討（その１：養育家庭A）

第３回：事例検討（その２：養育家庭B）

第４回：事例検討（その３：養育家庭C）

第５回：事例検討（その４：養子縁組家庭D）

第６回：事例検討（その５：養子縁組家庭E）

第７回：事例検討（その６：ファミリーホームF）

第８回：事例検討（その７：ファミリーホームG）

第９回：中間まとめ（討論と考察）

第10回：参与観察の技法（その１：教科書の輪読）

第11回：参与観察の技法（その２：教科書の輪読）

第12回：参与観察の技法（その３：教科書の輪読）

第13回：インタビューの技法（その１：教科書の輪読）

第14回：インタビューの技法（その２：教科書の輪読）

第15回：まとめ

教科書 受講生のニーズを調査した後に決定する。

参考文献 随時、関連図書や論文を紹介する。

成績評価方法

レポート 80% 授業内のミニレポートや見学レポートにより理解度と考察の独自性を評価する。

平常点評価 20% 見学実習や発表への参加度、出席状況の評価する。

その他 全授業回数の３分の２以上の出席を履修の条件とする。

備考・関連URL 原則として児童家庭福祉論（１－A、B）を履修した後に受講すること。

関連URL：NPO法人アン基金プロジェクト、日本ファミリーホーム協議会、養子と里親を考える会、全国里親会、日本スクールソーシャルワーク協会、日本グループホーム学会、日本ダウン症協会

児童家庭福祉論ゼミ（２） B（秋学期）

白井 千晶

授業概要 家庭の養護と施設養護について事例に即して比較検討し、実践的な知識・援助技術を身に付ける。

一方、演習（１）を経て各自が立案した研究計画に基づき、先行研究を収集し、必要な調査法・分析法を習得する。抄読会や発表・討論会を通じて具体的に助言・討論し合いながら論文（エスノグラフィー）の作成につなげていく。

本講義内容は、DP科目基礎１－３、４－１、DP科目認知２－１、２－２、DP科目社会情動１－６、１－７およびDP科目育児保育１－１、１－２、２－１、２－２、６－２、６－６、７－３、７－４、７－５、７－７に該当する。

授業の到達目標

（１）事例検討を通して、実践的な知識・援助技術を身に付ける。（C 6－２）

（２）各自が立案した研究計画に基づき、論文（エスノグラフィー）の作成に必要な調査法・分析法を習得する。（Ad56－２、）

授業計画

第１回：エスノグラフィーの作成要領（その１：教科書の輪読）

第２回：エスノグラフィーの作成要領（その２：教科書の輪読）

第３回：エスノグラフィーの作成要領（その３：教科書の輪読）

第４回：中間まとめ（討論と考察）

第５回：見学実習（その１：各自がフィールドで見学実習し、フィールドノーツを作成）

第６回：見学実習（その２：各自がフィールドで見学実習し、フィールドノーツを作成）

第７回：見学実習（その３：各自がフィールドで見学実習し、フィールドノーツを作成）

第８回：見学実習（その４：各自がフィールドで見学実習し、フィールドノーツを作成）

第９回：作成したフィールドノーツ要旨の発表（その１）

第10回：作成したフィールドノーツ要旨の発表（その２）

第11回：作成したフィールドノーツ要旨の発表（その３）

第12回：中間まとめ（討論と考察）

第13回：エスノグラフィーの構想発表と討論（その１）

第14回：エスノグラフィーの構想発表と討論（その２）

第15回：まとめ

教科書 受講生のニーズを調査した後に決定する。

参考文献 随時、関連図書や論文を紹介する。

成績評価方法

レポート 80% 授業内のミニレポートや見学レポートにより理解度と考察の独自性を評価する。

平常点評価 20% 見学実習や発表への参加度、出席状況の評価する。

その他 全授業回数の３分の２以上の出席を履修の条件とする。

備考・関連URL 原則として児童家庭福祉論演習（１－A、B）および演習（２－A）を履修した後に受講すること。

関連URL：NPO法人アン基金プロジェクト、日本ファミリーホーム協議会、養子と里親を考える会、全国里親会、日本スクールソーシャルワーク協会、日本グループホーム学会、日本ダウン症協会

社会保障政策論ゼミ（１）A（春学期）

植村 尚史

授業概要 本ゼミは、社会保障政策を研究対象とする、政策研究分野のゼミである。社会保障政策（年金、医療、社会福祉等）の何らかの分野で、政策評価に関する研究、海外の制度との比較研究、政策決定過程に関する研究、政策の経済的、社会的効果に関する研究などのうち、いずれかの研究を行い、成果をまとめることを目標に進める。

授業の到達目標

・テーマを設定し、研究した成果をレポートにまとめる。

授業計画

第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本ゼミの目的と概要について説明します。
 第2回：報告とディスカッション初級・基礎 社会保障政策の基礎に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第3回：報告とディスカッション初級・応用 社会保障政策の基礎に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第4回：報告とディスカッション準中級・基礎 具体的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第5回：報告とディスカッション準中級・応用 具体的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第6回：報告とディスカッション中級・基礎 現在問題となっている社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第7回：報告とディスカッション中級・応用 現在問題となっている社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第8回：報告とディスカッション国際・基礎 国際的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第9回：報告とディスカッション国際・応用 国際的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第10回：報告とディスカッション準上級・基礎 世界的な動きをふまえて、社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第11回：報告とディスカッション準上級・応用 世界的な動きをふまえて、社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第12回：報告とディスカッション上級・基礎 社会保障政策に関する本質的なテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第13回：報告とディスカッション上級・応用 社会保障政策に関する本質的なテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第14回：報告とディスカッション総合 これまでの報告をもとに社会保障政策に関するテーマについて、全員でディスカッションを行います。
 第15回：全体のまとめ 演習の成果を確認し、次期の研究計画を提出します。

参考文献

植村尚史「社会保障を問い直す」（中央法規出版）
 厚生労働白書（ぎょうせい）
 その他授業の中で指示

成績評価方法

レポート 20% 内容の理解
 平常点評価 80% ディスカッションへの参加

社会保障政策論ゼミ（１）B（秋学期）

植村 尚史

授業概要 本ゼミは、社会保障政策を研究対象とする、政策研究分野のゼミである。社会保障政策（年金、医療、社会福祉等）の何らかの分野で、政策評価に関する研究、海外の制度との比較研究、政策決定過程に関する研究、政策の経済的、社会的効果に関する研究などのうち、いずれかの研究を行い、成果をまとめることを目標に進める。

授業の到達目標

・テーマを設定し、研究した成果をレポートにまとめる。

授業計画

第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本ゼミの目的と概要について説明します。
 第2回：報告とディスカッション初級・基礎 社会保障政策の基礎に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第3回：報告とディスカッション初級・応用 社会保障政策の基礎に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第4回：報告とディスカッション準中級・基礎 具体的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第5回：報告とディスカッション準中級・応用 具体的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第6回：報告とディスカッション中級・基礎 現在問題となっている社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第7回：報告とディスカッション中級・応用 現在問題となっている社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第8回：報告とディスカッション国際・基礎 国際的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第9回：報告とディスカッション国際・応用 国際的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第10回：報告とディスカッション準上級・基礎 世界的な動きをふまえて、社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第11回：報告とディスカッション準上級・応用 世界的な動きをふまえて、社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第12回：報告とディスカッション上級・基礎 社会保障政策に関する本質的なテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。
 第13回：報告とディスカッション上級・応用 社会保障政策に関する本質的なテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。
 第14回：報告とディスカッション総合 これまでの報告をもとに社会保障政策に関するテーマについて、全員でディスカッションを行います。
 第15回：全体のまとめ 演習の成果を確認し、次期の研究計画を提出します。

参考文献

植村尚史「社会保障を問い直す」（中央法規出版）
 厚生労働白書（ぎょうせい）
 その他授業の中で指示

成績評価方法

レポート 20% 内容の理解
 平常点評価 80% ディスカッションへの参加

社会保障政策論ゼミ（２）A（春学期）

植村 尚史

授業概要 本ゼミは、社会保障政策を研究対象とする、政策研究分野のゼミである。社会保障政策（年金、医療、社会福祉等）の何らかの分野で、政策評価に関する研究、海外の制度との比較研究、政策決定過程に関する研究、政策の経済的、社会的効果に関する研究などのうち、いずれかの研究を行い、成果をまとめることを目標に進める。

授業の到達目標

・テーマを設定し、研究した成果をレポートにまとめる。

授業計画

第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本ゼミの目的と概要について説明します。

第2回：報告とディスカッション初級・基礎 社会保障政策の基礎に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第3回：報告とディスカッション初級・応用 社会保障政策の基礎に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第4回：報告とディスカッション準中級・基礎 具体的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第5回：報告とディスカッション準中級・応用 具体的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第6回：報告とディスカッション中級・基礎 現在問題となっている社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第7回：報告とディスカッション中級・応用 現在問題となっている社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第8回：報告とディスカッション国際・基礎 国際的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第9回：報告とディスカッション国際・応用 国際的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第10回：報告とディスカッション準上級・基礎 世界的な動きをふまえて、社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第11回：報告とディスカッション準上級・応用 世界的な動きをふまえて、社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第12回：報告とディスカッション上級・基礎 社会保障政策に関する本質的なテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第13回：報告とディスカッション上級・応用 社会保障政策に関する本質的なテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第14回：報告とディスカッション総合 これまでの報告をもとに社会保障政策に関するテーマについて、全員でディスカッションを行います。

第15回：全体のまとめ 演習の成果を確認し、次期の研究計画を提出します。

参考文献

植村尚史「社会保障を問い直す」（中央法規出版）

厚生労働白書（ぎょうせい）

その他授業の中で指示

成績評価方法

レポート 20% 内容の理解

平常点評価 80% ディスカッションへの参加

社会保障政策論ゼミ（２）B（秋学期）

植村 尚史

授業概要 本ゼミは、社会保障政策を研究対象とする、政策研究分野のゼミである。社会保障政策（年金、医療、社会福祉等）の何らかの分野で、政策評価に関する研究、海外の制度との比較研究、政策決定過程に関する研究、政策の経済的、社会的効果に関する研究などのうち、いずれかの研究を行い、成果をまとめることを目標に進める。

授業の到達目標

・テーマを設定し、研究した成果をレポートにまとめる。

授業計画

第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本ゼミの目的と概要について説明します。

第2回：報告とディスカッション初級・基礎 社会保障政策の基礎に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第3回：報告とディスカッション初級・応用 社会保障政策の基礎に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第4回：報告とディスカッション準中級・基礎 具体的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第5回：報告とディスカッション準中級・応用 具体的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第6回：報告とディスカッション中級・基礎 現在問題となっている社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第7回：報告とディスカッション中級・応用 現在問題となっている社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第8回：報告とディスカッション国際・基礎 国際的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第9回：報告とディスカッション国際・応用 国際的な社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第10回：報告とディスカッション準上級・基礎 世界的な動きをふまえて、社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第11回：報告とディスカッション準上級・応用 世界的な動きをふまえて、社会保障政策に関するテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第12回：報告とディスカッション上級・基礎 社会保障政策に関する本質的なテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行います。

第13回：報告とディスカッション上級・応用 社会保障政策に関する本質的なテーマについて、学生が報告を行い、これに対して、全員でディスカッションを行い、問題点を掘り下げます。

第14回：報告とディスカッション総合 これまでの報告をもとに社会保障政策に関するテーマについて、全員でディスカッションを行います。

第15回：全体のまとめ 演習の成果を確認し、次期の研究計画を提出します。

参考文献

植村尚史「社会保障を問い直す」（中央法規出版）

厚生労働白書（ぎょうせい）

その他授業の中で指示

成績評価方法

レポート 20% 内容の理解

平常点評価 80% ディスカッションへの参加

スポーツ健康マネジメント論ゼミ（１） A（春学期）

吉村 正

授業概要 スポーツや健康に関する組織や職場、あるいはチームやグループ等がその目的を達成するために行うべき管理や運営について理解する。特に、仕事を円滑にすること、人を活かすこと、元気のあるチームや魅力ある職場を作り出すこと、組織やグループを改善すること、失敗や敗戦から学ぶこと等のマネジメント手法を学習する。

授業の到達目標

・授業概要で記した内容について、正確に理解し、そのことが自分の言語等でしっかりと説明出来るようになることを目標とする。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション（スポーツ健康マネジメントについて）
 第2回：スポーツに関するマネジメント＜1＞
 第3回：スポーツに関するマネジメント＜2＞
 第4回：健康に関するマネジメント＜1＞ レポート提出
 第5回：健康に関するマネジメント＜2＞
 第6回：レクリエーションに関するマネジメント＜1＞ レポート提出
 第7回：レクリエーションに関するマネジメント＜2＞
 第8回：リーダーシップ論 レポート提出
 第9回：リーダーとは、監督とは、その在り方について
 第10回：ヘッドコーチとはとは、アシスタントコーチとは、その在り方について
 第11回：スポーツ健康における組織論
 第12回：スポーツ健康における管理運営論
 第13回：NPO法人、学校法人について
 第14回：社会福祉法人、財団法人について
 第15回：フィールドワーク＜1＞ レポート提出

教科書 毎回資料を用意する。

成績評価方法

試験	実施しない。
レポート	50% 授業3回に1回レポートを提出させ、本演習を正確に理解しているかどうかを評価する。
平常点評価	50% レジュメの内容、研究発表、授業態度、全てに関して評価の対象とする。
その他	遅刻、早退は原則として認めない。

スポーツ健康マネジメント論ゼミ（１） B（秋学期）

吉村 正

授業概要 スポーツや健康に関する組織や職場、あるいはチームやグループ等がその目的を達成するために行うべき管理や運営について理解する。特に、仕事を円滑にすること、人を活かすこと、元気のあるチームや魅力ある職場を作り出すこと、組織やグループを改善すること、失敗や敗戦から学ぶこと等のマネジメント手法を学習する。

授業の到達目標

・授業概要で記した内容について、正確に理解し、そのことが自分の言語等でしっかりと説明出来るようになることを目標とする。

授業計画

- 第1回：フィールドワーク＜2＞
 第2回：フィールドワーク＜3＞
 第3回：フィールドワークのまとめと報告書作り 報告書提出
 第4回：グループワーク＜1＞
 第5回：グループワーク＜2＞
 第6回：グループワークのまとめと報告書作り 報告書提出
 第7回：NPO法人日本サッカー協会・設立・展開・発展
 第8回：NPO法人日本サッカー協会今後の課題 レポート提出
 第9回：レジュメの書き方、研究発表の仕方
 第10回：レジュメの提出 そのQ&A＜1＞
 第11回：レジュメの提出 そのQ&A＜2＞
 第12回：研究発表＜1＞
 第13回：研究発表＜2＞
 第14回：研究発表＜3＞
 第15回：まとめ

教科書 毎回資料を用意する。

成績評価方法

試験	実施しない。
レポート	50% 授業3回に1回レポートを提出させ、本演習を正確に理解しているかどうかを評価する。
平常点評価	50% レジュメの内容、研究発表、授業態度、全てに関して評価の対象とする。
その他	遅刻、早退は原則として認めない。

スポーツ健康マネジメント論ゼミ（２） A（春学期）

吉村 正

授業概要 演習（２）では、演習（１）で学習した基本的な内容を深める。具体的には、より多くの関連文献の講読および現場実習・グループワークを通じて、理論と実践の両面からスポーツ健康マネジメントの方法を学習し、最終的に各自が設定したテーマについて研究発表をする。

授業の到達目標

・授業概要で記した内容について、正確に理解し、そのことが自分の言語等でしっかりと説明出来るようになることを目標とする。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション スポーツ健康マネジメント（２）について
 第2回：文献講読＜1＞ 早稲田大学の健康とスポーツについて
 第3回：文献講読＜2＞ 早稲田大学の健康とスポーツについて レポート提出
 第4回：文献講読＜3＞ 健康教育マネジメント レポート提出
 第5回：文献講読＜4＞ 健康教育マネジメント レポート提出
 第6回：文献講読＜5＞ ベース・ボールの創造・考案・マネジメント レポート提出
 第7回：文献講読＜6＞ NPO法人日本ティーボール協会「世界への普及戦略」 レポート提出
 第8回：文献講読＜7＞ NPO法人日本ティーボール協会「創造・展開・マネジメント」＜1＞ レポート提出
 第9回：文献講読＜7＞ NPO法人日本ティーボール協会「創造・展開・マネジメント」＜2＞ レポート提出
 第10回：国民皆スポーツに向けて レポート提出
 第11回：スポーツ健康マネジメントについてのQ & A＜1＞
 第12回：スポーツ健康マネジメントについてのQ & A＜2＞
 第13回：スポーツ健康マネジメントについてのQ & A＜3＞
 第14回：現場実習（フィールドワーク）＜1＞
 第15回：現場実習（フィールドワーク）＜2＞

教科書 毎回資料を用意する。

成績評価方法

試験	実施しない。
レポート	50% 授業3回につき約1回レポートを提出させ、その内容を評価の対象とする。
平常点評価	50% 現場実習、グループワークでの貢献、研究発表でのQ & Aをみて評価する。
その他	遅刻、早退は、理由なき場合減点する。

スポーツ健康マネジメント論ゼミ（２） B（秋学期）

吉村 正

授業概要 演習（２）では、演習（１）で学習した基本的な内容を深める。具体的には、より多くの関連文献の講読および現場実習・グループワークを通じて、理論と実践の両面からスポーツ健康マネジメントの方法を学習し、最終的に各自が設定したテーマについて研究発表をする。

授業の到達目標

・授業概要で記した内容について、正確に理解し、そのことが自分の言語等でしっかりと説明出来るようになることを目標とする。

授業計画

- 第1回：現場実習（フィールドワーク）＜3＞
 第2回：現場実習（フィールドワーク）＜4＞
 第3回：現場実習（フィールドワーク）＜5＞
 第4回：現場実習（フィールドワーク）のまとめと報告書作り 報告書提出
 第5回：グループワーク＜1＞
 第6回：グループワーク＜2＞
 第7回：グループワーク＜3＞
 第8回：グループワーク＜4＞
 第9回：グループワーク＜5＞
 第10回：グループワークのまとめと報告書作り 報告書提出
 第11回：研究発表 Q & A
 第12回：研究発表 Q & A
 第13回：研究発表 Q & A
 第14回：研究発表 Q & A
 第15回：まとめ

教科書 毎回資料を用意する。

成績評価方法

試験	実施しない。
レポート	50% 授業3回につき約1回レポートを提出させ、その内容を評価の対象とする。
平常点評価	50% 現場実習、グループワークでの貢献、研究発表でのQ & Aをみて評価する。
その他	遅刻、早退は、理由なき場合減点する。

精神保健福祉論ゼミ（１） A（春学期）

田中 英樹

授業概要 障害者福祉とリハビリテーションの歴史と理念を解題した上で、精神障害者及び国民の精神保健上の課題を解題していく。また、わが国の精神保健福祉施策及びその今日的課題を概観し、関連法制度の理解も求めていく。

具体的には、シラバスに譲るが、単にわが国の歴史や動向、そして課題を解説するのではなく、基準をグローバルに捉え、欧米やアジアの主要な状況と絶えず比較しながら解題する。また、わが国の課題も世界基準と照らし合わせて、遅れている権利擁護や地域のケアシステム構築を特に検討したい。

授業の到達目標

1. 障害者福祉の理念と意義及びすべての障害者に共通の福祉施策の概要について理解させる。
2. 国民のメンタルヘルス課題について、社会福祉の視座から理解させる。
3. 精神障害者及びメンタルヘルスに関連した主要な法制度、例えば、精神保健福祉法、精神保健福祉士法、障害者基本法、障害者自立支援法、自殺対策基本法等の概要について理解させる。
4. わが国及び諸外国の精神保健福祉の歴史と動向を理解させる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション：本演習の内容と進め方
- 第2回：各自の研究関心と問題意識（口頭発表）
- 第3回：障害者福祉の歴史－わが国の歴史
- 第4回：障害者福祉の歴史－諸外国の歴史から
- 第5回：障害者福祉の理念（1970年代を中心に）
- 第6回：障害者福祉の理念（現代を中心に）精神保健福祉法の概要
- 第7回：ICID（国際障害分類）とICF（国際生活機能分類）
- 第8回：精神障害の特性
- 第9回：障害者基本法及び障害者自立支援法の概要
- 第10回：医療観察法の概要
- 第11回：自殺対策基本法の概要と各地の取り組み
- 第12回：精神保健福祉士法の概要
- 第13回：わが国における精神保健福祉の歴史
- 第14回：アメリカにおける精神保健福祉の歴史と動向
- 第15回：イギリスにおける精神保健福祉の歴史と動向

成績評価方法

- レポート 40% レポートによる評価
平常点評価 60% 授業の出席を重視します。

精神保健福祉論ゼミ（１） B（秋学期）

田中 英樹

授業概要 障害者福祉とリハビリテーションの歴史と理念を解題した上で、精神障害者及び国民の精神保健上の課題を解題していく。また、わが国の精神保健福祉施策及びその今日的課題を概観し、関連法制度の理解も求めていく。

具体的には、基準をグローバルに捉え、欧米やアジアの主要な状況と絶えず比較しながら解題する。また、わが国の課題も世界基準と照らし合わせて、遅れている権利擁護や地域のケアシステム構築を特に検討したい。

授業の到達目標

1. 障害者福祉の理念と意義及びすべての障害者に共通の福祉施策の概要について理解させる。
2. 国民のメンタルヘルス課題について、社会福祉の視座から理解させる。
3. 精神障害者及びメンタルヘルスに関連した主要な法制度、例えば、精神保健福祉法、精神保健福祉士法、障害者基本法、障害者自立支援法、自殺対策基本法等の概要について理解させる。
4. わが国及び諸外国の精神保健福祉の歴史と動向を理解させる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション：本演習の内容と進め方
- 第2回：各自の研究関心と問題意識（口頭発表）
- 第3回：障害者福祉の歴史－わが国の歴史
- 第4回：障害者福祉の歴史－諸外国の歴史から
- 第5回：障害者福祉の理念（1970年代を中心に）
- 第6回：障害者福祉の理念（現代を中心に）精神保健福祉法の概要
- 第7回：ICID（国際障害分類）とICF（国際生活機能分類）
- 第8回：精神障害の特性
- 第9回：障害者基本法及び障害者自立支援法の概要
- 第10回：医療観察法の概要
- 第11回：自殺対策基本法の概要と各地の取り組み
- 第12回：精神保健福祉士法の概要
- 第13回：わが国における精神保健福祉の歴史
- 第14回：アメリカにおける精神保健福祉の歴史と動向
- 第15回：イギリスにおける精神保健福祉の歴史と動向

教科書

特になし

参考文献

その都度、紹介または配布する。

成績評価方法

- レポート 40% レポートによる評価
平常点評価 60% 授業の出席を重視します。

精神保健福祉論ゼミ（２）A

田中 英樹

授業概要 我が国内外の精神保健福祉の今日的課題を毎回、解題する。

授業の到達目標

・受講生が修士論文の素材を獲得し、修士論文研究の課題と方法を身につけることをめざす。

授業計画

- 第1回：ひきこもりを考える
- 第2回：児童虐待を考える
- 第3回：災害時のメンタルヘルス
- 第4回：アルコール依存症及び関連問題
- 第5回：自殺対策を考える
- 第6回：思春期の精神保健
- 第7回：軽度発達障害
- 第8回：統合失調症のリハビリテーション
- 第9回：うつ病の復職支援
- 第10回：認知症高齢者を地域で支える
- 第11回：韓国の精神保健福祉
- 第12回：イタリアの精神保健福祉
- 第13回：イギリスの精神保健福祉
- 第14回：アメリカの精神保健福祉
- 第15回：ゼミのまとめ（発表会）

教科書 特になし

参考文献 その都度、紹介または配布する。

成績評価方法

レポート 40% 4回の課題を指示します。
平常点評価 60% 出席重視です。

備考・関連URL 日本精神障害者リハビリテーション学会（沖縄）、日本精神保健福祉学会（埼玉）のどちらかに参加して頂きます。

精神保健福祉論ゼミ（２）B

田中 英樹

授業概要 我が国内外の精神保健福祉の今日的課題を毎回、解題する。

授業の到達目標

・受講生が修士論文の素材を獲得し、修士論文研究の課題と方法を身につけることをめざす。

授業計画

- 第1回：ひきこもりを考える（続）
- 第2回：高齢者虐待を考える
- 第3回：災害時のメンタルヘルス（続）
- 第4回：薬物依存について
- 第5回：自殺対策を考える（続）
- 第6回：高齢者の精神保健
- 第7回：発達障害者の就労支援
- 第8回：統合失調症のリハビリテーション②
- 第9回：統合失調症のリハビリテーション③
- 第10回：障害者虐待を考える
- 第11回：中国の精神保健福祉
- 第12回：台湾の精神保健福祉
- 第13回：スウェーデンの精神保健福祉
- 第14回：ニュージーランドの精神保健福祉
- 第15回：ゼミのまとめ（発表会）

教科書 特になし

参考文献 その都度、紹介または配布する。

成績評価方法

レポート 40% 4回の課題を指示します。
平常点評価 60% 出席重視です。

備考・関連URL 日本精神障害者リハビリテーション学会（沖縄）、日本精神保健福祉学会（埼玉）のどちらかに参加して頂きます。

ソーシャルワーク論ゼミ（１） A（春学期）

岩崎 香

授業概要 主要なソーシャルワーク理論に関する文献を講読し、ソーシャルワークの歴史的な理解を深める。また、実践理論に添った研究論文を読み合わせ、ソーシャルワークの理論と日本での実践の融合に関する検討を行なう。

授業の到達目標

・社会福祉の歴史、理論、現状を念頭に置きながら、ソーシャルワーク技法の特徴について理解する。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：各人のこれまでの研究経過と研究関心に関するプレゼンテーション
- 第3回：ソーシャルワークの歴史に関する概説
- 第4回：ソーシャルワークの胎生期
- 第5回：ソーシャルワークの基盤の確立期
- 第6回：診断主義と機能主義
- 第7回：ソーシャルワークの発展と統合
- 第8回：ソーシャルワーク理論の多様化
- 第9回：ソーシャルワーク理論の現状と課題
- 第10回：文献講読①診断主義と機能主義
- 第11回：文献講読②課題中心アプローチと危機介入
- 第12回：文献講読③エコロジカル・アプローチ
- 第13回：文献講読④ストレングス・モデルとエンパワメント・アプローチ
- 第14回：文献講読⑤ナラティブ・アプローチ
- 第15回：ソーシャルワークに関するまとめ

参考文献

授業の中で提示

成績評価方法

レポート	50%	レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうか に重点を置く。
平常点評価	50%	授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。

ソーシャルワーク論ゼミ（１） B（秋学期）

岩崎 香

授業概要 主要なソーシャルワーク理論に関する文献を講読し、ソーシャルワークの日本における歴史的展開に理解を深める。また、フィールドワークを並行して実施し、ソーシャルワークの理論と日本での実践の融合に関する検討を行なう。

授業の到達目標

・社会福祉の歴史、理論、現状を念頭に置きながら、フィールドワークを通して、実践の質の向上に貢献する研究の視点を定める。

授業計画

- 第1回：ケースワークの日本での展開
- 第2回：フィールドワーク①医療機関
- 第3回：フィールドワーク②精神科医療機関
- 第4回：日本におけるケースワークの現状と課題
- 第5回：グループワークの日本での展開
- 第6回：フィールドワーク③地域の通所施設
- 第7回：フィールドワーク④地域の入所施設
- 第8回：日本におけるグループワークの現状と課題
- 第9回：コミュニティ・ワークの日本での展開
- 第10回：フィールドワーク⑤公的機関
- 第11回：フィールドワーク⑥社会福祉協議会
- 第12回：日本におけるコミュニティ・ワークの現状と課題
- 第13回：ソーシャルワーク理論と社会福祉実践の統合
- 第14回：まとめ①近年のソーシャルワークに関する動向
- 第15回：授業全体のまとめ

参考文献

授業の中で提示

成績評価方法

レポート	50%	レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうか に重点を置く。
平常点評価	50%	授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。

ソーシャルワーク論ゼミ（２） A（春学期）

岩崎 香

授業概要 ソーシャルワーク実践に関する過去の研究を学び、今後の研究の方向に関する検討を行う。

授業の到達目標
・多様な研究に触れることにより、目的に添った研究方法を選択する力を養う。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
第2回：ソーシャルワークに関する研究動向①：1999年以前
第3回：ソーシャルワークに関する研究動向②：2000年以降
第4回：ソーシャルワークの機能、モデルに関する研究①：機能
第5回：ソーシャルワークの機能、モデルに関する研究②：実践モデル
第6回：ソーシャルワークの価値、倫理に関する研究①：価値
第7回：ソーシャルワークの価値、倫理に関する研究②：倫理
第8回：ソーシャルワークの評価に関する研究①：参与観察と記録
第9回：ソーシャルワークの評価に関する研究②：評価尺度
第10回：事例研究
第11回：高齢者領域の研究
第12回：児童領域の研究
第13回：障害領域の研究
第14回：その他の領域の研究
第15回：最近のソーシャルワークに関する研究に関するまとめ

参考文献 授業の中で提示

成績評価方法

- レポート 50% レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうか
に重点を置く。
- 平常点評価 50% 授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。

ソーシャルワーク論ゼミ（２） B（秋学期）

岩崎 香

授業概要 ソーシャルワーク実践に関する過去の研究に関する検討を行い、その上で、最近の論文を講読し、その研究動向を探る。自分の研究テーマに関する先行研究をレビューし、様々な研究方法を検討する。

授業の到達目標
・最終的に、自分の研究テーマの意義を明らかにし、目的に添った研究方法を選択する力を養う。

授業計画

- 第1回：ソーシャルワーク・リサーチの現状と意義
第2回：リサーチの目的とその効果
第3回：「社会福祉学」に見られる理論研究
第4回：「社会福祉学」に見られる量的調査
第5回：「社会福祉学」に見られる質的調査①：グラウンデッド・セオリー
第6回：「社会福祉学」に見られる質的調査②：フォーカス・グループインタビュー
第7回：「社会福祉学」に見られる質的調査③：内容分析
第8回：「社会福祉学」に見られる質的調査④：アクション・リサーチ
第9回：量的調査と質的調査の特徴
第10回：各自の研究における目的
第11回：各自の研究テーマと実践フィールド
第12回：各自の研究テーマと調査法
第13回：研究デザインに関するプレゼンテーション
第14回：研究方法に関する最近の動向のまとめ
第15回：授業全体のまとめ

参考文献 授業の中で提示

成績評価方法

- レポート 50% レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうか
に重点を置く。
- 平常点評価 50% 授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。

子どもの健康福祉学ゼミ（１）A（春学期）

前橋 明

授業概要 本ゼミでは、子どもの健康福祉に関する研究を進めていくための知識と基礎技能をつけることを目的とする。とくに、「子どもたちの健全育成」や「生き生きとした、みんなの暮らしづくり」に主眼を置いて進めていく。具体的には、文献・資料講読、調査・測定・実践（フィールドワークへの参加）、発表、討論などを行って、子どもたち誰もがいきいきと健康的に生きていくための知見を、本講義と課題遂行を通して整理していく。

授業の到達目標 子どもの健康福祉に関する文献・資料講読、調査・測定などへの参加、発表、討論などを行って、誰もが健康的に暮らせるための知見を整理し、自分の述べたいことを論理的に記述・発表できるようになる。

（１）調査や測定などに参加し、研究方法を身につける。

（２）文献・資料講読をした概要を発表し、意見交換ができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション：「子どもの健康福祉学とは」
 第2回：先行研究を調べてのテーマの具体化 子どもの健康福祉に関する文献・資料講読＜１＞（日本：運動・あそび関連）
 第3回：子どもの健康福祉に関する文献・資料講読＜２＞（日本：栄養関連）
 第4回：子どもの健康福祉に関する文献・資料講読＜３＞（日本：睡眠関連）
 第5回：調査・測定・実践（フィールドワークへの参加）＜１＞「子育て支援センター」
 第6回：調査・測定・実践（フィールドワークへの参加）＜２＞「幼稚園」
 第7回：子どもの健康福祉に関する文献・資料講読＜１＞（外国：運動・あそび関連）
 第8回：子どもの健康福祉に関する文献・資料講読＜２＞（外国：栄養関連）
 第9回：子どもの健康福祉に関する文献・資料講読＜３＞（外国：睡眠関連）
 第10回：調査・測定・実践（フィールドワークへの参加）＜３＞「保育園・福祉施設」
 第11回：調査・測定・実践（フィールドワークへの参加）＜４＞「学校教育現場」
 第12回：学会論文（日本保育園保健学会・日本幼少児健康教育学会などの研究論文）の講読と解説＜１＞
 第13回：学会論文（日本子ども家庭福祉学会・日本幼児体育学会などの研究論文）の講読と解説＜２＞
 第14回：学会論文（日本レジャー・レクリエーション学会・日本食育学会議などの研究論文）の講読と解説＜３＞
 第15回：課題レポートの提出と評価・解説

教科書 随時、レジュメ・資料などを配布する。

参考文献 必要に応じて、随時、関連図書や文献を紹介する。

成績評価方法

レポート 50% 課題を講義内容を絡めて考察し、文章化しているかどうかを評価する。

平常点評価 50% 発表やディスカッション、フィールドワークへの参加状況を評価する。

子どもの健康福祉学ゼミ（１）B（秋学期）

前橋 明

授業概要 子どもの健康福祉に関する研究を進めていくための知識と技能、実践力をつけることを目的とする。とくに、「子どもたちの健全育成」や「生き生きとした、みんなの暮らしづくり」に主眼を置いて進めていく。具体的には、文献・資料講読、調査・測定・実践（フィールドワークへの参加）、発表、討論などを行って、誰もが健康的に暮らせるための知見を、本講義と課題遂行を通して整理していく。

授業の到達目標 子どもの健康福祉に関する文献・資料講読、フィールドワークへの参加、発表・討論を行って、誰もが健康的に暮らせるための知見を整理し、自分の述べたいことを論理的に記述・発表できるようになる。

（１）学会論文を購読し、研究方法や考察の仕方を習得する。

（２）自己課題を実施し概要を発表して、意見交換ができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション（本講の概略と課題の提示）
 第2回：学会論文（日本小児保健学会・日本乳幼児教育学会などの研究論文）の講読と解説＜１＞
 第3回：学会論文（日本保育園保健学会・日本保育学会などの研究論文）の講読と解説＜２＞
 第4回：学会論文（アジア幼児体育学会などの研究論文）の講読と解説＜３＞
 第5回：OCR研修＜１＞：アンケート調査票の作成
 第6回：OCR研修＜２＞：帳票設定
 第7回：OCR研修＜３＞：OCRを用いた調査情報の画像処理とエクセルへの取り込み
 第8回：OCR研修＜４＞：エクセルデータからの作図
 第9回：OCR研修＜５＞：生活調査結果の分析と考察（討議）
 第10回：自己課題への取り組み
 第11回：自己課題の文章化
 第12回：自己課題の文章化 中間報告と討論＜１＞「栄養関連」
 第13回：自己課題の文章化 中間報告と討論＜２＞「運動・あそび関連」
 第14回：自己課題の文章化 中間報告と討論＜３＞「睡眠関連」
 第15回：課題レポートの提出と評価・解説

教科書 随時、レジュメ・資料などを配布する。

参考文献 必要に応じて、随時、関連図書や文献を紹介する。

成績評価方法

レポート 50% 課題を講義内容を絡めて考察し、文章化しているかどうかを評価する。

平常点評価 50% 発表やディスカッション、フィールドワークへの参加状況を評価する。

子どもの健康福祉学ゼミ（２）A（春学期）

前橋 明

授業概要 子どもの健康福祉に関する研究を進めていくための技能と実践力をつけることを目的とし、だれもが穏やかに、自分らしく、いきいきと生きられるための知見を、調査・測定やフィールドワーク、研究会への参加を通して見いだしていく。調査・測定では、日常生活の身近なところで抱いた「ささやかな疑問」を大切に、その疑問を解決すべく、取り組む。そして、収集した結果（情報）をもとにして、自分の述べたいことを論理的に展開し、レポートにまとめ、報告する。

授業の到達目標 調査や測定、実践、観察などを通して収集した結果（情報）をもとに、子どもの健康福祉に関して自分の述べたいことを論理的に文章化し、報告できるようになる。

（１）自己の研究課題を設定・実施して、概要を文章化できる。

（２）研究会にて自己課題の取り組みを報告できる。

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方の説明・課題レポートの発表
 第2回：自己課題への取り組み（研究計画の発表と討論）＜1＞「生活リズム関連」
 第3回：自己課題への取り組み（研究計画の発表と討論）＜2＞「睡眠関連」
 第4回：自己課題への取り組み（研究計画の発表と討論）＜3＞「栄養関連」
 第5回：自己課題への取り組み（研究計画の発表と討論）＜4＞「運動・あそび関連」
 第6回：研究会への参加と研修＜1＞「子ども支援」
 第7回：研究会への参加と研修＜2＞「保育」
 第8回：研究会への参加と研修＜3＞「教育」
 第9回：研究会への参加と研修＜4＞「福祉」
 第10回：子どもたちの健康福祉の実践の場での研修、フィールドワークへの参加＜1＞「保育園」
 第11回：子どもたちの健康福祉の実践の場での研修、フィールドワークへの参加＜2＞「幼稚園」
 第12回：子どもたちの健康福祉の実践の場での研修、フィールドワークへの参加＜3＞「学校・施設」
 第13回：自己課題への取り組み＜1＞（収集データの作図・作表）
 第14回：自己課題への取り組み＜2＞（測定・調査結果をもとにした考察・討議）
 第15回：課題レポート（自己課題の文章化）の提出と評価・解説

教科書 随時、レジュメ・資料などを配布する。

参考文献 必要に応じて、随時、関連図書や文献を紹介する。

成績評価方法

- レポート 50% 課題を講義内容を絡めて考察し、論理的に文章化しているかどうかを評価する。
 平常点評価 50% 発表やディスカッション、フィールドワークや研究会への参加・活動状況を評価する。

子どもの健康福祉学ゼミ（２）B（秋学期）

前橋 明

授業概要 子どもの健康福祉に関する研究を進めていくための技能と実践力をつけることを目的とし、だれもが穏やかに、自分らしく、いきいきと生きられるための知見を、調査・測定やフィールドワークを通して見いだして、世の中に役立てていくように取り組む。調査・測定では、日常生活の身近なところで抱いた「ささやかな疑問」を大切に、その疑問を解決すべく、取り組む。そして、収集した結果（情報）をもとにして、自分の述べたいことを論理的に展開し、報告書を作成・発表する。

授業の到達目標 調査や測定、実践、観察などを通して収集した結果（情報）をもとにして、子どもの健康福祉に関して自分の述べたいことを論理的に文章化し、報告できるようになる。

（１）自己の研究課題を設定・実施して、概要を報告書として文章化できる。

（２）学術集会へ参加を通して、研究の構成方法を修得する。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション（本講の概要説明と課題の提示）
 第2回：自己課題の中間報告と討論＜1＞「睡眠関連」
 第3回：自己課題の中間報告と討論＜2＞「栄養関連」
 第4回：自己課題の中間報告と討論＜3＞「運動・あそび関連」
 第5回：学術集会への参加と研修＜1＞「子ども支援領域」
 第6回：学術集会への参加と研修＜2＞「保育・保健領域」
 第7回：学術集会への参加と研修＜3＞「幼児教育・レクリエーション領域」
 第8回：学術集会への参加と研修＜4＞「教育・福祉領域」
 第9回：自己課題への取り組み＜3＞（文章ならびに考察の再検討）
 第10回：自己課題への取り組み＜4＞（抄録作成）
 第11回：自己課題への取り組み＜5＞（パワーポイント作成）
 第12回：自己課題の学期末報告と討論＜1＞「乳幼児関連」
 第13回：自己課題の学期末報告と討論＜2＞「児童関連」
 第14回：自己課題の学期末報告と討論＜3＞「生徒・その他」
 第15回：課題レポートの提出と評価・解説

教科書 随時、レジュメ・資料などを配布する。

参考文献 必要に応じて、随時、関連図書や文献を紹介する。

成績評価方法

- レポート 50% 課題を講義内容を絡めて考察し、論理的に文章化しているかどうかを評価する。
 平常点評価 50% 発表やディスカッション、フィールドワークや学術集会への参加・活動状況を評価する。

老年社会福祉学ゼミ（１） A（春学期）

加瀬 裕子

授業概要 Gerontological Social WorkやSocial Gerontologyの基本的文献を講読し、高齢者の強さに依拠したストレンクス・モデルによるサービスや社会制度のあり方について考察するとともに、ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークのいずれかを実際の現場で試行し、スーパービジョンの体験を実現する。

授業の到達目標

- (1) ソーシャルワークの目的と方法について概要を述べる事が出来るようになる。(C 5-1)
(2) ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークのいずれかを応用できるようになることをめざす。(D56-2)

授業計画

- 第1回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 1
第2回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 2
第3回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 3
第4回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 4
第5回：文献講読 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」 5
第6回：ソーシャルワークの歴史について
第7回：ソーシャルワークのモデルについて
第8回：高齢者福祉の実践について 1-介護とソーシャルワーカー
第9回：高齢者福祉の実践について 2-地域づくりとソーシャルワーカー
第10回：高齢者福祉の実践について 3-多職種連携-
第11回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習
第12回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習
第13回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習
第14回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習
第15回：授業のまとめ

教科書 ソフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」相川書房

成績評価方法

- レポート 50% レポートの意義・目的・論理展開が明確に記述されていること。
平常点評価 50% 研究プロジェクト毎に行う発表を評価する。

老年社会福祉学ゼミ（１） B（秋学期）

加瀬 裕子

授業概要 先行研究を検証して、修士論文の課題に関連した研究計画を策定する方法を学ぶ。
各自のテーマにあわせて、調査を進めると同時に互に研究の進展について報告・意見交換を行なう。

授業の到達目標

- (1) 質的研究方法・量的研究方法を理解し、学術論文を的確に評価できるようになる。(Ac 6-1)
(2) 研究目的にあわせた適切な研究方法を選択できるようになる。(C 6-2)

授業計画

- 第1回：授業の進め方について
第2回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 1
第3回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 2
第4回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 3
第5回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 4
第6回：学会誌「社会福祉学」等に掲載された研究論文についての討論 1
第7回：学会誌「社会福祉学」等に掲載された研究論文についての討論 2
第8回：老年学における研究の動向についての討論
第9回：社会福祉学における研究の動向についての討論
第10回：論文の書き方について
第11回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習
第12回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習
第13回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習
第14回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習
第15回：授業のまとめ

教科書

学会誌「老年社会科学」2010～2012
学会誌「社会福祉学」2010～2012

成績評価方法

平常点評価 100% 先行研究の読み込み、明確で実現可能な研究計画の策定、テーマの創造性、演習への貢献。

老年社会福祉学ゼミ（２） A（春学期）

加瀬 裕子

授業概要 先行研究を検証して、修士論文の課題に関連した研究計画を策定する方法を学ぶ。
各自のテーマにあわせて、調査を進めると同時に互に研究の進展について報告・意見交換を行なう。

授業の到達目標

- (1) 質的研究方法・量的研究方法を理解し、学术论文を的確に評価できるようになる。(Ac 6-1)
(2) 研究目的にあわせた適切な研究方法を選択できるようになる。(C 6-2)

授業計画

- 第1回：授業の進め方について
第2回：量的研究方法について 1 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第3回：量的研究方法について 2 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第4回：質的研究方法について 1 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第5回：質的研究方法について 2 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第6回：質的研究方法について 3 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第7回：Evidence-based researchの方法について 1
第8回：Evidence-based researchの方法について 2
第9回：倫理審査申請書の作成
第10回：各自で研究をデザインする 1 調査計画作成
第11回：各自で研究をデザインする 2 調査依頼の方法・倫理
第12回：各自で研究をデザインする 3 調査票作成
第13回：各自で研究をデザインする 4 調査票作成
第14回：各自で研究をデザインする 6 調査票作成
第15回：調査について報告

参考文献 個別に紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 先行研究の読み込み、明確で実現可能な研究計画の策定、テーマの創造性、演習への貢献。

老年社会福祉学ゼミ（２） B（秋学期）

加瀬 裕子

授業概要 先行研究を検証して、修士論文の課題に関連したデータの収集と分析方法を学ぶ。
各自のテーマにあわせて、実証研究を進めると同時に互に研究の進展について報告・意見交換を行なう。

授業の到達目標

- ・質的研究方法・量的研究方法を体得し、研究目的にあわせた適切な研究を実施できるようになる。(B56-1)

授業計画

- 第1回：各自が収集したデータを資料として、解析ソフトSPSSの使用法を学ぶ。1
第2回：各自が収集したデータを資料として、解析ソフトSPSSの使用法を学ぶ。2
第3回：各自が収集したデータを資料として、解析ソフトSPSSの使用法を学ぶ。3
第4回：各自が収集したデータを資料として、解析ソフトSPSSの使用法を学ぶ。4
第5回：各自が収集したデータを資料として、質的分析方法を学ぶ。1
第6回：各自が収集したデータを資料として、質的分析方法を学ぶ。2
第7回：各自が収集したデータを資料として、質的分析方法を学ぶ。3
第8回：調査結果の考察 1
第9回：調査結果の考察 2
第10回：調査結果の考察 3
第11回：学术论文の書き方 1
第12回：学术论文の書き方 2
第13回：学术论文の書き方 3
第14回：論文クリニック 1
第15回：論文クリニック 2

教科書 特になし。

参考文献 適宜、授業中に指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% 先行研究の読み込み、明確で実現可能な研究計画の策定、テーマの創造性、演習への貢献。

学校カウンセリング学ゼミ（１） A（春学期）

菅野 純

授業概要 学校期（幼児期－青年期）の子どもたちが抱える教育心理臨床的諸テーマ（例えば、不登校、家庭内暴力など）を対象に、実践的研究の方法を模索しながら、各自のテーマを研究することを目的とする。

授業の到達目標

・教育心理臨床的諸テーマについて、学校カウンセリング学関係の文献研究や事例研究を通して理解を深め、修士論文につなげていく。

授業計画

- 第1回：学校カウンセリング学序論（１）
- 第2回：学校カウンセリング学序論（２）
- 第3回：学校カウンセリング学文献講読（１）
- 第4回：学校カウンセリング学文献講読（２）
- 第5回：学校カウンセリング学文献講読（３）
- 第6回：学校カウンセリング学文献講読（４）
- 第7回：学校カウンセリング学文献講読（５）
- 第8回：学校カウンセリング学文献講読（６）
- 第9回：個人研究テーマ発表（１）
- 第10回：個人研究テーマ発表（２）
- 第11回：個人研究テーマ発表（３）
- 第12回：個人研究テーマ発表（４）
- 第13回：個人研究テーマ発表（５）
- 第14回：個人研究テーマ発表（６）
- 第15回：個人研究テーマ発表（７）

成績評価方法

レポート 20% 学校カウンセリングの各テーマの趣旨をどれだけ正確に理解したかを問う。
平常点評価 80% ゼミ発表、ゼミ討論への参加を量的・質的に問う。

学校カウンセリング学ゼミ（１） B（秋学期）

菅野 純

授業概要 学校期（幼児期－青年期）の子どもたちが抱える教育心理臨床的諸テーマ（例えば、不登校、家庭内暴力など）を対象に、実践的研究の方法を模索しながら、各自のテーマを研究することを目的とする。

授業の到達目標

・教育心理臨床的諸テーマについて、学校カウンセリング学関係の文献研究や事例研究を通して理解を深め、修士論文につなげていく。

授業計画

- 第1回：個人研究テーマ発表（８）
- 第2回：個人研究テーマ発表（９）
- 第3回：個人研究テーマ発表（10）
- 第4回：個人研究テーマ発表（11）
- 第5回：個人研究テーマ発表（12）
- 第6回：学校カウンセリング学文献輪読（１）
- 第7回：学校カウンセリング学文献輪読（２）
- 第8回：学校カウンセリング学文献輪読（３）
- 第9回：学校カウンセリング学文献輪読（４）
- 第10回：修士論文計画発表（１）
- 第11回：修士論文計画発表（２）
- 第12回：修士論文計画発表（３）
- 第13回：修士論文計画発表（４）
- 第14回：修士論文計画発表（５）
- 第15回：修士論文計画発表（６）

成績評価方法

レポート 20% 学校カウンセリングの各テーマの趣旨をどれだけ正確に理解したかを問う。
平常点評価 80% ゼミ発表、ゼミ討論への参加を量的・質的に問う。

学校カウンセリング学ゼミ（２） A（春学期）

菅野 純

授業概要 ゼミ（１）で取り上げたテーマを更に深めるとともに、学校期の諸テーマのみではなく、社会文化的背景、発達との関連、家族問題、諸外国との比較など、幅広く研究することを目的とする。

授業の到達目標

・先行研究と修士論文作成にかかわる各自のテーマとを関連づけて研究を完成させる。

授業計画

- 第1回：学校カウンセリング学研究概論（１）
- 第2回：学校カウンセリング学研究概論（２）
- 第3回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（１）
- 第4回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（２）
- 第5回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（３）
- 第6回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（４）
- 第7回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（５）
- 第8回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議（６）
- 第9回：修士論文経過報告（１）
- 第10回：修士論文経過報告（２）
- 第11回：修士論文経過報告（３）
- 第12回：修士論文経過報告（４）
- 第13回：修士論文経過報告（５）
- 第14回：修士論文経過報告（６）
- 第15回：修士論文経過報告（７）

成績評価方法

レポート 20% 学校カウンセリングの各テーマの趣旨をどれだけ正確に理解したかを問う。
 平常点評価 80% ゼミ発表、ゼミ討論への参加を量的・質的に問う。

専
門
心
理
学
臨
床
ゼ
ミ

学校カウンセリング学ゼミ（２） B（秋学期）

菅野 純

授業概要 ゼミ（１）で取り上げたテーマを更に深めるとともに、学校期の諸テーマのみではなく、社会文化的背景、発達との関連、家族問題、諸外国との比較など、幅広く研究することを目的とする。

授業の到達目標

・先行研究と修士論文作成にかかわる各自のテーマとを関連づけて研究を完成させる。

授業計画

- 第1回：修士論文経過報告（８）
- 第2回：修士論文経過報告（９）
- 第3回：修士論文経過報告（10）
- 第4回：修士論文経過報告（11）
- 第5回：修士論文経過報告（12）
- 第6回：修士論文経過報告（13）
- 第7回：修士論文経過報告（14）
- 第8回：修士論文経過報告（15）
- 第9回：修士論文経過報告（16）
- 第10回：修士論文経過報告（17）
- 第11回：修士論文経過報告（18）
- 第12回：学校カウンセリング学私論（１）
- 第13回：学校カウンセリング学私論（２）
- 第14回：学校カウンセリング学私論（３）
- 第15回：学校カウンセリング学私論（４）

成績評価方法

レポート 20% 学校カウンセリングの各テーマの趣旨をどれだけ正確に理解したかを問う。
 平常点評価 80% ゼミ発表、ゼミ討論への参加を量的・質的に問う。

行動臨床心理学ゼミ（１） A（春学期）

嶋田 洋徳

授業概要 行動療法、認知行動療法に関する最近の研究を取り上げ、最新の知見、理論的発展、方法論に関する理解を深める。特に、心理臨床場面への応用を前提とした認知や行動に関する研究に主眼を置く。また、症例研究を取り上げ、研究知見との整合的な理解、アセスメントや治療技法に関する行動論的理解を試みる。さらに、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の習得を目指す。

授業の到達目標

：行動臨床心理学（行動療法や認知行動療法）の最新理論や技法の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（１）
- 第3回：症例研究と実践報告検討（１）
- 第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（１）
- 第5回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（２）
- 第6回：症例研究と実践報告検討（２）
- 第7回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（２）
- 第8回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（３）
- 第9回：症例研究と実践報告検討（３）
- 第10回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（３）
- 第11回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（１）
- 第12回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（２）
- 第13回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（４）
- 第14回：症例研究と実践報告検討（４）
- 第15回：春学期のまとめ

教科書 なし。レポーターを担当する者がレジюме等を配布する。

参考文献 演習中に適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 60% 課題内容の達成度による。
平常点評価 40% 討論における貢献度による。

行動臨床心理学ゼミ（１） B（秋学期）

嶋田 洋徳

授業概要 行動療法、認知行動療法に関する最近の研究を取り上げ、最新の知見、理論的発展、方法論に関する理解を深める。特に、心理臨床場面への応用を前提とした認知や行動に関する研究に主眼を置く。また、症例研究を取り上げ、研究知見との整合的な理解、アセスメントや治療技法に関する行動論的理解を試みる。さらに、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の習得を目指す。

授業の到達目標

：行動臨床心理学（行動療法や認知行動療法）の最新理論や技法の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（４）
- 第2回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（５）
- 第3回：症例研究と実践報告検討（５）
- 第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（５）
- 第5回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（６）
- 第6回：症例研究と実践報告検討（６）
- 第7回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（６）
- 第8回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（３）
- 第9回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（４）
- 第10回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（５）
- 第11回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（７）
- 第12回：症例研究と実践報告検討（７）
- 第13回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（７）
- 第14回：秋学期のまとめ
- 第15回：総合まとめ

教科書 なし。レポーターを担当する者がレジюме等を配布する。

参考文献 演習中に適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 60% 課題内容の達成度による。
平常点評価 40% 討論における貢献度による。

行動臨床心理学ゼミ（２） A（春学期）

嶋田 洋徳

授業概要 演習（１）を基礎として、そのエビデンスを重視しながら、各受講者の研究テーマについて、関連する先行研究の理解、問題の設定、研究計画の立案を行い、それを互いに検討しながら討論を行う。主な研究課題は、さまざまな不応行動や症状の改善、適応行動や健康行動の形成に関する行動療法、認知行動療法などに代表される認知行動的アプローチである。また、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の習得を目指す。

授業の到達目標

・行動臨床心理学（行動療法や認知行動療法）の最新理論や技法の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（１）
- 第3回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（１）
- 第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（２）
- 第5回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（２）
- 第6回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（３）
- 第7回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（３）
- 第8回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（４）
- 第9回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（４）
- 第10回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（１）
- 第11回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（２）
- 第12回：症例研究と実践報告検討（１）
- 第13回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（５）
- 第14回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（６）
- 第15回：春学期のまとめ

教科書 なし。レポーターを担当する者がレジュメ等を配布する。

参考文献 演習中に適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 60% 課題内容の達成度による。
- 平常点評価 40% 討論における貢献度による。

行動臨床心理学ゼミ（２） B（秋学期）

嶋田 洋徳

授業概要 演習（１）を基礎として、そのエビデンスを重視しながら、各受講者の研究テーマについて、関連する先行研究の理解、問題の設定、研究計画の立案を行い、それを互いに検討しながら討論を行う。主な研究課題は、さまざまな不応行動や症状の改善、適応行動や健康行動の形成に関する行動療法、認知行動療法などに代表される認知行動的アプローチである。また、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の習得を目指す。

授業の到達目標

・行動臨床心理学（行動療法や認知行動療法）の最新理論や技法の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（７）
- 第2回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（８）
- 第3回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（９）
- 第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（１０）
- 第5回：症例研究と実践報告検討（２）
- 第6回：症例研究と実践報告検討（３）
- 第7回：症例研究と実践報告検討（４）
- 第8回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（３）
- 第9回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（４）
- 第10回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（５）
- 第11回：研究テーマに関するまとめ（１）
- 第12回：研究テーマに関するまとめ（２）
- 第13回：研究テーマに関するまとめ（３）
- 第14回：秋学期のまとめ
- 第15回：総合まとめ

教科書 なし。レポーターを担当する者がレジュメ等を配布する。

参考文献 演習中に適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 60% 課題内容の達成度による。
- 平常点評価 40% 討論における貢献度による。

医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ（１）A（春学期）

鈴木 伸一

授業概要 うつ病、不安障害、心身症などのさまざまなストレス関連疾患の発症・維持・悪化に関する諸要因の影響性を検討するとともに、ストレス関連疾患の予防・治療・リハビリテーションに向けた認知行動的介入の方法論について学ぶ。また、身体疾患患者のメンタルケアおよび職場のメンタルヘルスを実践フィールドと位置付け、単に精神衛生上の問題のみを取り上げるのではなく、成人が抱えやすい生活上の問題や罹患しやすい心身の問題の予防およびケアに焦点を当てたトータル・ヘルス・プロモーションを目指した最先端の研究および臨床実践について学ぶ。

授業の到達目標

- ・医療および職場のメンタルヘルスの現状を理解し、対策を考えることができる（C5-1）
- ・認知行動療法をはじめとする臨床実践の基礎的な知識と技術を習得できる（C6-2）

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：文献講読と議論 1
- 第3回：文献講読と議論 2
- 第4回：文献講読と議論 3
- 第5回：文献講読と議論 4
- 第6回：文献講読と議論 5
- 第7回：文献講読と議論 6
- 第8回：文献講読と議論 7
- 第9回：文献講読と議論 8
- 第10回：文献講読と議論 9
- 第11回：文献講読と議論 10
- 第12回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 1
- 第13回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 2
- 第14回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 3
- 第15回：まとめ

教科書 教科書は随時指示する。随時プリントを配布する。

参考文献 参考書は随時指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% 出席状況、分担発表および授業中の積極的な発言により評価する

備考・関連URL 関連URL：<http://www.f.waseda.jp/ssuzuki/>

医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ（１）B（秋学期）

鈴木 伸一

授業概要 うつ病、不安障害、心身症などのさまざまなストレス関連疾患の発症・維持・悪化に関する諸要因の影響性を検討するとともに、ストレス関連疾患の予防・治療・リハビリテーションに向けた認知行動的介入の方法論について学ぶ。また、身体疾患患者のメンタルケアおよび職場のメンタルヘルスを実践フィールドと位置付け、単に精神衛生上の問題のみを取り上げるのではなく、成人が抱えやすい生活上の問題や罹患しやすい心身の問題の予防およびケアに焦点を当てたトータル・ヘルス・プロモーションを目指した最先端の研究および臨床実践について学ぶ。

授業の到達目標

- ・医療および職場のメンタルヘルスの現状を理解し、対策を考えることができる（C5-1）
- ・認知行動療法をはじめとする臨床実践の基礎的な知識と技術を習得できる（C6-2）

授業計画

- 第1回：文献講読と議論 11
- 第2回：文献講読と議論 12
- 第3回：文献講読と議論 13
- 第4回：文献講読と議論 14
- 第5回：文献講読と議論 15
- 第6回：文献講読と議論 16
- 第7回：文献講読と議論 17
- 第8回：文献講読と議論 18
- 第9回：文献講読と議論 19
- 第10回：文献講読と議論 20
- 第11回：文献講読と議論 21
- 第12回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 1
- 第13回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 2
- 第14回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 3
- 第15回：まとめ

教科書 教科書は随時指示する。随時プリントを配布する。

参考文献 参考書は随時指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% 出席状況、分担発表および授業中の積極的な発言により評価する

備考・関連URL 関連URL：<http://www.f.waseda.jp/ssuzuki/>

医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ（２）A（春学期）

鈴木 伸一

授業概要 うつ病、不安障害、心身症などのさまざまなストレス関連疾患の発症・維持・悪化に関する諸要因の影響性を検討するとともに、ストレス関連疾患の予防・治療・リハビリテーションに向けた認知行動的介入の方法論について研究する。また、研究の焦点としては、身体疾患患者のメンタルケアおよび職場のメンタルヘルスを実践フィールドと位置付け、「うつ・不安のメカニズムに関する基礎研究グループ」、「チーム医療を基盤としたメンタルケアシステムに関する研究グループ」、および「職場のメンタルヘルスをはじめとするストレスマネジメントに関する研究グループ」を構成し、各プロジェクトとリンクした個別の研究テーマを選定し、取り組んでいく。

授業の到達目標

- ・医療心理学および職場メンタルヘルス学に関する最新の研究動向を把握できる（B56－4）
- ・医療心理学および職場メンタルヘルス学に関する研究の実施計画を立案し、遂行できる（B56－1、D56－1、C6－1）

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：研究構想発表と議論 1
- 第3回：研究構想発表と議論 2
- 第4回：研究構想発表と議論 3
- 第5回：研究構想発表と議論 4
- 第6回：研究構想発表と議論 5
- 第7回：研究構想発表と議論 6
- 第8回：研究構想発表と議論 7
- 第9回：研究構想発表と議論 8
- 第10回：研究構想発表と議論 9
- 第11回：研究構想発表と議論 10
- 第12回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 1
- 第13回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 2
- 第14回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 3
- 第15回：まとめ

教科書 教科書は随時指示する。随時プリントを配布する。

参考文献 参考書は随時指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% 出席状況、分担発表および授業中の積極的な発言により評価する

備考・関連URL 関連URL：<http://www.f.waseda.jp/ssuzuki/>

医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ（２）B（秋学期）

鈴木 伸一

授業概要 うつ病、不安障害、心身症などのさまざまなストレス関連疾患の発症・維持・悪化に関する諸要因の影響性を検討するとともに、ストレス関連疾患の予防・治療・リハビリテーションに向けた認知行動的介入の方法論について研究する。また、研究の焦点としては、身体疾患患者のメンタルケアおよび職場のメンタルヘルスを実践フィールドと位置付け、「うつ・不安のメカニズムに関する基礎研究グループ」、「チーム医療を基盤としたメンタルケアシステムに関する研究グループ」、および「職場のメンタルヘルスをはじめとするストレスマネジメントに関する研究グループ」を構成し、各プロジェクトとリンクした個別の研究テーマを選定し、取り組んでいく。

授業の到達目標

- ・医療心理学および職場メンタルヘルス学に関する最新の研究動向を把握できる（B56－4）
- ・医療心理学および職場メンタルヘルス学に関する研究の実施計画を立案し、遂行できる（B56－1、D56－1、C6－1）

授業計画

- 第1回：研究構想発表と議論 11
- 第2回：研究構想発表と議論 12
- 第3回：研究構想発表と議論 13
- 第4回：研究構想発表と議論 14
- 第5回：研究構想発表と議論 15
- 第6回：研究構想発表と議論 16
- 第7回：研究構想発表と議論 17
- 第8回：研究構想発表と議論 18
- 第9回：研究構想発表と議論 19
- 第10回：研究構想発表と議論 20
- 第11回：研究構想発表と議論 21
- 第12回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 1
- 第13回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 2
- 第14回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流 3
- 第15回：まとめ

教科書 教科書は随時指示する。随時プリントを配布する。

参考文献 参考書は随時指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% 出席状況、分担発表および授業中の積極的な発言により評価する

備考・関連URL 関連URL：<http://www.f.waseda.jp/ssuzuki/>

心身医学ゼミ（１） A（春学期）

野村 忍

授業概要 心身医学に関する最近の研究をとりあげ、ストレスと心身相関、ストレス評価、薬物療法、心理療法、疫学研究など幅広い領域について学習する。また、症例研究をとりあげ、その診断・治療法についてディスカッションする。これらを通して、心身医学的研究計画・治療法を理解することを目的とする。

授業の到達目標

- ・ストレスと心身相関について理解できる。
- ・種々の病態の診断、治療法を理解できる。
- ・心身医学的臨床研究を理解できる。

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
第2回：抄読（１）（心身症の診断）
第3回：抄読（２）（心身症の治療）
第4回：抄読（３）（神経症の診断）
第5回：抄読（４）（神経症の治療）
第6回：抄読（５）（うつ病の診断）
第7回：抄読（６）（うつ病の治療）
第8回：抄読（７）（ストレスの評価）
第9回：抄読（８）（心身相関）
第10回：抄読（９）（精神生理学）
第11回：抄読（10）（薬物療法）
第12回：抄読（11）（心理療法）
第13回：抄読（12）（疫学研究）
第14回：抄読（13）（ヘルスプロモーション）
第15回：レポート課題と解説

教科書 使用しない。適宜レジュメを配布する。

成績評価方法

- レポート 50% レポートの内容、発表について総合的に評価する。
平常点評価 50% 授業内での学習態度、発言の内容を総合的に評価する。

心身医学ゼミ（１） B（秋学期）

野村 忍

授業概要 受講者の研究テーマを中心に、研究目的、研究計画、結果の解釈について発表し、ディスカッションする。また、関連する先行研究の文献を抄読する。

授業の到達目標

- ・研究計画の立案、研究方法の検討ができる。
- ・データの統計解析ができる。
- ・先行研究の問題点を抽出し、課題設定ができる。

授業計画

- 第1回：抄読（１）（最新の国内研究（１））
第2回：抄読（２）（最新の国内研究（２））
第3回：抄読（３）（最新の国内研究（３））
第4回：抄読（４）（最新の国内研究（４））
第5回：抄読（５）（最新の国内研究（５））
第6回：抄読（６）（最新の海外研究（１））
第7回：抄読（７）（最新の海外研究（２））
第8回：抄読（８）（最新の海外研究（３））
第9回：抄読（９）（最新の海外研究（４））
第10回：抄読（10）（最新の海外研究（５））
第11回：修士論文研究計画発表（１）
第12回：修士論文研究計画発表（２）
第13回：修士論文研究計画発表（３）
第14回：修士論文研究計画発表（４）
第15回：レポート課題と解説

成績評価方法

- レポート 50% レポートの内容、発表について総合的に評価する。
平常点評価 50% 授業内での学習態度、発言の内容を総合的に評価する。

心身医学ゼミ（２） A（春学期）

野村 忍

授業概要 修士論文作成に向けて、研究計画の立案、調査用紙の作成、先行研究の調査を行う。

授業の到達目標

- ・研究計画の立案ができる。
- ・調査用紙の作成ができる。
- ・先行研究の調査ができる。

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
- 第2回：修士論文研究計画発表（１）
- 第3回：修士論文研究計画発表（２）
- 第4回：修士論文研究計画発表（３）
- 第5回：修士論文研究計画発表（４）
- 第6回：調査用紙の製作実習（１）
- 第7回：調査用紙の製作実習（２）
- 第8回：調査用紙の製作実習（３）
- 第9回：調査用紙の製作実習（４）
- 第10回：調査用紙の製作実習（５）
- 第11回：研究テーマに関する調査（１）
- 第12回：研究テーマに関する調査（２）
- 第13回：研究テーマに関する調査（３）
- 第14回：研究テーマに関する調査（４）
- 第15回：レポート課題と解説

成績評価方法

- レポート 50% レポートの内容、発表について総合的に評価する。
平常点評価 50% 授業内での学習態度、発言の内容を総合的に評価する。

心身医学ゼミ（２） B（秋学期）

野村 忍

授業概要 データの統計解析実習を行い、結果の評価の仕方を学習する。修士論文の経過を発表して、ディスカッションを行う。また、研究に関連する最新のトピックスを解説し、国際的な研究の動向を学習する。

授業の到達目標

- ・データの統計解析ができる。
- ・結果の評価、考察ができる。
- ・研究発表の仕方を実習する。

授業計画

- 第1回：統計解析実習（１）
- 第2回：統計解析実習（２）
- 第3回：統計解析実習（３）
- 第4回：統計解析実習（４）
- 第5回：修士論文中間発表（１）
- 第6回：修士論文中間発表（２）
- 第7回：修士論文中間発表（３）
- 第8回：修士論文中間発表（４）
- 第9回：最新の研究トピックスについての解説（１）
- 第10回：最新の研究トピックスについての解説（２）
- 第11回：修士論文発表（１）
- 第12回：修士論文発表（２）
- 第13回：修士論文発表（３）
- 第14回：修士論文発表（４）
- 第15回：レポート課題と解説

成績評価方法

- レポート 50% レポートの内容、発表について総合的に評価する。
平常点評価 50% 授業内での学習態度、発言の内容を総合的に評価する。

認知行動カウンセリング学ゼミ（１） A（春学期）

根建 金男

授業概要 認知行動カウンセリングについての理解を深めるために、認知行動療法の比較的新しい次元である、マインドフルネスとアクセプタンスをめぐる動向について学ぶ。このねらいを実現するために、文献を講読し、議論する。なお、1年生は演習（１）A、演習（１）Bのみ登録すること。演習（２）A、演習（２）Bを同時に登録することは認めない。

授業の到達目標

- ・認知行動療法の比較的新しいアプローチの主要なものについて知る（C 5-1、G36-4）。
- ・認知行動療法の比較的新しい主要なアプローチにおける、マインドフルネス／アクセプタンスの位置づけを理解する（C 5-1、G36-4）。

授業計画

- 第1回：春学期受講ガイダンス
 第2回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（１）
 第3回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（２）
 第4回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（３）
 第5回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（４）
 第6回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（５）
 第7回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（６）
 第8回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（７）
 第9回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（８）
 第10回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（９）
 第11回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（10）
 第12回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（11）
 第13回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（12）
 第14回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（13）
 第15回：『マインドフルネス&アクセプタンス』春学期終了分に関する総合討論

教科書 S.C.ヘイズ・V.M.フォレット・M.M.リネハン（編著） 春木 豊・武藤 崇（監修） 伊藤義徳・杉浦義典（監訳） 2005 マインドフルネス&アクセプタンスー認知行動療法の新たな次元ー プレーン出版

成績評価方法

- 平常点評価 50% 授業に対する参加度を評価する。
 その他 50% 出席状況の評価する。

認知行動カウンセリング学ゼミ（１） B（秋学期）

根建 金男

授業概要 認知行動カウンセリングについての理解を深めるために、認知行動療法の比較的新しい次元である、マインドフルネスとアクセプタンスをめぐる動向について学ぶ。このねらいを実現するために、文献を講読し、議論する。なお、1年生は演習（１）A、演習（１）Bのみ登録すること。演習（２）A、演習（２）Bを同時に登録することは認めない。

授業の到達目標

- ・認知行動療法の比較的新しいアプローチの主要なものについて知る（C 5-1、G36-4）。
- ・認知行動療法の比較的新しい主要なアプローチにおける、マインドフルネス／アクセプタンスの位置づけを理解する（C 5-1、G36-4）。

授業計画

- 第1回：秋学期受講ガイダンス
 第2回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（14）
 第3回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（15）
 第4回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（16）
 第5回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（17）
 第6回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（18）
 第7回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（19）
 第8回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（20）
 第9回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（21）
 第10回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（22）
 第11回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（23）
 第12回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（24）
 第13回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（25）
 第14回：『マインドフルネス&アクセプタンス』の輪読（26）
 第15回：『マインドフルネス&アクセプタンス』秋学期終了分に関する総合討論

教科書 S.C.ヘイズ・V.M.フォレット・M.M.リネハン（編著） 春木 豊・武藤 崇（監修） 伊藤義徳・杉浦義典（監訳） 2005 マインドフルネス&アクセプタンスー認知行動療法の新たな次元ー プレーン出版

成績評価方法

- 平常点評価 50% 授業に対する参加度を評価する。
 その他 50% 出席状況の評価する。

認知行動カウンセリング学ゼミ（２） A（春学期）

根建 金男

授業概要 受講者が、各自の研究テーマについての研究計画・研究の進捗状況、関連の研究動向などを発表し、教員を含めて全員で議論する。なお、この講義の登録が認められるのは2年生のみである。

授業の到達目標

・受講者各自の修士論文を作成する（Ad56-1、Ad56-2、Ad56-3、Ad56-4、B56-1、B56-3、B56-4）。

授業計画

- 第1回：春学期受講ガイダンス
第2回：各自の研究の進捗状況の確認（1）
第3回：各自の研究テーマに関する発表と討論（1）
第4回：各自の研究テーマに関する発表と討論（2）
第5回：各自の研究テーマに関する発表と討論（3）
第6回：各自の研究テーマに関する発表と討論（4）
第7回：各自の研究テーマに関する発表と討論（5）
第8回：各自の研究テーマに関する発表と討論（6）
第9回：各自の研究テーマに関する発表と討論（7）
第10回：各自の研究テーマに関する発表と討論（8）
第11回：各自の研究テーマに関する発表と討論（9）
第12回：各自の研究テーマに関する発表と討論（10）
第13回：各自の研究テーマに関する発表と討論（11）
第14回：各自の研究テーマに関する発表と討論（12）
第15回：春学期のまとめ

成績評価方法

- 平常点評価 50% 授業に対する参加度を評価する。
そ の 他 50% 出席状況の評価する。

認知行動カウンセリング学ゼミ（２） B（秋学期）

根建 金男

授業概要 受講者が、各自の研究テーマについての研究計画・研究の進捗状況、関連の研究動向などを発表し、教員を含めて全員で議論する。なお、この講義の登録が認められるのは2年生のみである。

授業の到達目標

・受講者各自の修士論文を作成する（Ad56-1、Ad56-2、Ad56-3、Ad56-4、B56-1、B56-3、B56-4）。

授業計画

- 第1回：秋学期受講ガイダンス
第2回：各自の研究の進捗状況の確認（2）
第3回：各自の研究テーマに関する発表と討論（13）
第4回：各自の研究テーマに関する発表と討論（14）
第5回：各自の研究テーマに関する発表と討論（15）
第6回：各自の研究テーマに関する発表と討論（16）
第7回：各自の研究テーマに関する発表と討論（17）
第8回：各自の研究テーマに関する発表と討論（18）
第9回：各自の研究テーマに関する発表と討論（19）
第10回：各自の研究テーマに関する発表と討論（20）
第11回：各自の研究テーマに関する発表と討論（21）
第12回：各自の研究テーマに関する発表と討論（22）
第13回：各自の研究テーマに関する発表と討論（23）
第14回：各自の研究テーマに関する発表と討論（24）
第15回：秋学期のまとめ

成績評価方法

- 平常点評価 50% 授業に対する参加度を評価する。
そ の 他 50% 出席状況の評価する。

行動医学ゼミ（１） A（春学期）

熊野 宏昭

授業概要 身体医療と精神医療の双方に臨床心理学を適用する専門領域としての行動医学領域の探求を深め、その成果を使いこなせるようにすることに焦点を当てていく。具体的には、臨床行動分析（アクセプタンス&コミットメント・セラピー）、メタ認知理論（注意訓練とメタ認知療法）、応用脳科学に関わる研究などの文献講読と議論を行う。また、症例研究を題材にして、機能的なケースフォーミュレーションとそれに基づく介入の進め方の習得を目指す。さらに、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の理解を深める。

授業の到達目標

・専門分野の文献講読と議論を通して、世界に通用する学識と研究の方法論を身につけることを目標とする。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：文献講読と議論（１） 臨床行動分析初級
- 第3回：文献講読と議論（２） 臨床行動分析中級
- 第4回：文献講読と議論（３） 臨床行動分析準上級
- 第5回：文献講読と議論（４） 臨床行動分析上級
- 第6回：文献講読と議論（５） 臨床行動分析超上級
- 第7回：文献講読と議論（６） 応用脳科学初級
- 第8回：文献講読と議論（７） 応用脳科学中級
- 第9回：文献講読と議論（８） 応用脳科学準上級
- 第10回：文献講読と議論（９） 応用脳科学上級
- 第11回：文献講読と議論（10） 応用脳科学超上
- 第12回：文献講読と議論（11） メタ認知初級
- 第13回：文献講読と議論（12） メタ認知中級
- 第14回：文献講読と議論（13） メタ認知準上級
- 第15回：文献講読と議論（14） メタ認知上級

教科書 ゼミ中に適宜紹介する。

参考文献 ゼミ中に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 50% 発表時のレポートにより評価する。
平常点評価 50% 出席状況、議論への参加状況等により評価する。

備考・関連URL 夏期休業期間と春季休業期間にゼミ合宿を行う。

関連URL：<http://hikumano.umin.ac.jp/>

行動医学ゼミ（１） B（秋学期）

熊野 宏昭

授業概要 身体医療と精神医療の双方に臨床心理学を適用する専門領域としての行動医学領域の探求を深め、その成果を使いこなせるようにすることに焦点を当てていく。具体的には、臨床行動分析（アクセプタンス&コミットメント・セラピー）、メタ認知理論（注意訓練とメタ認知療法）、応用脳科学に関わる研究などの文献講読と議論を行う。また、症例研究を題材にして、機能的なケースフォーミュレーションとそれに基づく介入の進め方の習得を目指す。さらに、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の理解を深める。

授業の到達目標

・専門分野の文献講読と議論を通して、世界に通用する学識と研究の方法論を身につけることを目標とする。

授業計画

- 第1回：文献講読と議論（15） ACT（アクセプタンス&コミットメント・セラピー）初級
- 第2回：文献講読と議論（16） ACT中級
- 第3回：文献講読と議論（17） ACT準上級
- 第4回：文献講読と議論（18） ACT上級
- 第5回：文献講読と議論（19） ACT超上級
- 第6回：学会・研修会への参加とレポート（１） シンポジウム報告
- 第7回：学会・研修会への参加とレポート（２） 口頭発表報告
- 第8回：学会・研修会への参加とレポート（３） ポスター発表報告
- 第9回：学会・研修会への参加とレポート（４） ワークショップ報告
- 第10回：文献講読と議論（20） MCT（メタ認知療法）初級
- 第11回：文献講読と議論（21） MCT中級
- 第12回：文献講読と議論（22） MCT準上級
- 第13回：文献講読と議論（23） MCT上級
- 第14回：文献講読と議論（24） MCT超上級
- 第15回：まとめ

教科書 ゼミ中に適宜紹介する。

参考文献 ゼミ中に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 50% 発表時のレポートにより評価する。
平常点評価 50% 出席状況、議論への参加状況等により評価する。

備考・関連URL 夏期休業期間と春季休業期間にゼミ合宿を行う。

関連URL：<http://hikumano.umin.ac.jp/>

行動医学ゼミ（２） A（春学期）

熊野 宏昭

授業概要 ゼミ（１）を基礎として、各受講者の研究テーマについて、関連する先行研究の理解、問題の設定、研究計画の立案を行い、それを互いに検討しながら討論を行う。具体的には、改善のために生活のセルフコントロールの必要性が大きい精神疾患や生活習慣病などを研究の対象にする。そして、アナログ研究または臨床群を対象にした研究によって、新世代の認知行動療法が臨床的效果を示すメカニズム、マインドフルネスを含む認知トレーニングが前頭葉機能に持つ効果と行動面への介入との相乗効果を明らかにすることを、主要な研究テーマとする。

授業の到達目標 各自の研究構想発表と議論を通して、世界に通用する成果が出せる研究を継続的・発展的に実施できるようになることを目標とする。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：研究構想発表と議論（１） 研究準備初級
- 第3回：研究構想発表と議論（２） 研究準備準中級
- 第4回：研究構想発表と議論（３） 研究準備中級
- 第5回：研究構想発表と議論（４） 研究準備準上級
- 第6回：研究構想発表と議論（５） 研究準備上級
- 第7回：研究構想発表と議論（６） 研究準備超上級
- 第8回：研究構想発表と議論（７） 研究計画初級
- 第9回：研究構想発表と議論（８） 研究計画準中級
- 第10回：研究構想発表と議論（９） 研究計画中級
- 第11回：研究構想発表と議論（10） 研究計画準上級
- 第12回：研究構想発表と議論（11） 研究計画上級
- 第13回：研究構想発表と議論（12） 研究計画超上級
- 第14回：研究構想発表と議論（13） 結果集計初級
- 第15回：研究構想発表と議論（14） 結果集計準中級

教科書 ゼミ中に適宜紹介する。

参考文献 ゼミ中に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 50% 発表時のレポートにより評価する。
平常点評価 50% 出席状況、議論への参加状況等により評価する。

備考・関連URL 夏期休業期間と春季休業期間にゼミ合宿を行う。

関連URL：<http://hikumano.umin.ac.jp/>

専門
臨床
心理
ゼミ

行動医学ゼミ（２） B（秋学期）

熊野 宏昭

授業概要 ゼミ（１）を基礎として、各受講者の研究テーマについて、関連する先行研究の理解、問題の設定、研究計画の立案を行い、それを互いに検討しながら討論を行う。具体的には、改善のために生活のセルフコントロールの必要性が大きい精神疾患や生活習慣病などを研究の対象にする。そして、アナログ研究または臨床群を対象にした研究によって、新世代の認知行動療法が臨床的效果を示すメカニズム、マインドフルネスを含む認知トレーニングが前頭葉機能に持つ効果と行動面への介入との相乗効果を明らかにすることを、主要な研究テーマとする。

授業の到達目標 各自の研究構想発表と議論を通して、世界に通用する成果が出せる研究を継続的・発展的に実施できるようになることを目標とする。

授業計画

- 第1回：研究構想発表と議論（15） 研究集計中級
- 第2回：研究構想発表と議論（16） 研究集計準上級
- 第3回：研究構想発表と議論（17） 研究集計上級
- 第4回：研究構想発表と議論（18） データ解析初級
- 第5回：研究構想発表と議論（19） データ解析準中級
- 第6回：研究構想発表と議論（20） データ解析中級
- 第7回：研究構想発表と議論（21） データ解析準上級
- 第8回：研究構想発表と議論（22） データ解析上級
- 第9回：研究構想発表と議論（23） 考察初級
- 第10回：研究構想発表と議論（24） 考察準中級
- 第11回：研究構想発表と議論（25） 考察中級
- 第12回：研究構想発表と議論（26） 考察準上級
- 第13回：研究構想発表と議論（27） 考察上級
- 第14回：研究構想発表と議論（28） 考察超上級
- 第15回：まとめ

教科書 ゼミ中に適宜紹介する。

参考文献 ゼミ中に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 50% 発表時のレポートにより評価する。
平常点評価 50% 出席状況、議論への参加状況等により評価する。

備考・関連URL 夏期休業期間と春季休業期間にゼミ合宿を行う。

関連URL：<http://hikumano.umin.ac.jp/>

安全人間工学ゼミ（１） A（春学期）

石田 敏郎

授業概要 安全に関係する学問分野は、人間工学、心理学、人間信頼性工学、安全工学などがある。近年、システムの巨大化とともにエラーの内容も複雑になってきており、個々の人間のエラーのみでなく、組織的なエラーに対する対応も求められている。ヒューマンエラーの心理学および人間工学的研究に関する文献を中心に、人間行動モデルの理解、ヒューマンエラーの実験的検討の方法、事故分析の実際、および事故防止対策立案の方法とその評価について学ぶ。

授業の到達目標

- (1) 安全人間工学に関する基礎的な知識の理解。B56-3
- (2) 行動モデル、ヒューマンエラーの実験的検討などを文献研究により理解する。B56-4
- (3) 周辺関連領域のデータを理解できる。C 6-1

授業計画

- 第1回：人間工学と安全に関する講義
- 第2回：人間工学と安全に関する講義
- 第3回：人間工学と安全に関する講義
- 第4回：人間工学と安全に関する講義
- 第5回：人間工学と安全に関する講義
- 第6回：人間工学と安全に関する講義
- 第7回：人間工学と安全に関する講義
- 第8回：人間工学と安全に関する講義
- 第9回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
- 第10回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
- 第11回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
- 第12回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
- 第13回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
- 第14回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
- 第15回：まとめ

参考文献

教場で指示

成績評価方法

平常点評価 100% 教場での発表

安全人間工学ゼミ（１） B（秋学期）

石田 敏郎

授業概要 安全人間工学的対策の対象となる分野は、道路交通、航空をはじめ、各産業現場である。ここでは、実際にどのようなヒューマンエラーが発生し、またいかなる対策が取られているのかを文献研究を中心に検討する。また、各自のテーマに関連した文献の購読を行う。

授業の到達目標

- (1) 各分野の事故・不具合報告を理解できる。Ad56-2
- (2) 不具合報告から、いかなる対策が取られているかを理解できる。Ad56-3
- (3) 対策の有効性を安全人間工学的に評価できる。Ad56-4、B56-3

授業計画

- 第1回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
- 第2回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
- 第3回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
- 第4回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
- 第5回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
- 第6回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
- 第7回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
- 第8回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
- 第9回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
- 第10回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
- 第11回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
- 第12回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
- 第13回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
- 第14回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
- 第15回：まとめ

参考文献

教場で指示

成績評価方法

平常点評価 100% 教場での発表

安全人間工学ゼミ（２） A（春学期）

石田 敏郎

授業概要 ゼミ（１）を基礎とし、各分野の事故統計資料および事故・不具合報告書をもとに、統計的分析と事例分析を行い、ヒューマンエラー防止のための具体的な方策を探る。その際、人間行動からの観点および事故分析的な観点からのアプローチが必要となる。演習（２）では、これらの観点から、如何に事故防止対策を導き出すかについて、実際のデータをもとに検討する。

授業の到達目標

- （１）事故統計資料の解釈が出来る。Ad56－2
- （２）事故事例分析の手法が理解できる。Ad56－3

授業計画

- 第1回：事故統計資料の分析
- 第2回：事故統計資料の分析
- 第3回：事故統計資料の分析
- 第4回：事故統計資料の分析
- 第5回：事故統計資料の分析
- 第6回：事故統計資料の分析
- 第7回：事故統計資料の分析
- 第8回：事故統計資料の分析
- 第9回：事故統計資料の分析
- 第10回：事故統計資料の分析
- 第11回：事故事例分析
- 第12回：事故事例分析
- 第13回：事故事例分析
- 第14回：事故事例分析
- 第15回：まとめ

成績評価方法

平常点評価 100% 教場での発表

安全人間工学ゼミ（２） B（秋学期）

石田 敏郎

授業概要 安全に関する人間行動の理解には、観察、実験、調査といった手法が不可欠であるが、それらの手法について文献調査と過去に当研究室で実施してきた研究を基に検討を加え、修士論文を作成するための基礎的な研究知識の習得を目指す。

授業の到達目標

- （１）安全人間工学的視点から、事故の事例分析が出来る。Ad56－2
- （２）安全人間工学的な手法の高度な理解が出来る。B56－3
- （３）修士論文作成のための背景研究の理解が出来る。B56－4

授業計画

- 第1回：事故事例分析
- 第2回：事故事例分析
- 第3回：事故事例分析
- 第4回：事故事例分析
- 第5回：事故事例分析
- 第6回：事故事例分析
- 第7回：事故事例分析
- 第8回：事故事例分析
- 第9回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
- 第10回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
- 第11回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
- 第12回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
- 第13回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
- 第14回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
- 第15回：まとめ

成績評価方法

平常点評価 100% 教場での発表

生体情報工学ゼミ（１） B（秋学期）

百瀬 桂子

授業概要 ヒトの感覚・知覚処理を脳活動により評価する方法の１つとして、脳波などの生体信号を評価するための技術を、文献輪読を通して学ぶ。生体信号特有の不規則性・非線形性を評価するために、まず不規則信号の統計学的取り扱いを学び、さらに特定の感覚応答信号を対象としてとりあげ、その信号処理技術を理解する。

授業の到達目標

・各自の研究計画を実践するうえで必要な生体信号計測について、その信号の特性と解析方法を理解し、研究遂行上必要な計測と分析が行えるようになる。

Ad56-1、B56-3、C 5-1

授業計画

- 第1回：演習の概要と進め方
- 第2回：研究計画実施状況の報告と討議
- 第3回：研究計画に関する文献講読（１） 代表的な誘発脳波研究事例
- 第4回：生体信号処理実習（１） 視覚誘発脳波の測定準備
- 第5回：生体信号処理実習（２） 視覚誘発脳波の測定
- 第6回：研究計画に関する文献講読（２） 代表的な誘発脳波分析法の理解
- 第7回：研究計画に関する文献講読（３） 先端的な誘発脳波分析法の理解
- 第8回：生体信号処理実習（３） 視覚誘発脳波の分析（従来法）
- 第9回：生体信号処理実習（４） 視覚誘発脳波の分析（先端的な方法）
- 第10回：研究計画に関する文献講読（４） 関心のある脳計測法の理解
- 第11回：研究計画に関する文献講読（５） 関心のある脳工学論文の理解
- 第12回：生体信号処理実習（５） 関心のある誘発電位の測定
- 第13回：生体信号処理実習（６） 関心のある誘発電位の分析
- 第14回：研究計画実施状況の報告
- 第15回：研究計画に関する討議

参考文献 講義時に必要に応じて紹介予定

成績評価方法

平常点評価 100% 文献講読については、以下の点を評価します。
・担当箇所の理解度と発表内容および説明方法、およびそれらへの取り組みの積極性
・担当者の発表内容に基づく議論への積極性と貢献度
実習については、内容の理解度と取り組みの積極性と貢献度を評価します。
各自の研究テーマについては、研究テーマへの理解度と、取り組みの積極性、成果について総合的に評価します。

生体情報工学ゼミ（２） B（秋学期）

百瀬 桂子

授業概要 感覚系の情報処理過程に関して、コンピュータ技術を活用した評価法とその評価情報の応用・活用について、最近の研究論文輪読と討議を通して、具体的な評価対象や方法論に関する研究を学ぶ。これによって、情報通信技術の生体情報の測定への応用の現状と新たな可能性を論考する。

授業の到達目標

- ・関心研究領域の研究論文を読んで適切に理解できるようになる。
- ・関心研究領域の最近の研究状況を理解する。

Ad56-2、B56-1、B56-2、C 5-1

授業計画

- 第1回：演習の概要と進め方
- 第2回：研究計画実施状況の報告と討議
- 第3回：研究計画に関する討議（１） 対象とする生体情報の特性
- 第4回：関心研究領域の文献輪読（１） 視覚研究
- 第5回：関心研究領域の文献輪読（２） 聴覚研究
- 第6回：研究計画に関する討議（２） 計測法の評価
- 第7回：研究計画に関する討議（３） 分析法の評価
- 第8回：関心研究領域の文献輪読（３） 触覚研究
- 第9回：関心研究領域の文献輪読（４） 感覚協調研究
- 第10回：研究成果発表と討議
- 第11回：研究のとりまとめに関する討議（１） 論文の構成
- 第12回：関心研究領域の文献輪読（５） 研究計画に関わる先端的な研究事例
- 第13回：関心研究領域の文献輪読（６） 研究計画に関わる総説
- 第14回：研究のとりまとめに関する討議（２） 論文構成の確認と評価
- 第15回：研究論文とりまとめ

参考文献 講義時に必要に応じて紹介予定

成績評価方法

平常点評価 100% 文献輪読については、以下の点を評価します。
・担当箇所の理解度と発表内容および説明方法、およびそれらへの取り組みの積極性
・担当者の発表内容に基づく議論への積極性と貢献度
各自の研究テーマについては、研究テーマへの理解度と、取り組みの積極性、成果について総合的に評価します。

感性認知科学ゼミ（１） A（春学期）

齋藤 美穂

授業概要 感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究方法も多岐にわたるが、本演習では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当てて、特に色彩やデザインの認知、対人認知、感覚協調などを中心とした多感覚研究のテーマにより嗜好との関わり含めて検討する。また心理的のみならず生理的なアプローチにより感性研究に対する指導を行うことにより、この研究領域のみならず人間科学への理解を深めて行く。具体的には1) 色彩やデザインに関する嗜好と認知、2) 色彩やデザインが及ぼす心理的效果や生理的效果、3) 香りと色、音と色などの感覚協調や多感覚研究、4) 表情や化粧などの対人認知、5) これらに関連した文化的差異などの研究テーマを主とし、各人の研究テーマに対して文献講読とディスカッションを中心に演習をすすめる。演習では研究領域に関連した機器のレクチャーやデータ処理・分析方法のレクチャーも行う。

授業の到達目標

これらの課題を通して各人が人間科学研究への学際的なアプローチに対する理解をも深めて行くことを期待する。適宜、文献講読や実習などに対するレポート提出が求められる。さらに、ディスカッションにより、各人が研究テーマを設定し、計画を立て、実施可能なレベルにまで具現化していくことを目標とする。

授業計画

- 第1回：感性認知科学演習のオリエンテーション
- 第2回：感性認知科学に関する研究の紹介
- 第3回：ゼミにおける論文や研究テーマの紹介
- 第4回：質疑応答と講評
- 第5回：博士課程を含む学生による昨年度の研究発表（修士2年以外）
- 第6回：質疑応答、ディスカッションと講評
- 第7回：学会発表予行
- 第8回：質疑応答、ディスカッションと講評
- 第9回：色彩計測機器レクチャー（色彩色差計・光源）解説
- 第10回：色彩計測機器の実習
- 第11回：機器レクチャー＜1＞（感性研究における視知覚機器の解説）
- 第12回：機器レクチャー＜1＞（感性研究における視知覚機器の実習）
- 第13回：機器レクチャー＜2＞（感性研究における表情研究機器の解説）
- 第14回：機器レクチャー＜2＞（感性研究における表情研究機器の実習）
- 第15回：機器レクチャー＜3＞（感性研究における生理測定機器の解説）

成績評価方法

レポート	20%	課題への取り組みと完成度
平常点評価	70%	授業への参加状況、積極的に議論に参加し、活発に発言しているかどうか
その他	10%	学会への参加状況や自主性

感性認知科学ゼミ（１） B（秋学期）

齋藤 美穂

授業概要 感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究方法も多岐にわたるが、本演習では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当てて、特に色彩やデザインの認知、対人認知、感覚協調や多感覚研究などを中心としたテーマにより嗜好との関わり含めて検討する。また心理的のみならず生理的なアプローチにより感性研究に対する指導を行うことにより、この研究領域のみならず人間科学への理解を深めて行く。具体的には1) 色彩やデザインに関する嗜好と認知、2) 色彩やデザインが及ぼす心理的效果や生理的效果、3) 香りと色、音と色などの感覚協調や多感覚研究、4) 表情や化粧などの対人認知、5) これらに関連した文化的差異などの研究テーマを主とし、各人の研究テーマに対して文献講読とディスカッションを中心に演習をすすめる。演習では研究領域に関連した機器のレクチャーやデータ処理・分析方法のレクチャーも行う。

授業の到達目標

ディスカッションにより、各人が研究テーマを設定し、計画を立て、実験や分析を行い、科学的な論文を作成するまでの課題を習得していく。さらにこれらの課題を通して各人が人間科学研究への学際的なアプローチに対する理解をも深めて行くことを期待する。

授業計画

- 第1回：機器レクチャー＜3＞（感性研究における生理測定機器の実習）
- 第2回：研究計画および関連論文の検索（計画の検討）
- 第3回：研究計画および関連論文の検索（関連論文検索）
- 第4回：研究計画および関連論文の発表（検索結果発表）
- 第5回：研究計画および関連論文の発表（ディスカッション）
- 第6回：個別研究指導（研究計画の問題点の抽出）
- 第7回：個別研究指導（研究計画の吟味）
- 第8回：研究計画の吟味と検討（研究史との関連性の検討）
- 第9回：研究計画の吟味と検討（ディスカッション）
- 第10回：研究計画の実験・調査に関する指導（実験・調査計画の報告）
- 第11回：研究計画の実験・調査に関する指導（ディスカッション）
- 第12回：個別研究指導（分析方法の報告）
- 第13回：個別研究指導（分析方法の吟味）
- 第14回：研究進捗報告と発表
- 第15回：質疑応答、ディスカッションおよび講評

成績評価方法

平常点評価	80%	授業への参加状況、積極的に議論に参加し、活発に発言しているかどうか
その他	20%	各人の研究に対する自主性、課題への取り組み

感性認知科学ゼミ（２） A（春学期）

齋藤 美穂

授業概要 この演習では感性認知科学ゼミ（１）での学習を踏まえ、各人の研究テーマに対する研究計画、展望、分析に関してディスカッションし、具体的事例の検討を行う。各人は感性認知科学ゼミ（１）で行った実習、データ処理や分析方法を実際の研究テーマに活用し、本演習の終了時に論文を完成させ提出することが求められる。さらに学会発表や学術論文作成の指導を行い、修士論文に向かって助言と指導を進めて行く。

授業の到達目標

感性認知科学ゼミ（１）で行った実習、データ処理や分析方法を実際の研究テーマに活用し、本演習の終了時に論文を完成させ提出することを到達目標とする。さらに結果を、学会発表（日本色彩学会、日本心理学会、日本感性工学会など）することを目標とする。また学術論文の作成を開始することも望まれる。

授業計画

第1回：研究進捗報告
第2回：質疑応答、ディスカッションおよび講評
第3回：研究計画と論文作成計画
第4回：質疑応答、ディスカッションおよび講評
第5回：論文作成レクチャー（データ処理の解説）
第6回：論文作成レクチャー（データ処理の実習）
第7回：論文作成レクチャー（分析＜１＞：SPSSの解説）
第8回：論文作成レクチャー（分析＜１＞：SPSSの実習）
第9回：論文作成レクチャー（分析＜２＞：各種検定等の解説）
第10回：論文作成レクチャー（分析＜２＞：各種検定等の実習）
第11回：論文作成レクチャー（分析＜３＞：多変量解析等の解説）
第12回：論文作成レクチャー（分析＜３＞：多変量解析等の実習）
第13回：論文作成計画の発表
第14回：質疑応答、ディスカッションおよび講評
第15回：論文作成計画の確認

成績評価方法

平常点評価 80% 授業への参加状況、積極的参加、発言がなされているか
その他 20% 自主性、学会への参加状況

感性認知科学ゼミ（２） B（秋学期）

齋藤 美穂

授業概要 この演習では感性認知科学演習（１）での学習を踏まえ、各人の研究テーマに対する研究計画、展望、分析に関してディスカッションし、具体的事例の検討を行う。各人は感性認知科学ゼミ（１）で行った実習、データ処理や分析方法を実際の研究テーマに活用し、本演習の終了時に論文を完成させ提出することが求められる。さらに学会発表や学術論文作成の指導を行い、修士論文に向かって助言と指導を進めて行く。

授業の到達目標

感性認知科学ゼミ（１）で行った実習、データ処理や分析方法を実際の研究テーマに活用し、本演習の終了時に論文を完成させ提出することを到達目標とする。さらに結果を、学会発表（日本色彩学会、日本心理学会、日本感性工学会など）することを目標とする。また学術論文の作成を開始することも望まれる。

授業計画

第1回：質疑応答、ディスカッションおよび講評
第2回：個別論文指導（研究計画の最終報告）
第3回：個別論文指導（研究計画の最終チェック）
第4回：論文作成進捗状況の発表
第5回：質疑応答、ディスカッションおよび講評
第6回：論文進捗状況の報告
第7回：論文進捗状況の検討
第8回：個別論文指導（論文骨子の報告）
第9回：個別論文指導（論文の書き方の指導）
第10回：個別論文指導（分析内容の報告）
第11回：個別論文指導（分析内容の確認）
第12回：個別論文指導（投稿論文のアウトラインの報告）
第13回：個別論文指導（論文投稿の助言と指導）
第14回：修士・博士合同による修論論文口頭試問予行
第15回：質疑応答、講評

成績評価方法

平常点評価 60% 授業への参加状況、積極的参加、発言がなされているか
その他 40% 自主性、学会への参加状況、論文の完成度

言語情報科学ゼミ（１） A（春学期）

菊池 英明

授業概要 音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデル構築およびその応用を目的として、音声言語メディアの特性について調査・分析を行う。具体的には、音声対話インタフェース、感情・態度の理解表出モデル、知的検索エンジンなどへの応用を想定して、音声言語メディアの特性について関連分野の知見を文献により調査したり、音声言語データを収集・解析して、その特性を明らかにする。定期的に進捗状況報告、輪講、発表などを行う。

授業の到達目標

・各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかる。(B56-3、B56-4、C 5-1)
・自身の研究計画の立案および研究の遂行と、進捗状況の報告、成果発表を滞りなく進めることを目標とする。(Ac 5-1)

授業計画

第1回：研究計画の発表
第2回：進捗状況報告（1）先行研究調査など
第3回：進捗状況報告（2）先行研究調査の充実など
第4回：進捗状況報告（3）先行研究調査の整理など
第5回：進捗状況報告（4）研究計画立案など
第6回：進捗状況報告（5）研究計画立案の充実など
第7回：進捗状況報告（6）研究計画立案の整理など
第8回：進捗状況報告（7）研究遂行など
第9回：進捗状況報告（8）研究遂行の継続など（ホップ）
第10回：進捗状況報告（9）研究遂行の継続など（ステップ）
第11回：進捗状況報告（10）研究遂行の継続など（ジャンプ）
第12回：進捗状況報告（11）研究成果の整理など
第13回：進捗状況報告（12）研究成果の考察など
第14回：進捗状況報告（13）研究成果のまとめなど
第15回：中間発表

成績評価方法

平常点評価 100% 各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかたかを評価する。
自身の研究計画の立案および研究の遂行と、進捗状況の報告、成果発表を滞りなく進められたかを評価する。

言語情報科学ゼミ（１） B（秋学期）

菊池 英明

授業概要 音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデル構築およびその応用を目的として、音声言語メディアの特性について調査・分析を行う。具体的には、音声対話インタフェース、感情・態度の理解表出モデル、知的検索エンジンなどへの応用を想定して、音声言語メディアの特性について関連分野の知見を文献により調査したり、音声言語データを収集・解析して、その特性を明らかにする。定期的に進捗状況報告、輪講、発表などを行う。

授業の到達目標

・各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかる。(B56-3、B56-4、C 5-1)
・自身の研究計画の立案および研究の遂行と、進捗状況の報告、成果発表を滞りなく進めることを目標とする。(Ac 5-1)

授業計画

第1回：研究計画の発表
第2回：進捗状況報告（14）先行研究調査など
第3回：進捗状況報告（15）先行研究調査の充実など
第4回：進捗状況報告（16）先行研究調査の整理など
第5回：進捗状況報告（17）研究計画立案など
第6回：進捗状況報告（18）研究計画立案の充実など
第7回：進捗状況報告（19）研究計画立案の整理など
第8回：進捗状況報告（20）研究遂行など
第9回：進捗状況報告（21）研究遂行の継続など（ホップ）
第10回：進捗状況報告（22）研究遂行の継続など（ステップ）
第11回：進捗状況報告（23）研究遂行の継続など（ジャンプ）
第12回：進捗状況報告（24）研究成果の整理など
第13回：進捗状況報告（25）研究成果の考察など
第14回：進捗状況報告（26）研究成果のまとめなど
第15回：発表

成績評価方法

平常点評価 100% 各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかたかを評価する。
自身の研究計画の立案および研究の遂行と、進捗状況の報告、成果発表を滞りなく進められたかを評価する。

言語情報科学ゼミ（２） A（春学期）

菊池 英明

授業概要 音声言語メディアの特性を踏まえたうえで、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築し、音声対話インタフェース、感情理解ロボット、知的検索エンジンなどの実現を試みる。ソフトウェア・システム開発やデータベース構築などの一連の技術サイクルを通して、進捗状況報告、成果発表、デモンストレーション発表などを行なう。

授業の到達目標

・各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかる。(B56-3、B56-4、C 5-1)
・自身の研究計画の立案および研究の遂行と、進捗状況の報告、成果発表を滞りなく進めることを目標とする。(Ac 5-1)

授業計画

- 第1回：研究計画の発表
- 第2回：進捗状況報告（１）先行研究調査など
- 第3回：進捗状況報告（２）先行研究調査の充実など
- 第4回：進捗状況報告（３）先行研究調査の整理など
- 第5回：進捗状況報告（４）研究計画立案など
- 第6回：進捗状況報告（５）研究計画立案の充実など
- 第7回：進捗状況報告（６）研究計画立案の整理など
- 第8回：進捗状況報告（７）研究遂行など
- 第9回：進捗状況報告（８）研究遂行の継続など（ホップ）
- 第10回：進捗状況報告（９）研究遂行の継続など（ステップ）
- 第11回：進捗状況報告（10）研究遂行の継続など（ジャンプ）
- 第12回：進捗状況報告（11）研究成果の整理など
- 第13回：進捗状況報告（12）研究成果の考察など
- 第14回：進捗状況報告（13）研究成果のまとめなど
- 第15回：中間発表

成績評価方法

平常点評価 100% 各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかれたかを評価する。
自身の研究計画の立案および研究の遂行と、進捗状況の報告、成果発表を滞りなく進められたかを評価する。

言語情報科学ゼミ（２） B（秋学期）

菊池 英明

授業概要 音声言語メディアの特性を踏まえたうえで、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築し、音声対話インタフェース、感情理解ロボット、知的検索エンジンなどの実現を試みる。ソフトウェア・システム開発やデータベース構築などの一連の技術サイクルを通して、進捗状況報告、成果発表、デモンストレーション発表などを行なう。

授業の到達目標

・各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかる。(B56-3、B56-4、C 5-1)
・自身の研究計画の立案および研究の遂行と、進捗状況の報告、成果発表を滞りなく進めることを目標とする。(Ac 5-1)

授業計画

- 第1回：研究計画の発表
- 第2回：進捗状況報告（１）先行研究調査など
- 第3回：進捗状況報告（２）先行研究調査の充実など
- 第4回：進捗状況報告（３）先行研究調査の整理など
- 第5回：進捗状況報告（４）研究計画立案など
- 第6回：進捗状況報告（５）研究計画立案の充実など
- 第7回：進捗状況報告（６）研究計画立案の整理など
- 第8回：進捗状況報告（７）研究遂行など
- 第9回：進捗状況報告（８）研究遂行の継続など（ホップ）
- 第10回：進捗状況報告（９）研究遂行の継続など（ステップ）
- 第11回：進捗状況報告（10）研究遂行の継続など（ジャンプ）
- 第12回：進捗状況報告（11）研究成果の整理など
- 第13回：進捗状況報告（12）研究成果の考察など
- 第14回：進捗状況報告（13）研究成果のまとめなど
- 第15回：中間発表

成績評価方法

平常点評価 100% 各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識を習得しながら、各自が設定した問題の解決をはかれたかを評価する。
自身の研究計画の立案および研究の遂行と、進捗状況の報告、成果発表を滞りなく進められたかを評価する。

社会的実践認知科学ゼミ（１） A（春学期）

宮崎 清孝

授業概要 認知に対する「文化歴史的アプローチ」の立場から、協働的な認知過程についての基本的な諸理論とその研究方法論について、関連する著作、論文を読みながら学ぶ。

授業の到達目標

- (1) 認知に対する「文化歴史的アプローチ」から、適切に研究課題を設定できる。B56-2、B56-4
(2) 認知に対する「文化歴史的アプローチ」の研究研究方法論を用いて研究論文を書くことができる。B56-1、B56-3

授業計画

- 第1回：イントロダクション ゼミの流れの紹介
第2回：講義：認知に対する「文化歴史的アプローチ」について－ヴィゴツキーとその流れ
第3回：講義：認知に対する「文化歴史的アプローチ」について－協働的な認知
第4回：論文講読
第5回：論文講読
第6回：論文講読
第7回：論文講読
第8回：論文講読
第9回：論文講読
第10回：論文講読
第11回：論文講読
第12回：論文講読
第13回：論文講読
第14回：論文講読
第15回：論文講読

教科書 特になし

参考文献 授業中に指示する

成績評価方法

平常点評価 100% ゼミで示す論文読解力、問題発見力を評価する。

社会的実践認知科学ゼミ（１） B（秋学期）

宮崎 清孝

授業概要 認知に対する「文化歴史的アプローチ」の立場から、協働的な認知過程の中でも特に教授学習過程についてその研究方法論を中心に、関連する著作、論文を読みながら学ぶ。

授業の到達目標

- (1) 認知に対する「文化歴史的アプローチ」から教授学習過程領域についての諸理論の基本的な特徴を説明できる。B56-2、B56-4
(2) 認知についての「文化歴史的アプローチ」から教授学習過程領域についての研究方法の設定が可能になる。B56-1、B56-3

授業計画

- 第1回：講義：教授学習過程について
第2回：論文講読
第3回：論文講読
第4回：論文講読
第5回：論文講読
第6回：論文講読
第7回：論文講読
第8回：論文講読
第9回：論文講読
第10回：論文講読
第11回：論文講読
第12回：論文講読
第13回：論文講読
第14回：論文講読
第15回：論文講読

教科書 特になし

参考文献 授業中に指示する

成績評価方法

平常点評価 100% ゼミで示す論文読解力、問題発見力を評価する。

社会的実践認知科学ゼミ（２） A（春学期）

宮崎 清孝

授業概要 認知に対する「文化歴史的アプローチ」の立場から、協働的な認知過程に関する最近のトピックについて、関連する著作、論文を読みながら学ぶ。

授業の到達目標

- (1) 認知に対する「文化歴史的アプローチ」についての諸理論の基本的な特徴を説明できる。B56-2、B56-4
(2) 認知についての「文化歴史的アプローチ」の基本的な方法論を説明できる。B56-1、B56-3

授業計画

- 第1回：講義：協働的な認知過程に関する最近のトピックについて
第2回：論文講読
第3回：論文講読
第4回：論文講読
第5回：論文講読
第6回：論文講読
第7回：論文講読
第8回：論文講読
第9回：論文講読
第10回：論文講読
第11回：論文講読
第12回：論文講読
第13回：論文講読
第14回：論文講読
第15回：論文講読

成績評価方法

平常点評価 100% ゼミで示す論文読解力、問題発見力を評価する。

社会的実践認知科学ゼミ（２） B（秋学期）

宮崎 清孝

授業概要 認知に対する「文化歴史的アプローチ」の立場から、協働的な認知過程の中でも特にゼミ参加者の研究課題について関係する理論とその研究方法論を中心に、関連する著作、論文を読みながら学ぶ。

授業の到達目標

- (1) 認知に対する「文化歴史的アプローチ」から自分の研究課題についての諸理論の基本的な特徴を説明できる。B56-2、B56-4
(2) 認知についての「文化歴史的アプローチ」から自分の研究課題についての研究方法の設定が可能になる。B56-1、B56-3

授業計画

- 第1回：討議：ゼミ参加者の研究課題と「文化歴史的アプローチ」の関係について
第2回：論文講読
第3回：論文講読
第4回：論文講読
第5回：論文講読
第6回：論文講読
第7回：論文講読
第8回：論文講読
第9回：論文講読
第10回：論文講読
第11回：論文講読
第12回：論文講読
第13回：論文講読
第14回：論文講読
第15回：論文講読

教科書 特になし

参考文献 授業中に指示する

成績評価方法

平常点評価 100% ゼミで示す論文読解力、問題発見力を評価する。

情報処理心理学ゼミ（１）A（春学期）

中島 義明

授業概要 参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「理論的問題」を取り上げ、これらの諸問題につき、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。

授業の到達目標

- ・専門誌の英語論文をレビューできるように読解することができる。（Aa 6－3）
- ・理論を扱う先行研究を取り上げ、そこに見られる理論的展開の問題点を指摘し、その解決案の提示ができる。（B56－4）

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
- 第2回：各自の研究テーマの発表（１）グループA
- 第3回：各自の研究テーマの発表（２）グループB
- 第4回：各自の研究テーマの発表（３）グループC
- 第5回：各自の研究テーマと「情報処理心理学の理論」との関係について討論（１）グループA
- 第6回：各自の研究テーマと「情報処理心理学の理論」との関係について討論（２）グループB
- 第7回：各自の研究テーマと「情報処理心理学の理論」との関係について討論（３）グループC
- 第8回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文）（１）グループA
- 第9回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文）（２）グループB
- 第10回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文）（３）グループC
- 第11回：上記輪読内容に関する討論（１）グループA
- 第12回：上記輪読内容に関する討論（２）グループB
- 第13回：上記輪読内容に関する討論（３）グループC
- 第14回：「情報処理心理学の効用と限界」について全員で討論
- 第15回：総括

成績評価方法

その他 100% 出席状況・発表・レポートを総合して評価する。

備考・関連URL

上記授業計画は必要に応じた変更があり得る。

情報処理心理学ゼミ（１）B（秋学期）

中島 義明

授業概要 参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「理論的問題」を取り上げ、これら諸問題の「方法論」について、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。

授業の到達目標

- ・専門誌の英語論文をレビューできるように読解することができる。（Aa 6－3）
- ・理論を扱う先行研究を取り上げ、そこに見られる方法論的問題点を指摘し、その解決案の提示ができる。（B56－4）

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
- 第2回：各自の修士論文の研究計画（特に方法論）に関する発表（１）グループA
- 第3回：各自の修士論文の研究計画（特に方法論）に関する発表（２）グループB
- 第4回：各自の修士論文の研究計画（特に方法論）に関する発表（３）グループC
- 第5回：上記発表について討論（１）グループA
- 第6回：上記発表について討論（２）グループB
- 第7回：上記発表について討論（３）グループC
- 第8回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文：方法論的観点より選択）（１）グループA
- 第9回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文：方法論的観点より選択）（２）グループB
- 第10回：輪読（情報処理心理学の理論的研究論文：方法論的観点より選択）（３）グループC
- 第11回：上記輪読内容に関する討論（１）グループA
- 第12回：上記輪読内容に関する討論（２）グループB
- 第13回：上記輪読内容に関する討論（３）グループC
- 第14回：「情報処理心理学の方法論」について全員で討論
- 第15回：総括

成績評価方法

その他 100% 出席状況・発表・レポートを総合して評価する。

備考・関連URL

上記授業計画は必要に応じた変更があり得る。

情報処理心理学ゼミ（２）A（春学期）

中島 義明

授業概要 参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「実際の問題」を取り上げ、これら諸問題の理論的側面につき、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。

授業の到達目標

- ・専門誌の英語論文をレビューできるように読解することができる。（Aa 6－3）
- ・実際の問題を扱う先行研究を取り上げ、その成果の効用と限界を指摘し、この先の研究案の提示ができる。（B56－4）

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
第2回：各自が関心を有する「実際の問題」についての発表（１）グループA
第3回：各自が関心を有する「実際の問題」についての発表（２）グループB
第4回：各自が関心を有する「実際の問題」についての発表（３）グループC
第5回：各自が関心を有する「実際の問題」と「情報処理心理学の理論」との関連について討論（１）グループA
第6回：各自が関心を有する「実際の問題」と「情報処理心理学の理論」との関連について討論（２）グループB
第7回：各自が関心を有する「実際の問題」と「情報処理心理学の理論」との関連について討論（３）グループC
第8回：輪読（「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」）（１）グループA
第9回：輪読（「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」）（２）グループB
第10回：輪読（「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」）（３）グループC
第11回：上記輪読内容に関する討論（１）グループA
第12回：上記輪読内容に関する討論（２）グループB
第13回：上記輪読内容に関する討論（３）グループC
第14回：「情報処理心理学」の今後の応用について全員で討論
第15回：総括

成績評価方法

その他 100% 出席状況・発表・レポートを総合して評価する。

備考・関連URL 上記授業計画は必要に応じた変更があり得る。

情報処理心理学ゼミ（２）B（秋学期）

中島 義明

授業概要 参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「実際の問題」を取り上げ、これら諸問題で用いられる方法論について、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。

授業の到達目標

- ・専門誌の英語論文をレビューできるように読解することができる。（Aa 6－3）
- ・実際の問題を扱う先行研究を取り上げ、そこに見られる方法論の問題点を指摘し、その解決案の提示ができる。（B56－4）

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方
第2回：各自の修士論文のテーマに即した「実際の問題」について発表（１）グループA
第3回：各自の修士論文のテーマに即した「実際の問題」について発表（２）グループB
第4回：各自の修士論文のテーマに即した「実際の問題」について発表（３）グループC
第5回：上記発表について討論（１）グループA
第6回：上記発表について討論（２）グループB
第7回：上記発表について討論（３）グループC
第8回：輪読（情報処理心理学の応用的研究論文：方法論的観点より選択）（１）グループA
第9回：輪読（情報処理心理学の応用的研究論文：方法論的観点より選択）（２）グループB
第10回：輪読（情報処理心理学の応用的研究論文：方法論的観点より選択）（３）グループC
第11回：上記輪読内容に関する討論（１）グループA
第12回：上記輪読内容に関する討論（２）グループB
第13回：上記輪読内容に関する討論（３）グループC
第14回：「情報処理心理学の応用的研究における方法論」について全員で討論
第15回：総括

成績評価方法

その他 100% 出席状況・発表・レポートを総合して評価する。

備考・関連URL 上記授業計画は必要に応じた変更があり得る。

心理行動学ゼミ（１）A（春学期）

鈴木 晶夫

授業概要 実験計画は、調査・実験の研究の基本であると考えられるので、整理する。さらにこの演習では、ノンバーバル行動、コミュニケーション、感情、健康、からだ、行動をキーワードとして、身体と精神の相互作用を中心に考える。これらに関連する先行研究の文献を取り上げ講読する。人間科学という視点から心理行動学を幅広く追究する。

授業の到達目標

- ・専門的基礎知識の説明ができる。
- ・研究方法の理解と適用ができる。
- ・批判的・創造的な論理思考を形成する。
- ・心理行動学の実際応用と理解ができる。

授業計画

- 第1回：演習全体の進め方
- 第2回：哲学と心理学
- 第3回：心理学の背景
- 第4回：心理学の歴史
- 第5回：科学としての心理学
- 第6回：科学的方法 観察
- 第7回：科学的方法 相関的研究
- 第8回：科学的方法 実験
- 第9回：科学的推論
- 第10回：測定尺度
- 第11回：測定と統計
- 第12回：記述統計、推測統計の復習
- 第13回：仮説を考える
- 第14回：方法論
- 第15回：実験計画入門のまとめ

教科書 特になし

参考文献 適宜指示

成績評価方法

- レポート 20% 課題に対する適切性、専門知識の理解度
平常点評価 80% 専門知識の理解・応用度（プレゼンテーションを含む）

心理行動学ゼミ（１）B（秋学期）

鈴木 晶夫

授業概要 実験計画は、調査・実験の研究の基本であると考えられるので、整理する。さらにこの演習では、ノンバーバル行動、コミュニケーション、感情、健康、からだ、行動をキーワードとして、身体と精神の相互作用を中心に考える。これらに関連する先行研究の文献を取り上げ講読する。人間科学という視点から心理行動学を幅広く追究する。

授業の到達目標

- ・専門的基礎知識の説明ができる。
- ・研究方法の理解と適用ができる。
- ・批判的・創造的な論理思考を形成する。
- ・心理行動学の実際応用と理解ができる。

授業計画

- 第1回：前半のまとめと後半全体の進め方
- 第2回：文献講読（コミュニケーション概説）
- 第3回：文献講読（コミュニケーション研究の方法論）
- 第4回：文献講読（言語と非言語の関連研究）
- 第5回：文献講読（ノンバーバル行動概説）
- 第6回：文献講読（ノンバーバル行動研究の方法論）
- 第7回：文献講読（感情関連研究概説）
- 第8回：文献講読（感情研究の方法論）
- 第9回：文献講読（健康関連研究概説）
- 第10回：文献講読（健康研究の方法論）
- 第11回：文献講読（身体と精神の相互作用）
- 第12回：修士論文研究計画 先行研究まとめ
- 第13回：修士論文研究計画 方法論の検討
- 第14回：修士論文研究計画 結果・分析方法
- 第15回：修士論文研究計画 全体的方向性討議

教科書 特になし

参考文献 適宜指示

成績評価方法

- レポート 20% 課題に対する適切性、専門知識の理解度
平常点評価 80% 専門知識の理解・応用度（プレゼンテーションを含む）

心理行動学ゼミ（２）A（春学期）

鈴木 晶夫

授業概要 各受講者が各自の研究テーマを中心に、その研究の背景、問題、研究目的、研究計画、結果等について個人発表し、相互に討論する。

授業の到達目標

- ・ 専門的基礎知識の説明ができる。
- ・ 研究方法の理解と適用ができる。
- ・ 批判的・創造的な論理思考を形成する。
- ・ 心理行動学の実際応用と理解ができる。

授業計画

- 第1回：演習全体の進め方
- 第2回：修士論文の研究背景（研究史を中心に）
- 第3回：修士論文の方法論（説明）
- 第4回：修士論文の方法論（討議）
- 第5回：修士論文のデータ収集方法（説明）
- 第6回：修士論文のデータ収集方法（討議）
- 第7回：修士論文のデータ解析 基礎
- 第8回：修士論文のデータ解析 応用
- 第9回：修士論文のデータ解析 実践
- 第10回：修士論文の途中経過発表
- 第11回：研究目的についての討議
- 第12回：研究計画（概要）の発表
- 第13回：研究計画（方法論）の発表
- 第14回：研究計画（データ解析）の発表
- 第15回：研究計画（結果）の発表

教科書 特になし

参考文献 適宜指示

成績評価方法

- レポート 20% 課題に対する適切性、専門知識の理解度
平常点評価 80% 専門知識の理解・応用度（プレゼンテーションを含む）

心理行動学ゼミ（２）B（秋学期）

鈴木 晶夫

授業概要 各受講者が各自の研究テーマを中心に、その研究の背景、問題、研究目的、研究計画、結果等について個人発表し、相互に討論する。

授業の到達目標

- ・ 研究方法の理解と適用ができる。
- ・ 批判的・創造的な論理思考を形成する。
- ・ 心理行動学の実際応用と理解ができる。
- ・ 心理行動学に関わる価値観を形成する。

授業計画

- 第1回：秋学期演習全体の進め方
- 第2回：修士論文の研究史再考
- 第3回：修士論文の方法論再考
- 第4回：修士論文の方法論再考について討議
- 第5回：修士論文のデータ収集方法再考
- 第6回：修士論文のデータ収集方法再考について討議
- 第7回：修士論文のデータ解析基礎編再考
- 第8回：修士論文のデータ解析応用編再考
- 第9回：修士論文のデータ解析全体のまとめ
- 第10回：修士論文の第一段階経過発表
- 第11回：修士論文の第一段階経過発表についての討議
- 第12回：研究計画概要確認
- 第13回：修士論文（方法論・データ解析・結果）の確認
- 第14回：修士論文（考察）の確認
- 第15回：修士論文の第二段階経過発表・討議

教科書 特になし

参考文献 適宜指示

成績評価方法

- レポート 20% 課題に対する適切性、専門知識の理解度
平常点評価 80% 専門知識の理解・応用度（プレゼンテーションを含む）

生態心理学ゼミ（１） A（春学期）

三嶋 博之

授業概要 実験論文を読み、討議することを通じて、ギブソン生態心理学の基本的アイデアについて学習するとともに、実証的な研究を自ら発想し遂行するための基礎技術（論文投稿の方法や、実験機材の使用法等）について学習する。実際に研究を遂行していくために必要な種々の実践的知識を吸収するため、グループでの追試研究を行う。

授業の到達目標

生態心理学における実験研究を遂行するための基礎的な能力を身につける（B56－1、B56－2）。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション／授業の概要と進め方について概説する。
- 第2回：輪読／ダイナミックタッチの理論：大きさの知覚
- 第3回：輪読／ダイナミックタッチの理論：向きの知覚
- 第4回：輪読／ダイナミックタッチの理論：慣性モーメント・慣性テンソル・慣性楕円体
- 第5回：輪読／ダイナミックタッチの理論：大きさ－重量錯覚
- 第6回：輪読／ダイナミックタッチの理論：総合的議論
- 第7回：輪読／ダイナミックタッチ実験論文（英文）：序論のパートを読み、議論する。
- 第8回：輪読／ダイナミックタッチ実験論文（英文）：方法のパートを読み、議論する。
- 第9回：輪読／ダイナミックタッチ実験論文（英文）：実験のパートを読み、議論する。
- 第10回：輪読／ダイナミックタッチ実験論文（英文）：考察のパートを読み、議論する。
- 第11回：実験／ダイナミックタッチ実験の追試：機材の検討
- 第12回：実験／ダイナミックタッチ実験の追試：実験の実施
- 第13回：ダ実験／ダイナミックタッチ実験の追試：分析
- 第14回：実験データの検討会（前半）：結果のまとめ
- 第15回：実験データの検討会（後半）：課題の検討

成績評価方法

平常点評価 100% 各個人に割り当てられたテーマに関する発表内容、議論およびグループワークにおける貢献度について評価します。

備考・関連URL 修士課程1年生を対象とする。

生態心理学ゼミ（１） B（秋学期）

三嶋 博之

授業概要 実験論文を読み、討議することを通じて、ギブソン生態心理学の基本的アイデアについて学習するとともに、実証的な研究を自ら発想し遂行するための基礎技術（論文投稿の方法や、実験機材の使用法等）について学習する。実際に研究を遂行していくために必要な種々の実践的知識を吸収するため、グループでの追試研究を行う。

授業の到達目標

生態心理学における実験研究を遂行するための基礎的な能力を身につける（B56－1、B56－2）。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション／授業の概要と進め方について概説する。
- 第2回：時系列データの解析：線形的な手法
- 第3回：時系列データの解析：非線形的な手法の導入
- 第4回：時系列データの解析：RQAの基礎と指標群
- 第5回：時系列データの解析：（模擬）実験データへのRQAの適用
- 第6回：時系列データの解析：FDA
- 第7回：時系列データの解析：SDA
- 第8回：時系列データの解析：（模擬）実験データへのFDA、SDAの適用
- 第9回：足底圧中心分布（COP）計測の基礎
- 第10回：足底圧中心分布（COP）計測の実習：個人データ
- 第11回：足底圧中心分布（COP）計測の実習：2者間の相互作用の検討
- 第12回：足底圧中心分布（COP）データの処理
- 第13回：足底圧中心分布（COP）データの解析
- 第14回：実験結果の発表と検討
- 第15回：総評

成績評価方法

平常点評価 100% 各個人に割り当てられたテーマに関する発表内容、議論およびグループワークにおける貢献度について評価します。

備考・関連URL 修士課程1年生を対象とする。

生態心理学ゼミ（２） A（春学期）

三嶋 博之

授業概要 キブソンおよびその後継者たちによって展開されている生態心理学的研究のうち、受講者の修士論文課題と関連した文献を過去から現在まで網羅的に収集し、検討を加える。また、必要に応じて、関連の統計的手法や、機材、ソフトウェアの使用法について学ぶ。併せて、APA形式の論文書式について学習する。

授業の到達目標 生態心理学における実験研究を自律的に遂行し、研究論文としてまとめるための基礎的な能力を身につける（Ac 5－1、Ad56－2、Ad56－4）。

授業計画

第1回：オリエンテーション／講義の概要と進め方
第2回：輪読／APA Styleに関して：構成
第3回：輪読／APA Styleに関して：引用の形式
第4回：輪読／APA Styleに関して：文献リスト
第5回：輪読／APA Styleに関して：図表
第6回：APA Styleでのレイアウトに関する演習：本文と図表
第7回：APA Styleでのレイアウトに関する演習：文献リスト
第8回：輪読／生態心理学実験論文：光学的拡大・縮小と行為の制御：序論
第9回：輪読／生態心理学実験論文：光学的拡大・縮小と行為の制御：方法
第10回：輪読／生態心理学実験論文：光学的拡大・縮小と行為の制御：実験
第11回：輪読／生態心理学実験論文：光学的拡大・縮小と行為の制御：考察
第12回：統計演習：Rの利用（設定）
第13回：統計演習：Rの利用（記述統計）
第14回：統計演習：Rの利用（1要因分散分析）
第15回：振り返りとまとめ

成績評価方法

平常点評価 100% 個人に割り当てられたテーマに関する発表内容、議論およびグループワークにおける貢献度について評価します。

備考・関連URL 本演習は修士課程2年生を対象とする。

生態心理学ゼミ（２） B（秋学期）

三嶋 博之

授業概要 キブソンおよびその後継者たちによって展開されている生態心理学的研究のうち、受講者の修士論文課題と関連した文献を過去から現在まで網羅的に収集し、検討を加える。また、必要に応じて、関連の統計的手法や、機材、ソフトウェアの使用法について学ぶ。併せて、APA形式の論文書式について学習する。

授業の到達目標 生態心理学における実験研究を自律的に遂行し、研究論文としてまとめるための基礎的な能力を身につける（Ac 5－1、Ad56－2、Ad56－4）。

授業計画

第1回：オリエンテーション／講義の概要と進め方
第2回：輪読／生態心理学実験論文： π 値による環境／有機体適合の検討：序論
第3回：輪読／生態心理学実験論文： π 値による環境／有機体適合の検討：方法
第4回：輪読／生態心理学実験論文： π 値による環境／有機体適合の検討：実験（前半）
第5回：輪読／生態心理学実験論文： π 値による環境／有機体適合の検討：実験（後半）
第6回：輪読／生態心理学実験論文： π 値による環境／有機体適合の検討：実験（考察）
第7回：輪読／生態心理学実験論文：歩行の発達：序論
第8回：輪読／生態心理学実験論文：歩行の発達：方法
第9回：輪読／生態心理学実験論文：歩行の発達：実験（前半）
第10回：輪読／生態心理学実験論文：歩行の発達：実験（後半）
第11回：輪読／生態心理学実験論文：歩行の発達：考察
第12回：運動発達の力学系アプローチ
第13回：研究倫理：日本心理学会、APAの基準
第14回：研究倫理：早稲田大学における基準
第15回：振り返りとまとめ

成績評価方法

平常点評価 100% 個人に割り当てられたテーマに関する発表内容、議論およびグループワークにおける貢献度について評価します。

備考・関連URL 本演習は修士課程2年生を対象とする。

生活人間工学ゼミ（１）A（春学期）

加藤 麻樹

授業概要 生活人間工学は、日常生活を送る上で用いられる道具や機械を、人間を中心に設計し、最適化するための研究であり、安全性、効率性、快適性を向上させることを目的とした研究である。まず課題発見のための視点を養うとともに、課題解決のための技術について知見から得る。またそうした技術の日常生活における適用性、継続性、経済性を踏まえた実用化を視野に入れることで、科学的アプローチの実践を目指す研究を行う。生活人間工学ゼミ（１）Aでは特に課題解決技術について専門知識の習得を目指す。

授業の到達目標

・日常生活上の課題解決に必要な専門知識を身につける

授業計画

- 第1回：ゼミの目的と進め方
第2回：生活人間工学に関する講義
第3回：生活人間工学に関する文献の輪読 人-機械系
第4回：生活人間工学に関するディベート 人-機械系
第5回：生活人間工学に関する文献の輪読 身体特性
第6回：生活人間工学に関するディベート 身体特性
第7回：生活人間工学に関する文献の輪読 運動特性
第8回：生活人間工学に関するディベート 運動特性
第9回：生活人間工学に関する文献の輪読 生理特性
第10回：生活人間工学に関するディベート 生理特性
第11回：生活人間工学に関する文献の輪読 心理特性
第12回：生活人間工学に関するディベート 心理特性
第13回：生活人間工学に関する文献の輪読 パフォーマンス特性
第14回：生活人間工学に関するディベート パフォーマンス特性
第15回：総括

教科書 必要に応じて教場で指示する。

参考文献 必要に応じて教場で指示する。

成績評価方法

- 平常点評価 40% ゼミ中の発言や活動を評価する。
その他 60% 各自の研究内容および進捗に応じて評価する。

生活人間工学ゼミ（１）B（秋学期）

加藤 麻樹

授業概要 生活人間工学は、日常生活を送る上で用いられる道具や機械を、人間を中心に設計し、最適化するための研究であり、安全性、効率性、快適性を向上させることを目的とした研究である。まず課題発見のための視点を養うとともに、課題解決のための技術について知見から得る。またそうした技術の日常生活における適用性、継続性、経済性を踏まえた実用化を視野に入れることで、科学的アプローチの実践を目指す研究を行う。生活人間工学ゼミ（１）Bでは特に日常生活に対する技術の適用手法について専門知識の習得を目指す。

授業の到達目標

・課題解決技術の適用性、継続性、経済性を踏まえた実用化に必要な専門知識を身につける。

授業計画

- 第1回：ゼミの目的と進め方
第2回：生活人間工学に関する文献の輪読 安全性
第3回：生活人間工学に関するディベート 安全性
第4回：生活人間工学に関する文献の輪読 効率性
第5回：生活人間工学に関するディベート 効率性
第6回：生活人間工学に関する文献の輪読 快適性
第7回：生活人間工学に関するディベート 快適性
第8回：生活人間工学に関する文献の輪読 適用性
第9回：生活人間工学に関するディベート 適用性
第10回：生活人間工学に関する文献の輪読 継続性
第11回：生活人間工学に関するディベート 継続性
第12回：生活人間工学に関する文献の輪読 経済性
第13回：生活人間工学に関するディベート 経済性
第14回：生活人間工学に関する総合的ディスカッション
第15回：総括

教科書 必要に応じて教場で指示する。

参考文献 必要に応じて教場で指示する。

成績評価方法

- 平常点評価 40% ゼミ中の発言や活動を評価する。
その他 60% 各自の研究内容および進捗に応じて評価する。

生活人間工学ゼミ（２）A（春学期）

加藤 麻樹

授業概要 生活人間工学ゼミ（１）を受けて、生活上の安全性、効率性、快適性を目指した具体的な課題発見と、改善技術の構築、適用手法の開発を行う。各自の研究分野における知見の収集と集約を行うとともに、プレゼンテーションとディベートを通じた、各自の研究テーマへの適用可能性について検討する。特に修士課程において、自立的な研究者として求められる視点と技術を養成する。

授業の到達目標

・自立的に研究を計画、実施し、現場への適用を検討、提案することができる能力を身につける。

授業計画

第1回：各自の研究テーマの知見研究	概要の理解
第2回：各自の研究テーマの知見研究	背景の理解
第3回：各自の研究テーマの知見研究	方法の評価
第4回：各自の研究テーマの知見研究	結果の評価
第5回：各自の研究テーマの知見研究	批判的評価
第6回：各自の研究テーマの知見研究	知見の総括
第7回：各自の研究テーマに関するディスカッション	話題提供と資料作成
第8回：各自の研究テーマに関するディスカッション	テーマの評価
第9回：各自の研究テーマに関するディスカッション	テーマの批判的評価
第10回：各自の研究テーマの研究計画	研究構成の検討
第11回：各自の研究テーマの研究計画	研究構成の評価
第12回：各自の研究テーマの研究計画	予備実験計画
第13回：各自の研究テーマの研究計画	予備実験計画の評価と準備
第14回：各自の研究テーマの研究計画	予備実験実施
第15回：各自の研究テーマの研究計画	予備実験の評価

教科書 必要に応じて教場で指示する。

参考文献 必要に応じて教場で指示する。

成績評価方法

平常点評価 40% ゼミ中の発言や活動を評価する。
その他 60% 各自の研究内容および進捗に応じて評価する。

生活人間工学ゼミ（２）B（秋学期）

加藤 麻樹

授業概要 生活人間工学ゼミ（１）を受けて、生活上の安全性、効率性、快適性を目指した具体的な課題発見と、改善技術の構築、適用手法の開発を行う。各自の研究分野における知見の収集と集約を行うとともに、プレゼンテーションとディベートを通じた、各自の研究テーマへの適用可能性について検討する。特に修士課程において、自立的な研究者として求められる視点と技術を養成し、修士課程研究テーマを構築する。

授業の到達目標

・自立的に研究を計画、実施し、現場への適用を検討、提案することができる能力を身につける。
・修士課程研究テーマを構築する。

授業計画

第1回：各自の研究テーマに関するプレゼンテーション	発表技術
第2回：各自の研究テーマに関するプレゼンテーション	評価技術
第3回：各自の研究テーマに関するプレゼンテーション	批判的評価技術
第4回：各自の研究テーマの実践報告と検証	ニーズの検証
第5回：各自の研究テーマの実践報告と検証	信頼性の検証
第6回：各自の研究テーマの実践報告と検証	妥当性の検証
第7回：各自の研究テーマの実践報告と検証	適用性の検証
第8回：各自の研究テーマの実践報告と検証	継続性の検証
第9回：各自の研究テーマの実践報告と検証	総合的検証
第10回：各自の研究テーマに関するプレゼンテーション	ニーズの評価
第11回：各自の研究テーマに関するプレゼンテーション	信頼性の評価
第12回：各自の研究テーマに関するプレゼンテーション	妥当性の評価
第13回：各自の研究テーマに関するディスカッション	適用性の評価
第14回：各自の研究テーマに関するディスカッション	継続性の評価
第15回：各自の研究テーマに関するディスカッション	総合的評価

教科書 必要に応じて教場で指示する。

参考文献 必要に応じて教場で指示する。

成績評価方法

平常点評価 40% ゼミ中の発言や活動を評価する。
その他 60% 各自の研究内容および進捗に応じて評価する。

知識情報科学ゼミ（１） A（春学期）

松居 辰則

授業概要 本研究室では、多種多様な観点と方法論で人間の「感性」や「暗黙知」に科学的にアプローチしています。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探索し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ（研究方法論）が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発見する方法。実験環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法、など様々です。

知識情報科学演習（１）Aでは、大学院修士課程における研究テーマを設定した上で、それを確実に進めると同時に、知識情報処理、感性情報処理、人工知能、認知科学、e-learningなどの関連分野について学際的な観点からの知見を広めることを目指します。人間科学研究科らしい研究を進めていただきたいと考えています。研究成果は関連学会の研究会や全国大会で発表できることが望ましいです。併せて、自身のキャリアについて真剣に考える時間を設け、研究のみならず様々な社会状況に適應できるよう人間形成にも努めます。

授業の到達目標

- (1) 大学院修士課程での研究テーマを設定し、研究を本格的にスタートさせられること。
- (2) 研究はグループMeetingと個別Meetingを組み合わせて進めます。研究を積極的に推進できること。
- (3) グループ作業や実験協力を通して協調性やコミュニケーション能力を高めること。
- (4) 研究進捗、文献紹介を通して自身で責任をもって計画的に研究を進めることができること。
- (5) このプロセスを通して、研究計画、研究方法（実験、システム開発、調査、分析など）、学術的文書の作成、プレゼンテーションの基本を習得すること。
- (6) 研究成果は関連学会の研究会や全国大会で発表できることが望ましい。

【中目標No.】 B56、C 5-1、C 6、D56、E56、G36

授業計画

- 第1回：知識情報科学ゼミ（１）Aの進め方とゴールに関するガイダンス
- 第2回：輪講・文献紹介（１） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（AI総論）
- 第3回：輪講・文献紹介（２） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（認知科学）
- 第4回：輪講・文献紹介（３） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（学習科学）
- 第5回：研究進捗発表（１） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第6回：輪講・文献紹介（４） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（感性科学）
- 第7回：輪講・文献紹介（５） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（進化論）
- 第8回：輪講・文献紹介（６） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（記号論）
- 第9回：研究進捗発表（２） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第10回：輪講・文献紹介（７） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（計算論）
- 第11回：輪講・文献紹介（８） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（融合手法）
- 第12回：研究進捗発表（３） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第13回：輪講・文献紹介（９） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（その他）
- 第14回：輪講・文献紹介（10） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（その他）
- 第15回：研究進捗発表（４） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション

教科書 特に指定しません。

参考文献 ゼミ中に適宜紹介します。研究テーマにあわせて選択します。

成績評価方法

平常点評価 20% 輪講や研究室の実験等への参加状況によって評価します。
その他 80% 研究の進捗状況、大学院生としての振る舞い等を総合的に評価します。

備考・関連URL 研究を進めるにあたって、必要な技術、理論、または計測装置の使用方法、分析方法などは現地調達の学ぶことをお勧めします。「必要なことは貪欲に学ぶ」という姿勢が重要です。

知識情報科学ゼミ（１） B（秋学期）

松居 辰則

授業概要 知識情報科学ゼミ（１）Bは、知識情報科学ゼミ（１）Aの継続になります。各自の研究をさらに推進し、成果を出すことを目指します。関連学会の研究会、全国大会での口頭発表、国際会議での発表、論文投稿ができることが望ましいです。

知識情報科学演習（１）Bにおいても、大学院修士課程における研究テーマを設定した上で、それを確実に進めると同時に、知識情報処理、感性情報処理、人工知能、認知科学、e-learningなどの関連分野について学際的な観点からの知見を広めることを目指します。人間科学研究科らしい研究を進めていただきたいと考えています。併せて、自身のキャリアについて真剣に考える時間を設け、研究のみならず様々な社会状況に適應できるよう人間形成にも努めます。

授業の到達目標

- (1) 大学院修士課程での研究テーマを設定し、研究を本格的にスタートさせられること。
- (2) 研究はグループMeetingと個別Meetingを組み合わせて進めます。研究を積極的に推進できること。
- (3) グループ作業や実験協力を通して協調性やコミュニケーション能力を高めること。
- (4) 研究進捗、文献紹介を通して自身で責任をもって計画的に研究を進めることができること。
- (5) このプロセスを通して、研究計画、研究方法（実験、システム開発、調査、分析など）、学術的文書の作成、プレゼンテーションの基本を習得すること。
- (6) 研究成果は関連学会の研究会や全国大会で口頭発表ができること。できれば、国際会議での口頭発表や論文投稿ができることが望ましい。

【中目標No.】 B56、C 5-1、C 6、D56、E56、G36

授業計画

- 第1回：知識情報科学ゼミ（１）Bの進め方とゴールに関するガイダンス
- 第2回：輪講・文献紹介（１） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（AI応用）
- 第3回：輪講・文献紹介（２） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（認知科学応用）
- 第4回：輪講・文献紹介（３） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（学習科学応用）
- 第5回：研究進捗発表（１） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第6回：輪講・文献紹介（４） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（感性科学応用）
- 第7回：輪講・文献紹介（５） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（進化論応用）
- 第8回：輪講・文献紹介（６） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（記号論応用）
- 第9回：研究進捗発表（２） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第10回：輪講・文献紹介（７） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（計算論応用）
- 第11回：輪講・文献紹介（８） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（融合手法応用）
- 第12回：研究進捗発表（３） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第13回：輪講・文献紹介（９） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（その他）
- 第14回：輪講・文献紹介（10） 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（その他）
- 第15回：研究進捗発表（４） 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション

教科書 特に指定しません。

参考文献 研究テーマに合わせて、ゼミ中に適宜紹介します。

成績評価方法

平常点評価 20% 輪講や研究室の実験等への参加状況によって評価します。
その他 80% 研究の進捗状況、大学院生としての振る舞い等を総合的に評価します。

備考・関連URL 研究を進めるにあたって、必要な技術、理論、または計測装置の使用方法、分析方法などは現地調達の学ぶことをお勧めします。「必要なことは貪欲に学ぶ」という姿勢が重要です。

知識情報科学ゼミ（２） A（春学期）

松居 辰則

授業概要

知識情報科学ゼミ（２）Aは、（１）Aと連動して行います（同日曜日、連続時間）。したがって、授業概要は（１）Aと同じです。
本研究室では、多種多様な観点と方法論で人間の「感性」や「暗黙知」に科学的にアプローチしています。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探索し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ（研究方法論）が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発見する方法、実験環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法、など様々です。

知識情報科学ゼミ（２）Aでも、（１）Aと同じく、大学院修士課程における研究テーマを設定した上で、それを確実に進めると同時に、知識情報処理、感性情報処理、人工知能、認知科学、e-learningなどの関連分野について学際的な観点からの知見を広めることを目指します。人間科学研究科らしい研究を進めていただきたいと考えています。研究成果は関連学会の研究会や全国大会で発表できることが望ましいです。併せて、自身のキャリアについて真剣に考える時間を設け、研究のみならず様々な社会状況に適應できるよう人間形成にも努めます。

授業の到達目標

- （１）大学院修士課程での研究テーマを設定し、研究を本格的にスタートさせられること。
- （２）研究はグループMeetingと個別Meetingを組み合わせて進めます。研究を積極的に推進できること。
- （３）グループ作業や実験協力を通して協調性やコミュニケーション能力を高めること。
- （４）研究進捗、文献紹介を通して自身で責任をもって計画的に研究を進めることができること。
- （５）このプロセスを通して、研究計画、研究方法（実験、システム開発、調査、分析など）、学術的文書の作成、プレゼンテーションの基本を習得すること。
- （６）研究成果は関連学会の研究会や全国大会で発表できることが望ましい。

【中目録No.】 B56、C 5-1、C 6、D56、E56、G36

授業計画

- 第1回：知識情報科学ゼミ（２）Aの進め方とゴールに関するガイダンス
- 第2回：執筆・文献紹介（１）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（AI総論）
- 第3回：執筆・文献紹介（２）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（認知科学）
- 第4回：執筆・文献紹介（３）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（学習科学）
- 第5回：研究進捗発表（１）続 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第6回：執筆・文献紹介（４）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（感性科学）
- 第7回：執筆・文献紹介（５）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（進化論）
- 第8回：執筆・文献紹介（６）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（記号論）
- 第9回：研究進捗発表（２）続 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第10回：執筆・文献紹介（７）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（計算論）
- 第11回：執筆・文献紹介（８）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（融合手法）
- 第12回：研究進捗発表（３）続 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第13回：執筆・文献紹介（９）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（その他）
- 第14回：執筆・文献紹介（10）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介（その他）
- 第15回：研究進捗発表（４）続 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション

教科書 特に指定しません。

参考文献 ゼミ中に適宜紹介します。研究テーマにあわせて選択します。

成績評価方法

- 平常点評価 20% 執筆や研究室の実験等への参加状況によって評価します。
- その他 80% 研究の進捗状況、大学院生としての振る舞い等を総合的に評価します。

備考・関連URL 研究を進めるにあたって、必要な技術、理論、または計測装置の使用方法、分析方法などは現地調達の学ぶことをお勧めします。「必要なことは貪欲に学ぶ」という姿勢が重要です。

知識情報科学ゼミ（２） B（秋学期）

松居 辰則

授業概要

知識情報科学ゼミ（２）Bは、（１）Bと連動して行います（同日曜日、連続時間）。したがって、授業概要は（１）Bと同じです。すなわち、知識情報科学ゼミ（２）Bは、知識情報科学ゼミ（２）Aの継続になります。各自の研究をさらに推進し、成果を出すことを目指します。関連学会の研究会、全国大会での口頭発表、国際会議での発表、論文投稿ができることが望ましいです。

知識情報科学演習（２）Bにおいても、大学院修士課程における研究テーマを設定した上で、それを確実に進めると同時に、知識情報処理、感性情報処理、人工知能、認知科学、e-learningなどの関連分野について学際的な観点からの知見を広めることを目指します。人間科学研究科らしい研究を進めていただきたいと考えています。併せて、自身のキャリアについて真剣に考える時間を設け、研究のみならず様々な社会状況に適應できるよう人間形成にも努めます。

授業の到達目標

- （１）大学院修士課程での研究テーマを設定し、研究を本格的にスタートさせられること。
- （２）研究はグループMeetingと個別Meetingを組み合わせて進めます。研究を積極的に推進できること。
- （３）グループ作業や実験協力を通して協調性やコミュニケーション能力を高めること。
- （４）研究進捗、文献紹介を通して自身で責任をもって計画的に研究を進めることができること。
- （５）このプロセスを通して、研究計画、研究方法（実験、システム開発、調査、分析など）、学術的文書の作成、プレゼンテーションの基本を習得すること。
- （６）研究成果は関連学会の研究会や全国大会で口頭発表ができること。できれば、国際会議での口頭発表や論文投稿ができることが望ましい。

【中目録No.】 B56、C 5-1、C 6、D56、E56、G36

授業計画

- 第1回：知識情報科学ゼミ（２）Bの進め方とゴールに関するガイダンス
- 第2回：執筆・文献紹介（１）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（AI応用）
- 第3回：執筆・文献紹介（２）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（認知科学応用）
- 第4回：執筆・文献紹介（３）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（学習科学応用）
- 第5回：研究進捗発表（１）続 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第6回：執筆・文献紹介（４）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（感性科学応用）
- 第7回：執筆・文献紹介（５）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（進化論応用）
- 第8回：執筆・文献紹介（６）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（記号論応用）
- 第9回：研究進捗発表（２）続「各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第10回：執筆・文献紹介（７）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（計算論応用）
- 第11回：執筆・文献紹介（８）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（融合手法応用）
- 第12回：研究進捗発表（３）続 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
- 第13回：執筆・文献紹介（９）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（その他）
- 第14回：執筆・文献紹介（10）続 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックス（その他）
- 第15回：研究進捗発表（４）続 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション

教科書 特に指定しません。

参考文献 研究内容にあわせて、ゼミ中に適宜紹介します。

成績評価方法

- 平常点評価 20% 執筆や研究室の実験等への参加状況によって評価します。
- その他 80% 研究の進捗状況、大学院生としての振る舞い等を総合的に評価します。

備考・関連URL 研究を進めるにあたって、必要な技術、理論、または計測装置の使用方法、分析方法などは現地調達の学ぶことをお勧めします。「必要なことは貪欲に学ぶ」という姿勢が重要です。

人間生体機能動態学ゼミ（１） A（春学期）

宮崎 正己

授業概要 このゼミでは、研究の基本となる事柄について、指導をふかめていくことが目標である。

授業の到達目標

・文献及び、実験手法の獲得を到達目標とする。

授業計画

- 第1回：研究の基本的なことからについて、論議をする。
 第2回：履修者が文献を持ち寄り、概要を説明する。
 第3回：履修者が文献を持ち寄り、概要を説明する。
 第4回：履修者が文献を持ち寄り、概要を説明する。
 第5回：履修者が文献を持ち寄り、概要を説明する。
 第6回：実験調査手法（アンケート手法）について、学習する。
 第7回：実験手法（血圧）について、学習する。
 第8回：実験手法（呼吸）について、学習する。
 第9回：実験手法（唾液）について、学習する。
 第10回：実験手法（血流量）について、学習する。
 第11回：実験手法（末梢血流量）について、学習する。
 第12回：実験手法（脳波）について、学習する。
 第13回：実験手法（筋電図）について、学習する。
 第14回：実験手法（心電図）について、学習する。
 第15回：文献・実験実習のまとめ

成績評価方法

試験	実施しない
レポート	30% 2から3回ほど、提出
平常点評価	70% 出席による
その他	特になし

人間生体機能動態学ゼミ（１） B（秋学期）

宮崎 正己

授業概要 実験手法と論文作成の技法を習得する。

授業の到達目標

・この授業により、研究のプロセスを円滑に行えることを目的とする。

授業計画

- 第1回：本授業で、取り扱う内容について。
 第2回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第3回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第4回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第5回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第6回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第7回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第8回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第9回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第10回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第11回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第12回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第13回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第14回：各人がすすめている研究に関連する文献の抄読
 第15回：今まで、抄読で扱ってきた内容についてのまとめ。

成績評価方法

試験	実施しない
レポート	30% 数回レポートの実施
平常点評価	70% 出席による
その他	特になし

人間生体機能動態学ゼミ（２） A（春学期）

宮崎 正己

授業概要 修士論文作成のための基本的な事柄（知識・技術）に関して習得をすすめていく。

授業の到達目標

・研究を進めていくうえで、知識・技術の習得を目的とする。

授業計画

第1回：授業の進めるうえでの留意事項
 第2回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第3回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第4回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第5回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第6回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第7回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第8回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第9回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第10回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第11回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第12回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第13回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第14回：研究を推進するうえでの執拗となる文献の抄読
 第15回：今までの授業のまとめ

成績評価方法

試 験	実施しない
レポート	30% 数回提出の予定
平常点評価	70% 出席による
そ の 他	特になし

人間生体機能動態学ゼミ（２） B（秋学期）

宮崎 正己

授業概要 研究の推進を進めていく。

授業の到達目標

・研究をより深く進めることを目標とする。

授業計画

第1回：授業で取り扱う内容について
 第2回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第3回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第4回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第5回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第6回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第7回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第8回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第9回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第10回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第11回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第12回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第13回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第14回：研究を推進するに必須な文献の抄読
 第15回：まとめ

成績評価方法

試 験	実施しない
レポート	30% 2から3回の提出
平常点評価	70% 出席による
そ の 他	特になし

福祉工学ゼミ（１） A（春学期）

藤本 浩志

授業概要 福祉工学では、単にモノづくりのためのツールとしての工学的な知識のみならず、支援する対象であるヒトの諸機能の理解も重要である。福祉工学演習（１）では、このような福祉工学の各論を構成する以下の事柄について、関連資料や現場での体験を通じて学ぶ。
・移動支援機器、コミュニケーション支援機器、介助支援機器等、狭義の福祉機器である機能代行機器の現状および研究開発動向。
・健常者のみならず障害者や高齢者の身体の諸機能（運動機能特性、感覚知覚特性）の定量的な評価手法。

授業の到達目標

修士課程の研究を立ち上げる際に必要となる当該領域に関する広範な知見を身に付ける。併せて必要なテクニックも習得する。（B56-1、B56-2、B56-3、B56-4）

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：現状の問題の紹介と課題の提示（移動機能代行機器）
- 第3回：輪読およびディスカッション（１）
- 第4回：輪読およびディスカッション（２）
- 第5回：輪読およびディスカッション（３）
- 第6回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（１）
- 第7回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（２）
- 第8回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（３）
- 第9回：現状の問題の紹介と課題の提示（コミュニケーション機器）
- 第10回：輪読およびディスカッション（１）
- 第11回：輪読およびディスカッション（２）
- 第12回：輪読およびディスカッション（３）
- 第13回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（１）
- 第14回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（２）
- 第15回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（３）

教科書 なし。必要に応じてプリントを配布する。

成績評価方法

平常点評価 30% 積極性と他者への貢献
その他 70% 自身の研究課題の取り組みとその発表

専 門 ゼ ミ
感 性 認 知 情 報 シ ス テ ム

福祉工学ゼミ（１） B（秋学期）

藤本 浩志

授業概要 福祉工学では、単にモノづくりのためのツールとしての工学的な知識のみならず、支援する対象であるヒトの諸機能の理解も重要である。福祉工学演習（１）では、このような福祉工学の各論を構成する以下の事柄について、関連資料や現場での体験を通じて学ぶ。
・移動支援機器、コミュニケーション支援機器、介助支援機器等、狭義の福祉機器である機能代行機器の現状および研究開発動向。
・健常者のみならず障害者や高齢者の身体の諸機能（運動機能特性、感覚知覚特性）の定量的な評価手法。

授業の到達目標

修士課程の研究を立ち上げる際に必要となる当該領域に関する広範な知見を身に付ける。併せて必要なテクニックも習得する。（B56-1、B56-2、B56-3、B56-4）

授業計画

- 第1回：現状の問題の紹介と課題の提示（運動機能特性）
- 第2回：輪読およびディスカッション（１）
- 第3回：輪読およびディスカッション（２）
- 第4回：輪読およびディスカッション（３）
- 第5回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（１）
- 第6回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（２）
- 第7回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（３）
- 第8回：現状の問題の紹介と課題の提示（感覚機能特性）
- 第9回：輪読およびディスカッション（１）
- 第10回：輪読およびディスカッション（２）
- 第11回：輪読およびディスカッション（３）
- 第12回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（１）
- 第13回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（２）
- 第14回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（３）
- 第15回：総括と講評

教科書 なし。必要に応じてプリントを配布する。

成績評価方法

平常点評価 30% 積極性と他者への貢献
その他 70% 自身の研究課題の取り組みとその発表

福祉工学ゼミ（２） A（春学期）

藤本 浩志

授業概要 福祉工学ゼミ（１）を踏まえて、ヒトの機能を補完し環境との円滑なインタラクションの実現を目指した適切なインターフェースに関する具体的な課題に取り組む。その際には、身体諸機能の機序の解明に関する基礎研究と、同時にそれらの知見に基づいて実用化を目指した機器に関する応用研究の両方の視点に留意したい。また特に応用研究については、広義の福祉機器として、ユーザを障害者や高齢者に限定しないユニバーサルデザインのコンセプトも併せて検討する。

授業の到達目標

・修士課程の研究を推進する上で、自立した研究者に必要なとなる問題解決能力を習得する。（B56-1、B56-2、B56-3、B56-4）

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：課題の提示（ヒューマンインターフェース）
- 第3回：輪読およびディスカッション（１）
- 第4回：輪読およびディスカッション（２）
- 第5回：輪読およびディスカッション（３）
- 第6回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（１）
- 第7回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（２）
- 第8回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（３）
- 第9回：課題の提示（バーチャルリアリティー皮膚感覚ディスプレイ）
- 第10回：輪読およびディスカッション（１）
- 第11回：輪読およびディスカッション（２）
- 第12回：輪読およびディスカッション（３）
- 第13回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（１）
- 第14回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（２）
- 第15回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（３）

教科書 なし。必要に応じてプリントを配布する。

成績評価方法

平常点評価 30% 積極性と他者への貢献
その他 70% 自身の研究課題の取り組みとその発表

福祉工学ゼミ（２） B（秋学期）

藤本 浩志

授業概要 福祉工学ゼミ（１）を踏まえて、ヒトの機能を補完し環境との円滑なインタラクションの実現を目指した適切なインターフェースに関する具体的な課題に取り組む。その際には、身体諸機能の機序の解明に関する基礎研究と、同時にそれらの知見に基づいて実用化を目指した機器に関する応用研究の両方の視点に留意したい。また特に応用研究については、広義の福祉機器として、ユーザを障害者や高齢者に限定しないユニバーサルデザインのコンセプトも併せて検討する。

授業の到達目標

・修士課程の研究を推進する上で、自立した研究者に必要なとなる問題解決能力を習得する。（B56-1、B56-2、B56-3、B56-4）

授業計画

- 第1回：課題の提示（床面材料環境と下肢運動との関連）
- 第2回：輪読およびディスカッション（１）
- 第3回：輪読およびディスカッション（２）
- 第4回：輪読およびディスカッション（３）
- 第5回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（１）
- 第6回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（２）
- 第7回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（３）
- 第8回：課題の提示（床面形状環境と下肢運動との関連）
- 第9回：輪読およびディスカッション（１）
- 第10回：輪読およびディスカッション（２）
- 第11回：輪読およびディスカッション（３）
- 第12回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（１）
- 第13回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（２）
- 第14回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション（３）
- 第15回：総括と講評

教科書 なし。必要に応じてプリントを配布する。

成績評価方法

平常点評価 30% 積極性と他者への貢献
その他 70% その他による評価

インストラクショナルデザイン論ゼミ（１） A（春学期）

中井 文子

授業概要 インストラクショナルデザインの領域において有意義な研究をするための基礎を身につけます。春学期には、この領域における自分のテーマを設定し、先行研究のサーベイ、研究計画の立案をします。秋学期には、研究計画に基づいて、研究を実施し、研究レポートを作成します。「インストラクショナルデザイン論ゼミ（２）」との同時受講はできません。最終的にはミニ修論(1,000字×30ページ以上)を作成します。なお、本授業は、週ごとに教室での実習とオンデマンド授業が交代します。

授業の到達目標

学会主催の研究会（例：日本教育工学会研究会など）、あるいは、全国規模の学会の大会（例：日本教育工学会、日本心理学会、日本教育心理学会、大学教育学会などの大会）で発表できるレベルの研究をまとめること。

授業計画

- 第1回：（教室授業）授業の進め方
- 第2回：（コースナビ）テーマを探す
- 第3回：（教室授業）テーマを探す
- 第4回：（コースナビ）先行研究を探す
- 第5回：（教室授業）先行研究を探す
- 第6回：（コースナビ）序論を書く
- 第7回：（教室授業）序論を書く
- 第8回：（コースナビ）方法を書く
- 第9回：（教室授業）方法を書く
- 第10回：（コースナビ）予備研究の実施
- 第11回：（教室授業）予備研究の実施
- 第12回：（コースナビ）結果と考察を書く
- 第13回：（教室授業）結果と考察を書く
- 第14回：（コースナビ）発表する
- 第15回：（教室授業）発表する

教科書 適宜指示する。

参考文献 適宜指示する。

成績評価方法

- レポート 40% ミニ修論の出来を評価する。
- 平常点評価 30% 演習ゼミと議論への参加と貢献を評価する。
- その他 30% オンデマンド講義のあとに出される個人課題を評価する。

備考・関連URL

【授業形態】 この授業は、オンデマンド講義の週と教室授業の週が入れ替わる「ブレンド型授業」です。オンデマンド講義の週は、オンデマンド講義を視聴して、個人課題を各自でやってください。教室授業の週は、全員が教室に集まってグループワークを行います。

【ビデオ】 収録ビデオは2012年度に新規収録したものを配信します。

関連URL：向後研究室ホームページ <http://kogolab.wordpress.com/>

インストラクショナルデザイン論ゼミ（１） B（秋学期）

中井 文子

授業概要 インストラクショナルデザインの領域において有意義な研究をするための基礎を身につけます。春学期には、この領域における自分のテーマを設定し、先行研究のサーベイ、研究計画の立案をします。秋学期には、研究計画に基づいて、研究を実施し、研究レポートを作成します。「インストラクショナルデザイン論ゼミ（２）」との同時受講はできません。最終的にはミニ修論(1,000字×30ページ以上)を作成します。なお、本授業は、週ごとに教室での実習とオンデマンド授業が交代します。

授業の到達目標

学会主催の研究会（例：日本教育工学会研究会など）、あるいは、全国規模の学会の大会（例：日本教育工学会、日本心理学会、日本教育心理学会、大学教育学会などの大会）で発表できるレベルの研究をまとめること。

授業計画

- 第1回：（教室授業）研究実施へのオリエンテーション
- 第2回：（コースナビ）研究実施の準備
- 第3回：（教室授業）研究実施の準備
- 第4回：（コースナビ）研究の実施とデータ収集（１）
- 第5回：（教室授業）研究の実施とデータ収集（１）
- 第6回：（コースナビ）研究の実施とデータ収集（２）
- 第7回：（教室授業）研究の実施とデータ収集（２）
- 第8回：（コースナビ）データ整理と統計処理
- 第9回：（教室授業）データ整理と統計処理
- 第10回：（コースナビ）ミニ修論作成（１）
- 第11回：（教室授業）ミニ修論作成（１）
- 第12回：（コースナビ）ミニ修論作成（２）
- 第13回：（教室授業）ミニ修論作成（２）
- 第14回：（コースナビ）プレゼンテーション
- 第15回：（教室授業）プレゼンテーション

教科書 適宜指示する。

参考文献 適宜指示する。

成績評価方法

- レポート 40% ミニ修論の出来を評価する。
- 平常点評価 30% 演習ゼミと議論への参加と貢献を評価する。
- その他 30% オンデマンド講義のあとに出される個人課題を評価する。

備考・関連URL

【授業形態】 この授業は、オンデマンド講義の週と教室授業の週が入れ替わる「ブレンド型授業」です。オンデマンド講義の週は、オンデマンド講義を視聴して、個人課題を各自でやってください。教室授業の週は、全員が教室に集まってグループワークを行います。

【ビデオ】 収録ビデオは2012年度に新規収録したものを配信します。

関連URL：向後研究室ホームページ <http://kogolab.wordpress.com/>

インストラクショナルデザイン論ゼミ（２） A（春学期）

中井 文子

授業概要 インストラクショナルデザインの領域において有意義な研究をするための基礎を身につけます。春学期には、この領域における自分のテーマを設定し、先行研究のサーベイ、研究計画の立案をします。秋学期には、研究計画に基づいて、研究を実施し、研究レポートを作成します。「インストラクショナルデザイン論ゼミ（１）」との同時受講はできません。最終的にはブレ修論（1,000字×50ページ以上）を作成します。なお、本授業は、週ごとに教室での実習とオンデマンド授業が交代します。

授業の到達目標

学会主催の研究会（例：日本教育工学会研究会など）、あるいは、全国規模の学会の大会（例：日本教育工学会、日本心理学会、日本教育心理学会、大学教育学会などの大会）で発表できるレベルの研究をまとめること。

授業計画

- 第1回：（教室授業）授業の進め方
- 第2回：（コースナビ）テーマを探す
- 第3回：（教室授業）テーマを探す
- 第4回：（コースナビ）先行研究を探す
- 第5回：（教室授業）先行研究を探す
- 第6回：（コースナビ）序論を書く
- 第7回：（教室授業）序論を書く
- 第8回：（コースナビ）方法を書く
- 第9回：（教室授業）方法を書く
- 第10回：（コースナビ）予備研究の実施
- 第11回：（教室授業）予備研究の実施
- 第12回：（コースナビ）結果と考察を書く
- 第13回：（教室授業）結果と考察を書く
- 第14回：（コースナビ）発表する
- 第15回：（教室授業）発表する

教科書 適宜指示する。

参考文献 適宜指示する。

成績評価方法

- レポート 40% ブレ修論の出来を評価する。
平常点評価 30% 演習ゼミと議論への参加と貢献を評価する。
その他 30% オンデマンド講義のあとに出される個人課題を評価する。

備考・関連URL

【授業形態】 この授業は、オンデマンド講義の週と教室授業の週が入れ替わる「ブレンド型授業」です。オンデマンド講義の週は、オンデマンド講義を視聴して、個人課題を各自でやってください。教室授業の週は、全員が教室に集まってグループワークを行います。

【ビデオ】 収録ビデオは2012年度に新規収録したものを配信します。

関連URL：向後研究室ホームページ <http://kogolab.wordpress.com/>

インストラクショナルデザイン論ゼミ（２） B（秋学期）

中井 文子

授業概要 インストラクショナルデザインの領域において有意義な研究をするための基礎を身につけます。春学期には、この領域における自分のテーマを設定し、先行研究のサーベイ、研究計画の立案をします。秋学期には、研究計画に基づいて、研究を実施し、研究レポートを作成します。「インストラクショナルデザイン論ゼミ（１）」との同時受講はできません。最終的には修論（1,000字×60ページ以上）を作成します。なお、本授業は、週ごとに教室での実習とオンデマンド授業が交代します。

授業の到達目標

学会主催の研究会（例：日本教育工学会研究会など）、あるいは、全国規模の学会の大会（例：日本教育工学会、日本心理学会、日本教育心理学会、大学教育学会などの大会）で発表できるレベルの研究をまとめること。

授業計画

- 第1回：（教室授業）研究実施へのオリエンテーション
- 第2回：（コースナビ）研究実施の準備
- 第3回：（教室授業）研究実施の準備
- 第4回：（コースナビ）研究の実施とデータ収集（１）
- 第5回：（教室授業）研究の実施とデータ収集（１）
- 第6回：（コースナビ）研究の実施とデータ収集（２）
- 第7回：（教室授業）研究の実施とデータ収集（２）
- 第8回：（コースナビ）データ整理と統計処理
- 第9回：（教室授業）データ整理と統計処理
- 第10回：（コースナビ）修論作成（１）
- 第11回：（教室授業）修論作成（１）
- 第12回：（コースナビ）修論作成（２）
- 第13回：（教室授業）修論作成（２）
- 第14回：（コースナビ）プレゼンテーション
- 第15回：（教室授業）プレゼンテーション

教科書 適宜指示する。

参考文献 適宜指示する。

成績評価方法

- レポート 40% 修論の出来を評価する。
平常点評価 30% 演習ゼミと議論への参加と貢献を評価する。
その他 30% オンデマンド講義のあとに出される個人課題を評価する。

備考・関連URL

【授業形態】 この授業は、オンデマンド講義の週と教室授業の週が入れ替わる「ブレンド型授業」です。オンデマンド講義の週は、オンデマンド講義を視聴して、個人課題を各自でやってください。教室授業の週は、全員が教室に集まってグループワークを行います。

【ビデオ】 収録ビデオは2012年度に新規収録したものを配信します。

関連URL：向後研究室ホームページ <http://kogolab.wordpress.com/>

インターネット科学ゼミ（１） A（春学期）

西村 昭治

授業概要 Google App EngineのNative言語であるPythonを習得することによって、インターネット上の様々なデータやサービスを自由に扱う基礎を学習する。

授業の到達目標

・ Pythonを使ったインターネットアプリケーションの開発能力の獲得

授業計画

- 第1回：ガイダンス（１）：科目の目的
- 第2回：ガイダンス（２）：授業実施方法等
- 第3回：プログラミング言語Python
- 第4回：変数と組み込み型（１）
- 第5回：変数と組み込み型（２）
- 第6回：条件分岐とループ
- 第7回：関数（１）
- 第8回：関数（２）
- 第9回：組み込み型を使いこなす（１）
- 第10回：組み込み型を使いこなす（２）
- 第11回：組み込み型を使いこなす（３）
- 第12回：ファイル処理（１）
- 第13回：ファイル処理（２）
- 第14回：華麗で短いプログラミング（１）
- 第15回：華麗で短いプログラミング（２）

教科書 柴田 淳（著） みんなのPython 改訂版 ISBN-10:4797353953

参考文献 講義で言及する

成績評価方法

試 験	実施しない。
レポート	実施しない。
平常点評価	100% 毎週課される実習課題の対応状況を点数化し加算する。
そ の 他	評価しない。

備考・関連URL 本授業はコースナビを用いフルオンデマンドで実施する。
http://coreblog.org/ats/stuff/minpy_support/frontpage

インターネット科学ゼミ（１） B（秋学期）

西村 昭治

授業概要 Google App EngineのNative言語であるPythonを習得することによって、インターネット上の様々なデータやサービスを自由に扱う基礎を学習する。

授業の到達目標

・ Pythonを使ったインターネットアプリケーションの開発能力の獲得

授業計画

- 第1回：クラスとオブジェクト指向開発（１）
- 第2回：クラスとオブジェクト指向開発（２）
- 第3回：クラスの継承と高度なオブジェクト指向機能（１）
- 第4回：クラスの継承と高度なオブジェクト指向機能（２）
- 第5回：例外処理
- 第6回：モジュール（１）
- 第7回：モジュール（２）
- 第8回：スコープとオブジェクト
- 第9回：標準ライブラリを使う（１）
- 第10回：標準ライブラリを使う（２）
- 第11回：アプリケーションを作る
- 第12回：Google App Engine（１）
- 第13回：Google App Engine（２）
- 第14回：Google App Engine（３）
- 第15回：まとめ

教科書 柴田 淳（著） みんなのPython 改訂版 ISBN-10:4797353953

参考文献 講義で言及する

成績評価方法

試 験	実施しない。
レポート	実施しない。
平常点評価	100% 毎週課される実習課題の対応状況を点数化し加算する。
そ の 他	評価しない。

備考・関連URL 本授業はコースナビを用いフルオンデマンドで実施する。
http://coreblog.org/ats/stuff/minpy_support/frontpage

インターネット科学ゼミ（２） A（春学期）

西村 昭治

授業概要 インターネット科学演習（１）を受けて、受講者毎個別にPythonを用いてインターネット上の様々なデータやサービスを分析するツールやシステムを開発する。

授業の到達目標

・Pythonを使ったインターネットアプリケーションが上級開発能力の獲得、インターネットデータ分析実践能力の獲得

授業計画

- 第1回：ガイダンス（１）
- 第2回：ガイダンス（２）
- 第3回：個別開発課題の設定（１）：個別ヒアリング（１）
- 第4回：個別開発課題の設定（２）：個別ヒアリング（２）
- 第5回：個別開発課題の設定（３）：個別テーマに関するプレゼンテーション（１）
- 第6回：個別開発課題の設定（４）：個別テーマに関するプレゼンテーション（２）
- 第7回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第8回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第9回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第10回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第11回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第12回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第13回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第14回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第15回：個別テーマ中間報告会（１）

参考文献 講義で言及する

成績評価方法

試験	実施しない。
レポート	実施しない。
平常点評価	100% 毎週課される実習課題の対応状況を点数化し加算する。
その他	評価しない。

備考・関連URL 本授業はコースナビを用いフルオンデマンドで実施する。受講者はインターネット科学演習（１）既習者に限定するとともに同時履修は認めない。

インターネット科学ゼミ（２） B（秋学期）

西村 昭治

授業概要 インターネット科学演習（１）を受けて、受講者毎個別にPythonを用いてインターネット上の様々なデータやサービスを分析するツールやシステムを開発する。

授業の到達目標

・Pythonを使ったインターネットアプリケーションが上級開発能力の獲得、インターネットデータ分析実践能力の獲得

授業計画

- 第1回：個別テーマ中間報告会（２）
- 第2回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第3回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第4回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第5回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第6回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第7回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第8回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第9回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第10回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第11回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第12回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第13回：個別開発課題開発進捗報告＆アドバイス
- 第14回：個別テーマ成果報告会（１）
- 第15回：個別テーマ成果報告会（２）

参考文献 講義で言及する

成績評価方法

試験	実施しない。
レポート	実施しない。
平常点評価	100% 毎週課される実習課題の対応状況を点数化し加算する。
その他	評価しない。

備考・関連URL 本授業はコースナビを用いフルオンデマンドで実施する。受講者はインターネット科学演習（１）既習者に限定するとともに同時履修は認めない。

学習環境デザイン論ゼミ（１） A（春学期）

尾澤 重知

授業概要 「学習環境デザイン」は、人材育成や教育研修などの実践的活動において、創造的な「学びの場」をデザインし、学習の支援や活動の評価を目指す試みである。本ゼミでは、国内外の大学教育、企業内人材育成、企業内大学の先進事例を踏まえつつ、知識科学や学習科学、教育学の知見に基づき学習支援のあり方や、学習支援の方法、ツールについての研究開発を行う。

授業の到達目標

- (1) 様々な専門性をつないで「インタープロフェッション」を推進する知識や技能を身につけている。(E)
- (2) 人間的事象を複眼的な視点から捉え、そこに解決すべき課題を発見することができる。(C)
- (3) 課題探究（フィールドや実験）プロジェクトをマネジメントすることができる。(D)

授業計画

- 第1回：ガイダンス、研究概要の報告（1）
- 第2回：研究概要の報告（2）
- 第3回：基本概念の整理（1） 自身の研究のマッピング
- 第4回：基本概念の整理（2） 相互評価
- 第5回：基本概念の整理（3） 自身の研究のマッピング（演習）
- 第6回：基本概念の整理（4） 相互評価
- 第7回：概念構築（1） モデルの検討
- 第8回：概念構築（2） 相互評価
- 第9回：概念構築（3） プレゼンテーション
- 第10回：概念構築（4） 相互評価
- 第11回：先行事例の批判的検討（1） 国内文献
- 第12回：先行研究の批判的検討（2） 国内文献
- 第13回：先行事例の批判的検討（3） 海外文献
- 第14回：先行研究の批判的検討（4） 海外文献
- 第15回：期末プレゼンテーション

教科書 履修者の研究内容に応じて適時、指定する場合がある。

参考文献 履修者の研究内容に応じて適時、指定する。

成績評価方法

- レポート 70% 論文の目的・先行研究・研究方法・結果・考察の一貫性
 その他 30% 研究全体の取り組み、学会発表、学内外の活動への貢献

備考・関連URL ・授業順序や扱う割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。

学習環境デザイン論ゼミ（１） B（秋学期）

尾澤 重知

授業概要 「学習環境デザイン」は、人材育成や教育研修などの実践的活動において、創造的な「学びの場」をデザインし、学習の支援や活動の評価を目指す試みである。本ゼミでは、国内外の大学教育、企業内人材育成、企業内大学の先進事例を踏まえつつ、知識科学や学習科学、教育学の知見に基づき学習支援のあり方や、学習支援の方法、ツールについての研究開発を行う。

授業の到達目標

- (1) 様々な専門性をつないで「インタープロフェッション」を推進する知識や技能を身につけている。(E)
- (2) 人間的事象を複眼的な視点から捉え、そこに解決すべき課題を発見することができる。(C)
- (3) 課題探究（フィールドや実験）プロジェクトをマネジメントすることができる。(D)

授業計画

- 第1回：事前課題に対するフィードバック
- 第2回：学習環境の評価方法（1） 研究方法の確認
- 第3回：学習環境の評価方法（2） 研究方法の確認（演習）
- 第4回：学習環境の評価方法（3） 研究デザイン
- 第5回：学習環境の評価方法（4） 研究デザイン（演習）
- 第6回：学習環境の評価方法（5） 実験と実践研究
- 第7回：学習環境の評価方法（6） 実験と実践研究（演習）
- 第8回：プレゼンテーション技法（1）
- 第9回：プレゼンテーション技法（2）（演習）
- 第10回：論文構成法（1）
- 第11回：論文構成法（2）（演習）
- 第12回：相互評価（1）
- 第13回：相互評価（2）（演習）
- 第14回：最終プレゼンテーション
- 第15回：全体に対するフィードバック

教科書 履修者の研究内容に応じて適時、指定する場合がある。

参考文献 履修者の研究内容に応じて適時、指定する。

成績評価方法

- レポート 70% 研究の目的・先行研究・研究方法・結果・考察の一貫性
 その他 30% 研究全体の取り組み、学会発表、学内外の活動への貢献

備考・関連URL ・授業順序や扱う割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。

学習環境デザイン論ゼミ（２） A（春学期）

尾澤 重知

授業概要 「学習環境デザイン」は、人材育成や教育研修などの実践的活動において、創造的な「学びの場」をデザインし、学習の支援や活動の評価を目指す試みである。本ゼミでは、国内外の大学教育、企業内人材育成、企業内大学の先進事例を踏まえつつ、知識科学や学習科学、教育学の知見に基づき学習支援のあり方や、学習支援の方法、ツールについての研究開発を行う。

授業の到達目標

- (1) 様々な専門性をつないで「インタープロフェッション」を推進する知識や技能を身につけている。(E)
- (2) 人間的現象を複眼的な視点から捉え、そこに解決すべき課題を発見することができる。(C)
- (3) 課題探究（フィールドや実験）プロジェクトをマネジメントすることができる。(D)

授業計画

- 第1回：ガイダンス、研究概要の報告（1）
- 第2回：研究概要の報告（2）
- 第3回：基本概念の整理（1） 自身の研究のマッピング
- 第4回：基本概念の整理（2） 相互評価
- 第5回：基本概念の整理（3） 自身の研究のマッピング（演習）
- 第6回：基本概念の整理（4） 相互評価
- 第7回：概念構築（1） モデルの検討
- 第8回：概念構築（2） 相互評価
- 第9回：概念構築（3） プレゼンテーション
- 第10回：概念構築（4） 相互評価
- 第11回：先行事例の批判的検討（1） 国内文献
- 第12回：先行研究の批判的検討（2） 国内文献
- 第13回：先行事例の批判的検討（3） 海外文献
- 第14回：先行研究の批判的検討（4） 海外文献
- 第15回：期末プレゼンテーション

教科書 履修者の研究内容に応じて適時、指定する場合がある。

参考文献 履修者の研究内容に応じて適時、指定する。

成績評価方法

レポート 70% 研究の目的・先行研究・研究方法・結果・考察の一貫性
その他 30% 研究全体の取り組み、学会発表、学内外の活動への貢献

備考・関連URL ・授業順序や扱う割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。

学習環境デザイン論ゼミ（２） B（秋学期）

尾澤 重知

授業概要 「学習環境デザイン」は、人材育成や教育研修などの実践的活動において、創造的な「学びの場」をデザインし、学習の支援や活動の評価を目指す試みである。本ゼミでは、国内外の大学教育、企業内人材育成、企業内大学の先進事例を踏まえつつ、知識科学や学習科学、教育学の知見に基づき学習支援のあり方や、学習支援の方法、ツールについての研究開発を行う。

授業の到達目標

- (1) 様々な専門性をつないで「インタープロフェッション」を推進する知識や技能を身につけている。(E)
- (2) 人間的現象を複眼的な視点から捉え、そこに解決すべき課題を発見することができる。(C)
- (3) 課題探究（フィールドや実験）プロジェクトをマネジメントすることができる。(D)

授業計画

- 第1回：事前課題に対するフィードバック
- 第2回：学習環境の評価方法（1） 研究方法の確認
- 第3回：学習環境の評価方法（2） 研究方法の確認（演習）
- 第4回：学習環境の評価方法（3） 研究デザイン
- 第5回：学習環境の評価方法（4） 研究デザイン（演習）
- 第6回：学習環境の評価方法（5） 実験と実践研究
- 第7回：学習環境の評価方法（6） 実験と実践研究（演習）
- 第8回：プレゼンテーション技法（1）
- 第9回：プレゼンテーション技法（2）（演習）
- 第10回：論文構成法（1）
- 第11回：論文構成法（2）（演習）
- 第12回：相互評価（1）
- 第13回：相互評価（2）（演習）
- 第14回：最終プレゼンテーション
- 第15回：最終プレゼンテーションへのフィードバック

教科書 履修者の研究内容に応じて適時、指定する場合がある。

参考文献 履修者の研究内容に応じて適時、指定する。

成績評価方法

レポート 70% 研究や発表の目的・先行研究・研究方法・結果・考察の一貫性
その他 30% 研究全体の取り組み、学会発表、学内外の活動への貢献

備考・関連URL ・授業順序や扱う割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。

教育開発論ゼミ（１） A（春学期）

野嶋 栄一郎

授業概要 教える・学ぶ過程に関わるヒトと環境とそれらの接面に関するシステムについて講義及び討議を行う。通常このような分野は教育学とよばれるが、より広く、教育に関する科学的研究を志向している。教育学、教育心理学、教育測定学、認知心理学、教育学などの諸分野にまたがる内容となる。理論的中心課題、研究の方法論等、研究の核となる部分に関連するテーマが中心となる。特に人間科学としての教育学の位置づけに、また人間科学とシステム理論の関係性に言及することを試みる。

授業の到達目標

各人のテーマについて達成レベルの設定が、授業の冒頭に求められる。特にこのとき、発展的レベルの目標設定が求められ、各自に求められるプレゼンテーションと質疑を通して、達成水準が評価される。

授業計画

- 第1回：コトバと体験による教育
- 第2回：映像と教育
- 第3回：開かれた学習環境と能動的な学習活動
- 第4回：学習過程としての科学的思考の発達
- 第5回：理科の学習と創造性の教育
- 第6回：教育機器とコミュニケーション
- 第7回：放送教育と学習過程
- 第8回：教育評価の理論的基礎（１）
- 第9回：教育評価の理論的基礎（２）
- 第10回：教育評価の理論的基礎（３）
- 第11回：教育評価の理論的基礎（４）
- 第12回：教育評価で人を育てる（１）
- 第13回：教育評価で人を育てる（２）
- 第14回：教育評価で人を育てる（３）
- 第15回：評価で授業を改善する一総論

成績評価方法

平常点評価 20% 授業への参加、質疑への積極的な参加
その他 80% プレゼンテーションと質疑の内容

教育開発論ゼミ（１） B（秋学期）

野嶋 栄一郎

授業概要 教える・学ぶ過程に関わるヒトと環境とそれらの接面に関するシステムについて講義及び討議を行う。通常このような分野は教育学とよばれるが、より広く、教育に関する科学的研究を志向している。教育学、教育心理学、教育測定学、認知心理学、教育学などの諸分野にまたがる内容となる。理論的中心課題、研究の方法論等、研究の核となる部分に関連するテーマが中心となる。特に人間科学としての教育学の位置づけに、また人間科学とシステム理論の関係性に言及することを試みる。

授業の到達目標

各人のテーマについて達成レベルの設定が、授業の冒頭に求められる。特にこのとき、発展的レベルの目標設定が求められ、各自に求められるプレゼンテーションと質疑を通して、達成水準が評価される。

授業計画

- 第1回：授業評価の技法
- 第2回：指導と評価の一体化
- 第3回：学習活動の過程に在る評価
- 第4回：ヒトの行動と文脈
- 第5回：コンピュータ利用の協同作業に及ぼすパートナーの顔画像の評価（１）
- 第6回：コンピュータ利用の協同作業に及ぼすパートナーの顔画像の評価（２）
- 第7回：ヒトとヒトが対峙する関係とコンピュータとヒトの関係（１）
- 第8回：ヒトとヒトが対峙する関係とコンピュータとヒトの関係（２）
- 第9回：メディアと教育測定（１）
- 第10回：メディアと教育測定（２）
- 第11回：メディアと教育測定（３）
- 第12回：オープン教育と学習活動の測定（１）
- 第13回：オープン教育と学習活動の測定（２）
- 第14回：オープン教育と学習活動の測定（３）
- 第15回：エスノメソドロジーによる社会的相互交渉の分析

成績評価方法

平常点評価 20% 授業への参加、質疑への積極的な参加
その他 80% プレゼンテーションと質疑の内容

教育開発論ゼミ（２） A（春学期）

野嶋 栄一郎

授業概要 教育開発論演習（１）は、比較的、基礎的、理論的色彩が強いが、ここでは演習（１）をベースに、データや開発課題を眼前にした、具体的な課題提供を試みる。カリキュラム開発と評価、教材開発と評価、教授＝学習過程に関わる実践研究、コンピュータネットワークを前提とした新しい学習環境の開発研究、マルチメディアの教育効果、教育実践に関わる測定と評価等、柔軟性に富んだテーマ設定を試みる。

授業の到達目標

・授業を通じて実践的に各人の研究デザインの習作を完成させることを目標とする。

授業計画

- 第1回：学業成績固定要因の分析（１）
- 第2回：学業成績固定要因の分析（２）
- 第3回：学業成績固定要因の分析（３）
- 第4回：学業成績固定要因の分析（４）
- 第5回：藤田論文（1975）の検討（１）
- 第6回：藤田論文（1975）の検討（２）
- 第7回：藤田論文（1975）の検討（３）
- 第8回：藤田論文（1975）の検討（４）
- 第9回：岸・野嶋論文（2007）の検討（１）
- 第10回：岸・野嶋論文（2007）の検討（２）
- 第11回：岸・野嶋論文（2007）の検討（３）
- 第12回：岸・野嶋論文（2007）の検討（４）
- 第13回：多重対角形式を利用した形成的評価（１）
- 第14回：多重対角形式を利用した形成的評価（２）
- 第15回：S-P表による授業の分析と評価（１）

成績評価方法

レポート	50%	1～20回目の授業に関わるレポート	評価基準	60点以上
平常点評価	50%	プレゼンテーションと発表の質	評価基準	60点以上

教育開発論ゼミ（２） B（秋学期）

野嶋 栄一郎

授業概要 教育開発論演習（１）は、比較的、基礎的、理論的色彩が強いが、ここでは演習（１）をベースに、データや開発課題を眼前にした、具体的な課題提供を試みる。カリキュラム開発と評価、教材開発と評価、教授＝学習過程に関わる実践研究、コンピュータネットワークを前提とした新しい学習環境の開発研究、マルチメディアの教育効果、教育実践に関わる測定と評価等、柔軟性に富んだテーマ設定を試みる。

授業の到達目標

・授業を通じて実践的に各人の研究デザインの習作を完成させることを目標とする。

授業計画

- 第1回：S-P表による授業の分析と評価（２）
- 第2回：野嶋・高橋論文（1987）によるマイクロティーチングの評価（１）
- 第3回：野嶋・高橋論文（1987）によるマイクロティーチングの評価（２）
- 第4回：オープンスペースの学習行動の評価（１）
- 第5回：オープンスペースの学習行動の評価（２）
- 第6回：研究のデザインと改善・評価（１）
- 第7回：研究のデザインと改善・評価（２）
- 第8回：研究のデザインと改善・評価（３）
- 第9回：研究のデザインと改善・評価（４）
- 第10回：研究のデザインと改善・評価（５）
- 第11回：研究のデザインと改善・評価（６）
- 第12回：研究のデザインと改善・評価（７）
- 第13回：研究のデザインと改善・評価（８）
- 第14回：研究のデザインと改善・評価（９）
- 第15回：研究のデザインと改善・評価（１０）

成績評価方法

レポート	50%	1～20回目の授業に関わるレポート	評価基準	60点以上
平常点評価	50%	プレゼンテーションと発表の質	評価基準	60点以上

教育コミュニケーション学ゼミ（１） A（春学期）

保崎 則雄

授業概要 人間は、一般に自身の持てるもの全体、全部（身体、言語、アーティファクト）を駆使してコミュニケーションを取る。社会における人間の教育コミュニケーション活動には多くの課題がある中、メディア、言語、身体が有機的に結びついた教育の形ははっきりしていない。別々に議論、教育、分析されることはあっても、統合的な教育実践、メタ分析はあまりない。ここが我が国のコミュニケーション教育、研究の現状である。本演習では、個別に研究されてきたものを統合的に捉え、研究課題に結びつけることを狙いとする。具体的には、春学期では、上記3つの分野の文献を輪読しつつ、統合するような教育を考え、研究へと結びつける。

授業の到達目標 受講生は、
1) 3つの分野（身体コミュニケーション、言語コミュニケーション、メディアコミュニケーション）の先行研究を理解できるようになる
2) 自分の興味ある課題を研究論文として形にすることができる
3) 研究会、学会などでプレゼンテーション（日本語、英語）ができるようになる

授業計画

- 第1回：オリエンテーション（本演習の目的と概要） 各自の興味ある課題についてディスカッションをする
第2回：各自の研究課題への導入1 各自の興味ある課題についてプレスト、ディスカッションを行い、拡散させる
第3回：各自の研究課題への導入2 関連分野の文献輪読 各自の興味ある課題についてプレスト、ディスカッションを行い、拡散させる
第4回：各自の研究課題への導入3 関連分野の文献輪読 各自の興味ある課題についてプレスト、ディスカッションを行い、拡散から収束させる方向を目指す
第5回：各自の研究課題への導入4 関連分野の文献輪読 各自の興味ある課題についてプレスト、ディスカッションを行い、拡散から収束させる方向を目指す
第6回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション1 関連分野の文献輪読 各受講生は研究課題についての簡単なプレゼンテーションを順次行い、ディスカッションを通して形を作っていく
第7回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション2 関連分野の文献輪読 各受講生は研究課題についての簡単なプレゼンテーションを順次行い、ディスカッションを通して形を作っていく
第8回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション3 関連分野の文献輪読 各受講生は研究課題についての簡単なプレゼンテーションを順次行い、ディスカッションを通して形を作っていく
第9回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション4 関連分野の文献輪読 各受講生は研究課題についての簡単なプレゼンテーションを順次行い、ディスカッションを通して形を作っていく
第10回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション5 関連分野の文献輪読 各受講生は研究課題についての簡単なプレゼンテーションを順次行い、ディスカッションを通して形を作っていく
第11回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション6 関連分野の文献輪読 研究課題としての要素を考え、研究計画書の形にしていく
第12回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション7 関連分野の文献輪読 研究課題としての要素を考え、研究計画書の形にしていく
第13回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション8 関連分野の文献輪読 研究課題としての要素を考え、研究計画書の形にしていく
第14回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション9 関連分野の文献輪読 研究課題としての要素を考え、研究計画書の形にしていく
第15回：春学期の総括と反省、自己評価

教科書 特に指定せず。輪読用の文献は授業開始時に提示する。

参考文献 各自の興味ある分野、トピックを考慮しつつ、授業進行とともに適宜紹介する。

成績評価方法

試験	N.A.
レポート	30% 研究計画書の作成
平常点評価	50% 出席とディスカッション
その他	20% 研究会、学会の参加、口頭発表、論文投稿など

教育コミュニケーション学ゼミ（１） B（秋学期）

保崎 則雄

授業概要 秋学期は、内外の論文の輪読に時間をかけ、自分の研究論文へとつなげる作業を行う。扱う書籍は、PotterのTheory of Media Literacy（抜粋）、A Handbook of Media and Communication Research（抜粋）を中心とする。

授業の到達目標 受講生は、
1) 3つの分野（身体コミュニケーション、言語コミュニケーション、メディアコミュニケーション）のうち、メディアコミュニケーション分野の先行研究を理解できるようになる
2) 自分の興味ある課題を研究論文として形にすることができる
3) 研究会、学会などでプレゼンテーション（日本語、英語）ができるようになる

授業計画

- 第1回：オリエンテーション（秋学期の演習の目的と概要） 秋学期に輪読する論文、書籍一覧を提示する
第2回：論文の輪読とディスカッション1 参考文献「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う
第3回：論文の輪読とディスカッション2 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う
第4回：論文の輪読とディスカッション3 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う
第5回：論文の輪読とディスカッション4 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う
第6回：論文の輪読とディスカッション5 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う
第7回：論文の輪読とディスカッション6 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う
第8回：論文の輪読とディスカッション7 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う
第9回：論文の輪読とディスカッション8 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う
第10回：論文の輪読とディスカッション9 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う
第11回：論文の輪読とディスカッション10 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う
第12回：研究課題についてのプレゼンテーション1 研究計画書の作成 各自の研究課題についてプレゼンテーションを行い、質疑応答
第13回：研究課題についてのプレゼンテーション2 研究計画書の作成 各自の研究課題についてプレゼンテーションを行い、質疑応答
第14回：研究課題についてのプレゼンテーション3 研究計画書の作成 各自の研究課題についてプレゼンテーションを行い、質疑応答
第15回：学期を振り返り、自己評価を行う

教科書 特に指定せず。輪読用の文献は授業開始時に提示する。

参考文献 Theory of Media Literacy (Potter) 2012
各自の興味ある分野、トピックを考慮しつつ、授業進行とともに適宜紹介する。

成績評価方法

レポート	30% 研究計画書の作成
平常点評価	50% 出席とプレゼンテーション、ディスカッション
その他	20% 研究会、学会の参加、口頭発表、論文投稿など

教育コミュニケーション学ゼミ（2） A（春学期）

保崎 則雄

授業概要 人間は、一般に自身の持てるもの全体、全部（身体、言語、アーティファクト）を駆使してコミュニケーションを取る。社会における人間の教育コミュニケーション活動には多くの課題がある中、メディア、言語、身体が有機的に結びついた教育の形ははっきりしていない。別々に議論、教育、分析されることはあっても、統合的な教育実践、メタ分析はあまりない。ここが我が国のコミュニケーション教育、研究の現状である。本演習では、個別に研究されてきたものを統合的に捉え、研究課題に結びつけることを狙いとする。具体的には、春学期では、上記3つの分野の文献を輪読しつつ、統合するような教育を考え、研究へと結びつける。

授業の到達目標 受講生は、
1) 3つの分野（身体コミュニケーション、言語コミュニケーション、メディアコミュニケーション）の先行研究を理解できるようになる
2) 自分の興味ある課題を研究論文として形にすることができる
3) 研究会、学会などでプレゼンテーション（日本語、英語）ができるようになる

授業計画

第1回：オリエンテーション（本演習の目的と概要） 各自の興味ある課題についてディスカッションをする 第2回：各自の研究課題への導入1 各自の興味ある課題についてプレスト、ディスカッションを行い、拡散させる 第3回：各自の研究課題への導入2 関連分野の文献輪読 各自の興味ある課題についてプレスト、ディスカッションを行い、拡散させる 第4回：各自の研究課題への導入3 関連分野の文献輪読 各自の興味ある課題についてプレスト、ディスカッションを行い、拡散から収束させる方向性を指す 第5回：各自の研究課題への導入4 関連分野の文献輪読 各自の興味ある課題についてプレスト、ディスカッションを行い、拡散から収束させる方向を目指す 第6回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション1 関連分野の文献輪読 各受講生は研究課題についての簡単なプレゼンテーションを順次行い、ディスカッションを通して形を作っていく 第7回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション2 関連分野の文献輪読 各受講生は研究課題についての簡単なプレゼンテーションを順次行い、ディスカッションを通して形を作っていく	第8回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション3 関連分野の文献輪読 各受講生は研究課題についての簡単なプレゼンテーションを順次行い、ディスカッションを通して形を作っていく 第9回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション4 関連分野の文献輪読 各受講生は研究課題についての簡単なプレゼンテーションを順次行い、ディスカッションを通して形を作っていく 第10回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション5 関連分野の文献輪読 各受講生は研究課題についての簡単なプレゼンテーションを順次行い、ディスカッションを通して形を作っていく 第11回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション6 関連分野の文献輪読 研究課題としての要素を考え、研究計画書の形にしていく 第12回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション7 関連分野の文献輪読 研究課題としての要素を考え、研究計画書の形にしていく 第13回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション8 関連分野の文献輪読 研究課題としての要素を考え、研究計画書の形にしていく 第14回：研究課題遂行の問題点についてディスカッション9 関連分野の文献輪読 研究課題としての要素を考え、研究計画書の形にしていく 第15回：春学期の総括と反省、自己評価

教科書 特に指定せず。輪読用の文献は授業開始時に提示する。

参考文献 各自の興味ある分野、トピックを考慮しつつ、授業進行とともに適宜紹介する。

成績評価方法

試験	該当せず
レポート	30% 研究計画書の作成
平常点評価	50% 出席とディスカッション
その他	20% 研究会、学会の参加、口頭発表、論文投稿など

教育コミュニケーション学ゼミ（2） B（秋学期）

保崎 則雄

授業概要 秋学期は、内外の論文の輪読に時間をかけ、自分の研究論文へとつなげる作業を行う。扱う書籍は、PotterのTheory of Media Literacy（抜粋）、A Handbook of Media and Communication Research（抜粋）を中心とする。

授業の到達目標 受講生は、
1) 3つの分野（身体コミュニケーション、言語コミュニケーション、メディアコミュニケーション）のうち、メディアコミュニケーション分野の先行研究を理解できるようになる
2) 自分の興味ある課題を研究論文として形にすることができる
3) 研究会、学会などでプレゼンテーション（日本語、英語）ができるようになる

授業計画

第1回：オリエンテーション（秋学期の演習の目的と概要） 秋学期に輪読する論文、書籍一覧を提示する 第2回：論文の輪読とディスカッション1 参考文献「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う 第3回：論文の輪読とディスカッション2 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う 第4回：論文の輪読とディスカッション3 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う 第5回：論文の輪読とディスカッション4 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う 第6回：論文の輪読とディスカッション5 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う 第7回：論文の輪読とディスカッション6 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う	第8回：論文の輪読とディスカッション7 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う 第9回：論文の輪読とディスカッション8 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う 第10回：論文の輪読とディスカッション9 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う 第11回：論文の輪読とディスカッション10 「Media Literacy」の輪読をし、研究課題についてディスカッションを行う 第12回：研究課題についてのプレゼンテーション1 研究計画書の作成 各自の研究課題についてプレゼンテーションをい、質疑応答 第13回：研究課題についてのプレゼンテーション2 研究計画書の作成 各自の研究課題についてプレゼンテーションをい、質疑応答 第14回：研究課題についてのプレゼンテーション3 研究計画書の作成 各自の研究課題についてプレゼンテーションをい、質疑応答 第15回：学期を振り返り、自己評価を行う

教科書 特に指定せず。輪読用の文献は授業開始時に提示する。

参考文献 Theory of Media Literacy (Potter) 2012
各自の興味ある分野、トピックを考慮しつつ、授業進行とともに適宜紹介する。

成績評価方法

試験	該当せず
レポート	30% 研究計画書の作成
平常点評価	50% 出席とプレゼンテーション、ディスカッション
その他	20% 研究会、学会の参加、口頭発表、論文投稿など

教育実践学ゼミ（１） A（春学期）

浅田 匡

授業概要 教育実践を対象とした研究に関して、授業の担い手である教師研究に焦点を当てる。システムズ・アプローチ、現象学的アプローチ、教育技術的アプローチなど、授業研究のさまざまなアプローチがあるが、それらに共通する問題としての教師論を論及する。特に、研究者としての教師が自らの授業実践を研究・改善していくアクション・リサーチおよびそれを共同で行うメンタリング・リサーチについて、文献講読を中心とした論及を行う。アクション・リサーチは、そのバックグラウンドなる考え方が、知識論、ヒューマニスティック・サイコロジ、システム論等、多岐にわたり、教育におけるアクション・リサーチ研究の変遷から、今後の実践研究の方向性も論及する。

授業の到達目標

・アクション・リサーチに分類される様々なアプローチをレビューし、教師教育研究における理論的枠組みを理解する。
B56-3、C 6-2、D56-2、F56-1、F56-2

授業計画

- 第1回：参加型アクション・リサーチ
- 第2回：批判理論とアクション・リサーチ
- 第3回：システム思考とアクション・リサーチ
- 第4回：社会的構成主義とアクション・リサーチ
- 第5回：臨床的探究とアクション・リサーチ
- 第6回：アクション・サイエンスとアクション・リサーチ
- 第7回：アブリアティブな探究とアクション・リサーチ
- 第8回：アクション・ラーニングとアクション・リサーチ
- 第9回：学習ヒストリーとアクション・リサーチ
- 第10回：協働的探究とアクション・リサーチ
- 第11回：人間性心理学とアクション・リサーチ
- 第12回：知識・権力とアクション・リサーチ
- 第13回：フェミニズムとアクション・リサーチ
- 第14回：アクション・リサーチの諸モデル
- 第15回：教育的アクション・リサーチ

教科書 P.Reason, H.Bradbury (ed) (2008) The Sage Handbook of Action Research 2nd ed. SAGE Publications.
必要に応じて関連文献配布

成績評価方法

レポート 20% 学習内容の理解度と論理性
平常点評価 80% 出席と討論への参加度

教育実践学ゼミ（１） B（秋学期）

浅田 匡

授業概要 教育実践を対象とした研究に関して、授業の担い手である教師研究に焦点を当てる。システムズ・アプローチ、現象学的アプローチ、教育技術的アプローチなど、授業研究のさまざまなアプローチがあるが、それらに共通する問題としての教師論を論及する。特に、研究者としての教師が自らの授業実践を研究・改善していくアクション・リサーチおよびそれを共同で行うメンタリング・リサーチについて、文献講読を中心とした論及を行う。アクション・リサーチは、そのバックグラウンドなる考え方が、知識論、ヒューマニスティック・サイコロジ、システム論等、多岐にわたり、教育におけるアクション・リサーチ研究の変遷から、今後の実践研究の方向性も論及する。

授業の到達目標

・アクション・リサーチの理論的枠組みを前提とし、日本において、教師教育でのアクション・リサーチの日本型モデルを考えることができる。
B56-3、D56-2、F56-1、F56-2

授業計画

- 第1回：教育的アクション・リサーチを考える
- 第2回：仏教思想とアクション・リサーチ
- 第3回：ナラティブな探究とアクション・リサーチ
- 第4回：実存主義とアクション・リサーチ
- 第5回：複雑性の理論とアクション・リサーチ
- 第6回：精神分析・異文化とアクション・リサーチ
- 第7回：学校区を基盤としたアクション・リサーチ
- 第8回：特別支援教育とアクション・リサーチ
- 第9回：授業研究とアクション・リサーチ
- 第10回：リーダーシップとアクション・リサーチ
- 第11回：学習共同体とアクション・リサーチ
- 第12回：教師の職能発達とアクション・リサーチ
- 第13回：教育・学校改革とアクション・リサーチ
- 第14回：生徒の参加による学校改革とアクション・リサーチ
- 第15回：教育的アクション・リサーチの再考

教科書 S.Noffke, Somekh, B. (2009) The Sage Handbook of Educational Action Research. SAGE Publications.
必要に応じて関連文献配布

成績評価方法

レポート 20% 学習内容の理解度と論理性
平常点評価 80% 出席と討論への参加度

教育実践学ゼミ（２） A（春学期）

浅田 匡

授業概要 教育実践学が研究対象とする、教師の知識研究、教師の信念研究、教師の思考様式、など教師の思考過程に関して、マネジメント学習、教育、発達の見点から論及し、これからの教師及び授業研究の研究課題を探究する。また、学校においてはスクールリーダーシップが求められ、特にスクールリーダーの育成が急務である。学校におけるリーダーシップに関しても学習や発達の観点から考察する。さらに、ICT技術の活用と学習、発達、教育との関係をマネジメントの視点から論及する。

授業の到達目標

学校をベースとした教師教育の有用性が示されてきた研究動向を受けて、「場」概念や組織マネジメントといったことが教師教育においても重要性が増していることから、組織としての知性に関する理論的枠組みと最新の研究動向を理解する。

E56-1、E56-2、C 6-1、C 6-2

授業計画

- 第1回：マネジメントの学習、教育と発達
- 第2回：経験学習の理論
- 第3回：集団学習と知識の転移
- 第4回：リフレクションと組織リフレクション
- 第5回：協調学習
- 第6回：リーダーの育成
- 第7回：教室におけるIT
- 第8回：遠隔学習とWeb-based Learning
- 第9回：学習中心のコースデザイン
- 第10回：コーチングとメンタリング（１）
- 第11回：コーチングとメンタリング（２）
- 第12回：問題をベースとした学習のアプローチ
- 第13回：プロジェクトをベースとした学習のアプローチ
- 第14回：アクション・ラーニングと組織学習
- 第15回：リーダーシップ開発の枠組み

教科書 Armstrong,S., Fukami,C.V. (2009) The Sage Handbook of Management Learning, Education, and Development. SAGE Publications.

成績評価方法

レポート 20% 学習内容の理解度と論理性
平常点評価 80% 出席と討論への参加度

教育実践学ゼミ（２） B（秋学期）

浅田 匡

授業概要 教育実践学が研究対象とする、教師の知識研究、教師の信念研究、教師の思考様式、など教師の思考過程に関して、リフレクションは重要な概念である。教師の職能発達におけるリフレクションの機能を多面的に捉え、教師が反省的になることについて論及する。

授業の到達目標

- (1) 教師が反省的実践家となるための背景となる理論を理解する。
- (2) 教師が反省的実践家となるための具体的な方法を理解し、その方法を行うことができる。

F56-1、G36-4、G36-6、G36-8

授業計画

- 第1回：リフレクティブ・ティーチングとは
- 第2回：教員養成段階におけるメンタリングによる学習
- 第3回：教師を取り巻く社会的環境とリフレクション
- 第4回：教師の価値観とアイデンティティとリフレクション
- 第5回：教師の協働とリフレクション
- 第6回：子どもの理解とリフレクション
- 第7回：カリキュラム開発・評価とリフレクション
- 第8回：単元・授業設計とリフレクション
- 第9回：学級経営とリフレクション
- 第10回：教授ストラテジーとリフレクション
- 第11回：授業評価とリフレクション
- 第12回：教師の職能発達とリフレクション（１）初任者教師の学習
- 第13回：教師の職能発達とリフレクション（２）教師の発達段階
- 第14回：学校改善とリフレクション
- 第15回：アクション・リサーチとリフレクション

教科書 Pollard,A. (2002) Reflective Teaching. Continuum.
必要に応じて文献を配布。

成績評価方法

レポート 20% 学習内容の理解度と論理性
平常点評価 80% 出席と討論への参加度

教育情報工学ゼミ（１） A（春学期）

永岡 慶三

授業概要 eテストについて、教科書「植野、永岡（2008）『eテスト』」、培風館」を基本に輪講を行う。eテストの基本原理や具体システムについて、要約報告・質疑応答により討議・演習を行う。履修者人数により内容は変更・調整する場合がある。教育情報工学演習（2）Aと連動して行う。

授業の到達目標

- ・ eテストの概要を解説できる。
- ・ テスト理論について古典的テスト理論と項目応答理論とに分けて、概要を説明できる。
- ・ 適応型テストの機能と原理について説明できる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：基本講義
- 第3回：eテストの概要1
- 第4回：eテストの概要2
- 第5回：eテストの概要3
- 第6回：討議
- 第7回：テスト理論1
- 第8回：テスト理論2
- 第9回：テスト理論3
- 第10回：討議
- 第11回：適応型テスト1
- 第12回：適応型テスト2
- 第13回：適応型テスト3
- 第14回：討議
- 第15回：eテストと標準化1

教科書 植野、永岡（2008）『eテスト』、培風館

参考文献 適宜紹介する

成績評価方法

試験	50%	eテストの基本についてテストにより評価する
平常点評価	50%	各回授業における討論への参加度により評価する

教育情報工学ゼミ（１） B（秋学期）

永岡 慶三

授業概要 eテストについて、教科書「植野、永岡（2008）『eテスト』」、培風館」を基本に輪講を行う。eテストの基本原理や具体システムについて、要約報告・質疑応答により討議・演習を行う。履修者人数により内容は変更・調整する場合がある。教育情報工学演習（2）Bと連動して行う。

授業の到達目標

- ・ eテストの概要を解説できる。
- ・ テスト理論について古典的テスト理論と項目応答理論とに分けて、概要を説明できる。
- ・ 適応型テストの機能と原理について説明できる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：基本講義
- 第3回：多様なテスト履歴データの分析手法1
- 第4回：多様なテスト履歴データの分析手法2
- 第5回：多様なテスト履歴データの分析手法3
- 第6回：討議
- 第7回：大学入試センターのテストデータベースによる項目分析1
- 第8回：大学入試センターのテストデータベースによる項目分析2
- 第9回：大学入試センターのテストデータベースによる項目分析3
- 第10回：討議
- 第11回：人事測定とeテスト1
- 第12回：人事測定とeテスト2
- 第13回：人事測定とeテスト3
- 第14回：討議
- 第15回：英語検定におけるeテスト1

教科書 植野、永岡（2008）『eテスト』、培風館

参考文献 適宜紹介する

成績評価方法

試験	50%	eテストの基本についてテストにより評価する
平常点評価	50%	各回授業における討論への参加度により評価する

教育情報工学ゼミ（２） A（春学期）

永岡 慶三

授業概要 e テスティングについて、教科書「植野、永岡（2008）『e テスティング』、培風館」を基本に輪講を行う。e テスティングの基本原理や具体システムについて、要約報告・質疑応答により討議・演習を行う。履修者人数により内容は変更・調整する場合がある。教育情報工学演習（１）A と連動して行う。

授業の到達目標

- ・ e テスティングの概要を解説できる。
- ・ テスト理論について古典的テスト理論と項目応答理論とに分けて、概要を説明できる。
- ・ 適応型テストの機能と原理について説明できる。

授業計画

- 第1回：e テスティングと標準化2
- 第2回：e テスティングと標準化3
- 第3回：討議
- 第4回：論述式項目の自動採点1
- 第5回：論述式項目の自動採点2
- 第6回：論述式項目の自動採点3
- 第7回：討議
- 第8回：自動作問技術1
- 第9回：自動作問技術2
- 第10回：自動作問技術3
- 第11回：演習1
- 第12回：演習2
- 第13回：特別講究
- 第14回：総合討議
- 第15回：確認テストと講評

教科書 植野、永岡（2008）『e テスティング』、培風館

参考文献 適宜紹介する

成績評価方法

試験	50% e テスティングの基本についてテストにより評価する
平常点評価	50% 各回授業における討論への参加度により評価する

教育情報工学ゼミ（２） B（秋学期）

永岡 慶三

授業概要 e テスティングについて、教科書「植野、永岡（2008）『e テスティング』、培風館」を基本に輪講を行う。e テスティングの基本原理や具体システムについて、要約報告・質疑応答により討議・演習を行う。履修者人数により内容は変更・調整する場合がある。教育情報工学演習（１）B と連動して行う。

授業の到達目標

- ・ e テスティングの概要を解説できる。
- ・ テスト理論について古典的テスト理論と項目応答理論とに分けて、概要を説明できる。
- ・ 適応型テストの機能と原理について説明できる。

授業計画

- 第1回：英語検定におけるe テスティング2
- 第2回：英語検定におけるe テスティング3
- 第3回：討議
- 第4回：e ラーニングとe テスティング1
- 第5回：e ラーニングとe テスティング2
- 第6回：e ラーニングとe テスティング3
- 第7回：e ラーニングとe テスティング4
- 第8回：e ラーニングとe テスティング5
- 第9回：演習1
- 第10回：演習2
- 第11回：演習3
- 第12回：特別講究1
- 第13回：特別講究2
- 第14回：総合討論
- 第15回：確認テストと講評

教科書 植野、永岡（2008）『e テスティング』、培風館

参考文献 適宜紹介する

成績評価方法

試験	50% e テスティングの基本についてテストにより評価する
平常点評価	50% 各回授業における討論への参加度により評価する

情報コミュニケーション科学ゼミ（１） A（春学期）

金子 孝夫

授業概要 コンピュータメディアとしてのテキスト・音声・画像・アニメーションなどのマルチメディア情報を活用して、コミュニケーションネットワークを介して複合コンテンツを発信・受信することで、高等教育、モバイルサービス、広告サービスなどを支援することができる。そこで、効果的な高等教育や各種サービスなどを旨とし、マルチメディア教育の方法とその効果について実験・調査検討を行う。なお、ゼミ（２）の授業計画との間で、授業の順番を入れかえることがある。

授業の到達目標

・修士論文研究をスタートできることを到達目標とする。

授業計画

第1回：演習の内容紹介、自己紹介、担当決めなど
第2回：輪読（１）教科書の第1章
第3回：輪読（３）教科書の第3章
第4回：輪読（５）教科書の第5章
第5回：輪読（７）教科書の第7章
第6回：実習課題（１）の提示
第7回：実習（Flashコンテンツの制作）素材の準備
第8回：実習（Flashコンテンツの制作）全体の制作
第9回：実習課題（１）の発表と提出
第10回：住まいの概略設計（１）
第11回：実習課題（２）の提示
第12回：実習（住まいの概略設計）概略プランの検討
第13回：実習（住まいの概略設計）概略プランの作成
第14回：実習（住まいの概略設計）概略プランの改良
第15回：実習課題（２）の発表と提出

教科書 輪読で使用する教科書は授業の中で指定する。

参考文献 授業の中で紹介する。

成績評価方法

その他 100% 輪読、実習課題、発表などにより評価する。

情報コミュニケーション科学ゼミ（１） B（秋学期）

金子 孝夫

授業概要 コンピュータメディアとしてのテキスト・音声・画像・アニメーションなどのマルチメディア情報を活用して、コミュニケーションネットワークを介して複合コンテンツを発信・受信することで、高等教育、モバイルサービス、広告サービスなどを支援することができる。そこで、効果的な高等教育や各種サービスなどを旨とし、マルチメディア教育の方法とその効果について実験・調査検討を行う。なお、ゼミ（２）の授業計画との間で、授業の順番を入れかえることがある。

授業の到達目標

・修士論文研究をスタートできることを到達目標とする。

授業計画

第1回：授業ガイダンス
第2回：進路に関する懇談会
第3回：輪読（１）1 番目の受講生が選んだ論文
第4回：輪読（３）3 番目の受講生が選んだ論文
第5回：輪読（５）5 番目の受講生が選んだ論文
第6回：輪読（７）7 番目の受講生が選んだ論文
第7回：研究内容の検討（１）
第8回：研究内容の検討（３）研究テーマ案の決定
第9回：研究テーマに関する実験調査（１）
第10回：研究テーマに関する実験調査（３）データのまとめ
第11回：論文形式のレポート作成（１）
第12回：論文形式のレポート作成（３）内容の推敲
第13回：発表用スライド作成（１）
第14回：発表用スライド作成（３）発表の練習
第15回：発表会（１）

教科書 輪読で使用する教科書は授業の中で指定する。

参考文献 授業の中で紹介する。

成績評価方法

その他 100% 輪読、論文形式のレポート、発表により評価する。

情報コミュニケーション科学ゼミ（２） A（春学期）

金子 孝夫

授業概要 コンピュータメディアとしてのテキスト・音声・画像・アニメーションなどのマルチメディア情報を活用して、コミュニケーションネットワークを介して複合コンテンツを発信・受信することで、高等教育、モバイルサービス、広告サービスなどを支援することができる。そこで、効果的な高等教育や各種サービスなどを旨し、マルチメディアコンテンツの活用とその効果について実験・調査検討を行う。なお、ゼミ（１）の授業計画との間で授業の順番を入れかえることがある。

授業の到達目標

・修士論文研究をスタートできることを到達目標とする。

授業計画

第1回：実験室の見学など
第2回：輪読（２） 教科書の第2章
第3回：輪読（４） 教科書の第4章
第4回：輪読（６） 教科書の第6章
第5回：輪読（８） 教科書の第8章
第6回：実習課題（１）の提示
第7回：実習（Flashコンテンツの制作） 素材の準備
第8回：実習（Flashコンテンツの制作） 全体の制作
第9回：実習（１）の発表と提出
第10回：住まいの概略設計（２）
第11回：実習課題（２）の提示
第12回：実習（住まいの概略設計） 概略プランの検討
第13回：実習（住まいの概略設計） 概略プランの作成
第14回：実習（住まいの概略設計） 概略プランの改良
第15回：実習課題（２）の発表と提出

教科書 輪読で使用する教科書は授業の中で指定する。

参考文献 授業の中で紹介する。

成績評価方法

その他 100% 輪読、実習課題、発表により評価する。

情報コミュニケーション科学ゼミ（２） B（秋学期）

金子 孝夫

授業概要 コンピュータメディアとしてのテキスト・音声・画像・アニメーションなどのマルチメディア情報を活用して、コミュニケーションネットワークを介して複合コンテンツを発信・受信することで、高等教育、モバイルサービス、広告サービスなどを支援することができる。そこで、効果的な高等教育や各種サービスなどを旨し、マルチメディアコンテンツの活用とその効果について実験・調査検討を行う。なお、ゼミ（１）の授業計画との間で授業の順番を入れかえることがある。

授業の到達目標

・修士論文研究をスタートできることを到達目標とする。

授業計画

第1回：研究テーマの相談
第2回：進路に関する懇談会
第3回：輪読（２） 2番目の受講生が選んだ論文
第4回：輪読（４） 4番目の受講生が選んだ論文
第5回：輪読（６） 6番目の受講生が選んだ論文
第6回：輪読（８） 8番目の受講生が選んだ論文
第7回：研究内容の検討（２）
第8回：研究テーマの決定
第9回：研究テーマに関する実験調査（２）
第10回：研究テーマに関する実験調査（４）データのまとめ
第11回：論文形式のレポート作成（２）
第12回：論文形式のレポート提出
第13回：発表用スライドの作成（２）
第14回：発表用スライドの提出
第15回：発表会（２）

教科書 輪読で使用する論文は授業の中で決定する。

参考文献 授業の中で紹介する。

成績評価方法

その他 100% 輪読、論文形式のレポート、発表により評価する。

情報コミュニケーション技術論ゼミ（１） A（春学期）

スコット ダグラス

授業概要 This semester introduces topics on information and communication technologies focusing on how people use technology to communicate. All readings, coursework, and discussions are in English.

授業の到達目標

・ Goals include increase understanding of communication technology use, improve reading comprehension, and develop writing ability in English.

授業計画

第1回： Introduction, course overview, and discussion.
第2回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第3回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第4回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第5回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第6回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第7回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第8回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第9回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第10回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第11回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第12回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第13回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第14回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第15回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.

教科書 Materials will be provided.

成績評価方法

レポート 25% レポートによる評価
平常点評価 75% 平常点による評価

備考・関連URL <http://scottlab.org/scottzemi/>

情報コミュニケーション技術論ゼミ（１） B（秋学期）

スコット ダグラス

授業概要 This semester introduces topics on information and communication technologies focusing on how people use technology to communicate. All readings, coursework, and discussions are in English.

授業の到達目標

・ Goals include increase understanding of communication technology use, improve reading comprehension, and develop writing ability in English.

授業計画

第1回： Introduction, course overview, and discussion.
第2回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第3回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第4回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第5回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第6回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第7回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第8回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第9回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第10回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第11回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第12回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第13回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第14回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.
第15回： Read this week's article, complete a homework assignment, and discuss in class.

教科書 Materials will be provided.

成績評価方法

レポート 25% レポートによる評価
平常点評価 75% 平常点による評価

備考・関連URL <http://scottlab.org/scottzemi/>

情報コミュニケーション技術論ゼミ（２） A（春学期）

スコット ダグラス

授業概要 This semester focuses on the writing of an individual research project that will be the basis for the student's senior thesis. All readings, coursework, and discussions are in English.

授業の到達目標

・ The goal is to complete the individual research project.

授業計画

第1回：Introduction, course overview, and discussion.
第2回：Work on individual research project and discuss in class.
第3回：Work on individual research project and discuss in class.
第4回：Work on individual research project and discuss in class.
第5回：Work on individual research project and discuss in class.
第6回：Work on individual research project and discuss in class.
第7回：Work on individual research project and discuss in class.
第8回：Work on individual research project and discuss in class.
第9回：Work on individual research project and discuss in class.
第10回：Work on individual research project and discuss in class.
第11回：Work on individual research project and discuss in class.
第12回：Work on individual research project and discuss in class.
第13回：Work on individual research project and discuss in class.
第14回：Work on individual research project and discuss in class.
第15回：Present individual research project.

教科書 Materials will be provided.

成績評価方法

レポート 50% レポートによる評価
平常点評価 50% 平常点による評価

備考・関連URL <http://scottlab.org/scottzemi/>

情報コミュニケーション技術論ゼミ（２） B（秋学期）

スコット ダグラス

授業概要 This semester focuses on the writing of an individual research project that will be the basis for the student's senior thesis. All readings, coursework, and discussions are in English.

授業の到達目標

・ The goal is to complete the individual research project.

授業計画

第1回：Introduction, course overview, and discussion.
第2回：Work on individual research project and discuss in class.
第3回：Work on individual research project and discuss in class.
第4回：Work on individual research project and discuss in class.
第5回：Work on individual research project and discuss in class.
第6回：Work on individual research project and discuss in class.
第7回：Work on individual research project and discuss in class.
第8回：Work on individual research project and discuss in class.
第9回：Work on individual research project and discuss in class.
第10回：Work on individual research project and discuss in class.
第11回：Work on individual research project and discuss in class.
第12回：Work on individual research project and discuss in class.
第13回：Work on individual research project and discuss in class.
第14回：Work on individual research project and discuss in class.
第15回：Present individual research project.

教科書 Materials will be provided.

成績評価方法

レポート 50% レポートによる評価
平常点評価 50% 平常点による評価

備考・関連URL <http://scottlab.org/scottzemi/>

情報メディア教育論ゼミ（１） A（春学期）

森田 裕介

授業概要 情報メディアを活用した教育の一つとして、オンデマンド・コンテンツの利用があげられる。本演習では、オンデマンドコンテンツの作成から配信まで、すべてを一人で行うための基礎的な技能を習得する。まず、サーバの構築の演習を行う。OSはLinuxとし、コマンドの復習から動画配信サーバの構築までを実施する。次に、オンライン学習コンテンツの作成を行う。ネットワークに関する基礎的な知識をベースとして、映像教材の開発を行う。続いて、学習管理システムに関する演習を行う。具体的にはMoodleなどフリーのLMS（Learning Management System）を取り上げる。最後に、オンライン学習の評価に関する演習を行う。

授業の到達目標

本講義の到達目標は、（１）コンテンツを配信するためのサーバをひとりで構築できる、（２）オンライン学習コンテンツを一人で作成することができる、（３）学習管理システムの仕組みを理解し、オンライン学習を管理することができる、の3点である。

授業計画

第1回：導入
第2回：サーバの構築（１）：Linuxのインストール
第3回：サーバの構築（２）：コマンド
第4回：サーバの構築（３）：Webサーバ
第5回：サーバの構築（４）：ファイル共有
第6回：サーバの構築（５）：ストリーミング・サーバのインストール
第7回：サーバの構築（６）：ストリーミング・サーバの設定
第8回：ネットワーク映像配信（１）：動画配信とUDP
第9回：ネットワーク映像配信（２）：映像のエンコードとデコード
第10回：オンライン学習コンテンツの開発（１）：サンプル紹介
第11回：オンライン学習コンテンツの開発（２）：設計と計画
第12回：オンライン学習コンテンツの開発（３）：動画撮影
第13回：オンライン学習コンテンツの開発（４）：キャプチャとノンリニア編集
第14回：オンライン学習コンテンツの開発（５）：エンコーディング
第15回：まとめ

参考文献 適宜紹介**成績評価方法**

レポート 40% 正確な知識を習得し、講義の内容を踏まえて自分の意見を論理的に述べることができる。
平常点評価 30% 講義に出席し、積極的に発言したり活動に貢献したりすることができる。
その他 30% 講義に関する課題を遂行することができる。

備考・関連URL 各自でPCを用意し、CGソフトウェアをインストールする必要がある。どうしてもPC等を準備できない場合は教員に相談をすること。

情報メディア教育論ゼミ（１） B（秋学期）

森田 裕介

授業概要 情報メディアを活用した教育の一つとして、オンデマンド・コンテンツの利用があげられる。本演習では、オンデマンドコンテンツの作成から配信まで、すべてを一人で行うための基礎的な技能を習得する。まず、サーバの構築の演習を行う。OSはLinuxとし、コマンドの復習から動画配信サーバの構築までを実施する。次に、オンライン学習コンテンツの作成を行う。ネットワークに関する基礎的な知識をベースとして、映像教材の開発を行う。続いて、学習管理システムに関する演習を行う。具体的にはMoodleなどフリーのLMS（Learning Management System）を取り上げる。最後に、オンライン学習の評価に関する演習を行う。

授業の到達目標

本講義の到達目標は、（１）コンテンツを配信するためのサーバをひとりで構築できる、（２）オンライン学習コンテンツを一人で作成することができる、（３）学習管理システムの仕組みを理解し、オンライン学習を管理することができる、の3点である。

授業計画

第1回：導入
第2回：オンライン学習コンテンツの開発（１）：動画・音声の配信実験
第3回：オンライン学習コンテンツの開発（８）：オーサリングツールの活用
第4回：オンライン学習コンテンツの開発（９）：オーサリングツールによる同期
第5回：オンライン学習コンテンツの開発（10）：Webサーバと動画配信サーバの活用
第6回：オンライン学習コンテンツの開発（11）：学習コンテンツの配信実験
第7回：学習管理システム（１）：学習管理システムの実際
第8回：学習管理システム（２）：オンライン学習の実際
第9回：学習管理システム（３）：学習履歴
第10回：学習管理システム（４）：学習支援方法
第11回：学習管理システム（５）：BBSによる討議
第12回：学習管理システム（６）：Blog
第13回：オンライン学習の評価（１）：システム
第14回：オンライン学習の評価（２）：コンテンツ
第15回：まとめ

参考文献 適宜紹介**成績評価方法**

レポート 40% 正確な知識を習得し、講義の内容を踏まえて自分の意見を論理的に述べることができる。
平常点評価 30% 講義に出席し、積極的に発言したり活動に貢献したりすることができる。
その他 30% 講義に関する課題を遂行することができる。

備考・関連URL 各自でPCを用意し、CGソフトウェアをインストールする必要がある。どうしてもPC等を準備できない場合は教員に相談をすること。

情報メディア教育論ゼミ（２） A（春学期）

森田 裕介

授業概要 情報メディアを活用した教育の一つとして、バーチャルリアリティ教材の作成を行う。まず、コンピュータグラフィックスの基礎を学び、プリミティブの配置、マテリアル、テクスチャマッピング、カメラの配置、ライティングなどを習得する。続いて、VR空間の立体映像表示を試みる。

授業の到達目標

本講義の到達目標は、（１）コンテンツを配信するためのサーバをひとりで構築できる、（２）オンライン学習コンテンツを一人で作成することができる、（３）学習管理システムの仕組みを理解し、オンライン学習を管理することができる、の３点である。

授業計画

- 第1回：導入
- 第2回：立体映像教材の基礎（１）：奥行き感と立体映像
- 第3回：立体映像教材の基礎（２）：両眼立体情報
- 第4回：立体映像教材の基礎（３）：奥行き感度
- 第5回：立体映像教材の基礎（４）：立体視の特性
- 第6回：立体映像教材の基礎（５）：立体映像と視覚負担
- 第7回：立体映像教材の基礎（６）：立体ディスプレイ
- 第8回：立体映像の撮影（１）：カメラフォルダの取扱い
- 第9回：立体映像の撮影（２）：デュアルカメラの特性
- 第10回：立体映像の撮影（３）：映像特性
- 第11回：立体映像の編集（４）：デュアルカメラ映像のノンリニア編集
- 第12回：立体映像の編集（５）：偏光式立体映像
- 第13回：立体映像の編集（６）：裸眼式立体映像
- 第14回：立体映像の編集（７）：液晶シャッター式立体映像
- 第15回：まとめ

参考文献 適宜紹介

成績評価方法

レポート 40% 正確な知識を習得し、講義の内容を踏まえて自分の意見を論理的に述べることができる。
平常点評価 30% 講義に出席し、積極的に発言したり活動に貢献したりすることができる。
その他 30% 講義に関する課題を遂行することができる。

備考・関連URL 各自でPCを用意し、CGソフトウェアをインストールする必要がある。どうしてもPC等を準備できない場合は教員に相談すること。

情報メディア教育論ゼミ（２） B（秋学期）

森田 裕介

授業概要 情報メディアを活用した教育の一つとして、バーチャルリアリティ教材の作成を行う。まず、コンピュータグラフィックスの基礎を学び、プリミティブの配置、マテリアル、テクスチャマッピング、カメラの配置、ライティングなどを習得する。続いて、VR空間の立体映像表示を試みる。

授業の到達目標

本講義の到達目標は、（１）コンテンツを配信するためのサーバをひとりで構築できる、（２）オンライン学習コンテンツを一人で作成することができる、（３）学習管理システムの仕組みを理解し、オンライン学習を管理することができる、の３点である。

授業計画

- 第1回：導入
- 第2回：コンピュータ・グラフィックスの基礎（１）：ソフトウェア
- 第3回：コンピュータ・グラフィックスの基礎（２）：モデリング
- 第4回：コンピュータ・グラフィックスの基礎（３）：テクスチャマッピング
- 第5回：コンピュータ・グラフィックスの基礎（４）：アニメーション
- 第6回：コンピュータ・グラフィックスの基礎（５）：特殊効果
- 第7回：CG教材の作成（１）：ソフトウェアの活用
- 第8回：CG教材の作成（２）：モデリングの実際
- 第9回：CG教材の作成（３）：テクスチャマッピングの実際
- 第10回：CG教材の作成（４）：アニメーションの実際
- 第11回：CG教材の作成（５）：特殊効果の実際
- 第12回：仮想空間の構築（１）：CG教材の立体映像提示
- 第13回：仮想空間の構築（２）：インタラクティブ性
- 第14回：仮想空間の構築（３）：デバイス
- 第15回：まとめ

参考文献 適宜紹介

成績評価方法

レポート 40% 正確な知識を習得し、講義の内容を踏まえて自分の意見を論理的に述べることができる。
平常点評価 30% 講義に出席し、積極的に発言したり活動に貢献したりすることができる。
その他 30% 講義に関する課題を遂行することができる。

備考・関連URL 各自でPCを用意し、CGソフトウェアをインストールする必要がある。どうしてもPC等を準備できない場合は教員に相談すること。

ネットワーク情報システム学ゼミ（１） A（春学期）

金 群

授業概要 情報処理の基礎理論および高度な応用技術について学ぶ。利用者の振る舞いを考慮した人間中心のネットワーク情報システムをテーマに、ソフトウェア工学の基礎および人間的な側面、データベース技術、分散並列データ処理技術、データマイニングなどについて、具体例を通して、文献輪読や討論会を含む形で講義を進める。

授業の到達目標 ・ゼミ（２）とあわせて、ネットワーク情報システムに関する新たなモデル手法とフレームワーク、構築法などを理解し、研究遂行上必要な基礎知識と関連する基盤技術および問題発見・解決力を身につける。

授業計画

- 第1回：イントロダクション（授業の概要と進め方）
- 第2回：ソフトウェア工学の基礎
- 第3回：ソフトウェア開発プロセス
- 第4回：ソフトウェア工学の人間的な側面
- 第5回：プログラミングの心理学
- 第6回：ソフトウェア工学の文化
- 第7回：ソフトウェア工学の最新トピックス
- 第8回：中間まとめ・討論会
- 第9回：データベース技術
- 第10回：分散データベース技術
- 第11回：分散並列データ処理技術
- 第12回：Big Data
- 第13回：データマイニング
- 第14回：データ処理技術の最新トピックス
- 第15回：総まとめ・討論会

教科書 とくに指定しない

参考文献 授業中に紹介

成績評価方法

レポート 60% 中間レポート（20%）と期末レポート（40%）の完成度と考察内容を総合して評価する
平常点評価 40% 出席状況、授業内での発言、週ごとの進捗報告を総合して評価する

備考・関連URL 授業中に紹介

ネットワーク情報システム学ゼミ（１） B（秋学期）

金 群

授業概要 情報処理の基礎理論および高度な応用技術について学ぶ。利用者の振る舞いを考慮した人間中心のネットワーク情報システムをテーマに、ユーザモデルの基礎、人間情報行動のモデル化、ヒューマンコンピュータインタラクション、ユーザエクスペリエンスなどについて、具体例を通して、文献輪読や討論会を含む形で講義を進める。

授業の到達目標 ・ゼミ（２）とあわせて、ネットワーク情報システムに関する新たなモデル手法とフレームワーク、構築法などを理解し、研究遂行上必要な基礎知識と関連する基盤技術および問題発見・解決力を身につける。

授業計画

- 第1回：イントロダクション（授業の概要と進め方）
- 第2回：ユーザモデルの基礎
- 第3回：ユニバーサルユーザモデル
- 第4回：統一ユーザモデリング
- 第5回：人間情報行動のモデル化
- 第6回：挙動認知情報学
- 第7回：ユーザモデルの最新トピックス
- 第8回：中間まとめ・討論会
- 第9回：ヒューマンコンピュータインタラクション（HCI）
- 第10回：ユーザインタフェースの高度化
- 第11回：ユーザエクスペリエンス
- 第12回：ユーザビリティ
- 第13回：パーベシブHCI
- 第14回：HCIの最新トピックス
- 第15回：総まとめ・討論会

教科書 とくに指定しない

参考文献 授業中に紹介

成績評価方法

レポート 60% 中間レポート（20%）と期末レポート（40%）の完成度と考察内容を総合して評価する
平常点評価 40% 出席状況、授業内での発言、週ごとの進捗報告を総合して評価する

備考・関連URL 授業中に紹介

ネットワーク情報システム学ゼミ（２） A（春学期）

金 群

授業概要 ユビキタス、クラウド、ライフログなど最新のコンピューティング技術とネットワーク技術について学ぶ。コンピュータと人間が協調できるネットワーク情報システムをテーマに、サイバー空間と実社会の統合、個人化サービス、ソーシャルメディア、情報融合などについて、具体例を通して、文献輪読や討論会を含む形で講義を進める。

授業の到達目標
ゼミ（１）とあわせて、ネットワーク情報システムに関する最新の技術動向と展望を理解し、研究遂行上必要な要素技術と研究方法論を習得する。

授業計画

- 第1回：イントロダクション（授業の概要と進め方）
- 第2回：サイバー空間と実社会の統合
- 第3回：ユビキタスコンピューティング
- 第4回：ユビキタスサービス
- 第5回：クラウドサービスのモデル構築
- 第6回：個人化サービス
- 第7回：ユビキタスコンピューティングの最新トピックス
- 第8回：中間まとめ・討論会
- 第9回：ソーシャルコンピューティング
- 第10回：ソーシャルネットワーク分析
- 第11回：ソーシャルメディア
- 第12回：情報融合
- 第13回：ライフログ：ライフタイムにわたる情報マネジメント・利活用
- 第14回：ライフログの最新トピックス
- 第15回：総まとめ・討論会

教科書 とくに指定しない

参考文献 授業中に紹介

成績評価方法

レポート 60% 中間レポート（20%）と期末レポート（40%）の完成度と考察内容を総合して評価する
平常点評価 40% 出席状況、授業内での発言、週ごとの進捗報告を総合して評価する

備考・関連URL 授業中に紹介

ネットワーク情報システム学ゼミ（２） B（秋学期）

金 群

授業概要 ユビキタス、クラウド、ライフログなど最新のコンピューティング技術とネットワーク技術について学ぶ。コンピュータと人間が協調できるネットワーク情報システムをテーマに、サステイナブルな情報共有活用、人間中心のネットワーク情報システム、ネットワーク情報システムの高度化で生じる諸課題と社会への影響などについて、具体例を通して、文献輪読や討論会を含む形で講義を進める。

授業の到達目標
ゼミ（１）とあわせて、ネットワーク情報システムに関する最新の技術動向と展望を理解し、研究遂行上必要な要素技術と研究方法論を習得する。

授業計画

- 第1回：イントロダクション（授業の概要と進め方）
- 第2回：情報探索
- 第3回：情報推薦
- 第4回：サステイナブルな情報共有活用
- 第5回：CSCW・グループウェア
- 第6回：人間中心のネットワーク情報システムのビジョン
- 第7回：ネットワーク情報システムの最新トピックス
- 第8回：中間まとめ・討論会
- 第9回：eラーニング
- 第10回：eヘルス
- 第11回：eツーリズム
- 第12回：ネットワーク情報システムの高度化で生じる諸課題と社会への影響
- 第13回：Computing for Well-Being
- 第14回：ネットワーク情報システム応用の最新トピックス
- 第15回：総まとめ・討論会

教科書 とくに指定しない

参考文献 授業中に紹介

成績評価方法

レポート 60% 中間レポート（20%）と期末レポート（40%）の完成度と考察内容を総合して評価する
平常点評価 40% 出席状況、授業内での発言、週ごとの進捗報告を総合して評価する

備考・関連URL 授業中に紹介

局地環境観測実習

太田 俊二／井内 美郎／松本 淳

授業概要 大気、気象、水質に関する各5回ずつの観測実習を通じて、観測値の意味するところとその限界を理解する。大気観測では、光化学オキシダントに関連する微量成分の計測を中心とした実習を行なう。気象観測では、正しい温度観測の在り方と日射計の使い方に焦点を当て実習する。水質観測では地下水の観測方法、底質観測では位置測定方法や底質の分析方法を中心に実習する。数回の講義以外は、各実験室及びキャンパス周辺での観測実験を行う。

授業の到達目標

- ・身近な環境である大気・気象・水質・底質の観測方法を習得する
- ・局地の現象のモニタリングから地域や地球規模の現象を考える
- Ad56-3、4、B56-3、4

授業計画

- 第1回：都市郊外大気観測（1）オゾン
- 第2回：都市郊外大気観測（2）窒素酸化物
- 第3回：都市郊外大気観測（3）揮発性有機化合物
- 第4回：都市郊外大気観測（4）気象要素
- 第5回：都市郊外大気観測（5）総合的な解析
- 第6回：地下水とは－観測の意義・ガイダンス－
- 第7回：地下水水位・水温・水質測定実習
- 第8回：観測井の位置および標高測定実習
- 第9回：自動観測データの回収と解析
- 第10回：水質・底質観測まとめ－気象観測データとの比較－
- 第11回：気象観測（1）観測準備
- 第12回：気象観測（2）気温
- 第13回：気象観測（3）短波放射、長波放射
- 第14回：気象観測（4）風速
- 第15回：気象観測（5）データの整理

成績評価方法

- レポート 50% レポートによる評価
平常点評価 50% 平常点による評価

備考・関連URL 実習授業という性格上、時限とは別に集中的に実験や観測をすることがある。

質的調査法特論

池岡 義孝

授業概要 社会調査の方法は、統計的技法を用いた計量的方法と事例や言説データなどを用いた質的方法に大別できる。戦後の社会調査の歴史のなかでは、欧米でもわが国でも、計量的方法が科学的方法として優位を占めてきたが、近年、計量的方法では明らかにすることができない対象のリアリティに接近する方法として質的調査法が注目を集めている。本特論では、社会調査における質的データの特性を確認し、質的調査研究の歴史を概観したうえで、ドキュメント分析、インタビュー調査、会話分析など、複数の質的調査法を実習を含めて学習する。

授業の到達目標

- ・質的データの収集と分析の方法について、既存の研究をレビューすることで理解する。
- ・実際にその方法を使って質的データの収集と分析を実施できるようになる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス（本特論の目的と概要）
- 第2回：質的調査研究の歴史1（欧米の場合）
- 第3回：質的調査研究の歴史2（日本の場合）
- 第4回：新聞・雑誌記事のデータ収集の方法1（講義）
- 第5回：新聞・雑誌記事のデータ収集の方法2（実習）
- 第6回：新聞・雑誌記事のデータ分析の方法1（講義）
- 第7回：新聞・雑誌記事のデータ分析の方法2（実習）
- 第8回：インタビュー調査の方法（講義）
- 第9回：インタビューデータの分析方法（講義）
- 第10回：インタビュー調査の実習1（インタビューの実施）
- 第11回：インタビュー調査の実習2（インタビューデータの分析）
- 第12回：会話分析の方法（講義）
- 第13回：会話分析の実習1（データ作成）
- 第14回：会話分析の実習2（データ分析）
- 第15回：総括（全体のまとめと質的調査研究の将来展望）

参考文献 各回の授業で使用する文献を、その都度指定する。

成績評価方法

- レポート 50% レポートによって学習成果を評価する。
平常点評価 50% 毎回の報告やディスカッションで理解度および授業への積極性を評価する。

社会学説特論

木村 正人

授業概要 社会学が対象とする近代社会の重要な成立契機は、個人の自由の志向にある。同時にそれは近代の社会科学が国家や社会を構想する際の礎であり続けてきたが、「無縁社会」という表現に見られるように社会そのものの瓦解と液化が進む今、個人の自由＝社会からの解放が人々を幸福にするという確信が揺らいでいるように思われる。この講義では「行為と社会における自由」をキーワードに、古典から現代に至る主要な社会理論を概説し、「自由主義」的な社会秩序のさまざまなモデルと課題について考察する。

授業の到達目標

- 近代社会の理論と歴史を理解する (Ac 6-3、B56-3)。
- 主要な社会学説によって社会学理論を理解する (C 6-1)。
- 理論を応用し、現代社会の諸問題について考察する (C 6-2、D56-2)。

授業計画

- 第1回：行為選択の論理と倫理：近代社会と社会学
- 第2回：危害原理と古典的自由主義：モーゼの十戒とJ. S. ミル
- 第3回：暴力の独占と立憲主義：T. ホッブズとJ. ロックの国家論
- 第4回：愚行と共感の倫理：蜂の寓話とA. スミス
- 第5回：楽園と力：I. カントと9. 11以後の世界秩序
- 第6回：マクドナルドの合理性と鉄の檻：M. ヴェーバーと〈再〉魔術化する現代
- 第7回：自由からの逃走と〈絆〉への回帰：3. 11以後の社会について考える
- 第8回：まとめと復習

参考文献

教場で指示する。

成績評価方法

- レポート 70% 理論の把握と考察の論理性と妥当性。
- 平常点評価 30% 質疑等、授業参加の積極性。

備考・関連URL

受講者が大人数にならない限り、毎回議論の時間を設けたい。積極的な参加を望む。
<http://kimuramasato.wordpress.com/>

文化人類学の理論と方法

蔵持 不三也／矢野 敬生

授業概要 本授業は、文化人類学において著名な論文やエスノグラフィを読み（和文・英文）、人類学的研究の意義と限界を考察することを目的としている。文献のトピックは主に、文化概念、文化の記述および翻訳、フィールドワーク、人類学の下位分野（宗教人類学、開発人類学、都市人類学など）などである。文化人類学は19世紀末に学問として確立した分野であるが、それ以前の世界史や21世紀以降の社会の変遷を視野に入れながら、また、隣接科学との関連性も考慮しながら議論を重ね、考察につなげたい。

授業の到達目標

- ・文化人類学を大学院レベルで総合的に理解し、文化および社会現象の分析における人類学的視座の意義を考察することができる (B56-3)
- ・文化人類学の理論や方法を自らの専門性と関連付けて応用または援用することができる (C 6-1)

授業計画

- 第1回：ガイダンス（授業の進め方、教科書の指定）
- 第2回：民族誌を読む（1）
- 第3回：民族誌を読む（2）
- 第4回：近代民族誌に関する課題と展開 ―ディスカッション
- 第5回：民族誌を読む（3）
- 第6回：民族誌を読む（4）
- 第7回：文化批判以降の民族誌に関する課題と展開 ―ディスカッション
- 第8回：まとめ（人間科学における文化人類学を考える）

教科書

- 第1～4回：B. マリノフスキー『西大西洋の遠洋航海者』、講談社
- 第5～8回：初回の授業で指定する

参考文献

市岡康子『KULA－貝の首飾りを探して南海をゆく』、コモンズ
太田好信『民族誌の近代への介入－文化を語る権利は誰にあるのか』、人文書院
春日直樹編『現実批判の人類学－新世代のエスノグラフィへ』、世界思想社
蔵持不三也（監修）『エコイマジネール』、言叢社
竹沢尚一郎『人類学的思考の歴史』、世界思想社
山口昌男『人類学的思考』、セリカ書房

成績評価方法

- レポート 50% 課題レポートの内容
- 平常点評価 50% 授業に臨む態度（授業準備、授業中の発言内容や頻度、など）

備考・関連URL

課題レポートは第7回に発表する予定です。

歴史学の理論と方法

加藤 茂生／村上 公子

授業概要

- ・過去とは何か、過去は正しく認識できるのか、歴史とは何か、など歴史哲学の基礎を学ぶ。
- ・歴史学の理論の変遷（実証主義、アナーカル派、マルクス主義、言語論的転回、ミクロヒストリー、ジェンダー史、ポストコロニアリズムなど）をたどり、幅広く史学史の基礎を学ぶ。
- ・一次資料の探索、史料批判、総合的推論など、現在の歴史家の研究法の基礎を学ぶ。

授業の到達目標

- ・歴史学の理論の変遷及び多様化を知り、さらに歴史叙述の変化を知ることを通じて、歴史とは何か、また歴史学の意義とは何かについて洗練された考察をすることができる。
- ・現在の歴史学の基本的な研究方法を知り、自分の研究に生かすことができる。
- ・歴史的考察を現代の政治的問題のアクチュアルな考察に生かすことができる。

中目標

C 5－1

B56－3

F56－1

授業計画

- 第1回：ガイダンス（担当：加藤茂生）
- 第2回：歴史哲学の基礎（担当：加藤茂生）
- 第3回：歴史学の理論：実証主義、マルクス主義、構造主義（担当：加藤茂生）
- 第4回：歴史学の理論：グローバルヒストリー、ポストコロニアリズム（担当：加藤茂生）
- 第5回：歴史学の理論：ジェンダー史（担当：村上公子）
- 第6回：歴史学の実践：史料批判（担当：村上公子）
- 第7回：歴史学の実践：歴史学における記憶と政治（担当：村上公子）
- 第8回：総括的討論（担当：村上公子）

教科書 授業時に指示する。

参考文献 授業時に指示する。

成績評価方法

レポート	20%	授業を通じて得た知見に基づいて自分の考えを記述する。
平常点評価	80%	テキストの理解力、洞察力等で評価する。

考古学の理論と方法

菊地 有希子

授業概要

ある時代を設定した考古学に関する研究論文をとり上げ、それを解説しながら、考古資料の特質と限界、考古学独自の分析方法、思考方法を明らかにし、隣接する歴史学・民俗学などの諸分野との学際的研究のあり方をみていく。すなわち、考古学の視点から、総合的・学際的研究を行うにあたっての課題と展望を考えることがこの講義の目的である。

授業の到達目標

- ・考古学の視点からの総合的・学際的研究を理解し、思考方法を身につける。

授業計画

- 第1回：型式と形式
- 第2回：ニューアーケオロジ
- 第3回：環境考古学
- 第4回：年代学
- 第5回：実験考古学
- 第6回：実験考古学
- 第7回：民族考古学
- 第8回：総合的・学際的な発掘調査について考える

参考文献 講義中に紹介

成績評価方法

レポート	50%	具体的な発掘調査例を取り上げ、総合的・学際的な調査計画を考える内容のレポート
平常点評価	50%	授業ごとの小レポートの内容、授業への参加度（質問・発言など）

環境デザイン学特論

佐藤 将之

授業概要 この講義における環境デザインとは、建築・都市空間を造るといった、単に物理的環境を設定するものだけではなく、プログラムや人員配置、さらには社会や文化にも及ぶものである。

建築の利用者＝人間を中心としながら建築・都市環境の使われ方に焦点を当て、環境行動研究・建築計画研究を主体とした環境デザインのこれまでとこれからを考える講義を行う。

授業の到達目標

本講義を通じて、人間の建築や都市の環境に対する構えを議論できる人材となることや、環境の使い方や環境とのつきあい方の提案ができる、環境デザイナーや人間環境のコーディネーター的な役割を担える知識を獲得してもらいたい。

授業計画

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：環境デザイン学の諸相
- 第3回：環境決定論・相互作用論・相互浸透論
- 第4回：環境デザインと行動場面
- 第5回：環境デザインと時間的移行：環境デザインにおけるアクションリサーチ
- 第6回：交流・コミュニティと環境デザイン
- 第7回：環境決定論と使い手からみた環境デザイン
- 第8回：総括

教科書 和田浩一・佐藤将之編著：フィールドワークの実践－建築デザインの変革をめざして－：朝倉書店

成績評価方法

レポート 30% 各自の興味あるものを講義で提供する視点で論じてもらう
平常点評価 70% 出席と議論参加

発達行動学特論

根ヶ山 光一

授業概要 発達を「行動」という生命現象から理解するという発達行動学において、親子の親和的・反発的相互作用やその発達の変化はきわめて重要な側面である。また親子は周囲のモノやヒト、及びそのシステムの中に位置付いており、そういった環境とどのような関係を構築しつつ発達するかも重要な論点である。本講義では、こういった子どもの自立発達について、とくに「子別れ」の観点から論じる。なお、本講義は教室での講義とオンデマンドとを交互に行うハイブリッド型とする。

授業の到達目標

- ・人間発達に関して基礎研究を実践に活かすことができる（C 6－1）
- ・親子を巡る社会問題に対して自らの立場から主張できる（E56－1、F56－1、G36－5）

授業計画

- 第1回：概要説明
- 第2回：離れつつ保護する1
- 第3回：離れつつ保護する2
- 第4回：子別れのプロセス1
- 第5回：子別れのプロセス2
- 第6回：ほどよい隔たりとは何か1
- 第7回：ほどよい隔たりとは何か2
- 第8回：総復習・討論

教科書 根ヶ山光一「＜子別れ＞としての子育て」NHK出版

参考文献 適宜指示

成績評価方法

平常点評価 80% 討論への参加度、問題意識の高さ
その他 20% 出席状況

備考・関連URL <https://sites.google.com/site/negayamawsd/>

健康・生命医科学基礎

永島 計 他

授業概要 授業は8人の健康・生命医科学を専門とする教授によって行われる。各教授が中心に行っている研究の最新の知見を紹介し、人間科学の一部としての健康・生命医科学研究を学び、各々の研究の発展につなげていく知識を提供する。

授業の到達目標

- ・人間科学としての健康・生命医科学を理解し、個々の研究に役立つ情報を得る
- ・人間科学を専門とする研究者としての基礎知識として健康・生命医科学の研究を知る

授業計画

- 第1回：オリエンテーション、環境生理学の最近の話題（永島 計）
- 第2回：神経内分泌学の最近の話題（山内兄人）
- 第3回：神経機能学の最近の話題（今泉和彦）
- 第4回：老化の医科学の最近の話題（千葉卓哉）
- 第5回：分子神経科学の最近の話題（榎原伸一）
- 第6回：運動制御、バイオメカニクスの最近の話題（鈴木秀次）
- 第7回：健康行動科学の最近の話題（竹中晃二）
- 第8回：総括（永島 計）

成績評価方法

レポート 100% 各講義終了後レポートを課し、総合点で評価

保健医療福祉文献検索評価法

扇原 淳

授業概要 疫学の基本的知識およびEvidence based Healthcareの考え方に加えて、多種多様な保健医療福祉情報を適切に吟味し、利用する方法を学習する。

具体的には、学生自らが主体的に研究を推進できるように、PubMed、医学中央雑誌をはじめとした保健医療福祉分野で使用頻度の高いデータベースやwebサイトの利活用法を学習する。さらに、修士論文作成に不可欠な体系的に文献をまとめる技術を身につける。

授業の到達目標

- ・保健医療福祉領域に関する研究を推進するために、各種データベースを用いた情報検索ができる。
- ・収集した学術論文や情報を批判的に吟味し、自らの研究に主体的に利活用できる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：疫学基礎理論・EBHC
- 第3回：保健医療福祉文献データベース（Pubmed／医学中央雑誌他）
- 第4回：研究を進めるうえで使えるWebサイト
- 第5回：体系的文献レビューの方法
- 第6回：体系的文献レビュー実習（1）
- 第7回：体系的文献レビュー実習（2）
- 第8回：まとめ

成績評価方法

レポート 60% レポートによる評価
平常点評価 40% 平常点による評価

生活支援工学特論

畠山 卓朗

授業概要 人は誰しも加齢に伴い、身体や認知面に何らかの障がいを抱える。障がいがある方や高齢の方が自立して生き生きとして日常生活や様々な活動を行うために生活支援工学をどのように応用できるかについて、履修者のそれぞれの研究背景や関心事を基にして、講義、グループワーク、プレゼンテーションなどを織り交ぜながら授業を進める。

授業の到達目標

高齢社会における人の生活への工学技術応用に関して、多様な視点からの考察ができるようになる。(C 6-1)
与えられた改善課題に対して、チームワークを通して課題解決のためのプランを提示できるようになる。(D56-2)

授業計画

- 第1回：ガイダンス、思考のためのツールを紹介
- 第2回：生活支援工学の現状を知る（肢体不自由、コミュニケーション障がいなど）
- 第3回：生活支援工学の現状を知る（感覚系障がい、認知面での障がい、加齢による影響など）
- 第4回：ハイテクノロジー対 シンプルテクノロジー、工学技術導入のあり方について考える
- 第5回：各自の関心事を可視化、プレゼンテーション
- 第6回：問題の深層に迫る（特性要因図の活用）
- 第7回：生活をデザインする（グループワーク）
- 第8回：まとめ

参考文献 適宜、紹介する

成績評価方法

レポート 40% 新しい気づきや発見、新たに生じた疑問や課題、学んだことを今後どう活かすかについて明確に述べられているかどうかを評価する
平常点評価 60% 授業内での発言、課題提出状況等を総合して評価する

備考・関連URL <http://homepage2.nifty.com/htakuro>

福祉サービス・支援評価法

岩崎 香／田中 英樹

授業概要 近年、福祉サービスを提供した結果、その成果について明確に提示することが求められている。しかしながら、福祉専門職のクライアントへの関わりは多様であり、個別的な側面を持っているために評価が難しいと言われている。開発されている評価方法は様々であるが、その中のひとつである質的研究法を取り上げながら、実践現場のリアリティをどう表現するかということに関して学ぶ。

授業の到達目標

社会福祉実践の現状や成果を表現し、評価する方法の一つとしての質的研究について理解を深める。

授業計画

- 第1回：効果測定の一方法としての質的研究の位置づけ
- 第2回：社会福祉実践における実証研究の意義
- 第3回：質的研究法①
- 第4回：質的研究法②
- 第5回：質的研究法③
- 第6回：質的研究による社会福祉実践の評価事例①
- 第7回：質的研究による社会福祉実践の評価事例②
- 第8回：研究がもたらす実践現場への貢献

参考文献 授業の中で提示

成績評価方法

レポート 50% レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうか
平常点評価 50% 授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。

心身医学特論

野村 忍／山蔦 圭輔

授業概要 心身医学は、患者を身体面のみならず心理社会面をも含めて全人的なアプローチを行う医学である。この科目では、心身症、神経症やうつ病などの病態についての理解および診断・治療法について、講義および実習を行う。また、最新のトピックスについてのレポート発表およびディスカッションを通して学習を深める。

授業の到達目標

心理臨床を志す人を対象として、必要な心身医学的知識・技術の習得を目標とする。

授業計画

第1回：授業の概要と進め方
第2回：心身医学総論
第3回：薬物療法
第4回：循環器系心身症
第5回：消化器系心身症
第6回：呼吸器系心身症
第7回：不安障害
第8回：気分障害
第9回：心理療法
第10回：自律訓練法の実習
第11回：交流分析の実習
第12回：研究発表（1）
第13回：研究発表（2）
第14回：研究発表（3）
第15回：レポート課題と解説

教科書 なし。適宜レジュメを配布する。

参考文献 野村忍、情報化時代のストレスマネジメント、日本評論社、2006。

成績評価方法

レポート 50% レポートの内容、発表について総合的に評価する。
平常点評価 50% 授業内での学習態度、発言の内容を総合的に評価する。

学習心理学特論

国里 愛彦

授業概要 学習心理学における代表的な学習理論の概説を行う。また、実践場面への応用に関して、いろいろな行動変容プログラムや各種技法にふれ、その理論的背景との関連について考察をしていく。さらに、人間のさまざまな問題に対して、学んだ学習理論を用いた支援方法や行動変容プログラムなどの立案に關しても解説する。

授業の到達目標

- 代表的な学習理論を理解する。
- 学習理論を応用した行動変容プログラムを立案することができる。

授業計画

第1回：学習心理学についてのイントロダクション、授業での評価方法、各回の講義内容について説明します。
第2回：学習心理学であつかう学習や行動といった用語、本能行動、馴化について説明し、関連するテーマについてディスカッションを行います。
第3回：古典的条件づけの基本的枠組みと日常生活での古典的条件づけ現象について説明し、関連するテーマについてディスカッションを行います。
第4回：ワトソンのアルバート坊やを題材に恐怖条件づけとその消去について説明し、関連するテーマについてディスカッションを行います。
第5回：様々な種類の古典的条件づけや古典的な理解では説明できない阻止・隠蔽現象について説明し、関連するテーマについてディスカッションを行います。
第6回：第5回で扱う阻止や隠蔽現象を題材にして、レスコーラ・ワグナーモデルについて説明し、関連するテーマについてディスカッションを行います。
第7回：対人援助における古典的条件づけの応用について説明します。その上で、生活において古典的条件づけによって解決できそうな問題を探し、解決策を計画してもらいます（レポート1：提出は第8回までに）。
第8回：第7回から行っている古典的条件づけの応用に関して、見つけた問題点と解決案について発表してもらいます。それを基にして、ディスカッションを行います。
第9回：ソーンダイクからスキナーに至るまでの歴史も踏まえつつ、オペラント条件づけについて説明します。日常生活でのオペラント条件づけ現象についてディスカッションを行います。
第10回：オペラント条件づけにおける強化・消去や強化スケジュールについて説明し、関連するテーマについてディスカッションを行います。
第11回：オペラント条件づけにおける回避と罰について説明し、それが対人援助の中でどのように応用されているのか説明します。関連するテーマについてディスカッションを行います。
第12回：オペラント条件づけにおける弁別刺激による反応制御について説明し、関連するテーマについてディスカッションを行います。
第13回：オペラント条件づけの応用として、行動分析学について説明します。応用に際して注意すべき基本的な事項を説明し、生活上の解決したい行動をピックアップして、ペースラインの計画をしてもらいます（レポート2の準備）。
第14回：行動分析を実際の生活上の問題に応用する方法について例を交え説明します。実際に自分の生活で試してみ、その結果をレポートにしてもらいます（レポート2：提出は第15回）。
第15回：第14回から行っている行動分析の実践に関して、各自見つけた問題点と解決案について発表してもらい、それを基にディスカッションを行います。

教科書 「学習の心理 行動のメカニズムを探る」 実森正予・中島定彦（著）サイエンス社 1,500円（税別）

参考文献

「メイザーの学習と行動」 ジェームズ・E・メイザー（著）二瓶社 4,000円（税込）
「行動分析学入門」 杉山向子、島宗理、佐藤万哉、リチャード・W・マロット、マリア・E・マロット（著）産業図書 3,600円（税込）

成績評価方法

試験 60% 授業内容に関して学期末に試験を実施する。
レポート 40% 授業中に2回レポートを出します。（1）期日内の提出（5%）、（2）求められた課題を行っているか（5%）、（3）応用上の工夫点（10%）の3点から採点をします。

備考・関連URL 受講にあたり前提知識は求めません。本講義は、前半で学習心理学に関する講義を行い、後半ではその学習内容に関連したディスカッションを行います。そのため、自発的な参加や意欲的な学習態度を強く求めます。

精神薬理学特論

蜂須 貢

授業概要 精神疾患の治療は薬物療法と心理療法が主であり、難治には更にmECT (modified electro convulsive therapy)、TMS (trans magnetic stimulation) やDBS (deep brain stimulation) が使われている。これらはアプローチは違うが、いずれも脳の機能に変化を与え正常化することを目的としている。その中でも薬物療法はターゲットが明確であるので、脳の機能変化と症状の改善を結びつけて考えることができる。それ故、統合失調症治療薬、抗うつ薬、抗不安薬、抗てんかん薬、双極性障害治療薬、パーキンソン症治療薬、抗認知症薬などについて、最新の脳科学を基礎としてその作用と作用機序および副作用について学んでいく。

授業の到達目標

- ①上記に挙げた各精神疾患の治療薬を列挙し、疾患の主な原因とその治療薬の作用機序を述べる事が出来る。
- ②上記に挙げた各精神疾患の主な副作用を挙げる事が出来る。

授業計画

- 第1回：薬理学入門：心理療法と薬物療法の効果および脳機能変化の差異
- 第2回：薬理学入門：作動薬、拮抗薬、薬物-受容体相互作用、用量作用曲線、セカンドメッセンジャー
- 第3回：薬理学入門：薬物代謝（吸収、分布、代謝、排泄）、肝薬物代謝酵素、半減期、血中濃度、脳内移行、脳内分布
- 第4回：抗不安薬・睡眠導入薬：ベンゾジアゼピン、セロトニン（5-HT）1A部分作動薬
- 第5回：抗うつ薬：モノアミン仮説と抗うつ薬
- 第6回：抗うつ薬：三環系、SSRI、SNRI、NaSSAなど
- 第7回：抗うつ薬：神経新生、BDNF (brain derived neurotrophic factor)
- 第8回：統合失調症治療薬：ドパミン神経、グルタミン酸神経
- 第9回：統合失調症治療薬：定型抗精神病薬、非定型抗精神病薬
- 第10回：抗てんかん薬：Naチャネル阻害、GABA活性化 etc.
- 第11回：双極性障害治療薬：リチウム、抗てんかん薬、アリピプラゾール
- 第12回：パーキンソン症治療薬：ドパミン神経とその活性化剤
- 第13回：認知症治療薬：認知症の種類と薬剤
- 第14回：アルツハイマー認知症治療薬：コリンエステラーゼ阻害薬、グルタミン酸受容体拮抗薬
- 第15回：試験

教科書 臨床精神薬理ハンドブック 樋口輝彦、小山司、神庭重信（編）第2版 2009年11月、8,925円 ISBN 978-4-260-00866-2

参考文献

1. こころの病に効く薬-脳と心をつなぐメカニズム入門- 渡邊雅幸 著 2,415円
2. 精神神経薬理学エッセンシャルズ-神経科学的基礎と応用- 第3版 スティーヴン・M. ストール 著、仙波純一（訳）14,700円

成績評価方法

試験 60% 回答の内容
平常点評価 40% 出席率、授業態度など

臨床心理学研究法特論

綿井 雅康

授業概要 本講義の目的は、臨床心理学の主要な研究法である実験計画法・調査研究法について、実証的な研究を進めるために必要となる実際の方法をできるだけ実践的に習得することである。研究目的、検証すべき仮説、収集データの特性に応じて、どのような統計手法を活用すべきか判断できるようになることを目指す。さらに、臨床における実践を対象とした事例研究法について、その意義と方法について理解することを目指す。

授業の到達目標

臨床心理学領域で実証的な研究を進めるために、研究計画を立て、目的に即して適切な方法でデータを収集し、適切な統計手法を活用した解析が実践できるようになることを目指す。理論的な理解とともに、実践的な分析力や判断力を養い、自ら工夫しながら統計分析を進める態度を養う。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：基礎統計などの復習
- 第3回：実験計画法
- 第4回：分散分析の基礎
- 第5回：分散分析の応用
- 第6回：心理統計の新展開：効果量・信頼区間・検定力
- 第7回：尺度構成法
- 第8回：尺度構成法と因子分析
- 第9回：回帰分析
- 第10回：多変量解析法
- 第11回：共分散構造分析（1）
- 第12回：共分散構造分析（2）
- 第13回：臨床における実践研究（1）：準実験、単一事例実験
- 第14回：臨床における実践研究（2）：事例研究、会話分析
- 第15回：総まとめ

教科書 プリントを配布

参考文献 講義内にて適宜紹介する

成績評価方法

レポート 30% 研究計画の立案および研究データの解釈に関する課題を出題する。出題趣旨に沿った「解答」ができていないのかを評価対象とする。
平常点評価 70% 授業内で出題する課題の点数に出席状況を加えて評価する

臨床心理査定特論 I

熊野 宏昭／山蔦 圭輔

授業概要 ロールシャッハ・テストは、投影法パーソナリティ検査の中で最もよく使われているものである。その理由は、パーソナリティ障害、精神病的障害、発達障害などが疑われる場合に、1回の検査で臨床的判断に役に立つ情報が得られるからである。また、他の投影法検査と比べて、データベースが充実しており、自動診断システムも開発され、実証的な研究の数が多いことも利点となる。本講義では、2人1組でお互いに検査を実施し、発表も担当しながらスコアリングと解釈の進め方を身につける。さらには、臨床心理アセスメント全体の理解も目指す。

授業の到達目標

ロールシャッハ・テストの実施法、スコアリング法、解釈法に関する基礎知識を身につけ、臨床現場で実地に使用するために必要な能力を養成すると同時に、臨床心理アセスメント全体とのつながりも理解する。

授業計画

- 第1回：臨床心理アセスメント概説
- 第2回：心理テスト理解の基礎
- 第3回：ロールシャッハ・テストの基本と実施技法
- 第4回：検査実施実習（1）
- 第5回：検査実施実習（2）
- 第6回：スコアリングのための基礎知識：テキストのプレゼンテーション
- 第7回：スコアリング実習：『ロールシャッハ自動診断システム』ケース
- 第8回：解釈のための基礎知識：テキストのプレゼンテーション
- 第9回：解釈実習（1）：『ロールシャッハ自動診断システム』ケース
- 第10回：解釈実習（2）：『臨床心理士過去問』
- 第11回：臨床心理アセスメントの展望（1）
- 第12回：臨床心理アセスメントの展望（2）
- 第13回：臨床心理アセスメントの展望（3）
- 第14回：臨床心理アセスメントの展望（4）
- 第15回：まとめ

教科書 ロールシャッハ自動診断システム（日本文化科学社）－講義中に貸与する。

参考文献 改訂臨床心理アセスメントハンドブック（北大路書房）。

成績評価方法

レポート 20% 発表の際のレポートについて評価する。
平常点評価 80% 授業出席や発表参加状況等から評価する。

備考・関連URL 下記URLにある「ロールシャッハ自動診断システム」を使用する。
<http://jspp.gr.jp/doc/pro00.html>

臨床心理査定特論 II

大月 友／佐々木 和義

授業概要 対象者理解の留意点、様々な心理査定法の解釈法、行動観察法、テストバッテリーの組み方、および報告書の書き方について講義する。特に、前半の講義では各種の知能検査法や発達検査を用いた対象者理解と支援計画の立て方を、中心に学ぶ。後半の講義では、行動観察による機能分析を用いた対象者理解と支援計画（行動的介入技法）の立て方を中心に、講義とグループワークを通して学んでいく。

授業の到達目標

・臨床心理の査定の力量（査定方法と評価書）が専門家の水準で実施できる。

授業計画

- 第1回：心理査定とは。知能検査の歴史。田研式ビネー検査とウェクスラー式知能検査の構造の比較。
- 第2回：他の知能検査、発達検査。対象者の状態像（注意・覚醒水準、感覚・認知障害、失行など）。
- 第3回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際：事例（1）
- 第4回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際：事例（2）
- 第5回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際：事例（3・4）
- 第6回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際：事例（5・6）
- 第7回：K-ABCについて。心理評価書の書き方。
- 第8回：行動分析学の考え方
- 第9回：行動的アセスメント：機能分析
- 第10回：機能分析実習：不安障害
- 第11回：機能分析実習：気分障害
- 第12回：機能分析実習：学校不適応（1）
- 第13回：機能分析実習：学校不適応（2）
- 第14回：行動的介入計画の立案
- 第15回：まとめ

教科書 なし。適宜資料を配布する。

参考文献 講義中で適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 50% 与えられた課題を講義内容を踏まえて深く考察しているか評価する。
平常点評価 50% 授業への出席や討議への参加状況について評価する。

備考・関連URL 第1～7回は佐々木担当。8～15回は大月担当。

安全人間工学特論

石田 敏郎

授業概要 人間工学は、異なるシステムおよび環境下における精神的、身体的タスクを行うための人間の役割、能力およびその限界を研究することを目的としている。本講では、近年多発するヒューマンエラーに関し、その考え方、分析の方法および人間工学的対策立案に関して、実際の事例分析を通して理解する。

授業の到達目標

- (1) 安全人間工学の基礎的知識が理解できる。Ad56-2
- (2) ヒューマンエラーの分析が可能となる。C 6-2

授業計画

- 第1回：安全人間工学の概要
- 第2回：事故分析の方法
- 第3回：事故分析の方法
- 第4回：事故事例分析
- 第5回：事故事例分析
- 第6回：事故事例分析
- 第7回：事故事例分析
- 第8回：事故事例分析

参考文献

教場で指示

成績評価方法

- レポート 80% レポートによる評価
- 平常点評価 20% 発表

感性心理学特論

齋藤 美穂

授業概要 感性は、その研究の視点も研究方法やアプローチも多岐にわたる非常に幅広い研究テーマである。そこで、この特論では、まず感覚と感性について基礎的側面を概説したあと、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当てて、応用的側面に関して講義する。特にノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知科学的側面や近年着目を浴びている多感覚研究に着目することを手がかりとして感性を考えて行く。また文化的な共通点を知ると共に、相違点を講じることで、感性に対する理解を深めるのと同時に、自文化や他文化の理解を深めて行く。なお授業はフルオンデマンドで行われる。

授業の到達目標

感覚と感性についての基礎的側面、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当てた応用的側面、そして特にノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知科学的側面に着目して感性を考える。また文化的な共通点や相違点を知ると同時に、自文化や他文化の理解を深める。最終的には各人の感性に対する見解を論理的にまとめることを到達目標とする。

授業計画

- 第1回：感性とは？感性研究のテーマの理解
- 第2回：感性の基礎的側面の理解：感覚と感性（視知覚の諸特性）
- 第3回：感性の基礎的側面の理解：感覚と感性（視知覚の脳内情報処理メカニズム）
- 第4回：感性の基礎的側面の理解：感覚と感性（聴覚と嗅覚の諸特性と情報処理）
- 第5回：感性の基礎的側面の理解：感覚と感性（味覚と触覚の諸特性と情報処理）
- 第6回：感性の基礎的側面の理解：感性の測定方法
- 第7回：感性の応用的側面の理解：嗜好と感性（色彩嗜好の国際比較・肌の色の好みと国際比較・概念色の国際比較など）
- 第8回：感性の応用的側面の理解：感覚協調と多感覚研究（色と香り、色と音）および感性研究の可能性

成績評価方法

- レポート 80% 授業内容の把握状況、レポート課題への取り組み、内容の深さなど
- 平常点評価 20% 授業への参加状況、積極性

感情心理学特論

鈴木 晶夫

授業概要 感情の定義はいろいろな側面から記述できる。「精神の働きを知・情・意に分けた時の情的過程全般を指す。情動・気分・情操などが含まれ、主体の状況や対象に対する態度あるいは価値づけをする心的過程」と広義に考え、感情研究の歴史、感情の生物学的・神経心理学的アプローチ、感情の測定・アセスメント、感情の発達、個人差・文化差、感情の表出と解釈、文化と社会、臨床、感情障害、健康、感情に関連する社会的プロセスなど、その関連領域を幅広くとらえられる視点を養う。

授業の到達目標

- ・感情心理学関連について専門的知識の説明ができる。
- ・関連の研究方法の理解と適用ができる。
- ・批判的・創造的な論理思考を形成する。
- ・感情心理学を通じて個人的成長をとげる。

授業計画

- 第1回：受講のためのオリエンテーション
第2回：感情研究に関する哲学的背景・歴史
第3回：感情の定義・基本情動
第4回：感情の次元的研究
第5回：感情の測定方法
第6回：感情の表出・解釈
第7回：感情と発達、社会・文化
第8回：感情とストレス・健康・感情障害

教科書 特になし

参考文献 その都度指示する。

成績評価方法

- レポート 70% 課題に対する適切性、専門知識の理解度（プレゼンテーションを含む）
平常点評価 30% 授業における理解・関心度（教場レポートを含む）

知識情報科学特論

松居 辰則

授業概要 この講義では、「知識情報科学」について、人工知能に関する話題を基軸にして、基本的な理論や技術を多くの事例を通して紹介します。人工知能はコンピュータに「人間のような振る舞いをさせる」ことを目的とした、理論・技術です。人間の「知能」をコンピュータに実装することを目指しますが、そのためには、人間の知的な振る舞いに関する実験や観察から始まり、そのモデル化、そして実装……と方法論も様々で学際的です。講義の進め方は、数学的、技術的な話に偏ることなく、「人工知能」というものが正しくイメージできるようになることを目標とします。この講義を通して、人工知能の魅力を知ると同時に、その限界も知ることにより「人間とコンピュータの共存」、そして「人間の尊さ」というテーマについて深く考えます。

授業の到達目標

- ・「知識情報科学」、「人工知能」という分野に興味をもつ。
 - ・人工知能の歴史や基本的な理論、技術、モデル化手法を理解する。
 - ・自分の研究テーマにおいて学際的な視点で「知識情報科学」との関連を意識することが出来る。
 - ・「人間とコンピュータとの共存」、「人間の尊さ」について「情報科学的な視点から」深く考えることができる。
- 【中目録No.】 B56、C 5-1、C 6、D56、E56、G36

授業計画

- 第1回：講義の内容の説明、人工知能研究の目指すもの、人工知能研究の歴史
第2回：知識の定義、知識の分類、知識の表現方法
第3回：問題表現、知識表現（木構造、フレーム表現、意味ネットワーク、オントロジー）
第4回：様々な探索技法（深さ優先、幅優先、A*アルゴリズム、ゲーム木探索 など）
第5回：様々な推論方式（非単調推論、仮説推論、定性推論、確率推論 など）
第6回：命題論理による知識表現と推論方式
第7回：述語論理による知識表現と推論方式、簡単なPrologプログラミング
第8回：述語論理における推論の原理（融合原理、極小限定 など）
第9回：論理による柔軟な知識表現（様相論理、非単調論理、ファジィ論理）
第10回：ニューラルネットワーク（神経細胞のモデリング、学習のメカニズム）
第11回：遺伝的アルゴリズム（進化過程のモデリング、ヒューリスティックな最適化のアルゴリズム）
第12回：人工知能の応用システム（1） エキスパートシステム、知的学習支援システム など
第13回：人工知能の応用システム（2） データマイニング、機械学習、情報検索 など
第14回：感性情報科学（1） 感性や暗黙知への科学的アプローチ
第15回：感性情報科学（2） スキルサイエンス、脳科学によるアプローチ

教科書 特に指定しません。講義中に関連資料を配布します。

参考文献 講義中に適宜紹介します。

成績評価方法

- レポート 80% 講義期間中にレポート課題を3回程度出題し、講義内容の理解度を確認します。レポートの内容によって評価します。全て期限内に提出することが単位取得のための最低条件になります。
平常点評価 20% 毎回、レビュシート（簡単な問題を含む）への記入を求めます。期限内に記入することで出席として扱います。欠席1回につき2点の減点とします。

備考・関連URL

- （注1）この講義は「オンデマンド方式」で行います。
（注2）前提知識は特に必要ありません。
（注3）それぞれのトピックスを毎回の講義で深く触れることは不可能です。講義中に多くの関連資料を提示しますので、興味のある諸君は積極的に学習していただきたいと思います。
（注4）講義の中でプログラミングをすることはありませんが、推論や学習のサンプルプログラムを配布するので、自主的にコンピュータへの実装を試みてください。

生活人間工学特論

加藤 麻樹

授業概要 人間工学は、人間と機械との関わり方を最適化することで、安全性、効率性、快適性を向上させることを目的とする研究である。日常生活で用いられる道具や機械は身近であるがために、その適正について評価されることは少なく、その機会があったとしても主観的評価が中心となる。生活人間工学特論では日常生活上身近に存在する課題に対して、客観的な評価を行い、科学的アプローチによって生活の質の向上に寄与する技術の適用について考察する。

授業の到達目標

- ・生活上の潜在的課題発見能力を身につける。
- ・課題解決のための技術を的確に適用する能力を身につける。

授業計画

- 第1回：本授業の目的と進め方・生活人間工学の背景とニーズ
第2回：人-機械系 生活環境の構築
第3回：人間に対する測定技術
第4回：日常生活における人間の行動特性の評価
第5回：人間に対する測定技術
第6回：日常生活における課題発見と解決
第7回：生活人間工学事例研究
第8回：まとめ

教科書 必要に応じて教場で指示する。

参考文献 必要に応じて教場で指示する。

成績評価方法

- レポート 40% 不定期に実施するレポートを評価する。
平常点評価 60% ゼミ中の発言や提出物を評価する。

視覚デザイン特論

市原 茂

授業概要 視覚系の構造と機能、照明と視覚刺激の特性、色や明るさの知覚、形態知覚、空間知覚、運動知覚、感覚間相互作用など、人間の感覚と知覚のメカニズムを解説するとともに、関連するトピックスを紹介する。そして、デザインへの応用を視野に入れた応用研究を展望する。

授業の到達目標

- (1) 人間の感覚・知覚研究の研究方法を理解する。
(2) 人間の感覚と知覚の基本的なメカニズムを理解する。
(3) 視覚研究のデザインへの応用例を学ぶことで、柔軟な発想と応用力を身につける。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス／本講義の目的と概要について説明します。
第2回：視覚刺激／照明・視覚刺激について解説します。
第3回：視覚系のメカニズム／視覚系の構造と働きについて解説します。
第4回：色と明るさの知覚（1）／メカニズムを解説し、関連するトピックスを紹介します。
第5回：色と明るさの知覚（2）／メカニズムを解説し、関連するトピックスを紹介します。
第6回：形態知覚（1）／メカニズムを解説し、関連するトピックスを紹介します。
第7回：形態知覚（2）／メカニズムを解説し、関連するトピックスを紹介します。
第8回：空間知覚（1）／メカニズムを解説し、関連するトピックスを紹介します。
第9回：空間知覚（2）／メカニズムを解説し、関連するトピックスを紹介します。
第10回：運動知覚（1）／メカニズムを解説し、関連するトピックスを紹介します。
第11回：運動知覚（2）／メカニズムを解説し、関連するトピックスを紹介します。
第12回：感覚間相互作用（1）／メカニズムを解説し、関連するトピックスを紹介します。
第13回：感覚間相互作用（2）／メカニズムを解説し、関連するトピックスを紹介します。
第14回：視覚とデザイン／視覚研究のデザインへの応用例を紹介します。
第15回：レポート課題と解説／授業のまとめを行いレポート課題の解説を行います。

教科書 教科書は使用しない。必要に応じて資料を配布する。

参考文献

菊池正（編） 海保（監修）「感覚知覚心理学」 朝倉心理学講座6 朝倉書店
ドナルド・D・ホフマン（著） 原・望月（訳）「視覚の文法 一脳がものを見る法則一」 紀伊國屋書店

成績評価方法

レポート 100% 課題は14回目の授業で提示します。与えられた課題に対して、どれくらい深い考察がなされているのか、講義で話した事柄の本質が、どれくらい理解されているのかという点をあわせて評価します。

備考・関連URL

<http://www.cogsci.uci.edu/~ddhoff/vi6.html> （運動視のデモ）
<http://www.bri.ntt.co.jp/illusionForum/index.html> （錯視のデモ）

MRIによるヒト脳機能画像研究特論

渡邊 丈夫

授業概要 磁気共鳴画像法 (MRI) は、強力な磁場と電磁波を用いて生体内部を画像化する方法であり、解剖学的形態を画像化するだけでなく、脳血流変化を計測することにより脳機能を画像化することもできる。近年、MRIを用いたヒト脳機能研究により、脳の様々な解剖学的部位とそれらが持つ機能との関連が急速に明らかにされつつある。

本講座では MRI 実験や画像解析法の理論および実際のヒト脳機能局在研究に関するゼミナール形式の授業を行う。主に機能的 MRI (fMRI) を対象とするが、他の非侵襲脳機能画像研究も積極的に参考にする。

授業の到達目標

- ・ MRI の撮像原理およびヒト脳機能画像実験や画像解析法の理論を学習した上で、受講生自身の興味に沿って文献調査を行う。
- ・ さらに先行研究で明らかにされていないテーマを自ら決定し、実験を計画して発表を行い、質疑応答を通して実験計画を検討・改善する。
- ・ 可能な限り実際に遂行可能で脳科学的価値のある実験を計画する。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：MRI実験や画像解析法の理論に関する講義
- 第3回：MRI実験や画像解析法の理論に関する講義
- 第4回：MRI実験や画像解析法の理論に関する講義
- 第5回：MRI実験や画像解析法の理論に関する講義
- 第6回：受講生による文献調査・発表
- 第7回：受講生による文献調査・発表
- 第8回：受講生による文献調査・発表
- 第9回：受講生による文献調査・発表
- 第10回：受講生による文献調査・発表
- 第11回：受講生による実験計画・発表・検討
- 第12回：受講生による実験計画・発表・検討
- 第13回：受講生による実験計画・発表・検討
- 第14回：受講生による実験計画・発表・検討
- 第15回：受講生による実験計画・発表・検討する。

参考文献

各種書籍、論文

成績評価方法

レポート	35%
平常点評価	30%
その他	35% (発表)

備考・関連URL 発表は毎週約 3 人ずつ、20分以内のプレゼンテーションおよび10分の質疑応答とする。

インストラクショナルデザイン特論

向後 千春

授業概要 インストラクショナルデザインにおける先端のトピックについてその動向を知るとともに、自分の研究との関連性を見つけ出す。

授業の到達目標

1. インストラクショナルデザインの領域における先端のトピックについて知る
2. インストラクショナルデザイン領域のトピックを自分の研究テーマに結びつける
3. 以上のトピックについて研究計画を立案することができる

授業計画

- 第1回：インストラクショナルデザインの先端トピックの概観
- 第2回：先端トピック「フロー」の紹介と議論
- 第3回：先端トピック「ゲーム」の紹介と議論
- 第4回：先端トピック「インフォグラフィック」の紹介と議論
- 第5回：先端トピック「ソーシャルラーニング」の紹介と議論
- 第6回：先端トピック「学習の意味」の紹介と議論
- 第7回：先端トピック「所属と貢献」の紹介と議論
- 第8回：まとめと振り返り

参考文献

適宜指示する。

成績評価方法

レポート	40%	形式が指示に従っていることと、考察の深さを評価します。
平常点評価	30%	ワークへの積極的参加を評価します。
その他	30%	個人課題を評価します。

備考・関連URL 関連URL：向後研究室ホームページ <http://kogolab.wordpress.com/>

インターネット科学特論

西村 昭治

授業概要 およそ10億台のコンピュータが接続され約30億人のユーザがいるというインターネットの世界は様々な意味で新しい研究対象となっている。本講義ではインターネットの定義から始まり、その歴史をひもとくとともにそれを成り立たせる様々な技術の解説を試みる。また、インターネット上の様々なサービスを解説するとともに、今後の動向について考察する。
※本授業は全回オンデマンド授業として実施する。

授業の到達目標

・インターネットを主として研究対象の側面から正しく理解し、そこにおいての自らの研究方法を立案できる。

【中目標 No.】 B56-2、B56-3、B56-4、C 6-1、G36-4

授業計画

- 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）
第2回：インターネットの仕組み
第3回：インターネットの歴史
第4回：インターネット上の様々なサービス
第5回：検索エンジンの仕組みと歴史
第6回：検索エンジンの機能
第7回：インターネット上のデータの収集法
第8回：インターネット上のデータの分析法：テキスト
第9回：インターネット上のデータの分析法：テキスト以外
第10回：インターネット上のデータの分析ツール：形態素解析器、係り受け解析器
第11回：インターネット上のデータの分析ツール：R
第12回：インターネット上のデータの分析ツール：Weka
第13回：インターネット科学研究の実際：調査・分析研究
第14回：インターネット科学研究の実際：開発研究
第15回：まとめ

参考文献 授業中に指示する。

成績評価方法

試験	行わない。
レポート	実施しない。
平常点評価	100% 毎回のBBSへの参加度合いを基準とする。
その他	評価しない。

学習環境デザイン特論

尾澤 重知

授業概要 「学習環境デザイン」は、人材育成や教育研究などの実践的活動において、創造的な「学びの場」をデザインし、学習の支援や活動の評価を目指す試みである。本授業では、国内外の大学教育、企業内人材育成、企業内大学の先進事例を踏まえつつ、知識科学や学習科学、教育工学の知見に基づき学習支援のあり方や、学習支援の方法、ツールについて検討を行い、履修者各自の研究領域に応用を図ってもらうことを目指す。

授業の到達目標

- (1) 様々な専門性をつないで「インタープロフェッション」を推進する知識や技能を身につけている。(E)
(2) 人間的事を複眼的な視点から捉え、そこに解決すべき課題を発見することができる。(C)
(3) 課題探究（フィールドや実験）プロジェクトをマネジメントすることができる。(D)

授業計画

- 第1回：事前課題に対するフィードバック
第2回：学習環境の評価方法（1） 研究方法の確認
第3回：学習環境の評価方法（2） 研究方法の確認（演習）
第4回：学習環境の評価方法（3） 研究デザイン
第5回：学習環境の評価方法（4） 研究デザイン（演習）
第6回：学習環境の評価方法（5） 実験と実践研究
第7回：学習環境の評価方法（6） 実験と実践研究（演習）
第8回：プレゼンテーション技法（1）
第9回：プレゼンテーション技法（2）（演習）
第10回：論文構成法（1）
第11回：論文構成法（2）（演習）
第12回：相互評価（1）
第13回：相互評価（2）（演習）
第14回：最終プレゼンテーション
第15回：最終プレゼンテーションへのフィードバック

教科書 履修者の研究内容に応じて適時、指定する場合がある。

参考文献 履修者の研究内容に応じて適時、指定する。

成績評価方法

平常点評価	70% 授業内の研究発表、ディスカッションへの貢献度
その他	30% 研究全体の取り組み、学会発表、学内外の活動への貢献

備考・関連URL ・授業順序や扱う割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。

教育開発特論

野嶋 栄一郎

授業概要 教育実践の場における測定の問題を、CSCW、情報のモダリティと測定の関係、ヒトの行動と文脈等をテーマに具体的な論文を利用して解説する。

授業の到達目標

・教育実践の場における測定方法について開発を含め、新しい試行を提案する

授業計画

- 第1回：学力観と教育測定観（総論）
- 第2回：実体的学力観と機能的学力観
- 第3回：学習成果の評価から学習過程の評価へ
- 第4回：行動主義、認知科学、社会的構成主義の学力観と教育学
- 第5回：狭義的教育測定から広義的教育測定へ
- 第6回：ヒトの行動と文脈（総論）
- 第7回：ヒトの行動は文脈の中で変わるか？
- 第8回：異なった文脈下における衝動型－熟慮型の変容実験
- 第9回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈（1）
- 第10回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈（2）
- 第11回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈（3）
- 第12回：ヒトとヒトが対峙する関係とヒトとコンピュータが対峙する関係
- 第13回：メディアと教育測定（総論）
- 第14回：情報のモダリティと測定
- 第15回：視聴テスト

教科書 「教育実践を記述する－教えること・学ぶことの技法－」野嶋栄一郎編（2002）金子書房

成績評価方法

レポート 100% 60点を通過基準とする

教育システム工学特論

野口 裕之

授業概要 心理学の研究や臨床場面で用いられる「心理測定尺度」や実際の教育場面で用いられる「テスト」は、その結果が個人の処遇や研究成果に大きな影響を及ぼすため、細心の注意をもって作成され、その性能について慎重に評価される必要があります。

この講義では、「心理測定尺度」や「テスト」を開発・評価するのに必要な「項目分析法」や「テスト理論」の基本事項について解説する予定です。統計数理の理論的側面に偏らず、実際の大規模外国語能力テストを例にして、実用水準におけるテスト理論の有用性を理解してもらえるように配慮します。

授業の到達目標

- 1) 大規模テスト開発に関する実際の手順およびそれを支える理論（テスト理論）の概要を理解する、
- 2) 例えばTOEFLやPISA調査のホームページに掲載されている専門的な研究報告の内容を理解できるようになる、
- 3) 受験者のパフォーマンスを評価する際の評価者の影響についての取り扱い方法の例を理解する。

授業計画

- 第1回：テストとはどのようなものか－テストの分類－
- 第2回：テスト開発の流れ
- 第3回：項目分析の方法
- 第4回：測定における誤差の取り扱い
- 第5回：古典的テスト理論1－信頼性係数の定義－
- 第6回：古典的テスト理論2－信頼性係数の推定－
- 第7回：古典的テスト理論3－測定の妥当性－
- 第8回：外国語試験の分析
- 第9回：日本語能力の測定
- 第10回：項目応答理論1－その必要性－
- 第11回：項目応答理論2－モデル－
- 第12回：項目応答理論3－尺度の等化およびリンキング－
- 第13回：項目応答理論4－特異項目（DIF）分析－
- 第14回：パフォーマンスの測定－多相ラッシュ・モデル－
- 第15回：全体を通しての質問と回答および確認テスト

教科書 特に定めません。

参考文献 授業中に適宜紹介します。

成績評価方法

試験 80% 授業内容の習得状況を確認するテストを実施します。
平常点評価 20% 出席状況、質問等による参加度を評価します。

備考・関連URL 統計的方法の予備知識としては、平均・分散・標準偏差・相関係数という術語がわかる程度を仮定するだけでありますが、数式は見るのも嫌だ、記号は嫌いだ、という方にはこの講義は向きません。ただし、高校で数学が得意であった必要は全くありません。きちんと理解するためには自分で手を動かして数式を展開することにも必要になりますが、基本的なところは丁寧に解説する予定です。

教育情報工学特論

永岡 慶三

授業概要 論理的思考や数理的思考と教育・学習について講究する。論理・数理・水平思考パズルを通して、テクノロジー化や教育への適用を目的に、設計・評価の方法論および基本理念・指針について討論する。「論理的能力はパズルでテストできる」(パートランド・ラッセル)。

授業の到達目標

- ・ 論理的思考や数理的思考の問題／パズルを解決することができる。
- ・ 論理的思考や数理的思考の問題／パズルと教育・学習の関係について解説できる。
- ・ 論理的思考や数理的思考の問題／パズルとテクノロジー化や教育への適用を説明し、アイデアを出せる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス。論理および数理、思考と教育・学習
- 第2回：論理問題について討議と考察
- 第3回：数理問題について討議と考察
- 第4回：物理問題について討議と考察
- 第5回：心理問題について討議と考察
- 第6回：水平思考問題について討議と考察
- 第7回：問題評価・作成演習
- 第8回：確認テストと講評

参考文献 適宜紹介する

成績評価方法

- 試験 30% 論理的思考や数理的思考などの問題を出題して評価する
平常点評価 70% 各回授業における討論への参加度などで評価する

マルチメディア特論

金子 孝夫

授業概要 音声、静止画、映像などの各種マルチメディア情報のそれぞれの高度な表現法と技術の詳細について理解することを目標に講義する。これらの各メディアを統合し、コンピュータ上で処理する技術(情報圧縮、メディア処理)、ならびにマルチメディアを支えるハードウェアとソフトウェア(記録、再生、編集処理)についての情報を中心に解説し、さらにマルチメディア技術の応用について実習を行う。第1回目の授業のみ対面授業またはオンデマンド授業で実施し、第2回目以降はオンデマンド授業で実施する。

授業の到達目標

マルチメディア情報に関して習得した高度な表現法と技術を応用し、パソコンやメディア処理ソフトウェアなどを利用して、静止画・音声・動画を含むマルチメディアコンテンツを制作・編集し、自らの主張を情報発信できるようになる。

授業計画

- 第1回：授業の内容紹介、自己紹介など(対面授業またはオンデマンド授業)
- 第2回：静止画(画像とデジタルカメラ)(オンデマンド授業)
- 第3回：静止画(画像とデジタルカメラ)(オンデマンド授業)
- 第4回：音声(音の性質・デジタル音声)(オンデマンド授業)
- 第5回：音声(音の性質・デジタル音声)(オンデマンド授業)
- 第6回：動画(ビデオ録画・視聴と編集)(オンデマンド授業)
- 第7回：動画(ビデオ録画・視聴と編集)(オンデマンド授業)
- 第8回：実習課題(1)課題の説明(オンデマンド授業)
- 第9回：実習課題(1)(オンデマンド授業)
- 第10回：実習課題(1)レポートと課題の提出(オンデマンド授業)
- 第11回：実習課題(2)課題の説明(オンデマンド授業)
- 第12回：実習課題(2)(オンデマンド授業)
- 第13回：実習課題(2)レポートと課題の提出(オンデマンド授業)
- 第14回：実習のまとめ(オンデマンド授業)
- 第15回：実習課題の発表と講評(オンデマンド授業)

成績評価方法

- レポート 90% レポートと実習課題を評価する。
平常点評価 10% 出席状況。

備考・関連URL 第1回目の授業は、対面授業またはオンデマンド授業のいずれかを受講する。

メディアリテラシー特論

保崎 則雄

授業概要 This partially-bilingual class intends to work on collaborative group projects based on the basic knowledge of ML. Understanding media as a mediating artifact and a message is foundations of ML research. ML 育成の方法とカリキュラムの可能性を模索し、構築し、研究課題としてのフォーマットにまとめる。また、具体的な研究・実践活動では、生体情報データを扱うような視聴分析、広告の discourse 分析などを紹介しつつ、解釈学的な視点、評価分析の視点、さらに製作、創造的な視点を持ちつつ取り組むことを予定する。

授業の到達目標

受講生は、メディアリテラシー（ML）の基本的な理解を踏まえて、研究課題（メディアテキスト分析、映像分析、オーディエンス分析、教育・社会での評価、生産・流通過程の分析）を先行研究をもとに現実社会の問題として解決、説明することができるようになる。
プロジェクト遂行においては自分の考えを基盤とし、且つ、グループでの協働作業を通して実践できるようになる。

授業計画

第1回：Introduction to class (objectives, evaluation, assignment, etc) 授業紹介（課題、評価などについて）
第2回：Oral presentation of the assigned reading material 指定論文の口頭報告を行う
第3回：Oral presentation of the assigned reading material 指定論文の口頭報告を行う
第4回：Oral presentation of the assigned reading material 指定論文の口頭報告を行う
第5回：Oral presentation of the assigned reading material 指定論文の口頭報告を行う
第6回：Oral presentation of the assigned reading material 指定論文の口頭報告を行う
第7回：Project presentation and discussion 各自のプロジェクトの発表とディスカッション
第8回：Project presentation and discussion 各自のプロジェクトの発表とディスカッション

教科書 No single textbook 特に指定せず

参考文献

Media Literacy : New Agendas in Communication Edited by Kathleen Tyner 2010 College of Communication
"The Discourse of Advertising" 2nd ed. by Guy Cook 2001 ROUTLEDGE

成績評価方法

試 験 N.A. 該当せず
レポート 50% Final paper レポート
平常点評価 30% Attendance 出席
その他 20% Project presentation プロジェクトのプレゼンテーション

ワークショップデザイン特論

山内 祐平

授業概要 参加型体験学習の新しい様式として注目されているワークショップに関して、その歴史やデザインの特徴を検討し、実際にワークショッププランを作成することによって、創発的学習を志向した学習環境デザインについて実践的なスキルを学ぶとともに、その本質に迫る議論を行う。

授業の到達目標

- ・ワークショップについて歴史的、理論的に理解する。
- ・ワークショップのデザインについて実践的に理解する。
- ・ワークショップにおける学習について考察を深める。

授業計画

第1回：学習環境デザインとワークショップ（1）
第2回：学習環境デザインとワークショップ（2）
第3回：ワークショップの歴史（1）
第4回：ワークショップの歴史（2）
第5回：ワークショップ熟達者のデザインプロセス
第6回：ワークショップ熟達者のキャリア発達
第7回：ワークショッププランニング／グループ分け
第8回：ワークショッププランニング／テーマ設定（1）
第9回：ワークショッププランニング／テーマ設定（2）
第10回：ワークショッププランニング／学習活動のデザイン（1）
第11回：ワークショッププランニング／学習活動のデザイン（2）
第12回：ワークショッププランニング／学習空間のデザイン（1）
第13回：ワークショッププランニング／学習空間のデザイン（2）
第14回：ワークショッププランニング／総合討議
第15回：ワークショッププランの発表

教科書 山内祐平、森玲奈、安斎勇樹共著「ワークショップデザイン論」慶応義塾大学出版会、2012年3月 出版予定

参考文献 美馬のゆり、山内祐平共著「未来の学びをデザインする」東京大学出版会、2005年

成績評価方法

平常点評価 50% ワークショップ作成過程における協調学習
その他 50% 作成したワークショップの学習環境としての評価

備考・関連URL 山内研究室ウェブサイト：<http://blog.iii.u-tokyo.ac.jp/ylab>

人間環境変遷特論

井内 美郎

授業概要 地球規模環境問題の自然科学的側面の例として水収支を取り上げる。記録の指標として湖水面高度を取り上げ、その変動について研究の現状、日本での研究例について、現在進行中の研究も例にとりあげながら講義を展開する。

授業の到達目標

・地球規模気候変動に関する様々な要因を考慮して、日本列島の水収支についての議論が可能となる。

授業計画

- 第1回：水収支指標としての湖水面高度
- 第2回：湖水面高度推定法
- 第3回：世界の湖水面変動研究
- 第4回：湖水面高度を変動させるもの
- 第5回：野尻湖における湖水面変動の証拠
- 第6回：湖水面変動史に年代目盛りを入れる
- 第7回：なぜ湖水面高度が昇降を繰り返したか
- 第8回：なぜ寒冷期に湖水面が上昇するのか

教科書 特に指定しない

参考文献 適宜紹介する

成績評価方法

試験 60% 試験の満点を60点とする
平常点評価 40% 毎回小テストを実施する

備考・関連URL 開講回数の1/3以上欠席の場合、成績評価は行わない。

地球生態学特論

太田 俊二

授業概要 生態学は葉一枚のなかでの生物の動きから、地球規模の植物群系や純一次生産力の分布まで、さまざまな空間スケールを理解する学問である。また、生物の分布や個体数が時間的にどのように変化してきているのかを探るため、時間スケールは数秒から数十年、ときには数万年単位に及ぶこともある。この講義では比較的大きな空間（地球規模）と長めの時間スケールで生物の生きていく姿を追いかけていこうと考えている。

授業の到達目標

生態学的思考法と気候学的思考法から地球システムを定量的に捉えられる。
それをもとに地球環境問題を考えることができるようになる。
Ad56-3、4、B56-3、4

授業計画

- 第1回：生物群集とその分布（1）植物の環境形成作用と遷移、更新
- 第2回：生物群集とその分布（2）植物群系の成立
- 第3回：生物群集とその分布（3）植生の変動と気候要因
- 第4回：地球規模の生態学（1）生態モデリングー炭素収支との関連
- 第5回：地球規模の生態学（2）炭素、窒素循環など生物地球化学的循環
- 第6回：地球規模の生態学（1）水の循環
- 第7回：地球規模の生態学（2）地表面の変化、熱収支
- 第8回：地球環境システムのなかの生物の役割

教科書 太田俊二「変化する気候と食料生産ー21世紀の地球環境情報」コロナ社

参考文献 講義中に紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 理解度を随時直接評価する

大気環境科学特論

松本 淳

授業概要 大気環境科学の基礎概念のうち、特にラジカル種が関与する大気化学反応について対流圏オゾンを中心に講義する。1970年代以降対策が強化されているものの、対流圏オゾンは近年も増加傾向を示している。オゾンの前駆体である窒素酸化物と揮発性有機化合物、連鎖反応にて重要なラジカル種、の挙動や測定法を知り、ごくわずかしが存在しない微量成分が重要な影響を及ぼしている大気環境問題を考える。[Atmospheric Environmental Sciences]

授業の到達目標

- ・対流圏における大気微量成分の挙動に関する基礎理論を理解できるようになる
- ・最近の大気化学の研究動向を知る

授業計画

- 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本講義の目的と概要について説明します。
- 第2回：大気化学反応の基礎／気体成分の量と単位、気体分子反応論、大気ラジカル。
- 第3回：対流圏オゾン／ラジカル連鎖反応、オゾン生成機構、対流圏オゾンによる環境問題の概説。
- 第4回：大気中の窒素酸化物／種類、発生源、対流圏における反応、大気からの消失、夜間の大気化学。
- 第5回：揮発性有機化合物／種類、発生源、対流圏における反応、大気からの消失、夜間の大気化学。
- 第6回：大気微量成分の測定法／オゾン、窒素酸化物、揮発性有機化合物、大気ラジカル。
- 第7回：最近の大気質診断法／オゾン生成能、ラジカル反応性としての包括測定。
- 第8回：本講義の補足とまとめ／担当教員により実施された大気化学研究例の紹介、最近の研究動向、等。

教科書 指定しない。

参考文献 講義において随時紹介する。

成績評価方法

- レポート 50% 各自が資料・文献等を調査した成果を要約し報告するレポートを評価する。単に文献を紹介するだけでなく、講義内容にもとづいて基礎理論や文献の内容・目的を正しく理解しているか、およびそれらをわかりやすく報告できるか、等を評価の対象とする。
- 平常点評価 50% 毎回の授業時に実施する「練習問題」等により、理解度を評価する。

動物生態学特論

三浦 慎悟

授業概要 野生動物の行動生態学のうちとくに生活史戦略と関連する個体群生態学を取り上げる。多様な行動や生活史をもつ鳥類や哺乳類を対象に、その社会構造、繁殖システム、個体群の動態と成長、生活史などの基礎的な知識を習得し、これらを基礎に個体群のモデル化とシミュレーションの方法、生活史分析法を学び、野生動物保全と管理への応用を試みる。野生動植物個体群の生活史と動態に興味と関心のある者が望ましい。

授業の到達目標

動物の生活史と個体群生態学の概要を理解した上で、いくつかの動物の個体群動態モデルを作成し、その応用を試みることができる（B56-1、B56-3、B56-4、C 6-1、C 6-2、D56-1）。

授業計画

- 第1回：授業の概要とイントロダクション
- 第2回：適応度と生活史
- 第3回：生命表の解析
- 第4回：生物個体群の構造と動態
- 第5回：動物個体群のシミュレーション（1）
- 第6回：動物個体群のシミュレーション（2）
- 第7回：適応度と個体群感度分析（1）
- 第8回：適応度と個体群感度分析（2）

教科書 随時配布する

参考文献 梶田・岩佐編（2002）生態系とシミュレーション、朝倉書店

成績評価方法

平常点評価 100% 一連の授業プログラムと課題の累積的な達成であるため出席回数による。

環境生態学特論

三浦 慎悟／森川 靖

授業概要 地球環境問題の1つとしての野生動物の減少について取り上げる。動物は人間にとって不可欠である一方、動物は人間に大きな影響を受けてきた。この人間と野生動物との関係史を概観し、農耕と家畜化、生物資源としての野生動物の保全管理の取り組みをレビューし、その関係のあり方を考える。

授業の到達目標

・人間にとっての（野生）動物を生態学、歴史学、考古学、民俗学の視点から再評価し、その基本的な関係を理解できる（B56－1、B56－3、B56－4、C6－1、C6－2、D56－1）。

授業計画

- 第1回：インドトロダクション（生物の大量絶滅）
- 第2回：オーバーキル仮説
- 第3回：農耕と家畜化
- 第4回：キリスト教と野生動物
- 第5回：西欧史における動物
- 第6回：毛皮資源の収奪
- 第7回：野生動物管理への挑戦
- 第8回：環境倫理学

教科書 随時資料を配布する

成績評価方法

平常点評価 100% 出席回数

開発援助実践学特論 I

天野 正博

授業概要 先進国と途上国の間における南北問題を理解し、どのような援助が先進国がすべきか、その概念と具体的な技術的手法の習得を目的としている。具体的には、途上国援助における社会開発、経済開発の違いを理解する。さらに、社会開発を中心に住民のケイパビリティを向上させるための援助方法のについて、理論と技術を学ぶ。

授業の到達目標

開発援助に関する理論的な側面について理解することができる。また、実践に移すのに必要な技術を習得できる。

授業計画

- 第1回：開発援助の概論
- 第2回：環境劣化を引き起こすメカニズム
- 第3回：社会的貧困と経済的貧困
- 第4回：貧困を引き起こす社会経済的構造
- 第5回：南北間格差と公平性
- 第6回：社会開発の歴史
- 第7回：環境ガバナンス
- 第8回：社会開発についてのまとめ

成績評価方法

レポート 70% 最終回の授業において与えられた課題に対するレポートを提出する
平常点評価 30% 議論への参加度合い

備考・関連URL 途上国の貧困問題や環境の知識を必要とするため、環境あるいは社会領域のゼミに在籍しているか、熱帯林保全論の単位を取得していることが受講の条件である。

開発援助実践学特論Ⅱ

天野 正博

授業概要 国際協力機構（JICA）が実施している途上国の研修員向け授業（住民参加手法、農業耕作技術、水田技術、灌漑技術等）を、途上国からの研修員と共に受講する。参加する研修は、住民参加型の開発援助プログラム、農業技術の移転プログラムである。

授業の到達目標
開発援助の具体的な手法を習得できる。また、途上国からの研修生とのコミュニケーションを通して、南北問題の実態を理解できるようになる。

授業計画
第1回：JICAの途上国からの研修員向け授業に関するガイダンス
第2回：JICAの授業を受講し、JICAの開発援助の現状を把握する。
第3回：JICAの授業を受講し、JICAの開発援助プログラムについて学ぶ。
第4回：JICAの授業を受講し、住民参加の概念を習得する。
第5回：JICAの授業を受講し、住民参加を促す手法を学ぶ。
第6回：JICAの授業を受講し、住民参加の利点と問題点を理解する。
第7回：JICAの授業を受講し、途上国からの研修生と意見交換を行い、開発援助の必要性を学ぶ。
第8回：JICAの授業を受講およびレポートの提出する。

成績評価方法
レポート 40% JICA研修後に提出する
平常点評価 20% 議論への参加度合い
その他 30% JICAでの研修担当者による評価

備考・関連URL 途上国の貧困問題や環境の知識を必要とするため、環境あるいは社会領域のゼミに在籍しているが、熱帯林保全論の単位を取得していることが受講の条件である。また、約5日間にわたってつくば市にあるJICA筑波研修センターに通って、講義を受ける必要がある。

植物生態学特論

森川 靖

授業概要 人間の生存に必要な食料はすべて植物の物質生産にかかっている。また、地球環境保全において、二酸化炭素吸収源としての森林生態系、生物多様性保全としての生態系もすべて植物生存にかかっている。本講義では、生態系における物質循環、エネルギーの流れ、植物の光合成活動に依存する物質生産をとりあげ、植物生態学への理解と、環境研究へにおける基盤的な知識を身につける。

授業の到達目標
・環境研究を行ううえで、人類生存の基盤である植物生態系の構造と機能が理解できる（C5-1、B56-2、B56-4）。

授業計画
第1回：植物生態学における研究思想と方法論
第2回：生態系におけるエネルギーの流れ
第3回：生態系の物質循環……炭素循環
第4回：生態系の物質循環……窒素、リンなど
第5回：植物の成長習性
第6回：植物と水
第7回：植物生態学研究の現状と将来
第8回：地球環境保全における植物の役割……総合討論

成績評価方法
レポート 80% レポート課題に対する論理的記述
平常点評価 20% 討論参加と討論における講義への理解度

備考・関連URL ホームページ参照のこと
<http://www.f.waseda.jp/yasu/>

アジア地域研究特論

店田 廣文

授業概要 アジア社会が抱える諸課題に関する英文学術文献の講読をとおして、課題に関する知識の習得、課題への対処、および発表を行う。取り上げるテーマは、都市と都市化、人口変動、少子高齢化、人口移動や移民、多民族・多文化社会、イスラームなどから選択される。

授業の到達目標

- ・英文学術論文の書き方・読み方を習得する。(Aa 5-1)
- ・アジア社会の諸課題に内包されている普遍的かつ特殊な側面を理解する。(C5-1)
- ・学術文献の読解を通じて、アジア社会に関する情報を習得する。(G36-4)
- ・アジア社会に関する諸課題について、自分の見解をまとめて発表する。(G36-5)

授業計画

- 第1回：アジア地域研究イントロダクション
- 第2回：文献講読と発表・討論(1) 地域
- 第3回：文献講読と発表・討論(2) 人口
- 第4回：文献講読と発表・討論(3) 都市
- 第5回：文献講読と発表・討論(4) 都市化
- 第6回：文献講読と発表・討論(5) 人口移動
- 第7回：文献講読と発表・討論(6) 多民族
- 第8回：文献講読と発表・討論(7) イスラーム

教科書 特になし。

参考文献 特になし。

成績評価方法

- レポート 65% 構成、内容、文章作成などによる評価。
平常点評価 35% 出欠、発表への参加などによる評価。

家族社会学特論

池岡 義孝

授業概要 本講義では、日本の家族社会学の研究史を詳説する。対象とするのは、「家族社会学」という学問領域がまだ通常科学化していないなかで人類学や民俗学などとともに伝統的な家族である「家」の研究を行っていた戦前段階から、戦後それが通常科学化し「家族社会学」として独立し、現代家族の研究に取り組み研究成果を量産する段階、そして現実の家族の急激で大きな変動によって、家族社会学研究そのものも混迷を深めつつある現代までとする。また、日本の研究に影響を与えた欧米の研究についても、必要に応じて取り上げることにしたい。

授業の到達目標

- ・戦前から戦後、さらに現代に至るまでの家族社会学研究の研究史を理解する。
- ・1つの学問領域の成立と展開を理解することができる。
- ・受講生が専攻するそれぞれの研究領域において、その学問の成立と展開を比較検討できる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス(本講義の概要と進め方)
- 第2回：家族の科学的研究の歴史的発達段階：欧米と日本の場合
- 第3回：戦前の家族研究1：社会学および人類学・民族学による学際的な家族研究
- 第4回：戦後の家族社会学の再出発と通常科学化
- 第5回：批判的潮流1：マルクス主義的家族研究
- 第6回：批判的潮流2：人類学による家族・親族定義をめぐる批判
- 第7回：批判的潮流3：歴史学からする近代家族論
- 第8回：現代家族はどこにいくのか：家族の個人化、多様化論批判

参考文献 各回の授業で使用する文献を、その都度指定する。

成績評価方法

- レポート 70% 最終レポートによって学習成果を評価する。
平常点評価 30% 毎回の報告やディスカッションで理解度および授業への積極性を評価する。

環境社会学特論

鳥越 皓之

授業概要 環境社会学の基本的な考え方の理解をめざす。その方法論、現在の環境社会学の学史的動向、実際の環境社会学の論文を読んで、その内容を検討しながら、環境社会学的な実証のしかた、フィールドワークのありかた、論理展開の方法などをマスターするようにする。

授業の到達目標

ふたつのもくひょうをもつ。ひとつは、社会学的な考え方と分析方法を環境社会学を通じてマスターすることを目標とする。ふたつめは、社会学を基礎にした論文を執筆できることを目標とする。

授業計画

- 第1回：環境社会学的考え方
- 第2回：環境社会学の方法論
- 第3回：環境社会学的な実証方法
- 第4回：フィールドワークを通じてなにをつかみとるのが
- 第5回：環境社会学的論理展開
- 第6回：環境社会学における実践性
- 第7回：環境社会学的研究と施策への反映
- 第8回：社会の動向と環境問題の位置づけ

教科書 出席者の関心に合わせて、一回目の授業以降に決める。

成績評価方法

平常点評価 100% 授業での議論への参加や広告内容から判断をする。

備考・関連URL 社会学についての基礎知識をもっていることを授業に出席できることの条件とする。

地域資源特論

柏 雅之

授業概要 日本と世界の食料・農業・農村と地域環境に関する諸問題について学んでいく。海外ではEU（欧州連合）の農政改革や農村振興政策の意義と展望を学びながら、わが国が学べるものを考えていく。食料に関しては、フードシステム論、世界食料危機論などを学ぶ。農村再生に関しては、地域経営体やローカル・ガヴァナンスに関してまなんでいく。そして最後に日本農業・農村再生の論理と政策システムのあり方について学ぶ。

授業の到達目標

- ・日本と世界の農業・農村再生問題。
- ・フードシステム。
- ・世界食料危機、地域ガヴァナンスに関する専門的知見の涵養を深める。

授業計画

- 第1回：世界食料危機の示すもの
- 第2回：食料危機は激化するのか（悲観論と楽観論）
- 第3回：日本農業の構造問題
- 第4回：日本農業再生政策の2つの潮流
- 第5回：世界の農業農村政策の潮流
- 第6回：EU農政改革から学べるもの
- 第7回：農業と環境問題
- 第8回：農業環境政策の意義と展望

教科書 とくには指定しない。

参考文献

- 柏 雅之「現代中山間地域農業論」御茶の水書房、1994年。
- 柏 雅之「条件不利地域再生の論理と政策」農林統計協会、2002年。

成績評価方法

- レポート 50% 簡単なレポートを最後に提出してもらう。
- 平常点評価 50% 平常点による評価

都市社会学特論

臼井 恒夫

授業概要 今日の第3世界において、都市化とグローバリゼーションの進展は、都市のあり方や都市住民の生活にどのような影響を及ぼしているのだろうか。この授業では、上海、ソウル、バンコク、マニラ、シンガポール、ホーチミン市などのアジアの都市を事例としてとりあげながら、都市化の現状と都市問題の様相について検討を進めていく。

受講生は、毎回の授業の中でテキストの報告を分担しながら、そこでとりあげられた都市やトピックについての解説と問題提起を行うことが求められる。

授業の到達目標

- (1) 今日の第3世界における都市化の様相や特徴について理解する。
- (2) 大都市問題のテーマとして重視されている「貧困問題」や「環境問題」についての知識を身につける。
- (3) 雇用や環境問題をめぐる都市住民の行動や参画の有効性と限界を明らかにし、その可能性を広げるための方途について考察することができる。
- (4) 途上国の都市行政と都市政策の現状とその課題について知ることができる。

授業計画

第1回：オリエンテーション／本講義の目的と概要について解説しながら、次回以降の報告者の分担と報告のための準備について説明します。

第2回：The dimensions of urban growth in the Third World／第3世界の都市化と都市成長の様相について考察を加えていきます。

第3回：An historical perspective／第3世界の植民地化と独立後の国家形成という歴史的背景のもとで、都市形成の要因について考察を進めていきます。

第4回：Urban population growth／都市への人口移動と出生による自然増加の面から、都市の人口増加の問題について考えていきます。

第5回：Urban environmental matters／第3世界の大都市で深刻化する環境問題について理解を深めていきます。

第6回：Employment and incomes in the city／都市の産業や雇用の面から、都市住民の所得格差や貧困問題について考えていきます。

第7回：Basic needs and human rights／都市住民の生活保障や人権の問題について考察を進めていきます。

第8回：Planning and management／都市政策や都市計画の現状と課題について考えていきます。

教科書 David Drakakis-Smith, Third World Cities, Routledge, 1990.

本書をテキストとして使用しますが、こちらで用意しますので、受講生各自が事前に用意する必要はありません。

参考文献 関連する参考文献は適宜、授業の中で提示します。

成績評価方法

レポート 60% 授業期間中の2～3回程度のレポートで評価します。

平常点評価 40% 授業における報告と授業態度で評価します。

人口社会学特論

武田 尚子

授業概要 人口移動論、地域社会学、質的調査方法に関連する文献を講読し、調査方法の特徴、データ収集方法、分析の妥当性、知見の記述方法について、受講生が検討・報告し、ディスカッションする。

授業の到達目標

- ・講読した文献の内容について、社会学的意義が十分に理解できている。
- ・講読した文献をもとに、研究方法を工夫する。

授業計画

第1回：授業内容について、ガイダンス

第2回：文献講読と調査方法の検討 1

第3回：文献講読と調査方法の検討 2

第4回：文献講読とデータ分析内容の検討 1

第5回：文献講読とデータ分析内容の検討 2

第6回：文献講読と知見の記述方法の検討 1

第7回：文献講読と知見の記述方法の検討 2

第8回：ディスカッション総括

教科書 なし（講読文献は受講生と相談する）

参考文献 授業中に適宜指示する。

成績評価方法

レポート 30% 授業内容の理解度と応用力

平常点評価 70% 授業内容の理解度と積極性

階級・階層論特論

橋本 健二

授業概要 階級・階層論の学説史と近年の研究動向について概説する。基本的には講義形式で進めるが、これとは別に階級・階層論に関する概説的な教科書を読むことを講義の前提とする。

授業の到達目標

階級・階層論をみずからの研究テーマに活用し、あるいは研究上の新たな着想を得るための材料としうるだけの基礎的な知識を習得することを目指すとする。

授業計画

- 第1回：階級／社会階層とは何か
- 第2回：階級の古典的理論
- 第3回：現代の階級理論
- 第4回：階級の測定
- 第5回：現代社会の階級構造
- 第6回：階級と社会移動
- 第7回：階級と社会的不平等
- 第8回：階級社会の変動過程

教科書 スティーブン・エジェル（橋本健二訳）『階級とは何か』青木書店、2002年
*入手困難のため、入手できない場合は担当教員の指示に従うこと。

参考文献 講義の際に指示する

成績評価方法

レポート	70%	学期末に提出するレポートによる
平常点評価	30%	出席状況による

移民研究特論

森本 豊富

授業概要 本講義では、日本移民学会編（2011）『移民研究と多文化共生』をテキストとして使用し、出移民研究から入移民研究に至るまで日本における移民・移民研究の動向を把握する。講義で扱うことのできないテーマについては、受講生で分担して調べ発表する。

授業の到達目標

- ・日本における移民研究の動向を理解する。
- ・移民研究の学際性について知る。
- ・移民研究に関する論文を批判的に読み、自身の調査研究に活かすことができる。

【中目標No.】B56-2、3、4、C 6-1、D56-1、E56-2、F56-1

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：移民研究から多文化共生を考える（竹澤泰子）
- 第3回：出移民の記憶（坂口満宏）
- 第4回：二重のマイノリティからマイノリティへ（岡野宣勝）
- 第5回：日本帝国圏内の人口移動と戦後の還流、定着（木村健二、蘭信三）
- 第6回：在外ブラジル人としての在日ブラジル人（アンジェロ・イン）
- 第7回：移民を研究する（森本豊富）
- 第8回：論文レビュー発表

教科書 日本移民学会編（2011）『移民研究と多文化共生』御茶の水書房

参考文献

移民研究会（2008）『日本の移民研究 動向と文献目録 I／II』明石書店
森本豊富・根川幸男（2012）『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化』明石書店

成績評価方法

レポート	30%	論文のレビューと発表。
平常点評価	70%	出席状況、講義でのディスカッションなど。

科学史・科学論特論

加藤 茂生

授業概要 授業内容：テーマは「寺田寅彦とその後継者たち」。近代日本の物理学者である寺田寅彦の科学思想について検討し、文学との関係も含め、昭和戦前期の科学について考察する。授業では具体的な資料に基づいた細部の考察が中心となる。

授業方法：ほとんどの時間をディスカッションにあてる。

授業の到達目標

- ・寺田寅彦の科学思想について理解する。
- ・教科書的な科学観ではない、文学とも関わるような幅広い科学観を得る。

中目標

C 6－2、E56－2、F56－2

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：「どんぐり」ほか
- 第3回：「科学者と芸術家」ほか
- 第4回：「物理学と感覚」ほか
- 第5回：「蓄音機」ほか
- 第6回：「相対性原理側面観」ほか
- 第7回：「ルクレチウスと科学」ほか
- 第8回：総括的討論

教科書 小宮豊隆編『寺田寅彦随筆集』全5巻（岩波文庫、1963－1964年）。

参考文献 授業時に指示する。

成績評価方法

- レポート 10% 授業を通じて得た知見に基づいて自分の考えを記述する。
- 平常点評価 90% テキストの理解力、洞察力、他者の思想への想像力で成績を評価する。

生態人類学特論

矢野 敬生

授業概要 東アジア・東南アジア各地の漁村社会を対象として、私が調査し書いた文献を中心に、履修生に発表してもらい、そして検討と討議を戦わせたいと考えています。本講義の目的としてはアジア各地の海面利用を見たいうえで、最終的には commons の視点から各地の論考を考察したい。

授業の到達目標

- ・アジア各地の漁村社会の実態について知ることができる。
- ・貧困とのかかわりで、漁村社会の有様について考えられる。
- ・漁業における技術革新とそれを適用できない貧困層との対立を読み解くことができる。

授業計画

- 第1回：講義の概要
- 第2回：東南アジア・ジャワにおける漁村の存立状況
- 第3回：東部ジャワ・スコリロ村の事例
- 第4回：フィリピン・バナイ島の状況
- 第5回：バナイ島・イヴィサン町の漁業の事例
- 第6回：韓国・忠清南道の漁村の事例
- 第7回：日本・銚子の漁村の事例
- 第8回：まとめ

教科書 関連資料は初回の講義時に配布

参考文献

- 秋道智彌『海洋民族学』東大出版会
- 高桑守史『日本漁民社会論考』未来社

成績評価方法

- 平常点評価 100% 発表と講義への参加度で評価

儀礼・祝祭研究特論

竹中 宏子

授業概要 機能主義的な儀礼研究、神話との関連性、儀礼・祝祭の身体性や政治性を中心的テーマに、儀礼・祝祭論の主要な論文を読解し（和文・欧文）、研究意義と限界を議論、そして考察を行う。この作業を通じて得られた知見を活かし、学生には実際の祭り（あるいは類似する文化現象）を分析し発表してもらい、議論を行う。

授業の到達目標

・（主に文化人類学的な）儀礼・祝祭の研究法を理解し、他領域における研究との比較検討を通して、儀礼・祝祭論の研究意義と限界を考察できる（B56-2）
・ 儀礼・祝祭研究の視座に基づき、実際の儀礼・祝祭の社会的用法について議論できる（C 6-2）

授業計画

第1回：ガイダンス ー儀礼・祝祭論について、授業の進め方、授業で扱う文献の指定
第2回：テキスト読解を基にディスカッション（1）ー儀礼・祝祭の研究史
第3回：テキスト読解を基にディスカッション（2）ー機能主義的な儀礼研究
第4回：テキスト読解を基にディスカッション（3）ー儀礼祝祭の身体性
第5回：テキスト読解を基にディスカッション（4）ー儀礼祝祭の政治性
第6回：学生による研究発表およびディスカッション（1）
第7回：学生による研究発表およびディスカッション（2）
第8回：まとめと今後の展望 ー新たな儀礼祝祭研究の展開に向けて

教科書 初回の授業で指定する。

参考文献 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 50% 個人研究の発表を評価する
平常点評価 50% 授業内での発言内容や頻度を評価する

備考・関連URL 儀礼・祝祭・祭礼を研究している学生の履修を歓迎する。

政治思想史特論

村上 公子

授業概要 ドイツの議会制民主主義国家体制確立までの歴史上の道程を再現した展示 "Wege Irrwege Umwege" の再現学習カタログを参照しつつ、1848年の「市民革命」前夜から始まり、1990年、東西ドイツの「再統合」によって一応完成をみた、国民国家でありかつ議会制民主主義国家である「ドイツ連邦共和国」とはどのような国家かを学ぶ。

カタログに収録されているドイツ語テキストの購読を学生にも課す。

授業の到達目標

・ドイツ近代国民国家概念の萌芽期から現代にいたる変遷を知り、理解することができる。
・ドイツ以外の歴史上の国々、また現在存在する諸国家が近代国民国家、あるいは議会制民主主義概念に照らしてどう分類されるかを、みずから推定できるようになる。

授業計画

第1回：導入：本講義の概要と使用するテキストについて説明する。
第2回：テキスト第一章導入部分の概要説明と輪読
第3回：第一章1節の概要説明と輪読
第4回：第一章2節の概要説明と輪読
第5回：第一章3節の概要説明と輪読
第6回：第一章4節の概要説明と輪読
第7回：第一章5節の概要説明と輪読
第8回：第一章の内容総括

教科書 Deutscher Bundestag (Hrs.): Wege Irrwege Umwege. Die Entwicklung der parlamentarischen Demokratie in Deutschland, Berlin 2002.

参考文献 必要に応じて指示する。

成績評価方法

レポート 30% テキストの内容から、自分の選んだ時代・国家が、議会制民主主義概念からみてどのような国家であるかを考察する。
平常点評価 70% テキストの講読分担当を果たす。

歴史考古学特論

谷川 章雄

授業概要 日本の近世・近現代考古学の研究動向の中から、基本的なテーマや研究方法論の問題を取り上げ、関連する学術論文を参照しながら、その研究の現状と課題及び今後の展望について講義する。また、考古学の研究倫理、文化財の保護・保存、文化遺産の活用、文化財の略奪、考古学と歴史解釈など考古学と現代社会に関する問題を講義する。すなわち、近世、近現代を中心にした歴史考古学の世界および現代社会との関わりを明らかにすることが、本講義の目的である。本講義は全てオンデマンド授業として実施する。

授業の到達目標

- ・近世・近現代の歴史考古学の基本的なテーマや研究方法論を理解できる。(B56-2、B56-3、B56-4)
- ・近世・近現代と現代社会との連続性・非連続性を理解できる。(C 6-1)
- ・考古学と現代社会に関する問題を知り、学問のあり方を省察できる。(F56-1、F56-2)

授業計画

- 第1回：歴史考古学の世界
- 第2回：近世考古学と歴史学
- 第3回：近世考古学と民俗学
- 第4回：近世都市江戸の考古学（1）江戸城と都市施設
- 第5回：近世都市江戸の考古学（2）武家屋敷と町屋
- 第6回：近世都市江戸の考古学（3）寺院と墓地
- 第7回：東京の近現代考古学
- 第8回：考古学と現代社会

教科書 なし。資料を配布する。

参考文献 授業中に紹介する。

成績評価方法

- レポート 70% 着眼点、論理性および知識の観点から評価する。
平常点評価 30% 受講状況を評価する。

表象文化論特論

中村 要

授業概要 フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究の一環として、フランスの表象文化について歴史的展望を行なう。人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。日本文化との比較、異文化接触の問題も視野に入れる。
主な研究課題：フランスの特殊性と普遍性、表象と共同体、他者との共生、ヨーロッパの現在。

授業の到達目標

- ・表象文化研究についての理解を深めること。

授業計画

- 第1回：授業のオリエンテーション。
- 第2回：表象文化研究の歴史的展望（1）。ディスカッション。
- 第3回：表象文化研究の歴史的展望（2）。ディスカッション。
- 第4回：表象文化研究の歴史的展望（3）。ディスカッション。
- 第5回：表象文化研究の歴史的展望（4）。ディスカッション。
- 第6回：表象文化研究の歴史的展望（5）。ディスカッション。
- 第7回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。
- 第8回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。

参考文献 授業の中で紹介する

成績評価方法

- 平常点評価 50% 授業への参加、貢献度等を総合的に評価
その他 50% 口答発表と提出物等を総合的に評価

歴史人類学特論

蔵持 不三也

授業概要 歴史人類学の先行研究や知見および方法論を、文献資料中心に進められてきた従来の歴史学の風景を一変させたフランスの新しい歴史学「アナール派」の業績（L・フェーヴル、M・ブロック、J・ル・ゴフ、E・ルロワ＝ラデュリなど）と、蔵持自身のさまざまな著作を中心に講義する。ここではまた、歴史研究が本来的に内包するアポリアについても再検討する。

授業の到達目標

講義を通して歴史研究のもつ意味と役割、さらに歴史人類学の可能性などについて理解してもらう。

授業計画

- 第1回：歴史の見方・考え方
- 第2回：歴史の見方・考え方
- 第3回：歴史人類学の方法論
- 第4回：文献解題
- 第5回：文献解題
- 第6回：文献解題
- 第7回：文献解題
- 第8回：まとめ

参考文献 蔵持著『シャリヴァリ』（2003年、新評論）、蔵持『英雄の表徴』（2011年、新評論）ほか

成績評価方法

レポート 90% 課題に対する習熟度
平常点評価 10% 出席状況

備考・関連URL Wikipediaの蔵持関連項目参照

自然人類学特論

藤田 尚

授業概要 自然人類学の一分野である古病理学を講義する。われわれの祖先である初期人類の出現以来、人類は多くの疾病に悩まされ、命を落としてきた。特に集団が大きくなり、国家を形成するようになると、感染症はパンデミックを起こし、多くの人々の（それは名も無い庶民から統治者まで区別なく）命を奪い、時として歴史をも変えてしまうのである。本講義では、古代人の骨や歯に見られた種々の疾病を読み解き、原始・古代の人々の健康状態・栄養状態・寿命などを復元していく。

授業の到達目標

1. 初期人類を悩ませた疾病－人獣共通感染症－を理解する。
2. 口腔病変から原始・古代人の食生活を推測する。
3. 風土病の拡散－結核やトレポネーマ症などの我が国へのルーツを理解する。
4. 古病理学の現代医療への応用の可能性を理解する。

授業計画

- 第1回：古病理学ことはじめ。
- 第2回：初期人類の出現と彼らの疾病。
- 第3回：人獣共通感染症。火を知ったホモ・エレクトスの素晴らしい。
- 第4回：齧蝕と歯周病から原始・古代人の食性と栄養を考察する（その1）。
- 第5回：齧蝕と歯周病から原始・古代人の食性と栄養を考察する（その2）。
- 第6回：人類の拡散と共に広がった風土病。
- 第7回：日本人形成に大きな影響を与えた結核。
- 第8回：結核の起源と日本への移入。
- 第9回：トレポネーマ症の古病理学。コロンブスが広めた梅毒は最強のトレポネーマ症。
- 第10回：日本への梅毒の移入と江戸時代の流行。
- 第11回：縄文時代から江戸時代までの健康度をストレスマーカーから推測する（その1）。
- 第12回：縄文時代から江戸時代までの健康度をストレスマーカーから推測する（その2）。
- 第13回：日本は世界一の長寿国になぜなれたか。食生活の変化がもたらした疾病構造の変化。
- 第14回：現代に生きる古病理学。
- 第15回：総復習（試験を含む）

教科書 なし。必要に応じてプリント等を配布する。

参考文献 「古病理学事典」藤田尚編著、同成社、6,000円

成績評価方法

試験 60% 本授業における総合的な理解度。
レポート 40% 4回実施する。各10点満点とする。

建築環境学特論

小島 隆矢

授業概要 建築学における環境心理生理研究分野では、近年、顧客（利用者、居住者、所有者、管理者等）の意識や行動を把握するための調査分析手法が独自の発展をみせている。本講義では、特に「コンジョイント分析」という、実験計画法を応用して回答者の価値意識を定量的に把握する調査分析手法を取り上げ、講義と実習（PCを用いたデータ分析の実習を含む）を行う。

授業の到達目標

- ・実験計画法を中級レベルまで理解できている
- ・コンジョイント分析という形式で、実験計画法を用いた調査・分析を実施することができる

授業計画

- 第1回：コンジョイント分析の事例としくみ
- 第2回：直交表とその周辺
- 第3回：要因と水準、評価方法の設定
- 第4回：要因・水準の割付け
- 第5回：コンジョイント測定
- 第6回：コンジョイント測定データの分析法（要因効果の把握）
- 第7回：コンジョイント測定データの分析法（個人差の検討）
- 第8回：コンジョイント分析の活用

教科書 日本建築学会編「住まいと街をつくるための 調査のデザイン インタビュー／アンケート／心理実験の手引き」オーム社

参考文献

永田靖「入門 実験計画法」日科技連
宮川雅巳「実験計画法特論」日科技連

成績評価方法

レポート 70% 実習の結果を報告するレポートを評価する。
平常点評価 30% 出席および授業における取り組みを評価する。

備考・関連URL 履修者は、実験計画法および分散分析の基礎的な部分が理解できていることが望ましい。

建築計画学特論

佐野 友紀

授業概要 建築、都市計画のために、人間の行動観察や建築の使われ方等のフィールド調査、文献調査、実験室実験の手法を学ぶ。また、実際の調査データをもとに、統計的分析を行い、現象を予測、評価することで、建築計画にフィードバックする手法を学ぶ。この際に、数理モデル、数学的・統計的分析手法を用いる。また、建築の安全性、利便性、持続可能性等についてのテーマについて、問題点の解明と解決策の提案を行った上で、論文形式のレポートとしてまとめる。

授業の到達目標

- ・フィールド調査、文献調査、実験室実験の手法を学び、建築計画にフィードバックする手法を習得することを目標とする。

授業計画

- 第1回：ガイダンス（建築計画学とは？）
- 第2回：機器寸法計測（1）概要
- 第3回：機器寸法計測（2）講評
- 第4回：行動観察調査（1）概要
- 第5回：行動観察調査（2）調査
- 第6回：行動観察調査（3）講評
- 第7回：質問紙調査（1）概要
- 第8回：質問紙調査（2）調査

教科書 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

参考文献 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

成績評価方法

レポート 50% 建築、都市における自主実地調査を行うレポート、文献調査を行うレポートを出題し、その内容を評価する。
平常点評価 50% 平常時の発表の内容を評価する。

発達動機づけ特論

外山 紀子

授業概要 乳児期から児童期までの各時期において、環境（他者やモノ）による支えられながら、子どもが動機づけをもち知識を獲得していく過程を解説する。

授業の到達目標

・発達各時期に即した学びの特徴、動機づけを支える環境の役割を理解する。

授業計画

- 第1回：発達と動機づけのとらえ方
- 第2回：乳児期の学びと動機づけ（1）
- 第3回：乳児期の学びと動機づけ（2）
- 第4回：幼児期の学びと動機づけ（2）
- 第5回：幼児期の学びと動機づけ（3）
- 第6回：児童期の学びと動機づけ（1）
- 第7回：児童期の学びと動機づけ（2）
- 第8回：レポート課題と解説

教科書 特に指定しない。

参考文献 随時紹介する。

成績評価方法

- レポート 50% 最終レポートを評価する。
平常点評価 50% コメントカードと、授業への参加度、意欲を評価する。

社会文化心理学特論

尾関 美喜

授業概要 前半では、社会心理学において、文化を語るうえで重要な領域である社会的アイデンティティ理論に関する文献、文化と規範に関わる文献、文化適応に関する文献を講読し、議論することを通じて、当該領域における研究についての理解を深める。
後半では、近年、社会心理学の中では集団や文化の研究で主に用いられ、社会学をはじめとする社会科学諸分野で用いられるようになってきた、マルチレベル分析の基礎を理解する。

授業の到達目標

- ①社会心理学（文化心理学）における研究の視座や知識についての理解を深める（B56-4、C5-1、C6-1）
- ②マルチレベル分析の基本的な考え方と使い方、解釈の仕方を理解する（Ad56-2、Ad56-3、Ad56-4）
- ③研究について議論するスキルを獲得する（E56-2、G36-5）

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：文献講読（1）
- 第3回：文献講読（2）
- 第4回：文献講読（3）
- 第5回：マルチレベル分析の基本的な考え方
- 第6回：HLM（Hierarchical Linear Model）（1）理論編
- 第7回：HLM（Hierarchical Linear Model）（2）実践編
- 第8回：マルチレベル構造方程式モデリング

教科書 特になし。文献講読のテキストとなる文献は、適宜指示します。

参考文献

Raudenbush, S. W. & Bryk, A. (2002). Hierarchical linear models: Applications and data analysis methods (2nd ed.). Newbury Park, CA: Sage.
豊田秀樹(2000). 共分散構造分析（応用編）朝倉書店

成績評価方法

- レポート 40% 理解度、的確さ
平常点評価 60% 議論への参加度、出席状況

備考・関連URL 初回に第2～4回の講読の分担を決めるので、単位を必要とする者は必ず出席すること。
構造方程式モデリング、重回帰分析を自分の研究で用いることができる程度には理解したうえで受講していることが望ましい。

生活環境特論

佐野 友紀 他

授業概要 各自が専門とする領域について、研究内容に関する発表を行い、心理学と建築学の2つの観点からの質疑、分析を行う事で、学際的な研究の視点を持ち、多様な側面から研究を理解する方法を学ぶ。加えて、発表におけるプレゼンテーション手法、研究内容を論理的に説明する方法を習得する。

授業の到達目標

- ・心理・建築と人間の関係を通して、環境に対応した行動研究と人間に合わせた環境構築の手法を理解する (B 2-1)
- ・心理学手法、建築計画の視点を身につけ、日常生活等に応用できる。(B 2-2)

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：教員のテーマ講義1
- 第3回：教員のテーマ講義2
- 第4回：学生の課題発表1と講評
- 第5回：学生の課題発表2と講評
- 第6回：学生の課題発表3と講評
- 第7回：学生の課題発表4と講評
- 第8回：心理学、建築学の両面から見た全体講評

教科書 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する

参考文献 必要に応じて授業時に資料を配布する

成績評価方法

- レポート 50% 行動発達に関する研究レポートまたは、建築、都市における研究レポート、文献調査を行うレポート等を出題し、その内容を評価する。
- 平常点評価 50% 平常時の発表の内容を評価する。

運動制御・バイオメカニクス特論

鈴木 秀次

授業概要 日常生活やスポーツ活動時に起こる動きの仕組みを運動制御とバイオメカニクスの立場から解説し、その動きの科学的根拠がどこにあるかを講義する。特にいま話題となっている初動負荷理論について、なぜこのトレーニングによって、スポーツ活動に必須の条件であるスピードとパワーがそなわり、躍動感、リズム、爆発力が身につくのか。さらにこのトレーニングによって、柔軟性が高まり、怪我の予防と健康増進につながるのかについて最近の実験データを踏まえながら解説する。
(本授業は、全回オンデマンド授業として実施します)

授業の到達目標

- ・日常生活やスポーツ活動時に起こる動きの仕組みを運動制御とバイオメカニクスの立場から理解することを本授業の到達目標とする。

授業計画

- 第1回：(オンデマンド授業) はじめに
- 第2回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニングと従来の筋力トレーニングとの違い
- 第3回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニング動作のキネマティクス
- 第4回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニング動作のキネティクス
- 第5回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニング動作時の筋活動
- 第6回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニングによる動きづくり
- 第7回：(オンデマンド授業) 運動における筋紡錘の係わり
- 第8回：(オンデマンド授業) 反射運動
- 第9回：(オンデマンド授業) 随意運動
- 第10回：(オンデマンド授業) 運動における小脳の係わり
- 第11回：(オンデマンド授業) 運動における大脳基底核の係わり
- 第12回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニングの効果1
- 第13回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニングの効果2
- 第14回：(オンデマンド授業) 初動負荷トレーニングの今後の課題
- 第15回：(オンデマンド授業) まとめ

参考文献 Neuromechanics of Human Movement (4th Ed) Roger Enoka, Human Kinetics 2008 (4th Ed.) Human Kinetics, 2008

成績評価方法

- レポート 70% 与えられた課題を講義内容の視点と絡めて深く考察しているかどうかを評価します (Course N@vi上から)。
- 平常点評価 30% 毎回の授業において自身の理解度や授業の感想などを Course N@vi 上からレポートする。

備考・関連URL 本授業は、全回オンデマンド授業として実施する。
<http://www.f.waseda.jp/shujiwhs/index-j.htm>

健康行動科学特論

竹中 晃二

授業概要 本講義では、複雑にリンクする健康阻害要因について、健康危険因子の評価、禁煙、血圧コントロール、運動や体力作り、体重コントロール、栄養教育、ストレス・マネジメント、腰痛予防などを一つの総合的プログラムとして取り扱う。さらなる観点は、ヒトの健康に関わる行為を「行動」と見なし、その行動を変容させたり、維持させるために、いくつかの健康行動変容モデルを紹介し、それらのモデルによって介入を考える。

授業の到達目標

・心身の健康にかかわる一次・二次・三次予防において、行動変容の重要性とその方法について理解する。

授業計画

- 第1回：講義の概要と背景・イントロダクション
- 第2回：健康行動変容
- 第3回：健康行動変容プログラム開発の興味、グループ分け
- 第4回：子どもの健康づくり
- 第5回：ヘルス・コミュニケーション
- 第6回：ストレス・マネジメントとメンタルヘルス・プロモーション
- 第7回：スモールチェンジ・アプローチ
- 第8回：喫煙、禁煙、健康行動変容プログラムのカリキュラムづくり

教科書 随時資料を提供する

参考文献 随時提供する

成績評価方法

レポート 27% 最終課題レポート 3,200字以内
平常点評価 73% BBSへの書き込み課題 (48点) スクーリング時にグループ発表 (25点)

備考・関連URL 研究室ホームページ：<http://takenaka-waseda.jp/>

老化機構・加齢制御学特論

千葉 卓哉

授業概要 個体は必ず老いていき、やがて死にいたる。これまで多くの研究者が老化のメカニズムに関する学説を提唱してきた。それらについて解説し、最先端の研究における成果とその応用の可能性について講義する。世間にあふれているアンチエイジング関連製品の真偽についても解説し、科学的根拠に基づく思考力の養成およびその能力を活用した問題解決力の形成を目指す。受講者各自に個別の課題を与え、その発表内容に対するディスカッション形式の講義もあわせて行う。

授業の到達目標

- ・老化・寿命に関する諸学説を理解する。
- ・科学的根拠に基づくアンチエイジング医学を理解する。
- ・関連分野の問題解決・研究遂行に必要な理論の基礎を理解する。

授業計画

- 第1回：研究内容の概説 (1)
- 第2回：研究内容の概説 (2)
- 第3回：酸化ストレスと老化 (1)
- 第4回：酸化ストレスと老化 (2)
- 第5回：輪読 (論文紹介) と討論 (1)
- 第6回：輪読 (論文紹介) と討論 (2)
- 第7回：輪読 (論文紹介) と討論 (3)
- 第8回：輪読 (論文紹介) と討論 (4)

成績評価方法

レポート 20% 授業内容の理解度確認を行う。
平常点評価 80% 授業参加への積極性を評価する。

神経内分泌学特論

山内 兄人

授業概要 からだの機能は液性情報であるホルモンと神経情報の中心である脳にコントロールされている。また、ホルモンを分泌する内分泌器官も神経制御を受け、脳の神経細胞もホルモンによって影響を受ける。また、脳そのものからも、ホルモンが分泌されている。内分泌系と神経系のお互いの関係や、神経と内分泌系によるからだの機能の制御を明らかにしていく学問が神経内分泌学である。この講義では、性行動や母性行動、排卵、妊娠、授乳などの生体生理の神経内分泌制御を研究室の最新の知見を中心に学ぶ。特にセロトニン神経に焦点をあてる。

授業の到達目標 ・生体機能の神経内分泌制御機構を正しく理解し、その先端の研究を知ることができる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス、脳機能 セロトニン神経
- 第2回：内分泌現象 雌雄生殖機能序説
- 第3回：雌性行動神経制御とセロトニン神経
- 第4回：雄性行動神経制御とセロトニン
- 第5回：排卵と妊娠神経制御とセロトニン神経
- 第6回：母性行動神経制御と性差とセロトニン神経
- 第7回：性周期神経機構の性差、性分化とセロトニン神経
- 第8回：性行動神経機構の性分化とセロトニン神経

教科書 脳が子供を産む、山内著、平凡社、1999

参考文献 脳の性分化、山内、新井編著、裳華房、2006：脳の人間科学、山内著、コロナ社2001：ホルモンの人間科学、山内著、コロナ社、2003：性差の人間科学、山内著、コロナ社、2006。

成績評価方法

レポート 50% レポート内容
平常点評価 50% 討論内容

生体機能学特論

今泉 和彦

授業概要 本特論は、オンデマンド方式により、私達の研究室が最近実施した研究分野の内容とデータを中心としてその学術的背景を述べ、アルコール摂取・ドーピング薬物投与・香辛料摂取・栄養素（亜鉛・葉酸）欠乏による生体防御系機能の変化とそれらのメカニズム、茶カテキン摂取による熱産生能の上昇作用や脂質代謝への関与について理解することを目指して紹介する。

授業の到達目標

日常生活でみられる飲酒（＝アルコール摂取）、緑茶飲用、香辛料辛味成分摂取、ドーピング薬物投与、ミネラルやビタミンなどの摂取不足などにより、生体防御系機能がどのように変動するかを系統的に理解することを到達目標に置く。これらの生理応答が日常の生活でどのような意味があるかを考察することも目標に置く。

授業計画

第1回：飲酒と生体機能との関連（1）	第9回：亜鉛欠乏と生体機能との関連（2）
第2回：飲酒と生体機能との関連（2）	第10回：亜鉛欠乏と生体機能との関連（3）
第3回：飲酒と生体機能との関連（3）	第11回：香辛料（特に唐辛子）辛味成分摂取と生体機能との関連
第4回：茶カテキン摂取と生体機能との関連（1）	第12回：骨格筋の可塑性とその調節（1）
第5回：茶カテキン摂取と生体機能との関連（2）	第13回：骨格筋の可塑性とその調節（2）
第6回：ドーピング薬物投与と生体機能との関連（1）	第14回：最近の研究成果の紹介（1）
第7回：ドーピング薬物投与と生体機能との関連（1）	第15回：最近の研究成果の紹介（2）
第8回：亜鉛欠乏と生体機能との関連（1）	

教科書 特になし

参考文献 ◆本研究室の関連文献：①Nomura S. et al. J Nutr Biochem, 19, 840-847 (2008) , ②Sato S. et al. J Pharmacol Sci, 107, 393-400 (2008) , ③Someya Y. et al. J Nutr Sci Vitaminol, 55,162-169 (2009) , ④Akimoto S. et al. J Nutr Sci Vitaminol, 55, 282-287 (2009) , ⑤Ideno H. et al. Exp Cell Res, 315, 474-484 (2009) , ⑥Kawano F. et al. J Physiol Sci, 59, 383-390 (2009) , ⑦Sato S. et al. J Physiol Sci, 60, 119-127 (2010) , ⑧Aritoshi S. et al. J Health Sci, 56, 99-103 (2010) , ⑨Imaizumi K. et al. J Health Sci, 56, 347-354 (2010) , ⑩Imaizumi K. et al. J Toxicol Sci, 35, 583-589 (2010) , ⑪Sakakibara Y. et al. J Nutr Sci Vitaminol, 57, 197-201 (2011) , ⑫Sato S. et al. J Biomed Biotechnol, 2011, ID 729598, 1-10 (2011) , ⑬Kawashima Y. et al. J Toxicol Sci, 36, 101-108 (2011) , ⑭Sakakibara Y. et al. J Toxicol Sci, 36, 681-685 (2011) , ⑮Sato S. et al. Life Sci, 89, 962-967 (2011) , ⑯Sato S. et al. J Toxicol Sci, 36, 479-486 (2011) , ⑰Imaizumi K. et al. J Toxicol Sci, 36,109-116 (2011) , ⑱Ichinose T. et al. Scand J Med Sci Sports, 21, 598-605 (2011), ⑲Hashizume Y et al. J Nutr Sci Vitaminol, 58, 292-296 (2012) , ⑳Abe I. et al. Environ Health Prev Med, 18, in press (2013) .

成績評価方法

レポート 50% 5段階評価
平常点評価 50% BBSの発言数と発言内容を5段階で評価する。

備考・関連URL ◆本研究室URL：http://www.waseda.jp/sem-imaizumi/index.html

環境生理学特論

永島 計

授業概要 解剖から生理機能にいたるまでの自律神経についての知識を広めるとともに、最近の体温調節に関わる研究を紹介していく。

授業の到達目標

- ・自律神経についての理解
- ・温熱的な快適性、温度感覚の脳機構について理解する
- ・最近の体温調節研究の流れを理解する

授業計画

- 第1回：温熱的快適性とはなにか？
- 第2回：温熱的快適性の脳機構？
- 第3回：行動性体温調節について、その1
- 第4回：行動性体温調節について、その2
- 第5回：温熱的快適性に関する研究方法について
- 第6回：最近の文献紹介、その1
- 第7回：最近の文献紹介、その2
- 第8回：研究室での研究の紹介

教科書 適時、文献を紹介し、プリントを配布する

成績評価方法

レポート 100% 毎回、講義後にレポートを課し評価を行う

分子神経科学特論

榊原 伸一

授業概要 神経系は生物の行動を効率的に行うために外界からの情報を伝達、処理するために発達したシステムであり、人間の生理現象や行動をコントロールする重要な器官である。しかしその形成される過程や発達後に維持されるメカニズムはまだわからないことが多いのが現状である。本講義では脳や脊髄の構築を概観し、さらにその発生過程を分子レベル、細胞レベル、組織レベルの各レベルから多面的に理解することを目指す。また各自の興味を持つ神経科学に関するトピックスについてプレゼンテーションを行うとともに、代表的ないくつかの研究論文（英語）を輪読することによって、教科書や講義では得られないより深い理解を目指す。

授業の到達目標

- ・神経系の構造と各部の働きを遺伝子発現、分子動態から理解する。
- ・神経系の形成過程を理解する。
- ・神経回路の分子的基盤を理解する。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：神経系の概観 各部の形態と機能
- 第3回：神経組織の成立と構成細胞（ニューロンの構造と機能）
- 第4回：神経組織の成立と構成細胞（グリアの種類と機能）
- 第5回：ニューロン機能調節分子の論文のプレゼンテーション
- 第6回：ニューロン機能調節分子についての論文の討論
- 第7回：グリア機能調節分子についての論文の討論
- 第8回：哺乳類神経発生関連分子についての論文のプレゼンテーション

教科書 Principles of Neural Science, 5th ed. Kandel ER, Schwartz JH, Jessell TM 著 McGraw-Hill, New York

成績評価方法

レポート 50% 内容の理解度により判定する
平常点評価 50% 出席、プレゼンテーション、発言の積極性

緩和医療学特論

小野 充一

授業概要 緩和医療の現場で直面する以下の3つのテーマについて、基礎講義を行った後にグループワークを行う。テーマは、①つらさを和らげるために必要な条件、②悪い情報を伝えるために必要な条件、③治療を手控えるために必要な条件とするが、おおむね5～6名でグループを形成して、各員が事前に準備してきたテーマに沿った論文についてグループで共有して検討する作業を行い、グループでテーマについて発表原稿をまとめ最後の総括的な討論を行うことで、緩和医療学に関する知識や概念を大学院レベルで能動的に習得することを目標としている

授業の到達目標

- A) 緩和医療学全般に関する知識を得る。
- B) 緩和医療学を支える中心的な概念を理解する。
- C) 緩和医療学で用いる調査や研究手法を理解する。

授業計画

- 第1回：講義（つらさを和らげる・悪い情報を伝える・治療を手控える基礎知識）
- 第2回：グループ発表テーマの準備・先行研究論文の収集と検討
- 第3回：グループ発表・討論（つらさを和らげるために必要な条件）
- 第4回：グループ発表テーマの準備・先行研究論文の収集と検討
- 第5回：グループ発表・討論（悪い情報を伝えるために必要な条件）
- 第6回：グループ発表テーマの準備・先行研究論文の収集と検討
- 第7回：グループ発表・討論（治療を手控えるために必要な条件）
- 第8回：総合討論：緩和医療に求められる条件

教科書

- ・「最新緩和医療学」恒藤啓著、最新医学社
- ・「テキスト臨床死生学」日本臨床死生学会編、勁草書房

成績評価方法

- レポート 20% 講義終了時レポート
- 平常点評価 80% 出席状況、グループワーク、個人発表

健康管理医学特論

河手 典彦

授業概要 超高齢社会の日本では、人間生活の基盤である健康管理はとくに重要な意味を有している。この講義では、はじめに実践の健康管理の一手段である「健診」、「検診」の実態について幅広く習得する。基本的な各種検査方法やその結果の意味も正しく理解する。次いで生活習慣病と癌の中から代表的疾患を選択し、その臨床医療の実態を詳しく解説する。これらに基づいてわが国の健康管理医療の現状を正確に習得し、適切な健康管理医学とは何かについてその課題の検討も交えながら理解を進めていく。

授業の到達目標

- ・健康生活の重要性を理解し臨床医学の視点から有効な健康管理の方策とその意義について説明できる。（B56-4、C5-1）
- ・疾病の一次予防、二次予防及び三次予防に関してその医療の実態を習得し、解説することできる。（B56-4、C5-1）
- ・代表的疾患についてその臨床医学・医療の実状を理解し、専門性に基づいた説明を行うことができる。（B56-4、C5-1）
- ・健康生活獲得のための健康管理医療の正確な情報取得及びその有効活用について実践できる。（D56-2、G36-4）

授業計画

- 第1回：健康医学序論
- 第2回：高血圧症
- 第3回：心臓血管疾患
- 第4回：脳卒中
- 第5回：糖尿病
- 第6回：脂質異常症、高尿酸血症
- 第7回：呼吸器疾患（非癌）
- 第8回：肺癌
- 第9回：胃癌
- 第10回：大腸癌
- 第11回：肝臓癌、膵臓癌
- 第12回：乳癌、子宮癌
- 第13回：前立腺癌
- 第14回：白血病、悪性リンパ腫
- 第15回：教場試験とその解説

教科書

使用しない。

参考文献

適宜、紹介する。

成績評価方法

- 試験 70% 第15回に教場試験とその解説を行い、講義内容の理解度を評価する。
- 平常点評価 30% 出席状況の評価し、試験成績決定の際に勘案する。

備考・関連URL

短期間の講義ではあるが、少しでも多くの臨床医学、医療の現状に関する知識を正確に習得して貰いたい。

生命医療倫理学特論

土田 友章

授業概要 現代文明の中での人間のいのちをめぐる状況について、具体的な諸問題を検討しながら、人間的批判的考察を加える。

授業の到達目標

・いのちをめぐる現代の具体的な問題を如何に考えるか、その視点の多層性、相互主観性などを認識できること。

授業計画

- 第1回：現代人の死生をめぐって（1）
- 第2回：現代人の死生をめぐって（2）
- 第3回：遺伝子と医療
- 第4回：エンハンスメント
- 第5回：生殖補助医療
- 第6回：移植医療
- 第7回：自律－自己決定
- 第8回：人間的とは？

教科書 クラスで指示する

成績評価方法

レポート 50% 参加者それぞれの関心事・研究課題についての発表
平常点評価 50% 出席・参加

予防医学特論

町田 和彦

授業概要 授業計画に見られるように、私は過去40年間に上衛生学・公衆衛生学に席を置き、予防医学のほとんどの分野の授業と研究を行ってきた。この授業は私が行ってきた研究方法について通常の論文には表われてこない調査の仕方や実験の手法等も含め、その研究についてオンデマンド上で授業を行い、それについての各人の感想や質問、あるいはディスカッションをしてもらい予防医学全体についての理解を深めることを目標としている。

授業の到達目標

- 1. この授業は私の研究生活を振り返り、論文にはないその研究の発想、具体的な実験や調査のやり方、さらに予防医学とはどのようなものかを理解してもらう事を目的としている。
- 2. そのため、オンデマンド授業による各授業からそのようなことを学び、自分の研究や生き方に生かすことを目的とする。

授業計画

- 第1回：予防医学と私の足跡－実験科学と調査－
- 第2回：生物学の進歩・環境衛生（日内リズム：動物実験）
- 第3回：感染症の疫学－梅毒、日本脳炎、麻疹調査－
- 第4回：重金属代謝実験（動物実験）
- 第5回：カドミウム投与実験と鉱山地域の環境汚染調査
- 第6回：山村無医地区の健康管理－非A非B肝炎、ATLの血清疫学調査
- 第7回：ミネラルと健康（動物実験）、栄養調査、体力科学研究
- 第8回：適度な運動・ストレスと非特異免疫を中心とした生体防御機能（動物実験）
- 第9回：河川水と水道水の比較調査、大学時代の運動と中高年の健康（質問紙法による調査）
- 第10回：分子予防医学研究（動物実験による日内リズム研究を中心にして）
- 第11回：狭山市と名栗村における健康増進運動：血清疫学的調査を含めた総合調査
- 第12回：天津市における健康増進運動と医療行動調査
- 第13回：天津市におけるスピリリナ投与調査、マッサージの効果調査
- 第14回：日本・韓国における高齢者施設の感染症対策と生きがいづくりと健康
- 第15回：研究発表

教科書 21世紀の予防医学・公衆衛生 第2版、町田和彦・岩井秀明編集、杏林書院、2012

成績評価方法

レポート 50% 10回目以降に発表
その他 50% オンデマンド授業の毎回の書き込みで評価

医療情報学特論

前田 幸宏

授業概要 医療の質の確保と安全性の向上は、すべての人に関わる重要事項であり、医療分野の情報化は国の重点施策のひとつである。国の医療保険制度や施策の概要を踏まえ、医療情報の特性、医療情報システムの現状、診療情報の分析手法や評価方法を概説する。また、医療における現状の課題の事例などを紹介し、医療の質の改善策について議論を行う。

授業の到達目標

- (1) 医療情報の特性について説明できる。
- (2) 医療情報システムの概要について説明できる。
- (3) 医療の質の評価方法について説明できる。
- (4) 医療の質の改善策について述べることができる。

授業計画

- 第1回：医療情報の特性－情報開示と個人情報保護、チーム医療、患者の医療参加
第2回：診療記録および診療情報－患者安全の観点から
第3回：病院の情報システムの概要－電子カルテ
第4回：広域の医療情報システムの概要－地域医療連携
第5回：診療情報分析－診療マネジメント、疾病登録
第6回：医療の質の評価－病院機能評価
第7回：医療の質向上策についての討論
第8回：総括的討論

参考文献

授業の中で紹介する。

成績評価方法

- 試験 実施しない。
レポート 60% 論理性、客観性、独創性の観点から、総合的に評価する。
平常点評価 40% 各授業での質疑や討論への参加および発言の内容等から総合的に評価する。

医療人材管理特論

岩満 裕子

授業概要 医療組織の人員配置基準と労務管理について学ぶと共に、組織の秩序を維持し経営戦略を達成する機能と人を動機づけ成長させる人材育成機能について学ぶ。

更に、ヒューマン・サービス組織における人事マネジメントのあり方について理解する。

受講者は、キャリア開発についてと雇用・労働環境などのマクロ的な社会環境についても常に意識していることが望まれます。

授業の到達目標

- ・医療界における人員配置基準・雇用形態・労働環境を学び、現状の人事管理面からの課題を考えられる。
- ・キャリア開発に関する医療界の体制とその必要性を理解する。
- ・チーム医療の必要性を理解し、チーム・マネジメント・スキルを身につける。
- ・人材活用の面から公平性のあるマネジメントの重要性を理解する。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本講義の目的と概要について説明します。
第2回：医療界における人員配置基準・雇用形態・労働環境について説明し、現状での人員面での需要と供給のバランス等の問題とその対策について考える。
第3回：医療における専門職としての特性からくる雇用問題や更に、専門特化してきている医療現場の現状について説明します。
第4回：人材の有効活用としての配置と異動について採用と退職という側面も含め説明し、個人が納得する配置や異動における公平性のあるマネジメントについて検討する。
第5回：医療収入と賃金体制について説明する。医療界で実践されている人事考課制度と評価の視点について概説し、評価の視点について検討する。
第6回：医療人として国民から求められている姿勢についてサービスの視点から理解し、今後、どのようなサービスが必要になるか現状も踏まえ考える。
第7回：チーム医療の必要性と今後如何なるチームが必要か考えると共に、チームの推進力となるマネジメントスタイルを理解する。
第8回：ケースを通して人事管理制度が職員に与える影響を検討し、組織変革を考える。
事業プラン等変革を起こす場合に必要となる交渉術の基本を説明する。

参考文献

高木晴夫・慶応義塾大学ビジネススクール『人的資源マネジメント戦略』（有斐閣）

講義中に紹介します。

成績評価方法

- レポート 50% 課題レポートに講義で学び得たことが網羅された思考と成っているかで評価します。
平常点評価 30% 講義中の意見等にて評価します。
その他 20% グループ討議を講義中に入れます。その討議結果や参画状況で評価します。

医療福祉質評価特論

田上 豊

授業概要 医療福祉サービスにおいて、質の保証は重要な課題のひとつである。

本授業においては、以下の学習をすることを目的とする。

1. 医療福祉サービスの特質の理解
2. 医療福祉サービスの質の測定方法の理解
3. 医療福祉サービスの特質に応じた質の確保策の理解

授業の到達目標

・医療福祉サービスにおける質に関する知識を習得し、医療福祉サービスの質確保の現状と課題について説明できるようになることを目標とする。

授業計画

- 第1回：医療福祉サービスの特質
- 第2回：質の定義
- 第3回：質の測定（構造）
- 第4回：質の測定（プロセス）
- 第5回：質の測定（アウトカム）
- 第6回：施設サービスにおける質保証
- 第7回：在宅サービスにおける質保証
- 第8回：質保証の社会的仕組み

教科書 Avedis Donabedian（著）、東 尚弘（翻訳）「医療の質の定義と評価方法」NPO法人健康医療評価研究機構（iHope）

成績評価方法

レポート 100% レポートによる評価

医療安全学特論

田上 豊

授業概要 医療における安全の確保は、医療機関における重要な課題のひとつである。

本授業においては、以下を学習することを目的とする。

1. 医療機関における医療安全への現状と課題の理解
2. 医療の安全を保障する取り組みについての理解
3. 医療安全を支える社会的な仕組みの理解

授業の到達目標

・医療安全対策の現状と課題に関する知識を習得し、医療安全への取り組みについて説明ができるようになる。

授業計画

- 第1回：医療安全とは
- 第2回：安全管理の重要性
- 第3回：安全に対する取り組み
- 第4回：医療安全への具体的な取り組み（1）情報収集・提供
- 第5回：医療安全への具体的な取り組み（2）事例分析
- 第6回：医療安全への具体的な取り組み（3）モノ、情報の管理
- 第7回：医療安全を支える社会制度（法律、保険等）
- 第8回：安全文化

教科書 飯田修平編著「医療安全管理テキスト－医療安全管理者必携」日本規格協会（2010/07）

成績評価方法

レポート 100% レポートによる評価

福祉ロボット工学特論

可部 明克

授業概要 各国で研究開発が進められているサービスロボット、特に医療福祉ロボットについて要素技術を調査し、ベースとなるロボットを使用して機能設計を行い、開発プロジェクトを経験する。また、課題提出により自らの専門分野に関連するロボット技術の深堀を行う。
“For International Students”

A project oriented course dealing with the overall principles of Service Robotics, currently developed in the world, especially for healthcare and welfare purposes. Pick up several technical issues as introduction, and design the main functions based on the robot system for education or other applications.

The final report about specific technical issues of robotics, related to major of each student, is required.

1. Trajectory Control of Robot (Mechanical Structure, 3D-Coordinate Frames, Numerical Control)

2. Sensor System of Robot (Vision, Voice Recognition, Bio-sensor, RF-ID)

3. Network System (Basic Configuration, Communication Protocol, Specific Network)

4. Application Systems of Robot (Application Functions for Healthcare and Welfare, Bio-sensor systems, Other Application Systems)

Note : The main language of this course is Japanese. Instructions and Information are provided in English for International Students additionally.

授業の到達目標

・ロボットの要素技術を理解し、ロボットなど各種機器に実装する仕様および機能の詳細を検討できる。

“For International Students”

Understand the technical elements of Robotics, and study how to implement the required specification and functions on robots.

授業計画

第1回：ロボットの動作制御（基本構造の把握）

第2回：ロボットの動作制御（システム構成、座標系、制御方法）

第3回：ロボットのセンサシステム（ビジョン、音声、ICタグ、生体センサー等）

第4回：ネットワークシステム（基本構成、通信プロトコル、応用システム）

第5回：課題：ロボットの応用システム設計（機能1：特定アプリケーションなど）

第6回：課題：ロボットの応用システム設計（機能2：生体計測応用システムなど）

第7回：課題：ロボットの応用システム設計（システム構成、ハードウェア構成、ソフトウェア構成）

第8回：課題：ロボットの応用システム設計（まとめ）

教科書 特になし

参考文献 その都度、資料などを配布する。

成績評価方法

平常点評価 100% 授業での発言頻度・内容、プロジェクトの検討内容、課題提出

1. Contribution by discussion, 2. Project Achievement (Creativity, Speciality, Feasibility) , 3. Final Report

リハビリテーション工学特論

村岡 慶裕

授業概要 リハビリテーションに必要な工学技術を体系的に習得する。

講義にて、リハビリテーションの臨床で使用されている工学技術、つまり、姿勢・運動機能の計測、脳-神経-筋機能の計測、呼吸・循環・代謝機能の計測などを学ぶ。

また、電子回路にて筋電アンプを試作し、AD変換の後、PCに取り込み、PC上に表示し記録するシステムを構築する。

授業の到達目標

リハビリテーション工学に関する講義を受講し、課題を行うことによって理解を深める。

課題は、生体計測系の構築、データの解析や検討を行い、結果について討議することで、計測・解析・考察・課題解決という研究の一連の手順と手法を体得する。

授業計画

第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本講義の目的と概要について説明します。

第2回：リハビリ現場で用いられる生体計測工学について概説します。

第3回：AD変換、DA変換、フーリエ変換、同期加算法、移動平均法など主要な信号処理などについて説明します。

第4回：脳波計やNIRS、fMRIによる脳機能や認知機能の計測について説明します。

第5回：動作筋電図や誘発筋電図、神経伝導速度計測、筋力計測など神経筋機能の計測について説明します。

第6回：三次元動作解析や重心動揺計測、歩行分析について説明します。

第7回：心電図計測、呼気ガス分析等について説明します。

第8回：筋電アンプの製作実習を行います。製作した筋電アンプを用いて、AD変換器を介してPCに取り込み、波形の表示、データ記録などを行い、計測システムを構築します。また、基礎工学についての試験を実施します。

教科書 「計測法入門―計り方、計る意味」、内山靖、小林武、岡瀬教史、協同医書出版社

成績評価方法

試験 15% 第7回か8回の授業で基礎工学についての試験を行います。

レポート 小テストなど、平常点に算入します。

平常点評価 85% 講義の各セッション終了後に出席点も兼ねて小テストを行います。また、筋電アンプ製作実習時の積極性や仕上がりがり具合を点数化します。小テストと、実習点を合算して平常点を評価します。

備考・関連URL 実習の準備状況により順番が入れ替わる場合もあります。

スポーツ健康マネジメント特論

吉村 正

授業概要 チームマネジメント、目標達成マネジメント、「やる気」が出るマネジメント、監督やコーチ（指導者）の在り方、役割、指導法、また、施設・用具や金銭の使い方等について講義する。加えて、スポーツ健康マネジメントに関する文献購読や現場実習も行い、それらについて相互に議論する。

授業の到達目標

・授業概要で記した内容について、正確に理解し、そのことが自分の言語等でしっかりと説明出来るようになることを目標とする。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション（スポーツ健康マネジメントとは）
- 第2回：チームマネジメント
- 第3回：目標達成マネジメント
- 第4回：「やる気」が出るマネジメント
- 第5回：監督の在り方
- 第6回：ヘッドコーチ・アシスタントコーチの在り方
- 第7回：コーチングとは
- 第8回：コーチングの実際①
- 第9回：コーチングの実際②
- 第10回：パートナーシップについて
- 第11回：早稲田大学のスポーツ健康マネジメント①
- 第12回：早稲田大学のスポーツ健康マネジメント②
- 第13回：総合型地域スポーツクラブについて
- 第14回：健康日本21について
- 第15回：まとめ

教科書 毎回資料を用意する。

参考文献 授業の中で適宜紹介する。

成績評価方法

試験	実施しない。
レポート	50% レポートを適宜提出させ、その内容を評価の対象とする。
平常点評価	50% 現場実習、グループワークでの貢献、授業中の議論における発言・質問等をみて総合的に評価する。
その他	遅刻、早退は、理由なき場合減点する。

精神保健福祉特論

田中 英樹

授業概要 精神保健福祉学は、精神保健という特定領域分野における社会福祉の政策と実践を範疇に形成されつつある。しかし、成立間もない若い学問であり、その体系化は今日の課題でもある。歴史的に見ると精神保健福祉学は、1997年の精神保健福祉士法の制定により、指定科目として「精神保健福祉論」が登場したことを契機に実体化した。この内容には、精神障害者福祉論そのものであり、必ずしも精神保健福祉と同義語ではない。しかし、精神保健福祉学の主要な内容であることも明らかである。

そこで、本講義では、精神障害者福祉をベースに広く精神保健福祉を国民の精神保健全般を福祉的視座から論考・解題していくこととする。講義では、精神障害者福祉の歴史と形成過程、関連する法の変遷、障害の構造的理解、障害者自立支援法、関連施策、精神障害者の現状と人権、スティグマ、メンタルヘルスの諸課題などを取り上げながら考察していきたい。

授業の到達目標

- 1) 精神保健福祉学の視点を学び、その概要を理解させる。
- 2) 精神保健福祉が当面する今日的な課題について、主体的に調べ、考える力を涵養する。
- 3) 精神保健福祉の視点から関心のあるテーマを掘り下げ、発表する力をつけさせる。

授業計画

- 第1回：わが国の精神保健・精神保健福祉の現状
- 第2回：障害者福祉の理念と精神保健福祉学
- 第3回：精神保健福祉の歴史（日本）
- 第4回：精神保健福祉の歴史（海外）
- 第5回：メンタルヘルスとライフサイクル
- 第6回：精神障害者施策の現状
- 第7回：精神保健福祉士の役割
- 第8回：精神障害者リハビリテーションの課題

参考文献 その都度、紹介します。

成績評価方法

レポート	30% レポートによる評価
平常点評価	70% 授業の出席を重視します。

ソーシャルワーク特論

岩崎 香

授業概要 主要なソーシャルワーク理論に関する考察を深め、実践に関する実証研究のあり方を学ぶことを目的とする。

まず、ソーシャルワーク理論の歴史を概観し、主要なソーシャルワーク理論について学ぶ。その上で近年のソーシャルワーク実践に関する実証研究の方法論の動向を理解し、理論と実践のあり方、現状について考察する。

授業の到達目標

ソーシャルワーク実践と研究の関連性、実証研究の必要性に関して理解する。

授業計画

- 第1回：ソーシャルワークの実践モデルについて
- 第2回：実践モデルに関する歴史的考察
- 第3回：家族療法、行動療法等とソーシャルワーク
- 第4回：エコロジカル・アプローチの登場
- 第5回：近年のソーシャルワーク技法（エンパワメント・アプローチ、ナラティブ・アプローチ他）
- 第6回：実証研究①
- 第7回：実証研究②
- 第8回：今後のソーシャルワーク実践の行方

参考文献 授業の中で提示

成績評価方法

レポート	50%	レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうか、重点を置く。
平常点評価	50%	授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。

子どもの健康福祉学特論

前橋 明

授業概要 本講では、子どもを対象にした健康福祉学を取りあげる。将来、社会の担い手となる子どもたちが、心身ともに健康で、かつ、社会の仲間を人として尊び、相互に思いやりの心で援助し合って生き生きとした暮らしを実現していくという「健康福祉」の心を育てていくために、園や学校ならびに家庭や地域における健康福祉教育のあり方やその具体的実践について情報収集し、子どもの健康福祉に関する理解を深める。そして、近年の社会において必要とされる「子どもの健康福祉」のあり方を模索する。

授業の到達目標

- (1) 子どもに対する健康福祉教育の実践を調べ、子どもの健康福祉に関する理解を深めるとともに、その取り組みの概要を発表できる。
- (2) 講義での学習や与えられた課題の遂行によって、子どもに対する健康福祉教育のあり方や、近年、必要とされる子どもの健全育成のための方策を検討し、提案できるようになる。

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方、子どもの健康福祉学の目的と内容、福祉の心とは
- 第2回：近年の子どもたちが抱える・抱えさせられている健康福祉上の問題とその対策
- 第3回：家庭や園、学校における健康福祉教育の現状と課題
- 第4回：社会（行政、保健センター）における健康福祉教育の現状と課題
- 第5回：福祉体験Ⅰ（車椅子援助体験）
- 第6回：福祉体験Ⅱ（視覚障がい者の方への手引き体験）
- 第7回：福祉体験Ⅲ（福祉レクリエーション）
- 第8回：福祉体験シンポジウム、子ども支援・保護者支援・保育者支援・地域支援を考える
- 第9回：レポート課題報告と討論・評価＜1＞「幼児対象」
- 第10回：レポート課題報告と討論・評価＜2＞「小学生対象」
- 第11回：レポート課題報告と討論・評価＜3＞「中学生対象」
- 第12回：レポート課題報告と討論・評価＜4＞「障がい児対象」
- 第13回：レポート課題報告と討論・評価＜5＞「子どもと関わる保育者・教育者対象」
- 第14回：レポート課題報告と討論・評価＜6＞「子育て中の保護者対象・その他」
- 第15回：課題レポートの最終提出と解説

教科書

- 前橋 明：いま、子どもの心とからだが危ない、大学教育出版、2004
前橋 明：いま、子どもの心とからだが危ない（2）－子どもの未来づくり作戦－、大学教育出版、2006

参考文献

- 前橋 明：子どもの未来づくり 1、明研図書、2010
前橋 明：子どもの未来づくり 2、明研図書、2010
前橋 明：子どもの未来づくり 3、明研図書、2012

成績評価方法

レポート	50%	与えられた課題を、講義内容を絡めて考察・論述しているかどうかを評価する。
平常点評価	50%	発表やディスカッションへの参加を評価する。

備考・関連URL なお、本講義内容は、DP科目 育児保育2-2、2-3、6-2、6-3、6-4、7-2、7-3、7-4、7-5に該当する。

老年社会福祉学特論

加瀬 裕子

授業概要 老年学は、個人の身体的変化から社会的現象まで、老化に伴う諸問題について研究する学問である。老化に伴う問題を、社会福祉学の視点から研究する老年社会福祉学は、単に老人福祉を対象とするものではない。高齢化や少子化によって生じる個人の生活への影響や社会構造への影響について、国際的動向を踏まえて概説する。

授業の到達目標

- (1) 高齢者問題について、学際的視野からアプローチする重要性について認識することができるようになる。(E56-1)
- (2) 高齢化先進諸国が行っている政策の共通点について、的確に述べる事が出来るようになる。(C 6-1)

授業計画

- 第1回：高齢者の身体的、心理的、社会的変化
- 第2回：高齢者の健康づくりとサクセスフル・エイジング
- 第3回：老人福祉法と老人福祉サービス
- 第4回：高齢者の在宅ケアチームアプローチとケアマネジメント
- 第5回：高齢者の地域ネットワークと地域包括支援センターの役割
- 第6回：アメリカの高齢者介護と住宅
- 第7回：認知症ケア 1
- 第8回：認知症ケア 2

教科書 授業中に資料を配布する。

成績評価方法

- レポート 50% 学会論文レベルの論理的レポートであること。
- 平常点評価 50% ディスカッションに参加し、データに基づく意見を述べる事。

臨床心理学特論 I

山薦 圭輔

授業概要 本講義では、臨床心理学の定義や理念、歴史などについて十分に理解した上で、臨床心理学の対象や方法論について幅広く講義する。また、臨床心理学の方法では、各種心理療法の理念とその背景にある理論を詳細に紹介し、理論と方法論との結びつきを説明する。さらに、臨床心理学の特徴や課題について深く議論する。

授業の到達目標

- ・臨床心理学の意味（定義・理念・役割など）について十分に理解することができる。
- ・臨床心理学の方法論（心理療法など）について十分に理解することができる。
- ・理解した内容を実践に結びつけることができる。

授業計画

- 第1回：臨床心理学とは何か
- 第2回：心理学・臨床心理学の歴史
- 第3回：臨床心理学の領域 医療・学校
- 第4回：臨床心理学の領域 産業・行政
- 第5回：基礎理論 精神分析学と臨床心理学
- 第6回：基礎理論 行動主義心理学と臨床心理学
- 第7回：基礎理論 人間的心理学と臨床心理学
- 第8回：精神分析の人間理解と精神分析的な心理療法
- 第9回：行動にかかわる心理療法および臨床心理学的技法
- 第10回：認知にかかわる心理療法および臨床心理学的技法
- 第11回：ゲシュタルト療法・実存分析
- 第12回：交流分析
- 第13回：日本独自の心理療法
- 第14回：芸術療法
- 第15回：総括

参考文献

カウンセリングと援助の実践－医療・学校・産業・行政における心理的支援－ 北樹出版
心理学・臨床心理学概論【改訂版】 北樹出版

成績評価方法

- レポート 60% 授業で取り上げた内容を正確に記述することができるか否か。
- 平常点評価 40% 発言や取り組み、各種小課題などの内容により総合的に判断する。

臨床心理学特論Ⅱ

加藤 陽子

授業概要 児童期から青年期に比較的多く見られる子どものうつ病（うつ病性障害）、不安障害、適応障害、摂食障害、身体表現性障害などといった精神関連障害の心理社会的特徴を理解するとともに、これらの問題へのアセスメントと治療的介入（遊戯療法、箱庭療法、絵画療法など）の実際について解説する。また、事例検討などを通して介入のプランニングや他職種との連携などについても具体的に学んでいく。

履修条件：臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。

授業の到達目標

・遊戯療法・芸術療法の諸理論と問題のアセスメントおよび治療的介入方略の基礎を身につける。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：子ども臨床の基礎
- 第3回：子どもの臨床と心理療法
- 第4回：遊戯療法の理論と実践（1）
- 第5回：遊戯療法の理論と実践（2）
- 第6回：遊戯療法の理論と実践（3）
- 第7回：芸術療法の理論と実践（1）
- 第8回：芸術療法の理論と実践（2）
- 第9回：芸術療法の理論と実践（3）
- 第10回：箱庭療法の理論と実践（1）
- 第11回：箱庭療法の理論と実践（2）
- 第12回：箱庭療法の理論と実践（3）
- 第13回：事例検討（1）遊戯療法を用いた治療的介入
- 第14回：事例検討（2）芸術療法を用いた教育相談事例
- 第15回：まとめ

教科書

教科書は随時指示する。随時プリントを配布する。

参考文献

安島智子著 遊戯療法と子どもの「こころの世界」金子書房2010
松本真理子・金子一彦「子どもの臨床心理アセスメントー子ども・家族・学校支援のために」金子書房2010

成績評価方法

レポート 50% 授業内容の理解度と応用力を評価する。
平常点評価 30% 授業中への積極性（参加度）を評価をする。
その他 20% 出席状況を評価する。

臨床心理面接法特論Ⅰ

嶋田 洋徳／菅野 純

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。本特論では、心理臨床場面において、インテーク面接から集結に至るまでのプロセスで必要とされる臨床心理面接のさまざまなスキルの獲得を目的とする。具体的には、主訴の把握（生育歴等を含む）、臨床心理アセスメント、診断基準、問題の焦点づけ、支援目標の設定、行動観察、介入方針や治療仮説の立案、面接の進め方（描画療法、箱庭療法、コラージュ法、プレイセラピー等を含む）、面接で生じる諸問題の解決、治療の集結と評価の方法を中心に概説を行い、同時に実習を行う。

授業の到達目標

・心理臨床場面の基本的な発想・着眼点や理論的背景、具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：イントロダクション、臨床心理学のアプローチの方法、臨床心理面接の進め方の理論と実際
- 第2回：主訴の把握、臨床心理アセスメント、診断基準の理論と実際、問題の焦点づけ、支援目標の設定、行動目標の作成の理論と実際
- 第3回：データの収集、グラフ化と行動観察の理論と実際、介入方針、治療仮説の立案の理論と実際
- 第4回：一事例実験デザインの理論と実際、介入の中間評価と方針変更の検討の理論と実際
- 第5回：行動の生起頻度を増大させる随伴操作の理論と実際、不適切な行動を減少させる結果操作の理論と実際
- 第6回：分化強化、刺激制御、シェイピングの理論と実際、機能査定と機能分析の理論と実際
- 第7回：行動変容の般化の理論と実際、行動のセルフ・コントロールの理論と実際、治療の終結の理論と実際
- 第8回：生育歴調査の方法
- 第9回：初回面接の理論と実際
- 第10回：児童および生徒に対する面接の理論と実際
- 第11回：親子および保護者に対する面接の理論と実際
- 第12回：描画療法、スキュグル法の理論と実際
- 第13回：プレイセラピーの理論と実際
- 第14回：コラージュ法の理論と実際
- 第15回：箱庭療法の理論と実際、まとめ

教科書

講義の中で別途指示する。

参考文献

講義中に適宜紹介する。

成績評価方法

試験 20% 記述式、多肢選択式の試験の得点による。
レポート 60% 課題内容の達成度による。
平常点評価 20% 出席の程度による。

臨床心理面接法特論Ⅱ

鈴木 伸一／根建 金男

授業概要 本講義は、心理臨床面接の基礎を学ぶことを目的としている。前半の7回は、面接の導入、ラポールの形成、主訴の把握、問題歴・生育歴の聴取、インテーク情報のまとめと報告書の書き方、トラブルシューティングと他職種との連携などについて解説する。そして後半の8回では、行動療法と認知行動療法で用いる技法や面接の手法の代表的なものをいくつかとりあげて、文献を読むことと実習を行うことを通して学ぶ。具体的には、自律訓練法、系統的脱感作法、自己教示訓練、認知的再体制化法（論駁法、ソクラテスの問答法）をとりあげる。

本講義は、心理臨床面接の基礎を学ぶことを目的としている。前半の7回は、面接の導入、ラポールの形成、主訴の把握、問題歴・生育歴の聴取、インテーク情報のまとめと報告書の書き方、トラブルシューティングと他職種との連携などについて解説する。そして後半の8回では、行動療法と認知行動療法で用いる技法や面接の手法の代表的なものをいくつかとりあげて、文献を読むことと実習を行うことを通して学ぶ。具体的には、自律訓練法、系統的脱感作法、自己教示訓練、認知的再体制化法（論駁法、ソクラテスの問答法）をとりあげる。

授業の到達目標

- ・心理臨床面接の基礎的な進め方がわかる（C5-1）
- ・心理臨床面接が必要とされる基礎的な技術を行うことができる（D56-2、B56-3）
- ・心理臨床面接で生じる問題への原則的な対応策がわかる（F56-1）

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：臨床心理面接の基本構造
- 第3回：関係構築とラポール
- 第4回：インテーク面接
- 第5回：面接の進め方（1）
- 第6回：面接の進め方（2）
- 第7回：報告書の書き方
- 第8回：自律訓練法と前進的弛緩法の理論と実際（1）
- 第9回：自律訓練法と前進的弛緩法の理論と実際（2）
- 第10回：系統的脱感作法の理論と実際（1）
- 第11回：系統的脱感作法の理論と実際（2）
- 第12回：自己教示訓練の理論と実際
- 第13回：認知的再体制化法の理論と実際（1）
- 第14回：認知的再体制化法の理論と実際（2）
- 第15回：認知的再体制化法の理論と実際（3）

教科書 臨床面接の進め方（日本評論社）

成績評価方法

- レポート 50% レポート提出とその内容により評価する
平常点評価 50% 出席状況と講義への積極的関与により評価する

臨床心理実習ⅠA（春学期）

嶋田 洋徳／熊野 宏昭／鈴木 伸一

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理基礎実習ⅠおよびⅡを履修した大学院生に限る。心理臨床面接におけるインテーク、アセスメントおよび治療支援の援助の実践について、実習を通して理解することを目的とする。人間科学学院心理相談室におけるインテーク面接および関連施設で担当したケースについてのスーパービジョンを中心に、実践的な面接スキル、他スタッフとの連携などを学習する。

授業の到達目標

- ・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）
- 第3回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）
- 第4回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）
- 第5回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）
- 第6回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）
- 第7回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）
- 第8回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）
- 第9回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）
- 第10回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）
- 第11回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）
- 第12回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）
- 第13回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）
- 第14回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（7）
- 第15回：春学期のまとめ

教科書 なし。レポートを担当する者がレジュメ等を配布する。

参考文献 授業に適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 80% 課題内容の達成度による。
平常点評価 20% 討論における貢献度による。

臨床心理実習 I B (秋学期)

嶋田 洋徳／熊野 宏昭／鈴木 伸一

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理基礎実習 I および II を履修した大学院生に限る。心理臨床面接におけるインテーク、アセスメントおよび治療支援的援助の実践について、実習を通して理解することを目的とする。人間科学学術院心理相談室におけるインテーク面接および関連施設で担当したケースについてのスーパービジョンを中心に、実践的な面接スキル、他スタッフとの連携などを学習する。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

第1回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（8）
第2回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）
第3回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（9）
第4回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）
第5回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（10）
第6回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）
第7回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（11）
第8回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）
第9回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（12）
第10回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）
第11回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（13）
第12回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）
第13回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（14）
第14回：秋学期のまとめ
第15回：総合まとめ

教科書 なし。レポーターを担当する者がレジュメ等を配布する。

参考文献 授業に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 80% 課題内容の達成度による。
平常点評価 20% 討論における貢献度による。

臨床心理実習 II A (春学期)

嶋田 洋徳／熊野 宏昭／鈴木 伸一

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理基礎実習 I および II を履修した大学院生に限る。心理臨床面接におけるインテーク、アセスメントおよび治療支援的援助の実践について、実習を通して理解することを目的とする。人間科学学術院心理相談室におけるインテーク面接および関連施設で担当したケースについてのスーパービジョンを中心に、実践的な面接スキル、他スタッフとの連携などを学習する。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

第1回：オリエンテーション
第2回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）
第3回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）
第4回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）
第5回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（1）
第6回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）
第7回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）
第8回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）
第9回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（2）
第10回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）
第11回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）
第12回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）
第13回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（3）
第14回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（7）
第15回：春学期のまとめ

教科書 なし。レポーターを担当する者がレジュメ等を配布する。

参考文献 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 80% 課題内容の達成度による。
平常点評価 20% 討論における貢献度による。

臨床心理実習 II B（秋学期）

嶋田 洋徳／熊野 宏昭／鈴木 伸一

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理基礎実習 I および II を履修した大学院生に限る。心理臨床面接におけるインテーク、アセスメントおよび治療支援の援助の実践について、実習を通して理解することを目的とする。人間科学学院心理相談室におけるインテーク面接および関連施設で担当したケースについてのスーパービジョンを中心に、実践的な面接スキル、他スタッフとの連携などを学習する。

授業の到達目標

心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

第1回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（8）
第2回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）
第3回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（9）
第4回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（4）
第5回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（10）
第6回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）
第7回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（11）
第8回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（5）
第9回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（12）
第10回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）
第11回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（13）
第12回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論（6）
第13回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論（14）
第14回：秋学期のまとめ
第15回：総合まとめ

教科書 なし。レポーターを担当する者がレジюме等を配布する。

参考文献 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 80% 課題内容の達成度による。
平常点評価 20% 討論における貢献度による。

臨床心理基礎実習 I A（春学期）

菅野 純／根建 金男／藤井 靖

授業概要 臨床心理学に関する基礎的知識・方法の習得を目指す。

授業の到達目標

実習で対象となる事例について、正確に理解し適切な支援を行うことができる。

授業計画

第1回：事例とは何か（1）
第2回：事例理解の方法（1）
第3回：事例理解の方法（3）
第4回：事例の記録の方法（1）
第5回：事例の記録の方法（3）
第6回：事例検討（1）
第7回：事例検討（3）
第8回：事例検討（5）
第9回：事例発表の方法（1）
第10回：事例発表の方法（3）
第11回：事例についての合同討議の方法（1）
第12回：事例についての合同討議の方法（3）
第13回：事例についての合同討議の方法（5）
第14回：事例にまつわる問題（1）リファールの方法
第15回：事例にまつわる問題（3）スーパーヴィジョンの受け方

教科書 使用しない。

参考文献 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 授業に対する積極性（参加度）を評価する。

備考・関連URL 特になし。

臨床心理基礎実習 I B（秋学期）

根建 金男／菅野 純

授業概要 臨床心理学に関する基礎的知識の習得と基礎的方法の習得を目指す。

授業の到達目標

・実習で行う事例等に対して、正確に理解し支援等を適切に行うことができる（B56-3、C 5-1、D56-2、E56-1、E56-2、F56-1）。

授業計画

- 第1回：ケースにおける倫理的配慮（1）
- 第2回：ケースの空間的・時間的・社会的構造（1）
- 第3回：クライアントとセラピストとの関係（1）
- 第4回：心理アセスメントについて（1）
- 第5回：心理アセスメントについて（3）
- 第6回：ケースフォーミュレーションについて（1）
- 第7回：ケースフォーミュレーションについて（3）
- 第8回：ケースにおける目標設定（1）
- 第9回：臨床心理面接技法の適用（1）
- 第10回：臨床心理面接技法の適用（3）
- 第11回：ケースにおける失敗への対処（1）
- 第12回：他職種との連携について（1）
- 第13回：危機介入について（1）
- 第14回：ケースの終結に際して（1）
- 第15回：スーパーヴィジョンを受けるということ（1）

成績評価方法

平常点評価 100% 授業に対する参加度を評価する。

臨床心理基礎実習 II A（春学期）

菅野 純／根建 金男／藤井 靖

授業概要 臨床心理学に関する基礎的知識・方法の習得を目指す。

授業の到達目標

・実習で対象となる事例について、正確に理解し適切な支援を行うことができる。

授業計画

- 第1回：事例とは何か（2）
- 第2回：事例理解の方法（2）
- 第3回：事例理解の方法（4）
- 第4回：事例の記録の方法（2）
- 第5回：事例の記録の方法（4）
- 第6回：事例検討（2）
- 第7回：事例検討（4）
- 第8回：事例検討（6）
- 第9回：事例発表の方法（2）
- 第10回：事例発表の方法（4）
- 第11回：事例についての合同討議の方法（2）
- 第12回：事例についての合同討議の方法（4）
- 第13回：事例についての合同討議の方法（6）
- 第14回：事例にまつわる問題（2）リファーマの方法
- 第15回：事例にまつわる問題（4）スーパーヴィジョンの受け方

教科書 使用しない。

参考文献 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

平常点評価 100% 授業に対する積極性（参加度）を評価する。

備考・関連URL 特になし。

臨床心理基礎実習 II B（秋学期）

根建 金男／菅野 純

授業概要 臨床心理学に関する基礎的知識の習得と基礎的方法の習得を目指す。

授業の到達目標

・実習で行う事例等に対して、正確に理解し支援等を適切に行うことができる（B56-3、C 5-1、D56-2、E56-1、E56-2、F56-1）。

授業計画

- 第1回：ケースにおける倫理的配慮（2）
- 第2回：ケースの空間的・時間的・社会的構造（2）
- 第3回：クライアントとセラピストとの関係（2）
- 第4回：心理アセスメントについて（2）
- 第5回：心理アセスメントについて（4）
- 第6回：ケースフォーミュレーションについて（2）
- 第7回：ケースフォーミュレーションについて（4）
- 第8回：ケースにおける目標設定（2）
- 第9回：臨床心理面接技法の適用（2）
- 第10回：臨床心理面接技法の適用（4）
- 第11回：ケースにおける失敗への対処（2）
- 第12回：他職種との連携について（2）
- 第13回：危機介入について（2）
- 第14回：ケースの終結に際して（2）
- 第15回：スーパーヴィジョンを受けるということ（2）

成績評価方法

平常点評価 100% 授業に対する参加度を評価する。

心理臨床現場実習 IA（春学期）

菅野 純

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパーヴィジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：現場実習事前指導（1）
- 第3回：教育分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第4回：医療分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）
- 第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）
- 第14回：現場実習事後指導（1）
- 第15回：春学期のまとめ

成績評価方法

レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。
平常点評価 50% 出席や事業中の討議への参加状況について評価します。

心理臨床現場実習 IB（秋学期）

菅野 純

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：現場実習事前指導（2）
- 第2回：教育分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第3回：医療分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
- 第13回：現場実習事後指導（2）
- 第14回：秋学期のまとめ
- 第15回：総合まとめ

成績評価方法

レポート	50%	担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。
平常点評価	50%	出席や事業中の討議への参加状況について評価します。

心理臨床現場実習 II A（春学期）

野村 忍

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：現場実習事前指導（1）
- 第3回：教育分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第4回：医療分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）
- 第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）
- 第14回：現場実習事後指導（1）
- 第15回：春学期のまとめ

成績評価方法

レポート	50%	担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価する。
平常点評価	50%	出席や授業中の討議への参加状況について評価する。

心理臨床現場実習ⅡB（秋学期）

野村 忍

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学院心理相談室をはじめとして、学外の実習分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インターン、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：現場実習事前指導（2）
- 第2回：教育分野における心理臨床現場の実際（2）
- 第3回：医療分野における心理臨床現場の実際（2）
- 第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
- 第13回：場実習事後指導（2）
- 第14回：秋学期のまとめ
- 第15回：総合まとめ

成績評価方法

レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価する。
平常点評価 50% 出席や授業中の討議への参加状況について評価する。

心理臨床現場実習ⅢA（春学期）

根建 金男

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学院心理相談室をはじめとして、学外の実習分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インターン、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる（B56-3、C 5-1、D56-2、E56-1、E56-2、F56-1、G36-3、G36-4）。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：現場実習事前指導（1）
- 第3回：教育分野における心理臨床現場の実際（1）
- 第4回：医療分野における心理臨床現場の実際（1）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）
- 第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）
- 第14回：現場実習事後指導（1）
- 第15回：春学期のまとめ

成績評価方法

レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価する。
平常点評価 50% 出席や授業中の討議への参加状況について評価する。

心理臨床現場実習ⅢB（秋学期）

根建 金男

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパーヴィジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通じて、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる（B56-3、C 5-1、D56-2、E56-1、E56-2、F56-1、G36-3、G36-4）。

授業計画

第1回：現場実習事前指導（2）
第2回：教育分野における心理臨床現場の実践（2）
第3回：医療分野における心理臨床現場の実践（2）
第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
第13回：現場実習事後指導（2）
第14回：秋学期のまとめ
第15回：総合まとめ

成績評価方法

レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価する。
平常点評価 50% 出席や授業中の討議への参加状況について評価する。

心理臨床現場実習ⅣA（春学期）

佐々木 和義

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。

具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパーヴィジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通じて、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

第1回：オリエンテーション
第2回：現場実習事前指導（1）
第3回：教育分野における心理臨床現場の実践（1）
第4回：医療分野における心理臨床現場の実践（1）
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）
第14回：現場実習事後指導（1）
第15回：春学期のまとめ

成績評価方法

レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。
平常点評価 50% 出席や授業中の討議への参加状況について評価します。

心理臨床現場実習ⅣB（秋学期）

佐々木 和義

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に行うことを通じて、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：現場実習事前指導（2）
- 第2回：教育分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第3回：医療分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
- 第13回：現場実習事後指導（2）
- 第14回：秋学期のまとめ
- 第15回：総合まとめ

成績評価方法

レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。
平常点評価 50% 出席や事業中の討議への参加状況について評価します。

心理臨床現場実習ⅤA（春学期）

嶋田 洋徳

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に行うことを通じて、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：現場実習事前指導（1）
- 第3回：教育分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第4回：医療分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）
- 第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）
- 第14回：現場実習事後指導（1）
- 第15回：春学期のまとめ

成績評価方法

レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価する。
平常点評価 50% 出席や事業中の討議への参加状況について評価する。

心理臨床現場実習 V B (秋学期)

嶋田 洋徳

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：現場実習事前指導（2）
- 第2回：教育分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第3回：医療分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
- 第13回：現場実習事後指導（2）
- 第14回：秋学期のまとめ
- 第15回：総合まとめ

成績評価方法

- レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。
平常点評価 50% 出席や事業中の討議への参加状況について評価します。

心理臨床現場実習 VI A (春学期)

鈴木 伸一

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インターク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる（D56-1、E56-1、E56-2、F56-1）

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：現場実習事前指導
- 第3回：教育分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第4回：医療分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）
- 第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）
- 第14回：現場実習事後指導（1）
- 第15回：春学期のまとめ

教科書 教科書は使用しない。

参考文献 参考書は随時指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% 実習状況および実習報告書の内容により総合的に評価する

心理臨床現場実習ⅥB（秋学期）

鈴木 伸一

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インタビュー、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる（D56-1、E56-1、E56-2、F56-1）

授業計画

- 第1回：現場実習事前指導（2）
- 第2回：教育分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第3回：医療分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
- 第13回：現場実習事後指導（2）
- 第14回：秋学期のまとめ
- 第15回：総合まとめ

教科書 教科書は使用しない。

参考文献 参考書は随時指示する。

成績評価方法

平常点評価 100% 実習状況および実習報告書の内容により総合的に評価する

心理臨床現場実習ⅦA（春学期）

熊野 宏昭

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インタビュー、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：現場実習事前指導（1）
- 第3回：教育分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第4回：医療分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）
- 第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）
- 第14回：現場実習事後指導（1）
- 第15回：春学期のまとめ

成績評価方法

レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。
平常点評価 50% 出席や事業中の討議への参加状況について評価します。

心理臨床現場実習 VII B（秋学期）

熊野 宏昭

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：現場実習事前指導（2）
- 第2回：教育分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第3回：医療分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
- 第13回：現場実習事後指導（2）
- 第14回：秋学期のまとめ
- 第15回：総合まとめ

成績評価方法

レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。
平常点評価 50% 出席や授業中の討議への参加状況について評価します。

心理臨床現場実習 VII A（春学期）

大月 友

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標

・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：現場実習事前指導（1）
- 第3回：教育分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第4回：医療分野における心理臨床現場の実践（1）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（1）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（2）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（3）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（4）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（5）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（6）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（7）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（8）
- 第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（9）
- 第14回：現場実習事後指導（1）
- 第15回：春学期のまとめ

成績評価方法

試験 実施しない。
レポート 50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。
平常点評価 50% 出席や授業中の討議への参加状況について評価します。

心理臨床現場実習ⅧB（秋学期）

大月 友

授業概要 この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実務分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インタビュー、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援の援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン（事前指導、および事後指導を含む）を定期的に行うことを通じて、今後の学習課題を明確にする。

授業の到達目標
・心理臨床面接における理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：現場実習事前指導（2）
- 第2回：教育分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第3回：医療分野における心理臨床現場の実践（2）
- 第4回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（10）
- 第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（11）
- 第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（12）
- 第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（13）
- 第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（14）
- 第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（15）
- 第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（16）
- 第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（17）
- 第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討（18）
- 第13回：現場実習事後指導（2）
- 第14回：秋学期のまとめ
- 第15回：総合まとめ

成績評価方法

試験	実施しない。
レポート	50% 担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。
平常点評価	50% 出席や事業中の討議への参加状況について評価します。

心理療法特論

三浦 正江

授業概要 治療的手法および予防的手法として注目されているストレス・マネジメント・プログラムを取り上げる。具体的には、Lazarus & Folkmanの心理的ストレス理論の主要概念であるストレスラー、認知的評価、コーピング、ストレス反応について理解し、治療場面において認知やコーピングの問題をどのように取り扱うかを考える。また、ストレス反応を軽減する効果的な方法として、漸進的筋弛緩法や自律訓練法の実施方法と適用を紹介する。最後に、ストレス・マネジメント・プログラムや心理的ストレス理論を活かした予防的介入の具体例を取り上げる。

授業の到達目標 本講義の到達目標は以下のとおりである。
(1) 講義やグループワークを通して、心理的ストレス理論およびストレス・マネジメント・プログラムの治療的・予防的な実施方法について理解すること。
(2) 課題やロールプレイ等を通して、ストレス・マネジメント・プログラムを実施するための基礎的なスキルを獲得すること。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：心理的ストレス理論（1）
- 第3回：心理的ストレス理論（2）
- 第4回：心理的ストレス理論（3）
- 第5回：リラクゼーション技法（1）
- 第6回：リラクゼーション技法（2）
- 第7回：リラクゼーション技法（3）
- 第8回：認知的評価（1）
- 第9回：認知的評価（2）
- 第10回：ストレス・コーピング（1）
- 第11回：ストレス・コーピング（2）
- 第12回：ストレス・コーピング（3）
- 第13回：ストレス・マネジメント・プログラムの実践（1）
- 第14回：ストレス・マネジメント・プログラムの実践（2）
- 第15回：講義全体のまとめ

教科書 特になし

成績評価方法

レポート	30% 課題は授業中に提示します。課題への取り組み状況、到達度等を評価します。
平常点評価	70% テーマごとの小レポート（授業内容、自分自身の理解度や到達度、感想等）によって授業の理解度や積極性を評価します。また、出席状況、授業中の発言、グループワーク等への参加態度によって授業への積極性を評価します。

備考・関連URL 特になし

言語情報科学特論

菊池 英明

授業概要 言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。この講義では、コンピュータ・情報処理技術を導入した音声言語理解・生成・インタラクションのモデル化及びシステム開発の事例を紹介する。

授業の到達目標
・音声言語メディアの諸相を踏まえて、音声言語理解・生成・インタラクションなどの人間の言語行動のモデル化手法を理解することを目標とする。
(B56-4)

授業計画
第1回：導入 言語情報科学とは
第2回：言語情報の諸相（1）
第3回：言語情報の諸相（2）
第4回：言語情報の諸相（3）
第5回：音声言語理解のモデル（1）
第6回：音声言語理解のモデル（2）
第7回：音声言語理解のモデル（3）
第8回：音声言語生成のモデル（1）
第9回：音声言語生成のモデル（2）
第10回：音声言語生成のモデル（3）
第11回：音声言語インタラクションのモデル（1）
第12回：音声言語インタラクションのモデル（2）
第13回：音声言語インタラクションのモデル（3）
第14回：最新研究事例の紹介
第15回：まとめ

成績評価方法
レポート 100% 音声言語メディアの諸相を踏まえて、音声言語理解・生成・インタラクションなどの人間の言語行動のモデル化手法を理解しているかを評価する。

教授学習過程特論

宮崎 清孝

授業概要 教授学習過程論とは人間の認知の謎に、学習という切り口から迫ろうとする認知科学の一分野である。これは認知が社会的、文化的な関係性の中で学習され、形成されるプロセスについて探求するものであり、認知に対する「文化歴史的アプローチ」からの接近である。本授業では「文化歴史的アプローチ」からの諸理論を紹介し、それを用いて特に学校教育場面における学習がどのように分析されるのかについて検討する。またその際、日本の実践者（現場の教師）のもつ実践知と科学的な理論がどのように生産的に関わるのか、という問題についても検討する。

授業の到達目標
(1) 認知に対する「文化歴史的アプローチ」の諸理論の特徴を理解し、説明できる E56-3、E56-4。
(2) 現実の教育事象について理論的な問いを生成できる E56-4、C 6-2。

授業計画
第1回：認知科学としての教授学習過程：教授学習過程論は認知科学の一分野である。そのことの意味についてみていく。
第2回：文化歴史的アプローチと状況論的認知論：文化歴史的アプローチからの諸理論を紹介する。
第3回：知識をめぐる諸問題－理論的に：学習の対象となる知識について、どのようなものと考えうるのか、理論的に検討する。
第4回：知識をめぐる諸問題－学校教育における：知識が実際の学校教育の場でどのようなものとして現れているのかを紹介する。
第5回：教授学習過程研究における方法論：授業を研究の対象とするとき、どのようなスタンスが必要なのか、検討する。
第6回：授業における協働的学習－談話としての授業：授業を言葉を介した相互作用であると見なす観点を紹介する。
第7回：授業における協働的学習と知の生成過程：言葉を介した相互作用の中で、知識がどのように形成されるのか、検討する。
第8回：学習論における教師の位置：教師は授業の作者だという観点から、教師の役割とその結果として生まれる学習の質について検討する。

教科書 特に指定せず。

参考文献 授業中に指示する。

成績評価方法
平常点評価 100% 質疑への参加の度合いを評価する。

情報処理心理学特論

中島 義明

授業概要 認知心理学の「第一の時代」が経過した。この間にそれなりの実績が積み上げられた。しかしこの時代になされた「認知変数」の切り出しは、本来は「統合体」として融合し一つのまとまりをもった対象を、分析的研究に「都合の良いように」切り取ったものと言える。それゆえ認知心理学の次の「第二の時代」には、これらの変数の一部を重ね合わせたり、別の方向から眺めることにより複数の「認知変数」を統合したり、接続させるといった作業がなされるべきである。そこで本講義では、これまで独立して取り扱われてきた認知心理学の諸概念（諸変数）を理論的に検討し、それらの「連結」を試みる。

授業の到達目標

- ・ 認知心理学の諸概念（諸変数）について正確に理解する。（B56-3、B56-4）
- ・ 認知心理学の諸概念（諸変数）間の関係性について理解する。（B56-3、B56-4）

授業計画

- 第1回：授業の概要と進め方（教材の配布）：認知心理学の変数の「設定」と「連結」：心理学的諸理論を連結する「ルート・メタファー」：認知心理学を覆う「メタフォリカル」な発想傾向
- 第2回：「スキーマ」概念に媒介された「エラー発生認知モデル」と「認知療法のICS理論」との連結性：「二重符号化理論」と「二重処理理論」と「ワーキングメモリ理論」と「処理資源理論」との連結性
- 第3回：「注意の瞬き現象」と「ワーキングメモリ」と「処理資源」との連結性：「ワーキングメモリ」と「長期記憶」の連結性
- 第4回：「ストループ効果」と「ワーキングメモリ」と「処理資源」との連結性：「ブライミング効果」と「ストループ効果」の連結性
- 第5回：「展望的記憶」と「ワーキングメモリ」の連結性：「展望的記憶」と「回想的記憶」の連結性：「展望的記憶」と「処理資源」の連結性
- 第6回：「リアリティ・モニタリング」と「メタ認知」、内的記憶、「外的記憶」、「展望的記憶」、「回想的記憶」、「夢の記憶」、「自伝的記憶」との連結性
- 第7回：「素朴概念」と「心の理論」および「メタ認知」との連結性：「認知系」と「パフォーマンス系」（「動作系」）の連結性
- 第8回：「脳事象関連電位」と「順応水準」の連結性：「日常性の心理学」と「実験室の心理学」の連結性：「認知変数（認知的構成概念）間の連結性」を研究するためのマクロアプローチとミクロアプローチ

教科書 授業内において教材を配布する。

参考文献

- 中島義明著『情報処理心理学－情報と人間の関わり認知心理学－』サイエンス社 2006年刊
- 中島義明著『情報の人間科学』コロナ社、2007年刊
- 中島義明著『映像心理学の理論』有斐閣 2011年刊

成績評価方法

その他 100% 出席状況・ミニレポートを総合して評価する。

備考・関連URL 上記授業計画は必要に応じた変更があり得る。

生態心理学特論

古山 宣洋

授業概要 生態心理学は、有機体が、自身の動きによって生じる包囲エネルギーの変換において持続する変わらない部分、すなわち不変項を情報として取り出すことで環境の知覚を達成し、さらにそのようにして取り出した情報が、環境内における自身の行為の可能性としてのアフォーダンスを特定するとする知覚理論を提案している。本講義では、生態心理学の国内外での動向を、基礎的な文献購読を通して押さえ、人間科学に対してどのような意味をもつのかについて討議する。

授業の到達目標

- ・ 「不変項」、「アフォーダンス」、「知覚システム」、「協応」などの生態心理学の鍵概念について理解し、これらをめぐって、近年どのような議論が理論的・実証的に展開されてきたかを説明できるようになる。
- ・ 生態心理学が人間科学に対してどのような意義を持つのかについて議論できるようになる。

授業計画

- 第1回：不変項としての情報という着想にもとづいたギブソンの直接知覚論について概説する。
- 第2回：基礎定位システム、視覚システム、聴覚システム、触覚システム、味・嗅覚システムなどの知覚システムについて概観する。
- 第3回：直接知覚に基づいて構想されたダイナミック・タッチに関する研究について概観する。
- 第4回：環境が動物に与える行為の可能性としてのアフォーダンスという考え方について、ギブソンの著作から該当章を講読する。
- 第5回：前回に引き続き、アフォーダンスについての講読をする。
- 第6回：間隙の通過可能性をめぐってなされてきた生態心理学的な研究を概観する。
- 第7回：近づいてくる対象との接触までに残された時間を特定する不変項に関する生態心理学的な研究を概観する。
- 第8回：自由度問題を解決する鍵概念としてベルンシュタインが提唱した協応について概観する。

教科書 「生態学的知覚システム－感性をとらえなおす」ジェームズ・J. ギブソン（著）、佐々木正人・古山宣洋・三嶋博之（訳）、東京大学出版会

参考文献

- 「アフォーダンスの構想－知覚研究の生態心理学的デザイン」佐々木正人・三嶋博之（訳）、東京大学出版会
- 「デクステリティ 巧みさとその発達」N.A.ベルンシュタイン（著）、工藤和俊（訳）、金子書房

成績評価方法

レポート 80% 生態心理学が人間科学に対してどのような意義を持つのかについて議論できるかどうか

平常点評価 20% 授業中に活発に議論に参加できるかどうか

人間生体機能動態学特論

宮崎 正己

授業概要 人間の基本的な事柄について言及をしていく。

授業の到達目標

・本授業を通して、人間の側面を理解してもらうことが、到達目標である。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション。機能動体学とは。
第2回：人間は、未知なるもの。
第3回：人間の生理学的特性
第4回：人間の快適性とは、
第5回：人間と周りを支える環境との関連
第6回：人間と労働
第7回：人間の疲労
第8回：人間とは、何ぞや。

成績評価方法

試験	試験は、実施しない。
レポート	20% 数回、提出する。
平常点評価	80% 出席による。
その他	その他

学校学習システム特論

浅田 匡

授業概要 学校における学習のあり方を、システムという観点から考究する。Teaching Modelは、インストラクショナル・デザインとして様々な学習理論に基づき開発されてきた。本講義では、授業の実践性という観点から、学校学習に関するモデルを取り上げ、概説する。取り上げるモデルとしては、J. B. キャロルの学校学習モデル、B. S. ブルームの学校学習モデル等である。これらはいずれも学力向上との関係から考えられてきたモデルである。さらに、わが国において実践されてきた様々な理論に基づくモデルを取り上げ、これからの学校学習システムを考える。

授業の到達目標

- (1) 学校学習モデルを理解する。
(2) わが国で開発され数多く実践されてきた授業モデルの特徴と学校学習の何を克服しようとしてきたかを理解する。
(3) 社会の変化を考え、これからの学校学習についてシステム論の観点から考えることができる。
B56-2、C 6-1、C 6-2、Ad56-3

授業計画

- 第1回：システムとしての学校学習とは何か。
第2回：個人差に対応する学校学習モデル
第3回：学級経営と学校学習モデル
第4回：わが国における授業モデル (1) 学び方学習
第5回：わが国における授業モデル (2) 仮説実験授業
第6回：わが国における授業モデル (3) 極地方式研究会
第7回：わが国における授業モデル (4) 範例方式
第8回：わが国における授業モデル (5) 完全習得学習
第9回：わが国における授業モデル (6) 発見学習
第10回：わが国における授業モデル (7) プログラム学習
第11回：わが国における授業モデル (8) パズ学習
第12回：わが国における授業モデル (8) システムズ・アプローチ
第13回：学習理論と授業モデル
第14回：人間性心理学と授業モデル
第15回：授業モデルと授業デザイン

教科書 随時資料を配布する

成績評価方法

レポート	80% 論理性
平常点評価	20% 出席と発表

情報メディア教育特論

森田 裕介

授業概要 情報メディアを活用した教育に関する研究について理解を深める。まず、情報メディアの存在とその教育利用について解説する。次に、情報メディアを活用した教育に関する研究として、Web-Based Learning、動画伝送、マルチメディア活用、仮想現実や拡張現実に関する技術の応用を取り上げる。これらの事例を踏まえ、受講者はビデオプレゼンテーションを作成し、BBSを用いてオンラインディスカッションを行う。なお、本授業は初回授業（ガイダンス）のみ教室で実施し、2回目以降はオンデマンド授業として実施する。

授業の到達目標

本講義の到達目標は、（１）情報メディアを活用した教育に関する研究論文を読み、問題点を示すことができる、（２）ビデオプレゼンテーションを作成することができる、（３）オンラインディスカッションにおいて、研究上の有用性や問題点、限界等について自分の考えを論理的に説明し、かつ他の受講生と議論することができる、の３点である。

授業計画

第1回：導入
第2回：情報メディアを活用した教育（１）：Web-Based Learning
第3回：情報メディアを活用した教育（２）：動画伝送
第4回：情報メディアを活用した教育（３）：マルチメディア活用
第5回：情報メディアを活用した教育（４）：VR/AR技術の応用
第6回：ビデオプレゼンテーションとディスカッション（１）
第7回：ビデオプレゼンテーションとディスカッション（２）
第8回：まとめ

参考文献

適宜紹介

成績評価方法

レポート 40% 論文を正しく理解し、自分の意見を論理的に述べることができる。
平常点評価 30% オンデマンド講義を授業し、BBSにおいて積極的に発言したり議論したりすることができる。
その他 30% ビデオプレゼンテーションを作成するスキルを習得している。

備考・関連URL ビデオプレゼンテーションを行うため、各自でPCとWebカメラを用意し、MNC推奨のソフトウェアをインストールする必要がある。どうしてもPC等を準備できない場合は教員に相談をすること。

ヒューマンコンピュータインタラクション特論

金 群

授業概要 ヒューマンコンピュータインタラクション（HCI）とは、従来のソフトウェア工学のアプローチに加え、システム利用者である人間のふるまいを考慮した学際的な視野に立って、人間とコンピュータとの相互作用について研究する学問である。授業では、人間中心という基本理念をもとに、HCIに関する理論と実践について学び、ユーザインタフェースデザインと開発・評価手法を習得する。さらに、HCIに関する展望と最新発展動向を紹介しながら、今後の学習の指針を与える。

授業の到達目標

ヒューマンコンピュータインタラクションに関する最新知識および情報システム学やソフトウェア工学の人間的な側面を理解し、学際的な視点からユーザインタフェースを含む情報システムの設計・開発・応用・評価を行えるようになる。

授業計画

第1回：イントロダクション（授業の概要と進め方）
第2回：Human-Centric Computingの理念
第3回：インタラクションデザイン
第4回：HCIのためのタスク分析
第5回：事例分析1（Life Log：人間的・社会的側面）
第6回：社会ネットワーク分析
第7回：データマイニングとパターン抽出
第8回：人間情報行動分析
第9回：さりげない情報行動とEye-Tracking
第10回：事例分析2（Life Log：技術的側面）
第11回：統一ユーザモデリング（Unified User Modeling）
第12回：統合エコ情報環境（Ecologically Integrated Information Environments）
第13回：未来Smart Life：コンセプト、デザイン、HCIとシナリオ
第14回：HCIの最新発展動向と今後の展望：ユビキタスユーザモデリングとパーベシブHCI
第15回：応用シナリオ（Life Log：ユビキタスヘルスサービスの実現に向けて）

教科書

とくに指定しない

参考文献

授業中に紹介

成績評価方法

レポート 70% 中間レポート（2回、20%×2）：授業内容に対する理解度、分析と考察内容 期末レポート（30%）：授業内容に対する理解度、応用の適切さと考察内容
平常点評価 30% 出席状況、授業内での発言を総合して評価する

備考・関連URL

授業中に紹介

環境教育

太田 俊二／吉富 友恭

授業概要 環境教育は世界的に取り組まれてきているものの、その内容や水準には大きな違いがあり、玉石混淆という状態である。このプロジェクト科目では、環境教育の実践がどのような考え方や歴史のもとに進められてきたのか、現状はどうであるのか、をまず理解する、次に、受講者がいずれ環境教育の担い手になることができるよう、わかりやすい「説明」法を習得するきっかけとなる現場を見学し、インタープリターとしての練習を行う。

授業の到達目標

- ・環境を第三者にわかりやすく説明する方法を知る
- ・環境展示の現状にもとづき、プレゼンテーション法を工夫できるようになる
B56-3、4、D56-2

授業計画

- 第1回：環境教育の歴史（1）黎明期から公害問題まで
- 第2回：環境教育の歴史（2）地球環境問題
- 第3回：環境教育の現状とその問題点
- 第4回：環境展示の実際（1）ピオトープ
- 第5回：環境展示の実際（2）博物館
- 第6回：環境展示の実際（3）水族館
- 第7回：環境展示の実際（4）学校教育
- 第8回：環境教育実践カリキュラムの開発

参考文献 随時指示をする。

成績評価方法

- レポート 30% レポートによる評価
- 平常点評価 70% 平常点による評価

備考・関連URL 集中日程（半日もしくは一日）での巡検授業となる場合がある。博物館、水族館などのバスツアーを予定している。

在外日系移民資料の活用

森本 豊富／鳥越 皓之／西村 昭治

授業概要 人総研プロジェクト「在外日系移民資料の活用」プロジェクト（仮題）、移民・エスニック文化研究所、人間文化研究機構「日本関連在外資料調査研究」プロジェクト「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」音声資料チーム、JICA横浜海外移住資料館、和歌山市民図書館移民資料室、UCLA Young Research Library等との連携を通じて、国内外にある日本人移民関連の文献・音声・映像資料を次世代に残すための具体的方策や研究、教育現場における活用法についてプロジェクト研究者と共に学ぶ。

授業の到達目標

- ・人間科学における移民研究の位置づけについて研究発表や実践を通して学ぶ。
- ・文献・映像・音声データの修復・保存・整理・分析・活用方法の現場に触れ、課題解決の方法を知る。
- ・移民学習教材の開発を通じて、教育現場における移民資料の活用方法について習得する。

【中目標No.】 B56-2、3、4、C 6-1、2、D56-1、E56-2、F56-1

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：国内外の日本人移民関連資料の概観と文献調査法
- 第3回：音声・映像資料の修復とデジタル化
- 第4回：オーラルヒストリー・データの収集・整理と言語学的分析
- 第5回：移民資料を活用した研究（1）
- 第6回：移民資料を活用した研究（2）
- 第7回：多言語オンライン移民学習教材の開発と教育現場での実践
- 第8回：総括と今後の課題に関する討議

教科書 開講時に資料を配付する。

参考文献

移民研究会（2008）『日本の移民研究 動向と文献目録 I／II』明石書店
森本豊富・根川幸男（2012）『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化』明石書店

成績評価方法

- レポート 30% 研究会での課題。
- 平常点評価 70% 出席、ディスカッション参加状況。

備考・関連URL

- ・8月5日、6日の2日間に研究会に参加する形で集中して行う。
- ・開催場所は都内が横浜の研究機関を利用することを予定している。具体的な場所はコースナビで通知する。

災害の人間科学

辻内 琢也／竹中 晃二／根ヶ山 光一／小島 隆矢

授業概要 東日本大震災後「ポスト3.11」の現在、自然環境と人間、地域社会と人間、都市と人間、科学と人間など、人間をめぐる様々な事象との関係性が問われている。本講座では、環境・福祉・医療・心理といった様々な立場で災害に関わってきた教員らによる共同授業であり、「支援、協働、復興、防災、トラウマ、災害難民、コミュニティ再生」といったキーワードをもとに、多面的・多層的に「災害」について学生と共に考える。夏期集中にて、ワールドカフェ形式、シンポジウム形式を取り入れ、学生と教員の双方向性の授業を展開する。

授業の到達目標

- ・自然災害・人為災害に対する多面的・多層的な理解ができる。(C6-1、C6-2)
- ・災害によって引き起こされる様々な課題に対する解決策を提言できる。(D56-2、E56-2)

授業計画

- 第1回：ワールドカフェ：「災害と人間科学：ポスト3.11を考える」(辻内琢也、小島隆矢)
…フリートーク、ブレインストーミングの中から人間科学的課題をあぶり出す。
- 第2回：グループワーク：「災害と人間科学：ポスト3.11を考える」(辻内琢也、小島隆矢)
…カフェで形成された各グループが、それぞれトピックをひとつ決め、現状と課題を整理し、問題解決方法を考案する。
- 第3回：講義：東日本大震災と原発事故被害「トラウマと避難民」(辻内琢也)
- 第4回：講義：震災前後の防災意識、住意識(小島隆矢)
- 第5回：講義：震災避難家族の支援「かさざぎプロジェクト」(根ヶ山光一)
- 第6回：講義：被災地の子どもを対象としたストレスマネジメント教育およびメンタルヘルス・プロモーション(竹中晃二)
- 第7回：学生によるグループ発表：「災害と人間科学：ポスト3.11を考える」(辻内琢也、小島隆矢、根ヶ山光一、竹中晃二)
…第2回グループワークをベースに、各グループで文献調査してきた内容をパワーポイントを使用して発表。
- 第8回：教員によるシンポジウム：「災害と人間科学：ポスト3.11を考える」(辻内琢也、小島隆矢、根ヶ山光一、竹中晃二)
…学生の発表を受けて、それぞれの専門的立場からコメントし、今後の課題に対するアプローチ法について教員と学生でディスカッションする。

教科書

- ・辻内琢也(編著)「東日本大震災と人間科学：心理・福祉編」早稲田出版ブックレット、2013
- ・小島隆矢(編著)「東日本大震災と人間科学：建築・環境編」早稲田出版ブックレット、2013

参考文献

 授業内で適宜紹介

成績評価方法

- レポート 50% 授業の到達目標を達成していること
- 平常点評価 50% ワールドカフェ・グループワークへの参加度、グループ発表の評価

現代医療とケアにおける基礎と臨床

小野 充一 他

授業概要 近年、医療やヒューマンケアの臨床現場では過去にない大きな変化が見られている。工学的な技術の進歩に基づくロボット手術やリハビリテーションの方法の変化、身体機能再生：分子レベルでの生命医科学の研究の進歩に基づく薬剤や組織素材の開発、再生医療等があげられる。講義では「身体機能再生」、「アンチエイジング」、「性差医療」など時代に即したテーマに掲げ、基礎医学から臨床医学さらに医工学や医療社会学を専門とする複数の教員の視点から、現代の医療技術の科学的基礎から臨床応用までを解説していくものである。

授業の到達目標

- ・臨床医療の変化や進歩をもたらす個人ニーズの変遷について、社会的要因との関連で考えることができる。
- ・臨床医療と医工学との関連テーマに関して、自由に発想し問題解決力を身につけることができる。
- ・構成主義的医療の概念を理解して、医療人類学的手法を用いて臨床的課題について多角的に検討することができる。

授業計画

- 第1回：導入講義：臨床医療と基礎医学が導く「ひとのつながり」の意味と将来像(永島・小野・畠山・村岡)
- 第2回：現代医療における保健医療リテラシーの役割と実際(扇原)
- 第3回：ナラティブ医療と医療人類学の現実と将来像(辻内)
- 第4回：今日の癌医療・手術療法の進歩(河手)
- 第5回：再生医学(特に神経の再生)の展望(榎原)
- 第6回：老化の生命科学と予防(千葉)
- 第7回：性差の脳科学(山内)
- 第8回：体温と医学(永島)

成績評価方法

- レポート 100% 一日4時限の講義終了後に課題レポートを提出させる。(予定)

福祉の視点から見た環境づくり

加瀬 裕子／川名 はつ子／佐藤 将之／佐野 友紀

授業概要 高齢者住宅や施設、子どもの施設や遊び場について調査を行い、スウェーデンもしくはハワイ等の大学・機関に約1週間滞在し実習する。（本年度は、スウェーデンの提携校等で実施予定。）見学や学生によるインタビューを行うが、現地での事象を理解することに留まらず、日本における「福祉の視点から見た物づくり」について再考する機会とする。参加する学生には、現地および国内において、関連する領域の教員・学生との討論の中でより専門性を深めることが求められる。

【注意】現地までの交通費・滞在費等は、原則として、学生の自己負担とする。

授業の到達目標

- (1) 住宅・施設・環境（物づくり）について、福祉（well-being and social policy または social work）との関連を明確にする視点に立って、データを収集し、その特性を分析し理解できる能力を習得する。（Ad56-2）
- (2) その結果を討論することで、物的環境だけではなく人的環境やプログラムを含んだ「環境づくり」に応用できるコーディネート力を体得する。（E66-1）

授業計画

第1回：9月9日 9:00-10:30	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第2回：9月9日10:40-12:10	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第3回：9月9日13:00-14:30	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第4回：9月10日 9:00-10:30	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第5回：9月10日10:40-12:10	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第6回：9月10日13:00-14:30	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第7回：9月11日 9:00-10:30	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第8回：9月11日10:40-12:10	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第9回：9月11日13:00-14:30	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第10回：9月12日 9:00-10:30	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第11回：9月12日10:40-12:10	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第12回：9月12日13:00-14:30	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第13回：9月13日 9:00-10:30	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第14回：9月13日10:40-12:10	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学
第15回：9月13日13:00-14:30	スウェーデン王立工科大学（提携校）および関連大学・機関にて講義・実習または施設等見学

成績評価方法

レポート 100% 開講期間に収集したデータに基づき、スウェーデンの環境づくりの特性を分福祉の視点から分析すること。

備考・関連URL

現地実習には、教員が同行します。受講希望者は、科目登録前の説明会に必ず出席のこと。

大学・地域連携による先進的健康福祉ネットワーキングの解析

加瀬 裕子／扇原 淳／増田 和高

授業概要 大学は地域社会の構成員であり、地域社会の問題解決に貢献することにより教育・研究機関としての役割を果たすことが、近年求められている。所沢市およびその周辺の高齢者施設等において、認知症や環境問題について先進的な活動を展開し、大学・地域連携による健康福祉ネットワークのプロトタイプを形成・解析する。学生は、教員の指導の下に、週1回程度デイスサービス、休耕地対策NPO（菜の花プロジェクト）、商店街活性化活動のいずれかに参加し、プランニングと評価を行う。

授業の到達目標

1. 地域の日常生活に存在する社会問題・課題を発見することができる。（C6-1）
2. 地域における具体的問題に対し、問題解決の方法を提案できるようになる。（D56-2）

授業計画

第1回：授業と地域活動の説明・プレイズメント
第2回：地域活動のプランニング（先行研究・先行事例に基づいて発表）
第3回：デイスサービス、休耕地対策NPO（菜の花プロジェクト）、商店街活性化活動
第4回：デイスサービス、休耕地対策NPO（菜の花プロジェクト）、商店街活性化活動
第5回：デイスサービス、休耕地対策NPO（菜の花プロジェクト）、商店街活性化活動
第6回：デイスサービス、休耕地対策NPO（菜の花プロジェクト）、商店街活性化活動
第7回：デイスサービス、休耕地対策NPO（菜の花プロジェクト）、商店街活性化活動
第8回：地域活動の評価（課題と問題解決の方法について発表）

教科書 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

平常点評価 50% 地域活動への参加状況（週1回1時間から2時間）
その他 50% プランニングと評価の発表

身体化された認知論

宮崎 清孝／三嶋 博之

授業概要 認知科学における最新の動向に、extended cognition（拡張された認知）とか、embodied cognition（身体化された認知）といわれる研究のアプローチがある。このアプローチでは心（脳）がそれだけで認知を成立させていると考えるのではなく、（脳を含めた）身体と世界（自然環境、他者・社会・文化）がシステムとして働き、認知が成立すると考える。本科目では、この方向の研究を推し進める複数の研究者が、人間科学としての統合を確立するために、その基礎的な部分について考えていく。

授業の到達目標

- (1) 「拡張された認知」「身体化された認知」と他の認知科学の考え方の違いとそれぞれの特徴を説明できる。B56-2、B56-4
(2) 「拡張された認知」「身体化された認知」というアイデアを授業履修者各人の研究課題で使ってみることができる。B56-4、C5-1、C6-2

授業計画

- 第1回：「身体化された認知論」とは何かー認知科学の歴史から（三嶋、宮崎担当）
第2回：協調と共感の心理物理学（三嶋担当）
第3回：剛体振り子パラダイムによる協調実験のデモンストレーション（三嶋担当）
第4回：個人内協調運動への力学系アプローチ：協調現象のHKBモデル（三嶋担当）
第5回：発達への力学系アプローチ：Thelenの方法（三嶋担当）
第6回：対人協調に向けた、力学系アプローチの拡張（三嶋担当）
第7回：知覚－行為の熱力学的背景：Swenson & Turveyの挑戦（三嶋担当）
第8回：アフォーダンスと生態学の実在論（三嶋担当）
第9回：環境から文化へー共感という問題（宮崎担当）
第10回：Vygotsky派の見取り図（宮崎担当）
第11回：分散的認知とartifact（宮崎担当）
第12回：社会の中の認知Laveと cognition in practice（宮崎担当）
第13回：言語と意味－スキーマ論の限界とWittgenstein、Rosch、Lakoff（宮崎担当）
第14回：社会の中の言語－proto-conversationから会話へ（宮崎担当）
第15回：談話における協働的な知の生成（宮崎担当）

教科書 特になし

参考文献 授業中指示する

成績評価方法

レポート 10% 学期末にレポートを課す
平常点評価 90% 授業中の質疑など参加度によって評価する

学際的研究の進め方ワークショップ 01 02

島崎 敢／松田 真由美／小柳 知代／尾関 美喜

授業概要 本プロジェクト科目では、人間科学研究科での学際的な研究の検討の仕方、学術論文の書き方、発表の仕方などについて、ワークショップ形式（学生参加型）で扱う。多様な専門性を持つ教員が、自身の研究プロセスや事例を紹介しながら、学際的な研究をいかに進めるかを議論する。ディスカッションでは、自分の研究テーマを他の研究領域の視点から捉え直しながら、他の分野の方法論がどのように応用可能かなどを検討する。

授業の到達目標

- ・自分の研究テーマを学際的な視点・人間科学的視点で位置づけることができる。C5-1、C6-2
・他分野の方法論を自分の分野に応用する視点を持つことができる。B56-2、C6-1

授業計画

- 第1回：個別の方法論と人間科学：学生の研究テーマ・関心テーマの発表
第2回：学際的な研究の事例報告とディスカッション（研究テーマの模索）
第3回：学際的な研究の事例報告とディスカッション（研究の進め方）
第4回：学際的な研究の事例報告とディスカッション（ポスター作成・プレゼンテーションの仕方）
第5回：学際的な研究の事例報告とディスカッション（学術誌への投稿）
第6回：学生による発表とディスカッション（1）
第7回：学生による発表とディスカッション（2）
第8回：学生による発表とディスカッション（3）

成績評価方法

レポート 50% 提出の有無と内容
平常点評価 50% 出席状況とディスカッションの参加状況

備考・関連URL 「学際的研究の進め方ワークショップ01」と「学際的研究の進め方ワークショップ02」を同時に履修することはできない。

生涯学習社会における e ラーニングとメンタリング

向後 千春／森田 裕介

授業概要 これからの生涯学習社会においては、教育機関での e ラーニングとソーシャルラーニングがますます一般化され、拡張されていくことが予想されます。また、それにともなって、e ラーニングにおけるメンターの役割が重要になるでしょう。この授業では、こうしたトピックを取り上げて講義し、履修者と議論していきます。また、ここで学ぶことが履修者のメンタリング・スキルの基礎となるようにします。なお、この授業はフルオンデマンドで実施されます。

授業の到達目標 生涯学習社会における教育機関の e ラーニング、またそれ以外のソーシャルラーニングについての知識を獲得する。同時に、そうした社会におけるメンターの役割と求められるスキルについて意見を持つことができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：生涯学習社会における学習の意味（向後）
- 第3回：生涯学習社会における e ラーニングの役割（向後）
- 第4回：生涯学習社会におけるメンターの重要性（向後）
- 第5回：これからの社会での学校教育の変容（森田）
- 第6回：これからの学校における e ラーニング（森田）
- 第7回：これからの社会での学習のソーシャル化（森田）
- 第8回：まとめと振り返り

参考文献 授業内で指示します。

成績評価方法

試験	30%	知識の定着を評価します。
レポート	40%	内容と形式を評価します。
平常点評価	30%	BBS での討論への参加を評価します。

進化する学習情報環境のデザイン

西村 昭治／金 群／菊池 英明

授業概要 本プロジェクトでは、知的エージェントや、音声を含めた言語処理、協調検索などの技術を用いた学習情報環境の進化と、利用者の貢献による機能・学習環境の進化のメカニズムの研究開発を行うことを目指している。多様な利用者の異なる個性、能力、ニーズに柔軟に対応できる人間中心の自律分散協調型の Learning Management System やグループウェアのプロトタイプの開発を行う。

授業の到達目標
・学習情報環境をデザインしプロトタイプが実装できる。

授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：オープンソースのプラットフォーム（LMS）の紹介
- 第3回：学習環境への機能（音声認識等）の組み込みについての解説
- 第4回：学習環境への機能（協調検索）の組み込みについての解説
- 第5回：学習環境の設計
- 第6回：学習環境の実装
- 第7回：学習環境の改良
- 第8回：学習環境の評価とまとめ

参考文献 授業中に指示する。

成績評価方法

平常点評価	50%	出席回数
その他	50%	成果物（学習環境システム）の完成度

備考・関連URL 別途指定する土曜日に2コマ連続×4日間で行う。

学習科学とイノベーション

尾澤 重知／富永 敦子／山本 裕子／玉城 絵美

授業概要 近年、学習科学と呼ばれる研究分野では、認知学習、教育研究、システム開発、教科教育、教育実践の研究者が協力し合いながら、認知学習研究の知見を基盤に、現実場面での学習の質を高める取り組みを進めている。本プロジェクト科目では、人間科学研究科の学際性を活かし、新たなテクノロジーを利用した学習支援方法の開発、学習支援につながるテクノロジーの開発研究のフロンティアを探索。

授業の到達目標

- ・学習科学の視点から、自らが取り組む研究課題の効用と限界点を検討することができる。（B56－2）
- ・課題解決に必要な具体的な方法（学習支援方法、テクノロジー）を提案することができる。（D56－2）
- ・課題解決に必要な専門家のチームやプロジェクトを構成し、課題解決に向けて専門家チームをマネジメントする方法を理解することができる。（E56－1）

授業計画

- 第1回：ガイダンスとプロジェクトの方向性の確認。担当者の研究領域の紹介。
 第2回：テクノロジー：HCI（Human-Computer Interaction）、Rapid Prototyping、AH（Augmented Human）
 第3回：学習：ピア・ラーニング、反転授業（Flipped Classroom）
 第4回：教育：教育組織と社会変容
 第5回：組織：学習環境とイノベーション
 第6回：大学院生によるプロジェクト（1）
 第7回：大学院生によるプロジェクト（2）
 第8回：最終プレゼンテーション

教科書 使用しない**参考文献**

三宅 なほみ、白水 始（2003）学習科学とテクノロジー。放送大学教育振興会
 R.K.ソーヤー（編）、森 敏昭、秋田 喜代美 翻訳（2009）学習科学ハンドブック。培風館

成績評価方法

- レポート 20% 自身のプロジェクトの報告書
 その他 80% プロジェクトの検討と発表

Reading for Academic Purposes 中級 01～06

並木 有希、中垣 恒太郎（学科目配当表参照）

授業概要 TOEIC610点、TOEFL-PBT509点、TOEFL-iBT64点、WeTEC700点未満いずれかのスコアの学生を対象とする。人間科学で取り上げられる自然科学、人文科学、社会科学、複合領域における様々な学問分野に関連する英語で書かれた学術的文章を中心に速読したり精読したりして、学際的な英語の文章に広く慣れ親しむ。個々の専門分野における国際的な学術雑誌に触れるための準備段階として批判的（クリティカル）に読解する力を養う。

授業の到達目標

- ・論理的な英語の文章を速読、精読して内容を理解できる。
- ・学術的な論文やエッセイに広く慣れ親しむことができる。
- ・個々のスキルにあわせて専門的な英文を自ら選定して読み進むことができる。

【中目標No.】 Aa 5－1、Aa 6－3

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
 第2回：人文・社会科学に関するエッセイまたは論文
 第3回：人文・社会科学に関するエッセイまたは論文
 第4回：人文・社会科学に関するエッセイまたは論文
 第5回：自然科学に関するエッセイまたは論文
 第6回：自然科学に関するエッセイまたは論文
 第7回：複合領域に関するエッセイまたは論文
 第8回：複合領域に関するエッセイまたは論文

教科書 適宜指定する。**成績評価方法**

- レポート 30% 課題レポートなど。
 平常点評価 70% 出席状況、平常の取り組みを総合的に評価する。

備考・関連URL 第1回の授業の開始時にTOEIC、TOEFL、WeTECいずれかのテストスコア（2年以内）のコピーを担当教員に提出すること。

Reading for Academic Purposes 上級 01

森本 豊富／保崎 則雄

授業概要 TOEIC610点、TOEFL-PBT509点、TOEFL-iBT64点、WeTEC700点以上いずれかのスコアの学生を対象とする。人間科学で取り上げられる自然科学、人文科学、社会科学、複合領域における様々な学問分野に関連する英語で書かれた学術的文章を中心に多読・精読して、学際的な英語の文章に広く慣れ親しみクリティカルに読解する力を養う。

授業の到達目標

- ・論理的な英語の文章を速読、精読して内容を理解できる。
- ・学術的な論文やエッセイに広く慣れ親しむことができる。
- ・個々のスキルにあわせて専門的な英文を自ら選定して読み進むことができる。

【中目標No.】 Aa 5-1、Aa 6-3

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
 第2回：人文・社会科学に関するエッセイまたは論文
 第3回：人文・社会科学に関するエッセイまたは論文
 第4回：人文・社会科学に関するエッセイまたは論文
 第5回：自然科学に関するエッセイまたは論文
 第6回：自然科学に関するエッセイまたは論文
 第7回：複合領域に関するエッセイまたは論文
 第8回：複合領域に関するエッセイまたは論文

教科書 適宜指定する。

成績評価方法

- レポート 30% 課題レポートなど。
 平常点評価 70% 出席状況、平常の取り組みを総合的に評価する。

備考・関連URL 第1回の授業の開始時にTOEIC、TOEFL、WeTECいずれかのテストスコアのコピーを担当教員に提出すること。

Writing for Academic Purposes 中級 01～06

並木 有希／ダニエル ベック（学科目配当表参照）

授業概要 TOEIC610点、TOEFL-PBT509点、TOEFL-iBT64点、WeTEC700点未満いずれかのスコアの学生を対象とする。英語で論理的な文章が書けるように練習する。また、個々の分野にあわせて英語学術論文で広く使われている論文のスタイル、注や参考文献の書き方などにも慣れ親しむ。英語で論理的な文章が書けるように練習する。

授業の到達目標

- ・学術的な英語の文章の構成や定型表現に慣れ親しむ。
- ・アカデミックな英文の書き方、スタイルの基本的なルールを学び、そのルールに則した英文が書けるようにする。

【中目標No.】 Aa 6-1

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
 第2回：英語学術論文の書き方（1）ブレイジャリズムとアカデミック・インテグリティ
 第3回：英語学術論文の書き方（2）英語論文の構成とライティングのメカニクス
 第4回：英語学術論文の書き方（3）本文での引用の仕方、引用文献リストの書き方
 第5回：リサーチペーパーのライティングと発表
 第6回：リサーチペーパーのライティングと発表
 第7回：リサーチペーパーのライティングと発表
 第8回：リサーチペーパーのライティングと発表

教科書 担当教員の指示に従うこと。

成績評価方法

- レポート 50% リサーチペーパーと発表
 平常点評価 50% 出席状況など。

備考・関連URL 第1回の授業の開始時にTOEIC、TOEFL、WeTECいずれかのテストスコア（2年以内）のコピーを担当教員に提出すること。

Writing for Academic Purposes 上級 01 02

グレイ ロバート

授業概要 TOEIC610点、TOEFL-PBT509点、TOEFL-iBT64点、WeTEC700点以上いずれかのスコアの学生を対象とする。英語で論理的な文章が書けるように練習する。また、個々の分野にあわせて MLA、APA、Chicago style、CSE（Council of Science Editors）などの英語学術論文で広く使われている論文のスタイル、注や参考文献の書き方などにも慣れ親しむ。英語で学術論文に投稿できる実力を養う。

授業の到達目標

- ・学術的な英語の文章の構成や定型表現に慣れ親しむ。
- ・アカデミックな英文の書き方、スタイルの基本的なルールを学び、そのルールに則した英文が書けるようにする。

【中目標No.】Aa 6-1

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：英語学術論文の書き方（1）ブレイジャリズムとアカデミック・インテグリティ
- 第3回：英語学術論文の書き方（2）英語論文の構成とライティングのメカニク
- 第4回：英語学術論文の書き方（3）本文での引用の仕方、引用文献リストの書き方
- 第5回：リサーチペーパーのライティングと発表
- 第6回：リサーチペーパーのライティングと発表
- 第7回：リサーチペーパーのライティングと発表
- 第8回：リサーチペーパーのライティングと発表

教科書 担当教員の指示に従うこと。**成績評価方法**

- レポート 50% リサーチペーパーと発表
平常点評価 50% 出席状況など。

備考・関連URL 第1回の授業の開始時にTOEIC、TOEFL、WeTECいずれかのテストスコア（2年以内）のコピーを担当教員に提出すること。

Oral Presentation for Academic Purposes 中級 01 02

ダニエル ベック

授業概要 TOEIC610点、TOEFL-PBT509点、TOEFL-iBT64点、WeTEC700点未満いずれかのスコアの学生を対象とする。自分の専門性に関する調査報告や研究成果報告を英語で発表する練習を英語で行う。効果的なパワーポイントを英語で作成し、わかりやすく説得力のある論理的な口頭発表ができるように指導する。

授業の到達目標

- ・基本的な英語でのプレゼンテーションの英語表現や構成を身につける。
- ・調査結果や研究成果を英語で口頭発表することに慣れる。

【中目標No.】Aa 6-2

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：英語プレゼンテーションの技法（1）
- 第3回：英語プレゼンテーションの技法（2）
- 第4回：英語プレゼンテーションの技法（3）
- 第5回：プレゼンテーションと改善点の検討
- 第6回：プレゼンテーションと改善点の検討
- 第7回：プレゼンテーションと改善点の検討
- 第8回：プレゼンテーションと改善点の検討

教科書 担当教員の指示に従うこと。**成績評価方法**

- 試験 50% ペーパープレゼンテーション
平常点評価 50% 出席状況

備考・関連URL 第1回の授業の開始時にTOEIC、TOEFL、WeTECいずれかのテストスコア（2年以内）のコピーを担当教員に提出すること。

Oral Presentation for Academic Purposes 上級 01 02

スコット ダグラス

授業概要 TOEIC610点、TOEFL-PBT509点、TOEFL-iBT64点、WeTEC700点以上いずれかのスコアの学生を対象とする。自分の専門性に関する調査報告や研究成果報告を国際的な学会で発表する練習を英語で行う。効果的なパワーポイントを英語で作成し、わかりやすく説得力のある論理的な口頭発表が英語でできるように指導する。

授業の到達目標

- ・ 基本的な英語でのプレゼンテーションの英語表現や構成を身につける。
- ・ 調査結果や研究成果を英語で口頭発表することに慣れる。

【中目録No.】 Aa 6-2

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：英語プレゼンテーションの技法（1）
- 第3回：英語プレゼンテーションの技法（2）
- 第4回：英語プレゼンテーションの技法（3）
- 第5回：プレゼンテーションと改善点の検討
- 第6回：プレゼンテーションと改善点の検討
- 第7回：プレゼンテーションと改善点の検討
- 第8回：プレゼンテーションと改善点の検討

教科書 担当教員の指示に従うこと。

成績評価方法

試験 50% ペーパープレゼンテーション
平常点評価 50% 出席状況

備考・関連URL 第1回の授業の開始時にTOEIC、TOEFL、WeTECいずれかのテストスコア（2年以内）のコピーを担当教員に提出すること。

多変量解析特論

芳賀 麻誉美

授業概要 様々な分野で採取される多変量データを解析する方法として、第一世代の多変量解析法から第二世代の多変量解析と呼ばれる共分散構造分析（構造方程式モデリング）までをまとめて学び、その全体像を理解する。誰でもソフトウェアが利用できる現代であるからこそ、その原理や意味を理解しているかどうかが問われている。自身の研究課題に多変量解析を利用できるように、数式の利用は最低限にとどめながらも、その意味を中心に解説を行う。

授業の到達目標

- 1) 多変量解析法の分類とその原理と意味のエッセンスを習得する。
- 2) 自身の研究課題に、多変量解析手法に利用ができる。

授業計画

- 第1回：多変量解析概論
- 第2回：1変量統計量（平均、分散と標準偏差）
- 第3回：2変量統計量（共分散と相関、多変量データ行列）
- 第4回：回帰分析1
- 第5回：回帰分析2
- 第6回：階層的クラスター分析とK-means法
- 第7回：主成分分析
- 第8回：重回帰分析1
- 第9回：重回帰分析2
- 第10回：パス解析1
- 第11回：パス解析2
- 第12回：確認的因子分析1
- 第13回：確認的因子分析2
- 第14回：構造方程式モデリング
- 第15回：探索的因子分析

教科書 多変量データ解析法、足立浩平著、ナカニシヤ出版

成績評価方法

レポート 55% 講義で紹介した多変量解析についてのレポートを提出していただきます。
平常点評価 45% 出席点として1回3点、15回45点を配点します。

授業概要

学校教育場面における教育臨床上の諸問題、および、児童期から青年期にいたる心理行動面の諸問題に関する、参加各人の研究テーマをもとに指導を行なう。問題設定、研究計画立案、データの収集、データ分析、考察、課題研究論文作成、発表などの各方法についての指導・助言を通して、参加各人が教育臨床に関する研究能力を獲得することを目指す。

授業の到達目標

・教育臨床に関する総合的・科学的視点、臨床心理学的視点を持ち、各種の問題に対する実践的解決能力を向上させる。

授業概要

教育臨床に関する、科学的な課題論文の作成の指導を行う。学生のフィールドの中で実施できるテーマを選び、研究計画の立案、倫理審査申請書の作成、データの解析法、結果の表示、および考察に関して助言を行う。

発達障害に関するテーマは、発達障害児・者の特性、発達障害児・者への支援方法、親・兄弟、教師への支援方法などである。しかし、フィールドとの関連の重要性を考慮して、相談によって進めていく。

授業の到達目標

A（春学期）

・様々な教育臨床上の問題に関して、統計データの意味と解析方法を理解して、科学的な論文を批判的に読むことができ、自分が遭遇する教育臨床上の問題と科学的な論文との関連を理解することができる。

B（秋学期）

・自分が取り上げた教育臨床上の問題に関して、科学的な論文を書くことができること。

学校臨床心理学ゼミ A（春学期）

大月 友

授業概要 学校教育における教育臨床の諸問題をテーマに演習を行なう。

学校臨床心理学に関する理論、子どもの心理や能力、対人行動などのアセスメント方法、不登校、いじめ、反社会的行動、家庭内暴力、自殺といった問題への対処および援助方法、教職員のメンタルヘルスなどについて、文献講読を中心に演習をすすめていく。また、課題研究論文作成に必要な心理学研究法や心理統計法の基礎について概説する。

授業の到達目標

文献講読を通して、学校臨床心理学やその他の臨床心理学のこれまでの研究知見を知る。また、論文作成に必要な知識と技術を身につける。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：学校臨床心理学研究法（1）：初級
- 第3回：学校臨床心理学研究法（2）：中級
- 第4回：学校臨床心理学研究法（3）：上級
- 第5回：文献の報告と討議（1）：文献検索初級
- 第6回：文献の報告と討議（2）：文献検索中級
- 第7回：文献の報告と討議（3）：文献検索上級
- 第8回：文献の報告と討議（4）：日本語論文読解初級
- 第9回：文献の報告と討議（5）：日本語論文読解準中級
- 第10回：文献の報告と討議（6）：日本語論文読解中級
- 第11回：文献の報告と討議（7）：日本語論文読解準上級
- 第12回：文献の報告と討議（8）：日本語論文読解上級
- 第13回：文献の報告と討議（9）：論文読解のまとめ
- 第14回：課題研究論文構想発表前半〈合同ゼミ〉
- 第15回：課題研究論文構想発表後半〈合同ゼミ〉

教科書 授業の中で提示する。適宜資料を配布する。

参考文献 授業で適宜紹介する。

成績評価方法

レポート	50%	担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。
平常点評価	50%	出席や事業中の討議への参加状況について評価します。

学校臨床心理学ゼミ B（秋学期）

大月 友

授業概要 学校教育における教育臨床の諸問題をテーマに演習を行なう。

学校臨床心理学に関する理論、子どもの心理や能力、対人行動などのアセスメント方法、不登校、いじめ、反社会的行動、家庭内暴力、自殺といった問題への対処および援助方法、教職員のメンタルヘルスなどについて、文献講読を中心に演習をすすめていく。また、課題研究論文作成に必要な心理学研究法や心理統計法の基礎について概説する。

授業の到達目標

文献講読を通して、学校臨床心理学やその他の臨床心理学のこれまでの研究知見を知る。また、論文作成に必要な知識と技術を身につける。

授業計画

- 第1回：課題研究論文構想発表
- 第2回：課題研究論文の書き方
- 第3回：課題研究論文の参考文献（1）：英語論文読解初級
- 第4回：課題研究論文の参考文献（2）：英語論文読解準中級
- 第5回：課題研究論文の参考文献（3）：英語論文読解中級
- 第6回：課題研究論文の参考文献（4）：英語論文読解準上級
- 第7回：課題研究論文の参考文献（5）：英語論文読解上級
- 第8回：課題研究論文の経過報告・指導（1）：問題と目的の構成
- 第9回：課題研究論文の経過報告・指導（2）：方法の書き方
- 第10回：課題研究論文の経過報告・指導（3）：結果のまとめ方
- 第11回：課題研究論文の経過報告・指導（4）：考察のポイント
- 第12回：課題研究論文に関する討議（1）：発表前半〈合同ゼミ〉
- 第13回：課題研究論文に関する討議（2）：発表後半〈合同ゼミ〉
- 第14回：課題研究論文のプレゼンテーション〈合同ゼミ〉
- 第15回：まとめ〈合同ゼミ〉

教科書 授業の中で提示する。適宜資料を配布する。

参考文献 授業で適宜紹介する。

成績評価方法

レポート	50%	担当回の発表に関して、準備状況、着眼点等を評価します。
平常点評価	50%	出席や事業中の討議への参加状況について評価します。

臨床認知発達学ゼミ A（春学期）

佐々木 和義

授業概要 学生による文献の報告と、それに対する討議によって、参考文献の読み方、目的のとらえ方、手続き、結果の分析方法、および考察の仕方を習得する。また、倫理的配慮に関する考え方、および倫理申請書の書き方を学ぶ。さらに、仮想データを用いて、統計的検定、および分散分析を学び、実験計画法も学ぶ。

授業の到達目標

・教育臨床に関する問題に対して、科学的な検討ができること。

授業計画

第1回：オリエンテーション／並木校舎に関する注意事項、実習記録管理
第2回：研究構想発表
第3回：心理学研究と研究倫理
第4回：1事例の研究デザイン
第5回：課題研究論文指導（1）
第6回：課題研究論文指導（2）
第7回：課題研究論文指導（3）
第8回：課題研究論文指導（4）
第9回：心理統計の基礎
第10回：心理研究法（質的研究法）
第11回：課題研究論文指導（5）
第12回：課題研究論文指導（6）
第13回：課題研究論文指導（7）
第14回：課題研究論文指導（8）
第15回：研究構想発表

参考文献 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 40% 発表の状況について評価します。
平常点評価 60% 授業への出席やディスカッションへの参加状況について評価します。

備考・関連URL 研究法などでは適宜合同ゼミで行う。「文献検索の方法」「心理学研究法の基礎」「心理学研究法（実験編）」「心理学研究法（調査法）」はオンデマンドでも提供する。

臨床認知発達学ゼミ B（秋学期）

佐々木 和義

授業概要 学生による文献の報告と、それに対する討議によって、参考文献の読み方、目的のとらえ方、手続き、結果の分析方法、および考察の仕方を習得する。また、倫理的配慮に関する考え方、および倫理申請書の書き方を学ぶ。さらに、仮想データを用いて、統計的検定、および分散分析を学び、実験計画法も学ぶ。

授業の到達目標

・教育臨床に関する問題に対して、科学的な論文を書くことができること。

授業計画

第1回：論文の書き方
第2回：課題研究論文の経過報告・指導（1）
第3回：心理統計（1）／心理統計の基礎・データ入力・基礎統計量（平均値・SD）の算出
第4回：課題研究論文の経過報告・指導（2）
第5回：心理統計（2）／t検定（理論編・実践編）
第6回：課題研究論文の経過報告・指導（3）
第7回：心理統計（3）／分散分析と多重比較・交互作用（理論編・実践編）
第8回：課題研究論文の経過報告・指導（4）
第9回：心理統計（4）／ χ^2 検定（理論編・実践編）・相関分析と回帰分析（理論編）
第10回：課題論文の経過報告と討議＜5＞（個人5）
第11回：課題研究論文の経過報告・指導（5）
第12回：課題研究論文の経過報告・指導（6）
第13回：課題研究論文の経過報告・指導（7）
第14回：課題論文のプレゼンテーション
第15回：まとめ

参考文献 授業中に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 40% 発表の内容を評価します。
平常点評価 60% 授業への出席やディスカッションへの参加状況について評価します。

備考・関連URL 研究法などでは適宜合同ゼミで行う。

学校臨床生徒指導学特論

嶋田 洋徳／山蔦 圭輔

授業概要 本特論では、学童期から思春期、青年期に至るまでに生じるさまざまな学校の内外の生徒指導（特にいわゆる生徒指導や教育相談）上の諸問題を取り上げ、それらの理解と臨床心理学的な立場からの具体的な援助の方法を概説する。また、それらの援助方法の基盤となるカウンセリングの諸理論についても概説する。さらに、スクールカウンセラーなどの相談職員との連携の具体的なあり方についても言及する。

授業の到達目標

生徒指導や教育相談の理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

授業計画

- 第1回：イントロダクション、生徒指導の定義
- 第2回：スクールカウンセラーと相談職員
- 第3回：教師の活動、スクールカウンセラー等の活動
- 第4回：3つの心理学的アプローチとその差異
- 第5回：行動分析的アプローチ
- 第6回：行動観察の方法
- 第7回：中間課題とその解説
- 第8回：機能分析的なケース理解
- 第9回：学校内の機能的役割分担
- 第10回：学校内の行動連携
- 第11回：発達障害と特別支援教育（言語発達の基礎、言語発達支援を含む）
- 第12回：行動コンサルテーション
- 第13回：社会教育と保護者
- 第14回：最終課題とその解説
- 第15回：まとめ

教科書 使用しない。必要に応じて配付（アップロード）する。

参考文献 講義中に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート	60%	課題内容の達成度による。
平常点評価	25%	制限時間内のアクセス記録による。
その他	15%	BBSの書き込みの程度による。

備考・関連URL 本特論は、全回オンデマンド授業として実施する。また、本講義内容は、臨床発達心理士のDP科目「基礎」2-1、3-3、4-2、4-3、4-5、5-4、DP科目「社会情動」1-1、1-7、2-2、2-3、2-4、DP科目「言語」1-1、1-3、1-6、1-7に該当する。

臨床心理学校地域援助特論

大月 友

授業概要 乳幼児期から青年期にいたる児童・生徒の心理行動面、発達面の諸問題に対して、育児・保育・教育場面などの地域で実践される臨床心理学的支援の理論と実際を学んでいく。具体的には、地域援助の方法論としてのコンサルテーションやカンファレンス、スクールカウンセリング、他職種との連携による支援、保護者への支援、学級集団を対象とした心理教育的支援などに関して、その理論的背景を学ぶとともに具体的な実践方法の獲得を目指す。

授業の到達目標

- ・地域で実践される臨床心理学的支援の理論を説明できる。
- ・地域で実践される臨床心理学的支援を計画し、実践することができる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：地域援助の考え方と基本的姿勢
- 第3回：スクールカウンセラーと連携支援
- 第4回：コンサルテーションの理論と方法
- 第5回：コンサルテーションの実際
- 第6回：保護者への支援1（コンサルテーション）
- 第7回：保護者への支援2（親訓練）
- 第8回：学級集団への予防開発的介入と治療教育的介入
- 第9回：社会的スキル訓練の理論的背景
- 第10回：社会的スキル訓練の実際
- 第11回：問題解決訓練の理論的背景
- 第12回：問題解決訓練の実際
- 第13回：ストレスマネジメント訓練の理論的背景
- 第14回：ストレスマネジメント訓練の実際
- 第15回：地域・社会への働きかけ

教科書 なし。適宜資料を配布する。

参考文献 授業で適宜紹介する。

成績評価方法

レポート	50%	担当発表回の準備状況、発表内容に関して評価する。
平常点評価	50%	授業への出席状況や討議への参加状況に関して評価する。

備考・関連URL 本講義内容は、DP科目「基礎」4-1～4-6、5-3、「育児保育」2-1～2-3、5-1～5-4、6-2～6-5、7-2～7-6が含まれる。

教育集団心理学特論

岡安 孝弘

授業概要 現代の学校教育において、自立性および自律性を備えた人間の育成という観点から、児童生徒にライフスキルを習得させるための教育プログラムを導入することの必要性が指摘されている。本講義では、そのための方法として、(1)学級集団および学校不適応のリスクの高い小集団を対象とした心理教育プログラム（社会的スキル教育、ストレスマネジメント教育、不安や抑うつ予防教育、怒りマネジメント教育など）、および(2)キャリア教育プログラムの基本的な考え方とその実践方法について解説する。また、受講者とともに、より効果的な教育プログラムを開発するためのノウハウについて検討することを通して、独力でプログラムを作成し、実施できるようになることを目指したい。

授業の到達目標

心理教育プログラムやキャリア教育プログラムを実施することの意義やその背景にある理論を理解することが第1の目標である。最終的な目標は、受講生それぞれの教育実践現場のニーズに応じた教育プログラムを開発し、実践するためのスキルを習得することである。そのためには、積極的に授業に参加し、相互に議論を交わすことが求められる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本講義の目的と概要について説明します。
 第2回：児童生徒の不登校、不安障害、うつ状態、ひきこもり等、学校不適応の現状について解説します。
 第3回：児童生徒の行動の変容技法について、行動論的観点から解説します。
 第4回：児童生徒の認知の変容技法について、認知再構成法等、認知理論の観点から紹介します。
 第5回：児童生徒に対する社会的スキル教育の基礎的な考え方について解説します。
 第6回：児童生徒に対する社会的スキル教育の実践例について紹介します。
 第7回：ストレス理論およびストレスマネジメント技法の基本的な考え方について解説します。
 第8回：児童生徒に対するストレスマネジメント教育の実践例について紹介します。
 第9回：児童生徒が不安症状をマネジメントできるようにするためのスキルを習得するためのライフスキル教育について解説します。
 第10回：児童生徒が抑うつ症状をマネジメントできるようにするためのスキルを習得するためのライフスキル教育について解説します。
 第11回：児童生徒が怒りをマネジメントできるようにするためのスキルを習得するためのライフスキル教育について解説します。
 第12回：中学校や高校で実践されているライフスキル教育の実践事例について紹介します。
 第13回：小・中・高等学校で段階的にキャリア教育を実施することの意義と、その具体的な内容について解説します。
 第14回：小・中・高等学校で実践されているキャリア教育について紹介します。
 第15回：本講義の内容全体を通して、受講者間でディスカッションを行い、総復習とします。

参考文献 講義中に適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 30% 各自考案した教育プログラムをレポートにまとめる。その有効性および実践可能性を評価対象とする。
 平常点評価 70% 出席状況および受講者相互で積極的な議論を交わしたか否かを評価する。

家族臨床心理学特論

菅野 純／山蔭 圭輔

授業概要 不登校やいじめ、家庭内暴力など、子どもの臨床的諸問題は家族と切り離せない。本講義では家族心理学や家族療法についての最近のテーマを取り上げ、家族がかかわるさまざまな事例を検討し、教育臨床実践との関連をはかりたい。テーマとしては、臨床発達心理学における養育者へのカウンセリングや、対象者・家族とのコミュニケーション方法、家族の病理・事例検討、社会情動発達に関する理論およびアセスメント、介入と支援の実際、教育現場および育児現場での支援の方法などを扱う。尚、本授業は基本的には全回オンデマンド授業として実施する。

授業の到達目標

・家族臨床心理学についての理論を学び、家族臨床心理学の方法による事例理解と事例への支援方法を学ぶ。

授業計画

- 第1回：家族臨床心理学概論
 第2回：家族の歴史と現在
 第3回：家族の臨床的問題（1）不登校一人間関係の障害と情動失調への介入の方法－
 第4回：家族の臨床的問題（2）家庭内暴力－青年期危機のアセスメントと対応－
 第5回：家族アセスメント（1）子どもの社会情動発達の基礎
 第6回：家族アセスメント（2）子どもの社会情動発達のアセスメント＜1＞ 他者および環境を通して
 第7回：家族アセスメント（3）子どもの社会情動発達のアセスメント＜2＞ 面接法による思春期青年期危機のアセスメント
 第8回：家族アセスメント（4）子どもの社会情動発達のアセスメント＜3＞ ケース研究
 第9回：家族の臨床的問題（3）発達障害における具体的支援の進め方
 第10回：家族への家族臨床心理学のアプローチ（1）個人療法
 第11回：家族への家族臨床心理学のアプローチ（2）家族療法
 第12回：家族への家族臨床心理学のアプローチ（3）子どもの発達支援＜1＞ 保護者への支援
 第13回：家族への家族臨床心理学のアプローチ（4）子どもの発達支援＜2＞ 子ども本人への支援
 第14回：家族への家族臨床心理学のアプローチ（5）子どもの発達支援＜3＞ 地域・社会への支援
 第15回：家族のライフサイクルと家族の発達課題

成績評価方法

- レポート 80% 家族臨床心理学のそれぞれの課題を正確に理解し、各自のオリジナルな考察点が含まれているかを問う。
 平常点評価 20% BBSでの積極的な討論と適切なコミュニケーションを問う。

備考・関連URL なお、本講義内容は、臨床発達心理士のDP科目「基礎」4-5、4-6、「社会情動」1-7、2-2、2-3、2-4、3-1、3-2、「育児保育」6-2、6-3、6-4に該当する。

力動的心理療法特論

鈴木 敬生

授業概要 力動的心理療法とは、広義には無意識や転移、欲動、心的葛藤、防衛、治療関係などの、精神分析療法に起源を持つ理論および概念を治療に役立てようとする心理療法の一環といえる。本講義では、フロイト以後、早期の母子関係の詳細な検討から発展を遂げてきた精神分析療法を中心に、力動的心理療法の成り立ちと理論的基礎について概観する。さらに、力動的心理療法の理論と概念を臨床実践と照らし合わせて検討する。

授業の到達目標

- ・力動的心理療法についての基礎的な知識を身につける。
- ・自らの臨床実践を力動的観点から見立て、説明することができる。

授業計画

- 第1回：力動的心理療法とは
- 第2回：フロイトの生涯と精神分析
- 第3回：フロイトの精神分析理論
- 第4回：アンナフロイトと自我心理学派
- 第5回：自我心理学派の諸理論
- 第6回：メラニークラインと対象関係論学派
- 第7回：ポストクライニアンとピオン
- 第8回：ウィニコットと中間学派
- 第9回：現代の精神分析・日本の精神分析
- 第10回：ユングと分析心理学
- 第11回：力動的心理療法の実際
- 第12回：力動的心理療法の事例
- 第13回：子どもの力動的心理療法
- 第14回：力動的プレイセラピーの事例
- 第15回：総復習（試験を含む）

参考文献

- 『集中講義・精神分析（上）（下）』藤山直樹著、岩崎学術出版
- 『精神分析の人格理論の基礎』馬場禮子著、岩崎学術出版
- 『私説対象関係論的心理療法入門 精神分析のアプローチのすすめ』松本邦裕著、金剛出版

成績評価方法

試験	40%	自らの臨床実践を力動的視点から説明することができるか評価する。
レポート	40%	基礎知識について理解しまとめることができるか評価する。
平常点評価	20%	授業内での発言、授業毎のミニレポートの内容を総合して評価する。

教育臨床査定特論

山薦 圭輔

授業概要 学校教育場面における心理教育的アセスメントの理論と実際を学んでいく。具体的には、学校教育現場での心理教育的アセスメントの意義や倫理、個人や集団に対するさまざまなアセスメント方法、各種心理検査・発達検査の理論的背景、実習を通じた発達検査の技術獲得、検査結果に基づく教育評価および支援計画の立て方などを学んでいく。

授業の到達目標

- ・学校教育場面における心理教育的アセスメントの基本的な枠組みを説明できる。
- ・発達検査の基本的な実施技術や解釈方法、解釈にもとづく指導援助の立案ができる。

授業計画

- 第1回：心理教育的アセスメントとは
- 第2回：心理教育的アセスメントの方法
- 第3回：心理検査の活用
- 第4回：学級・学校のアセスメント
- 第5回：教育評価
- 第6回：知能検査の実施法（1）
- 第7回：知能検査の実施法（2）
- 第8回：知能検査の実施法（3）
- 第9回：知能検査の実施法（4）
- 第10回：知能検査結果の解釈（1）
- 第11回：知能検査結果の解釈（2）
- 第12回：知能検査結果の解釈（3）
- 第13回：知能検査結果の解釈に基づく指導援助案の作成（1）
- 第14回：知能検査結果の解釈に基づく指導援助案の作成（2）
- 第15回：知能検査結果の解釈に基づく指導援助案の作成（3）

参考文献

- 適宜紹介する。

成績評価方法

レポート	60%	授業で取り上げた内容を正確に記述することができるか否か。
平常点評価	40%	発言や取り組み、各種小課題などの内容により総合的に判断する。

備考・関連URL 本講義内容は、DP科目「基礎」3-2~3-4、4-1、4-2、5-4、「社会情動」2-1~2-5、「言語」2-1、2-3、2-5を含む。

教育心理学特論Ⅰ

山 薦 圭 輔

授業概要 本講義では、教育場面における学習者の能動的・受動的学習と認知能力の発達や言語能力の発達の基礎と応用を紹介する。さらに、各種教授法を紹介するとともに、教育場面で支援が必要な障害について、教育心理学の立場から行うことができる支援について講義する。

授業の到達目標

- ・学習の過程、認知能力や言語能力の基礎（発達過程など）に関する基礎的な内容を説明できる。
- ・教育心理学の立場から適切な教授法や支援法を考え、実践へと結びつけることができる。

授業計画

- 第1回：教育と発達
- 第2回：認知能力と認知能力の発達
- 第3回：認知の個人差と障害
- 第4回：言語能力と言語能力の発達
- 第5回：教授法1
- 第6回：教授法2
- 第7回：さまざまな障害と支援
- 第8回：教育心理学とは何か

参考文献 適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 60% 授業で取り上げた内容を正確に記述することができるか否か。
平常点評価 40% 発言や取り組み、各種小課題などの内容により総合的に判断する。

備考・関連URL 本講義内容は、DP科目「認知」1-2～1-6、2-2、3-1～3-8を含む。

教育心理学特論Ⅱ

山 薦 圭 輔

授業概要 オペラント学習や社会的学習などの学習過程、内発的動機づけや外発的動機づけ、自己効力感、学習性無力感、意味的記憶・短期記憶・長期記憶・ワーキングメモリーなどの記憶、学習における認知過程、成熟と発達、個人差とその把握、自己診断力、集団の相互作用と発達過程について講義し、さらに理解を深めるために随時ディスカッションを行う。

授業の到達目標

- ・学習過程、動機づけ、発達、認知過程、集団に関する基礎的な内容を説明できる。
- ・適切な教育計画の立案と実践とができ、さらに客観的に評価することができる。

授業計画

- 第1回：教育心理学とは
- 第2回：学校教育の基盤としての教育心理学
- 第3回：教育と各種心理学
- 第4回：記憶と理解
- 第5回：動機づけ
- 第6回：学習指導と授業
- 第7回：学級集団とその組織化
- 第8回：教育心理学における支援とは何か

参考文献 適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 60% 授業で取り上げた内容を正確に記述することができるか否か。
平常点評価 40% 発言や取り組み、各種小課題などの内容により総合的に判断する。

備考・関連URL 本講義内容は、DP科目「認知」1-2～1-6、2-2、3-1～3-8を含む。

学校臨床心理学特論

小林 正幸

授業概要 学校心理学を理論の背景におき、認知行動療法の方法論を主軸に、主に学校領域の臨床的な課題を材料にする。教育問題の中核を占める「不登校」を取り上げ、現代の教育問題の構造的な課題を明確にしつつ、その周辺課題であるいじめの問題、特別支援教育の問題などを講じる。とくに、問題の形成要因が問題の未然防止や早期発見、早期対応に関わること、維持要因が臨床場面の介入に関連することを理解する。その上で、具体的な事例理解と対応策、応答構成のスキルアップと、教育相談領域での関わり方の質の総合的な技量向上を図る。

授業の到達目標 スクール・カウンセラーあるいは学校内での教育相談あるいは特別支援コーディネーターレベルの力量の獲得を目指す。

(1) カウンセラー、教育相談担当者、臨床心理学の専門家、研究者としての構え、働きかけや姿勢を形成する。

(2) 実践に密着した題材から学ぶ。

(3) 実践的に思考し、実践的な技量を修得する。

授業計画

第1回：ガイダンスと現代の教育問題の意味／講義の目的と概要、評価方法の説明。および、教育問題が持つ現代的な意味について講じます。

第2回：第2回現代の教育問題の意味／上記の続きの講義を行います。

第3回：問題行動の形成要因／学校不適応問題として、不登校を取り上げ、問題の形成要因から予防策を講じます。

第4回：問題行動の維持要因／問題の維持要因から解決策を講じます。

第5回：第1回学校での事例検討／学校不適応問題の中から、不登校、非行、学習障がいなどを取り上げ、事例をマッピング法による検討を行います。

第6回：第2回学校での事例検討／上記とは異なる事例で付箋法による検討を行います。

第7回：第3回学校での事例検討／上記とは異なる事例でセブクロ法による検討を行います。

第8回：第1回事例研究コンテスト／指定された事例から、解決策を持ち寄り、相互評価を行います。

第9回：協働による子ども支援／学校組織で子どもを支えることについて、発達障害を例に講じます。

第10回：面接の方法（本人面接）／子ども本人との面接方法について講じます。

第11回：第1回面接演習／本人との面接のロールプレイングを行います（1回目）。

第12回：第2回面接演習／本人との面接のロールプレイングを行います（2回目）。

第13回：コンサルテーションの方法（保護者面接の方法）／保護者の面接手法を講じます。

第14回：コンサルテーションの演習／保護者面接ロールプレイングを行います。

第15回：第2回事例研究コンテスト／指定された事例を元に課題を貸し、レポートを持ち寄りて相互評価します。

教科書 教科書ではないが、「教師のための学校カウンセリング」有斐閣ブックスは、とくに参考になる。

参考文献 上記以外に、初回に100冊ほどの関連文献一覧を配布する。

成績評価方法

レポート 70% 事例研究コンテストレポートの相互評価ポイント

平常点評価 25% 自発的に行う特別レポートの評価ポイント

その他 5% 授業の途中で行う作業ポイント

備考・関連URL 本講義内容は、DP科目基礎1-2、2-2、3-3、4-3、4-5、4-6、5-3、および、DP科目情動1-1、1-2、1-6、2-3、2-4が含まれる。

特別支援教育特論

佐々木 和義

授業概要 自閉症スペクトラム障害と注意・欠陥多動性障害を中心とした発達障害、知的障害、および重症心身の認知、言語、身辺自立行動、社会的スキルなどの発達の諸問題を通常発達と比較して取り上げ、生物学的・神経学的基礎、認知的基礎、社会的基礎を講義する。さらに、教育的側面と社会的・文化的側面についても理解を深めつつ、各障害に対する教育臨床における発達支援について、事例を取り上げながら詳細に講義する。

授業の到達目標

発達障害、知的障害、および重症心身に対して個別場面、学校場面、親・教師支援などの様々な場面・対象に対して教育臨床の実践ができること。

授業計画

第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本講義の目的と概要について説明します。

特別支援教育における発達障害の位置づけ／日本の特別支援教育における発達障害の位置づけについて説明します。

第2回：障害の概念と障害特性の理解／障害という概念とは何か、および障害の範囲・特性について説明します。

第3回：特別支援教育におけるアセスメント／認知、言語、身辺自立行動、社会性、生物学的・神経学的基礎などのアセスメントの分野と、その方法について説明します。

第4回：個別支援計画と支援法／アセスメントに基づいた対象者個別の支援計画の立て方と、それに基づく支援法について説明します。

第5回：学校教育場面での支援の実態／学校教育場面における教育臨床のあり方、およびその様々な方法を説明します。

第6回：注意欠陥・多動性障害（ADHD）とは／ADHDの定義、乳幼児期から児童期にかけての特徴を通常発達と比較して説明します。

児童期での支援法・社会的スキル訓練／乳幼児期から児童期にかけての社会的スキルを含む子どもへの支援方法を説明します。

親指導／乳幼児期から児童期にかけての保護者へのプログラム、事例を示しつつ説明します。

第7回：ADHDの思春期から成人期での支援法／社会的・文化的側面についても健康しつつ、各障害に対する教育臨床における発達支援について、事例を取り上げながら詳細に講義する。

認知的アプローチ法／認知面に対するアプローチについて、事例を提示しつつ、検討をする。

第8回：自閉症スペクトラム障害（ASD）とは／辞意併称とアスペルガー障がいの診断基準と特性を説明し、健常からの連続体であるという考え方を検討する。

乳幼児期から児童期での支援法（身辺自立・言語・認知）／身辺自立、言語、および認知面について、乳幼児期から児童期の支援法を説明する。

親指導、コンサルテーション／保護者に対する具体的な指導法、および関連職員に対するコンサルテーションについて説明します。

第9回：ASDの思春期から成人期でのジョブスキルなどの自立への支援法／思春期から成人期にかけてのジョブコーチなどの社会的自立に向けた支援について検討する。

認知的アプローチ法／ジョブスキルなどの自立への支援法に対する認知的アプローチ法を検討します。

第10回：ASDへの社会的スキル訓練／社会適応に向けた社会的スキル訓練を検討する。行動的アプローチと認知的アプローチの重点について検討する。

セルフコントロール法／対人場面や物理的環境において、いかにセルフコントロールお力を伸ばすかを検討する。

第11回：学習障害の、乳幼児期から小学校低学年での支援法（学習スキル・身辺自立）／小学校低学年までは、学習スキルと身辺自立では何を目標にして支援するかを説明する。

親指導／小学校低学年までは、保護者指導はどのようにするかを検討する。

第12回：学習障害の、小学校中学年から成人期での支援法（社会的スキル・問題解決）／小学校中学年から成人期での支援法は、何を目標とするか、社会的スキルと問題解決を導入して検討する。

第13回：精神遅滞の、乳幼児期から小学校中学年での支援法（身辺自立）／乳幼児期から小学校中学年での支援法を身辺自立を中心として説明します。

親指導／身辺自立を中心として説明します。

コンサルテーション／学校関係者などの連携関係を説明します。

第14回：精神遅滞の、思春期から成人期での支援法（社会的スキル）／精神遅滞の、思春期から成人期での支援法について、社会的スキル訓練を中心として説明します。

親指導／この時期の保護者への支援法を説明します。

コンサルテーション／この時期における学校や関連機関への支援と連携について説明します。

第15回：発達障害児に関するペアレント・トレーニング／保護者を対象とした行動分析を基礎としたペアレント・トレーニングについて説明します。

ティチャーズ・トレーニング／教員など対象者に関わる職種を対象とした行動分析を基礎としたペアレント・トレーニングについて説明します。

参考文献 講義中に適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 55% 与えられた課題を講義内容を踏まえて深く考察しているか評価する。

平常点評価 45% 授業への出席や討議への参加状況について評価する。

備考・関連URL 本講義内容は臨床発達心理士のDP科目「基礎」2-1、2-2、4-1、4-2、4-3、4-4、4-5、4-6、「認知」1-1、1-2、1-4、1-6、1-7、2-1、2-2、3-2、3-4、3-6、3-7、DP科目「社会情動」1-1、3-1、3-2、DP科目「言語」1-1、1-2、1-3、1-4、1-5、1-6、1-7、2-2、2-3、2-4、2-5に該当する。並木校舎で行う。

教育臨床心理学特論Ⅰ

山 薦 圭 輔

授業概要 本講義では、臨床心理学・心理療法に関する諸立場から、対象理解や支援に関する諸技法を解説し、それぞれの立場からの事例理解と治療方法を学習する。そのため、臨床心理学に関する基本的な理論体系を概説する。また、学校教育場面等で生じる様々な心理臨床上の問題を取り上げ、臨床心理学的知見と方法の応用についても考察していく。

授業の到達目標

- ・臨床心理学の諸理論、諸技法など基礎知識を正確に理解把握できる。
- ・心理療法の基礎知識を踏まえて心理臨床的課題を解明し、心理臨床的援助方法を考察することができる。
- ・臨床心理学の視点と方法を教育臨床分野に応用することができる。

授業計画

- 第1回：教育と臨床心理学の目的
- 第2回：学校教育の基盤としての臨床心理学
- 第3回：心と行動の問題
- 第4回：多様な臨床心理学のアプローチ
- 第5回：学校における児童生徒の問題
- 第6回：学校とその周辺の問題
- 第7回：心理臨床等の専門家と専門機関
- 第8回：学校で支援することとは

参考文献 適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 60% 授業で取り上げた内容を正確に記述することができているか否か。
- 平常点評価 40% 発言や取り組み、各種小課題などの内容により総合的に判断する。

備考・関連URL 本講義内容は、DP科目「基礎」2-1、2-2、3-2～3-4、4-1～4-6、5-1～5-4、「育児保育」2-1～2-3、3-1、3-2、4-1、4-2、5-1～5-4、6-1～6-6、7-1～7-7を含む。

教育臨床心理学特論Ⅱ

山 薦 圭 輔

授業概要 本講義では、臨床心理学・心理療法に関する諸立場から、心理的支援（カウンセリング・ガイダンス・コンサルテーション）の方法・アセスメントの方法・各種教育場面における支援の実践について講義する。特に心理的支援およびアセスメントに係る各種理論を十分に理解し、教育場面における支援を客観的に理解する姿勢について講義する。

授業の到達目標

- ・臨床心理学的支援法の諸理論、諸技法などを正確に理解把握できる。
- ・臨床心理学的アセスメント法の諸理論、諸技法などの基礎を正確に理解把握できる。
- ・臨床心理学の視点と方法を教育臨床実践に応用することができる。

授業計画

- 第1回：学校教育場面における臨床心理学の役割
- 第2回：学校臨床とカウンセリング・ガイダンス・コンサルテーション
- 第3回：学校カウンセリングの理論
- 第4回：学校カウンセリングの技法
- 第5回：各種アセスメントの理論と技法
- 第6回：支援の実践 支援対象者との関係
- 第7回：支援の実践 各種教育現場における臨床心理的支援
- 第8回：総括 学校と臨床心理学の関係

参考文献 適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 60% 授業で取り上げた内容を正確に記述することができているか否か。
- 平常点評価 40% 発言や取り組み、各種小課題などの内容により総合的に判断する。

備考・関連URL 本講義内容は、DP科目「基礎」2-1、2-2、3-2～3-4、4-1～4-6、5-1～5-4、「育児保育」2-1～2-3、3-1、3-2、4-1、4-2、5-1～5-4、6-1～6-6、7-1～7-7を含む。

乳幼児発達心理学特論

井原 成男

授業概要 乳幼児発達心理学について学ぶとともに、アタッチメント理論、その中でもとりわけ、筆者の専門である移行対象論を中核にして、心理臨床と乳幼児発達心理学の不可分の関係について学ぶ。

授業の到達目標

アタッチメント理論、その中でもとりわけ、筆者の専門である移行対象論を中核にして、心理臨床と乳幼児発達心理学の不可分の関係について学び、そこから移行対象、広くはアタッチメント理論と、発達心理学の各トピックの関連について学ぶ。最終的には資格試験の各問題に対応できる広い知識と、実際の現場で応用可能な発達心理学理論について深める。

授業計画

- 第1回：はじめに
- 第2回：乳幼児発達心理学と育て直し（1）
- 第3回：乳幼児発達心理学と育て直し（2）
- 第4回：ウィニコットの発達心理学（1）
- 第5回：ウィニコットの発達心理学（2）
- 第6回：移行対象から見た発達理論
- 第7回：心身症と発達心理学
- 第8回：自閉症と発達心理学
- 第9回：ハーローの発達心理学とアタッチメント理論
- 第10回：ピアジェの発達心理学と言語の発達心理学・他
- 第11回：マラーの発達心理学とインターナライゼーションの心理学・他
- 第12回：エリクソンの発達心理学と子どもの発達段階・他
- 第13回：ケース研究（1）
- 第14回：ケース研究（2）
- 第15回：まとめと総合討論

教科書 未定

参考文献 移行対象の臨床的展開：ぬいぐるみの発達心理学 岩崎学術出版社

成績評価方法

試験	実施しない
レポート	50% 課題について自分なりの意見も書いてあるかが求められる
平常点評価	20% 出席等取り組みの真摯さ
その他	30% 基本的な報告能力

備考・関連URL お茶の水女子大学ホームページ 学部発達臨床神学講座及び大学院発達臨床心理学コース ホームページ
なお、本講義内容は、DP科目基礎1-2～3-4、4-2、4-4～4-6、DP科目社会情動1-1～1-2、1-4～2-1、2-3、2-4、3-1、3-2が含まれる。

発達心理学特論

山薦 圭輔

授業概要 成熟と発達と学習の関係、乳児の知覚・認知機能、認知発達理論と情報処理発達論、流動性知能と結晶性知能を含んだ多重知能理論、三項目関係・語彙獲得・文法獲得をはじめとする言葉の獲得、こころの理論とメタ認知、自己概念と自我発達、社会的微笑、愛着と親子関係、反抗期、遊びの発達、仲間関係、道徳心と向社会的行動、ギャングエイジ、職業選択、職業人としての発達、親としての発達、老年期の発達課題について講義を行う。

授業の到達目標

- ・生涯発達の観点で胎生期から老年期に至る各発達段階における発達課題を説明できる。
- ・支援や教育などに発達心理学的観点を応用でき、かつ問題に対処できる。

授業計画

- 第1回：学校教育の基盤としての発達心理学
- 第2回：発達の理論1
- 第3回：発達の理論2
- 第4回：発達の理論3
- 第5回：身体的発達と行動の変化
- 第6回：認知・思考の発達
- 第7回：言語の発達
- 第8回：自己概念の形成と自我の芽生え
- 第9回：自己意識の発達
- 第10回：社会性の発達
- 第11回：関係性の変化
- 第12回：子どもの発達と親としての役割
- 第13回：子どもの発達と支援者としての役割
- 第14回：発達にかかわる障害
- 第15回：総括

参考文献 適宜紹介する。

成績評価方法

レポート	60% 授業で取り上げた内容を正確に記述することができているか否か。
平常点評価	40% 発言や取り組み、各種小課題などの内容により総合的に判断する。

備考・関連URL 本講義内容は、DP科目「基礎」3-2～3-4、4-1、4-2、5-4、「社会情動」2-1～2-5、「言語」2-1、2-3、2-5を含む。

教育臨床研究データ解析実習

大月 友／藤井 靖／山蔭 圭輔

授業概要 本講義では、教育臨床領域で必要とされている臨床実践や、それにまつわる実践的研究法の理論と実際を具体的に学習する。特に、教育臨床における心理教育的アプローチの理論的背景や実践方法、および、治療効果を実践的活動の中でどのように評価するかなどの研究方法、実践研究で収集されたデータの処理や分析方法を学ぶ。

授業の到達目標

- ・教育臨床に関する実践研究を理解することができる
- ・教育臨床に関する実践研究の計画を立てることができる
- ・教育臨床に関する実践研究においてデータ収集・分析をすることができる

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：教育臨床研究の考え方
- 第3回：研究と倫理
- 第4回：文献研究の基礎
- 第5回：実験計画法とプログラム評価研究
- 第6回：1事例の実験デザイン
- 第7回：質問紙調査法
- 第8回：面接調査法と質的研究
- 第9回：心理学統計法の基礎知識
- 第10回：教育臨床研究におけるデータ処理
- 第11回：教育臨床研究におけるデータ解析（1）
- 第12回：教育臨床研究におけるデータ解析（2）
- 第13回：教育臨床研究におけるデータ解析（3）
- 第14回：教育臨床研究におけるデータ解析（4）
- 第15回：まとめ

教科書 なし。資料を配布する。

参考文献 適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 30% 実習レポートによって評価する。
平常点評価 70% 実習への参加状況、取組み、ディスカッションへの参加などを評価する。

心理教育臨床実習 A（春学期）

佐々木 和義／野村 忍／大月 友

授業概要 教育臨床における基本的な技術を身につけるための体験的な基礎実習を行っていく。実習は、かわりつくりに関する実習、傾聴技法に関する実習、カウンセリング技術に関する実習、コンサルテーション技術に関する実習で構成する。

授業の到達目標

教育臨床における基本的な臨床技術を身につける。また、個々の児童・生徒を心理教育的な視点から理解し、支援することができるようになる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：カウンセリング・コンサルテーションとは
- 第3回：かわりつくりに関するグループ実習（1）
- 第4回：かわりつくりに関するグループ実習（2）
- 第5回：かわりつくりに関するグループ実習（3）
- 第6回：傾聴実習（1）
- 第7回：傾聴実習（2）
- 第8回：傾聴実習（3）
- 第9回：カウンセリング実習（1）
- 第10回：カウンセリング実習（2）
- 第11回：カウンセリング実習（3）
- 第12回：コンサルテーション実習（1）
- 第13回：コンサルテーション実習（2）
- 第14回：コンサルテーション実習（3）
- 第15回：まとめ

教科書 なし。適宜資料を配布する。

参考文献 講義中で適宜紹介する。

成績評価方法

- レポート 50% 実習内容に関して臨床的観点から深く考察しているか評価します。
平常点評価 50% 実習の取り組みや討議への参加状況について評価します。

備考・関連URL この授業の受講生は、原則として教育臨床コースに所属する大学院生に限る。所沢キャンパスで実施する。

心理教育臨床実習 B（秋学期）

佐々木 和義／野村 忍／大月 友

授業概要 教育臨床における基本的な技術を身につけるための体験的な基礎実習を行っていく。実習は、かわりづくりに関する実習、傾聴技法に関する実習、カウンセリング技術に関する実習、コンサルテーション技術に関する実習で構成する。

授業の到達目標

教育臨床における基本的な臨床技術を身につける。

また、個々の児童・生徒を心理教育的な視点から理解し、支援することができるようになる。

授業計画

第1回：事例発表に関する導入

第2回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例1）

第3回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例2）

第4回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例3）

第5回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例4）

第6回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例5）

第7回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例6）

第8回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例7）

第9回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例8）

第10回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例9）

第11回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例10）

第12回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例11）

第13回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例12）

第14回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例13）

第15回：まとめ

教科書 なし。適宜資料を配布する。

参考文献 講義中で適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 50% 担当事例発表において臨床的観点から深く考察しているか評価します。

平常点評価 50% 実習の取り組みや事例検討での討議への参加状況について評価します。

備考・関連URL この授業の受講生は、原則として教育臨床コースに所属する大学院生に限る。所沢キャンパスで実施する。

心理臨床事例実習 A（春学期）

佐々木 和義／野村 忍／大月 友

授業概要 受講生がそれぞれの場で実際にかかわっている事例を取り上げ事例研究を行なう。心理的・環境的原因によって生じる児童・生徒の教育臨床的問題と発達・障害の原因によって生じる教育臨床的問題を取り上げる。

授業の到達目標

・心理臨床に関する力量が専門家の水準に到達すること。

授業計画

第1回：オリエンテーション／本実習の目的と概要、事例発表の方法、討議の方法等

第2回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A1）

第3回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A2）

第4回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A3）

第5回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A4）

第6回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A5）

第7回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A6）

第8回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A7）

第9回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A8）

第10回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A9）

第11回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A10）

第12回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A11）

第13回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A12）

第14回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A13）

第15回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例A14）。春学期のまとめ。

教科書 なし。適宜資料を配布する。

参考文献 講義中で適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 50% 事例発表の内容を評価する。

平常点評価 50% 授業への出席や討議への参加状況について評価する。

備考・関連URL この授業の受講生は、原則として教育臨床コースに所属する大学院生に限る。所沢キャンパスで実施する。

心理臨床事例実習 B（秋学期）

佐々木 和義／野村 忍／大月 友

授業概要 受講生がそれぞれの場で実際にかかわっている事例を取り上げ事例研究を行なう。心理的・環境的原因によって生じる児童・生徒の教育臨床的問題と発達・障害的原因によって生じる教育臨床的問題を取り上げる。

授業の到達目標

・心理臨床に関する力量が専門家の水準に到達すること。

授業計画

第1回：オリエンテーション。事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B 1）
第2回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B 2）
第3回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B 3）
第4回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B 4）
第5回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B 5）
第6回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B 6）
第7回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B 7）
第8回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B 8）
第9回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B 9）
第10回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B10）
第11回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B11）
第12回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B12）
第13回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B13）
第14回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B14）
第15回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議（事例B15）。まとめ。

教科書 なし。適宜資料を配布する。

参考文献 講義中で適宜紹介する。

成績評価方法

レポート 50% 事例発表の内容を評価する。

平常点評価 50% 授業への出席や討議への参加状況について評価する。

備考・関連URL この授業の受講生は、原則として教育臨床コースに所属する大学院生に限る。所沢キャンパスで実施する。

環境管理計画学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

天野 正博

授業概要

A（春学期）

地球規模での環境問題のうち、地球温暖化と森林との関係、熱帯林の減少問題に焦点を当てながら、地球環境問題の現状を統計データなどから分析するとともに、問題が生じる社会構造を明らかにするために現象をモデル化する手法を習得し、これを用いてどのような対策を立てるべきかを考える。また、地球環境問題を解決するための基本概念である公平性についてアマルティア・センの著書を教材にしながら、地球環境問題の中での公平性の実現方法を学ぶ。

B（秋学期）

下の2項目について、現実社会の動きを参考にしながら問題の分析とその解決方法について学ぶ。

1) 様々な国際的取り決めに対する各国の利害関係と温暖化に対する姿勢を分析しながら、気候変動枠組み条約の吸収源を中心に、国際的な合意へのプロセスと各国が取るべき戦略について研究する。2) グローバル経済の中で厳しさを増す南北対立の融和を図るのに必要な開発援助について、途上国を研究対象として望ましい援助方法を検討する。とくに、住民の能力向上という観点から具体的な提案を行う。

授業の到達目標

- ・地球環境問題について、その背景から問題の分析、解決方法までの道筋を十分に理解すると共に、具体的なプロジェクト設計について精通できる。
- ・また、国際社会において地球環境問題の根本原因を見据えた解決方法を提案できる人材となれる。

水域環境学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

井内 美郎

授業概要

A（春学期）

湖沼域等の陸水環境変遷史解明に関する調査計画立案、分析計画の立案及び実施、分析結果の考察を行う。

B（秋学期）

湖沼域等の陸水環境変遷史解明に関する文献学習、研究成果の発表及び討論を行う。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・湖沼域等の陸水環境変遷史に関する調査計画立案、独自に分析実施および分析結果の考察が可能になる。

B（秋学期）

- ・湖沼域等の陸水環境変遷史に関する文献調査、学会等での研究成果発表が可能になる。

生物圏生態学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

太田 俊二

授業概要

従来の学問領域で言えば、生態学と気象学の融合的な高度な研究を遂行するために必要事項を個別に指導する。設定された研究テーマにもとづいた指導を行うが、従来の生態学のみ、気象学のみの研究に終始することなく、融合的かつ人間活動の評価を含ませるようにしたい。このように人間科学を強く意識するものの、従来からの領域である個々の生態学や気象学のなかでも十分な研究成果が得られることも大切である。また、将来の人間社会、地球社会の予測研究といった社会的要請の強い領域に寄与できるような研究に発展できるように指導を進める。加えて、学位取得後に受講者が独自に新しいテーマを設定し、それを継続的に遂行することができる能力を涵養する。

授業の到達目標

- ・学位取得までに第一著者として国際誌に三本以上の原著論文が掲載されること

大気環境科学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

松本 淳

授業概要

大気環境科学分野に関する博士課程での研究を遂行するために、基礎事項から最新の研究動向までを理解し、研究の背景・目的を明確にする。普段の実験・解析等を通じた経験の蓄積だけでなく、現状の把握、研究遂行のための考察・改善、成果のまとめと報告・発表を行ない、課せられたテーマを着実に遂行する能力を磨く。各自のテーマに合わせて、対流圏大気化学（光化学オキシダントやその関連成分の大気動態）にて重要な「室内実験」「大気観測」「モデル計算」それぞれについて、適切な研究遂行手順について学ぶ。

授業の到達目標

- ・博士学位の規定年数以内での取得が到達目標である。
- ・そのためには、各自のテーマに関する成果のうち、基礎的な内容や初期的なデータをベースとした論文を一年次に国際誌に投稿し、二年次以降には独自の方針に基づく発展的な成果を複数掲載されるように指導する。

動物行動生態学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

三浦 慎悟

授業概要

A（春学期）

野生動物の行動生態学、個体群生態学、野生動物管理から特定の研究テーマ設定を踏まえ、研究テーマの意義を最新の研究的状況の中で位置づけるとともに、論文作成のための資料収集法および分析法を講論し、その進捗状況を点検ながら、論文の作成、学会発表へと導く。

B（秋学期）

野生動物の専門分野での特定の研究テーマ設定を踏まえ、研究テーマの意義を最新の研究的状況の中で位置づけるとともに、論文作成のための資料収集法および分析法を議論し、その進捗状況を点検ながら、論文の作成、学会発表へと導く。

授業の到達目標

A（春学期）

・研究課題を設定し、方法を習得し、データの収集と分析を行うことができる。論文を作成し、学会でプレゼンテーションすることができる（B56-1、B56-3、B56-4、C6-1、C6-2、D56-1）

B（秋学期）

・研究課題についてのデータを収集、分析し、論文を作成し、学会でプレゼンテーションすることができる（B56-1、B56-3、B56-4、C6-1、C6-2、D56-1）。

アジア社会論研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

店田 廣文

授業概要

中東・北アフリカ、アジアおよび日本社会を対象として、各自の研究課題に即した実証的研究の実施とその成果による学術論文作成について指導する。これまで取り上げてきた研究課題は、都市と都市化、人口変動、少子高齢化、人口移動や移民、多民族・多文化社会、イスラームなどであるが、これら以外の課題についての研究も指導する。

授業の到達目標

・課程内での博士論文作成と「若手」研究者としての諸能力を修得すること。

環境社会学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

鳥越 皓之

授業概要

環境社会学・環境民俗学分野の博士論文作成のための指導を目的とする。当該分野の方法論の検討、現代社会との関わり等についても分析を深めることになろう。

授業の到達目標

・博士論文の作成。

地域資源論研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

柏 雅之

授業概要

A（春学期）

日本と世界の食料・農業・農村問題に関する研究論文作成について指導する。

B（秋学期）

中山間地域を中心とした地域農業再生の戦略と政策システムに関する研究論文作成の指導。

授業の到達目標

・国内外の主要な関連学会（IRSA、日本農業経済学会、農村計画学会等）での発表、および研究論文作成・掲載。

移住論研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

森本 豊富

授業概要

A（春学期）

博士論文の調査、執筆の進捗状況を移住論ゼミで適宜報告する。また、日本移民学会等の国内学会に限らず国際的な学会でも報告し論文を投稿する。日本移民学会では年次大会の運営などにも関わり、研究者とのネットワーク作りにも努力する。移住論ゼミ、移民研究特論を受講することを原則とする。

B（秋学期）

博士論文の調査、執筆の進捗状況を移住論ゼミで適宜報告する。また、日本移民学会等の国内学会に限らず国際的な学会でも報告し論文を投稿する。日本移民学会では、学会運営にも関わり、研究者とのネットワーク作りにも努力する。移住論ゼミ、移民研究特論を受講することを原則とする。

授業の到達目標

- ・国内外の移民研究の最新動向を把握している。
- ・博士論文のテーマに関わる先行研究を整理し批判的に検討できる。
- ・レフェリー付きの学術雑誌に投稿し採択される実力を身につける。

【中目標No.】B56-1、2、3、4、C6-1、D56-1、E56-2、F56-1、G36-1～9

物質文化論研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

谷川 章雄

授業概要

考古学は、主として発掘調査の成果をもとに、モノと人間との関係を読み解く学問である。また、考古学は調査・研究のさまざまなレベルにおいて、歴史学・民俗学をはじめとする他の領域との接点をもっており、総合的、学際的方向性を本質的に内包している分野である。こうした視点にもとづいて、各自が論文を作成していく上での資料の特質と限界と観察・記載の方法、分析の方法、解釈の方向性などについて指導する。

授業の到達目標

・修了年限以内での博士論文の完成を到達目標とする。

文化生態学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

蔵持 不三也

授業概要

学会誌や紀要などへの投稿論文の作成指導と、学会・研究会発表のためのトレーニングを行う。

授業の到達目標

・博士學位論文や投稿論文の作成と学会・研究会発表のためのスキルを獲得してもらう。

環境心理・環境デザイン研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

佐藤 将之

授業概要

建築や都市の環境から各自が関心、興味をもつ次元を選択し、フィールドサーベイを通じて人間と環境との相互関係を明らかにする。特に、着目した次元における人間と環境との相互作用・相互浸透、環境決定に関する分析・考察を行う。それらを踏まえて応用的な学問としての環境心理学を議論する。環境デザインの議論については、デザイナー向けだけではなく、一般ユーザー向けの意識啓蒙、環境の使い方、環境とのつきあい方の提案を行うものとする。

授業の到達目標

・フィールドサーベイを通じた環境の質的な記述とそれに伴う分析を行うことによって「人間環境のコーディネータ的な役割を担える人材」「心理・行動からみた環境デザインを議論できる人材」となることを目標としている。

建築環境学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

小島 隆矢

授業概要

A（春学期）
住居・建築・都市などの環境と、それら環境に関する広い意味での顧客（利用者、居住者、所有者、管理者等）の意識・行動・ニーズ・CS（顧客満足）に関わる諸問題をテーマとした研究指導を行う。各自、自主的に選んだテーマについて、1）社会的背景、既往研究などの調査、2）研究目的の設定、3）研究方法の検討・設定、4）調査・分析の実施、5）考察・結論の導出、というプロセスを遂行する。

B（秋学期）
住居・建築・都市などの環境と、それら環境に関する広い意味での顧客（利用者、居住者、所有者、管理者等）の意識・行動・ニーズ・CS（顧客満足）に関わる諸問題をテーマとした研究指導を行う。各自、自主的に選んだテーマについて、1）社会的背景、既往研究などの調査、2）研究目的の設定、3）研究方法の検討・設定、4）調査・分析の実施、5）考察・結論の導出、というプロセスを遂行する。要所要所で進捗状況の発表・検討会を開催し、内容のブラッシュアップをはかる。成果は論文としてまとめ、発表する。

授業の到達目標

A（春学期）
・研究する意義がある「研究目的」を設定できる。
・「研究の背景」等からそれを無理なく納得できるよう説得力のある研究ストーリーを組み立てることができる。
・目的に対して合理的な「研究方法」を選択できる。
・適切な「分析・考察」を行うことができる。
B（秋学期）
・研究する意義がある「研究目的」を設定できる。
・「研究の背景」等からそれを無理なく納得できるよう説得力のある研究ストーリーを組み立てることができる。
・目的に対して合理的な「研究方法」を選択できる。
・適切な「分析・考察」を行うことができる。
・現代および今後の社会において何らかの価値を提供する研究を遂行するための視点・能力が獲得できている。

建築計画学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

佐野 友紀

授業概要

受講者各自が設定した建築・都市計画に関わるテーマについて、実習的な調査分析を行う。加えて、数理的、統計的分析を含んだ手法によって現象を分析し、結論を導き出す方法を学ぶ。

授業では受講者の発表を通して、問題解決の方法を探る。また、研究指導等を通して、成果を論文形式にまとめ、発表する。

授業の到達目標

・建築、都市計画に関わる問題を発見し、分析を行うことで、問題解決方法を提案する手法を学ぶことを目標とする。

発達行動学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

根ヶ山 光一

授業概要

各自の研究テーマについて、研究計画（いかなる課題に焦点化し、そこに他の先行研究と差違化していかにoriginalityを盛り込むか、どう仮説を立てそれをどういう手法によって明らかにするか）・実施（フィールドや実験場面をどう確保し、具体的な手続きをどうするか）・分析（どのような分析手法を用いて、どのように結果をまとめるか）・考察（データと仮説・先行研究

をつきあわせ、整合性のある議論をどう行うか）・発表（研究成果をどうまとめ、口頭もしくは論文で発表するか）の指導を行う。

授業の到達目標

- ・発達行動学に関する高度な研究を自ら計画・実施できる（D56-2）
- ・研究成果を学会誌レベルの論文にまとめることができる（B56-1）

運動制御・バイオメカニクス研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

鈴木 秀次

授業概要

学部および大学院修士レベルにおける運動制御とバイオメカニクスをベースとして、より高度な身体運動の仕組みの研究を実施するための研究指導を行う。よって研究指導内容は、1）筋の収縮様式とそれらの神経制御機序、2）姿勢維持や運動時の脊髄レベルにおける反射の関与、3）筋収縮後の短期可塑性、4）ロコモーション等における身体運動時の力の物理的特性と神経筋協応能などのテーマが中心である。これらの研究を推進し博士論文を完成させるためのレベルの高い指導・助言を行う。

授業の到達目標

- ・英文学術誌に投稿・受理が叶うよう原著論文を仕上げる。

応用健康科学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

竹中 晃二

授業概要

博士論文作成に向けて、材料となる研究論文を作成する準備とする。特に、先行研究のレビューを多数行う。

授業の到達目標

- A（春学期）
- ・博士論文に関連する先行研究を多く読み、それらのレビューペーパーを作成できる。また、博士論文の材料となる論文を作成する。
- B（秋学期）
- ・博士論文に関連する先行研究および関連情報を多く収集し、まとめる。また、博士論文の材料となる論文を作成する。

神経内分泌学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

山内 兄人

授業概要

A（春学期）

修士課程と同様に、ラットの脳における生理現象および行動の制御機構を神経内分泌学、神経組織化学、神経解剖学および神経行動学的手法により解析し、脳の性差およびその機序をも明らかにする。特にセロトニン神経系に着目している。各自その中からテーマを選び国際誌に掲載できるレベルの研究をおこなう。

B（秋学期）

Aと同様に、ラットの脳における生理現象および行動の制御機構を神経内分泌学、神経組織化学、神経解剖学および神経行動学的手法により解析し、脳の性差およびその機序をも明らかにする。特にセロトニン神経系に着目している。各自その中からテーマを選び国際誌に掲載できる研究をおこなう。

授業の到達目標

- ・博士課程終了時までに3本以上の英文誌に論文を掲載する。

生体機能学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

今泉 和彦

授業概要

A（春学期）

骨格筋の可塑性とその調節機構、微量元素（亜鉛）・ビタミンB9（葉酸）欠乏による生体防御系・生体内情報伝達シグナル伝達の制御機構、ドーピング薬物（特に $\beta 2$ -作動薬）・茶カテキン・香辛料辛味成分摂取による代謝応答とその調節機構を明らかにするため、その理論的背景から研究の方法・解析法・最新の知見まで研究に関わる全ての課題について指導を行う。併せて、研究の指導・討論を通じて研究マインド・考え方・ヒント・アイデアなどが高まることを期待している。

B（秋学期）

Aと同様、骨格筋の可塑性とその調節機構、微量元素（亜鉛）・ビタミンB9（葉酸）欠乏による生体防御系・生体内情報伝達シグナル伝達の制御機構、ドーピング薬物（特に $\beta 2$ -作動薬）・茶カテキン・香辛料辛味成分摂取による代謝応答とその調節機構を明らかにするため、その理論的背景から研究の方法・解析法・最新の知見まで研究に関わる全ての課題について指導を行う。併せて、研究の指導・討論を通じて研究マインド・考え方・ヒント・アイデアなどが高まることを期待している

授業の到達目標

A（春学期）

上記の研究活動を通して、日々の研究、論文の検索・読み方・実験法・解析法の習得・研究発表・論文の書き方・纏め方などを十分習得することによって研究者として自立できる人材を目指す。その証として国際誌に学位関連論文を筆頭著者として掲載しなければならない。

B（秋学期）

Aと同様、上記の研究活動を通して、日々の研究、論文の検索・読み方・実験法・解析法の習得・研究発表・論文の書き方・纏め方などを十分習得することによって研究者として自立できる人材を目指す。その証として国際誌に筆頭著者として学位関連論文を掲載しなければならない。

統合生理学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

永島 計

授業概要

体温、体液に関する研究方法を習得し、かつ最新の知見を学ぶ。基本的な生理学の実験手技を学び、個々に与えられた研究テーマを遂行し、学会発表、論文を作成する能力を身につけるカリキュラムを提供する。

授業の到達目標

- ・体温、体液生理学の研究者としての専門的知識、高度な実験手技の習得
- ・独立した研究者として活動できるための社会的な能力の習得（研究費習得、ネットワークの構築等）

分子神経科学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

榎原 伸一

授業概要

最近発表された先端的な論文を輪読しプレゼンテーションおよび質疑応答を行う。また各自の研究テーマに関する原著論文を解説することにより深い理解を目指す。

授業の到達目標

- ・神経発生に関する最新の知見を得る。
- ・神経系の構造と各部の働きを遺伝子発現、分子動態から理解する。
- ・神経回路の分子的基盤を理解する。

医療人類学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

辻内 琢也

授業概要

A（春学期）

医療人類学（medical anthropology）では、身体的・心理的・社会的・文化的（bio-psycho-socio-cultural）な複合産物として構成されている健康や病い（health and illness）という現象を、人文社会科学的アプローチ（文化人類学・社会人類学）および自然科学的アプローチ（自然人類学）の両輪を用いて、広く人類の全歴史を背景に通文化・比較文化的に探求する。

B（秋学期）

医療人類学では、世界各地域（特に東－南－東南アジア）に広がる災害や紛争などの災厄や苦悩（suffering）に対峙する多元的医療システム、心理臨床や福祉領域における臨床人類学（clinical anthropology）、近代生物医学システムの抱える諸課題を問う批判的医療人類学（critical anthropology）、電磁波・化学物質・ストレスなどの現代社会を取り巻く生活環境病や難病をめぐる病いの語り（illness narratives）、などを研究対象とする。

授業の到達目標

- ・学部・修士課程で文化人類学や社会人類学を専攻した学生が、医療を研究対象にできる。
- ・医師・看護師・補完代替医療従事者・臨床心理士・社会福祉士・医療ソーシャルワーカーが、人類学を基礎とした質的研究の基礎を身につけ、多文化間臨床を実践するための素養を身につけられる。

緩和医療学・臨床死生学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

小野 充一

授業概要

個人の“死”を、“生命の終わり”と捉える視点から、新しい世代への“生命の伝承”という視点に変換していくことで獲得する様々な“受容の概念”について、伝承されるものを受け止める側と伝える側の両極から検証し、支える技術、支えられる方法、関係性調整の方法などを具体的に研究する作業を指導する。

授業の到達目標

- 1）緩和医療学あるいは臨床死生学における質的研究手法の習得
- 2）死生の臨床現場におけるフィールド調査を実施し研究結果をまとめて学会発表を行う
- 3）研究結果をまとめて投稿論文としてまとめて発表する

社会医学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

黒原 淳

授業概要

健康・医療・福祉水準の向上に寄与する「情報」の創出とその利活用という観点から、広く社会医学領域に属する種々の課題について研究する。各自研究テーマを設定し、研究計画の立案、研究の実施、研究論文の執筆、学会での発表、学会誌への投稿、学位論文作成などを助言・指導する。従来より社会医学は、人間科学的発想を必然的に求める領域であり、現地現物を重視し、社会的要請に応える、社会に研究成果を還元することを強く意識して助言・指導する。

授業の到達目標

- 1）研究を進める上で必要となる「情報」を横断的、包括的に扱うための原理や方法論を説明できる。
- 2）国際・国内学会で自身の研究について発表し、適切な討論を行うことができる。
- 3）課程内に学位論文を作成できる。

予防医学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

町田 和彦

授業概要

21世紀の日本は人類がかつて経験しなかった程の急速な高齢社会を迎えようとしている。戦後順調に発展を遂げてきた日本経済はバブル経済の破綻以降立ち直りをみせず、異常な累積債務を抱え、政治の混乱もあり、先の見えない社会となり、人々の

気持ちも荒んだものになるつつある。一方世界的な視野から見ても、未成熟な民主主義、環境破壊の容認、格差社会の容認のもと経済発展のみを優先する巨大人口を擁する発展諸国の台頭は民主主義社会の根幹を揺るがせ、政治的混乱、深刻な環境問題、テロの横行、食糧や資源の分配、経済発展から取り残された発展途上国の問題などから来る多くの問題を生み、今まで世界政治に無関心で、危機管理意識の薄い日本人に深刻な影響を与えるものと思われる。

このような厳しい内外の状況下のもとでは予防医学も根本的な改革が必要とされる。今迄の予防医学は個々の疾病を対策を中心とした医学部教育の一環として行われてきたが、これからは生命延長の時代ではなく、単に疾病対策にとどまらず、疾病の起こる原因を人間をとりまく自然科学的、社会科学的、人文科学的要因から解明し、胎内からの健康教育の充実、各時代における心身に与える影響の除去を柱とした政策を志向し、各自が健康の維持・増進を理解するだけでなくそれに向けて実行し、生きがいのある一生を送れるような社会を作ることが必要である。そのための教育を院生と考えていきたいと思う。

授業の到達目標

- ・博士課程の学生には授業概要にある様な予防医学的思考を生かした研究を実際のフィールドの中で実践し、世界的にも通用するような論文を作成してほしいと思う。

子どもの健康福祉学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

前橋 明

授業概要

A（春学期）

近年の子どもの健康福祉学研究分野における研究動向について指導し、さらに各自の研究テーマに基づいて、文献研究や、研究計画の立案・実行と、報告書・論文の作成を行う。そして、研究成果の発表が専門学会においてできるよう、研究指導を行う。

B（秋学期）

子どもの健康福祉学分野の博士論文作成のための指導を目的とする。本指導では、各自の研究計画に基づき、研究指導スケジュールを立て、研究計画の立案・実行、博士論文作成まで指導する。

授業の到達目標

A（春学期）

- （1）健康福祉関連の学会に参加し、子どもの健康福祉学研究分野における研究動向を理解する。
- （2）各人の研究テーマに関わる先行研究とデータ収集を行い、博士論文の全体構想を目指す。
- （3）各自の研究テーマに基づいて、研究計画を立案し、実施する。その結果を専門学会において報告する。

B（秋学期）

- （1）博士論文作成のための研究計画を立案・実施して、論文の作成を行う。
- （2）研究成果を、関連学会にて定期的に発表するとともに、国際会議での発表も行う。
- （3）博士論文執筆段階で、その成果の一部を専門学会で学術論文として発表する。

研究成果は、国内外の学術誌に、年に1本以上投稿し、掲載されるようにする。

行動臨床心理学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

嶋田 洋徳

授業概要

臨床心理学におけるさまざまな問題に対して、（認知）行動論的アプローチを用いて研究と実践を行なう。具体的には、行動療法、認知行動療法の観点から理解される症状や問題行動の理論モデルの検討、治療モデルの検討、症状や問題行動の形成と維持、治療に及ぼす個人差変数の検討などを行なう。そして、博士論文の作成を念頭に置き、研究計画の立案、データの収集と解析、論文の執筆、研究成果の公表に関する指導を行なう。

授業の到達目標

- ・博士論文の作成にあたり、必要な理論的背景や具体的方法論の理解ができるようになる。

医療心理学・職場メンタルヘルス学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

鈴木 伸一

授業概要

うつ病、不安障害、心身症などのさまざまなストレス関連疾患の発症・維持・悪化に関与する諸要因の影響性を検討するとともに、ストレス関連疾患の予防・治療・リハビリテーションに向けた認知行動的介入の方法論について研究する。また、研究の焦点としては、身体疾患患者のメンタルケアおよび職場のメンタルヘルスを実践フィールドと位置付け、単に精神衛生上の問題のみを取り上げるのではなく、成人が抱えやすい生活上の問題や罹患しやすい心身の問題の予防およびケアに焦点を当てたトータル・ヘルス・プロモーションを目指した最先端の研究および臨床実践を行う。これらを実現するために、「うつ・不安のメカニズムに関する基礎研究グループ」、「チーム医療を基盤としたメンタルケアシステムに関する研究グループ」、および「職場のメンタルヘルスをはじめとするストレスマネジメントに関する研究グループ」を構成するとともに、当該グループが担う各プロジェクトを主導的に運営し、その研究成果を国際的に発信していく。

授業の到達目標

- ・医療および職場のメンタルヘルスの現状を理解し、対策を考え、社会に還元してくことができる
- ・認知行動療法を核とした最先端の臨床技術を医療・産業分野で展開できる
- ・医療心理学および職場メンタルヘルス学に関する最新の研究動向を把握できる
- ・医療心理学および職場メンタルヘルス学に関する最先端の研究を遂行し、国内外に論文発表できる

心身医学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

野村 忍

授業概要

心身医学は、患者を身体面のみならず心理社会面をも含めて全人的なアプローチを行う医学である。心身症、神経症やうつ病の診断・治療に関わる研究のみならず、健常者における心身相関の研究やヘルスプロモーションに関わる研究も行っている。この科目では、博士論文作成の指導（グループ指導ならびに個人指導）を行う。各自の研究計画に基づき、研究指導スケジュールを立て、研究計画の実践、論文作成まで指導する。また、学会発表や論文投稿についても指導する。

授業の到達目標

- ・博士論文の研究計画の立案、実践、論文作成ができる。
- ・学会発表や論文投稿ができる。

認知行動カウンセリング学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

根建 金男

授業概要

近年、従来の認知行動カウンセリングの限界を克服するべく登場した構成主義的カウンセリングが盛んになってきた。合理的で、エビデンスを重視する認知行動カウンセリングと、人の一生涯の発達を視野に入れた上で、人が世界をどう構成（認識）しているかをその人の側から理解し、アプローチしようとする、構成主義的カウンセリングは、相互補完的な関係にある。この研究指導では、認知行動カウンセリングと構成主義的カウンセリングの領域における研究を実施し、博士論文をまとめることができるように指導する。

授業の到達目標

- ・認知行動カウンセリングと構成主義的カウンセリングの関係を含めて、両者の概要を理解する。
- ・認知行動カウンセリングまたは構成主義的カウンセリングの領域における研究を実施し、博士論文を作成する、あるいはそのための準備をする。

行動医学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

熊野 宏昭

授業概要

身体医療と精神医療の双方に臨床心理学を適用する専門領域としての行動医学領域の探求を深め、その成果を使いこなせるようにすることに焦点を当てていく。そのためには、心理的变化の基礎メカニズムとその応用可能性を追及し、アセスメントの方法論を洗練化し、臨床現場でのケースフォーミュレーションと介入プロセスの最適化を進めることが必要になる。そして、主に、臨床行動分析（アクセプタンス&コミットメント・セラピー）、メタ認知理論（注意訓練とメタ認知療法）、応用脳科学に関わる分野での研究指導を行う。

授業の到達目標

- ・臨床行動分析、メタ認知理論、応用脳科学の基礎と応用について理解し、自らの研究の方法論として使いこなせるようになることを目標とする。

安全人間工学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

石田 敏郎

授業概要

A（春学期）
安全人間工学は、種々のシステムや環境における精神的、身体的作業を行う際の人間の役割、能力および限界を研究し、安全に作業を遂行するための方策を探る研究分野である。最近、新しい技術の発展やシステムの巨大化に伴い、人間のエラーによる事故や不具合が多く発生している。認知科学的なアプローチにより、事故・不具合の原因を探り、人間行動に適合した対策を策定し、提案することを中心に指導する。

B（秋学期）
認知心理学的なヒューマンエラーの考え方と人間工学的な事故分析の方法についての研究指導を行い、そこから導き出されるヒューマンエラー防止対策について検討する。また、実験的手法により人間の安全行動を評価する方法論を同時に指導し、科学論文を作成する際の技法を習得する。現在の主な研究テーマは、事故分析方法の研究開発、自動車運転時の視覚情報処理および事故要因の検討、リスク行動の分析および各種ヒューマン・インターフェイスの人間工学的評価である。

授業の到達目標

- A（春学期）
- （1）安全人間工学的視点の確立と周辺分野との関連の理解。C 6－1
 - （2）論文の作成技法の確立。D 56－1、B 56－1
- B（秋学期）
- （1）ヒューマンエラーの様々な視点の理解と論文への反映。C 6－2
 - （2）論文の作成技法の進化。D 56－1、Aa 6－1

生体情報工学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

百瀬 桂子

授業概要

さまざまな情報メディア・情報機器と人間の関わり合いを、主に生理的側面からとらえて解析し、得られた知見をヒューマンインタフェースの高度化や医療に活用するための研究を行う。主に、ヒトの感覚機能およびその神経情報処理に着目し、それらの機構を客観的にとらえるための技術として、神経モデルのコンピュータシミュレーションや実際の脳活動計測データを利用する。研究テーマとしては、神経モデル解析による脳内情報処理機構の解明、感覚情報処理機構を脳活動によりとらえるための生

体信号処理方式の検討、生理指標によりヒューマンインタフェースを評価する方式の検討、感覚機能診断のための計測方法などが挙げられる。このような研究について、研究計画の立案と実践、論文作成を指導する。

授業の到達目標

- ・個別に設定した研究テーマについて、研究計画を適切に立案して実践し、論文作成を行えるようになる。
- ・研究を進めるうえで必要な知識や技術を見極め、それらを独自に獲得できるようになる。
- ・関連分野の学会などで、研究発表と質疑応答ができるようになる。

感性認知科学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

齋藤 美穂

授業概要

情報化社会におけるバーチャルな空間は各国間の隔たりをますます小さくしている。このような環境において他の文化における感性の違いを知ることはグローバルなマーケティング戦略を展開する為に必要不可欠と考えられる。

日本語の「感性」は今や国際語“Kansei”として認知されつつあるが、感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究手法も多岐にわたる。そこでこの研究指導では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当て、具体的研究として色彩やデザインの認知およびその利用方法、さらにそれらの嗜好に対する文化的差異を切り口とした研究を主たるテーマとして感性を検討し指導する。ノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知や感性的な側面を十分に検討する事は重要なテーマとなる。また特に文化的差異を視野に入れる事は、情報化社会においてこれからますます必要になると考えられる。これらの研究テーマ（具体的には「感性認知科学ゼミ（1）」および「感性認知科学ゼミ（2）」に記載）に沿って吟味された各人の研究について、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね、さらに学会発表や投稿論文に対する助言と指導など、論文に対する直接的な指導を行っていく。

授業の到達目標

具体的研究テーマは、1）色彩やデザインに関する嗜好と認知、2）色彩やデザインが及ぼす心理的效果や生理的效果、3）香りや色、音と色などの感覚協調、4）表情や化粧などの対人認知、5）これらに関連した文化的差異などの研究テーマを主としている。これらに沿って吟味された各人の具体的研究テーマについて、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね修士論文に対する直接的な指導を行っていく。学位論文の提出が目標となるが、その前段階として、学会発表や学会参加（日本色彩学会、日本心理学会、日本感性工学会、国際色彩学会など）の経験および学位論文の基盤となる投稿論文の作成を期待する。このような課程を通して各人が感性認知科学に対する理解を深めることを到達目標とする。

言語情報科学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

菊池 英明

授業概要

情報化社会の進展に伴い音声言語メディアの役割は今後一層重要になる。言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。具体的には、言語学、心理学、認知科学、脳科学といった人間科学の基礎学問を前提としながら、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築していく。主な研究課題は、会話メカニズムの解明、人と機械の対話インタフェース、音声による感情・態度の理解・表出モデル、知的検索エンジンなど。

授業の到達目標

各自の研究テーマに沿って、言語情報科学の関連分野の知識体系を整理しながら、各自が設定した問題の解決をはかる。成果としては言語情報科学研究の一分野の発展に寄与する学術的提案を目標とする。

情報処理心理学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

中島 義明

授業概要

A（春学期）

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究（前段階）する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、プライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題について、博士学位論文の作成に向けた切り出しを行う。これらの研究を進める際には、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけではなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。

B（秋学期）

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究（後段階）する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、プライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題について、博士学位論文の作成に向けた切り出しを行う。これらの研究を進める際には、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけではなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・先行研究を十分に吟味し、博士学位論文で取り上げる研究課題の切り出しをおこなう。（Aa 6－3）
- ・この研究課題を研究していく上での具体的実験計画案の策定を行う。（B56－4）

B（秋学期）

- ・先の実験計画を実践し、データ収集を適切に行う。（Ad56－1）
- ・得られたデータを分析し、その結果に基づき論理的に問題のない論文を作成する。（Ad56－2、B56－1）

心理行動学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

鈴木 晶夫

授業概要

人間を研究する際の視点として、認知的、行動的、生理的側面が考えられ、それぞれを単独に研究することもできるが、その相互作用も重要である。特に、行動的側面と心理的側面との関係、身体と精神の相互作用を中心に、健康、感情、言語的・非言語的情報の機能、人間関係、生活習慣、東洋の思想からの健康観、身体観、positive psychologyなどを考慮した研究をテーマとしたい。これらの背景にある心理学教育についても考えたい。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・専門的知識の説明ができること。
- ・研究方法の理解と適用ができる。
- ・批判的・創造的な論理思考を形成する。
- ・心理行動学の実際応用と理解ができる。

B（秋学期）

- ・研究方法の理解と適用ができる。
- ・批判的・創造的な論理思考を形成する。
- ・心理行動学の実際応用と理解ができる。
- ・心理行動学に関わる価値観を形成する。
- ・学会誌への投稿、学位申請論文を完成する。

知能情報科学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

松居 辰則

授業概要

A（春学期）

「人間の深い知識への科学的アプローチ」をテーマに対して多面的（理論的・技術的・実践的）に研究を行います。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探索し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。まずは研究のテーマを明確にして、それを実現するための適切な対象領域と研究方法論を決めることになります。その後は、ユニークな研究を期待しています。

B（秋学期）

研究指導（D）Aに引き続いて研究指導を行います。「人間の深い知識への科学的アプローチ」をテーマに対して多面的（理論的・技術的・実践的）に研究を行います。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探索し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。まずは研究のテーマを明確にして、それを実現するための適切な対象領域と研究方法論を決めることになります。その後は、ユニークな研究を期待しています。

授業の到達目標

- （1）各自の研究を推進し、博士学位の取得を目指すこと。
 - （2）研究成果は国内外のジャーナルに1年に最低でも1本が掲載されるように成果を上げること。
 - （3）大学院博士後期課程の学生として後輩学生の研究指導補助、若手の研究者として様々な社会活動（学会活動補助、企業との連携事業の推進、実験器材の管理等）も積極的に行えること。
 - （4）研究力のみならず教育力、組織のマネジメント力をバランスよく身に付けた研究者として成長するよう意識すること。
- 【中目標No.】 B56、C5-1、C6、D56、E56、G36

福祉工学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

藤本 浩志

授業概要

修士学位の取得までの課程において身に付けた研究の方法論に加えて、さらに一段成長した研究者として、自立して研究活動に取り組めるための様々な知見や問題解決能力をトレーニングする。

授業の到達目標

- ・問題設定、アプローチの取捨選択、結果のまとめの内のどれを取っても、修士課程と比較して格段に成長し、自立して基本的には独力で、これらが遂行できるようになる。

インストラクショナルデザイン論研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

向後 千春

授業概要

インストラクショナルデザインにおける各自の研究テーマを設定し、研究計画の立案、研究の実施、研究論文の執筆、学会での発表、学会誌への投稿に至るスキルを習得する。これらを積み上げて、最終的には博士論文の作成をする。

授業の到達目標

1. 全国規模の学会の論文誌に投稿できるレベルの研究を立案、実施するスキルを身につける
2. 研究論文原稿の執筆と学会での発表をするスキルを身につける
3. 学会誌への投稿論文を執筆するスキルを身につける

学習環境デザイン論研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

尾澤 重知

授業概要

「学習環境デザイン」は、人材育成や教育研修などの実践的活動において、創造的な「学びの場」をデザインし、学習の支援や活動の評価を目指す試みである。本ゼミでは、国内外の大学教育、企業内人材育成、企業内大学の先進事例を踏まえつつ、知識科学や学習科学、教育工学の知見に基づき学習支援のあり方や、学習支援の方法、ツールについて先導的な研究開発を行う。

授業の到達目標

- （1）様々な専門性をつないで「インタープロフェッション」を推進する知識や技能を身につけている。（E）
- （2）人間の事象を複眼的な視点から捉え、そこに解決すべき課題を発見することができる。（C）
- （3）課題探究（フィールドや実験）プロジェクトをマネジメントすることができる。（D）

教育開発論研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

野嶋 栄一郎

授業概要

教員、学生双方による各自の最新の研究成果の報告とそれに関わる質疑応答。並びに学位論文完成に向けてのモニタリング。主な研究課題は、1）教授＝学習過程における測定・評価の研究、2）新しい学校モデルとその評価研究、3）インターネット利用による日米の異文化間交流カリキュラムの実践と評価、4）映像情報の処理過程と認知研究、5）授業のデジタルアーカイブの開発とそれを利用した授業モデルの開発・評価。

Keywords：教育測定、教育評価、教授＝学習過程、新しい学校モデル、インターカルチュラルコミュニケーション、認知過程、カリキュラム、アクションリサーチ、授業アーカイブ、遠隔教育

授業の到達目標

- ・学位論文（博士課程）の完成。

教育情報学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

永岡 慶三

授業概要

A（春学期）

修士課程での教育情報学研究の発展として、特定研究領域の研究動向の把握、学術論文や報告書の肯定的・批判的解釈のしかた、独創的な課題設定や問題発見・解決の方法論について指導する。さらに研究費管理、後輩指導、研究遂行上の関係者とのコラボレーションの実践について具体的な行動目標を設定してシミュレーション形式の指導を行う。

B（秋学期）

研究成果をまとめ、実際に査読制度の整備された日本教育工学会、教育システム情報学会、電子情報通信学会（教育工学研究会）などの国内学会あるいは国際学会への学術論文投稿を目標とする指導を行う。

授業の到達目標

A（春学期）

- ・学術論文や報告書の肯定的・批判的解釈ができる。
- ・独創的な課題設定や問題発見・解決の方法論について提案できる。

B（秋学期）

- ・国内学会への学術論文投稿ができる。
- ・国際学会への学術論文投稿ができる。

情報コミュニケーション科学研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

金子 孝夫

授業概要

音声、画像、データなどのマルチメディアによる情報コミュニケーション科学の研究手法について、実験と研究動向の調査などの研究指導を行う。具体的には、デジタル情報処理、デジタルデータ伝送、コンピュータによるデータ入出力、ヒューマンインタフェースなどの情報コミュニケーション科学研究のための技術を調査研究の対象とする。

授業の到達目標

- ・本研究指導によって、博士論文を執筆できるようになる。

情報メディア教育論研究指導（D） A（春学期）・B（秋学期）

森田 裕介

授業概要

教育工学を専門とする研究者に必要な能力、技能、資質を育成する。まず、教育現場における問題の所在を明らかにするとともに、解決するための方法を提案できるよう指導を行う。次に、データ分析の技能について指導を行う。同時に、コンピュータやネットワーク等の情報機器に関する基礎的な技能についても指導を行う。また、研究論文として成果をまとめ、学会論文誌や国際学会等における成果公表を支援する。

授業の到達目標

本講義の到達目標は、（1）問題の所在を明らかにし、解決方法を提案することができる、（2）質的・量的なデータの分析をすることができる、（3）研究成果を論文としてまとめ、学会論文誌や国際学会等において成果公表することができる、の3点である。

授業概要

A（春学期）

ユビキタス技術の発展に伴い、情報システムは益々多様化、大規模化の様相を呈し、様々なレベルでの情報融合、サイバー空間と実社会の統合が進んでいる。そこで、ネットワーク情報システムはとくに人間の知的活動とのつながりが深いことから、情報・ネットワーク・情報システムに関する科学を学際的観点からとらえ、人間とネットワーク情報システムとの関わり合い・調和を重視した総合的かつ体系的な設計・構築・評価方法論を探究する研究指導を行う。

B（秋学期）

ユビキタス技術の発展に伴い、情報システムは益々多様化、大規模化の様相を呈し、様々なレベルでの情報融合、サイバー空間と実社会の統合が進んでいる。そこで、技術の進展に対応できる柔軟性や突発的な障害に対する高信頼性など、より広い視野からネットワーク情報システムを見通した基礎的研究、ならびに、安全・安心で持続的利用可能な統合情報環境を提供するための情報基盤システムの一層の高度化をめざした理論と応用の両面にわたる研究指導を行う。

授業の到達目標

- ・ネットワーク情報システム学関連専門分野における深い学識と思考力をもち、研究分野を横断する学際的視点に立って、新しい学問の芽を育てることができるような、創造性の豊かな研究者を育成する。

XVII 全学共通設置科目の概要

次の科目は、全学共通設置科目として全大学院学生を対象に設置されている。

聴講を希望する場合は、所沢総合事務センターで交付する聴講願を使用し、所定の方法によって申請をすること。なお、聴講するには指導教員の承認が必要となり、事前に申請書に指導教員の押印が必要となる。

修得した単位は、他箇所聴講科目と合わせて10単位を限度に修了に必要な単位に算入することができる。

(1) 講義科目(オープン教育センター設置科目)

科目名	教員	学期	曜日時限	単位
学術的文章の作成とその指導 01	太田 裕子	春学期	木4時限	2
学術的文章の作成とその指導 02	佐渡島 紗織	春学期	木3時限	2
学術的文章の作成とその指導 03	太田 裕子	秋学期	木3時限	2
研究倫理概論(大学院用)	土田 友章 他	秋学期	無フルOD	2
質的研究方法入門 01	太田 裕子	春学期	木2時限	2
質的研究方法入門 02	太田 裕子	秋学期	木2時限	2
地域研究としての台湾	若林 正丈 他	春学期	火2時限	2
CSRマネジメント実践 01	朝日 透	春学期	無その他	2
CSRマネジメント実践 02	朝日 透	秋学期	無その他	2
大川ドリーム基金寄附講座 政治を学び合う	田所 昌幸 他	秋学期	木6-7	2
実践的国際金融論 (大学院用)	熊谷 善彰 他	秋学期	月4時限	2

(2) 大学院テーマカレッジ演習科目(オープン教育センター設置科目)

○演劇と映像(演習)

科目名	教員	学期	曜日時限	単位
日本の伝統演劇論(入門)	三宅 晶子	春学期	月5時限	2
日本の伝統演劇論(発展)	三宅 晶子	秋学期	月5時限	2
現代演劇と多文化主義(入門)	東 晴美	春学期	火2時限	2
現代演劇と多文化主義(発展)	東 晴美	秋学期	火2時限	2
演劇とその周辺(入門)	八木 斉子	春学期	月2時限	2
演劇とその周辺(発展)	八木 斉子	秋学期	月2時限	2
シェイクスピアと映像	本山 哲人	秋学期	木5時限	2
ドイツ演劇と映像	中村 采女	秋学期	火4時限	2

○アジア学のための名著を読む(演習)

科目名	教員	学期	曜日時限	単位
日本列島の日常史(後編)	高木 徳郎	秋学期	月5時限	2
信仰と思想(前編)	森 由利亜	春学期	金3時限	2
民族と人類(前編)	城倉 正祥	春学期	月4時限	2
民族と人類(後編)	工藤 元男	秋学期	月3時限	2

○EU・欧州統合研究(大学院)(演習)

科目名	教員	学期	曜日時限	単位
EU国際公共政策の研究	福田 耕治	秋学期	火4時限	2
The Politics and International Relations of the European Union	ベーコン ポール・マルティン	秋学期	金5時限	2
The Political System of the EU	舒 旻	秋学期	水2時限	2
Contemporary Issues in European Integration	中村 英俊	夏季集中	無その他	2
欧州統合理論の研究	中村 英俊	秋学期	火3時限	2
Comparative Regionalism	ベーコン ポール・マルティン	秋学期	月3時限	2

各科目の内容等の詳細についてはWebシラバスとオープン教育センターのホームページ(http://open-waseda.jp/g_school/syllabus/)を確認してください。曜日・時限等も変更となることもありますので、併せて確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
学術的文章の作成とその指導 01	太田 裕子	春学期	2	木4時限

■ 副題：

アカデミック・ライティング指導者を目指して

■ 授業概要

■ 早稲田大学基盤教育の一環

日本の大学（院）では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して大学院生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。さらに、本授業で身に付けた態度と技能を、学部生のライティング指導に活かすことをお願いしています。

■ 目的

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。本授業では、早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおいて、学部生向け授業の指導補助に携わるための応募資格レベル到達を目指します。

※履修後に学部生向け授業の指導補助に携わる気持ちのない方は、履修しないでください。

■ 演習→個人課題→ピア・レスポンス

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

■ 授業の到達目標

■ 指導者を目指す

本授業では、自分の修士論文・博士論文の準備という目的に加えて、早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおいて、学部生向け授業の指導補助に携わるための応募資格レベル到達を目指します。（学部生指導補助の詳細については、ウェブサイト「早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラム」をご覧ください。）

大学教員を目指す博士後期課程の学生、および、博士後期課程に進学する意思のある修士課程の学生に履修を勧めます。大学院在籍中に、指導員として学部生の文章指導に携わる経験は、将来大学生を指導する上で貴重だからです。

本授業を履修後に、指導員の資格を教員から与えられた履修者は、科目登録時に申告した期間は、必ず指導員として勤務してください。履修後に学部生向け授業の指導補助に携わる気持ちのない方は、履修しないでください。

■ 指導補助に携わるには

本授業で、欠席が2回以下で、文章力と指導力において指導に携わるレベルに到達したと授業者が判断した人は、次学期より学部生のライティング指導に携わることができます。毎学期、たいへん多くの履修希望

者があるため、登録時に提出してもらう文章による文章力判定と、勤務できる年数によって、履修者の決定を行います。

■登録時に提出する文書

ウェブ登録時に、「志望理由」の欄に、以下3点を記入すること。

1. 修士または博士の研究計画を1000字に書き直した文章。

単なる箇条書きでは文章判定ができませんので、記述してください。

2. 指導に携わることを希望する動機を300字程度で。

研究科や教授からの推薦を受けている場合には、必ずその旨を明記してください。

3. 指導についての場合、何学期間勤務できるか。

ここで申告した期間を実際に勤務していただきます。正直に記入してください。

■成績評価方法

試験割合%

レポート割合%

平常点評価割合%

その他割合%

■授業計画

- 1) ガイダンス、外来語や専門用語を扱う

- 2) ことばと思考、「一文一義」で書く

- 3) 接続表現で文と文との関係を自覚する

- 4) 語句を明確に使う

- 5) 主張を記す

オンディマンド授業1 論文の構成

- 6) 「マップ」を作って書く、問いを立てる

- 7) 全体を構成する

- 8) 論点を整理する

- 9) 抽象度の調節をする

オンディマンド授業2 論点を整理する

- 10) 「パラグラフ」を作る

- 11) 参考文献を示す

- 12) 「ブロック引用」をする

- 13) 要約引用をする

- 14) 図や表を作る、読者を案内する

- 15) 題名を付ける

毎回、800字から1000字の文章を書く課題が課せられます。

課題は、翌月曜日14:00までにコースナビで提出し、翌週の授業でフィードバックされます。

■教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子(2008)『これから研究を書くひとのためのガイドブッカーライティングの挑戦15週間』ひつじ書房(2,000円+税)

宇佐美寛編著(1989)『作文の論理―[分かる文章]の仕組み』東信堂(1900円+税)

■ 参考文献

■ 備考・関連 URL

第1回の講義は4月11日（木）です。この日から講義を始めますので、必ず出席してください。

（オープン教育センターの科目登録結果発表よりも前に授業が始まります。）

関連 URL:

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

「学術的文章の作成」授業ページ

<http://www.cie-waseda.jp/awp/jp/od/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
学術的文章の作成とその指導 02	佐渡島 紗織	春学期	2	木3時限

■ 副題:

アカデミック・ライティング指導者を目指して

■ 授業概要

■ 早稲田大学基盤教育の一環

日本の大学（院）では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して大学院生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。さらに、本授業で身に付けた態度と技能を、学部生のライティング指導に活かすことをお願いしています。

■ 目的

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。本授業の成績優秀者は、学内身分「教育補助」で、＜「学術的文章の作成」授業の指導者＞及び＜ライティング・センターのチューター＞に応募する資格を得ます。とりわけ、大学教員になることを目指している博士課程の院生に本授業を勧めます。大学教員は、専門分野に関わらず、自身が論文を書き、また卒業論文・修士論文・博士論文の指導にあたるからです。人文系、社会科学系、理工学系、いずれの分野の院生も歓迎します。

■ 演習→個人課題→ピア・レスポンス

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

※第一回の講義は4月11日（木）に開始します。毎年、履修希望者がたいへん多いので、第一回の講義に欠

席した人は、履修する権利を失います。注意してください。

■ 授業の到達目標

■ 指導者を目指すクラス

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章力養成」クラスと「指導力養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業（「指導力養成」クラス）では、自分の修士論文・博士論文の準備という目的に加えて、早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおいて、学部生向け授業の指導補助に携わるための応募資格レベル到達を目指します。（学部生指導補助の詳細については、ウェブサイト「早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラム」をご覧ください。）履修後に学部生向け授業の指導補助に携わる気持ちのない方は、履修を遠慮してください。

■ 指導補助に携わるには

本授業で、欠席が2回以下で、文章力と指導力において指導に携わるレベルに到達したと授業者が判断した人は、次学期より学部生のライティング指導に携わることができます。毎学期、たいへん多くの履修希望者があるため、登録時に提出してもらう文章による文章力判定と、勤務できる年数によって、履修者の決定を行います。提出する文書は、本シラバス下段「備考」に沿って作成してください。

■ 「文章力養成」クラスとの併願

人数制限により「指導者養成」クラスでは選外になった場合でも「文章力養成」クラスで履修したい人は、《その双方に登録》しておいてください。「指導者養成」クラスで選外になった場合、予め「文章力養成」クラスへの登録がなければ、どちらのクラスも履修できなくなります。

また、指導者を目指すが、ゼミと重なったなどの理由により本授業を履修できない人は、「文章力養成」クラスから指導員の資格を得ることもできます。その場合は、「文章力養成」クラスに登録し、「志望理由」にその旨明記してください。

■ 成績評価方法

試験割合 0%……試験は行いません。

レポート割合 85%……授業中に学習した技能を使って短い文章を作成する課題が毎週出されます。

平常点評価割合 15%……出席を重視します。討論や他の学生の文章への助言など、クラスへの貢献度を評価します。

その他割合 0%……授業修了後に、指導員やチューターとして応募資格を得たかどうかを判定します。

■ 授業計画

〔第1回〕 外来語と専門用語を扱う

〔第2回〕 言葉と思考、「一文一義」で書く

〔第3回〕 接続表現で文と文をつなげる

〔第4回〕 語句を明確に使う

〔第5回〕 「マップ」を作って書く

〔第6回〕 主張と主張の位置

〔第7回〕 論点を整理する

〔第8回〕 抽象度の調節をする

〔第9回〕 「パラグラフ」を作る

〔第10回〕 参考文献を示す

〔第11回〕 「ブロック引用」をする

〔第12回〕要約引用をする

〔第13回〕図や表を作る

〔第14回〕「私語り」から脱出する

〔第15回〕題名をつける

毎回、800字から1000字の文章を書く課題が課せられます。

課題は、授業日から4日目までにコースナビで提出し、翌週の授業でフィードバックされます。

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦 15 週間』
(ひつじ書房、2008) 2,000 円＋税

宇佐美寛編著『作文の論理—「わかる文章」の仕組み』（東信堂、1998）1,900 円＋税

■ 参考文献

プリント配布。

■ 備考・関連 URL

第1回の講義は4月11日（木）です。この日から講義を始めますので、必ず出席してください。

（オープン教育センターの科目登録結果発表よりも前に授業が始まります。）

関連 URL:

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

「学術的文章の作成」授業ページ

<http://www.cie-waseda.jp/awp/jp/od/>

**※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)**

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
学術的文章の作成とその指導 03	太田 裕子	秋学期	2	木3時限

■ 副題:

アカデミック・ライティング指導者を目指して

■ 授業概要

■ 早稲田大学基盤教育の一環

日本の大学（院）では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して大学院生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。さらに、本授業で身に付けた態度と技能を、学部生のライティング指導に活かすことをお願いしています。

■ 目的

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。本授業では、早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおいて、学部生向け授業の指導補助に携わるための応募資格レベル到達を目指します。

※履修後に学部生向け授業の指導補助に携わる気持ちのない方は、履修しないでください。

■ 演習→個人課題→ピア・レスポンス

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

■ 授業の到達目標

■ 指導者を目指す

本授業では、自分の修士論文・博士論文の準備という目的に加えて、早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおいて、学部生向け授業の指導補助に携わるための応募資格レベル到達を目指します。(学部生指導補助の詳細については、ウェブサイト「早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラム」をご覧ください。)

大学教員を目指す博士後期課程の学生、および、博士後期課程に進学する意思のある修士課程の学生に履修を勧めます。大学院在籍中に、指導員として学部生の文章指導に携わる経験は、将来大学生を指導する上で貴重だからです。

本授業を履修後に、指導員の資格を教員から与えられた履修者は、科目登録時に申告した期間は、必ず指導員として勤務してください。履修後に学部生向け授業の指導補助に携わる気持ちのない方は、履修しないでください。

■ 指導補助に携わるには

本授業で、欠席が2回以下で、文章力と指導力において指導に携わるレベルに到達したと授業者が判断した人は、次学期より学部生のライティング指導に携わることができます。毎学期、たいへん多くの履修希望者があるため、登録時に提出してもらう文章による文章力判定と、勤務できる年数によって、履修者の決定を行います。

■ 登録時に提出する文書

ウェブ登録時に、「志望理由」の欄に、以下3点を記入すること。

1. 修士または博士の研究計画を1000字に書き直した文章。

単なる箇条書きでは文章判定ができませんので、記述してください。

2. 指導に携わることを希望する動機を300字程度で。

研究科や教授からの推薦を受けている場合には、必ずその旨を明記してください。

3. 指導についての場合、何学期間勤務できるか。

ここで申告した期間を実際に勤務していただきます。正直に記入してください。

■ 成績評価方法

試験割合%

レポート割合%

平常点評価割合%

その他割合%

■ 授業計画

- 1) ガイダンス、外来語や専門用語を扱う
- 2) ことばと思考、「一文一義」で書く
- 3) 接続表現で文と文との関係を自覚する
- 4) 語句を明確に使う
- 5) 主張を記す

オンディマンド授業1 論文の構成

- 6) 「マップ」を作って書く、問いを立てる
- 7) 全体を構成する
- 8) 論点を整理する
- 9) 抽象度の調節をする

オンディマンド授業2 論点を整理する

- 10) 「パラグラフ」を作る
- 11) 参考文献を示す
- 12) 「ブロック引用」をする
- 13) 要約引用をする
- 14) 図や表を作る、読者を案内する
- 15) 題名を付ける

毎回、800字から1000字の文章を書く課題が課せられます。

課題は、翌月曜日14:00までにコースナビで提出し、翌週の授業でフィードバックされます。

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子(2008)『これから研究を書くひとのためのガイドブッカーライティングの挑戦15週間』ひつじ書房(2,000円＋税)

宇佐美寛編著(1989)『作文の論理―[分かる文章]の仕組み』東信堂(1900円＋税)

■ 参考文献

■ 備考・関連URL

第1回の講義は9月26日(木)です。この日から講義を始めますので、必ず出席してください。

(オープン教育センターの科目登録結果発表よりも前に授業が始まります。)

関連URL:

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

「学術的文章の作成」授業ページ

<http://www.cie-waseda.jp/awp/jp/od/>

**※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)**

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
研究倫理概論（大学院用）	土田 友章 浦川 道太郎 大塚 英明 嶋田 洋徳 高林 龍 深澤 良彰 福田 耕治 横野 恵	秋学期	2	無フルオンデ マンド

■ 副題：

ー研究者を目指す人々へー

■ 授業概要

最近、研究活動における、データ捏造や盗用等の不正行為が相次いで明らかになっています。論文作成・発表、共同研究等の研究活動を遂行するうえで、予め知っておくべき研究倫理について、研究計画のあり方から知的財産権、被験者保護等の基本的事項をはじめ利益相反、企業倫理、更には研究ノートとデータ管理、安全保障等に関する事項について、学内外の専門の先生方により、具体的な事例を多く交えながらオンデマンド形式でお伝えします。

■ 授業の到達目標

文系理系を問わず今後研究に従事する多くの学生が、研究倫理に関する理解を深め、研究者として地球市民として世界に参加してゆく態度を整えることを期待します。

■ 成績評価方法

試験割合％

レポート割合％

平常点評価割合％

その他割合％

■ 授業計画

【序論 なぜ研究の倫理か 現代世界における科学技術研究】

1. はじめに なぜ研究倫理か

2. EU/欧米諸国における研究倫理

3. 研究における不正行為：FFP（ねつ造・改ざん・盗用）の実際

4. 研究における不正行為と法

【研究の計画】

5. 研究計画のあり方

6. 被験者保護の基本（１）（ヒトゲノム、ES細胞を含む）

7. 被験者保護の基本（２）（動物実験を含む）

8. 心理学と研究倫理

9. 研究と利益相反

【研究の遂行】

10. 研究ノートとデータ管理の実践

11. メンターとトレイニー、Authorship と出版の倫理、共同研究

【研究の成果】

12. 知的財産権をめぐって

13. 企業と研究倫理

14. 安全保障の観点から見た科学技術者の社会的責任

15. 研究倫理の実践：早稲田大学の体制・終わりに

■ 教科書

■ 参考文献

■ 備考・関連 URL

http://www.waseda.jp/rps/ore/jpn/subject/student_introduction.html

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
質的研究方法入門 01	太田 裕子	春学期	2	木 2 時限

■ 副題：

■ 授業概要

質的研究方法を用いた研究を行い、人文社会科学系の学術論文を作成する際必要となる基本的な考え方や研究手法を学ぶことを、本授業の目的とする。

質的研究方法は、実証研究における領域のひとつで、「具体的な事例を重視して、それを時間的、地域的な特殊性の中で捉えようとし、また人々自身の表現や行為を立脚点として、それを人々が生きている地域的な文脈と結びつけて理解しようとする」（フリック，2002，p. 19）点がその特徴である。大がかりな質問紙調査や実験によって収集したデータを統計処理する数量的研究方法に対し、質的研究方法は、観察、インタビュー、映像分析などの手法を単独または複数組み合わせることによって、現象を捉えようとする。

どのような手法を用いてデータを収集し分析するかは、研究者の立場や研究の問いによって決定づけられる。そのため、本授業では、質的研究方法の理論的背景を理解したうえで、受講者が自分の研究の立場や問いに適した研究方法を見つけることを目指す。本授業では、特に観察とインタビューを取り上げ、それらの種類と方法を学ぶ。

受講者は、実際に観察やインタビューを用いた研究を行い、小型の学術論文を作成する（最終レポート）。そのために、毎週、論文の一部を書く課題や、論文を書くために必要な作業を行う課題が出される（課題レポート）。授業では、講義と演習を行う。演習には、受講者同士が互いのレポートやデータを検討し、助言し合う活動が含まれる。また、学期の最後には、互いの最終レポートを評価しあう活動も行う（相互評価）。よって、受講者には、積極的な参加を期待する。

■ 授業の到達目標

本授業は、次の三点をねらいとする。

- 1) 質的研究方法の理論的背景、および観察とインタビューの種類と方法を理解する。
- 2) 質的研究法の強みと弱み、倫理的問題を理解する。

3) 観察、インタビューの手法を用いた研究をデザインし、実施することができる。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 80%

平常点評価割合 15%

その他割合 5%

■ 授業計画

- [第1回] 質的研究方法の特徴と種類／論文を読む (1)
- [第2回] 研究の立場と研究方法の関係／論文を読む (2)
- [第3回] 研究の問いと研究方法の関係／序章を書く
- [第4回] 理論的枠組と文献レビュー / 先行研究章を書く
- [第5回] インタビューの種類と方法 / インタビュー結果を報告する
- [第6回] 観察の種類と方法 / フィールドノーツを書く
- [第7回] 研究対象へのアクセス、関係性、倫理的問題／研究方法章を書く
- [第8回] データの収集と調査過程の振り返り
- [第9回] データを分析する (1)
- [第10回] データを分析する (2)
- [第11回] 調査結果を記述する
- [第12回] 考察と結論の章を書く
- [第13回] 論文を評価する
- [第14回] 論文の発表と討論
- [第15回] 論文の発表と討論

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子 (2008) 『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦 15 週間』 ひつじ書房

メリアム, S.B. (Merriam, S. B.) (2004) 『質的研究方法入門—教育における調査法とケース・スタディー』 (堀薫夫・成島美弥訳) ミネルヴァ書房 (原著は 1998)

■ 参考文献

ガーゲン, K. J. (Gergen, K. J.) (2004) 『あなたへの社会構成主義』 ナカニシヤ出版 (原著は 1999)

桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』 せりか書房

佐藤郁哉 (2002) 『フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる』 新曜社

フリック, ウヴェ (Flick, U.) (2002) 『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』

(小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳) 春秋社 (原著は 1995)

Crotty, M. (1998). The foundations of social research: Meaning and perspective
in the research process. Crows Nest: Allen & Unwin.

■ 備考・関連 URL

本授業は、初めて質的研究方法を学ぶ修士課程の学生を主な対象とする。所属する研究科で研究方法に関する授業が設置されている場合には、そちらを受講されたい。

また、本授業は、フィードバックの都合上、受講者を 20 名までとさせていただきます。そのため、履修希望者が定員を超

える場合には、書類選考を行う。履修希望者は、「志望理由」の欄に、(1)この授業の履修を希望する理由、(2)修士論文のテーマと研究方法を記入すること。('志望理由'欄が空欄の場合は選外となります。)

初回授業は4月11日(木)です。必ず出席してください。

(オープン教育センターの科目登録結果発表よりも前に授業が始まります。)

関連 URL:

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
質的研究方法入門 02	太田 裕子	秋学期	2	木 2 時限

■ 副題:

■ 授業概要

質的研究方法を用いた研究を行い、人文社会科学系の学術論文を作成する際必要となる基本的な考え方や研究手法を学ぶことを、本授業の目的とする。

質的研究方法は、実証研究における領域のひとつで、「具体的な事例を重視して、それを時間的、地域的な特殊性の中で捉えようとし、また人々自身の表現や行為を立脚点として、それを人々が生きている地域的な文脈と結びつけて理解しようとする」(フリック, 2002, p. 19)点がその特徴である。大がかりな質問紙調査や実験によって収集したデータを統計処理する数量的研究方法に対し、質的研究方法は、観察、インタビュー、映像分析などの手法を単独または複数組み合わせることによって、現象を捉えようとする。

どのような手法を用いてデータを収集し分析するかは、研究者の立場や研究の問いによって決定づけられる。そのため、本授業では、質的研究方法の理論的背景を理解したうえで、受講者が自分の研究の立場や問いに適した研究方法を見つけることを目指す。本授業では、特に観察とインタビューを取り上げ、それらの種類と方法を学ぶ。

受講者は、実際に観察やインタビューを用いた研究を行い、小型の学術論文を作成する(最終レポート)。そのために、毎週、論文の一部を書く課題や、論文を書くために必要な作業を行う課題が出される(課題レポート)。授業では、講義と演習を行う。演習には、受講者同士が互いのレポートやデータを検討し、助言し合う活動が含まれる。また、学期の最後には、互いの最終レポートを評価しあう活動も行う(相互評価)。よって、受講者には、積極的な参加を期待する。

■ 授業の到達目標

本授業は、次の三点をねらいとする。

- 1) 質的研究方法の理論的背景、および観察とインタビューの種類と方法を理解する。
- 2) 質的研究法の強みと弱み、倫理的問題を理解する。
- 3) 観察、インタビューの手法を用いた研究をデザインし、実施することができる。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 80%

平常点評価割合 15%

その他割合 5%

■ 授業計画

- [第1回] 質的研究方法の特徴と種類／論文を読む (1)
- [第2回] 研究の立場と研究方法の関係／論文を読む (2)
- [第3回] 研究の問いと研究方法の関係／序章を書く
- [第4回] 理論的枠組と文献レビュー / 先行研究章を書く
- [第5回] インタビューの種類と方法 / インタビュー結果を報告する
- [第6回] 観察の種類と方法 / フィールドノーツを書く
- [第7回] 研究対象へのアクセス、関係性、倫理的問題／研究方法章を書く
- [第8回] データの収集と調査過程の振り返り
- [第9回] データを分析する (1)
- [第10回] データを分析する (2)
- [第11回] 調査結果を記述する
- [第12回] 考察と結論の章を書く
- [第13回] 論文を評価する
- [第14回] 論文の発表と討論
- [第15回] 論文の発表と討論

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子 (2008) 『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦 15 週間』 ひつじ書房

メリアム, S.B. (Merriam, S. B.) (2004) 『質的研究方法入門—教育における調査法とケース・スタディー』 (堀薫夫・成島美弥訳) ミネルヴァ書房 (原著は 1998)

■ 参考文献

ガーゲン, K. J. (Gergen, K. J.) (2004) 『あなたへの社会構成主義』 ナカニシヤ出版 (原著は 1999)

桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』 セリカ書房

佐藤郁哉 (2002) 『フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる』 新曜社

フリック, ウヴェ (Flick, U.) (2002) 『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』 (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳) 春秋社 (原著は 1995)

Crotty, M. (1998). The foundations of social research: Meaning and perspective in the research process. Crows Nest: Allen & Unwin.

■ 備考・関連 URL

本授業は、初めて質的研究方法を学ぶ修士課程の学生を主な対象とする。所属する研究科で研究方法に関する授業が設置されている場合には、そちらを受講されたい。

また、本授業は、フィードバックの都合上、受講者を 20 名までとさせていただきます。そのため、履修希望者が定員を超える場合には、書類選考を行う。履修希望者は、「志望理由」の欄に、(1)この授業の履修を希望する理由、(2)修士論文のテーマと研究方法を記入すること。(「志望理由」欄が空欄の場合は選外となります。)

初回授業は 4 月 11 日 (木) です。必ず出席してください。

(オープン教育センターの科目登録結果発表よりも前に授業が始まります。)

関連 URL:

「志望理由」入力方法

<http://open-waseda.jp/gakubu/regist/gaiyo1/regist.php>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
地域研究としての台湾	若林 正丈 梅森 直之 小島 宏 春山 明哲	春学期	2	火 2 時限

■ 副題：

■ 授業概要

現在の台湾を、どのように理解すればよいか。また、これからの台湾の行方はいかなるものか。台湾を的確に捉えるには、どうすればよいのだろうか。本講義では、歴史的な見方を中心としつつ、台湾を様々な角度から検討し、地域研究としての台湾の可能性を考える。また、こうした新しい台湾研究のあり方を模索することによって、既存の比較政治学、比較歴史研究、東アジア研究などに関しても、新たな視点を提供したい。

本講義は、オムニバス形式の講義であり、政治学、歴史学、社会学、地域研究、先住民族研究などを専門とする、複数の教員が担当する。それぞれ専門分野から台湾研究の現状、可能性等について、受講生とともに文献・資料等を通じて検討し議論を行う。

■ 授業の到達目標

台湾という地域への幾つかのディシプリンからのアプローチの概要と特質を理解し、受講者それぞれの関心地域の研究への切り口を鍛える。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 40%

平常点評価割合 50%

その他割合 10%

■ 授業計画

第1回 イントロダクション：地域研究としての台湾研究

- ・地域研究とは何かについての一つの見方を提示し、本講義の導入とする。
- ・なお、以下2～14回の内容や順番は、場合によって変更の可能性がある。

第2回 日本における台湾研究の歴史

- ・日本における台湾研究、特に近代史研究の流れを紹介し、第3～7回部分の導入とする。

第3～7回 人物から見た近代日本と台湾

- ・日本の台湾植民地統治史に関わる歴史史料（日本文、活字化されたもの）を実際に読みながら、日本近代史と台湾史の関わりを人物の点から考えていく。後藤新平、原敬、岡松参太郎、新渡戸稲造、矢内原忠雄、井上

伊之助などを取り上げる予定。

第8～9回 台湾思想の可能性

・現代台湾において大きな影響力を持つ多文化主義など、ユニークな政治思想を取り上げ、その歴史的背景について考察する。

第10～11回 比較の中の台湾社会

・現代台湾とその他の社会の幾つかの社会指標を比較対比する方法で、現代台湾社会のありかたの特質を考察する。

第12～13回 地域研究としての先住民族研究

・台湾には、かつて「高砂族」、今日「台湾原住民族」と称される先住民族が漢族に移住以前から居住して、台湾社会に存在感を示している。外部からの移住者・統治者との関連を踏まえながら、先住民族の存在から台湾という地域を考える。

第14回 台湾研究という学知

・「台湾研究」をひとまとめの「学知」ととらえて、その上で、近現代の日本と台湾の知的からみあいを考える。

第15回 レビュー

・講義全体を振り返り、まとめを行う。

■ 教科書

特定の教科書は設けない。

■ 参考文献

下記の文献の他、講義中にも適宜紹介する。

＊＜とりあえず台湾史に親しむため＞周婉窈（濱島敦俊監訳）『図説 台湾の歴史』平凡社、2007年

＊＜第10, 11回関係＞岩井紀子・保田時男編『データで見る東アジアの家族観——東アジア社会調査による日韓中台の比較——』ナカニシヤ出版、2009年

＊＜第3-7回関係＞春山明哲『近代日本と台湾 霧社事件・植民地統治政策の研究』藤原書店、2008年
備考・関連URL

講義に関する事柄について、Course N@vi を通じてメール連絡することもありえるので、注意すること。

関連URL:

<http://www.soc.nii.ac.jp/jats/index.shtml> （日本台湾学会のサイト。『日本台湾学会報』の論文がPDFファイルで閲覧できるほか、「戦後日本台湾研究関連文献目録」へのアクセス、学会大会・定例研究会などの情報に接することができる）

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
大川ドリーム基金寄附講座 政治を学び合う	田所 昌幸 田中 愛治 村田 信之	秋学期	2	木6時限～7時限

■ 副題：

明日の日本を、世界をリードする人材の育成を目指して

■ 授業概要

今日の日本の政治状況は危機的な状況に直面している。それは様々な要因があろうが、最大の要因は政治家の質の低下、政治家が大きなビジョンを持たずに目先の自己利益を追うことを優先してきたからであるといえよう。この状況を打破する必要性を強く感じている大学院生を中心とする学生が、今後の日本の政治を変えていく可能性をもち、政策にも精通した若手政治家と討論することを通して、今後の日本を変えていく手がかりを学び取ってくれることを期待して、本講座を設置することとした。そのために、寄付講座として大川ドリーム基金からのご寄付を基にこの寄付講座を設置し、東京大学ならびに慶應大学の法学政治学研究科の大学院生にはオープンにし、3大学の学生の交流も図る。

ゲスト・スピーカーである若手政治家にはあらかじめ参考文献を提示しておいていただき、担当教員も院生もそれを読んできて、授業に出席する。隔週で木曜日の6限に最初30分はゲスト・スピーカーがレクチャーをし、その後60分は単なる質疑応答以上の踏み込んだ意見交換を行い、議論を深める。7限はゲスト・スピーカーのご都合でお帰りいただいた場合は、教員と院生とで更に議論を深め、また学術的に専門の見地からその日のテーマについて深く学ぶことを目指す。履修者は、毎回授業後にレビューシートにコメントを書き、記録として残す。また、学期の中で学生にはテーマごとに4～5班に分かれて班(グループ)ごとに研究報告を学期末に行う。

■ 授業の到達目標

履修する院生は、現在の日本が世界で置かれている立場を理解し、自分が感心を強く持っている分野に関しては、専門的な視点から政策についての提言を行えるか、または制度設計を提案できる様に、自らを鍛えあげることを、この寄付講座科目の到達目標としたい。長期的な視点からの究極の到達目標は、本講座への参加学生が政治家になろうと、もしくは他の職業に就こうと、将来は人類に貢献するグローバル・リーダーとして、日本ならびに世界を牽引していく人材に育つことである。

■ 成績評価方法

試験割合%

レポート割合%

平常点評価割合%

その他割合%

■ 授業計画

授業回数は15回であるが、2013年度後期に、隔週で2時限ずつ実施する。

- ・第1回目は、本講座の設置の趣旨と目的について説明し、授業概要を示す。また、学生の自己紹介を行い、各自がどのような狙いで本講座を履修しに来ているのかをお互いに理解し、その後の講義につなげる。
- ・2週間後に第2回目(6限目)・第3回目(7限目)の授業を行う。第2回目(6限)は、ゲストの若手政治家のレクチャーと討論となる。
- ・2週間後に第4回目(6限目)・第5回目(7限目)の授業を行う。第4回目(6限)は、ゲストの若手政治家のレクチャーと討論となる。
- ・2週間後に第6回目(6限目)・第7回目(7限目)の授業を行う。第6回目(6限)は、ゲストの若手政治家のレクチャーと討論となる。

・2週間後に第8回目(6限目)・第9回目(7限目)の授業を行う。第8回目(6限)は、ゲストの若手政治家のレクチャーと討論となる。

・2週間後に第10回目(6限目)・第11回目(7限目)の授業を行う。第10回目(6限)は、ゲストの若手政治家のレクチャーと討論となる。

・2週間後に第12回目(6限目)・第13回目(7限目)の授業を行う。第12回目(6限)は、ゲストの若手政治家のレクチャーと討論となる。

・2週間後に第14回目(6限目)・第15回目(7限目)の授業を行う。この2時限は、履修生が班に分かれて報告を行い、総まとめを行う。

■ 教科書

久米郁男・川出良枝・古城佳子・田中愛治・真淵勝『政治学』(補訂版) 有斐閣, 2011年。

■ 参考文献

■ 備考・関連URL

「政治を学び合う」

http://open-waseda.jp/kifu/seiji_wo_manabiau/

この講義は収録および上記サイトにおける公開を前提としています。

履修者は当該コンテンツ内において、自身の肖像・発言等が使用されることを予め許諾したものとします。

書類選考を行いますので、科目登録時に志望動機を必ず入力してください。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
日本の伝統演劇論(入門)	三宅 晶子	春学期	2	月5時限

■ 副題:

■ 授業概要

前年度に引き続き金春禅鳳自筆能本・謡本を取り上げる。

世阿弥自筆能本について書写年代が古い金春禅鳳自筆能本(富士山)と、謡本の中から、担当者が適当な能作品を選び、諸本校合、典拠、詞章、演出などについての調査・報告、参加者による討議を行う。

現存する主な謡本との校合、詞章の解説、出典調べ、演出資料の調査など、能の作品研究に欠かせない調査・研究法の基礎をマスターすることを目的とする。

能にのみ用いる狭い研究方法ではなく、広く伝統演劇すべてに応用可能な、オーソドックスな方法論である。

担当曲を決めて、発表形式とする。

■ 授業の到達目標

- 1, 日本の古文書(写本・板本)読解法の習得
- 2, 諸本校合の方法習得
- 3, 校訂本文作成法の習得
- 4, 古文の注釈法の習得

5, 能の研究を志す受講者は能の演出記録の調査・読解法の習得

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 0%

平常点評価割合 100%……自分の担当曲の調査・報告ができているか。(50) %

他の参加者の担当曲についての質疑に積極的に参加し、正しい判断が出来ている
か(50) %

その他割合 0%

■ 授業計画

第1回 金春禪鳳自筆能本・謡本概説・能の作品研究の方法概説

第2回 担当曲決定、謡本の調査方法概説

第3回 担当曲1 諸本校合・校訂本文作成

第4回 担当曲1 注釈

第5回 担当曲2 諸本校合・校訂本文作成

第6回 担当曲2 注釈

第7回 担当曲3 諸本校合・校訂本文作成

第8回 担当曲3 注釈

第9回 担当曲4 諸本校合・校訂本文作成

第10回 担当曲4 注釈

第11回 担当曲5 諸本校合・校訂本文作成

第12回 担当曲5 注釈

第13回 金春禪鳳自筆能本・謡本の特色(用字・発音法)

第14回 金春禪鳳自筆能本・謡本の特色(役名・節付表記)

第15回 まとめ

■ 教科書

授業時に影印資料コピー配布

■ 参考文献

岩波日本古典文学大系『謡曲集』上下

岩波日本思想大系『世阿弥禅竹』

『金春古伝書集成』能楽書林刊

『鴻山文庫本の研究』わんや書店刊

■ 備考・関連 URL

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
日本の伝統演劇論（発展）	三宅 晶子	秋学期	2	月 5 時限

■ 副題：

■ 授業概要

前期の「日本の伝統演劇論（入門）」に引き続き金春禪鳳自筆能本・謡本を取り上げる。

世阿弥自筆能本について書写年代が古い金春禪鳳自筆能本（富士山）と、謡本の中から、担当者が適当な能作品を選び、諸本校合、典拠、詞章、演出などについての調査・報告、参加者による討議を行う。

現存する主な謡本との校合、詞章の解説、出典調べ、演出資料の調査など、能の作品研究に欠かせない調査・研究法の基礎をマスターすることを目的とする。

能にのみ用いる狭い研究方法ではなく、広く伝統演劇すべてに応用可能な、オーソドックスな方法論である。

担当曲を決めて、発表形式とする。

■ 授業の到達目標

- 1, 日本の古文書（写本・板本）読解法の習得
- 2, 諸本校合の方法習得
- 3, 校訂本文作成法の習得
- 4, 古文の注釈法の習得
- 5, 能の研究を志す受講者は能の演出記録の調査・読解法の習得

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 0%

平常点評価割合 100%……自分の担当曲の調査・報告ができているか。（50）%

他の参加者の担当曲についての質疑に積極的に参加し、正しい判断が出来るか（50）%

その他割合 0%

■ 授業計画

第1回	担当曲1	作品研究上
第2回	担当曲1	作品研究下
第3回	担当曲2	作品研究上
第4回	担当曲2	作品研究下
第5回	担当曲3	作品研究上
第6回	担当曲3	作品研究下
第7回	担当曲4	作品研究上
第8回	担当曲4	作品研究下
第9回	担当曲5	作品研究上
第10回	担当曲5	作品研究下
第11回	研究発表1	
第12回	研究発表2	

第13回 研究発表 3

第14回 研究発表 4

第15回 研究発表 5

■ 教科書

授業時に影印資料コピー配布

■ 参考文献

岩波日本古典文学大系『謡曲集』上下

岩波日本思想大系『世阿弥禅竹』

『金春古伝書集成』能楽書林刊

『鴻山文庫本の研究』わんや書店刊

■ 備考・関連 URL

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
現代演劇と多文化主義（入門）	東 晴美	春学期	2	火 2 時限

■ 副題：

演劇の文化研究

■ 授業概要

この授業は、今日の劇場で上演される様々な舞台作品を通して、芸術・社会・文化のあり方を考察するものである。

現代の日本や海外で上演されている演劇には、日本の多文化状況を反映した作品が数多く見られる。前期では、日本の前近代に生まれた伝統演劇とくに歌舞伎・文楽と近代・現代の舞台表現とのインタラクティブな関係についてとりあげる。伝統が形を変えながら伝承され、また、同時代の芸術家や観客に刺激を与えながら受容されていったかを、文化研究の視点から探求する。

まず、伝統演劇と現代の舞台表現との交流の事例を紹介し、文化研究のテーマや方法を整理する。次に、指定した関連する作品を DVD で鑑賞し、課題となるテーマや方法に基づいた発表と討議を行う。

劇場でのフィールドワークでは、課題とする舞台を実際に鑑賞した上で、討論を行う。

■ 授業の到達目標

まず、文学や芸術を専門としない学生にとっても、自分の分野に応用できる教養や汎用性のある方法論を身につける。その方法論とは、異なる文化の比較ではなく、異文化が交流することによって生じた現象が、今日の舞台作品にあらわれているのかを丹念に検証することである。

次に、文献に対するクリティカルリーディングの能力を養成する。記述された事実の検証のみならず、記述者の思想的・文化的バックグラウンドや記述された時代の社会的文脈を考慮しながら分析することである。

文学や芸術、演劇を専門とする学生には、自分の専門を発展させるような新しいアプローチを展開できるようにする。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 50%……学期の最後にレポートの提出を求める。採点基準は、授業で展開した方法論を正確に理解しているか、オリジナルな知見を獲得しているかをみる。

平常点評価割合 50%……発表と討議によって構成される。発表はプレゼンテーションの形式が整っているか、オリジナルな知見が見られるかを評価する。討議は積極的に議論に資する意見を述べているかを評価する。

その他割合 0%

■ 授業計画

以下のような内容について、担当教員が文献・映像資料などを提供し、履修者と議論を行う。

1. イントロダクション（演劇学における文化研究の方法と可能性）
2. 現代演劇における劇場、観客、身体の再構築と伝統演劇
3. 作品鑑賞と分析（オイディプス王とギリシャ円形劇場）
4. 作品鑑賞と分析（唐十郎と赤テント）
5. 作品鑑賞と分析（こんびろ歌舞伎と金丸座）
6. 日本伝統演劇の海外公演と異文化交流
7. 作品鑑賞と分析（中村勘三郎のNY公演）
8. 作品鑑賞と分析（ヨーロッパの日本演劇受容）
9. 近松作品の近代における変容、現代演劇への影響、映像での再生
10. 作品鑑賞と分析（文楽と歌舞伎の「曾根崎心中」）
11. 作品鑑賞と分析（海外での「曾根崎心中」の翻案）
12. 作品鑑賞と分析（映像における近松作品）
13. 劇場でのフィールドワーク

■ 教科書

プリントして配布

■ 参考文献

『演劇学のキーワードズ』（ペリかん社、2007年）

■ 備考・関連URL

授業で紹介する舞台やシンポジウムへの参加を求めます。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
現代演劇と多文化主義（発展）	東 晴美	秋学期	2	火 2 時限

■ 副題：

エスニシティと演劇

■ 授業概要

この授業は、今日の劇場で上演される様々な舞台作品を通して、芸術・社会・文化のあり方を考察するも

のである。

現代の演劇においては、日本の多文化社会を反映し、先住民や沖縄、さらには各国からの移民など多様なアイデンティティを持った人々の表現を観ることができる。それらの作品は、民族的伝統と主流文化との混淆を通して作り上げられている。また、そのようなエスニック的要素を含んだ舞台表現が文化資源として注目されることもある。

この授業では、文化研究の視点から、このような多文化社会日本における演劇との関わりについて、民族の伝統と現代の結節点について考察する。

まず、エスニックアイデンティティに裏付けられた舞台芸術の事例を紹介し、文化研究のテーマや方法を整理する。次に、指定した関連する作品を DVD で鑑賞し、課題となるテーマや方法に基づいた発表と討議を行う。

劇場でのフィールドワークでは、指定した舞台を実際に鑑賞し、その後教室で討論を行う。

■ 授業の到達目標

まず、文学や芸術を専門としない学生にとっても、自分の分野に応用できる教養や汎用性のある方法論を身につける。その方法論とは、異なる文化の比較ではなく、異文化が交流することによって生じた現象が、今日の舞台作品にあらわれているのかを丹念に検証することである。

次に、文献に対するクリティカルリーディングの能力を養成する。記述された事実の検証のみならず、記述者の思想的・文化的バックグラウンドや記述された時代の社会的文脈を考慮しながら分析することである。

文学や芸術、演劇を専門とする学生には、自分の専門を発展させるような新しいアプローチを展開できるようにする。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 50%……学期の最後にレポートの提出を求める。採点基準は、授業で展開した方法論を正確に理解しているか、オリジナルな知見を獲得しているかをみる。

平常点評価割合 50%……発表と討議によって構成される。発表はプレゼンテーションの形式が整っているか、オリジナルな知見が見られるかを評価する。討議は積極的に議論に資する意見を述べているかを評価する。

その他割合 0%

■ 授業計画

以下のような内容について、担当教員が文献・映像資料を提供し、履修者とともに議論を行う。

1. イントロダクション（演劇学における文化研究の方法と可能性）
2. 沖縄の演劇（組踊・沖縄芝居・人類館）
3. 作品鑑賞と分析
4. 作品鑑賞と分析
5. 作品鑑賞と分析
6. アイヌの芸能（国境を越える先住民の表現）
7. 作品鑑賞と分析
8. 作品鑑賞と分析
9. 作品鑑賞と分析
10. マイノリティの舞台表現；地域の演劇と文化資源

11. 作品鑑賞と分析
12. 作品鑑賞と分析
13. 作品鑑賞と分析
14. 劇場でのフィールドワーク

■ 教科書

プリントして配布する

■ 参考文献

『多様性と伝統：日本の演劇文化』（オセアニア出版社、2005 年）

■ 備考・関連 URL

授業で紹介する舞台やシンポジウムへの参加を求めます。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
日本列島の日常史（後編）	高木 徳郎	秋学期	2	月 5 時限

■ 副題：

古島敏雄の著作を読む

■ 授業概要

古島敏雄は、戦後歴史学に大きな足跡を残した農業史・経済史家である。その著作は膨大な数にのぼり、研究の対象も前近代の地主制、家族形態、共同体論、農業技術、農学史、生活史など多方面に及んでおり、その方法も実に多彩であるため、これらの著作を読む際には多面的なアプローチが可能である。この授業では、全学からの受講が可能であるオープン教育センターの特性を活かし、古島の著作を、受講者の専攻分野の視点・方法によってじっくり読み解くことを主眼として進めていくこととしたい。したがって、受講者は全員が毎回決められた著作の該当箇所をあらかじめ読んだ上で参加するのが前提で、毎回担当者を決めて、担当者による報告とそれについての討論によって授業を進めていきたい。報告者は単に著作を読むだけでなく、典拠となる資料や文献を調べた上でレジュメを作成して報告を行う。ただし、毎回の著作を読むかは、受講者の専攻分野や関心に応じて決めることとしたい。

■ 授業の到達目標

古島敏雄の研究の意義と問題点についての理解を深めるだけでなく、戦後の経済史・農業史の達成とその水準を把握することが当面の目標である。しかし、それだけにとどまらず、自分の専攻分野と異なる分野の成果を摂取する際の方法論を身につけ、批判的摂取により自らの研究をより豊かに発展させるスキルを獲得することをめざす。近年、異なる分野を横断的に架橋する学際的な共同研究の進展が著しいが、他分野の成果の結論部分だけを「つまみ食い」するだけでは、真の意味での共同研究とはならない。むしろ、結論に至る過程こそが重要であり、それぞれの分野の独自の視点と方法論の長所と短所に自覚的となり、それぞれを活かしつつ研究に取り組まなければならない。この授業では、そうした点を意識して授業を進めたい。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 0%

平常点評価割合 100%……割り当てられた報告の完成度や討論における発言の状況などを総合的に評価する。

その他割合 0%

■ 授業計画

[第1回] ガイダンス 授業の進め方の説明と意見交換および受講者の自己紹介（研究分野など）、報告担当者決定

[第2回] 古島敏雄の研究の特徴とその史的意義

[第3回～第14回] 受講者の関心に応じて選択した著作の輪読と討論

[第15回] 討論の成果と総括

■ 教科書

授業の冒頭で指示する。

■ 参考文献

『古島敏雄著作集』（全10巻、東大出版会）

『土地に刻まれた歴史』（岩波新書、1967年）

その他、授業の中で具体的に言及する。

■ 備考・関連URL

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
EU 国際公共政策の研究	福田 耕治	秋学期	2	火 4 時限

■ 副題：

EU を事例として考える

■ 授業概要

グローバルな視点から、現代行政と国際公共政策を関係づけ、新たな国際制度の設計や国際公共政策の策定と実施について研究する。本科目では、環境エネルギー、開発、安全保障、人権保障、社会保障、保健・医療などの諸問題は地球規模の問題であると同時に、われわれの日常生活とも密接にかかわる、とても身近な公共政策にかかわる諸問題を最新の英語学術ジャーナル掲載文献を中心に引き上げ検討する。

■ 授業の到達目標

国際公務員、国家公務員、地方公務員、NGO/NPO 職員等の志望者にとって役立つ最新の国際問題と国内問題を取り上げ、またグローバル・ビジネスに積極的にかかわりつつ、地球規模課題の解決に果敢に取り組むことのできる人材の育成を目指す。国際公益の概念を把握し、国際機関、国と地方自治体の役割を考え、その実現方法をガバナンスの観点から理解する。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 40%……期末に提出

平常点評価割合 60%……発表と質疑応答等により評価

その他割合 0%

■ 授業計画

第1回 ガイダンス 受講者と相談のうえ、秋学期でとりあげる国際公共政策や文献ジャーナルを検討する。
(以下は、参考例)

第1回：国際公共政策とは何か

第2回：地球環境エネルギー政策のガバナンスと国際行政

第3回：国際開発政策と貧困問題へのアプローチ

第4回：国際人権保障と国際社会保障政策

第5回：国際通貨・金融政策と国際行政

第6回：国際医療保健政策と国境を越える感染症

第7回：国際情報通信政策と国際行政

第8回：国際機構の移民・難民政策と国際行政

第9回：食の安全性確保政策と国際行政

第10回：国際公共政策過程とNGOの役割

第11回：国際科学技術政策とジェンダー

第12回：国際安全保障・平和構築政策と国際行政

第13回：国際社会福祉労働政策

第14回：国際保健・医療政策

第15回：国際リスク・マネジメント政策

■ 教科書

福田耕治『国際行政学-国際公益と国際公共政策（改訂新版）』

有斐閣（2011年）

福田耕治他『EU・医療専門職と患者の越境移動』文真堂（2009年）

■ 参考文献

福田耕治編『EUとグローバル・ガバナンス』早稲田大学出版部、2009年。

■ 備考・関連URL

関連URL：

<http://europa.eu.int/>

<http://www.oecd.org/>

<http://www.unic.or.jp/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Webシラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
The Politics and International Relations of the European Union	ペーコン ポール・マルティン	秋学期	2	金 5 時限

■ 副題：

■ 授業概要

This course offers students a comprehensive guide to twentieth century European political history. It explains the circumstances in which the project of European co-operation began. Students will gain a clear understanding of the main institutions, policies and decision-making processes of the contemporary EU, with a particular focus on EU foreign policy.

The class offers a fair and honest appraisal of the political divisions that exist between influential members of the EU, and a balanced assessment of the strengths and weaknesses of the European approach to international relations.

There will be several concrete case studies of key events in international politics that have helped to shape the contemporary EU, and which have served to reveal the EU's strengths and weaknesses. These case studies include Rwanda, Bosnia/Srebrenica, Kosovo, the Iraq War, Libya, and the question of EU enlargement.

■ 授業の到達目標

This course will give students a comprehensive understanding of the history, institutions, policies, political processes, strengths and weaknesses of the European Union.

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 70%……Three 1000 word position papers, each worth 10% of the final grade.

One 3000 word endterm paper, worth 40% of the grade.

平常点評価割合 30%……15% Class attendance and participation.

15% Presentation

その他割合 0%

■ 授業計画

[第1回] Introduction/The Evolution of European Political Institutions

[第2回] Origins of WWI

[第3回] Origins of WWII

[第4回] Theories of European Integration

[第5回] The European Commission

[第6回] The Council of Ministers/European Council

[第7回] The European Parliament

[第8回] The EU and Human Rights

[第9回] EU Enlargement

[第10回] Paradise and power: Theorizing the EU as an International actor

[第11回] The External relations of the European Union

[第12回] The EU and Bosnia/Srebrenica

[第13回] The EU, NATO and Kosovo

[第14回] The EU, the US and the Iraq War

[第15回] Overview/Conclusions

■ 教科書

Neill Nugent, The Government and Politics of the European Union, (7th edition).

■ 参考文献

A comprehensive list of supplementary readings will be provided in the first class.

■ 備考・関連URL

This class is taught entirely in English, and you are expected to produce all of the written assignments in English.

関連URL:

A list of useful URLs will be circulated in the first class.

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
The Political System of the EU	舒 旻	秋学期	2	水 2 時限

■ 副題：

Public Policy Analysis

■ 授業概要

In a globalised world, public policy-making is subject to ever more factors beyond the reach of the nation state. This course is going to focus on one of such factors: regional cooperation and integration. Looking into the European Union (EU), it will not only discuss the policy-making process above the state level, but also examine several important regional policies in Europe.

More specifically, the first part of the course will introduce the history of European integration, the institutional and legal structure of the EU, major actors in the EU policy-making process, and the recent trend of multi-level governance and Europeanisation in the EU. The second part of the course will then discuss European public policies in ten different areas: the Single Market, Common Agricultural Policy, Regional Policy, Competition Policy, Economic and Monetary Union, Environmental Policy, Common Commercial Policy, Foreign and Security Policy and Justice and Home Affairs.

Students are divided into groups at the beginning of the term. Each group is required to do a presentation regarding one of the policy areas covered by the second half of the course. At the end of term, each participant is required to write a term essay on the topics covered by the course. The evaluation is based on class attendance, group presentation and term essay.

■ 授業の到達目標

The course aims to provide students with a general framework of how to conduct public policy analysis. Focusing on European public policy, each participant is expected to study the institutional structure of the European Union, to examine different EU policy issues, and to develop his/her own analysis of public policy-making in Europe.

■ 成績評価方法

試験割合 40%……term essay

レポート割合 30%……class presentation

平常点評価割合 20%……in-class discussion

その他割合 10%……attendance

■ 授業計画

- 第1回 Guidance and Introduction
- 第2回 A Brief History of European Integration
- 第3回 The Institutional and Legal Structure of the EU
- 第4回 Actor, Structure and Trend in EU Policy-making
- 第5回 The Single European Market
- 第6回 Common Agricultural Policy
- 第7回 Regional Policy
- 第8回 Competition Policy
- 第9回 Economic and Monetary Union
- 第10回 Environmental Policy
- 第11回 Common Commercial Policy
- 第12回 Foreign and Security Policy
- 第13回 Justice and Home Affairs
- 第14回 Summary and Essay Guidance
- 第15回 Conclusions

■ 教科書

Wallace, Helen ; Pollack, Mark and Young, Alasdair (eds.) (2010) Policy-Making in the European Union, 6th edition, Oxford: Oxford University Press.

Cini, Michelle and Borraran, Nieves (eds.) (2010) European Union Politics, 3rd edition, Oxford: Oxford University Press.

■ 参考文献

Richardson, Jeremy (ed.) (2006) European Union: Power and Policy - Making, 3rd edition, New York : Routledge.

Peterson, John and Bomberg, Elizabeth (1999) Decision - Making in the European Union, Basingstoke, Hampshire: Macmillan Press

■ 備考・関連URL

関連URL:

http://europa.eu/index_en.htm

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
Contemporary Issues in European Integration	中村 英俊	夏季集中	2	無その他

■ 副題：

The EUIJ-Waseda Summer Intensive Course

■ 授業概要

This course will provide an opportunity for Waseda students to take an intensive course on European integration studies which is usually provided at a European university, such as the University of Oxford, Free University of Berlin, and so on. EU Institute in Japan at Waseda University (EUIJ Waseda) will invite one scholar from a European university for the summer intensive course.

In 2013, we have yet to decide who will come to Waseda from Europe. Last year, Dr Hartmut Mayer of Oxford University, also a visiting professor of Hamburg University, came to Waseda for the week starting from 10th September 2012. Prof. Mayer provided us with four substantial days of teaching, according to the following four major subjects:

- (1) EU Polity, Decision-Making, and the Impact on Member States (Monday);
- (2) The Financial Crisis in the EU and Beyond (Tuesday);
- (3) Common Foreign and Security Policy (Thursday); and
- (4) Globalization vs. Competition by Regions (Friday).

On each day, he gave a lecture, followed by a discussion session in a seminar format. He sent us the reading lists and the questions/titles for assignments. This year, we will keep the similar format. Students are required to prepare intensively for the summer course and to write at least four essays. This requirement will enable you to understand the four lectures given by the guest lecturer, and to participate actively in the discussion of the four subjects with your own prepared essays.

We will update the information on CourseN@vi, when we decide who will come. S/he will provide the classes for one week during the summer vacation: most likely late August or early September.

Prof. Hidetoshi Nakamura will co-ordinate the course as a whole. He will utilize the Course N@vi education system, to enable any student to keep abreast of the development of this course. The official language for this course is English, but any student can communicate with Prof. Nakamura in Japanese on the fringe of this course.

■ 授業の到達目標

Through the intensive course on European integration studies which is usually provided at a European university, students will learn the theory and practice of European integration.

■ 成績評価方法

試験割合%

レポート割合%

平常点評価割合%

その他割合%

■ 授業計画

Day 1: EU Polity, Decision-Making, and the Impact on Member States

[1] Lecture (1) by the guest lecturer

[2] Discussion (1-1)

[3] Discussion (1-2)

[4] Discussion (1-3)

Day 2: The Financial Crisis in the EU and Beyond

[5] Lecture (2) by the guest lecturer

[6] Discussion (2-1)

[7] Discussion (2-2)

Day 3: Common Foreign and Security Policy

[8] Lecture (3) by the guest lecturer

[9] Discussion (3-1)

[10] Discussion (3-2)

[11] Discussion (3-3)

Day 4: Globalization vs. Competition by Regions

[12] Lecture (4) by the guest lecturer

[13] Discussion (4-1)

[14] Discussion (4-2)

[15] Conclusion by the guest lecturer and Prof. Nakamura

■ 教科書

The reading lists and the questions/titles for assignments will be provided by the guest lecturer, and be communicated to you through the Course N@vi.

■ 参考文献

■ 備考・関連 URL

You are required to have the basic knowledge about European integration in the academic discipline of Politics (Political Science) and International Relations.

You are able to send any prior question to Hidetoshi Nakamura through e-mail either in English or in Japanese. His e-mail address is hidnakamura@waseda.jp

関連 URL:

For EU Institute in Japan at Waseda University (EUIJ-Waseda), see:

<http://www.euij-waseda.jp/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
欧州統合理論の研究	中村 英俊	秋学期	2	火 3 時限

■ 副題:

■ 授業概要

いくつかの国際地域において、国民国家を超える（＝狭義の統合）現象ないしは国境を横断する（＝広義の統合）現象が観察できる。世界において、部分的ではあるが「戦争の不在」という現象を観察することもできる。

本講義では、ヨーロッパ地域における政治統合体としての EU の事例を中心に、様々な地域統合現象の理論的考察・分析を試みたい。次のようなテーマを取り上げる予定。

1. 世界における「地域」(regions)——地域統合論と地域研究の異同性
2. 地域統合の理論と概念 (1) E・ハースの新機能主義 (2) K・ドイッチュの交流主義 (3) 比較地域統合論——J・ナイの『部分的平和』
3. ヨーロッパ統合の歴史と現状 (1) EU と超国家的制度 (2) 安全保障共同体としての EU (3) 民生パワーとしての EU
4. 国際統合と国民統合——EU と USA の「連邦制」
5. 地域機構と「戦争の不在」——APEC, ARF, ASEAN+3/6, SAARC, NAFTA, OAS, GCC, AU, EAC, etc.

■ 授業の到達目標

国際関係論・国際政治学(IR)における統合理論(integration theory)の重要文献を輪読し、議論する。議論に際しては、ヨーロッパ統合の現実(EU の事例)、あるいは、(ヨーロッパ統合との比較研究の観点から)東アジア地域統合などについても各自に調査を求めることになる。

■ 成績評価方法

試験割合%

レポート割合%

平常点評価割合%

その他割合%

■ 授業計画

- [第1回] オリエンテーション：国際政治学における統合論
- [第2回] 地域統合論・欧州統合理論の概説
- [第3回] K・ドイッチュの交流主義アプローチ
- [第4回] E・ハースの新機能主義アプローチ
- [第5回] P・シュミッターの新機能主義と「スピル・オーバー」仮説
- [第6回] S・ホフマンによる統合論批判
- [第7回] J・ナイの比較地域統合論：1970年代
- [第8回] W・ウォーレスの「主権の共有」論
- [第9回] A・モラブチックの制度主義
- [第10回] W・マトリイの比較地域統合論：1990年代
- [第11回] E・アドラーと M・バーネットの「安全保障共同体」論
- [第12回] 非ヨーロッパ地域への「安全保障共同体」概念の適用
- [第13回] 「民生パワー」としての EU
- [第14回] 国際政治の中の EU
- [第15回] 総括

上記テーマについて、リーディング・リストに基づく重要文献を読む。そして、ゼミ形式の講義では、ヨーロッパ統合の理論・現実について議論し、さらに比較研究の観点から、「アジア地域統合」の可能性と限界（あるいは「東アジア共同体」創設の条件）などについての議論も重ねたい。

■ 教科書

■ 参考文献

- ・鴨武彦 (1985) 『国際統合理論の研究』(早稲田大学出版部)
- ・鴨武彦 (1992) 『ヨーロッパ統合』(NHK ブックス)、特に第3章
- ・中村英俊 (2010) 「地域機構と『戦争の不在』: E・ハースと J・ナイの比較地域統合論」(山本武彦編『国際関係論のニュー・フロンティア』成文堂、第5章)
- ・Adler, Emanuel, and Barnett, Michael (eds.) (1998) *Security Communities* (Cambridge: Cambridge University Press).
- ・Deutsch, Karl W., et al. (1957) *Political Community and the North Atlantic Area: International Organization in the light of historical experience* (Princeton University Press, 1957; reprinted, Westport, CT: Greenwood Press, 1969).
- ・Fawcett, Louise, and Hurrell, Andrew (eds.) (1995) *Regionalism in World Politics* (Oxford University Press) [菅英輝・栗栖薫子監訳『地域主義と国際秩序』九州大学出版会、1999年]
- ・Haas, Ernst B. (1958/1968) *The Uniting of Europe: Political, Social, and Economic Forces, 1950-1957* (Stanford University Press, Stanford, 1958; reissued with a new Preface, 1968).
- ・Mattli, Walter (1999) *The Logic of Regional Integration: Europe and Beyond* (Cambridge University Press).
- ・Nye, Joseph S. (1971/1987) *Peace in Parts: Integration and Conflict in Regional Organization* (Boston: Little, Brown and Company, 1971; reissued with a new Preface by University Press of America, 1987).
- ・Antje, Wiener, and Diez, Thomas (eds.) (2009) *European Integration Theory* (Oxford University Press) [東野篤子訳『ヨーロッパ統合の理論』勁草書房、2010年]

■ 備考・関連 URL

国際関係研究(大学院政治学研究科・政治学コース)、国際政治学概説(同・国際政治経済学コース)、地域統合論(同・ジャーナリズムコース)、欧州統合理論の研究(オープン教育センター設置「大学院 EU・欧州統合研究テーマカレッジ」科目)の合併授業。授業運営に際しては、Course N@vi の機能を適宜利用する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
信仰と思想(前編)	森 由利亜	春学期	2	金 3 時限

■ 副題:

酒井忠夫『善書の研究』を読む

■ 授業概要

中国近世には、一般庶民に比較的近い視野をもつ知識人たちが、啓蒙的な関心から編纂した「善書」(勸善書)と呼ばれるジャンルが登場しました。とりわけ17世紀中盤、すなわち明の時代の終わりから清のはじめになるとその流通は頂点を迎えます。それは近代への胎動へと繋がる新しい社会のうねりに呼応するものかもしれません。善書を研究することは、近世における中国社会を知る上で非常に有益なことから考えられます。この授業では、故・酒井忠夫博士による名著『善書の研究』を読みながら、中国近世社会の倫理思想と

社会のありようそのものについて考えていきたいと思います。酒井博士は明末清初を中国にける近代への重要な展開期として位置づけ、善書の発展のなかにそれを探ろうとしているのです。本書を読むことは、中国の近代が、中国的な伝統の中でどのように用意されてきたかを探る旅になるかもしれません。

■ 授業の到達目標

中国近世・近代の文化について考えることを目標とします。

■ 成績評価方法

試験割合%

レポート割合%

平常点評価割合%

その他割合%

■ 授業計画

受講生には、毎回課題論文の指定した章をあらかじめ全員読んできていただき、それをもとに内容を総括しながらディスカッションする形式をとります。

■ 教科書

酒井忠夫『善書の研究』（1972（1960年版の復刻本）国書刊行会刊）。受講生にはコピーで配布する。

■ 参考文献

教場で示す。

■ 備考・関連 URL

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
民族と人類（前編）	城倉 正祥	春学期	2	月 4 時限

■ 副題：

西嶋定生を読む

■ 授業概要

現在のグローバル社会の中で、歴史学研究における「国際感覚」の重要性も高まっている。本講義では、日本が激動する東アジア情勢の中で、対外的に国家としての体裁を整えていく古墳時代～古代に注目し、日本と東アジア各国との「関係性」を追求する諸論点について、受講者自身の専門分野に引きつけて議論を重ねる。その導入として、西嶋定生の中国と日本の関係をダイナミックに論じた著作（西嶋定生 2002『西嶋定生東アジア史論集』第3巻・第4巻 岩波書店）を講読する。中華帝国を頂点とする東アジアの階層秩序（冊封体制）をキーワードとして、日本が「初期国家」あるいは「律令国家」を築き上げていく歴史的な過程を東アジアの視野で考えてみたい。

具体的には、西嶋定生の著作の講読によって惹起された受講者の問題意識、及び各自の専門分野に関連させた論点を抽出し、文献史料・考古資料の操作を重ね、その成果を発表していくゼミ形式で講義を進める。

大学院生である受講者の積極的な議論によって論点を深め、授業を通じて受講者各自が必ず1本の論文として公表できるレベルのレポートを作成することを目的として指導を行う。

■ 授業の到達目標

西嶋定生の著作を講読する中で生まれた問題意識を各自の専門分野で応用する訓練を重ねる。文献史料・考古資料を駆使して、東アジア的視点でどのようにダイナミックに歴史を復原するべきか、受講者の「知的感性」と「国際感覚」を磨く。自己の目の前にある資料がどのような形で東アジアの歴史的な流れの中に位置付けられるのか、文字やモノに通底する普遍的意義の「発見」こそが歴史学の醍醐味である。文献の講読、史料・資料の調査、そしてダイナミックな仮説とその検証、研究者としてのテクニックとセンスを育てることが本講義の到達目標である。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 40%……最終授業で提出するレポートを評価対象とする。提出レポートは論文形式とし、完成原稿でB5版20枚を目安として作成・提出すること。

平常点評価割合 60%……出席状況、及び議論への参加態度によって評価する。

その他割合 0%

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション（講義内容・成績評価の説明）
- 第2回 専門分野の紹介（受講者各自の専門分野について紹介をしてもらい、各自の問題意識の所在を確認する）
- 第3回 テキストの講読（論集3）
- 第4回 テキストの講読（論集3）
- 第5回 テキストの講読（論集4）
- 第6回 テキストの講読（論集4）
- 第7回 研究テーマの決定（講読を通じて各自がテーマを決める）
- 第8回 分析方法の確認（文献史料・考古資料の分析方法について講義する）
- 第9回 発表方法の確認（パワーポイント・レジュメ作成方法について講義する）
- 第10回 パワーポイントによる発表・議論
- 第11回 パワーポイントによる発表・議論
- 第12回 パワーポイントによる発表・議論
- 第13回 レポート図版のチェック（受講者がレポートを論文形式で示し、その図版について直すべき点を議論する）
- 第14回 レポート文章のチェック（受講者がレポートを論文形式で示し、その文章について直すべき点を議論する）
- 第15回 レポート提出・講評

■ 教科書

西嶋定生 2002『西嶋定夫東アジア史論集』第3巻・第4巻 岩波書店

■ 参考文献

■ 備考・関連URL

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
民族と人類（後編）	工藤 元男	秋学期	2	月 3 時限

■ 副題：

栗原朋信を読む

■ 授業概要

栗原朋信は早稲田大学文学部で長い間教鞭をとり、シルクロード史研究で有名な松田寿男とともに早稲田大学の東洋史学を確立した学者であり、戦後日本の東洋史学における東アジア古代国際関係史研究の基礎を作ったことで著名である。

本演習ではその名著『秦漢史の研究』（吉川弘文館、1960）をテキストに使用し、東アジア世界の形成過程、その秩序構造について学習する。

演習にあたっては、毎回、担当者がレジュメを作成し、報告し、それをめぐって議論する。とくに最近の考古資料の増加によって、その所論に訂正も生じているので、新たな資料を組み込むことで、今後さらにどのような展望がみえてくるかも併せて考えてみたい。

■ 授業の到達目標

古代東アジア世界のキーワードである、皇帝、天子、内臣、外臣、客臣等の概念を理解させ、それらの概念をとくに漢と南越の関係史に重ねることで、東アジア古代国際関係史を考えさせる。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 0%

平常点評価割合 100%……毎回の報告の内容によって評価する。

その他割合 0%

■ 授業計画

第1回：栗原朋信と秦漢史研究に関するガイダンス

第2回：講読／秦記について

第3回：講読／始皇帝という名号について

第4回：講読／始皇帝の泰山封禪（1）

第5回： 〃 （2）

第6回：講読／秦水徳説の批判（1）

第7回： 〃 （2）

第8回：講読／秦の郊祀と宗廟の祭祀

第9回：講読／印璽小論

第10回：講読／帝室の璽印

第11回：講読／伝国璽に関する疑い

第12回：講読／皇后の璽

第13回：講読／皇后・皇太后の璽

第14回：講読／皇太子の印

第15回：これまでのまとめ

■ 教科書

栗原朋信『秦漢史の研究』（吉川弘文館、1960年）

■ 参考文献

■ 備考・関連 URL

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
演劇とその周辺（入門）	八木 斉子	春学期	2	月 2 時限

■ 副題：

ヨーロッパとアメリカの演劇・映像をめぐる理論と作品分析

■ 授業概要

ヨーロッパとアメリカの演劇・映像作品をただ単に「楽しむ」段階から一歩先へ進むためには、鑑賞と解釈の拠りどころとなる理論にある程度親しむことが必要となり、また、作品を詳細に分析する訓練を積むことが重要となる。この授業では、各受講者が以下に挙げる 3 つの範疇から 1 つを選び、さらに作品（複数でも構わない）あるいは作家（複数でも構わない）を決める。各受講者は、講師と相談しながら自分の選択に沿った理論を探し、文献を読む。これをもとに作品（台本および DVD）を丁寧に分析していく。

- 1) 演劇、映画、テレビ劇におけるジャンルとは？
- 2) オリジナル作品とは何か、翻案作品とは何か？
- 3) 演劇、映画、テレビ劇のあいだで言語の用い方はどのように異なるか？

文献は主に英語のものとなろう。英語が得意である必要はないが、抵抗なく取り組む姿勢でのぞむことを前提とする。各受講者は文献と作品分析に関する報告をおこなう。最終的には論文を仕上げる（日本語あるいは英語のどちらかで）。

■ 授業の到達目標

作品分析において理論的な拠りどころが何故必要なのか、どのように拠れば分析の効果が上がるのか、各受講者が自分なりの答えを出す。英語による文献・視聴覚資料に慣れる。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 0%

平常点評価割合 50%……文献の検討、作品の分析において積極的・客観的な発言がみられるか。

その他割合 50%……論文の内容と形式が共に整っているか。

■ 授業計画

第 1 回 演習への導入。各自、テーマの決定へ向けて担当教員との相談を開始する。

第 2 回 （導入として）文献の検討。作品の鑑賞と分析。

第 3 回 （導入として）同上

第 4 回 テーマを決定のうえ、今後の分析方法について簡単に報告する。

第 5 回 各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。

- 第6回 同上
- 第7回 進行中の分析について報告する。
- 第8回 各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。
- 第9回 同上
- 第10回 進行中の分析について報告する。
- 第11回 各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。
- 第12回 同上
- 第13回 執筆中の論文について報告する。
- 第14回 論文の提出と報告を行う。
- 第15回 論文の講評。まとめと展望。

■ 教科書

担当教員が準備する。

■ 参考文献

授業中に紹介する。

■ 備考・関連 URL

受講希望者のなかから選考をおこなう（簡単な課題を与える予定）。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
演劇とその周辺（発展）	八木 斉子	秋学期	2	月 2 時限

■ 副題：

ヨーロッパとアメリカの演劇・映像をめぐる理論と作品分析

■ 授業概要

ヨーロッパとアメリカの演劇・映像作品をただ単に「楽しむ」段階から一歩先へ進むためには、鑑賞と解釈の抛りどころとなる理論にある程度親しむことが必要となり、また、作品を詳細に分析する訓練を積むことが重要となる。この授業では、各受講者が以下に挙げる 3 つの範疇から 1 つを選び、さらに作品（複数でも構わない）あるいは作家（複数でも構わない）を決める。各受講者は、講師と相談しながら自分の選択に沿った理論を探し、文献を読む。これをもとに作品（台本および DVD）を丁寧に分析していく。

- 1) 演劇、映画、テレビ劇におけるジャンルとは？
- 2) オリジナル作品とは何か、翻案作品とは何か？
- 3) 演劇、映画、テレビ劇のあいだで言語の用い方はどのように異なるか？

文献は主に英語のものとなろう。英語が得意である必要はないが、抵抗なく取り組む姿勢でのぞむことを前提とする。各受講者は文献と作品分析に関する報告をおこなう。最終的には論文を仕上げる（日本語あるいは英語のどちらかで）。

なお、本講義は春学期の発展である。連続受講でなくとも構わないが、受講に際しては選考をおこなう。

■ 授業の到達目標

作品分析において理論的な拠りどころが何故必要なのか、どのように拠れば分析の効果が上がるのか、各受講者が自分なりの答えを出す。英語による文献・視聴覚資料に慣れる。

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 0%

平常点評価割合 50%……文献の検討、作品の分析において積極的・客観的な発言がみられるか。

その他割合 50%……論文の内容と形式が共に整っているか。

■ 授業計画

第1回 講義への導入。各自、テーマの決定へ向けて担当教員との相談を開始する。

第2回 (導入として) 文献の検討。作品の鑑賞と分析。

第3回 (導入として) 同上

第4回 テーマを決定のうえ、今後の分析方法について簡単に報告する。

第5回 各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。

第6回 同上

第7回 進行中の分析について報告する。

第8回 各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。

第9回 同上

第10回 進行中の分析について報告する。

第11回 “各自のテーマに沿った文献の検討および作品の鑑賞と分析。

第12回 同上

第13回 執筆中の論文について報告する。

第14回 論文の提出と報告を行う。

第15回 論文の講評。まとめと展望。

■ 教科書

担当教員が準備する。

■ 参考文献

授業中に紹介する。

■ 備考・関連 URL

受講希望者のなかから選考をおこなう（簡単な課題を与える予定）。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
Comparative Regionalism	ベーコン ポール・マルティン	秋学期	2	月 3 時限

■ 副題：

■ 授業概要

In this course we study European and Asian regionalisms in comparative context, with a particular emphasis on security issues. Students will learn about the history, political system and decision-making processes of the European Union. Using the idea of a separation of powers, we will explain the roles of the most important European Union institutions, and the landmark treaties of the European integration process will also be described and explained. We will study the different policy-making modes within the EU, some supranational and some intergovernmental, and study the concept of differentiated integration - the idea that the EU is more integrated in some policy areas than it is in others.

We will then study the implications of all of this for the possibility of an EU foreign policy. We will survey the major attempts to conceptualize the foreign policy identity of the EU; civilian power, normative power, security community, postmodern power, soft power and smart power. We will also look concretely at what the EU has actually done, and consider the strengths and weaknesses of the EU as an international actor. It will be argued that although the EU has achieved some substantial successes, it remains a complex, differentially integrated polity that still has some way to go before it can be considered a substantial, unitary, foreign policy actor.

The focus then turns to Asia. We will survey the various Asian regional integration projects and regionalization theory. We will study the security dynamics of the Asia-Pacific region, looking at the security triangle between the US, China and Japan, and some of the well-documented security hot-spots in the region, such as China's emerging hegemony and the issue of North Korea. We will consider the arguments for and against the possibility that ASEAN can be a driver of East Asian regionalism. I will argue that Asian regionalism is weak in comparison to European regionalism in the domain of security, and also that the EU is not an appropriate regional model for Asia to attempt to emulate.

I will argue that it is unrealistic to imagine that Asia and Europe could meaningfully engage as regions in the coming decades, and suggest that the most promising relationships between actors from the two regions will involve the EU and Asian democracies. We can already see the emergence of FTA networks, and stronger relations between the EU and countries such as Japan and Korea. We could be witnessing an emerging trend whereby what Robert Cooper calls postmodern states are beginning to form and consolidate more complex and substantial global networks across regions as well as within them. To examine this claim, we will conclude with a detailed focus on the prospects for the relationship between Japan and the EU. The concepts of human security and the responsibility to protect will be considered. It will be suggested that both the EU and Japan should take the opportunity to develop a new partnership based around their shared identities as postmodern powers, and show leadership in areas such as the environment, development, conflict prevention, peacebuilding, and human rights. The class concludes with a discussion of Burma/Myanmar and the limits of the ASEAN Charter as a way of protecting human security in the region.

■ 授業の到達目標

Students will learn about the history, policies, institutions and processes of the European Union,

and the extent to which Europe can be considered a region and a credible international actor.

Students will also learn about attempts to promote Asian regional organization. They will be able to compare the extent to which both Europe and Asia have institutionalized regionalism, and the extent to which they deal with each other as institutionalized regions.

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 35%……Students are expected to produce three short 1,000 word position papers over the term.

They will also be expected to submit a substantial term paper at the end of the semester, around 3,000 words in length, in English.

Each of the position papers is worth 10% of the grade, and the term paper is worth 35% of the grade.

平常点評価割合 65%……Participation in class discussion is worth 20% of the grade. According to Waseda regulations, students must attend a minimum of 70% of classes to be considered for a pass grade. Each student will also make one substantial class presentation during the course, for 15% of the grade.

その他割合 0%

■ 授業計画

Week 1- Introductions

Week 2 - The historical evolution of the EU

- Government and Politics of the European Union, Nugent, Chapters 1-4

Week 3 - The evolving treaty framework

- Government and Politics of the European Union, Nugent, Chapters 5-6

Week 4 - EU institutions: the Commission and the Council of Ministers

- Government and Politics of the European Union, Nugent, Chapters 8-9

Week 5 - EU institutions: the European Council and the European Parliament

Government and Politics of the European Union, Nugent, Chapters 10-11

Week 6 - EU enlargement

- European Politics Today, Cini and Borrigan, Chapter 26

Policy-Making in the EU, Wallace, Pollack and Young, Chapter 17

Week 7 - EU foreign and security policy

- European Politics Today, Cini and Borrigan, Chapters 14 and 15.

- Policy-Making in the EU, Wallace, Pollack and Young, Chapter 18

Week 8 - The EU, Mars and Venus

- The Post-Modern State and the World Order, Cooper, Demos, 2000.

- Power and Weakness, Kagan, The Policy Review, 2002.

- An analysis of contemporary statehood: consequences for conflict and cooperation, Georg Sorensen, Review of International Studies, 1997, 23.

Week 9 - Asian Multilateralism: the US perspective

- Asia's New Multilateralism, Green and Bates, Chapters 1-2
- Week 10 - Asian Multilateralism: Chinese and Korean Perspectives
- Asia's New Multilateralism, Green and Bates, Chapters 3-4
- Week 11 - Asian Multilateralism: Japanese and ASEAN perspectives
- Asia's New Multilateralism, Green and Bates, Chapters 5 and 8
- Week 12 - Asian Multilateralism: governance, democracy and defence
- Asia's New Multilateralism, Green and Bates, Chapters 10-11
- Week 13 - Asian Multilateralism: traditional and non-traditional security
- Asia's New Multilateralism, Green and Bates, Chapters 12-13
- Week 14 - The EU's human rights diplomacy in Japan
- Human rights, transformative power and EU-Japan relations, Paul Bacon
- Week 15 - The responsibility to protect and human security in Asia: a case study of Burma/Myanmar
- The ASEAN Charter and the Promotion of R2P in Southeast Asia: Challenges and Constraints, Morada, Global Responsibility to Protect, 2009, 1:2.
- Cyclones and Humanitarian Crises: Pushing the Limits of R2P in Southeast Asia, Cabellaro-Anthony and Chang, Global Responsibility to Protect, 2009, 1:2.
- After the Security Dilemma: The Challenges of Insecurity in Weak States and the Dilemma of Liberal Values, Sorensen, Security Dialogue, 2007, 38:3.

■ 教科書

The Government and Politics of the European Union (Seventh Edition),
Neill Nugent, Palgrave Macmillan, 2010.
ISBN: 978-0-230-24117-3.

■ 参考文献

1. Asia's New Multilateralism,
Edited by Michael Green and Bates Gill, Columbia University Press, 2009.
ISBN: 978-0-231-14442-1.
2. Policy-Making in the European Union (Sixth Edition),
Edited by Wallace, Pollack and Young, Oxford University Press, 2010.
ISBN13: 9780199544820, ISBN10: 0199544824.

■ 備考・関連 URL

This class is taught exclusively in English. The weekly reading load is medium to heavy. I expect students to do the readings every week, and come to class ready to discuss these readings in an open seminar format.

Many of the issues we will discuss are controversial, and not settled. This is partly what makes them interesting. I hope and expect that students might disagree with some of my arguments, and I look forward to debating with you over the content of this class!

関連 URL:

I have a personal webpage through which I provide supplementary materials and useful links for this class. I will give you the URL in our first class.

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください

(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
シェイクスピアと映像	本山 哲人	秋学期	2	木 5時限

■ 副題：

Shakespeare and Film Adaptations

■ 授業概要

This class will focus upon understanding the relationship between literary texts, in particular the plays of Shakespeare, and film adaptations of the text. Some topics that may be discussed include the differences among the media of the printed word, the stage, and the cinema, the notion of fidelity to the text, as well as the historical/social concerns of the time the films were produced. One play will be chosen; students will read the play and discuss some of its main issues. They will also be required to read some critical writings about the performance of Shakespeare's plays and about film adaptations. Finally, they will watch several screen adaptations and appropriations of the play, discuss the films, and compare them to the text.

The second purpose of this class will be to improve students' communicative ability and study/research skills in English. The class will be conducted entirely in English. Though students may consult Japanese translations of the required reading, they will be expected to participate in classroom discussions and give presentations in English. As each class will revolve around student discussions and presentations, it will be imperative for students to take part actively in classroom activities. If the class is small, a trip to see a stage production of Shakespeare may also be organized.

■ 授業の到達目標

Students will learn how to read and discuss Shakespeare's plays in English. They will also learn how to discuss films and the various issues concerning the adaptation of written texts into film.

This class is particularly recommended for anyone interested in Shakespeare and performance, or film adaptations; it is also recommended for anyone who wishes to prepare for graduate school in the humanities, in an English speaking country.

■ 成績評価方法

試験割合 0%

レポート割合 35%……A 3000 word final paper comparing one of Shakespeare's plays not discussed in class, and a film adaptation of the play.

平常点評価割合 30%……Participation in classroom discussions and projects.

その他割合 35%……Presentations and weekly (or fortnightly) assignments

■ 授業計画

The following is a general guideline and may be altered depending on the size of the class and the background of the students. The first two weeks will be a general introduction to Shakespeare and his works. After that, each class will be divided into two sections: the first half hour will focus

on various critical writings about performance or cinematic adaptations; the remainder of the class will deal with the assigned play or film. Five to six weeks will be spent covering the chosen play, probably *Midsummer Night's Dream*. The following five to six weeks will be spent discussing film adaptations. (Should the chosen text be *Midsummer Night's Dream*, they will be Reinhardt's 1935 version, Peter Hall's 1969 version, Hoffman's 1999 version, and Gustafson's 2008 *Were the World Mine*.) Finally, two to four weeks will be spent on student presentations, in which they will compare a Shakespearean play and a film adaptation.

■ 教科書

To be announced in class

■ 参考文献

■ 備考・関連 URL

The class will be taught entirely in English.

If the size of the class is not too large, we may organize a trip to the theater to see a stage production of Shakespeare. Ticket prices could range from about 3000 yen to 8000 yen.

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
ドイツ演劇と映像	中村 采女	秋学期	2	火 4 時限

■ 副題：

■ 授業概要

19 世紀ドイツの劇作家ゲオルク・ビューヒナーの作品とその映像化作品を中心に「ドイツ演劇と映像」を見てゆく。

2013 年に生誕 200 年を迎えるこの作家は、19 世紀末に始まる再評価以来、演劇的にも、あるいは思想的にも、繰り返し新たな側面からの見直しがなされてきた。本演習では、2013 年完結予定のマールブルク版全集、2011 年発行の新訳全集等のテキストを手がかりに、まずは戯曲の理解を深め、これまで映像として表わされてきたそれらの作品の検討を行う。ビューヒナー作品を 2013 年現在から新たに見直すことにもなる。

■ 授業の到達目標

ある演劇作品・映像作品について歴史的な評価の変遷を踏まえたうえで現時点から評価することの意義を知ること。そのうえで独自の評価ができるようになること。

■ 成績評価方法

試験割合%

レポート割合%

平常点評価割合%

その他割合%

■ 授業計画

最初の時間に、授業の進め方や扱う作家、作品を紹介する。

19 世紀のドイツの劇作家ゲオルク・ビューヒナーの戯曲『ダントンの死』、『ヴォイツェク』、『レオンスとレーナ』を主として取り扱うことになるが、アルバン・ベルクによる『ヴォイツェク』のオペラ化作品『ヴォイツェク』も取りあげる予定である。その他、受講生の興味・関心に応じた作家・作品を扱うことも考えたい。まずは戯曲を読むことから始め、その理解をふまえて、映像化された作品を見る。

各戯曲の評価および映像作品による受容のあり方を、歴史的な流れのなかで検討する。

■ 教科書

取りあげる作品について、そのつど資料を配布する。

■ 参考文献

教室で指示する。

■ 備考・関連 URL

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください (<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
実践的国際金融論 (大学院用)	熊谷 善彰 吉國 眞一 藁谷 友紀	秋学期	2	月 4 時限

■ 副題：

■ 授業概要

・国際金融の理論を、国際経済学、国際法、金融制度、金融史など学際的なアプローチを通じて習得するため、「国際収支」「外国為替市場」「国際金融機関、中央銀行の役割」「国際金融危機」などのテーマについて講義する。

・現実起こっている金融危機や金融革新の動きを捉えるため、適宜、金融当局、金融機関、国際機関等の関係者を講師として招く。英語の教材を多用し、金融部門における国際知識の修得、テクニカルな概念把握を目指す。

・一方通行の講義でなく、金融危機における IMF プログラムのケース・スタディーなどを活用して、学生の積極的な参加を目指す。

■ 授業の到達目標

- ・国際金融の理解に必要な経済学をはじめとする基礎知識の取得
- ・国際金融の主要プレイヤー（政府・中央銀行・国際機関・民間金融機関 etc）についての理解
- ・英語文献の読み込みを通じる語学力の向上
- ・ケース・スタディーなどを通じる問題発見・解決能力の涵養

■ 成績評価方法

試験割合 70%……基礎的な知識。英語力。問題解決能力。

レポート割合 0%

平常点評価割合 30%……講義に出席し、討議に積極的に参加したか。

その他割合 0%

■ 授業計画

- 第1回 イン트로ダクション:国際金融のための金融論 国際金融理解の前提となる金融経済の基礎知識(国民経済計算、資金過不足、中央銀行の役割等)の復習
- 第2回 外国為替市場 外国為替の基礎知識 外国為替市場の概要、為替相場の仕組み等
- 第3回 国際収支 国際収支の基礎概念、国際収支統計の読み方
- 第4回 為替相場の決定要因 為替相場と国際収支、国際資本移動の関係為替相場の決定理論
- 第5回 国際経済のマクロ経済学 IS-LM、マンデル・フレミング理論等国際金融理解のための国際マクロ経済学の解説
- 第6回 国際通貨制度 国際通貨制度の変遷と世界経済の相互連関
- 第7回 中央銀行と国際金融 国際金融の重要プレーヤーである中央銀行の役割について特にその国際的側面に着目して解説
- 第8回 国際金融機関論 (IMF、世銀とワシントン・コンセンサス) ブレトンウッズ機関 (IMF、世銀) の役割とその変遷について、現場の経験を基に解説
- 第9回 国際金融機関論 (BIS とバーゼル・プロセス) BIS と中央銀行等の協力体制であるバーゼル・プロセスについて、現場の経験を基に解説
- 第10回 国際金融取引 (金融革新の最前線) デリバティブ、M&A 等最新のインベストメントバンキングの最前線から金融革新の光と影について報告
- 第11回 国際金融体制の新展開 (欧州通貨統合とアジア等新興国の台頭) ユーロの成立とアジアの経済的発展、経済統合について金融的側面を中心に分析
- 第12回 国際金融体制の新展開 (中国の金融) 今後の国際金融に関する重要課題である人民元の国際化を中心とする中国の金融情勢を最前線から報告
- 第13回 国際金融危機とその対処 (危機の背景と展開) 1970年代以来の金融危機を概観し、そのなかで各国政府、IMF 等国際機関がどのように行動したかを解説
- 第14回 国際金融危機とその対処 (危機の再発防止に向けた取り組み) サブプライム危機、ユーロ危機後の最新の国際的協調体制、バーゼル III 等金融規制。IMF のガバナンス改革等
- 第15回 まとめ

■ 教科書

「国際金融論講義」深尾光洋著 日本経済新聞出版社 2010 年

「国際金融のしくみ第4版」秦忠夫、本田敬吉、西村陽造著 有斐閣 アルマ 2012 年

■ 参考文献

折に触れて、テーマに合致するファイナンシャル・タイムズ、ロンドン・エコノミスト等の英文エッセーを次回講義の参考文献として指定

■ 備考・関連 URL

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください (<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
CSR マネジメント実践 01	朝日 透	春	2	無・その他

■ 副題：

ISO26000 実践的トレーニング

■ 授業概要

早稲田大学博士キャリアセンターが学外企業と連携して主催するプロジェクト「実践型研究リーダー養成：社会問題解決リーダー育成のための文理相乗連携プログラム」（秋冬学期または夏季に実施）に参加登録したのち、21 世紀型の企業経営ツールとして注目される国際規格 ISO26000 を活用した具体的な CSR コンサルティング手法を講義で身に着けたうえで、数名のチームを組んで、本業 CSR に取り組もうとしている企業を実際に訪問し、講師（黒澤正一 理工学術院総合研究所 客員上級研究員）プロデュースのコンサルティング・ツールを実際に使用して CSR 経営分析を行い、最終的には訪問企業への提案書を仕上げてプレゼンテーションを行う。当該プロジェクトを修了した場合、担当教員によってレポート、平常点、プレゼンテーションなどの成果をもとに成績が評価され、翌学期に単位取得が可能である。

■ 授業の到達目標

本業 CSR の要点を理解し、CSR マネジメントの手法と力量を身に付ける。

■ 成績評価方法

試験： 0% 試験は実施しない

レポート： 30% 訪問企業で作成する「CSR マネジメントマニュアル関係文書」

平常点評価： 40% 出席率、リーダーシップ、貢献度、成長度（技能ヒアリング）

その他： 30% プレゼンテーションによる要点の網羅度

■ 授業計画

1： 第 1 回

訪問前講義①「本業 CSR 専門知識を固める」

2： 第 2 回

訪問前講義②「マネジメントシステムの要点を身につける」

3： 第 3 回

訪問前講義③「ISO26000を精読する」

4： 第 4 回

訪問前講義④「訪問前準備」

5： 第 5 回

企業訪問①-1「ヒアリング、ガバナンス」

6： 第 6 回

企業訪問①-2「ヒアリング、ステークホルダ」

7： 第 7 回

訪問前講義⑤「第2回訪問前準備」

8： 第 8 回

企業訪問②-1「ディスカッション、ギャップ分析①マネジメントシステム」

9: 第9回

企業訪問②-2「ディスカッション、ギャップ分析②SH コミュニケーション」

10: 第10回

訪問前講義⑥「第3回訪問前準備」

11: 第11回

企業訪問③-1「提案、プレゼンテーション」

12: 第12回

企業訪問③-2「提案、ディスカッション&ディベート」

13: 第13回

事後講義・提案書作成①「情報整理」

14: 第14回

事後講義・提案書作成②「提案書ブラシアップ」

15: 第15回

プレゼンテーション実践

■ 教科書

■ 参考文献

■ 備考・関連 URL

早稲田大学博士キャリアセンター

プロジェクト「実践型研究リーダー養成：社会問題解決 リーダー育成のための文理相乗連携プログラム」(夏季)

【実習予定期間】2013 年 8 月 1 日～9 月 20 日

<http://www.waseda-pracdoc.jp/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日時限
CSR マネジメント実践 02	朝日透	秋	2	無・その他

■ 副題：

ISO26000 実践的トレーニング

■ 授業概要

早稲田大学博士キャリアセンターが学外企業と連携して主催するプロジェクト「実践型研究リーダー養成：社会問題解決リーダー育成のための文理相乗連携プログラム」(秋冬学期または夏季に実施)に参加登録したのち、21 世紀型の企業経営ツールとして注目される国際規格 ISO26000 を活用した具体的な CSR コンサルティング手法を講義で身に着けたうえで、数名のチームを組んで、本業 CSR に取り組もうとしている企業を実際に訪問し、講師(黒澤正一 理工学術院総合研究所 客員上級研究員)プロデュースのコンサルティング・ツールを実際に使用して CSR 経営分析を行い、最終的には訪問企業への提案書を仕上げてプレゼンテーションを行う。当該プロジェクトを修了した場合、担当教員によってレポート、平常点、プレゼンテーションな

どの成果をもとに成績が評価され、翌学期に単位取得が可能である。

■ 授業の到達目標

本業 CSR の要点を理解し、CSR マネジメントの手法と力量を身に付ける。

■ 成績評価方法

試験： 0% 試験は実施しない

レポート： 30% 訪問企業で作成する「CSR マネジメントマニュアル関係文書」

平常点評価： 40% 出席率、リーダーシップ、貢献度、成長度（技能ヒアリング）

その他： 30% プレゼンテーションによる要点の網羅度

■ 授業計画

1： 第1回

訪問前講義①「本業CSR専門知識を固める」

2： 第2回

訪問前講義②「マネジメントシステムの要点を身につける」

3： 第3回

訪問前講義③「ISO26000を精読する」

4： 第4回

訪問前講義④「訪問前準備」

5： 第5回

企業訪問①-1「ヒアリング、ガバナンス」

6： 第6回

企業訪問①-2「ヒアリング、ステークホルダ」

7： 第7回

訪問前講義⑤「第2回訪問前準備」

8： 第8回

企業訪問②-1「ディスカッション、ギャップ分析①マネジメントシステム」

9： 第9回

企業訪問②-2「ディスカッション、ギャップ分析②SHコミュニケーション」

10： 第10回

訪問前講義⑥「第3回訪問前準備」

11： 第11回

企業訪問③-1「提案、プレゼンテーション」

12： 第12回

企業訪問③-2「提案、ディスカッション&ディベート」

13： 第13回

事後講義・提案書作成①「情報整理」

14： 第14回

事後講義・提案書作成②「提案書ブラシアップ」

15： 第15回

プレゼンテーション実践

- 教科書
- 参考文献
- 備考・関連 URL

早稲田大学博士キャリアセンター

プロジェクト「実践型研究リーダー養成：社会問題解決 リーダー育成のための文理相乗連携プログラム」（秋冬季）

【実習予定期間】2013 年 12 月 20 日～2014 年 2 月 20 日

<http://www.waseda-pracdoc.jp/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、Web シラバスで、最新情報を確認してください
(<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php>)

索引

M

MRI によるヒト脳機能画像研究特論…………… 265

O

Oral Presentation for Academic Purposes 上級 01 02 … 322

Oral Presentation for Academic Purposes 中級 01 02 … 321

R

Reading for Academic Purposes 上級 01…………… 320

Reading for Academic Purposes 中級 01 ～ 06 …… 319

W

Writing for Academic Purposes 上級 01 02…………… 321

Writing for Academic Purposes 中級 01 ～ 06 …… 320

あ

アジア社会論研究指導 A・B…………… 82

アジア社会論研究指導 (D) A・B…………… 337

アジア社会論ゼミ (1) A…………… 109

アジア社会論ゼミ (1) B…………… 109

アジア社会論ゼミ (2) A…………… 110

アジア社会論ゼミ (2) B…………… 110

アジア地域研究特論…………… 274

安全人間工学特論…………… 262

安全人間工学研究指導 A・B…………… 92

安全人間工学研究指導 (D) A・B…………… 342

安全人間工学ゼミ (1) A…………… 208

安全人間工学ゼミ (1) B…………… 208

安全人間工学ゼミ (2) A…………… 209

安全人間工学ゼミ (2) B…………… 209

い

移住論研究指導 A・B…………… 83

移住論研究指導 (D) A・B…………… 337

移住論ゼミ (1) A…………… 123

移住論ゼミ (1) B…………… 123

移住論ゼミ (2) A…………… 124

移住論ゼミ (2) B…………… 124

移民研究特論…………… 277

医療安全学特論…………… 291

医療情報学特論…………… 290

医療人材管理特論…………… 290

医療心理学・職場メンタルヘルス学研究指導 A・B… 92

医療心理学・職場メンタルヘルス学研究指導 (D) A・B… 341

医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ (1) A …… 200

医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ (1) B …… 200

医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ (2) A …… 201

医療心理学・職場メンタルヘルス学ゼミ (2) B …… 201

医療人類学研究指導 A・B…………… 87

医療人類学研究指導 (D) A・B…………… 340

医療人類学ゼミ (1) A…………… 164

医療人類学ゼミ (1) B…………… 164

医療人類学ゼミ (2) A…………… 165

医療人類学ゼミ (2) B…………… 165

医療福祉質評価特論…………… 291

インストラクショナルデザイン特論…………… 265

インストラクショナルデザイン論研究指導 A・B… 95

インストラクショナルデザイン論研究指導 (D) A・B… 344

インストラクショナルデザイン論ゼミ (1) A…………… 231

インストラクショナルデザイン論ゼミ (1) B…………… 231

インストラクショナルデザイン論ゼミ (2) A…………… 232

インストラクショナルデザイン論ゼミ (2) B…………… 232

インターネット科学研究指導 A・B…………… 96

インターネット科学ゼミ (1) A…………… 233

インターネット科学ゼミ (1) B…………… 233

インターネット科学ゼミ (2) A…………… 234

インターネット科学ゼミ (2) B…………… 234

インターネット科学特論…………… 266

う

運動制御・バイオメカニクス研究指導 A・B…………… 86

運動制御・バイオメカニクス研究指導 (D) A・B… 339

運動制御・バイオメカニクスゼミ (1) A…………… 150

運動制御・バイオメカニクスゼミ (1) B…………… 150

運動制御・バイオメカニクスゼミ (2) A…………… 151

運動制御・バイオメカニクスゼミ (2) B…………… 151

運動制御・バイオメカニクス特論…………… 284

お

応用健康科学研究指導 A・B…………… 86

応用健康科学研究指導 (D) A・B…………… 339

応用健康科学ゼミ (1) A…………… 152

応用健康科学ゼミ (1) B…………… 152

応用健康科学ゼミ (2) A…………… 153

応用健康科学ゼミ (2) B…………… 153

か

階級・階層論ゼミ (1) A…………… 121

階級・階層論ゼミ (1) B…………… 121

階級・階層論ゼミ (2) A…………… 122

階級・階層論ゼミ (2) B…………… 122

階級・階層論特論…………… 277

開発援助実践学特論 I…………… 272

開発援助実践学特論 II…………… 273

科学史・科学論ゼミ（１）Ａ	125
科学史・科学論ゼミ（１）Ｂ	125
科学史・科学論ゼミ（２）Ａ	126
科学史・科学論ゼミ（２）Ｂ	126
科学史・科学論研究指導 Ａ・Ｂ	83
科学史・科学論特論	278
学際的研究の進め方ワークショップ 01 02	317
学習科学とイノベーション	319
学習環境デザイン特論	266
学習環境デザイン論研究指導 Ａ・Ｂ	96
学習環境デザイン論研究指導（Ｄ）Ａ・Ｂ	345
学習環境デザイン論ゼミ（１）Ａ	235
学習環境デザイン論ゼミ（１）Ｂ	235
学習環境デザイン論ゼミ（２）Ａ	236
学習環境デザイン論ゼミ（２）Ｂ	236
学習心理学特論	259
家族社会学研究指導 Ａ・Ｂ	82
家族社会学ゼミ（１）Ａ	111
家族社会学ゼミ（１）Ｂ	111
家族社会学ゼミ（２）Ａ	112
家族社会学ゼミ（２）Ｂ	112
家族社会学特論	274
家族臨床心理学特論	327
学校カウンセリング学研究指導 Ａ・Ｂ	91
学校カウンセリング学ゼミ（１）Ａ	196
学校カウンセリング学ゼミ（１）Ｂ	196
学校カウンセリング学ゼミ（２）Ａ	197
学校カウンセリング学ゼミ（２）Ｂ	197
学校学習システム特論	312
学校臨床心理学特論	330
学校臨床心理学研究指導 Ａ・Ｂ	323
学校臨床心理学ゼミ Ａ	324
学校臨床心理学ゼミ Ｂ	324
学校臨床生徒指導学特論	326
環境管理計画学研究指導 Ａ・Ｂ	81
環境管理計画学研究指導（Ｄ）Ａ・Ｂ	336
環境管理計画学ゼミ（１）Ａ	99
環境管理計画学ゼミ（１）Ｂ	99
環境管理計画学ゼミ（２）Ａ	100
環境管理計画学ゼミ（２）Ｂ	100
環境教育	314
環境社会学研究指導 Ａ・Ｂ	82
環境社会学研究指導（Ｄ）Ａ・Ｂ	337
環境社会学ゼミ（１）Ａ	113
環境社会学ゼミ（１）Ｂ	113
環境社会学ゼミ（２）Ａ	114
環境社会学ゼミ（２）Ｂ	114
環境社会学特論	275
環境心理・環境デザイン研究指導 Ａ・Ｂ	85
環境心理・環境デザイン研究指導（Ｄ）Ａ・Ｂ	338
環境心理・環境デザインゼミ（１）Ａ	140
環境心理・環境デザインゼミ（１）Ｂ	140
環境心理・環境デザインゼミ（２）Ａ	141
環境心理・環境デザインゼミ（２）Ｂ	141

環境生態学特論	272
環境生理学特論	287
環境デザイン学特論	256
感情心理学特論	263
感性心理学特論	262
感性認知科学研究指導 Ａ・Ｂ	93
感性認知科学研究指導（Ｄ）Ａ・Ｂ	343
感性認知科学ゼミ（１）Ａ	211
感性認知科学ゼミ（１）Ｂ	211
感性認知科学ゼミ（２）Ａ	212
感性認知科学ゼミ（２）Ｂ	212
緩和医療学・臨床死生物学研究指導 Ａ・Ｂ	87
緩和医療学・臨床死生物学研究指導（Ｄ）Ａ・Ｂ	340
緩和医療学・臨床死生物学ゼミ（１）Ａ	166
緩和医療学・臨床死生物学ゼミ（１）Ｂ	166
緩和医療学・臨床死生物学ゼミ（２）Ａ	167
緩和医療学・臨床死生物学ゼミ（２）Ｂ	167
緩和医療学特論	288

き

技術史・技術文化論ゼミ（１）Ａ	127
技術史・技術文化論ゼミ（１）Ｂ	127
技術史・技術文化論ゼミ（２）Ａ	128
技術史・技術文化論ゼミ（２）Ｂ	128
技術文化論研究指導 Ａ・Ｂ	83
基礎老化学研究指導 Ａ・Ｂ	86
基礎老化学ゼミ（１）Ａ	154
基礎老化学ゼミ（１）Ｂ	154
基礎老化学ゼミ（２）Ａ	155
基礎老化学ゼミ（２）Ｂ	155
教育開発特論	267
教育開発論研究指導 Ａ・Ｂ	96
教育開発論研究指導（Ｄ）Ａ・Ｂ	345
教育開発論ゼミ（１）Ａ	237
教育開発論ゼミ（１）Ｂ	237
教育開発論ゼミ（２）Ａ	238
教育開発論ゼミ（２）Ｂ	238
教育コミュニケーション学研究指導 Ａ・Ｂ	96
教育コミュニケーション学ゼミ（１）Ａ	239
教育コミュニケーション学ゼミ（１）Ｂ	239
教育コミュニケーション学ゼミ（２）Ａ	240
教育コミュニケーション学ゼミ（２）Ｂ	240
教育システム工学特論	267
教育実践学研究指導 Ａ・Ｂ	96
教育実践学ゼミ（１）Ａ	241
教育実践学ゼミ（１）Ｂ	241
教育実践学ゼミ（２）Ａ	242
教育実践学ゼミ（２）Ｂ	242
教育集団心理学特論	327
教育情報学研究指導 Ａ・Ｂ	97
教育情報学研究指導（Ｄ）Ａ・Ｂ	345
教育情報学ゼミ（１）Ａ	243
教育情報学ゼミ（１）Ｂ	243

教育情報工学ゼミ (2) A	244
教育情報工学ゼミ (2) B	244
教育情報工学特論	268
教育心理学特論 I	329
教育心理学特論 II	329
教育臨床研究データ解析実習	333
教育臨床査定特論	328
教育臨床心理学特論 I	331
教育臨床心理学特論 II	331
教授学習過程特論	310
局地環境観測実習	253
儀礼・祝祭研究特論	279

け

健康・生命医科学基礎	257
健康管理医学研究指導 A・B	88
健康管理医学ゼミ (1) A	168
健康管理医学ゼミ (1) B	168
健康管理医学ゼミ (2) A	169
健康管理医学ゼミ (2) B	169
健康管理医学特論	288
健康行動科学特論	285
言語情報科学研究指導 A・B	93
言語情報科学研究指導 (D) A・B	343
言語情報科学ゼミ (1) A	213
言語情報科学ゼミ (1) B	213
言語情報科学ゼミ (2) A	214
言語情報科学ゼミ (2) B	214
言語情報科学特論	310
現代医療とケアにおける基礎と臨床	315
建築環境学研究指導 A・B	85
建築環境学研究指導 (D) A・B	338
建築環境学ゼミ (1) A	142
建築環境学ゼミ (1) B	142
建築環境学ゼミ (2) A	143
建築環境学ゼミ (2) B	143
建築環境学特論	282
建築計画学研究指導 A・B	85
建築計画学研究指導 (D) A・B	338
建築計画学ゼミ (1) A	144
建築計画学ゼミ (1) B	144
建築計画学ゼミ (2) A	145
建築計画学ゼミ (2) B	145
建築計画学特論	282

こ

考古学の理論と方法	255
行動医学研究指導 A・B	92
行動医学研究指導 (D) A・B	342
行動医学ゼミ (1) A	206
行動医学ゼミ (1) B	206
行動医学ゼミ (2) A	207

行動医学ゼミ (2) B	207
行動臨床心理学研究指導 A・B	91
行動臨床心理学研究指導 (D) A・B	341
行動臨床心理学ゼミ (1) A	198
行動臨床心理学ゼミ (1) B	198
行動臨床心理学ゼミ (2) A	199
行動臨床心理学ゼミ (2) B	199
子どもの健康福祉学研究指導 A・B	91
子どもの健康福祉学研究指導 (D) A・B	341
子どもの健康福祉学ゼミ (1) A	192
子どもの健康福祉学ゼミ (1) B	192
子どもの健康福祉学ゼミ (2) A	193
子どもの健康福祉学ゼミ (2) B	193
子どもの健康福祉学特論	294

さ

災害の人間科学	315
在外日系移民資料の活用	314

し

視覚デザイン特論	264
自然人類学特論	281
質的調査法特論	253
児童家庭福祉論研究指導 A・B	89
児童家庭福祉論ゼミ (1) A	182
児童家庭福祉論ゼミ (1) B	182
児童家庭福祉論ゼミ (2) A	183
児童家庭福祉論ゼミ (2) B	183
社会医学研究指導 A・B	88
社会医学研究指導 (D) A・B	340
社会医学ゼミ (1) A	170
社会医学ゼミ (1) B	170
社会医学ゼミ (2) A	171
社会医学ゼミ (2) B	171
社会学説特論	254
社会人類学研究指導 A・B	84
社会人類学ゼミ (2) A	129
社会人類学ゼミ (2) B	129
社会的実践認知科学研究指導 A・B	94
社会的実践認知科学ゼミ (1) A	215
社会的実践認知科学ゼミ (1) B	215
社会的実践認知科学ゼミ (2) A	216
社会的実践認知科学ゼミ (2) B	216
社会文化心理学特論	283
社会保障政策論研究指導 A・B	90
社会保障政策論ゼミ (1) A	184
社会保障政策論ゼミ (1) B	184
社会保障政策論ゼミ (2) A	185
社会保障政策論ゼミ (2) B	185
生涯学習社会における e ラーニングとメンタリング	318
情報コミュニケーション科学研究指導 A・B	97
情報コミュニケーション科学研究指導 (D) A・B	345

情報コミュニケーション科学ゼミ (1) A	245
情報コミュニケーション科学ゼミ (1) B	245
情報コミュニケーション科学ゼミ (2) A	246
情報コミュニケーション科学ゼミ (2) B	246
情報コミュニケーション技術論研究指導 A・B	97
情報コミュニケーション技術論ゼミ (1) A	247
情報コミュニケーション技術論ゼミ (1) B	247
情報コミュニケーション技術論ゼミ (2) A	248
情報コミュニケーション技術論ゼミ (2) B	248
情報処理心理学研究指導 A・B	94
情報処理心理学研究指導 (D) A・B	343
情報処理心理学ゼミ (1) A	217
情報処理心理学ゼミ (1) B	217
情報処理心理学ゼミ (2) A	218
情報処理心理学ゼミ (2) B	218
情報処理心理学特論	311
情報メディア教育特論	313
情報メディア教育論研究指導 A・B	97
情報メディア教育論研究指導 (D) A・B	345
情報メディア教育論ゼミ (1) A	249
情報メディア教育論ゼミ (1) B	249
情報メディア教育論ゼミ (2) A	250
情報メディア教育論ゼミ (2) B	250
植物生態学特論	273
進化する学習情報環境のデザイン	318
神経内分泌学研究指導 A・B	86
神経内分泌学研究指導 (D) A・B	339
神経内分泌学ゼミ (1) A	156
神経内分泌学ゼミ (1) B	156
神経内分泌学ゼミ (2) A	157
神経内分泌学ゼミ (2) B	157
神経内分泌学特論	286
人口社会学ゼミ (1) A	119
人口社会学ゼミ (1) B	119
人口社会学ゼミ (2) A	120
人口社会学ゼミ (2) B	120
人口社会学特論	276
心身医学研究指導 A・B	92
心身医学研究指導 (D) A・B	342
心身医学ゼミ (1) A	202
心身医学ゼミ (1) B	202
心身医学ゼミ (2) A	203
心身医学ゼミ (2) B	203
心身医学特論	259
身体化された認知論	317
心理教育臨床実習 A	333
心理教育臨床実習 B	334
心理行動学研究指導 A・B	94
心理行動学研究指導 (D) A・B	344
心理行動学ゼミ (1) A	219
心理行動学ゼミ (1) B	219
心理行動学ゼミ (2) A	220
心理行動学ゼミ (2) B	220
心理療法特論	309

心理臨床現場実習 I A	301
心理臨床現場実習 I B	302
心理臨床現場実習 II A	302
心理臨床現場実習 II B	303
心理臨床現場実習 III A	303
心理臨床現場実習 III B	304
心理臨床現場実習 IV A	304
心理臨床現場実習 IV B	305
心理臨床現場実習 V A	305
心理臨床現場実習 V B	306
心理臨床現場実習 VI A	306
心理臨床現場実習 VI B	307
心理臨床現場実習 VII A	307
心理臨床現場実習 VII B	308
心理臨床現場実習 VIII A	308
心理臨床現場実習 VIII B	309
心理臨床事例実習 A	334
心理臨床事例実習 B	335

す

水域環境学研究指導 A・B	81
水域環境学研究指導 (D) A・B	336
水域環境学ゼミ (1) A	101
水域環境学ゼミ (1) B	101
水域環境学ゼミ (2) A	102
水域環境学ゼミ (2) B	102
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ (1) A	130
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ (1) B	130
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ (2) A	131
スペイン・ラテンアメリカ地域文化論ゼミ (2) B	131
スポーツ健康マネジメント論ゼミ (1) A	186
スポーツ健康マネジメント論ゼミ (1) B	186
スポーツ健康マネジメント論ゼミ (2) A	187
スポーツ健康マネジメント論ゼミ (2) B	187
スポーツ健康マネジメント特論	293
スポーツ健康マネジメント論研究指導 A・B	90

せ

生活環境特論	284
生活支援工学研究指導 A・B	89
生活支援工学特論	258
生活支援工学ゼミ (1) A	176
生活支援工学ゼミ (1) B	176
生活支援工学ゼミ (2) A	177
生活支援工学ゼミ (2) B	177
生活人間工学ゼミ (1) A	223
生活人間工学ゼミ (1) B	223
生活人間工学ゼミ (2) A	224
生活人間工学ゼミ (2) B	224
生活人間工学特論	264
政治思想史特論	279
政治社会文化論研究指導 A・B	84

精神保健福祉特論	293
精神保健福祉論研究指導 A・B	90
精神保健福祉論ゼミ(1) A	188
精神保健福祉論ゼミ(1) B	188
精神保健福祉論ゼミ(2) A	189
精神保健福祉論ゼミ(2) B	189
精神薬理学特論	260
生体機能学研究指導 A・B	87
生体機能学研究指導(D) A・B	339
生体機能学ゼミ(1) A	158
生体機能学ゼミ(1) B	158
生体機能学ゼミ(2) A	159
生体機能学ゼミ(2) B	159
生体機能学特論	286
生体情報工学研究指導 A・B	93
生体情報工学研究指導(D) A・B	342
生体情報工学ゼミ(1) B	210
生体情報工学ゼミ(2) B	210
生態心理学研究指導 A・B	95
生態心理学ゼミ(1) A	221
生態心理学ゼミ(1) B	221
生態心理学ゼミ(2) A	222
生態心理学ゼミ(2) B	222
生態心理学特論	311
生態人類学特論	278
生物圏生態学研究指導 A・B	81
生物圏生態学研究指導(D) A・B	336
生物圏生態学ゼミ(2) A	104
生物圏生態学ゼミ(2) B	104
生物圏生態学ゼミ(1) A	103
生物圏生態学ゼミ(1) B	103
生命医療倫理学特論	289

そ

ソーシャルワーク特論	294
ソーシャルワーク論研究指導 A・B	90
ソーシャルワーク論ゼミ(1) A	190
ソーシャルワーク論ゼミ(1) B	190
ソーシャルワーク論ゼミ(2) A	191
ソーシャルワーク論ゼミ(2) B	191

た

大学・地域連携による先進的健康福祉ネットワークの解析	316
大気環境科学研究指導 A・B	81
大気環境科学研究指導(D) A・B	336
大気環境科学ゼミ(1) A	105
大気環境科学ゼミ(1) B	105
大気環境科学ゼミ(2) A	106
大気環境科学ゼミ(2) B	106
大気環境科学特論	271
多変量解析特論	322

ち

地域資源特論	275
地域資源論研究指導 A・B	83
地域資源論研究指導(D) A・B	337
地域資源論ゼミ(1) A	115
地域資源論ゼミ(1) B	115
地域資源論ゼミ(2) A	116
地域資源論ゼミ(2) B	116
地域文化論研究指導 A・B	84
地球生態学特論	270
知識情報科学研究指導 A・B	95
知識情報科学研究指導(D) A・B	344
知識情報科学ゼミ(1) A	225
知識情報科学ゼミ(1) B	225
知識情報科学ゼミ(2) A	226
知識情報科学ゼミ(2) B	226
知識情報科学特論	263

と

ドイツ政治社会文化論ゼミ(1) A	132
ドイツ政治社会文化論ゼミ(1) B	132
ドイツ政治社会文化論ゼミ(2) A	133
ドイツ政治社会文化論ゼミ(2) B	133
統合生理学研究指導 A・B	87
統合生理学研究指導(D) A・B	340
統合生理学ゼミ(1) A	160
統合生理学ゼミ(1) B	160
統合生理学ゼミ(2) A	161
統合生理学ゼミ(2) B	161
動物行動生態学研究指導 A・B	82
動物行動生態学研究指導(D) A・B	336
動物行動生態学ゼミ(1) A	107
動物行動生態学ゼミ(1) B	107
動物行動生態学ゼミ(2) A	108
動物行動生態学ゼミ(2) B	108
動物生態学特論	271
特別支援教育特論	330
都市社会学研究指導 A・B	83
都市社会学ゼミ(1) A	117
都市社会学ゼミ(1) B	117
都市社会学ゼミ(2) A	118
都市社会学ゼミ(2) B	118
都市社会学特論	276

に

日本物質文化論ゼミ(1) A	134
日本物質文化論ゼミ(1) B	134
日本物質文化論ゼミ(2) A	135
日本物質文化論ゼミ(2) B	135
乳幼児発達心理学特論	332
人間環境変遷特論	270

人間生体機能動態学研究指導 A・B	95
人間生体機能動態学ゼミ (1) A	227
人間生体機能動態学ゼミ (1) B	227
人間生体機能動態学ゼミ (2) A	228
人間生体機能動態学ゼミ (2) B	228
人間生体機能動態学特論	312
認知行動カウンセリング学研究指導 A・B	92
認知行動カウンセリング学研究指導 (D) A・B	342
認知行動カウンセリング学ゼミ (1) A	204
認知行動カウンセリング学ゼミ (1) B	204
認知行動カウンセリング学ゼミ (2) A	205
認知行動カウンセリング学ゼミ (2) B	205

ね

ネットワーク情報システム学研究指導 A・B	98
ネットワーク情報システム学研究指導 (D) A・B	346
ネットワーク情報システム学ゼミ (1) A	251
ネットワーク情報システム学ゼミ (1) B	251
ネットワーク情報システム学ゼミ (2) A	252
ネットワーク情報システム学ゼミ (2) B	252

は

バイオエシックス研究指導 A・B	88
バイオエシックスゼミ (1) A	172
バイオエシックスゼミ (1) B	172
バイオエシックスゼミ (2) A	173
バイオエシックスゼミ (2) B	173
発達行動学研究指導 A・B	86
発達行動学研究指導 (D) A・B	338
発達行動学ゼミ (1) A	146
発達行動学ゼミ (1) B	146
発達行動学ゼミ (2) A	147
発達行動学ゼミ (2) B	147
発達行動学特論	256
発達心理学特論	332
発達動機づけ特論	283
発達動機づけ論ゼミ (1) A	148
発達動機づけ論ゼミ (1) B	148
発達動機づけ論ゼミ (2) A	149
発達動機づけ論ゼミ (2) B	149

ひ

ヒューマンコンピュータインタラクション特論	313
表象文化論研究指導 A・B	85
表象文化論ゼミ (1) A	136
表象文化論ゼミ (1) B	136
表象文化論ゼミ (2) A	137
表象文化論ゼミ (2) B	137
表象文化論特論	280

ふ

福祉工学研究指導 A・B	95
福祉工学研究指導 (D) A・B	344
福祉工学ゼミ (1) A	229
福祉工学ゼミ (1) B	229
福祉工学ゼミ (2) A	230
福祉工学ゼミ (2) B	230
福祉サービス・支援評価法	258
福祉産業学研究指導 A・B	89
福祉産業学ゼミ (1) A	178
福祉産業学ゼミ (1) B	178
福祉産業学ゼミ (2) A	179
福祉産業学ゼミ (2) B	179
福祉の視点から見た環境づくり	316
福祉ロボット工学特論	292
物質文化論研究指導 A・B	84
物質文化論研究指導 (D) A・B	337
文化人類学の理論と方法	254
文化生態学研究指導 A・B	85
文化生態学研究指導 (D) A・B	338
文化生態学ゼミ (1) A	138
文化生態学ゼミ (1) B	138
文化生態学ゼミ (2) A	139
文化生態学ゼミ (2) B	139
分子神経科学研究指導 A・B	87
分子神経科学研究指導 (D) A・B	340
分子神経科学ゼミ (1) A	162
分子神経科学ゼミ (1) B	162
分子神経科学ゼミ (2) A	163
分子神経科学ゼミ (2) B	163
分子神経科学特論	287

ほ

保健医療福祉文献検索評価法	257

ま

マルチメディア特論	268

め

メディアリテラシー特論	269

よ

予防医学研究指導 A・B	88
予防医学研究指導 (D) A・B	340
予防医学ゼミ (1) A	174
予防医学ゼミ (1) B	174
予防医学ゼミ (2) A	175
予防医学ゼミ (2) B	175
予防医学特論	289

り

力動的心理療法特論	328
リハビリテーション科学研究指導 A・B	89
リハビリテーション科学ゼミ (1) A	180
リハビリテーション科学ゼミ (1) B	180
リハビリテーション科学ゼミ (2) A	181
リハビリテーション科学ゼミ (2) B	181
リハビリテーション工学特論	292
臨床心理学特論 I	295
臨床心理学特論 II	296
臨床心理学地域援助特論	326
臨床心理基礎実習 I A	299
臨床心理基礎実習 I B	300
臨床心理基礎実習 II A	300
臨床心理基礎実習 II B	301
臨床心理学研究法特論	260
臨床心理査定特論 I	261
臨床心理査定特論 II	261
臨床心理実習 I A	297
臨床心理実習 I B	298
臨床心理実習 II A	298
臨床心理実習 II B	299
臨床心理面接法特論 I	296
臨床心理面接法特論 II	297
臨床認知発達学研究指導 A・B	323
臨床認知発達学ゼミ A	325
臨床認知発達学ゼミ B	325

れ

歴史学の理論と方法	255
歴史考古学特論	280
歴史人類学特論	281

ろ

老化機構・加齢制御学特論	285
老年社会福祉学研究指導 A・B	91
老年社会福祉学ゼミ (1) A	194
老年社会福祉学ゼミ (1) B	194
老年社会福祉学ゼミ (2) A	195
老年社会福祉学ゼミ (2) B	195
老年社会福祉学特論	295

わ

ワークショップデザイン特論	269

早稲田大学はハラスメント防止に真摯に取り組んでいます。

本学では、「早稲田大学におけるハラスメント防止に関するガイドライン」を制定し、相談を受け付け、その解決に取り組むだけでなく、パンフレットやWebサイト等での広報や、講演会等の催し物を通して、啓発・防止活動を実地している。

Q ハラスメントとは何か？

A ハラスメントとは、性別、社会的身分、人種、国籍、信条、年齢、職業、身体的特徴等の属性あるいは広く人格に関わる事項等に関する言動によって、相手方に不利益や不快感を与え、あるいはその尊厳を損なうことをいう。大学におけるハラスメントとしては、性的な言動によるセクシュアル・ハラスメント、勉学・教育・研究に関連する言動によるアカデミック・ハラスメント、優越的地位や職務上の地位に基づく言動によるパワー・ハラスメントなどがある。

Q ハラスメントは何で問題なのか？

A ハラスメントをされた側にとっては、安心して学習・研究・労働する環境が阻害され、悪影響が生じ、学習・研究・労働する権利の侵害、つまり、人権侵害になるからである。ごく気軽な気持ちでの行為や言動が相手にとっては耐えられない苦痛となっていることもあり、結果として、日常生活に支障をきたすケースも少なくない。

Q 学生が加害者になることもあるのか？

A はい。例えばサークルのコンパで性的な言動を繰り返したり、飲酒を強要したり、交際をしつこく迫った結果、相手が不快感を持った場合には、セクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメントになりえる。

Q 「ハラスメントかな」と思ったら？

A あなた自身が被害に遭った時、友人からの相談を受けた時、また取り組みについて質問や意見がある時には、専門のスタッフが対応するので、気軽に相談窓口につながっていただきたい。相談の流れなど、詳しい内容については、下記Webサイトも参照すること。

■相談窓口 ハラスメント防止室 相談室

初回相談は、電話・メール・FAX・手紙どの方法でもOK。来室前なら匿名での相談も可能、来室希望の場合は、事前に電話またはメールでの予約が必要。あなたのプライバシーと意向を最大限に尊重する。

【TEL】 03-5286-9824 *留守番電話機能つき

【FAX】 03-5286-9825

【E-mail】 stop@list.waseda.jp

【URL】 <http://www.waseda.jp/stop/>

【開室時間】 月～金 9:30～17:00 *面談中などは留守電になることがある。

【事務所所在地】 〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104 24-8号館 3階（相談室）

早稲田大学大学院人間科学研究科

〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15

電話 04-2947-6848 (ダイヤルイン)

FAX 04-2947-6801

<http://www.waseda.jp/human/graduate/>

jinken@list.waseda.jp



早稲田大学大学院人間科学研究科

GRADUATE SCHOOL OF HUMAN SCIENCES, WASEDA UNIVERSITY